茨城県笠間市

寺上遺跡

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2012

笠間市教育委員会

有限会社　毛野考古学研究所

茨城県笠間市

寺上遺跡

県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2012

笠間市教育委員会

有限会社　毛野考古学研究所

調査区空撮（南東から。手前中央から右奥がＣ区。中央奥がＡ区）

１号祭祀土坑出土遺物集合写真

序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は県営畑地帯総合整備事業に伴う寺上遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、奈良・平安時代の丘陵斜面に立地した集落跡から、住居跡や掘立柱建物跡が多数発見されました。また、低地に面する一角からは２基の祭祀土坑が見つかり、祭祀に使われた土師器の坏やミニチュア甕・壺がそのままの状態で出土しました。これらの発掘調査成果によって、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成24年3月

笠間市教育委員会

教育長　飯　島　　勇

例　言

1．本書は、茨城県笠間市小原地区に所在する寺上遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査による記録保存を目的として実施された。
3．調査及び報告書作成は、笠間市教育委員会の指導・委託を受けて、(有) 毛野考古学研究所が実施した。
4．遺跡の所在地、調査面積、調査期間は以下の通りである。
　所 在 地　笠間市小原 2331 番地外
　調査面積　13,440㎡（A 区 2,540㎡　B 区 1,462㎡　C 区 9,438㎡）
　調査期間　平成 22 年 11 月 24 日～平成 23 年 3 月 25 日
　整理期間　平成 23 年 9 月 7 日～平成 24 年 3 月 15 日
5．調査・整理担当者、執筆分担は以下の通りである。
　南田法正（A区調査）、小又法子（A・B区調査）、宮田和男（C区調査）、松田政基（C区調査、B・C区整理・執筆）、土生朗治（B・C区調査、A区整理・執筆）、賀来孝代（A区整理）、小出琢磨（測量、図面作成）、柴田洋孝（遺物写真撮影・編集）、常深尚・南田法正（編集）、以上（有）毛野考古学研究所
6．調査で得られた資料は笠間市教育委員会で保管している。
7．調査及び報告書作成に際し、下記の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。
　能島清光　川崎純徳　瓦吹堅　枝川永男　川井正一　斎藤弘道　西本豊弘　樫村宣行　原信田正夫　齋藤貴史　佐々木義則　大関武　小池渉　茨城県教育委員会　㈶茨城県教育財団　茨城県県央農林事務所　小原地区土地改良組合　芳野工業株式会社　JT 空撮
8．本書の作成にあたっては、鬼山由子　加藤陽子　樺沢美枝　木村宏次　菅谷万須美　仙波菜津美　高橋真弓　竹中美保子　根本正子の協力を得た。
9．発掘調査参加者は以下の通りである。
　青木誠　飯田博美　飯田昭　稲見幸子　岩田時彦　枝川幸光　海老沢武　大山年明　小坂部克己　小堤静江　鬼沢勲　小山義則　加藤輝雄　川又恵美子　川又誠二　北村昶　小久保勝司　小林法子　今野春雄　今野美登里　齋藤幸一　佐久間亜貴　佐久間弘美　佐久間憲子　佐藤武志　佐藤としえ　佐藤利男　塩畑勝利　篠原一郎　菅谷和子　杉山直正　鈴木晃佳　鈴木とし江　鈴木浩　仙波由美子　高岡真士　高田幸江　高柳悦子　寺門嘉津子　豊島英則　仲田仙　中村伊重　中野美香　根矢稔　野村正子　長谷川とめ子　幅増男　吹野昇　藤田理子　正木信行　町田幸男　武藤瑞良　山口致辰　山崎正光　八巻省三　横田忠利　吉田豊

凡　例

1．本書で使用した地図は、国土地理院発行２万５千分の１地形図、笠間市発行２千５百分の１都市計画図である。
2．出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。
　ＳＩ…竪穴住居跡　　ＳＢ…掘立柱建物跡　　ＳＫ…土坑　　ＳＤ…溝　　ＳＸ…祭祀土坑
　Ｐ…ピット　　Ｋ…カクラン
3．実測図で使用した縮尺は以下の通りである。
　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑…1/60　　祭祀土坑…1/20　　溝…1/40、1/80、1/160
　土器…1/3　　土製品…1/3・1/5　　石製品・礫…1/3　　金属製品…1/2　　鉄滓…1/3
4．土層と遺物の色調は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著　(財)日本色彩研究所）を使用した。
5．遺構一覧表・遺物観察表の表記は（　）内数値が計測推定値を、[　]内数値は残存値を表す。
6．実測図中のスクリーントーンは以下の通りである。
　遺構　焼土　　粘土・柱痕
　遺物　粘土付着範囲　　吹きこぼれ・断面還元範囲

目　　次

巻頭写真図版
序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序 …… 5
　第１節　調査の方法 …… 5
　第２節　基本層序 …… 5

第Ⅳ章　Ａ区の遺構と遺物 …… 13
　第１節　竪穴住居跡 …… 13
　第２節　掘立柱建物跡 …… 73
　第３節　溝 …… 87
　第４節　土坑 …… 90
　第５節　表採・遺構外出土遺物 …… 91

第Ⅴ章　Ｂ区の遺構と遺物 …… 92
　第１節　竪穴住居跡 …… 92
　第２節　遺構外出土遺物 …… 123

第Ⅵ章　Ｃ区の遺構と遺物 …… 125
　第１節　竪穴住居跡 …… 125
　第２節　掘立柱建物跡 …… 216
　第３節　溝 …… 226
　第４節　土坑 …… 227
　第５節　祭祀土坑 …… 230
　第６節　埋没谷出土遺物・表採遺物 …… 235

第Ⅶ章　縄文時代の遺物 …… 242
　第１節　縄文土器 …… 242

第Ⅷ章　総括 …… 244
　第１節　Ａ区 …… 244
　第２節　Ｂ区 …… 245
　第３節　Ｃ区 …… 246

写真図版
抄　　録
奥　　付

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 …… 2
第２図　調査地区の位置図 …… 3
第３図　基本土層図 …… 6
第４図　遺跡全体図 …… 7･8
第５図　Ａ区遺構全体図 …… 9
第６図　Ｂ区遺構全体図 …… 10
第７図　Ｃ１区･Ｃ２区遺構全体図 …… 11
第８図　Ｃ３区遺構全体図 …… 12
第９図　１号住居跡 …… 13
第10図　１号住居跡出土遺物 …… 14
第11図　２号住居跡 …… 15
第12図　２号住居跡出土遺物 …… 16
第13図　３号住居跡 …… 17
第14図　３号住居跡出土遺物 …… 18
第15図　４号住居跡 …… 19
第16図　４号住居跡出土遺物 …… 20
第17図　５号住居跡 …… 22
第18図　５号住居跡出土遺物 …… 23
第19図　６号住居跡･出土遺物 …… 24
第20図　７号住居跡 …… 26
第21図　７号住居跡出土遺物 …… 27
第22図　８号住居跡 …… 28
第23図　８号住居跡出土遺物 …… 29
第24図　９号住居跡 …… 31
第25図　９号住居跡出土遺物 …… 32
第26図　10号住居跡･出土遺物 …… 33
第27図　11号住居跡 …… 34
第28図　11号住居跡出土遺物 …… 35
第29図　12号住居跡 …… 37
第30図　12号住居跡出土遺物 …… 38
第31図　13号住居跡 …… 39
第32図　13号住居跡出土遺物 …… 40
第33図　14号住居跡出土遺物 …… 41
第34図　14号住居跡 …… 42
第35図　15号住居跡 …… 43
第36図　15号住居跡出土遺物 …… 44
第37図　16号住居跡 …… 45
第38図　16号住居跡出土遺物 …… 46
第39図　17号住居跡 …… 47
第40図　17号住居跡出土遺物 …… 48
第41図　18号住居跡･出土遺物 …… 50
第42図　19号住居跡 …… 51
第43図　19号住居跡出土遺物 …… 52
第44図　20号住居跡 …… 53
第45図　20号住居跡出土遺物 …… 54
第46図　21号住居跡① …… 56
第47図　21号住居跡②･出土遺物① …… 57
第48図　21号住居跡出土遺物② …… 58
第49図　22号住居跡 …… 59
第50図　22号住居跡出土遺物 …… 60
第51図　23号住居跡･出土遺物 …… 62
第52図　24･25号住居跡 …… 63
第53図　24号住居跡出土遺物 …… 64
第54図　25号住居跡出土遺物 …… 65
第55図　26号住居跡 …… 66
第56図　26号住居跡出土遺物 …… 67
第57図　27号住居跡･出土遺物 …… 68
第58図　28号住居跡 …… 69
第59図　28号住居跡出土遺物 …… 70
第60図　29号住居跡･出土遺物 …… 71
第61図　30号住居跡･出土遺物 …… 72
第62図　１号掘立柱建物跡 …… 73
第63図　２号掘立柱建物跡 …… 74
第64図　３号掘立柱建物跡 …… 75
第65図　４号掘立柱建物跡 …… 76
第66図　５号掘立柱建物跡 …… 77
第67図　６号掘立柱建物跡 …… 78
第68図　７号掘立柱建物跡･出土遺物 …… 79
第69図　８号掘立柱建物跡出土遺物 …… 80
第70図　８号掘立柱建物跡 …… 81
第71図　９号掘立柱建物跡 …… 82
第72図　10号掘立柱建物跡 …… 83
第73図　13号掘立柱建物跡 …… 83
第74図　14号掘立柱建物跡 …… 84
第75図　16号掘立柱建物跡･出土遺物 …… 85
第76図　17号掘立柱建物跡 …… 86
第77図　５号溝出土遺物 …… 87
第78図　２･４号溝 …… 88
第79図　５号溝 …… 89
第80図　４･５号土坑 …… 90
第81図　遺構外出土遺物 …… 91
第82図　１号住居跡 …… 92
第83図　１号住居跡出土遺物 …… 93
第84図　２号住居跡 …… 94
第85図　２号住居跡出土遺物 …… 95
第86図　３号住居跡 …… 96
第87図　３号住居跡出土遺物 …… 97
第88図　４号住居跡出土遺物 …… 98
第89図　４号住居跡 …… 99
第90図　５号住居跡･出土遺物 …… 100
第91図　６号住居跡･出土遺物 …… 101
第92図　７号住居跡出土遺物 …… 102
第93図　７号住居跡① …… 103
第94図　７号住居跡② …… 104
第95図　８号住居跡① …… 106
第96図　８号住居跡② …… 107
第97図　８Ａ号住居跡出土遺物 …… 108
第98図　８Ｂ号住居跡出土遺物 …… 109
第99図　９号住居跡出土遺物 …… 110
第100図　９号住居跡 …… 111
第101図　10号住居跡 …… 113
第102図　10号住居跡出土遺物 …… 114
第103図　11号住居跡･出土遺物 …… 116
第104図　12号住居跡出土遺物 …… 117
第105図　12号住居跡 …… 118
第106図　13号住居跡出土遺物 …… 120
第107図　13号住居跡 …… 121
第108図　遺構外出土遺物 …… 123

第109図　1号住居跡 …… 125
第110図　1号住居跡出土遺物① …… 128
第111図　1号住居跡出土遺物② …… 128
第112図　2号住居跡 …… 129
第113図　2号住居跡出土遺物 …… 130
第114図　3号住居跡出土遺物 …… 131
第115図　3号住居跡 …… 132
第116図　4号住居跡 …… 133
第117図　4号住居跡出土遺物 …… 134
第118図　5号住居跡 …… 136
第119図　5号住居跡出土遺物 …… 137
第120図　6・7号住居跡 …… 138
第121図　6号住居跡出土遺物 …… 139
第122図　8・9号住居跡 …… 140
第123図　8号住居跡出土遺物 …… 141
第124図　9号住居跡出土遺物 …… 142
第125図　10・11号住居跡 …… 145
第126図　10号住居跡出土遺物 …… 146
第127図　11号住居跡出土遺物 …… 146
第128図　12号住居跡・出土遺物 …… 147
第129図　13号住居跡 …… 149
第130図　13号住居跡出土遺物① …… 150
第131図　13号住居跡出土遺物② …… 151
第132図　14号住居跡 …… 152
第133図　14号住居跡出土遺物 …… 153
第134図　15号住居跡 …… 155
第135図　15号住居跡出土遺物① …… 156
第136図　15号住居跡出土遺物② …… 157
第137図　16・17号住居跡・17号住居跡出土遺物 …… 159
第138図　18号住居跡 …… 160
第139図　18号住居跡出土遺物 …… 161
第140図　19号住居跡 …… 163
第141図　19号住居跡出土遺物 …… 164
第142図　20号住居跡 …… 165
第143図　20号住居跡出土遺物 …… 166
第144図　21号住居跡 …… 167
第145図　21号住居跡出土遺物 …… 168
第146図　22号住居跡出土遺物 …… 169
第147図　22号住居跡 …… 170
第148図　23号住居跡・出土遺物 …… 171
第149図　24号住居跡・出土遺物 …… 172
第150図　26号住居跡 …… 174
第151図　26号住居跡出土遺物① …… 175
第152図　26号住居跡出土遺物② …… 176
第153図　27号住居跡 …… 177
第154図　27号住居跡出土遺物 …… 178
第155図　28・29号住居跡・29号住居跡出土遺物 …… 179
第156図　28号住居跡出土遺物 …… 180
第157図　30号住居跡 …… 181
第158図　30号住居跡出土遺物 …… 182
第159図　31号住居跡① …… 183
第160図　31号住居跡② …… 184
第161図　31号住居跡出土遺物 …… 185
第162図　32号住居跡 …… 187
第163図　32号住居跡出土遺物 …… 188
第164図　33号住居跡① …… 190
第165図　33号住居跡② …… 191
第166図　33号住居跡出土遺物 …… 191
第167図　34号住居跡 …… 193
第168図　34号住居跡出土遺物 …… 194
第169図　35号住居跡 …… 195
第170図　35号住居跡出土遺物 …… 196
第171図　36号住居跡 …… 197
第172図　36号住居跡出土遺物 …… 198
第173図　37号住居跡出土遺物 …… 199
第174図　37号住居跡 …… 200
第175図　38号住居跡 …… 202
第176図　38号住居跡出土遺物 …… 203
第177図　39号住居跡 …… 204
第178図　39号住居跡出土遺物 …… 205
第179図　40号住居跡 …… 207
第180図　40号住居跡出土遺物 …… 208
第181図　41号住居跡 …… 210
第182図　41号住居跡出土遺物 …… 211
第183図　42号住居跡 …… 212
第184図　42号住居跡出土遺物 …… 213
第185図　43号住居跡・出土遺物 …… 214
第186図　44号住居跡・出土遺物 …… 215
第187図　1号掘立柱建物跡出土遺物 …… 216
第188図　1号掘立柱建物跡 …… 217
第189図　2号掘立柱建物跡出土遺物 …… 218
第190図　2号掘立柱建物跡 …… 219
第191図　3号掘立柱建物跡 …… 221
第192図　3号掘立柱建物跡出土遺物 …… 222
第193図　4号掘立柱建物跡 …… 223
第194図　4号掘立柱建物跡出土遺物 …… 224
第195図　5号掘立柱建物跡・出土遺物 …… 225
第196図　1号溝・出土遺物 …… 226
第197図　土坑 …… 228
第198図　土坑出土遺物 …… 229
第199図　1・2号祭祀土坑 …… 231
第200図　1号祭祀土坑出土遺物 …… 232
第201図　2号祭祀土坑出土遺物 …… 233
第202図　埋没谷出土遺物① …… 236
第203図　埋没谷出土遺物② …… 237
第204図　表採遺物① …… 239
第205図　表採遺物② …… 240
第206図　縄文土器 …… 243
第207図　A区・C区東西方向地形横断図 …… 246
第208図　寺院関連遺物 …… 249

表　目　次

表１　１号住居跡出土遺物観察表 …… 14
表２　２号住居跡出土遺物観察表 …… 16
表３　３号住居跡出土遺物観察表 …… 17
表４　４号住居跡出土遺物観察表 …… 20
表５　５号住居跡出土遺物観察表 …… 21
表６　６号住居跡出土遺物観察表 …… 25
表７　７号住居跡出土遺物観察表 …… 25
表８　８号住居跡出土遺物観察表 …… 30
表９　９号住居跡出土遺物観察表 …… 32
表10　10号住居跡出土遺物観察表 …… 34
表11　11号住居跡出土遺物観察表 …… 35
表12　12号住居跡出土遺物観察表 …… 36
表13　13号住居跡出土遺物観察表 …… 39
表14　14号住居跡出土遺物観察表 …… 42
表15　15号住居跡出土遺物観察表 …… 44
表16　16号住居跡出土遺物観察表 …… 46
表17　17号住居跡出土遺物観察表 …… 49
表18　18号住居跡出土遺物観察表 …… 49
表19　19号住居跡出土遺物観察表 …… 52
表20　20号住居跡出土遺物観察表 …… 53
表21　21号住居跡出土遺物観察表 …… 55
表22　22号住居跡出土遺物観察表 …… 61
表23　23号住居跡出土遺物観察表 …… 61
表24　24号住居跡出土遺物観察表 …… 64
表25　25号住居跡出土遺物観察表 …… 64
表26　26号住居跡出土遺物観察表 …… 67
表27　27号住居跡出土遺物観察表 …… 68
表28　28号住居跡出土遺物観察表 …… 70
表29　29号住居跡出土遺物観察表 …… 72
表30　30号住居跡出土遺物観察表 …… 72
表31　７号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 80
表32　８号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 81
表33　16号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 86
表34　５号溝出土遺物観察表 …… 90
表35　遺構外出土遺物観察表 …… 91
表36　１号住居跡出土遺物観察表 …… 93
表37　２号住居跡出土遺物観察表 …… 95
表38　３号住居跡出土遺物観察表 …… 95
表39　４号住居跡出土遺物観察表 …… 98
表40　５号住居跡出土遺物観察表 …… 100
表41　６号住居跡出土遺物観察表 …… 101
表42　７号住居跡出土遺物観察表 …… 104
表43　８Ａ号住居跡出土遺物観察表 …… 107
表44　８Ｂ号住居跡出土遺物観察表 …… 109
表45　９号住居跡出土遺物観察表 …… 112
表46　10号住居跡出土遺物観察表 …… 115
表47　11号住居跡出土遺物観察表 …… 116
表48　12号住居跡出土遺物観察表 …… 119
表49　13号住居跡出土遺物観察表 …… 122
表50　遺構外出土遺物観察表 …… 124
表51　１号住居跡出土遺物観察表 …… 126
表52　２号住居跡出土遺物観察表 …… 128
表53　３号住居跡出土遺物観察表 …… 131
表54　４号住居跡出土遺物観察表 …… 135
表55　５号住居跡出土遺物観察表 …… 136
表56　６号住居跡出土遺物観察表 …… 139
表57　８号住居跡出土遺物観察表 …… 141
表58　９号住居跡出土遺物観察表 …… 143
表59　10号住居跡出土遺物観察表 …… 144
表60　11号住居跡出土遺物観察表 …… 144
表61　12号住居跡出土遺物観察表 …… 146
表62　13号住居跡出土遺物観察表 …… 148
表63　14号住居跡出土遺物観察表 …… 154
表64　15号住居跡出土遺物観察表 …… 154
表65　17号住居跡出土遺物観察表 …… 158
表66　18号住居跡出土遺物観察表 …… 161
表67　19号住居跡出土遺物観察表 …… 162
表68　20号住居跡出土遺物観察表 …… 166
表69　21号住居跡出土遺物観察表 …… 168
表70　22号住居跡出土遺物観察表 …… 169
表71　23号住居跡出土遺物観察表 …… 170
表72　24号住居跡出土遺物観察表 …… 171
表73　26号住居跡出土遺物観察表 …… 173
表74　27号住居跡出土遺物観察表 …… 176
表75　28号住居跡出土遺物観察表 …… 180
表76　29号住居跡出土遺物観察表 …… 181
表77　30号住居跡出土遺物観察表 …… 182
表78　31号住居跡出土遺物観察表 …… 184
表79　32号住居跡出土遺物観察表 …… 188
表80　33号住居跡出土遺物観察表 …… 192
表81　34号住居跡出土遺物観察表 …… 192
表82　35号住居跡出土遺物観察表 …… 196
表83　36号住居跡出土遺物観察表 …… 197
表84　37号住居跡出土遺物観察表 …… 201
表85　38号住居跡出土遺物観察表 …… 201
表86　39号住居跡出土遺物観察表 …… 206
表87　40号住居跡出土遺物観察表 …… 209
表88　41号住居跡出土遺物観察表 …… 210
表89　42号住居跡出土遺物観察表 …… 213
表90　43号住居跡出土遺物観察表 …… 214
表91　44号住居跡出土遺物観察表 …… 215
表92　１号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 216
表93　２号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 218
表94　３号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 220
表95　４号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 224
表96　５号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 225
表97　１号溝出土遺物観察表 …… 227
表98　Ｃ区土坑一覧表 …… 227
表99　土坑出土遺物観察表 …… 228
表100　１号祭祀土坑出土遺物観察表 …… 233
表101　２号祭祀土坑出土遺物観察表 …… 234
表102　埋没谷出土遺物観察表 …… 235
表103　表採遺物観察表 …… 241
表104　縄文土器・弥生土器一覧表 …… 242

写真図版目次

PL.1　A区の遺構
1号住居跡遺物出土状況(西から)
2号住居跡完掘状況(南から)
3号住居跡完掘状況(南から)
4号住居跡遺物出土状況(南から)
5号住居跡遺物出土状況(南から)
6号住居跡完掘状況(東から)
7号住居跡完掘状況(南から)
8号住居跡遺物出土状況(南から)
PL.2　A区の遺構
8号住居跡カマド遺物出土状況(南から)
8号住居跡完掘状況(南から)
8号住居跡カマド完掘状況(南から)
9号住居跡遺物出土状況(南から)
10号住居跡完掘状況(南から)
12号住居跡遺物出土状況(南から)
12号住居跡カマド完掘状況(南から)
13号住居跡完掘状況(南から)
PL.3　A区の遺構
13号住居跡カマド完掘状況(南から)
14号住居跡遺物出土状況(東から)
14号住居跡カマド完掘状況(東から)
15·16号住居跡遺物出土状況(南から)
18号住居跡遺物出土状況(南から)
19号住居跡遺物出土状況(南から)
20号住居跡カマド支脚出土状況(南から)
21号住居跡完掘状況(南東から)
PL.4　A区の遺構
21号住居跡カマド完掘状況(南東から)
21号住居跡遺物出土状況(南東から)
22号住居跡完掘状況(南から)
24号住居跡完掘状況(南から)
25号住居跡完掘状況(南東から)
26号住居跡完掘状況(南東から)
27号住居跡完掘状況(南西から)
28号住居跡完掘状況(南東から)
PL.5　A区の遺構
1号掘立柱建物跡(北から)
2号掘立柱建物跡(南から)
3号掘立柱建物跡(南から)
6号掘立柱建物跡(東から)
7号掘立柱建物跡(南西から)
8号掘立柱建物跡(南から)
10号掘立柱建物跡(南から)
14号掘立柱建物跡(南から)
PL.6　A区の遺構
16号掘立柱建物跡(南から)
17号掘立柱建物跡(南から)
1・2・8·10·16·17号掘立柱建物跡
3～7・9·13·14·16号掘立柱建物跡
PL.7　B区の遺構
1号住居跡(南から)
3号住居跡完掘状況(南から)
4号住居跡完掘状況(南東から)
5号住居跡完掘状況(南から)
6号住居跡完掘状況(南東から)
7・9号住居跡完掘状況(南東から)
7号住居跡カマド(南東から)
8号住居跡完掘状況(南西から)
PL.8　B区の遺構
9号住居跡完掘状況(東から)
9号住居跡貯蔵穴遺物出土状況(北西から)
9号住居跡貯蔵穴遺物出土状況(西から)
10号住居跡掘り方完掘状況(南東から)
10号住居跡ピット03確認状況(南から)
10号住居跡ピット04セクション(西から)
12号住居跡完掘状況(南東から)
13号住居跡完掘状況(南東から)
PL.9　C区の遺構
3号住居跡完掘状況(南東から)
4号住居跡完掘状況(南から)
4号住居跡遺物出土状況(南東から)
5号住居跡遺物出土状況(南から)
8・9号住居跡完掘状況(南東から)
9号住居跡完掘状況(南東から)
10·11号住居跡完掘状況(南東から)
13·14号住居跡遺物出土状況(南東から)
PL.10　C区の遺構
14号住居跡遺物出土状況(南東から)
15号住居跡遺物出土状況(南から)
18号住居跡完掘状況(南から)
18号住居跡カマド遺物出土状況(南から)
19号住居跡、32·33号土坑完掘状況(南から)
26号住居跡完掘状況(南東から)
27号住居跡完掘状況(南から)
31号住居跡完掘状況(南から)
PL.11　C区の遺構
33号住居跡完掘状況(南から)
34号住居跡完掘状況(南から)
37号住居跡完掘状況(南から)
38号住居跡完掘状況(南東から)
39号住居跡完掘状況(南から)
39号住居跡カマド遺物出土状況(南から)
40号住居跡完掘状況(南から)
40号住居跡カマド遺物出土状況(西から)
PL.12　C区の遺構
40号住居跡墨書土器出土状況(東から)
40号住居跡墨書土器「山人」
41号住居跡床面確認状況(南東から)
41号住居跡完掘状況(南東から)
43号住居跡完掘状況(西から)
1・2号掘立柱建物跡(北から)
5号掘立柱建物跡(南から)
4号掘立柱建物跡(北東から)
PL.13　C区の遺構
C区掘立柱建物群
1号祭祀土坑完掘状況(東から)
1号祭祀土坑上層遺物出土状況(東から)
1号祭祀土坑上～中層遺物出土状況(西から)
1号祭祀土坑中～下層遺物出土状況(南から)
PL.14　C区の遺構
1号祭祀土坑下層遺物出土状況(南から)
1号祭祀土坑下層遺物出土状況(東から)
2号祭祀土坑完掘状況(東から)
2号祭祀土坑遺物出土状況(東から)
2号祭祀土坑下層獣歯出土状況(南から)
2号祭祀土坑獣歯出土状況(北から)
1号溝完掘状況(北西から)
11～13·17·22号土坑完掘状況(東から)
PL.15　A区の遺物
3・4・5号住居跡出土遺物
PL.16　A区の遺物
7・8・9号住居跡出土遺物
PL.17　A区の遺物
9·12·13·16·17号住居跡出土遺物
PL.18　A区の遺物
17·18·19·20号住居跡出土遺物
PL.19　A区の遺物
20·21号住居跡出土遺物
PL.20　A区の遺物
21·22·25·28·29号住居跡出土遺物
PL.21　B区の遺物
1・3・4・7号住居跡出土遺物
PL.22　B区の遺物
7・8A・8B・9号住居跡出土遺物
PL.23　B区の遺物
9·10·12号住居跡出土遺物
PL.24　B区の遺物
12·13号住居跡出土遺物、
遺構外出土遺物
PL.25　C区の遺物
1・4号住居跡出土遺物
PL.26　C区の遺物
4・5・8号住居跡出土遺物
PL.27　C区の遺物
9·10·12·13号住居跡出土遺物
PL.28　C区の遺物
13号住居跡出土遺物
PL.29　C区の遺物
14·15·19·20·21号住居跡出土遺物
PL.30　C区の遺物
22·24·26号住居跡出土遺物
PL.31　C区の遺物
26·28·31号住居跡出土遺物
PL.32　C区の遺物
36·38·39号住居跡出土遺物
PL.33　C区の遺物
39·40号住居跡出土遺物
PL.34　C区の遺物
40·41·42·43号住居跡出土遺物、
1号祭祀土坑出土遺物
PL.35　C区の遺物
1号祭祀土坑出土遺物
PL.36　C区の遺物
1号祭祀土坑出土遺物
PL.37　C区の遺物
1号祭祀土坑出土遺物
PL.38　C区の遺物
1・2号祭祀土坑出土遺物
PL.39　C区の遺物
埋没谷出土遺物、遺構外出土遺物、
表採遺物
PL.40　A区・C区の遺物
縄文土器
PL.41　C区・表採の遺物
縄文土器
PL.42　表採の遺物
縄文土器

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査の経過

第1節　調査に至る経緯

畑地帯総合整備事業は、農業に伴う道路・灌漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、反収の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

笠間市では基本施策を総合計画で目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。また、農業生産基盤の整備の一環として、平成13年に小原地区土地改良組合が設立され、茨城県の指導の下、効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。この地区には市内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから整備事業計画の中で平成15年に三本松遺跡の発掘調査、平成16・17年に小原遺跡の発掘調査、平成20年に塙谷遺跡・長峰東遺跡・長峰西遺跡の発掘調査、さらに平成21年に行者遺跡の発掘調査が行われ、多大な成果が得られている。

今回の整備事業計画地は寺上遺跡の範囲内であることから、笠間市教育委員会は平成21年度に笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏に試掘調査を依頼した。その結果トレンチから住居跡が確認され、出土遺物などから奈良・平安時代を主体とした集落があることが推定された。

工事主体者である県央農林事務所は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は入札により有限会社毛野考古学研究所と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・県央農林事務所・有限会社毛野考古学研究所は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏を指導委員として平成22年12月1日から平成23年3月25日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査の経過

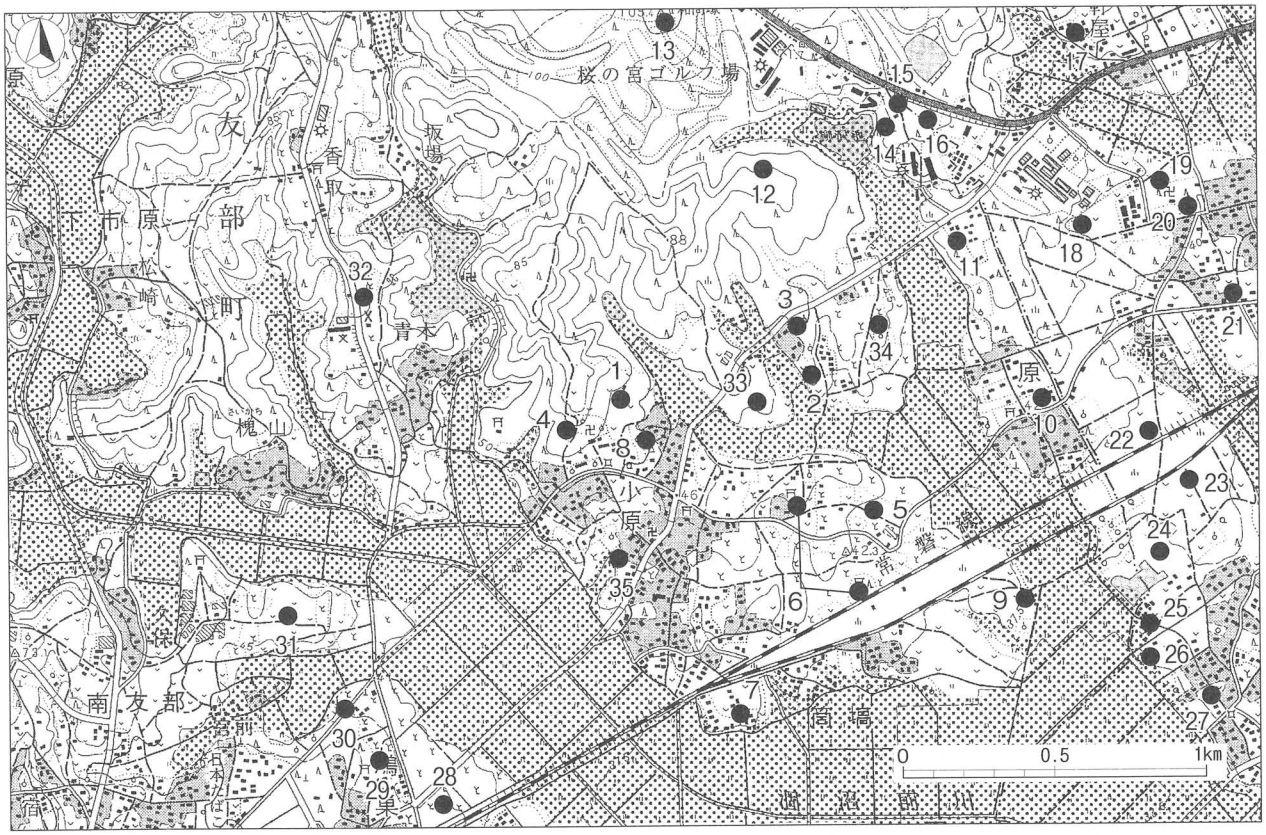
平成22年12月1日、重機による表土除去作業をB・C区から開始する。続く2日からは、作業員による遺構確認作業を開始し、7日からB区の竪穴住居跡の掘り込みを開始する。12月下旬にはA区の表土除去作業が終了し、A区についても調査を開始する。平成23年1月中旬には、C区の表土除去が終了し、B区の遺構調査もほぼ終了する。2月～3月上旬は、A・C区の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑の調査を進め、C区については北側の標高の高い地点と南東部の標高の低い地点とに分かれて調査を行う。3月中～下旬には、図面作業・空中写真撮影を行い、3月25日にはすべての調査を終了する。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

笠間市は茨城県のほぼ中央にあり、東は水戸市、西は桜川市、南は石岡市・小美玉市、北は城里町・栃木県茂木町にそれぞれ接している。市域の北部は八溝山系鶏足山塊から連なる友部丘陵が水戸市の西部にかけて広がる。一方、南西部は筑波山塊に接し、鶏足山塊と並んで県西と県央を東西に隔てている。市域の東部から南部は平坦な東茨城台地が展開しており、茨城町から大洗町まで伸長する。この台地上を涸沼川が下刻し、茨城県の中央を東走して太平洋に注ぐ。加えて、市域西部の飯田川・片庭川・稲田川、市域東部の涸沼前川・枝折川などが涸沼川に合流し、それぞれの流域で沖積低地を形成する。

寺上遺跡は涸沼前川から北西方向に延びる小支谷を遡った位置にある。全体的に台地から丘陵に移行する丘陵緩斜面地に立地するが、谷地に面した平坦地もある。遺跡の標高は、最も低いＣ地区南東端部で約 45 m、丘陵尾根部に当たる最も高いＣ区北端部やＡ区北西部で標高約 70 mである。



1 寺上遺跡	2 長峰東遺跡	3 喜平塚古墳	4 高寺古墳群	5 小原遺跡	6 一本松古墳群	7 塚崎古墳	8 行者遺跡
9 三本松遺跡	10 原坪古墳群	11 原古墳	12 大日山古墳群	13 和尚塚古墳	14 柳沢古墳群	15 三軒屋塚群	16 三軒屋古墳群
17 杉崎遺跡	18 訳山遺跡	19 宮前遺跡	20 三湯舘跡	21 舞台遺跡	22 舞台西遺跡	23 向山遺跡	24 新道池北遺跡
25 新道池南遺跡	26 達中前遺跡	27 中の内遺跡	28 田端内遺跡	29 家前遺跡	30 掃部塚古墳群	31 北平遺跡	32 香取、坂場遺跡
33 長峰西遺跡	34 塙谷遺跡	35 小原城跡					

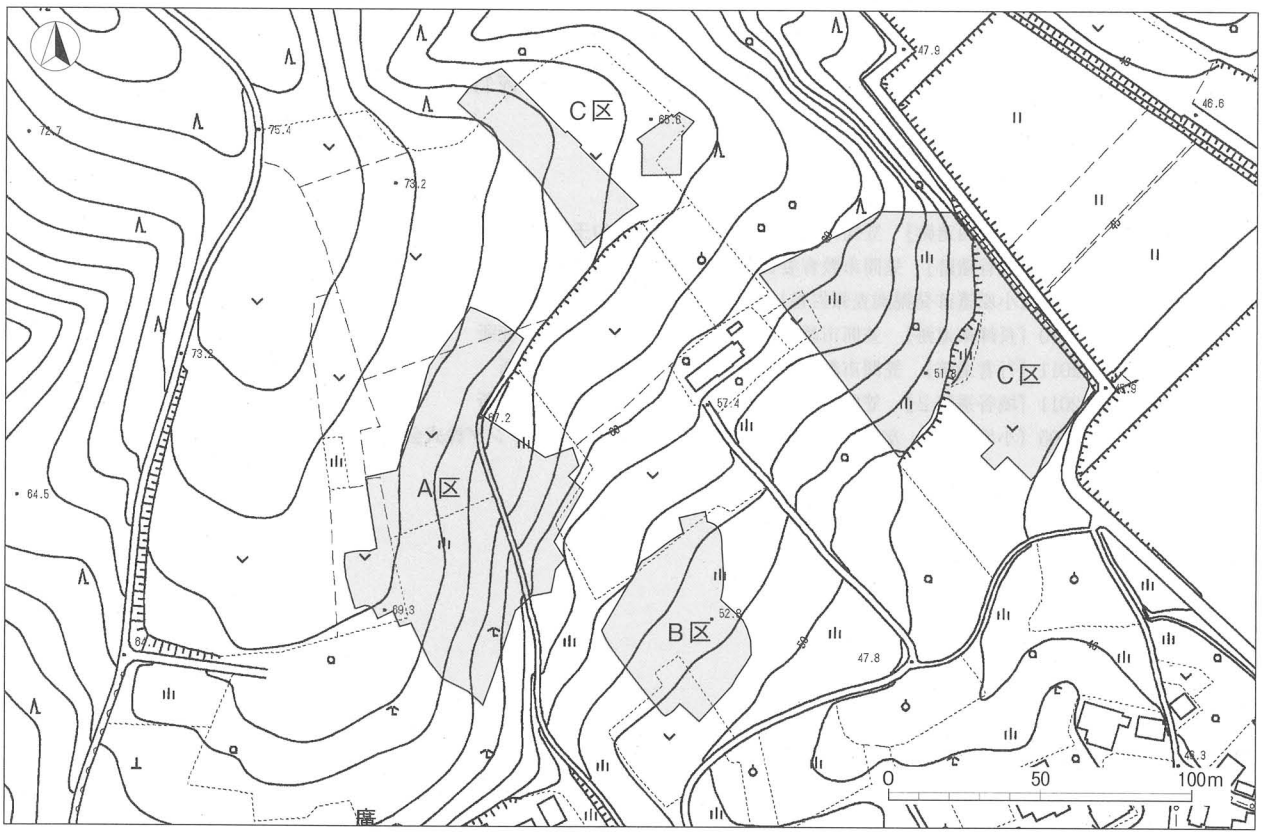
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1：25,000）

第２節　歴史的環境

小原地区は、これまで高寺古墳群や一本松古墳群、中世小原城跡の存在がよく知られていた。近年、小原地区では三本松遺跡（板野ほか 2003）から始まり、小原遺跡（吉田ほか 2005・能島 2007）、長峰東遺跡（土生 2010）、長峰西遺跡（大賀ほか 2010）、行者遺跡（土生・賀来 2010）、寺上遺跡と広範囲に発掘調査が行われている。それらの成果から、小原地区の丘陵や台地上には、旧石器時代から中・近世にわたって繰り広げられてきた人々の生活跡が残っていることが明らかとなってきた。

旧石器時代では、長峰西遺跡から珪質頁岩製のナイフ形石器が、行者遺跡から瑪瑙製の削器が出土している。塙谷遺跡（土生ほか 2011）では西部Ｂ２区から旧石器のユニットが確認されている。

縄文時代では、小原地区内における遺構･遺物の出土はやや少ない。陥し穴が塙谷遺跡Ｃ区、長峰東遺跡、小原遺跡などに散在する。塙谷遺跡からは前期中葉の竪穴住居跡が確認されている。また、遺構に伴わないものの、長峰東遺跡で前期中葉の関山Ⅱ式や黒浜式等、長峰西遺跡で早期前葉の無文土器および前期中葉・中期後半・後期前半といった縄文土器が報告されている。



第２図　調査地区の位置図（1：2,500）

弥生時代では、後期後半期に竪穴住居跡の数が非常に多くなっている。三本松遺跡で15軒、小原遺跡で２軒、塙谷遺跡79軒、長峰東遺跡で９軒、長峰西遺跡で７軒、行者遺跡で１軒である。弥生時代後期後半の住居軒数は県内でも特に多い地域と見られる。

古墳時代では、古墳時代前期・中期・後期の集落が見られる。長峰東遺跡では弥生時代終末から古墳時代前期へ移り変わった頃の竪穴住居跡が見られる。塙谷遺跡では古墳時代前期に住居数が多く、方形周溝墓も造られている。古墳時代後期には三本松遺跡や小原遺跡、長峰西遺跡等に集落の広がりが見られる。これは後期古墳の造成の盛んな時期に対応しているものと思われる。小原地区の古墳群では、高寺古墳群が挙げられる。高寺２号墳は花崗岩の割石積の横穴式石室を持ち、墳丘南東部から武人埴輪や円筒埴輪が、石室内からは、玉類、刀や鏃などの鉄製品が出土している。高寺古墳群に属すると見られる行者遺跡からは、高寺２号墳に先行する時期の２基の古墳が確認され、人物・馬形の形象埴輪と多数の円筒埴輪が出土している。

奈良・平安時代の集落は、三本松遺跡他、地区内で発掘調査が行われた遺跡すべてにおいて確認されており、いずれも８世紀後半頃から急激に竪穴住居跡は数を増し、９世紀～10世紀にかけて集落が継続している様子が窺える。奈良時代になってからの急激な集落の増加は、この地域の東西に隣接する、笠間市大淵窯や水戸市木葉下窯など須恵器生産地帯の発展との関わりも想定される。本遺跡もまたこの時期の集落跡であるが、通常のよく見られる平坦な台地上の立地とは異なり、傾斜地の集落跡である点が特筆される。

中世のこの地区には、戦国期の城跡と伝えられる小原城が本遺跡の南約1.2kmの位置にある。小原城は16世紀の初めころ、里見氏の居城として造られ、戦国末期には佐竹氏との激しい攻防の末滅ぼされている。

参考文献

板野晋鏡ほか　2003『三本松遺跡』　友部町三本松遺跡調査会
大賀健ほか　2010『長峰西遺跡』　笠間市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
高野浩之　2008『塙谷遺跡』　笠間市教育委員会・(株) 地域文化財コンサルタント
能島清光ほか　2007『小原遺跡発掘調査報告書』　笠間市小原遺跡発掘調査会
土生朗治　2010『長峰東遺跡』　笠間市教育委員会・(有) 毛野考古学研究所
土生朗治ほか　2011『行者遺跡』　笠間市教育委員会・(有) 毛野考古学研究所
土生朗治ほか　2011『塙谷遺跡２』　笠間市教育委員会・(有) 毛野考古学研究所
吉田寿ほか　2005『小原遺跡』　友部町小原遺跡調査会・大成エンジニアリング株式会社

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序

第１節　調査の方法

寺上遺跡の発掘調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として行われた。畑地帯総合整備事業にかかる寺上遺跡の範囲は、事前に試掘調査によって範囲が絞られ、大きく３つの地区に分かれており、Ａ・Ｂ・Ｃ区の名称を使用している。

調査範囲は、調査区に隣接する外側から住居跡などの遺構が確認された場合一部拡張して実施した。また、隣接して確認された所でも、期間内における調査可能な遺構数との関係から次年度の調査の範囲とした所がある。

寺上遺跡の平面測量は世界測地系第Ⅸ系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標上で、各調査区の全体を含む範囲の北西角のＸ軸、Ｙ軸の交点を起点として、南方向と東方向に40mおきにグリッドラインを設定し、交差したマス目には、A1、Ａ２のようにグリッド名をふり遺構の位置を示した。

調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

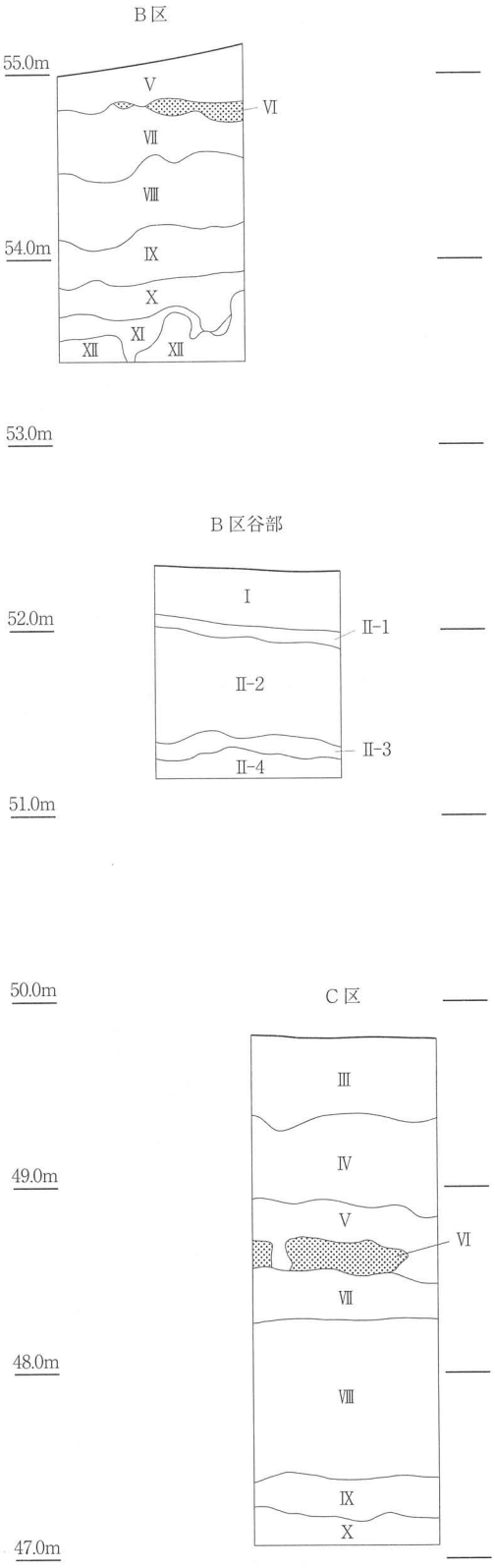
遺構の記録は1/20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、1/10、1/20、1/40縮尺を使用した。遺跡全測図は1/300で作成した。

写真撮影は、白黒35mm判、リバーサル35mm判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に随時行った。

第２節　基本層序

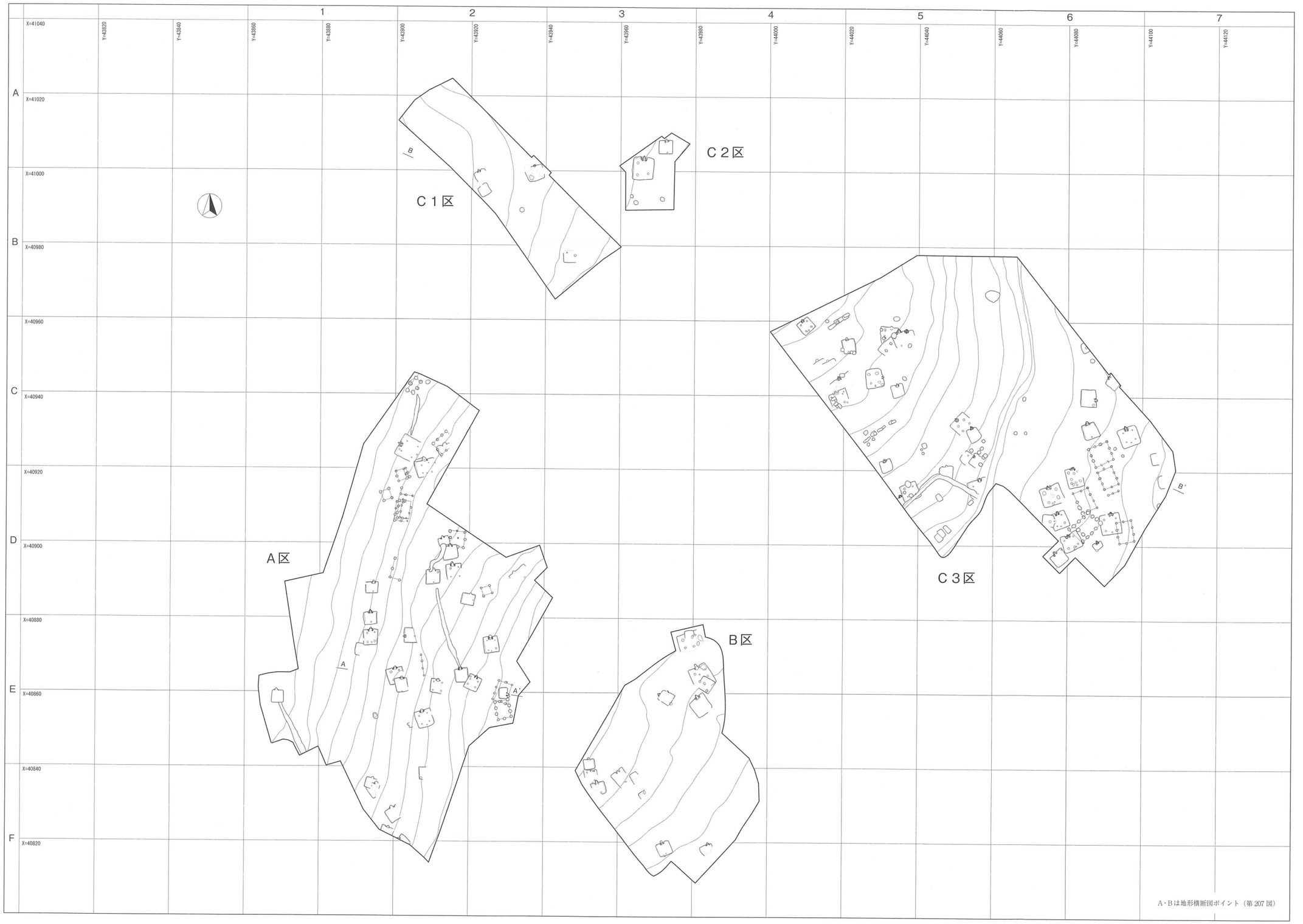
基本層序はＢ区とＣ区及びＢ区谷部において観察した。Ｂ区は調査区北端部の標高55m地点で、Ｃ区は南部の傾斜地から平地に移る崖面の標高50ｍ地点で、Ｂ区は東寄りの谷部で記録している。

層序はⅠからⅫ層まで認められた。Ⅰ層は表土層、Ⅱ層は谷部の黒褐色土層で、Ⅱ－１～４層に分かれている。Ⅱ－１層は谷部において古代の遺構確認面となっている。Ⅲ～Ⅴ層は黄褐色ハードローム層で、Ⅲ層はⅣ・Ⅴ層に比べて色調が明るい。Ⅴ・Ⅵ層には赤城－鹿沼テフラ（Ag－KP：31,000～32,000年前）が混入する。とくにⅥ層で多量に包含され、一部に窪み状の層位が見受けられた。Ⅵ層は赤城－鹿沼テフラの一次堆積層に相当し、複数のフォールユニットが認められる。Ⅶ～Ⅷ層は粘性があり締まりの強い褐色土で、混入物が少ない。ⅨからⅫ層は粘性のある明褐色土で、Ⅺ層は黒色粒の含有量が多く、Ⅻ層は礫を多量に含んでいる。



Ⅰ	暗褐色	締まり弱い。表土層
Ⅱ-1	黒褐色	ローム小ブロック微量、ローム粒多量、しまり強い
Ⅱ-2	黒褐色	ローム中ブロック多量、ローム粒多量、しまり強い
Ⅱ-3	黒褐色	ローム小ブロック微量、ローム粒中量、しまり強い、粘性弱い
Ⅱ-4	黒褐色	ローム大ブロック微量、ローム粒中量、焼土粒微量、しまりやや軟らかい、粘性強い
Ⅲ	黄褐色	Ⅳ層よりもやや明るいハードローム、非常に硬い
Ⅳ	黄褐色	Ⅲ層よりもやや暗いハードローム
Ⅴ	黄褐色	テフラKP少量、ハードローム
Ⅵ	明黄褐色	テフラKP純層、しまり普通
Ⅶ	褐色	軽石粒少量、しまり非常に強い、粘性あり
Ⅷ	褐色	軽石粒少量、しまり非常に強い、粘性あり
Ⅸ	褐色	黒色粒微量、軽石粒やや目立つ、しまり非常に強い、粘性強い
Ⅹ	明褐色	黒色粒少量、ローム小ブロック微量、粘土少量、テフラ小ブロック微量、軽石粒、しまり非常に強い、粘性あり
Ⅺ	明褐色	ローム小ブロック少量、黒色粒多量、軽石粒、しまり非常に強い、粘性強い
Ⅻ	明褐色	粘土多量、黒色粒微量、テフラ小ブロック少量、礫多量、乳白色の軽石粒多量、しまり普通、粘性あり

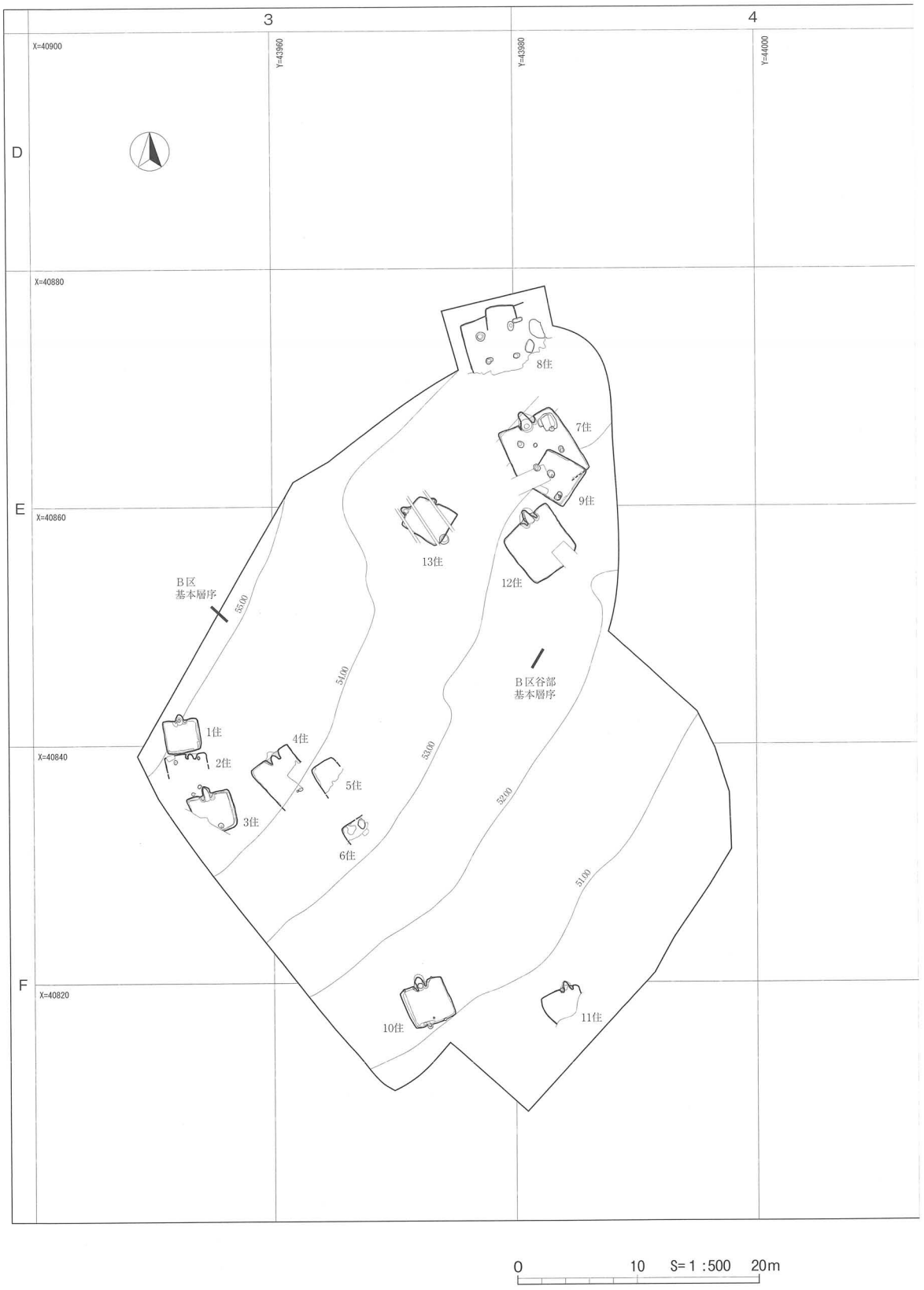
第３図　基本土層図（1：40）


1
2
3
4
5
6
7
A
B
C
D
E
F
X=41040
X=41020
X=41000
X=40980
X=40960
X=40940
X=40920
X=40900
X=40880
X=40860
X=40840
X=40820
Y=43820
Y=43840
Y=43860
Y=43880
Y=43900
Y=43920
Y=43940
Y=43960
Y=43980
Y=44000
Y=44020
Y=44040
Y=44060
Y=44080
Y=44100
Y=44120
C 1区
C 2区
A区
B区
C 3区
A
A'
B
B'
A・Bは地形横断図ポイント（第207図）
0
S=1:1,000
50m

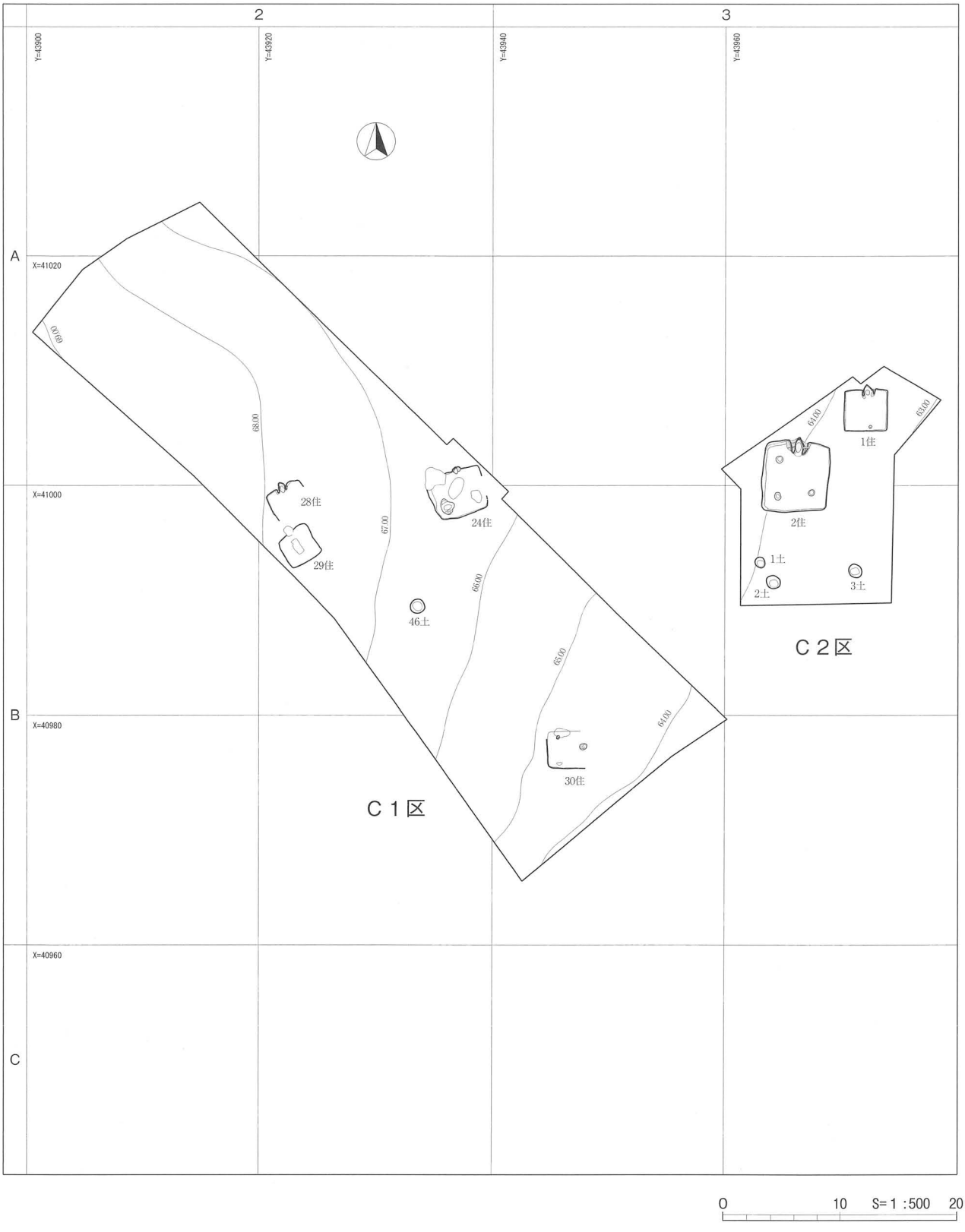
第4図　遺跡全体図

1
2
C
D
E
F
X=40940
X=40920
X=40900
X=40880
X=40840
Y=43880
Y=43920
4土
6掘立
4溝
7掘立
21住
29住
14掘立
22住
9掘立
13掘立
5掘立
3掘立
4掘立
10住
16掘立
2溝
9住
7住
8住
8掘立
17掘立
11住
6住
18住
12住
13住
14住
23住
2溝
5住
15住
10掘立
A
3住
2住
2掘立
1住
A'
19住
16住
4住
1掘立
5土
20住
17住
5溝
24住
30住
25住
26住
27住
28住
A－A'は地形横断図ポイント
0
10
S=1:500
20m

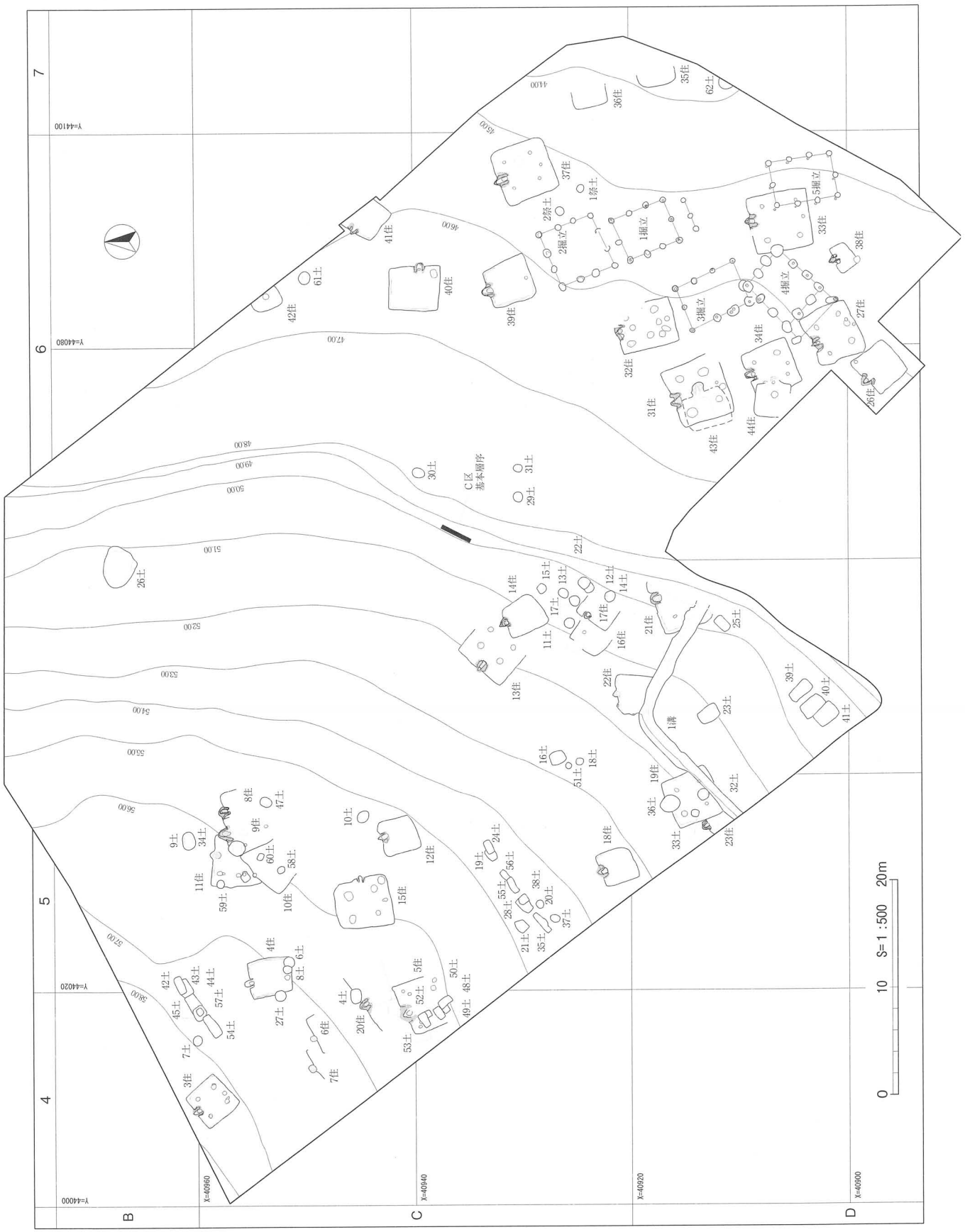
第５図　Ａ区遺構全体図


3
4
X=40900
Y=43960
Y=43980
Y=44000
D
E
F
X=40880
X=40860
X=40840
X=40820
8住
7住
9住
13住
12住
B区
基本層序
5500
5100
B区谷部
基本層序
1住
2住
3住
4住
5住
6住
5300
5200
5100
10住
11住
0
10
S=1:500
20m

第6図　B区遺構全体図



第７図　Ｃ１区・Ｃ２区遺構全体図



第８図　Ｃ３区遺構全体図

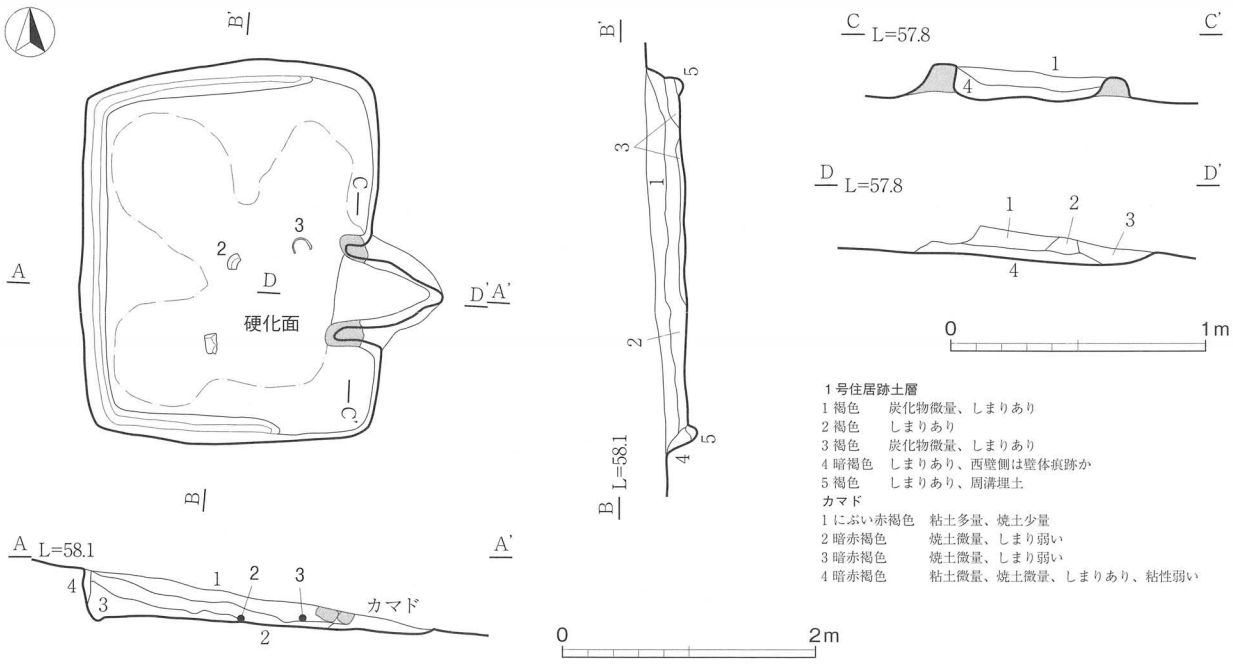
第Ⅳ章　Ａ区の遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

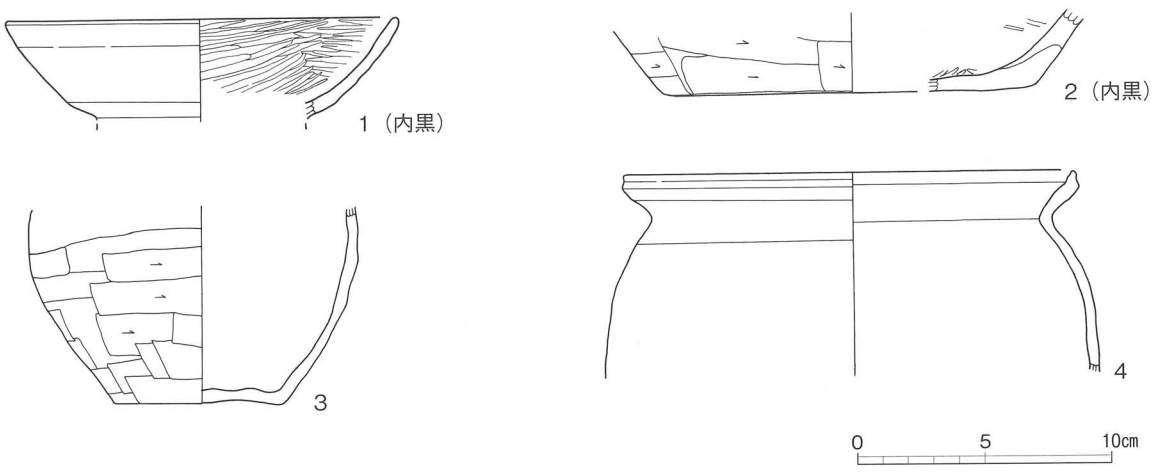
竪穴住居跡は、Ａ区内から30軒確認されている。時期的には、７世紀代後半から10世紀頃にかけての時期のものである。

１号住居跡（第９・10図）

位置　Ａ区の南部Ｅ２グリッド、標高57.6ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向2.80ｍ、東西方向2.22ｍの南北方向に長い長方形。　**重複関係**　２号掘立柱建物跡のＰ２と重複し、２号掘立柱建物跡よりも新しい。　**主軸方向**　Ｎ－１°－Ｅ　**壁**　壁は西側で最大約40cmの高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。**床**　床面はほぼ平坦で、カマド前面付近から住居北西コーナーと南西コーナーにかけて特に床面の硬化がみられる。壁溝は西壁側と北・東南壁側に連続して延びているが、東壁側には見られない。　**カマド**　東壁中央やや南寄りに位置し、両袖幅88cm、燃焼室幅48cmを測り、袖の一部に粘土を使用している。火床面は床とほぼ同じ高さである。　**覆土**　炭化物を微量に含んだ褐色土を主体としている。　**遺物**　１の土師器内黒坏は覆土から、２の土師器の内黒鉢の底部片は覆土下層から、４の土師器の甕はカマド覆土から出土している。　**所見**　主柱穴を持たない東カマドの小型住居で、内黒の土師器坏やカマド出土の土師器甕から見て９世紀後半代の住居跡と思われる。覆土中からは８世紀の前半頃の器高の低い底部回転ヘラケズリの須恵器の坏の破片２点が出土しているが、混入遺物と考えられる。須恵器坏２点は遺構外の土器として第81図に掲載している。古い時期の遺物の混入が起きた原因としては、重複する２号掘立柱建物跡との関わりの可能性も考えられる。



第９図　１号住居跡



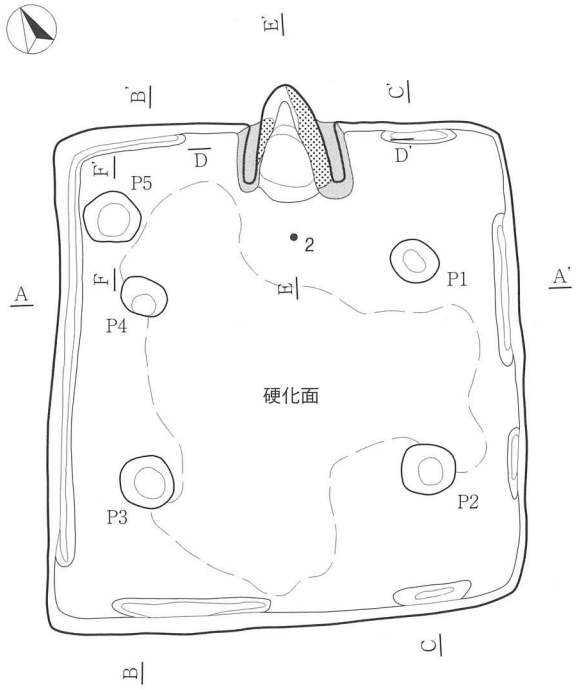
第10図　1号住居跡出土遺物

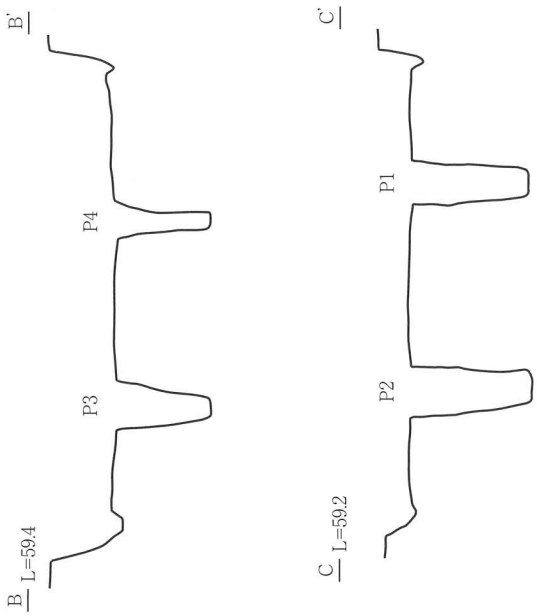
表1　1号住居跡出土遺物観察表

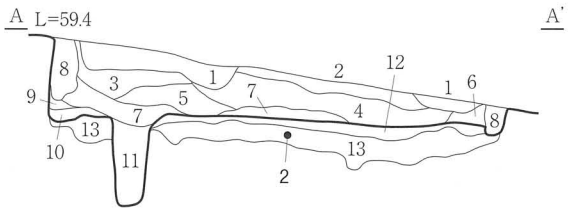
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(15.5) – –	内面黒色処理、ミガキ。	石英多量、角閃石、長石少量	普通	にぶい褐色、内面黒色	25%
2	土師器 鉢	– – (14.4)	底部片。体部下端ヘラケズリ、内面黒色処理、一部ミガキ。底部ヘラナデ。	長石、石英多量、海綿骨針	良好	にぶい橙色	
3	土師器 小型甕	– – 6.6	胴下半部～底部片。胴部外面横位ヘラケズリ。	石英	やや不良	にぶい褐色	
4	土師器 甕	(17.7) – –	口縁部片。口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ。	長石・石英多量、角閃石少量	良好	にぶい橙色	

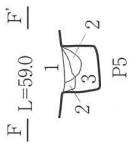
2号住居跡（第11・12図）

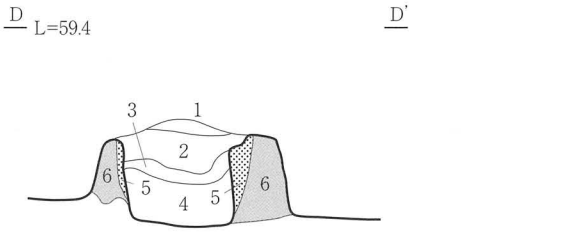
位置　A区の南部E2グリッド、標高58.7m地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.83m、東西方向3.56mの南北方向にやや長い長方形。　**重複関係**　3号住居跡によって北西壁の一部を掘り込まれている。　**主軸方向**　N－28°－E　**壁**　壁は約65cmの高さ残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　床面中央部を中心に硬化している。　**ピット**　5か所、P1～4は主柱穴で、4本の主柱穴の配置は東西方向に長い長方形配置になっている。P5は住居跡の北西隅にある。P5の3層はローム―ブロックを多量に含み、上層覆土とは違っておりピットの掘り方堆積層と考えられるので、実際の深さは約10cmとやや浅い。　**カマド**　両袖間の幅80cm、燃焼室幅40cmで、住居跡北壁中央部にあり、両袖には粘土を使用している。内壁右側から奥壁にかけて焼土化している。　**覆土**　粒径の細かい、自然堆積と思われる褐色～暗褐色土を主体として住居跡は埋没している。壁際の堆積に一定の幅をもった縦長の堆積が見られ、壁体の痕跡と見られる。　**遺物**　住居跡床下覆土から2の土師器甑が出土している。覆土からは、口縁部が外反して開き、外面の口縁部と体部との境に稜線を巡らす土師器の坏が出土している。　**所見**　出土遺物から7世紀頃の住居跡と考えられる。

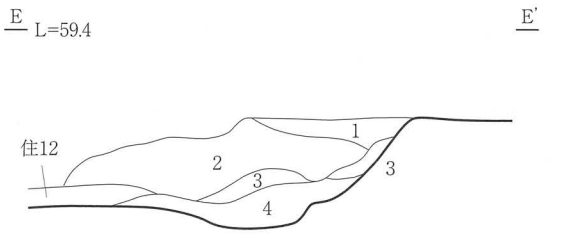












2号住居跡土層

1 暗褐色　ローム粒微量、しまり弱い
2 褐色　ローム粒微量、しまりあり
3 褐色　ロームブロック微量、ローム粒微量、テフラKP粒微量、しまりあり
4 暗褐色　ロームブロック微量、ローム粒微量、テフラKP微量、しまりあり
5 褐色　ロームブロック微量、ローム粒微量、テフラKPブロック、しまり強い
6 暗褐色　ローム粒微量、しまり強い
7 黒褐色　ローム粒微量、しまりあり
8 極暗褐色　しまり弱い、壁体痕跡か
9 極暗褐色　鹿沼パミスブロック少量、しまり非常に弱い
10 暗褐色～褐色　ローム粒多量、鹿沼パミスブロック多量、しまり弱い
11 黒褐色　ロームブロック多量、ローム粒多量、鹿沼パミスブロック多量、しまり弱い
12 褐色　ロームブロック多量、ローム粒多量、鹿沼パミスブロック多量、しまり非常に強い、掘り方覆土
13 褐色　ロームブロック多量、ローム粒多量、鹿沼パミスブロック多量、しまり強い、掘り方覆土

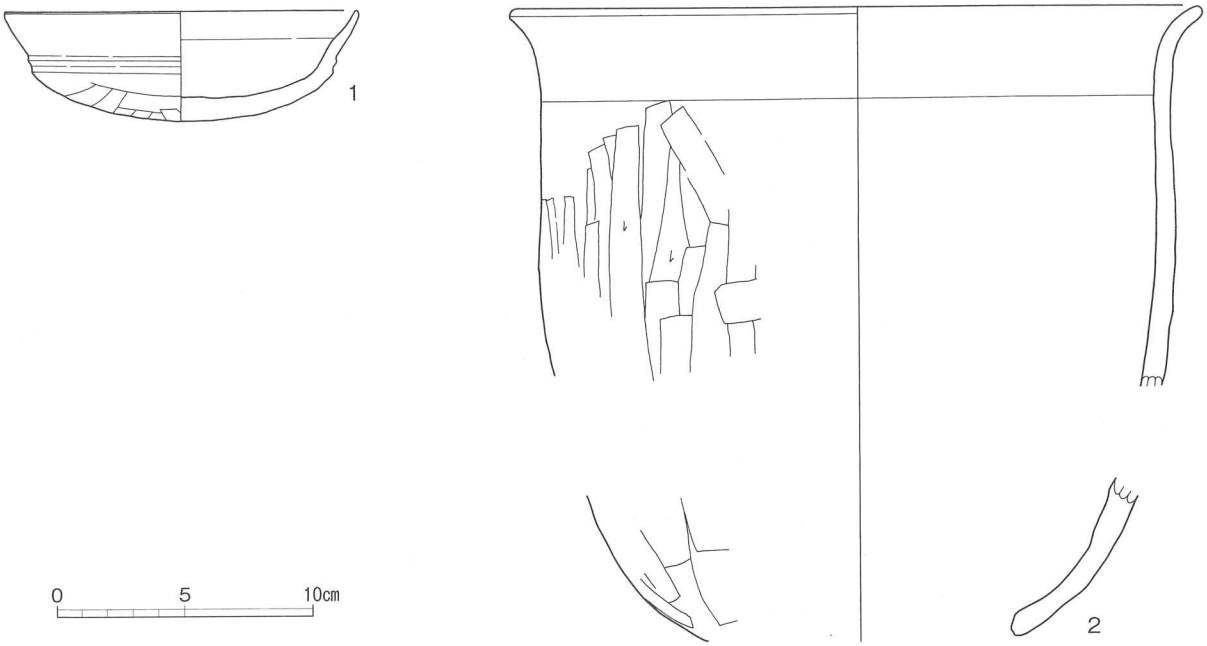
カマド

1 赤褐色　焼土少量、しまり弱い
2 赤褐色　粘土微量、焼土多量、しまり強い
3 赤褐色　粘土多量、焼土少量、しまり強い
4 暗赤褐色　焼土多量、炭化物微量、しまり弱い
5 赤褐色　焼土主体、しまり強い、袖部内壁
6 暗赤褐色　やや赤変した袖部粘土

P5

1 暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、鹿沼パミス少量、しまり弱い
2 黒褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、鹿沼パミスブロック少量、しまり弱い
3 暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、鹿沼パミスブロック多量、しまり弱い

第11図　２号住居跡



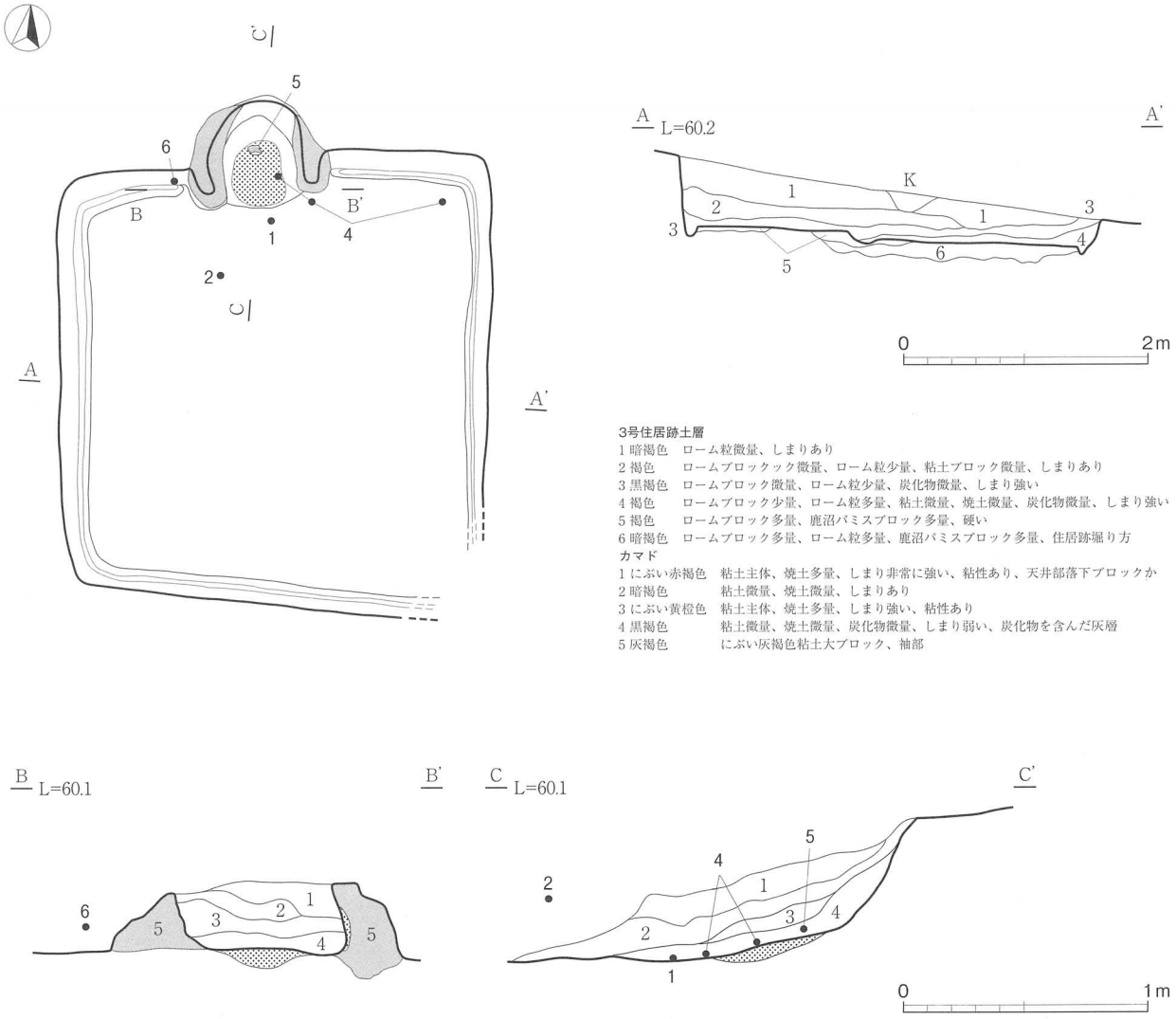
第12図　2号住居跡出土遺物

表2　2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(11.8) 4.3 －	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ。	石英	やや不良	灰白色	60%
2	土師器 甑	(26.8) － (12.0)	口縁部、底部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向のヘラケズリ。	長石・石英粒～礫主体、角閃石極少量	良好	灰褐色	

3号住居跡（第13・14図）

位置　A区の南部E2グリッド、標高60.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.53ｍ、東西方向3.29ｍのやや縦に長い長方形。　**主軸方向**　N－5°－W　**壁**　壁は西壁側で約58cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　床面は硬化の度合いが低い。　**ピット**　主柱穴、出入り口ピットともに確認されなかった。　**カマド**　住居跡の北壁中央から僅かに西側に寄った位置にある。両袖間の幅115cmで、燃焼室幅60cm、燃焼室底面をほとんど掘り込まず、焚き口部が不明瞭である。袖部と奥壁には、長石礫を多量に含んだ多量の砂質粘土を使用している。奥壁は煙道部に向かって長く延びないで立ち上がる。　**覆土**　覆土はロームブロックの含有が少なく、自然堆積層と見られる。　**遺物**　カマドの底面や焚き口付近の床面等から1・4・5の須恵器の蓋や坏が出土している。6の「九」刻書の須恵器高台付坏は覆土から、7の土師器甕は床下覆土から出土している。　**所見**　出土遺物から見て、8世紀後半頃の住居跡と思われる。

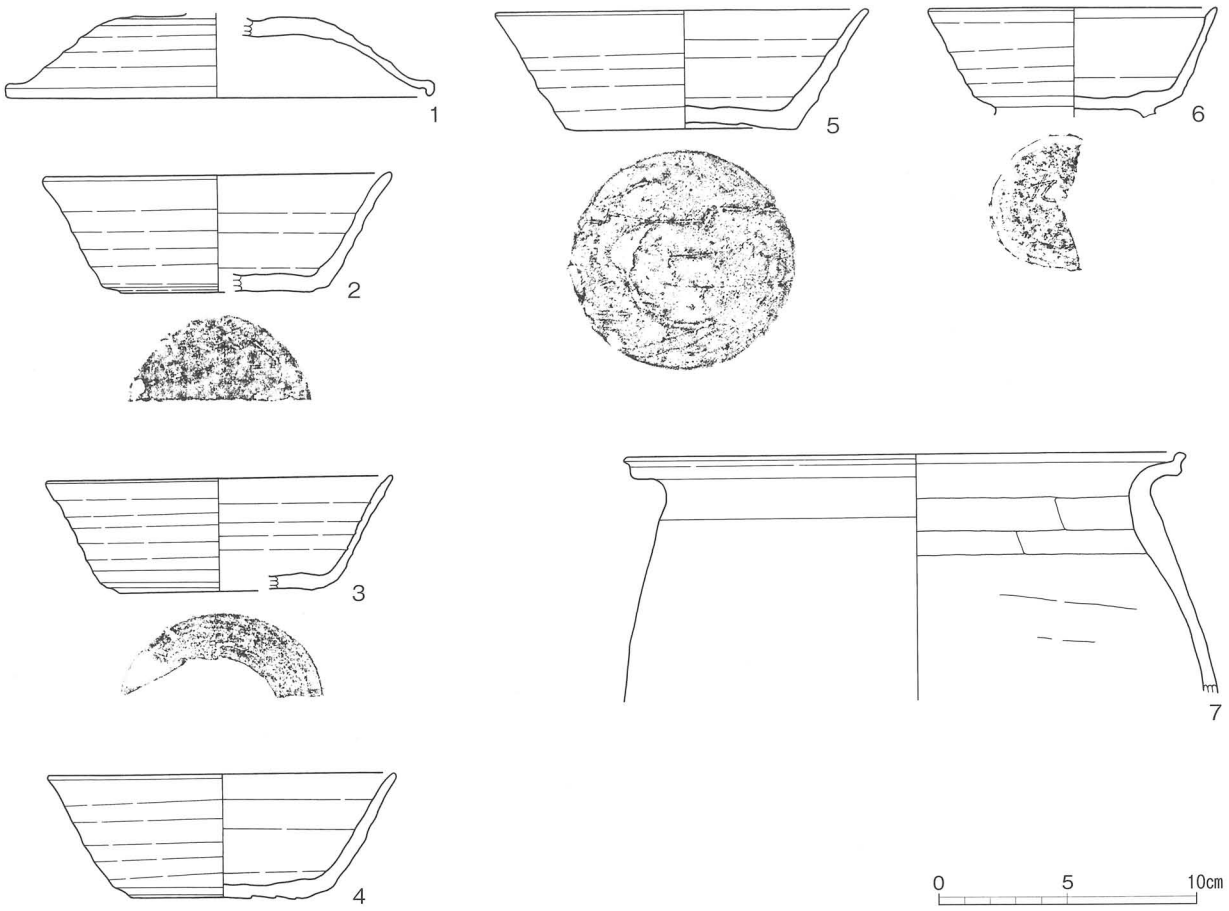


3号住居跡土層
1 暗褐色　ローム粒微量、しまりあり
2 褐色　ロームブロックック微量、ローム粒少量、粘土ブロック微量、しまりあり
3 黒褐色　ロームブロック微量、ローム粒少量、炭化物微量、しまり強い
4 褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、粘土微量、焼土微量、炭化物微量、しまり強い
5 褐色　ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック多量、硬い
6 暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒多量、鹿沼パミスブロック多量、住居跡堀り方
カマド
1 にぶい赤褐色　粘土主体、焼土多量、しまり非常に強い、粘性あり、天井部落下ブロックか
2 暗褐色　粘土微量、焼土微量、しまりあり
3 にぶい黄橙色　粘土主体、焼土多量、しまり強い、粘性あり
4 黒褐色　粘土微量、焼土微量、炭化物微量、しまり弱い、炭化物を含んだ灰層
5 灰褐色　にぶい灰褐色粘土大ブロック、袖部

第 13 図　３号住居跡

表３　３号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	(17.0) － －	内面に降灰痕あり、中央部に経9cmの重ね焼きによる無降灰部あり、正位の高台付坏との逆位重ね焼き焼成か。	長石、白色微粒、白色礫	良好	明青灰色	40%
2	須恵器 坏	(13.6) 4.6 7.4	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。	長石礫少量	やや不良	明灰色	30%
3	須恵器 坏	(13.6) 4.5 (7.6)	底部及び体部下端回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、石英、海綿骨針、チャート少量	良好	暗灰色	30%
4	須恵器 坏	13.7 4.9 7.1	底部回転ヘラ切り無調整。	長石・石英微量、チャート・長石礫少量	不良	灰白色	80%



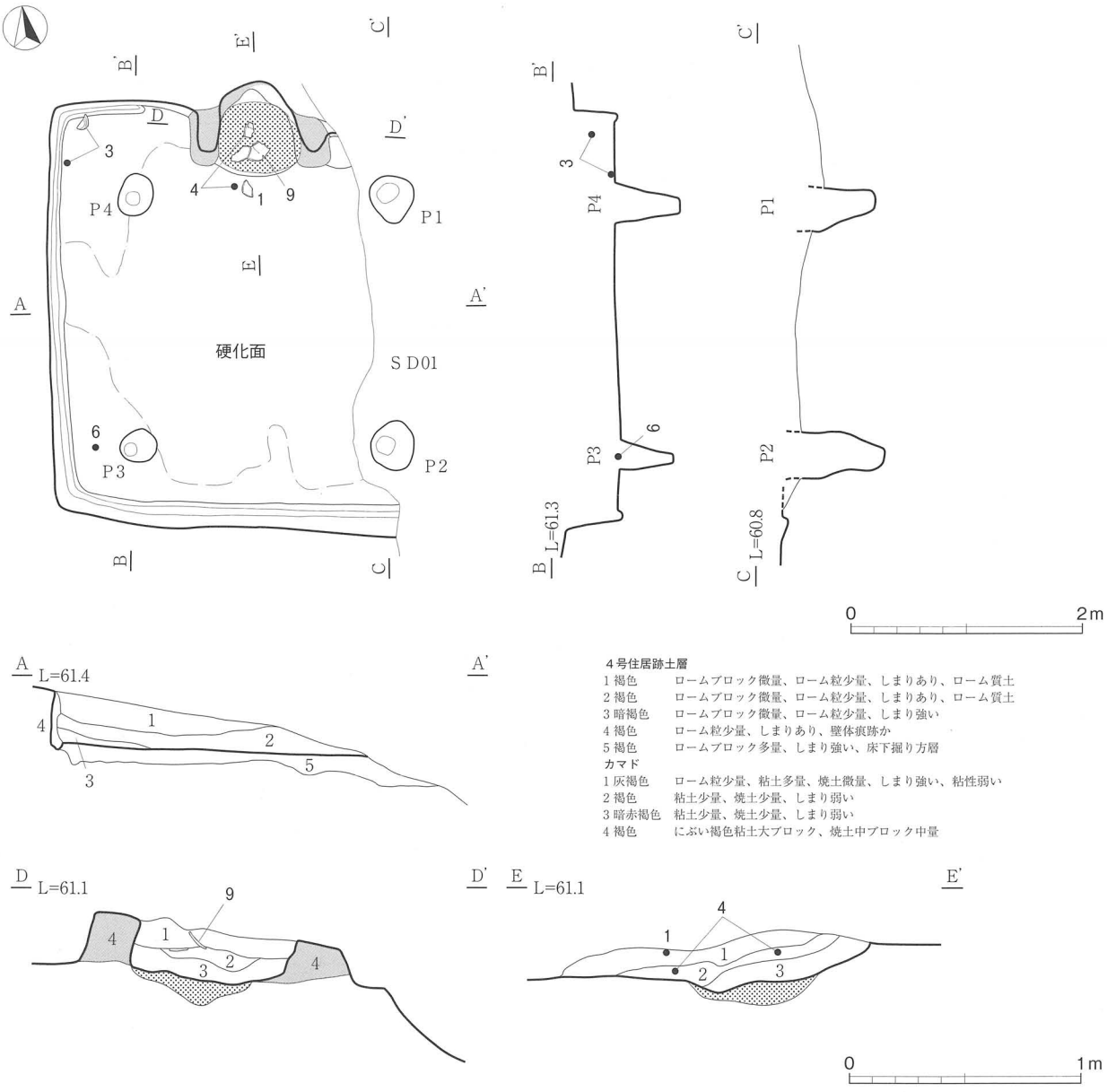
第14図　3号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	須恵器 坏	14.5 4.8 8.7	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ調整。	長石礫、黒色融出粒	良好	褐灰色	70%
6	須恵器 高台付坏	(11.2) － －	底部刻書「九」。体部側面墨書か「□」。	石英、チャート礫少量	やや不良	青灰色	40%
7	土師器 甕	(20.8) － －	口縁部片。口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、角閃石	普通	にぶい黄橙色	

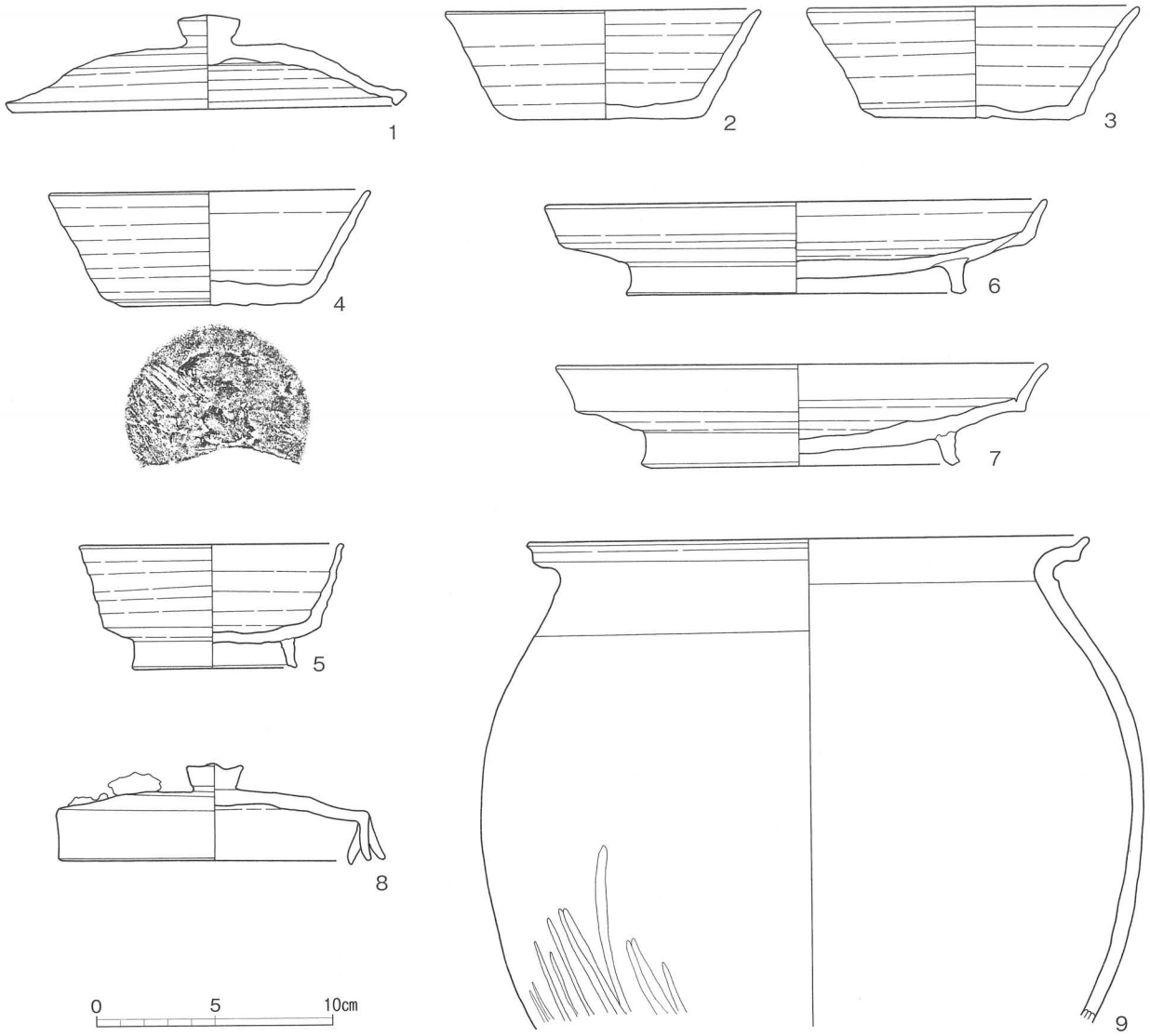
4号住居跡（第15・16図）

位置　A区の南部E2グリッド、標高61.0m地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.50m、東西方向(3.50)mの方形。地形の削平により東側が壊されている。　**主軸方向**　N－9°－E　**壁**　壁は最高約65cm残存している。　**床**　北西・南西隅を除いて、全体に硬化している。　**ピット**　4か所、P1～4は主柱穴で、住居跡の隅に寄った位置にある。出入り口ピットは確認されなかった。　**カマド**　住居跡の北壁中央から僅か

に西側に寄った位置にある。両袖間の幅120cmで、燃焼室幅60cm、燃焼室底面を少し掘り込んでおり、火床は焼土化が著しい。袖部には、ロームをベースにしてにぶい褐色粘土大ブロックと焼土の中ブロックを主体として構築している。　**覆土**　覆土はロームを主体とした自然堆積層と見られる。　**遺物**　４の須恵器坏、９の土師器甕はカマド覆土から、６の須恵器盤は南西隅寄りの床面から出土している。　**所見**　出土遺物のうち新治産のカマド甕は８世紀中葉、須恵器の盤や坏類は８世紀後葉頃のものと見られる。



第15図　４号住居跡



第16図　4号住居跡出土遺物

表4　4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	16.6 4.0 –	擬宝珠状の摘み。	長石、チャート、海綿骨針	良好	褐灰色	50%
2	須恵器 坏	(13.3) 4.6 7.8	底部回転ヘラ切り後ナデ。	長石、チャート、海綿骨針	良好	灰色	50%
3	須恵器 坏	14.0 4.8 8.0	底部回転ヘラ切り、無調整。	長石、チャート、海綿骨針	良好	青灰色	60%
4	須恵器 坏	(13.6) 4.8 7.6	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。	長石・石英微粒	やや不良	灰白色	50%
5	須恵器 高台付坏	(11.2) 5.3 6.3	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け。体部外面全体に高温還元による黒色化。	長石、石英、海綿骨針	良好	灰色	50%

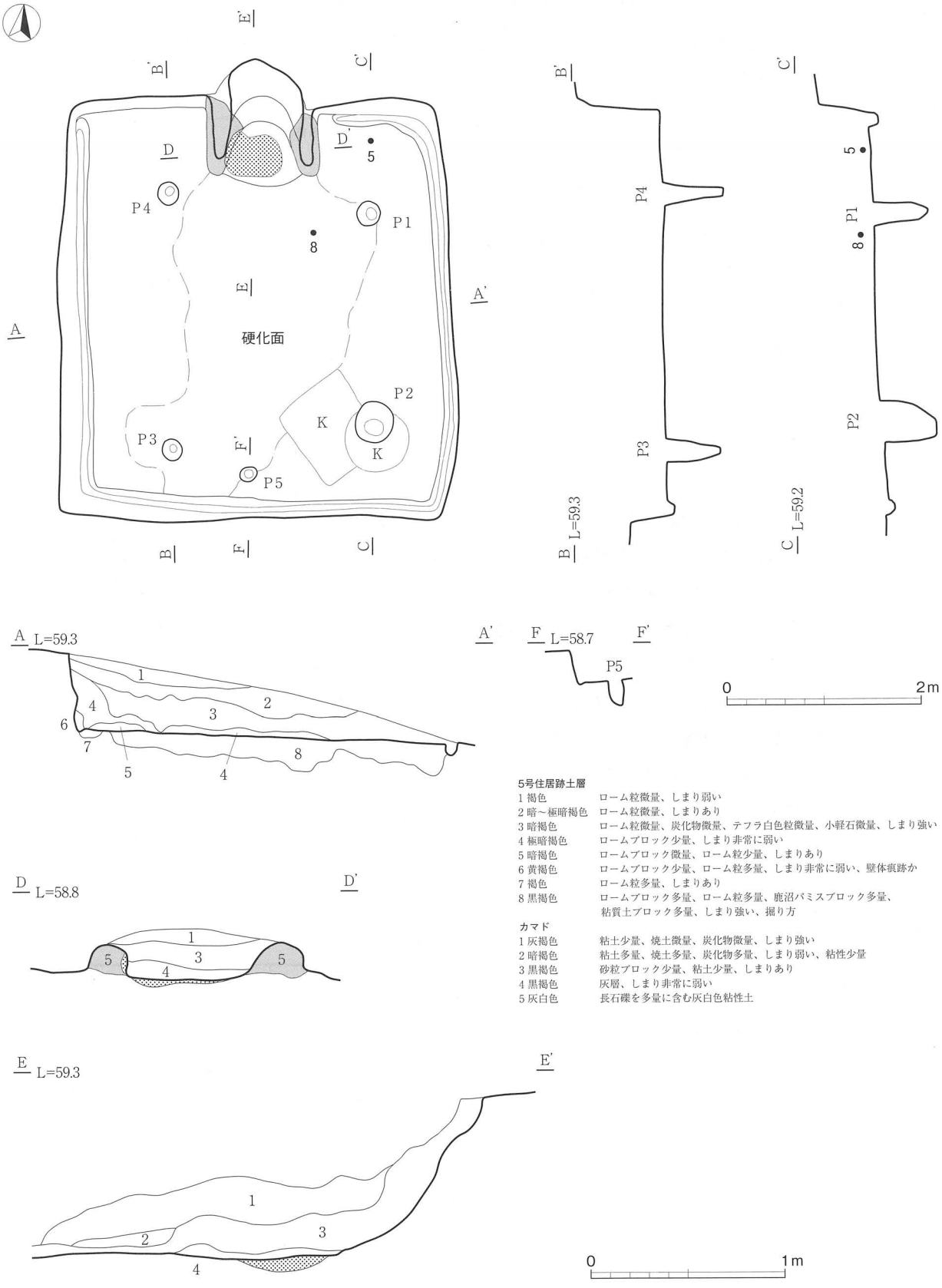
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	須恵器 盤	(21.0) 4.0 14.2	内面が使用痕跡として摩耗している。	長石、チャート、海綿骨針、黒色小粒	良好	灰色	40%
7	須恵器 盤	(20.7) 4.3 12.8	底部回転ヘラケズリ後高台貼り付け。内面に、経11.8cmの高坏脚部かと思われる重ね焼き痕跡あり。	長石礫、黒色粒・斑	良好	オリーブ灰色	40%
8	須恵器 壺蓋	(13.2) 4.2 －	焼成時の器形の歪み大きい。黒色粒が斑状に融出。天井部に窯壁片が付着。	長石礫	良好	灰褐色	40%
9	土師器 甕	(23.6) － －	口縁部ヨコナデ、胴部上半部内外面ナデ、下半部外面ミガキ。	長石、石英、雲母	やや不良	明黄褐色	20%

５号住居跡（第17・18図）

位置　Ａ区の南部Ｅ２グリッド、標高58.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.90ｍ、東西方向3.70ｍのやや縦長の長方形。　**主軸方向**　Ｎ－９°－Ｗ　　**壁**　壁は最大74cm残存している。　**床**　主柱穴の内側の範囲からＰ５付近にかけて床面が硬化している。壁溝は北壁の西側とカマド部分以外全周している。　**ピット**　５箇所。Ｐ１～４は、主柱穴で、Ｐ５は出入り口ピットと考えられる。　**カマド**　住居北壁のほぼ中央部にあり、長石礫を多く含む灰白色粘土を使用して構築している。燃焼室の幅はおよそ65cmあり、火床の被熱範囲は向かって左側が強く焼けている。　**覆土**　覆土はローム ブロックをあまり含まない暗褐色土主体の層で自然堆積かと思われる。　**遺物**　５の須恵器高台付坏、８の土師器甕は覆土下層から出土している。覆土中の遺物には底部回転ヘラケズリの坏や外面同心円文叩きの甕片等８世紀前半代のものも含まれる。７の円面硯片も覆土から出土している。　**所見**　４本柱を持ち、カマドの袖部を住居内に突出させたしっかりとしたカマドであることや出土遺物などから８世紀後半代に廃絶している住居の中では比較的古いものと思われる。

表５　５号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	摘経3.2 摘高0.95	扁平な蓋摘部片。	石英、白色粒少量、海綿骨針微量	良好	灰色	
2	須恵器 蓋	(22.2) － －	大型器種の蓋。天井部外面全体に濃緑色の自然釉が斑状に融出。	長石粒・礫	良好	灰白色	40%
3	須恵器 坏	(13.9) 4.3 8.4	底部一方向ヘラケズリ後ヘラナデ。底部ヘラ記号「一」。	長石、石英、海綿骨針、チャート礫	普通	青灰色	60%
4	須恵器 坏	－ － (8.2)	底部同心円状の回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。焼成時の還元弱い。	長石、石英	普通	灰白色	30%
5	須恵器 高台付坏	13.6 4.3 9.0	ロクロ右回転。	長石粒・礫、黒色粒、精良	良好	明灰色	50%
6	須恵器 甕	－ － －	胴部片。胴部外面同心円叩き。内面掌押さえ痕。	長石、石英礫、黒色小粒	普通	灰白色	



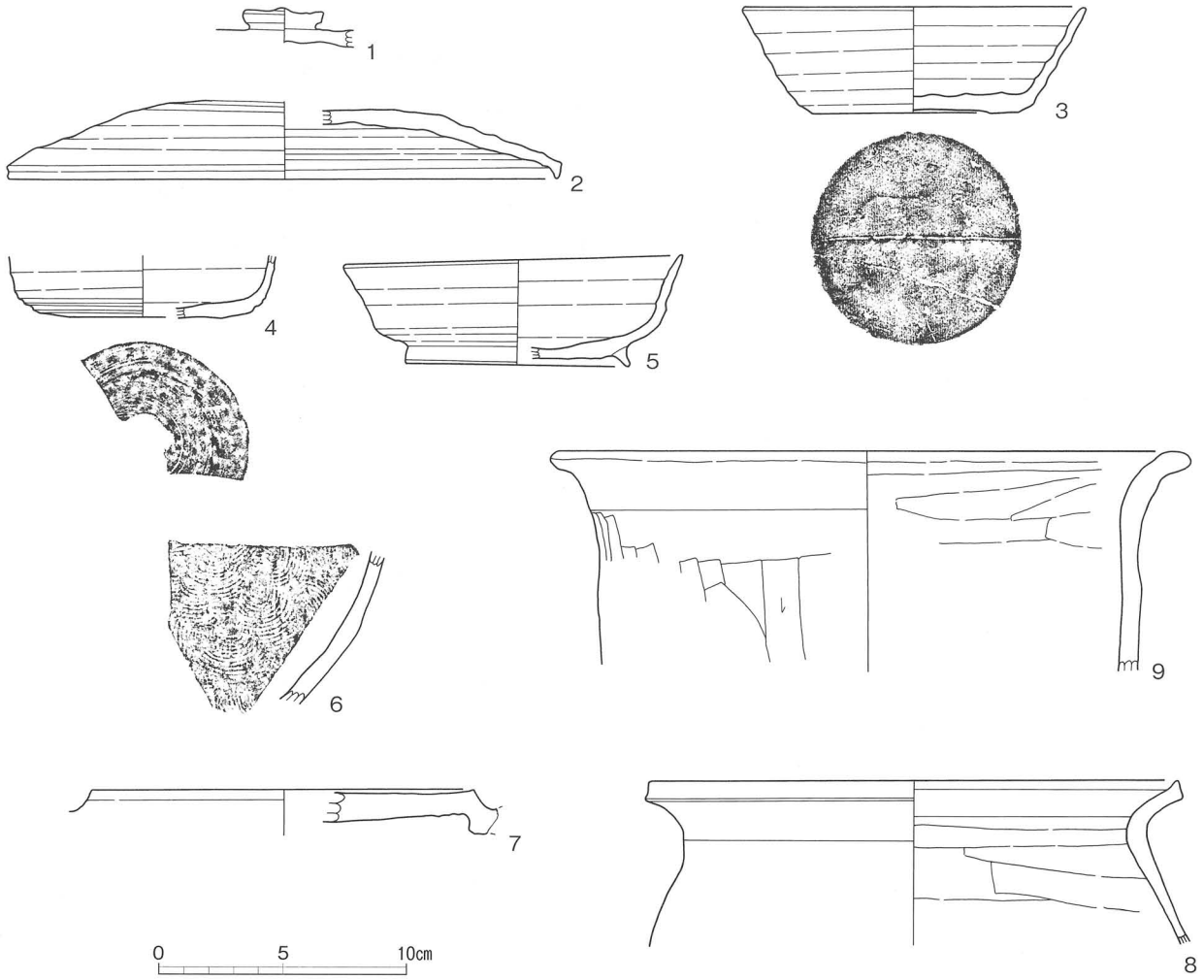
5号住居跡土層

1 褐色	ローム粒微量、しまり弱い
2 暗～極暗褐色	ローム粒微量、しまりあり
3 暗褐色	ローム粒微量、炭化物微量、テフラ白色粒微量、小軽石微量、しまり強い
4 極暗褐色	ロームブロック少量、しまり非常に弱い
5 暗褐色	ロームブロック微量、ローム粒少量、しまりあり
6 黄褐色	ロームブロック少量、ローム粒多量、しまり非常に弱い、壁体痕跡か
7 褐色	ローム粒多量、しまりあり
8 黒褐色	ロームブロック多量、ローム粒多量、鹿沼パミスブロック多量、粘質土ブロック多量、しまり強い、掘り方

カマド

1 灰褐色	粘土少量、焼土微量、炭化物微量、しまり強い
2 暗褐色	粘土多量、焼土多量、炭化物多量、しまり弱い、粘性少量
3 黒褐色	砂粒ブロック少量、粘土少量、しまりあり
4 黒褐色	灰層、しまり非常に弱い
5 灰白色	長石礫を多量に含む灰白色粘性土

第17図　5号住居跡

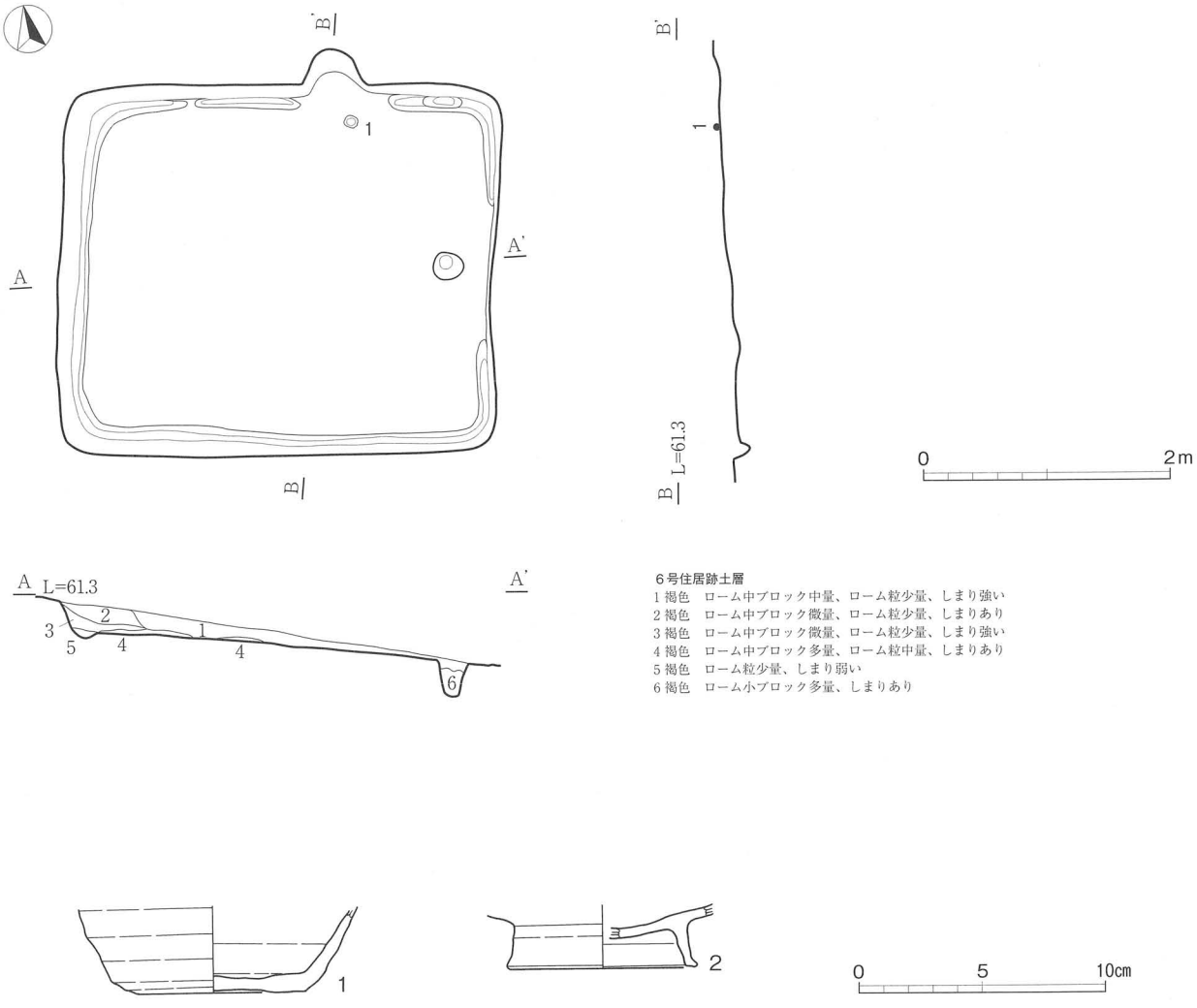


第18図　5号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	須恵器 円面硯	－ － －	陸から海部片。外面墨磨の使用痕。内面ヘラナデ、脚部外面ミガキ。	長石・石英粒、長石礫	良好	青灰色	
8	土師器 甕	(21.6) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	良好	橙色	
9	土師器 甕	(25.8) － －	口縁部片。口縁部外面ヨコナデ、胴部外面縦方向のヘラケズリ。口縁部～胴部内面ヘラナデ。	長石、石英、海綿骨針	不良	灰褐色	

６号住居跡（第19図）

位置　A区の中央部D２グリッド、標高61.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向2.72ｍ、東西方向3.35ｍの横長の長方形。　**主軸方向**　N－23°－E　**壁**　壁は約30cm残存している。　**床**　ほぼ平坦で全体にあまり硬化していない。壁溝は東壁側と北壁のカマド部分で途切れている。　**ピット**　１箇所。東壁中央寄りにあり、底径約10cm、深さ30cmの穴で、出入り口ピットと考えられる。　**カマド**　北壁東寄りに付設されていたものと見られ、カマド煙道部の掘り方痕跡が確認面で見られた。　**覆土**　覆土は褐色土主体の堆積である。　**遺物**　カマド前面の床上から口縁部の破損した須恵器坏、覆土からやや足の長い須恵器高台付坏が出土している。　**所見**　本跡は主柱を持たない横長小型の住居跡で、出土遺物から９世紀後半代の住居跡と考えられる。



第19図　６号住居跡・出土遺物

表６　６号住居跡出土遺物観察表

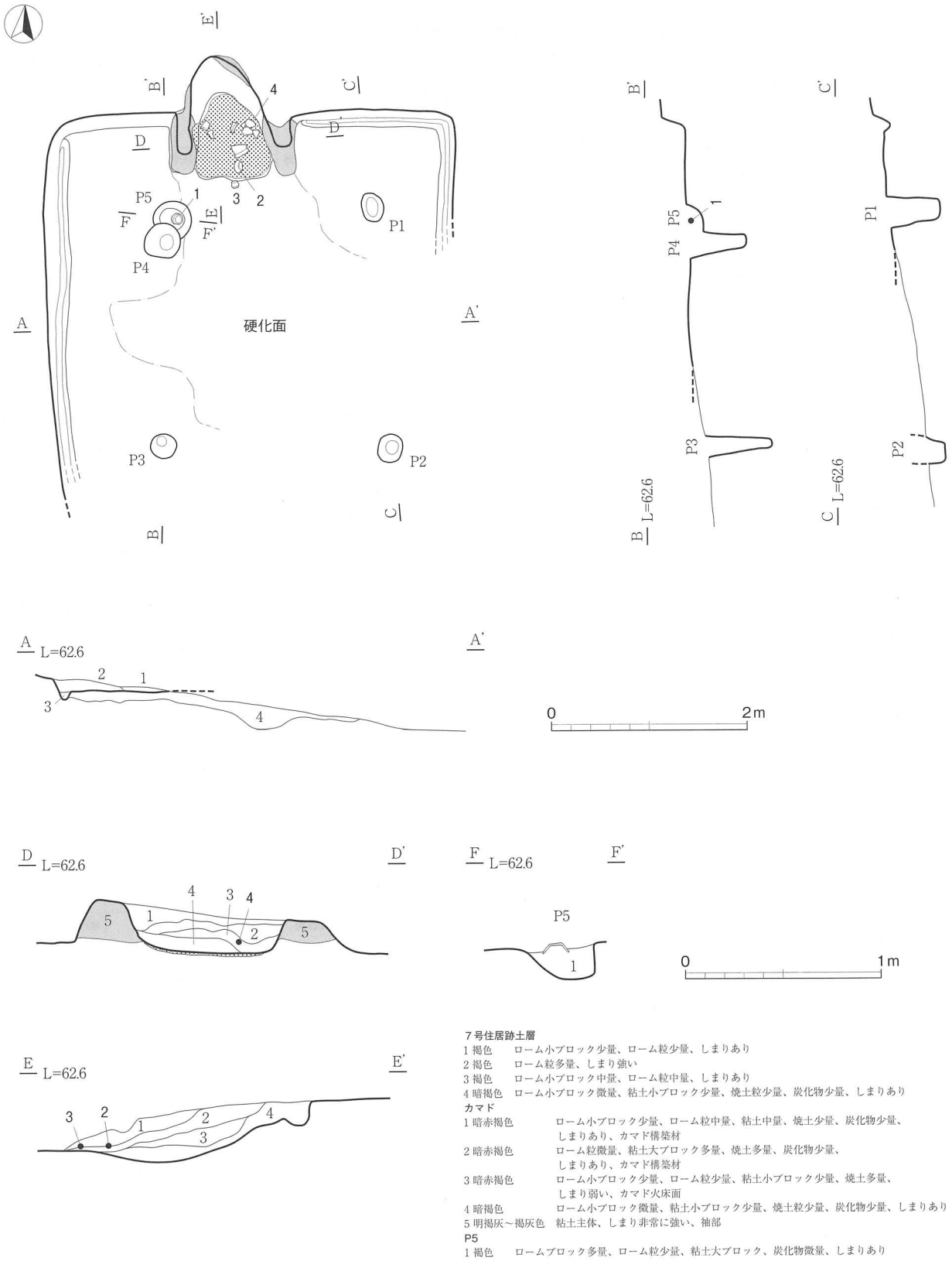
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ － 7.0	底部回転ヘラ切り後ナデ。ロクロ右回転。海綿骨針の含有多い。	長石礫、石英、海綿骨針	良好	青灰色	60%
2	須恵器 高台付坏	－ － (7.8)	底部片。海綿骨針の含有多い。	長石礫、石英、海綿骨針	良好	青灰色	30%

７号住居跡（第20・21図）

位置　Ａ区の中央部Ｄ２グリッド、標高62.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向4.10ｍ、東西方向3.90ｍの方形。　**主軸方向**　Ｎ－10°－Ｗ　**壁**　壁は最大約20cm残存している。　**床**　カマド前面から主柱穴の内側にかけて硬化している。　**ピット**　５箇所。Ｐ１～４は、主柱穴で、Ｐ５はＰ４の支え柱か、修復柱かと考えられる。　**カマド**　北壁中央やや西寄りにあり、両袖間の幅は130cm、燃焼室の幅は75cm。袖部は、室内に45～50cm程突出し、褐灰色粘土で構築されている。燃焼室から煙道部へは緩やかに立ち上がっている。**覆土**　残存する覆土は薄く褐色土を主体としている。　**遺物**　カマド覆土下層から２・３の須恵器や４の土師器甕、Ｐ５から１の須恵器坏が出土している。　**所見**　出土遺物から８世紀後半頃の住居跡と考えられる。

表７　７号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.4 4.7 7.5	底部一方向ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫多量、石英、海綿骨針	良好	灰色	80%
2	須恵器 坏	(14.1) 4.9 8.0	底部一方向ヘラケズリ。底部「＃」ヘラ記号。	長石礫多量、チャート、海綿骨針	普通	灰褐色	40%
3	須恵器 小型短頸壺	6.7 5.9 5.0	底部二方向ヘラケズリ。内外面降灰と黒色自然釉の融出。	長石、石英	良好	暗灰色	90%
4	土師器 甕	(20.4) － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部内外面ナデ、下半部外面ミガキ。	長石、石英、雲母	普通	にぶい褐色	20%



7号住居跡土層

1 褐色　ローム小ブロック少量、ローム粒少量、しまりあり
2 褐色　ローム粒多量、しまり強い
3 褐色　ローム小ブロック中量、ローム粒中量、しまりあり
4 暗褐色　ローム小ブロック微量、粘土小ブロック少量、焼土粒少量、炭化物少量、しまりあり

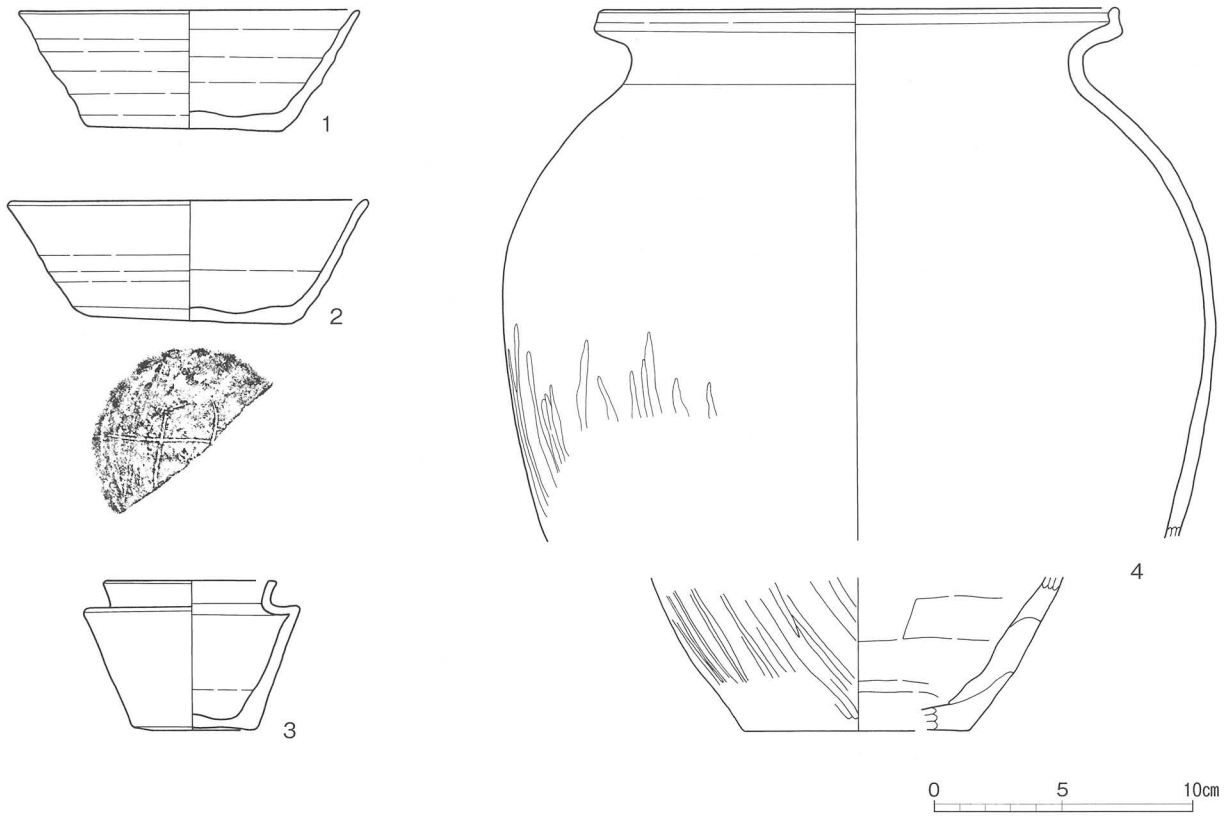
カマド

1 暗赤褐色　ローム小ブロック少量、ローム粒中量、粘土中量、焼土少量、炭化物少量、しまりあり、カマド構築材
2 暗赤褐色　ローム粒微量、粘土大ブロック多量、焼土多量、炭化物少量、しまりあり、カマド構築材
3 暗赤褐色　ローム小ブロック少量、ローム粒少量、粘土小ブロック少量、焼土多量、しまり弱い、カマド火床面
4 暗褐色　ローム小ブロック微量、粘土小ブロック少量、焼土粒少量、炭化物少量、しまりあり
5 明褐灰～褐灰色　粘土主体、しまり非常に強い、袖部

P5

1 褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、粘土大ブロック、炭化物微量、しまりあり

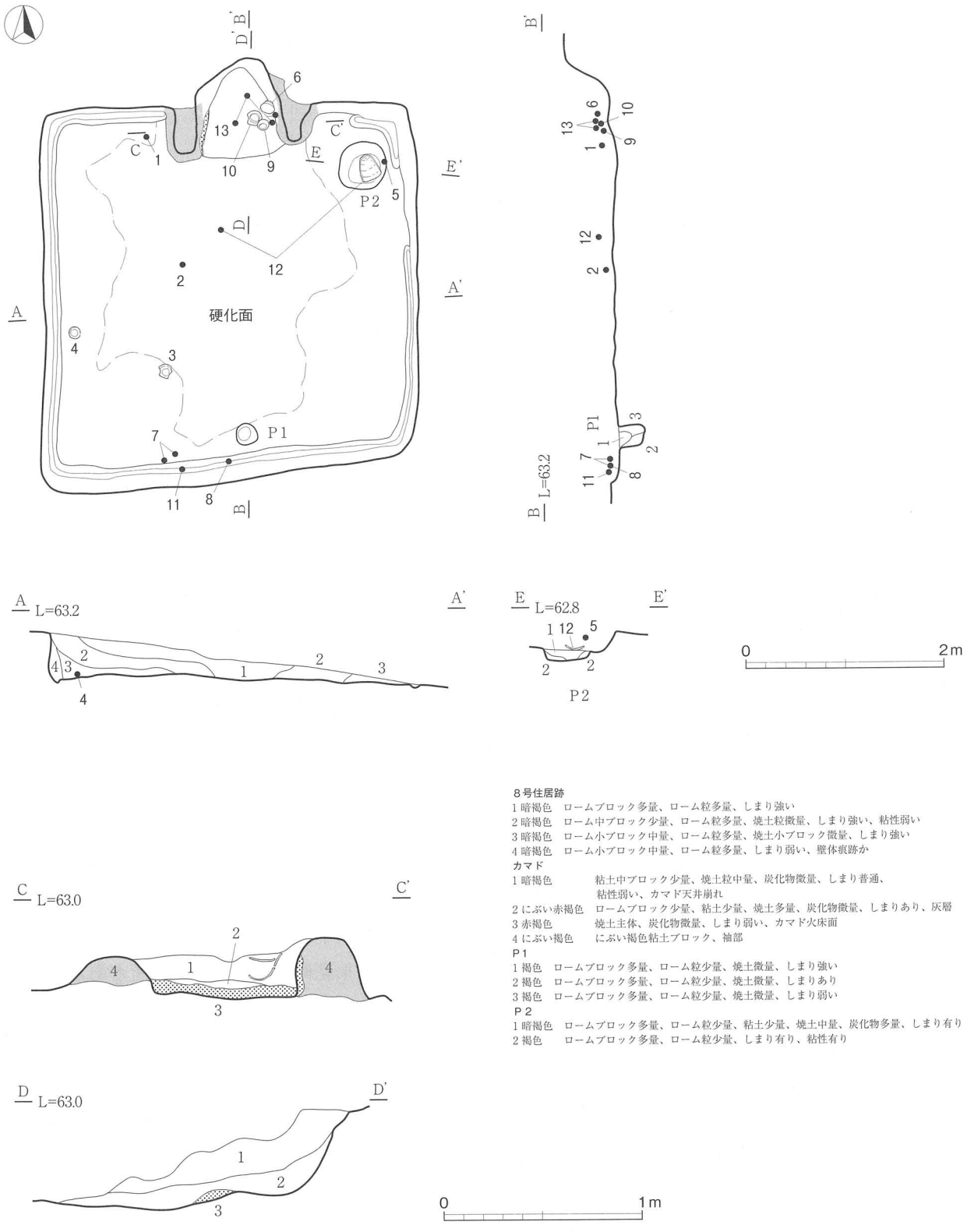
第20図　7号住居跡



第 21 図　７号住居跡出土遺物

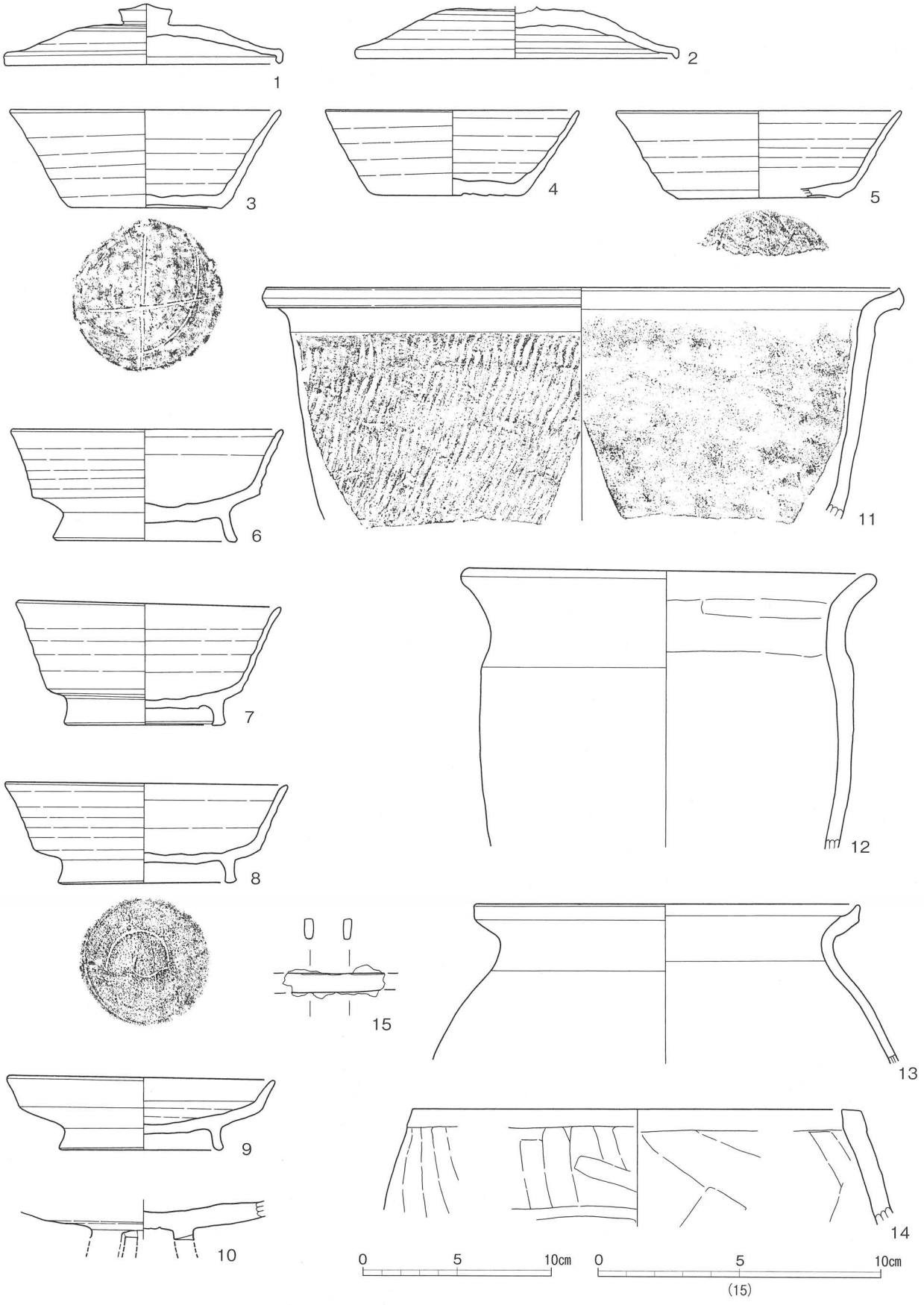
８号住居跡（第 22・23 図）

位置　Ａ区の中央部Ｄ２グリッド、標高 62.5 ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向 3.75 ｍ、東西方向 3.60 ｍのほぼ方形。　**主軸方向**　Ｎ－１°－Ｅ　**壁**　壁は最高で約 60㎝の高さ残存している。　**床**　住居跡の中央部を中心にＰ１やカマド左側にかけて特に硬化している。壁溝は、東壁側に一部切れる箇所がある。　**ピット**　Ｐ１は位置的に出入り口ピットと見られる。カマド右脇には浅くやや大きめに開いた、甕の埋設穴のような穴が開いている。　**カマド**　北壁中央部にある。両袖間の幅は 150㎝、燃焼室の幅は 72㎝。袖部は、室内に 45 ～ 70㎝程突出し、にぶい褐色粘土の大ブロックで構築されている。カマド右袖の内壁は焼土化してそのまま残存している。　**覆土**　覆土はローム小・中ブロックを含む暗褐色土を主体としている。壁際の堆積層には焼土ブロックも含まれ、床面中央部には焼土が堆積している。　**遺物**　カマドの覆土や住居覆土下層から須恵器の坏、高台付坏や土師器の甕等が出土している。14 の置きカマドの上部破片は、鍔や窓の開口部は残存していないが、外面の縦方向のナデを切って、鍔部の下端をなでたと見られる横方向のナデが見られる。15 の鉄製品は、刀子の柄部か。　**所見**　住居は、主柱がなく小規模だが、カマドは大きい特徴が見られる。出土遺物は８世紀後半頃のものと考えられる。



8号住居跡
1 暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒多量、しまり強い
2 暗褐色　ローム中ブロック少量、ローム粒多量、焼土粒微量、しまり強い、粘性弱い
3 暗褐色　ローム小ブロック中量、ローム粒多量、焼土小ブロック微量、しまり強い
4 暗褐色　ローム小ブロック中量、ローム粒多量、しまり弱い、壁体痕跡か
カマド
1 暗褐色　粘土中ブロック少量、焼土粒中量、炭化物微量、しまり普通、粘性弱い、カマド天井崩れ
2 にぶい赤褐色　ロームブロック少量、粘土少量、焼土多量、炭化物微量、しまりあり、灰層
3 赤褐色　焼土主体、炭化物微量、しまり弱い、カマド火床面
4 にぶい褐色　にぶい褐色粘土ブロック、袖部
P1
1 褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、焼土微量、しまり強い
2 褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、焼土微量、しまりあり
3 褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、焼土微量、しまり弱い
P2
1 暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、粘土少量、焼土中量、炭化物多量、しまり有り
2 褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、しまり有り、粘性有り

第22図　8号住居跡



第23図　8号住居跡出土遺物

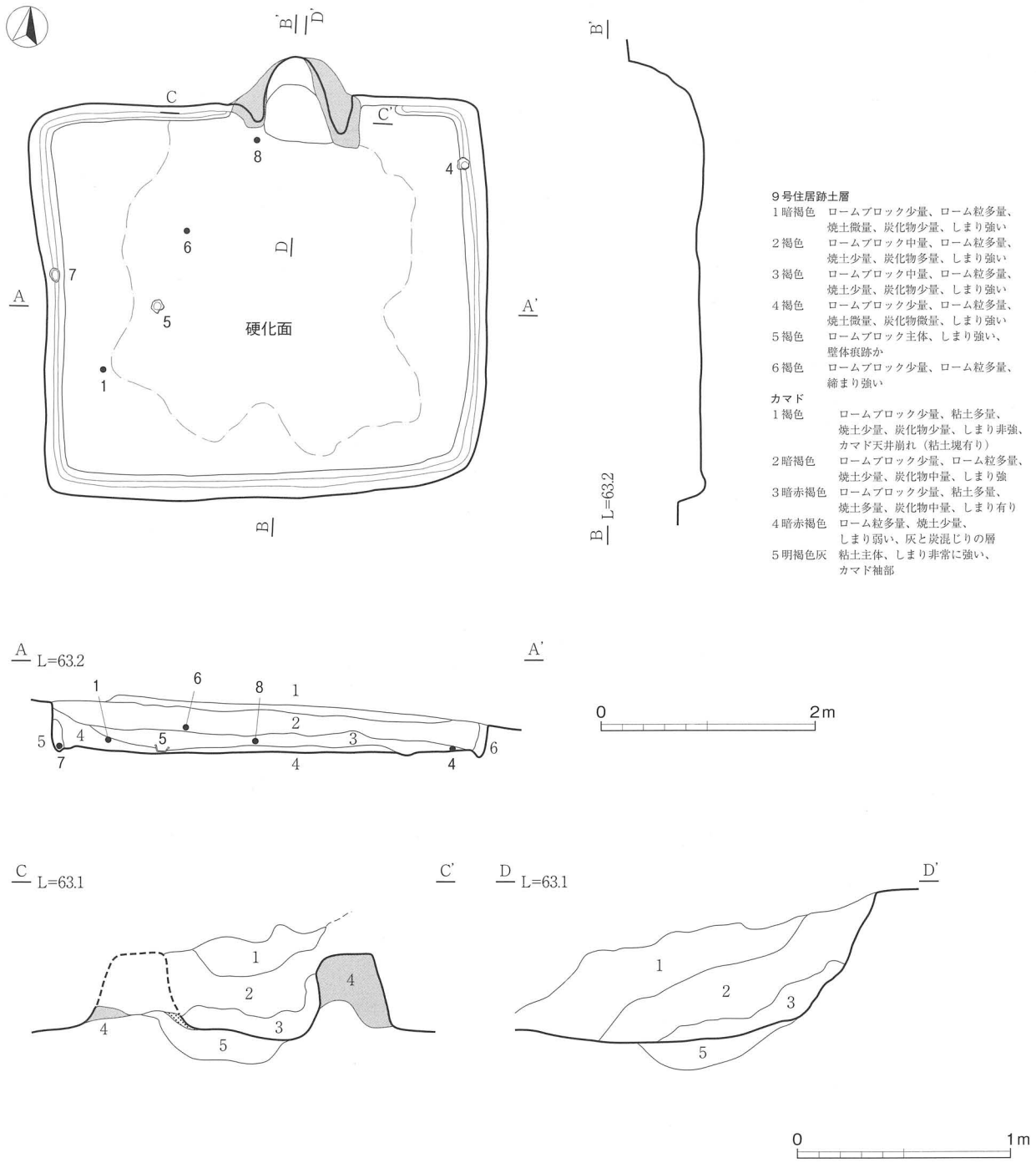
表8　8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	14.8 3.3 –	天井部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。外面径14cm、内面径9cmの重ね焼き痕跡あり。	長石礫、石英、海綿骨針、不明白灰色岩片	普通	浅黄橙色	完形
2	須恵器 蓋	(17.3) – –	外面径16cm、内面径9.6cmの重ね焼き痕跡あり。内面に降灰痕あり。	石英、長石、海綿骨針	良好	灰色	50%
3	須恵器 坏	14.4 5.1 8.1	底部手持ち一回転ヘラケズリ。底部ヘラ記号「×」。	長石、チャート礫少量、海綿骨針	普通	暗灰色	70%
4	須恵器 坏	13.5 4.5 7.9	底部回転ヘラ切り後無調整に近いオサエ。	長石、礫、石英、チャート、海綿骨針	普通	灰色	70%
5	須恵器 坏	(15.2) 4.6 (8.6)	底部回転ヘラ切り後、一方向ヘラケズリ。体部側面に火襷痕。	長石粒・礫、石英少量、海綿骨針	良好	青灰色	40%
6	須恵器 高台付坏	14.5 6.0 9.8	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫、石英、海綿骨針	良好	褐灰色	完形
7	須恵器 高台付坏	14.3 6.3 8.6	底部回転ヘラケズリ。	長石礫、チャート、石英少量	普通	灰褐色	70%
8	須恵器 高台付坏	(15.0) 5.3 9.5	底部回転ヘラケズリ。底部細い線でヘラ記号「—」。	長石礫、海綿骨針	良好	明青灰色	60%
9	須恵器 小型盤	14.2 4.9 8.4	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石、石英、海綿骨針	不良	灰白色	完形
10	須恵器 高坏	– – –	高坏坏の基部片。脚部透かし四方向か。	長石、凝灰岩小礫	良好	灰色	
11	須恵器 甕	(34.0) – –	口縁部片。体部外面斜行する平行叩き、内面掌圧痕後ヘラナデ。	長石、石英、雲母	普通	明灰色	
12	土師器 甕	22.1 – –	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ。頸部に粘土付着。	長石、石英、チャート、海綿骨針	良好	にぶい褐色	20%
13	土師器 甕	(20.5) – –	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ。	長石、石英	良好	にぶい橙色	
14	土製品 置きカマド	(24.0) – –	上端部片。端部上面、内・外面ヘラケズリ、体部外面縦方向ヘラナデ、内面斜行方向ヘラナデ。	長石、石英、角閃石	良好	にぶい橙色	
15	鉄製品	長さ［3.6］cm、幅0.7cm、厚さ0.3cm、重さ［3.2］g。					

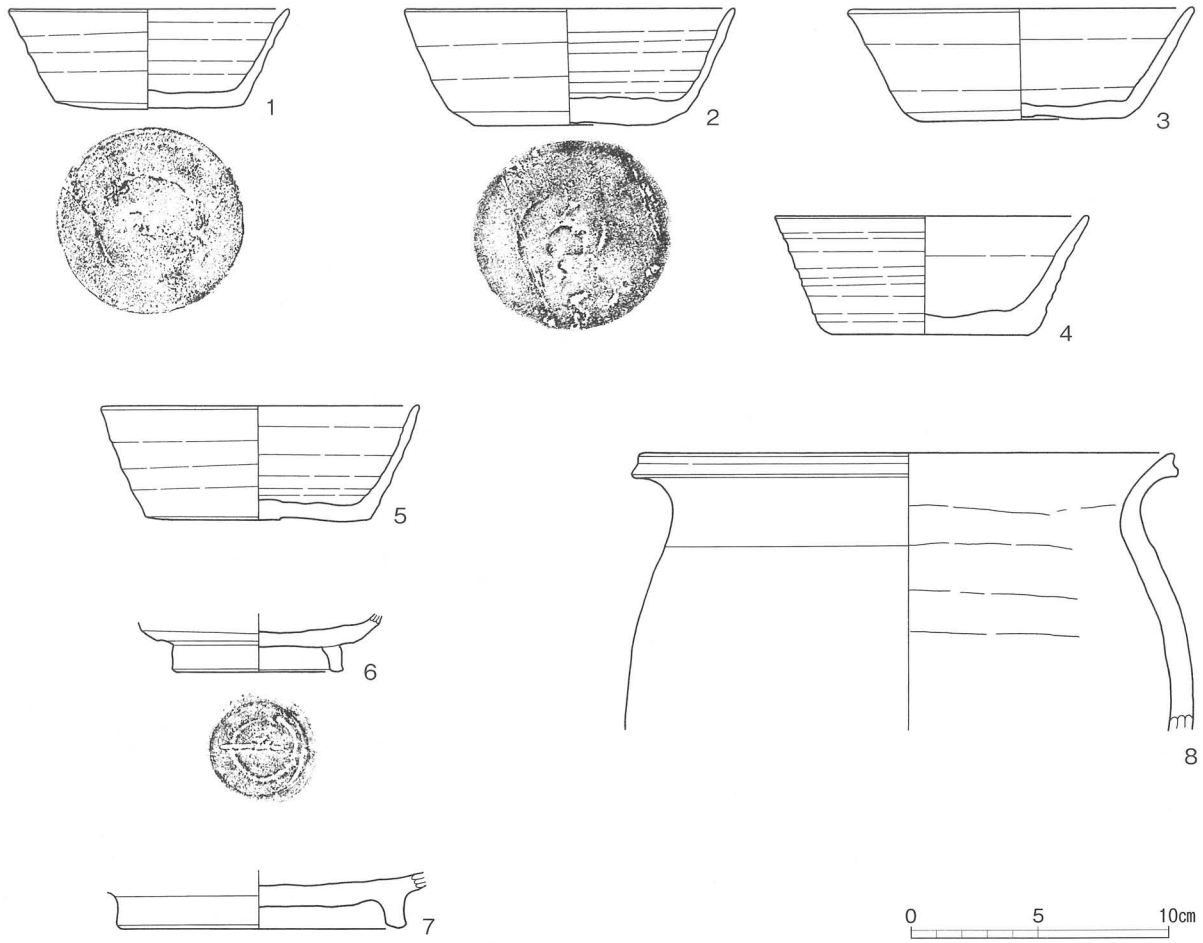
9号住居跡（第24・25図）

位置　A区の中央部D2グリッド、標高82.5m地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.50m、東西方向3.90mのやや横長気味の方形。　**主軸方向**　N－7－W。　**壁**　壁は最高44cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　住居の中央部やや南に寄った範囲が特に硬化している。　**ピット**　主柱を持たない。　**カマド**　北壁中央やや東寄りにあり、右袖部がよく残存している。右袖部は地山ロームを高さ13cm程削り残し、その上に灰褐色粘土大ブロックを盛り上げて構築している。両袖間の最大幅は150cm、右袖の粘土ブロックの残存高は36cmである。　**覆土**　炭化物と焼土を含む褐色土を主体としている。　**遺物**　覆土中から出土している須恵器の坏は底部調整が、ヘラ切り後僅かにオサエることによりヘラ切り痕を目立たなくする調整を行っているも

のがある。　**所見**　須恵器の底部調整から見て、底部切り離し無調整の直前段階頃の遺物群かと思われる。



第24図　９号住居跡



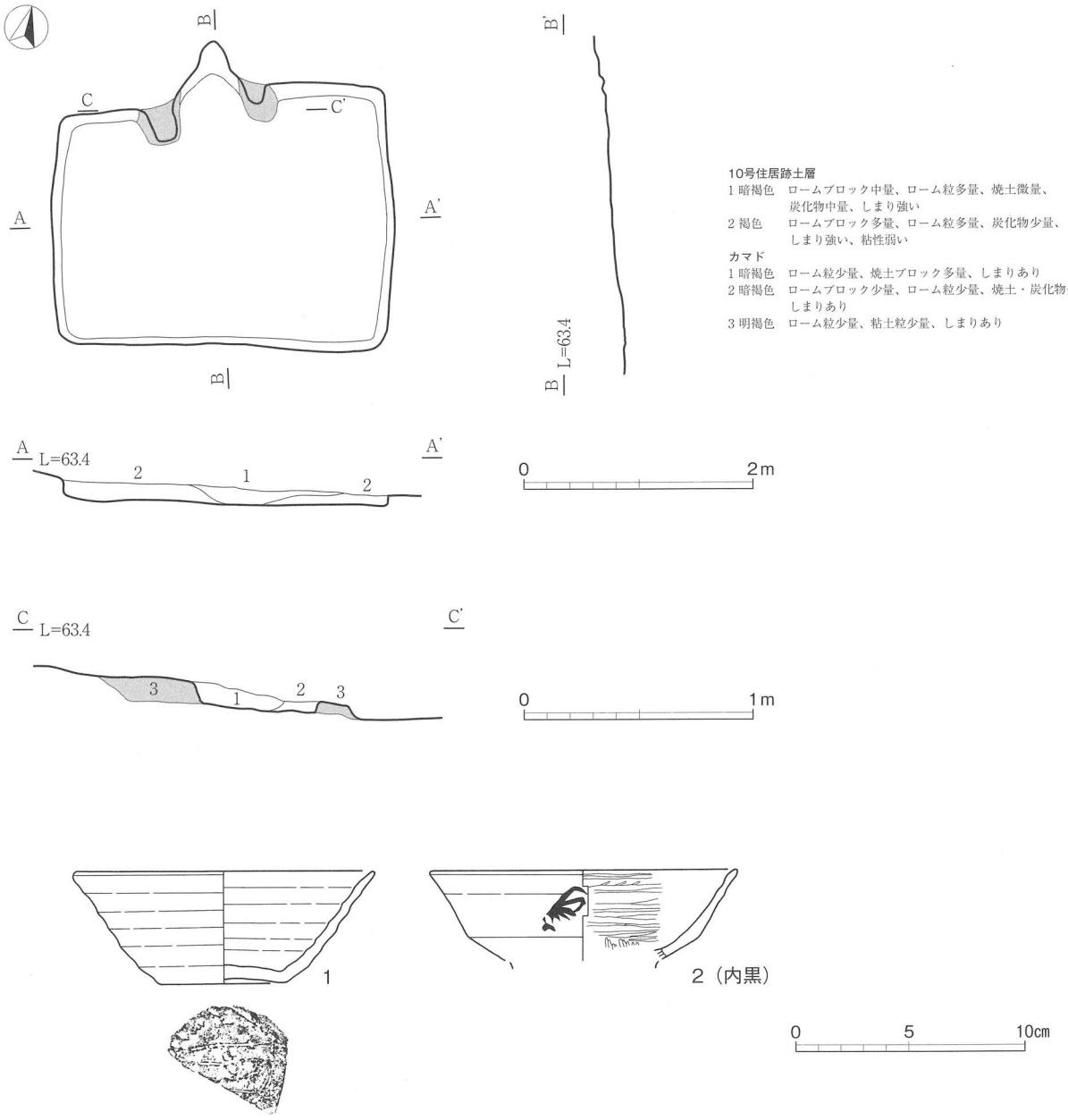
第25図　9号住居跡出土遺物

表9　9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	11.0 4.0 7.4	底部回転ヘラ切り無調整。底部小ヘラ記号「×」。	石英、チャート	良好	暗灰色	70%
2	須恵器 坏	12.9 4.6 7.4	底部回転ヘラ切り後周縁部オサエ。	長石、石英、白色岩片粒、海綿骨針、黒色融出粒	良好	暗青灰色	70%
3	須恵器 坏	(13.6) 4.5 8.1	底部回転ヘラ切り後無調整に近いオサエ。	長石、石英、チャート、海綿骨針	やや不良	灰白色	60%
4	須恵器 坏	12.3 4.5 7.9	底部回転ヘラ切り後無調整に近いオサエ。	長石粒、石英	不良	灰白色	70%
5	須恵器 坏	(12.4) 4.6 8.8	底部回転ヘラ切り離し。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート礫	普通	青灰色	80%
6	須恵器 高台付坏	－ － 6.5	底部片。底部回転ヘラケズリ後ヘラ記号「一」。内面使用痕あり。	長石、海綿骨針	普通	明灰色	
7	須恵器 盤	－ － 11.1	内面使用痕。外面高台内平滑化、転用硯か。	長石、チャート、海綿骨針	良好	灰色	70%
8	土師器 甕	(21.3) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ。	長石、石英、チャート	普通	にぶい褐色	

10号住居跡（第26図）

位置　A区の中央部D2グリッド、標高63.0m地点にある。　**規模と平面形**　南北方向2.20m、東西方向2.75mの長方形。　**主軸方向**　N－12°－W。　**壁**　壁は最高20cmの高さまで残存している。北壁は、カマドを挟んで左側が右側と比べて25cm程手前に突出している。　**床**　全体にやや硬化している。　**ピット**　主柱を持たない。　**カマド**　北壁中央やや西寄りにあり、両袖間の最大幅は約120cmあり、燃焼室の幅は約55cmある。　**覆土**　炭化物や焼土を含むロームブロックの多い土が堆積している。　**遺物**　覆土中から、9世紀中頃の須恵器坏と墨書文字の記された土師器内黒坏が出土している。須恵器の坏は底部径が小さく、ヘラ切り離し無調整で、「三」のヘラ記号が施されている。　**所見**　小型の主柱を持たないやや横長の竪穴住居で、出土遺物から9世紀中頃の住居跡と思われる。



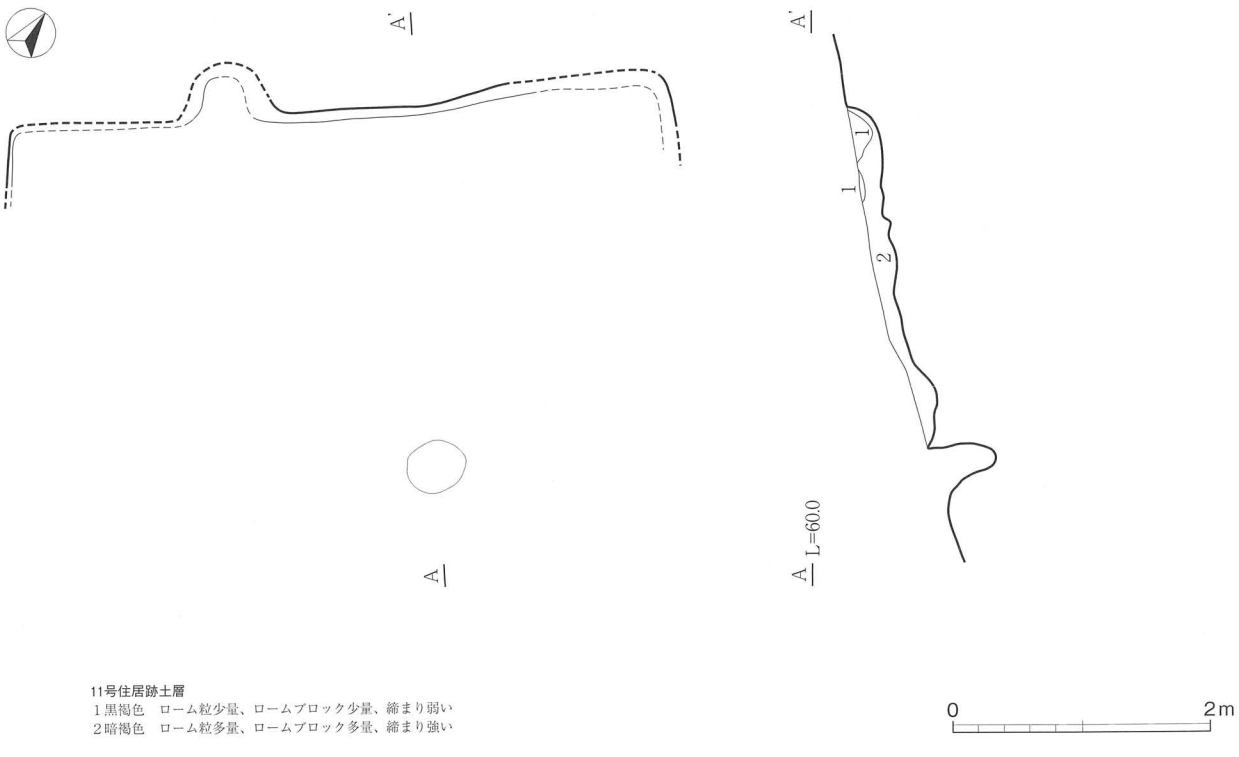
第26図　10号住居跡・出土遺物

表10　10号住居跡出土遺物観察表

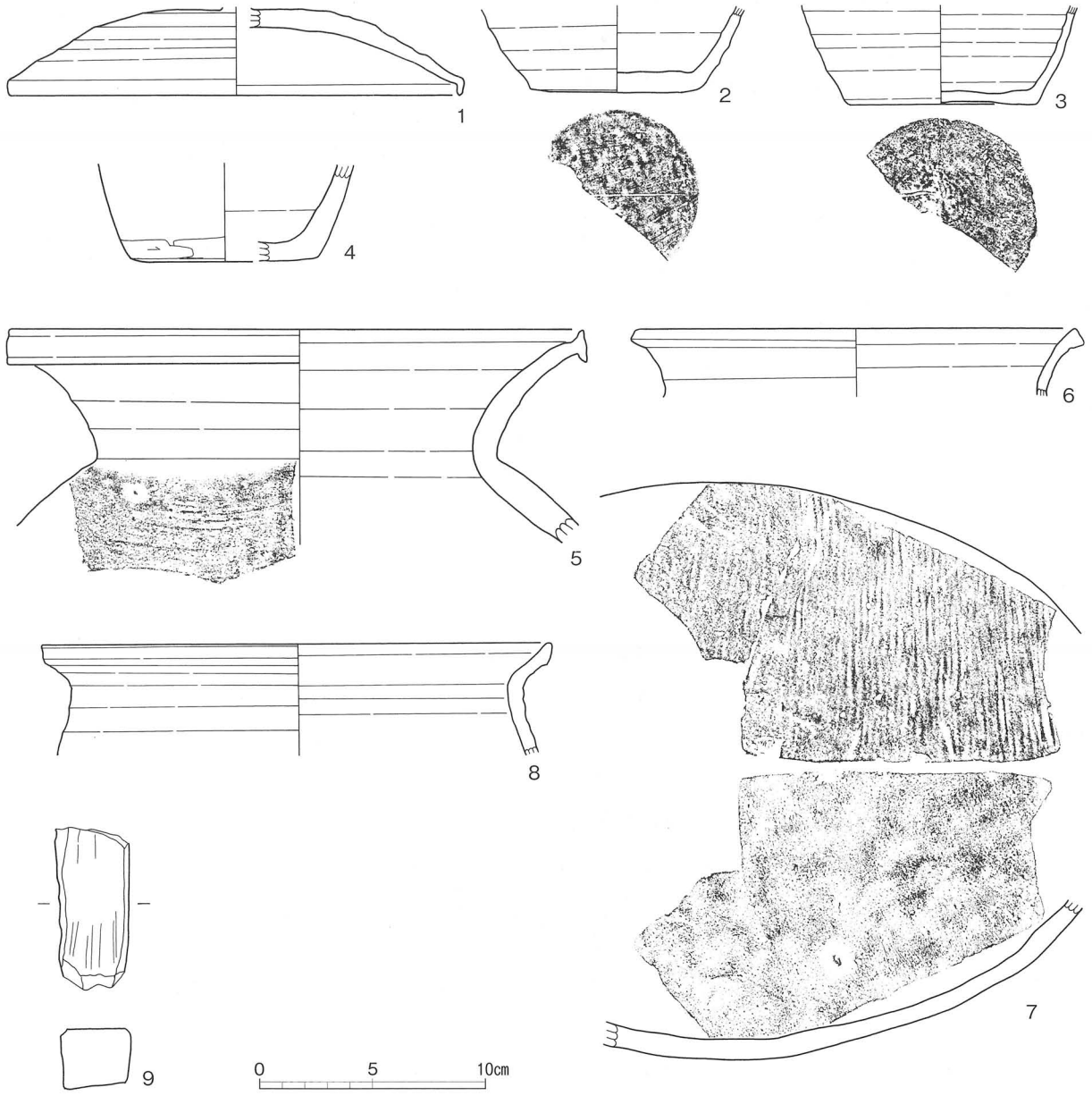
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.2) 5.0 (5.5)	底部回転ヘラ切り離し。底部小ヘラ記号「三」。	長石粒・礫、石英、黒色粒	普通	暗灰色	30%
2	土師器 坏	(13.4) － －	口縁部片。内面黒色処理・ミガキ。体部外面墨書文字「家？」。	石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	

11号住居跡（第27・28図）

位置　A区の中央部D２グリッド、標高58.5ｍ地点にある。　**規模と平面形**　傾斜面にあるため削平により南北方向不明、東西方向5.10ｍの北壁側掘り方の一部残存として確認された。　**主軸方向**　N－34°－W。　**壁**　壁は削平されて残存していない。　**床**　残存していない。　**ピット**　主柱としては確認できなかった。　**カマド**　カマドの掘り方の痕跡の可能性が考えられる突出が北壁側の掘り方中央西寄りに見られる。　**覆土**　残存していない。　**遺物**　11号住居跡と推定される付近の表土層から１から９の須恵器・土師器と石製品が出土している。　**所見**　竪穴住居跡の掘り方の一部が確認されているとして掲載した。出土遺物がこの遺構に伴うかどうかは、可能性はあるものの判然とはしていない。



第27図　11号住居跡



第28図　11号住居跡出土遺物

表11　11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	(20.3) – –	天井部回転ヘラケズリ。外面径17cmの重ね焼き痕、内面径9.8cmの重ね焼き痕。	長石、チャート礫、海綿骨針	良好	青灰色	25%
2	須恵器 坏	– – 7.4	底部一方向ヘラケズリ、ヘラ記号「一」。	長石、石英、海綿骨針、黒色融出粒	良好	暗灰色	50%
3	須恵器 坏	– – 8.3	底部回転ヘラ切り離し、ヘラ記号「廾」。	長石、チャート、海綿骨針微量	良好	灰色	30%

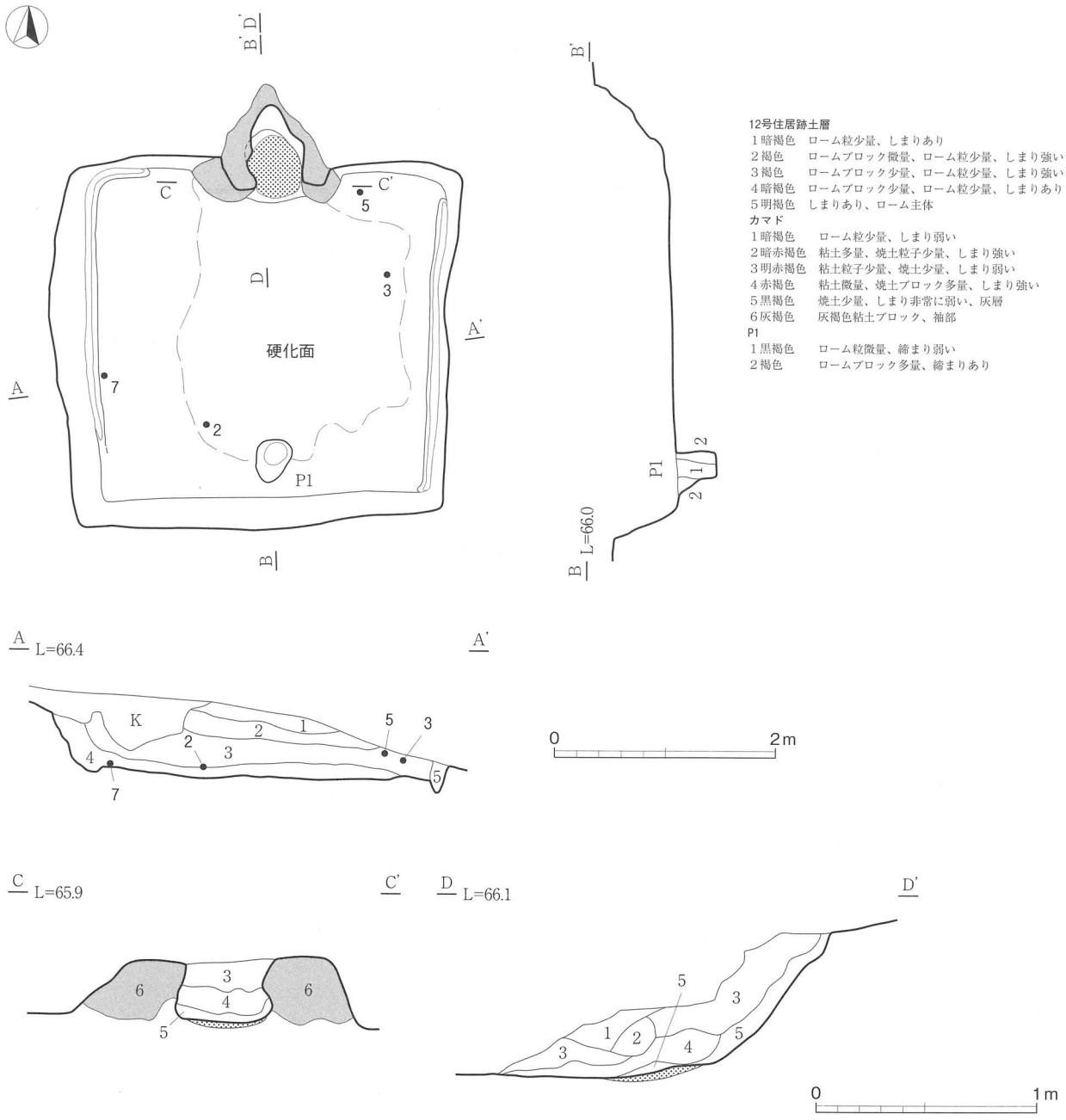
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	須恵器 壺	－ － (8.2)	底部片。体部外面ナデ、体部下端ヘラケズリ。	長石、石英	良好	暗灰色	
5	須恵器 甕	(25.6) － －	口縁部片。胴部外面横位平行叩き。	長石、海綿骨針	良好	オリーブ灰色	
6	須恵器 甕	－ － －	口縁部片。内外面ロクロナデ。	長石、海綿骨針、黒色融出粒	良好	灰色	
7	須恵器 横瓶	－ － －	胴部片。胴部外面平行叩き。	長石、海綿骨針、黒色融出粒	良好	灰色	
8	土師器 甕	(22.6) － －	口縁部片。ロクロ調整甕。	長石、石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	
9	石製品 砥石	長さ［7.2］cm、幅3.1cm、厚さ2.7cm、重さ［128.1］g、砂質ホルンフェルス製。					

12号住居跡（第29・30図）

位置　A区の中央部D1～E1グリッド、標高66.0m地点にある。　**規模と平面形**　南北方向2.90m、東西方向3.20mの僅かに横長の長方形。　**主軸方向**　N－3°－W。　**壁**　壁は上部が全体に崩されているようで、傾斜した状況である。傾斜した壁は最高70cmの高さまで残存している。　**床**　P1からカマド前面にかけてと住居東側が特に硬化している。　**ピット**　主柱は確認できなかった。P1は出入り口ピットと見られる。　**カマド**　北壁中央にあり、両袖間の最大幅は約135cmあり、燃焼室の幅は約60cmある。燃焼室から煙道部にかけての住居外への掘り込みは深く、焼成室が奥に入り、煙道に向かう奥壁の立ち上がりも幅が少し狭くやや長くなっている。　**遺物**　7の石製紡錘車は西壁際の床面から、他の須恵器の坏類は覆土中層から出土している。　**所見**　床上に4本の主柱を持たない、出入り口ピットだけのやや小振りな竪穴住居跡で、カマド全体が北壁に埋め込まれたように設置されており8世紀後半の中でも9世紀に近い段階かと思われる。出土遺物は覆土中からの出土であるものの、複数個ある須恵器の坏の底部径はまだ大きく、底部ヘラ切り後、ヘラでケズリ調整を行っている特徴がある。

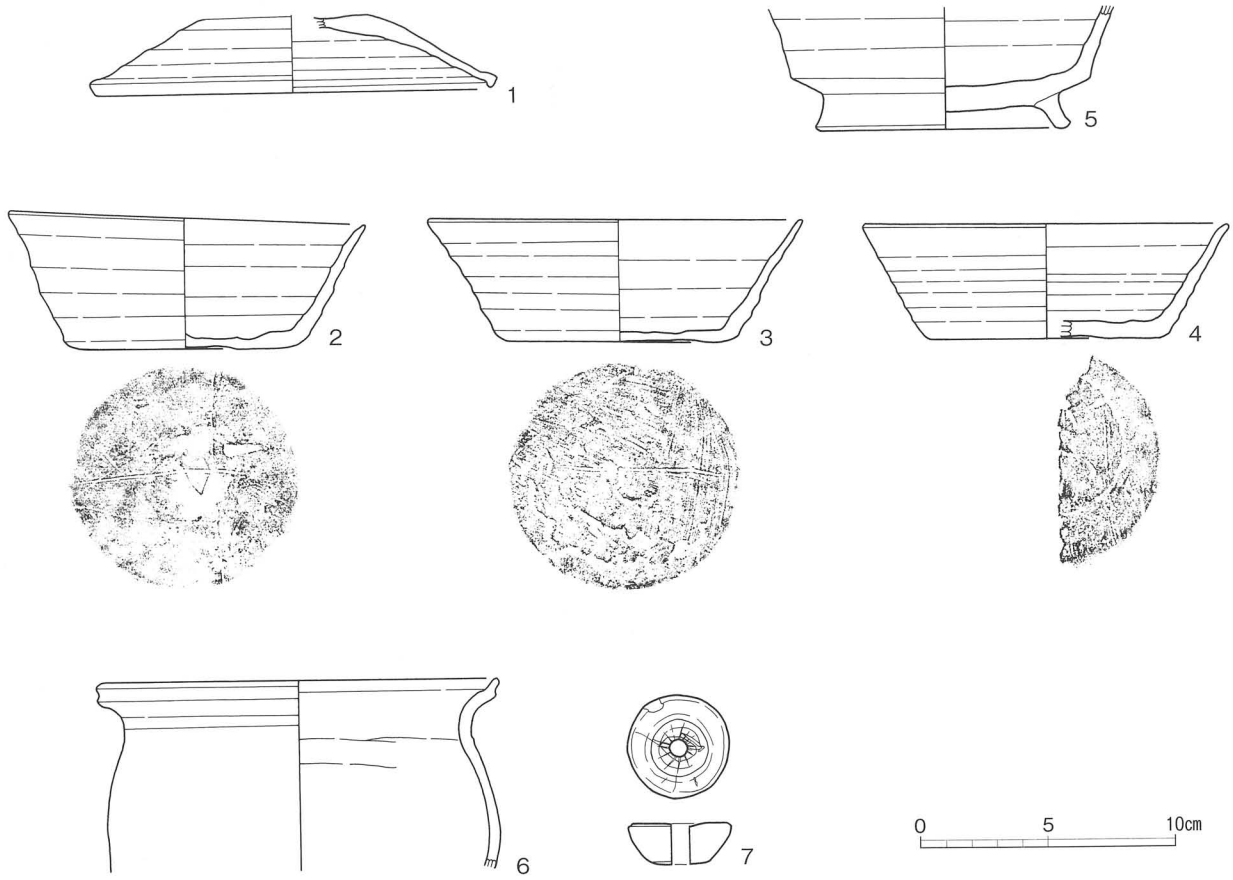
表12　12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	16.0 － －	外面径15cmの重ね焼き痕、内面径10cmの重ね焼き痕。内面に降灰痕あり、逆位焼成。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	青灰色	25%
2	須恵器 坏	14.0 5.2 8.3	底部回転ヘラ切り離し後ヘラケズリ、ヘラ記号「—」。	長石、チャート、海綿骨針微量	やや不良	褐灰色	80%
3	須恵器 坏	(14.6) 4.9 8.3	底部回転ヘラ切り離し後二方向弱いヘラケズリ。底部ヘラ記号「—」。	長石、石英、チャート、海綿骨針	不良	灰白色	60%
4	須恵器 坏	(14.4) 4.5 (9.0)	底部回転ヘラ切り離し。	長石、海綿骨針	普通	灰色	30%



第29図　12号住居跡

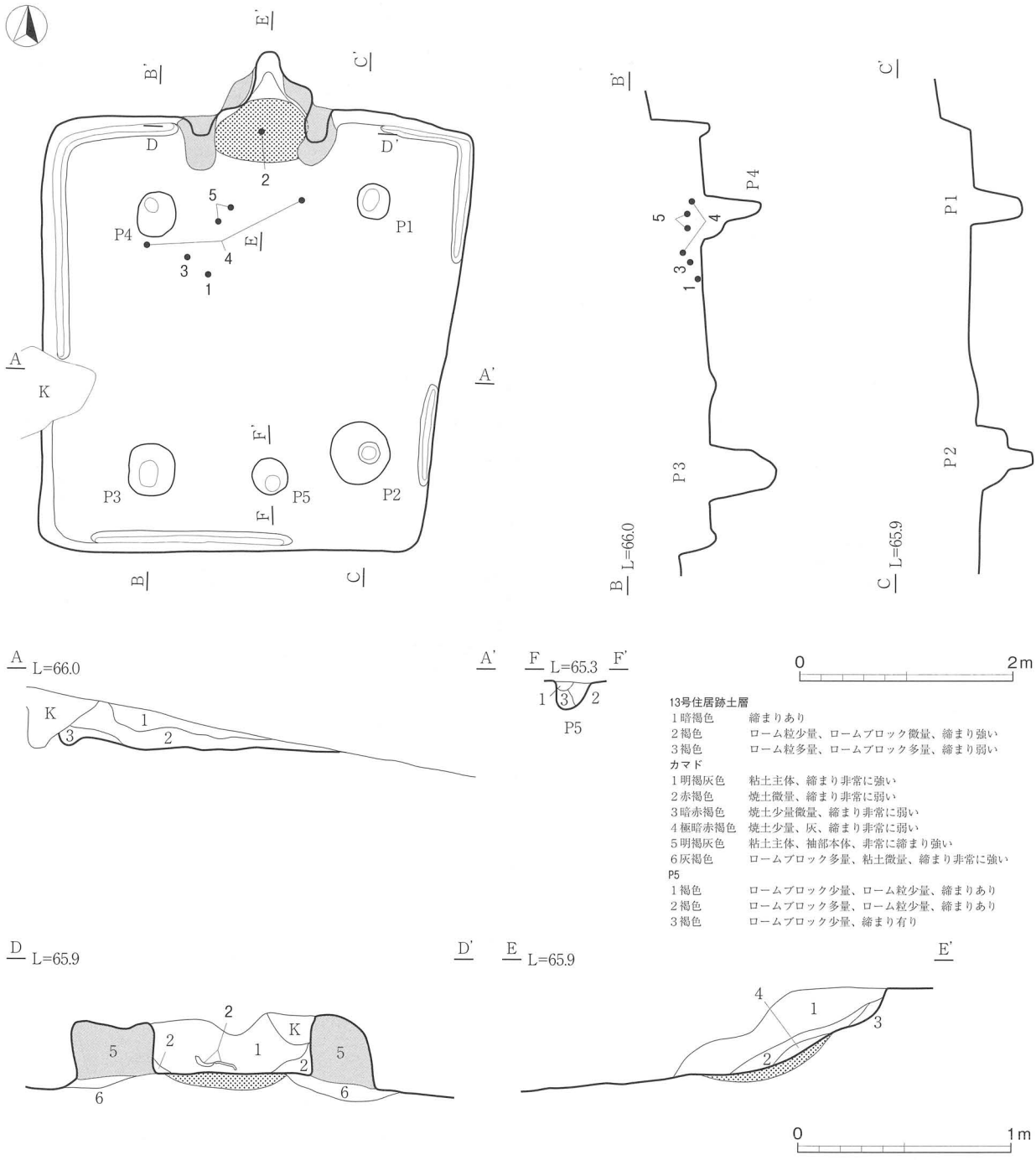
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	須恵器 高台付坏	－ － 9.9	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石礫、海綿骨針少量	普通	灰色	60%
6	土師器 甕	(15.6) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英多量、雲母微量	やや不良	橙色	
7	石製品 紡錘車	上径4.1cm、下径2.3cm、孔径0.7cm、厚さ1.6cm、重さ［37.591］g、滑石製。					完形



第30図　12号住居跡出土遺物

13号住居跡（第31・32図）

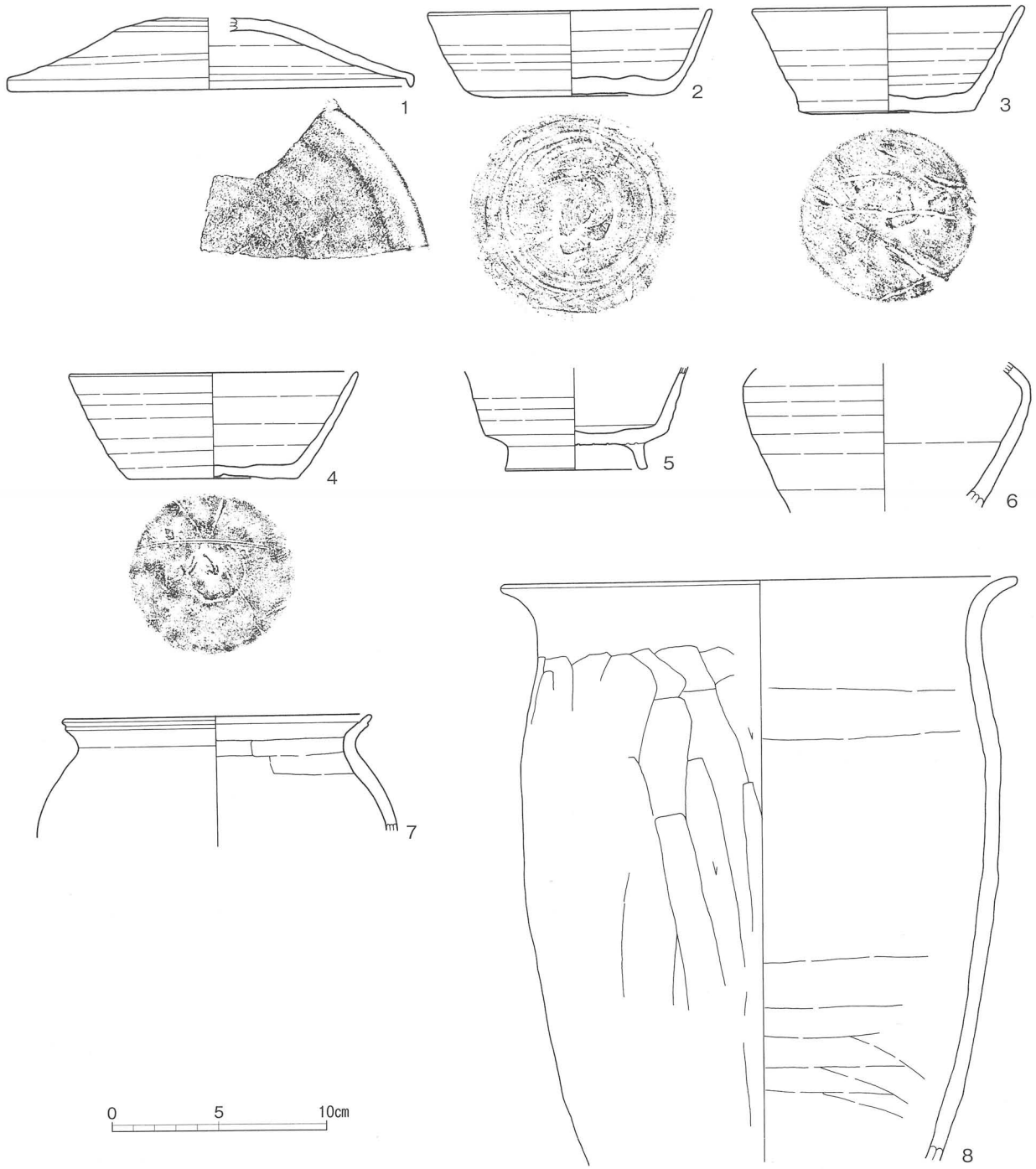
位置　A区の中央部E1グリッド、標高65.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.85ｍ、東西方向3.75ｍの方形。　**主軸方向**　N－3°－W。　**壁**　壁は最高48cmの高さまで残存している。　**床**　P5付近とカマド前面付近がやや硬化している。　**ピット**　5か所あり、P1～4は主柱穴、P5は出入り口ピットと見られる。　**カマド**　北壁中央にあり、両袖間の最大幅は約145cm、燃焼室の幅は約72cmある。両袖とも幅約30cm、高さ約30cmの灰褐色粘土のブロックとして残存している。燃焼室から煙道部は狭くなり緩やかに住居外へ立ち上がっている。　**覆土**　下層には締まりのある褐色土が堆積している。**遺物**　覆土から3・4の須恵器坏が出土し、カマド火床面から2の須恵器坏が出土している。　**所見**　カマド出土の器高がやや低く、底径がやや大きく底部周縁回転ヘラケズリの須恵器坏がやや古く、他の須恵器坏は8世紀後半のものと思われる。土師器の甕は、7のような口縁部を摘み上げる常総型系統の在地甕と、県央・県北に残存している口縁部が外反する長胴甕が見られる。



第31図　13号住居跡

表13　13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	(19.0) – –	外面口縁部に重ね焼き痕、内面中央にヘラ記号「—」。	長石、石英少量	良好	青灰色	30%
2	須恵器 坏	13.4 4.0 8.8	底部中央回転ヘラ切り離し無調整。底部周縁回転ヘラケズリ。底部弱いヘラ記号「＋」。	長石粒・礫、黒色粒	良好	灰色	80%



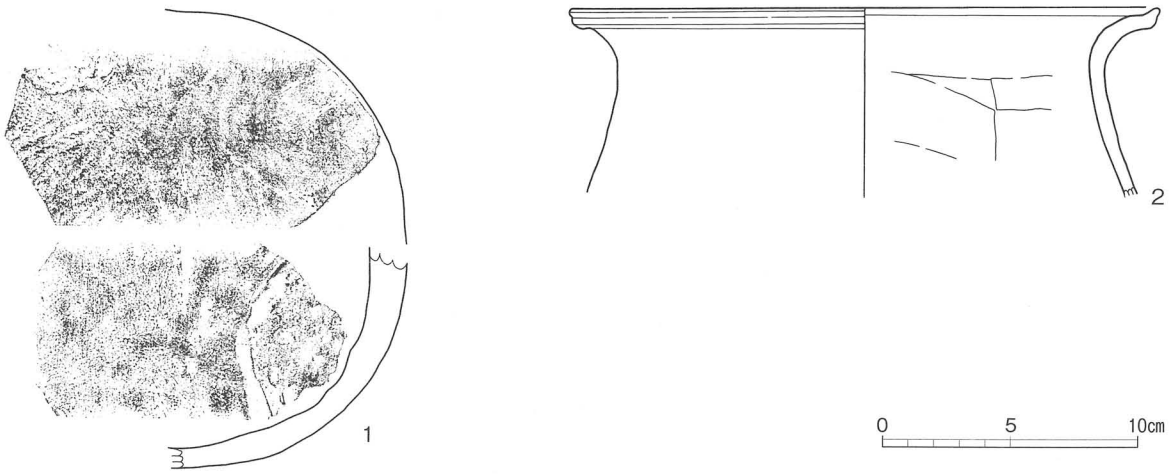
第32図　13号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 坏	12.9 5.0 8.2	底部回転ヘラ切り離し後オサエ。一部ヘラナデ。ヘラ記号「Z」。	長石礫、石英、海綿骨針	やや不良	明灰色	90%
4	須恵器 坏	13.4 5.0 7.9	底部回転ヘラ切り離し後オサエ。一部ヘラナデ。ヘラ記号「一」。	長石礫、チャート、海綿骨針	不良	灰色	80%

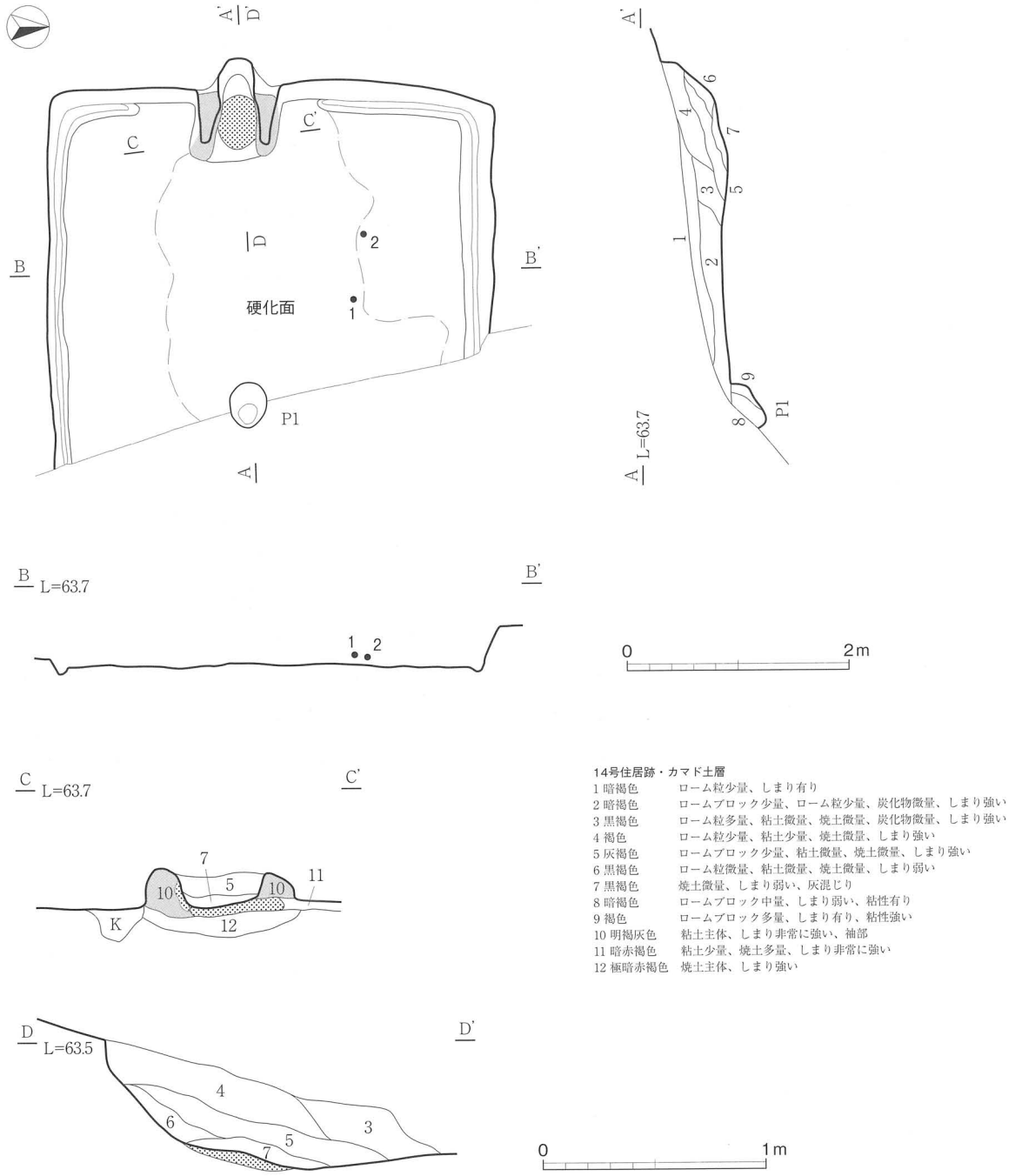
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	須恵器 高台付坏	－ － 6.6		長石礫、石英、海綿骨針	普通	灰色	50%
6	須恵器 小型短頸壺	－ － －	胴部片。胴部ロクロ調整。	長石、チャート	良好	青灰色	
7	土師器 甕	(14.5) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英多量、長石少量	やや不良	橙色	
8	土師器 甕	24.0 － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向のヘラケズリ。内面横方向のヘラナデ。	白色粒、海綿骨針	やや不良	にぶい橙色	70%

14号住居跡（第33・34図）

位置　Ａ区の中央部Ｅ２グリッド、標高63ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.80ｍ、東西方向は削平によって不明。　**主軸方向**　Ｎ－３°－Ｅ。　**壁**　壁は最高36cmの高さまで残存している。　**床**　カマド前面から出入り口ピットにかけてが特に硬化している。壁溝はカマド部分を除いて全周している。　**ピット**　１か所カマドの対面にあり、Ｐ１は出入り口ピットと見られる。　**カマド**　西壁中央南寄りにあり、両袖間の最大幅は約75cm、燃焼室の幅は約35cmある。袖部は長石礫を含む灰褐色粘土大ブロックを使用して構築されている。　**覆土**　締まりのある暗褐色土を主体として堆積している。　**遺物**　覆土から１の須恵器横瓶、２の土師器甕が出土している。　**所見**　出土している土師器の甕は新治産で、８世紀前半頃のものと思われる。



第33図　14号住居跡出土遺物



14号住居跡・カマド土層
1 暗褐色　ローム粒少量、しまり有り
2 暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒少量、炭化物微量、しまり強い
3 黒褐色　ローム粒多量、粘土微量、焼土微量、炭化物微量、しまり強い
4 褐色　ローム粒少量、粘土少量、焼土微量、しまり強い
5 灰褐色　ロームブロック少量、粘土微量、焼土微量、しまり強い
6 黒褐色　ローム粒微量、粘土微量、焼土微量、しまり弱い
7 黒褐色　焼土微量、しまり弱い、灰混じり
8 暗褐色　ロームブロック中量、しまり弱い、粘性有り
9 褐色　ロームブロック多量、しまり有り、粘性強い
10 明褐灰色　粘土主体、しまり非常に強い、袖部
11 暗赤褐色　粘土少量、焼土多量、しまり非常に強い
12 極暗赤褐色　焼土主体、しまり強い

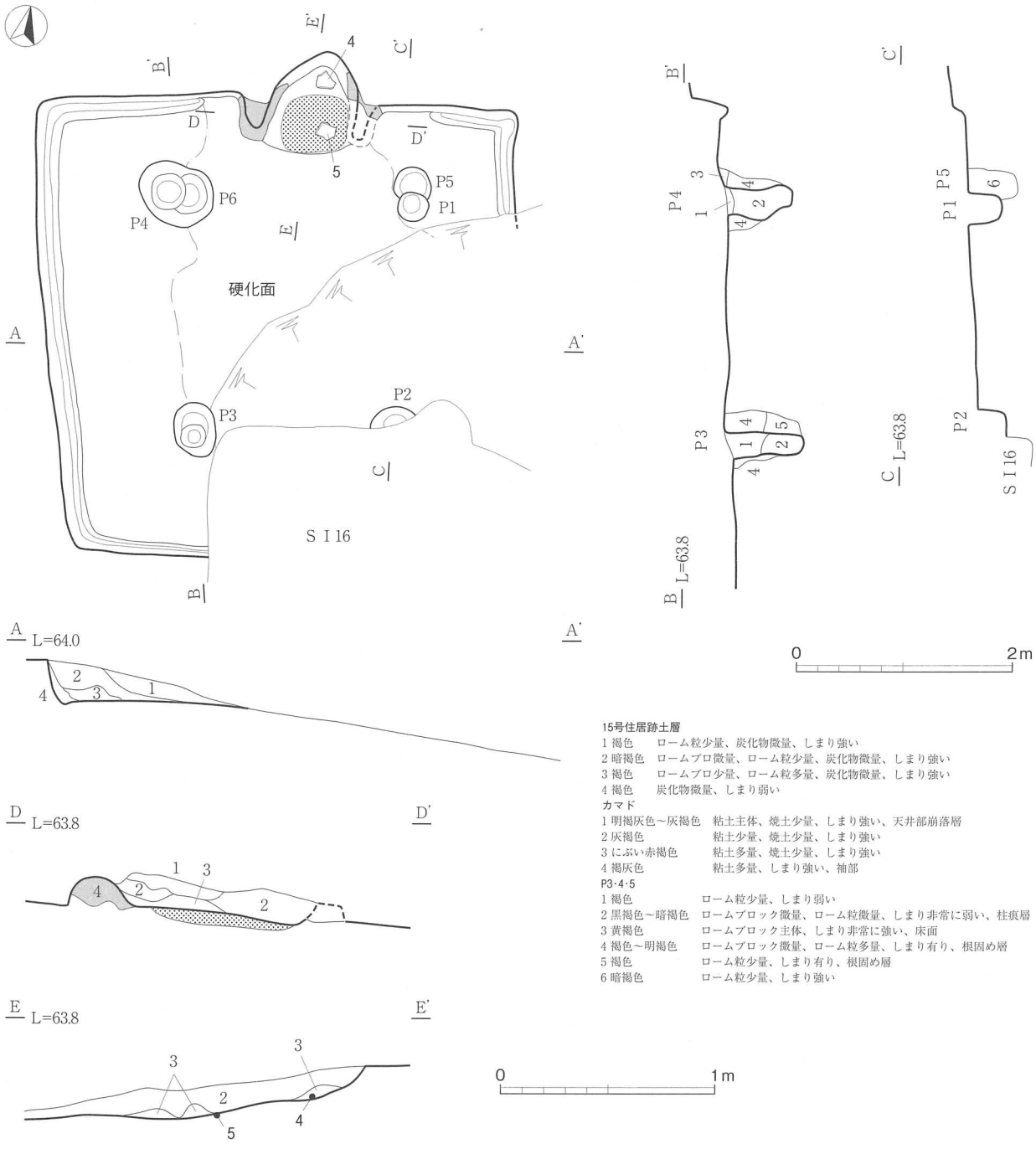
第34図　14号住居跡

表14　14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 横瓶	－ － －	体部片。体部外面平行叩き後ナデ。	白色岩片粒、金雲母微粒	良好	暗灰色	
2	土師器 甕	(23.0) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	良好	にぶい橙色	

１５号住居跡（第 35・36 図）

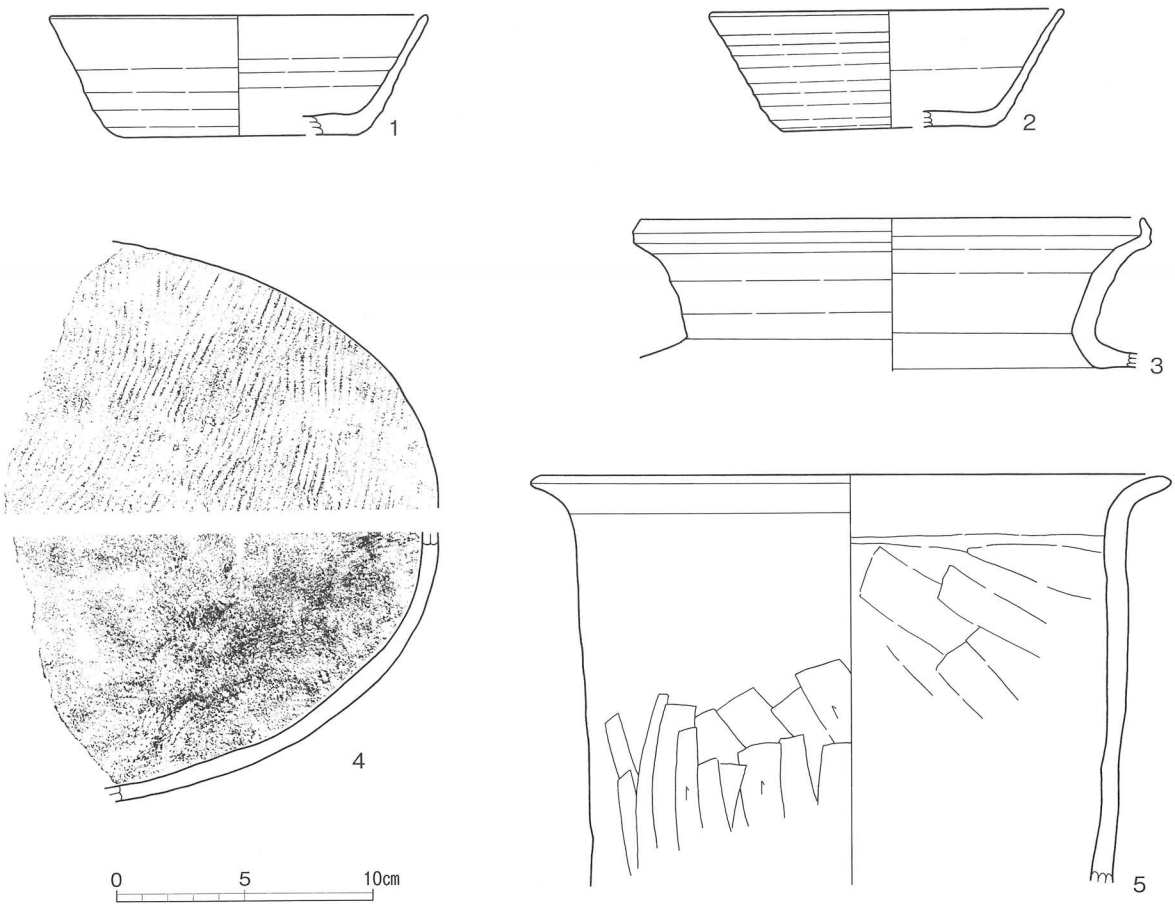
位置　Ａ区の中央部Ｅ１～２グリッド、標高 63.5 ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向 4.20 ｍ、東西方向 4.40 ｍのほぼ方形。　**重複関係**　16 号住居跡に南東部を壊されている。　**主軸方向**　Ｎ－27°－Ｗ。　**壁**　壁は最高 40㎝の高さまで残存している。　**床**　住居の中央部付近が特に硬化している。　**ピット**　６か所あり、Ｐ１～６は主柱穴と考えられる。重複するＰ１はＰ５を切っておりＰ４はＰ６を切っている。　**カマド**　北壁中央にあり、両袖間の最大幅は約 135㎝、燃焼室の幅は約 80㎝ある。袖部は多量の粘土中ブロックと黒褐色土小ブロックの混合土で構築されている。　**覆土**　炭化物を僅かに含む褐色土を主体としており、



15号住居跡土層
1 褐色　ローム粒少量、炭化物微量、しまり強い
2 暗褐色　ロームブロ微量、ローム粒少量、炭化物微量、しまり強い
3 褐色　ロームブロ少量、ローム粒多量、炭化物微量、しまり強い
4 褐色　炭化物微量、しまり弱い
カマド
1 明褐灰色～灰褐色　粘土主体、焼土少量、しまり強い、天井部崩落層
2 灰褐色　粘土少量、焼土少量、しまり強い
3 にぶい赤褐色　粘土多量、焼土少量、しまり強い
4 褐灰色　粘土多量、しまり強い、袖部
P3・4・5
1 褐色　ローム粒少量、しまり弱い
2 黒褐色～暗褐色　ロームブロック微量、ローム粒微量、しまり非常に弱い、柱痕層
3 黄褐色　ロームブロック主体、しまり非常に強い、床面
4 褐色～明褐色　ロームブロック微量、ローム粒多量、しまり有り、根固め層
5 褐色　ローム粒少量、しまり有り、根固め層
6 暗褐色　ローム粒少量、しまり強い

第 35 図　15 号住居跡

住居中央部床面上には、焼土の堆積が見られる。 **遺物**　カマド覆土下層から４の須恵器横瓶と５の土師器甕が出土している。　**所見**　四本主柱穴を持つ住居跡で、上屋を支える柱を据え変えているものと思われる。出土遺物は全体に８世紀中～後半頃のものかと思われる。



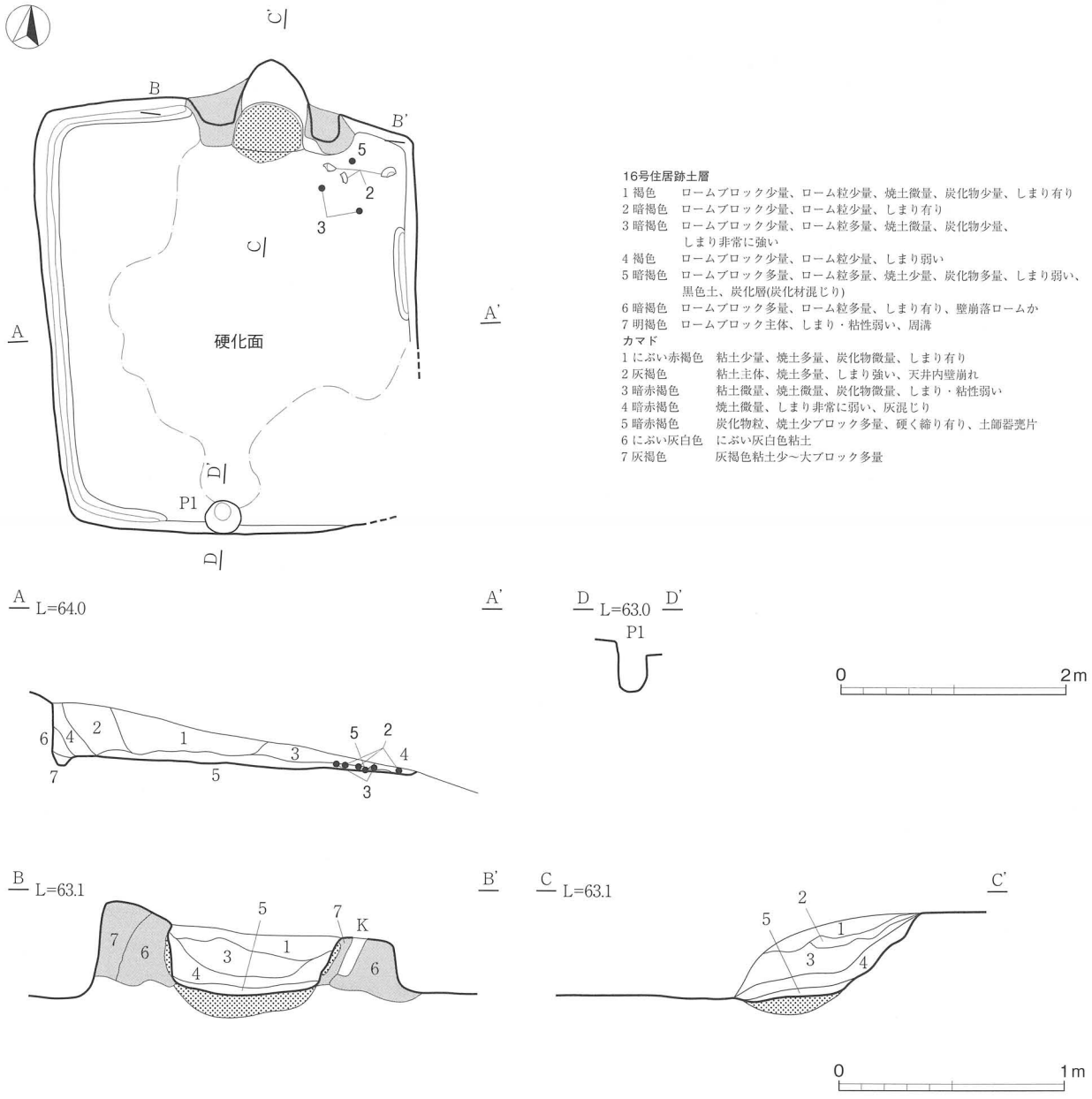
第 36 図　15 号住居跡出土遺物

表 15　15 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(14.8) 4.8 (9.0)	口縁部片。底部から体部外面濃緑色自然釉。	長石、黒色小粒	良好	明灰色	
2	須恵器 坏	(13.9) 4.7 (8.2)	口縁部片。底部ヘラケズリか。	長石、石英、黒色小粒	普通	灰色	
3	須恵器 甕	(20.4) － －	口縁部片。口縁部内外面ロクロナデ。	長石粒	良好	暗灰色	
4	須恵器 横瓶	－ － －	胴部片。外面平行叩き。内面掌圧痕。	石英、白色粒	良好	灰赤色	
5	土師器 甕	(25.1) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英、チャート、海綿骨針	普通	にぶい暗褐色	

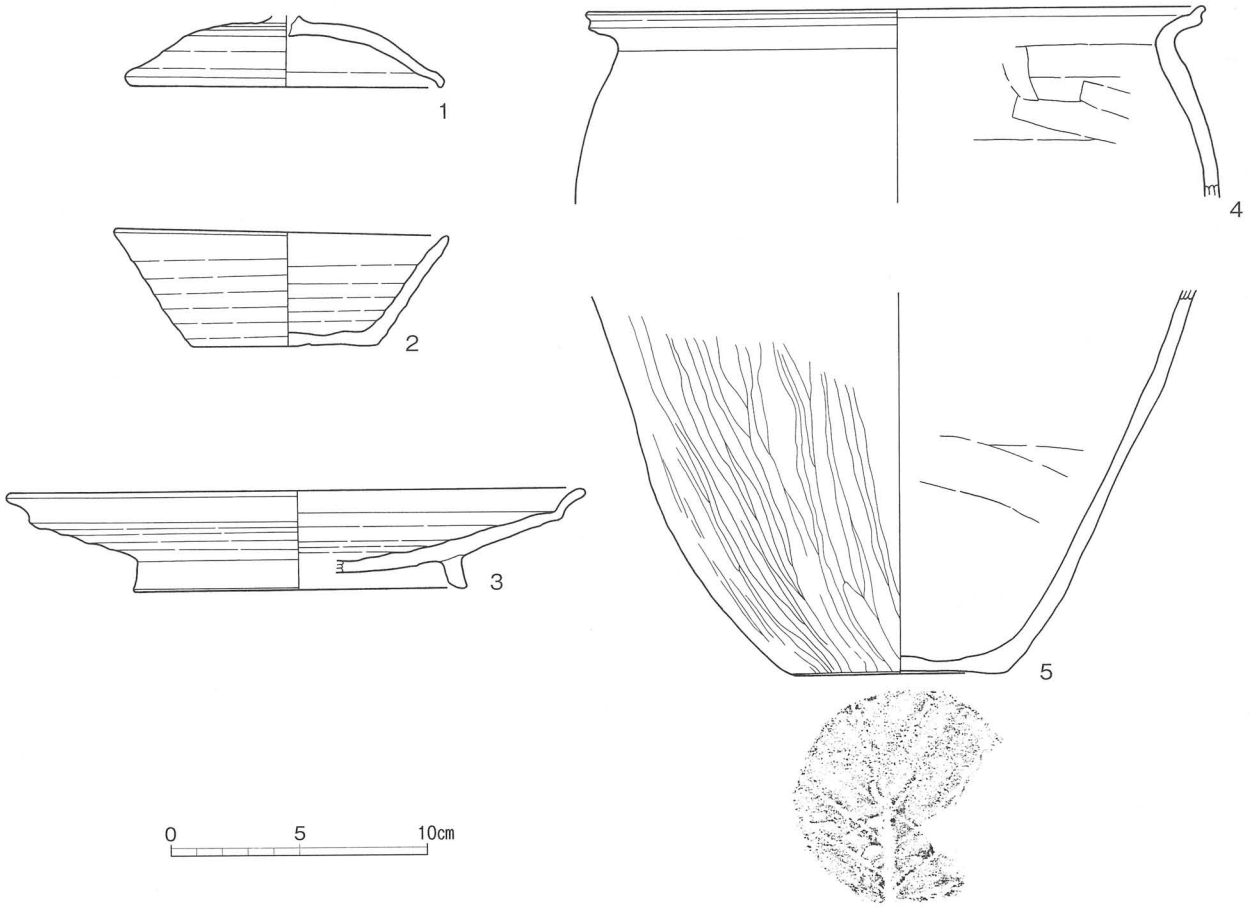
１６号住居跡（第 37・38 図）

位置　Ａ区の中央部Ｅ１～２グリッド、標高 63.0 ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向 3.70 ｍ、東西方向 3.10 ｍの縦長長方形。　**重複関係**　15 号住居跡の南東部を壊している。　**主軸方向**　Ｎ－13°－Ｗ。　**壁**　壁は最高 52cmの高さまで残存している。　**床**　住居の北西、南西、南東の隅部付近を除いて全体に硬化している。　**ピット**　Ｐ１の１か所あり、出入り口ピットと考えられる。　**カマド**　北壁中央部東寄りにある。両袖間の最大幅は約 135cm、燃焼室の幅は約 64cmある。袖部はにぶい灰白色粘土で構築され、両袖の基底部の幅は 34 ～ 36cmで、高さは右袖で 24cmまで残存している。　**覆土**　最下層の暗褐色土には炭化物や



第 37 図　16 号住居跡

炭化材片を含んでいる。 **遺物**　カマド右脇覆土下層から２の須恵器坏と５の土師器甕が出土している。 **所見**　四本主柱穴を持つ15号住居跡を壊す無柱の縦長長方形の住居跡で、出土遺物から見て８世紀後葉頃の住居跡と考えられる。



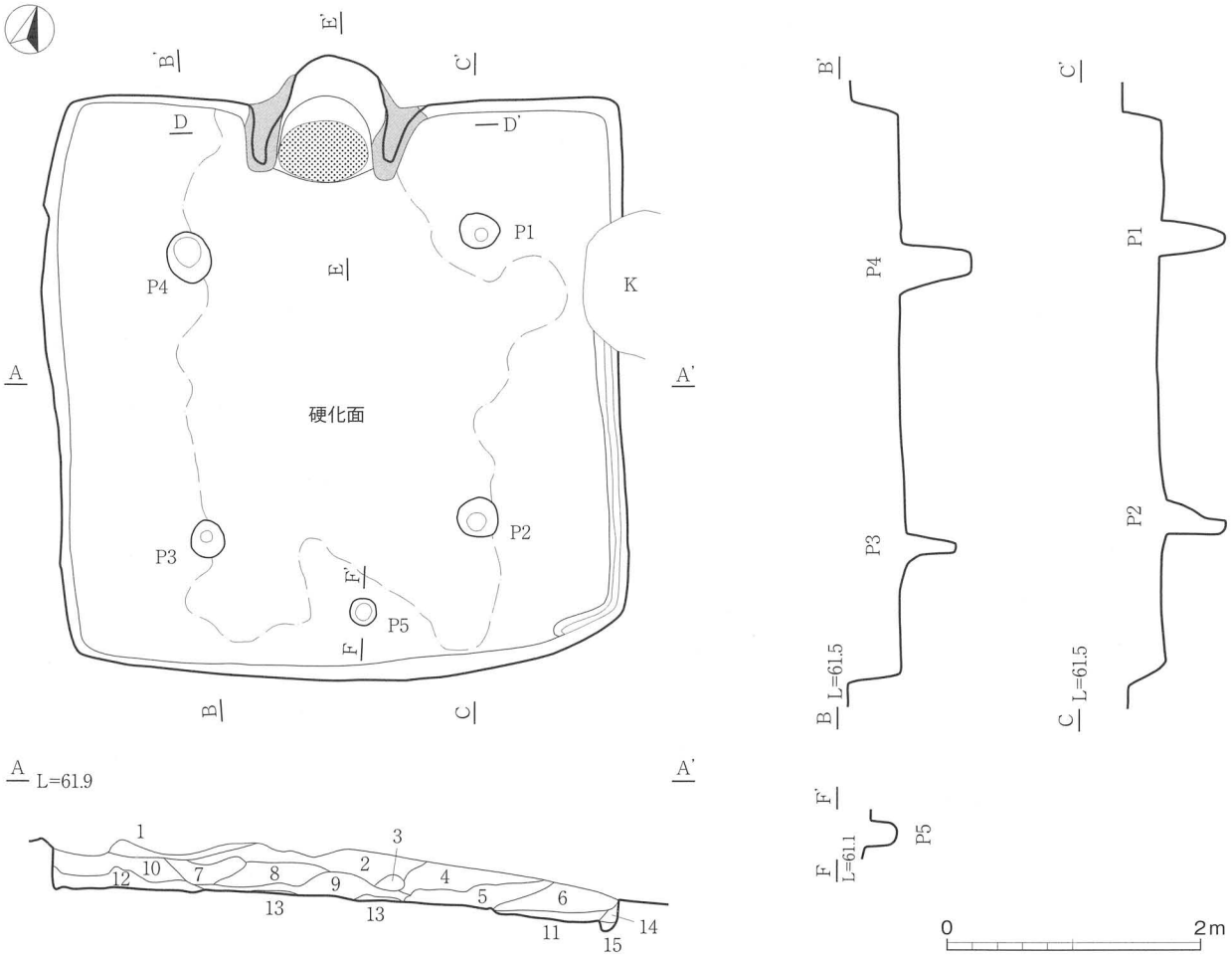
第38図　16号住居跡出土遺物

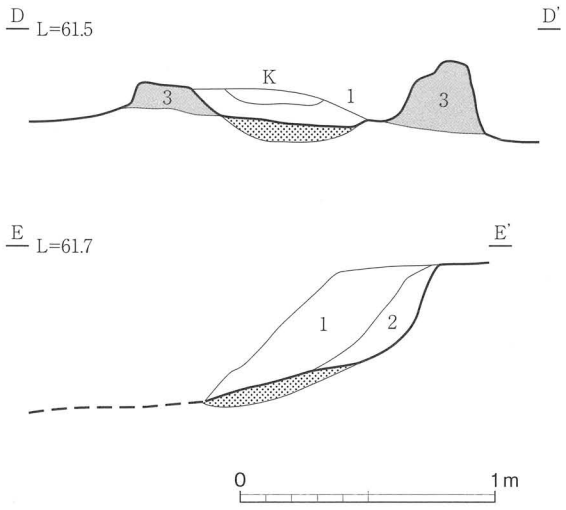
表16　16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	(12.4) – –	やや小振りな蓋で、逆位焼成により、内面口縁部に淡い緑色自然釉が付着する。	長石、黒色粒小量	良好	明灰色	25%
2	須恵器 坏	(13.0) 4.7 7.2	底部回転ヘラ切り無調整。ロクロ右回転。	長石礫、チャート、海綿骨針	普通	明青灰色	70%
3	須恵器 盤	(22.6) 4.0 (13.0)	内外面ロクロナデ。	長石礫、海綿骨針	普通	青灰色	50%
4	土師器 甕	(24.0) – –	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	長石、石英	良好	橙色	
5	土師器 甕	– – 8.3	胴下半部片。底部木葉痕胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	長石、石英、雲母	やや不良	橙色	

17号住居跡（第39・40図）

位置　Ａ区の中央部南寄りのＥ２グリッド、標高61.5ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向4.40ｍ、東西方向4.30ｍのほぼ方形。　**主軸方向**　Ｎ－22°－Ｗ。　**壁**　壁は最高40cmの高さまで残存している。

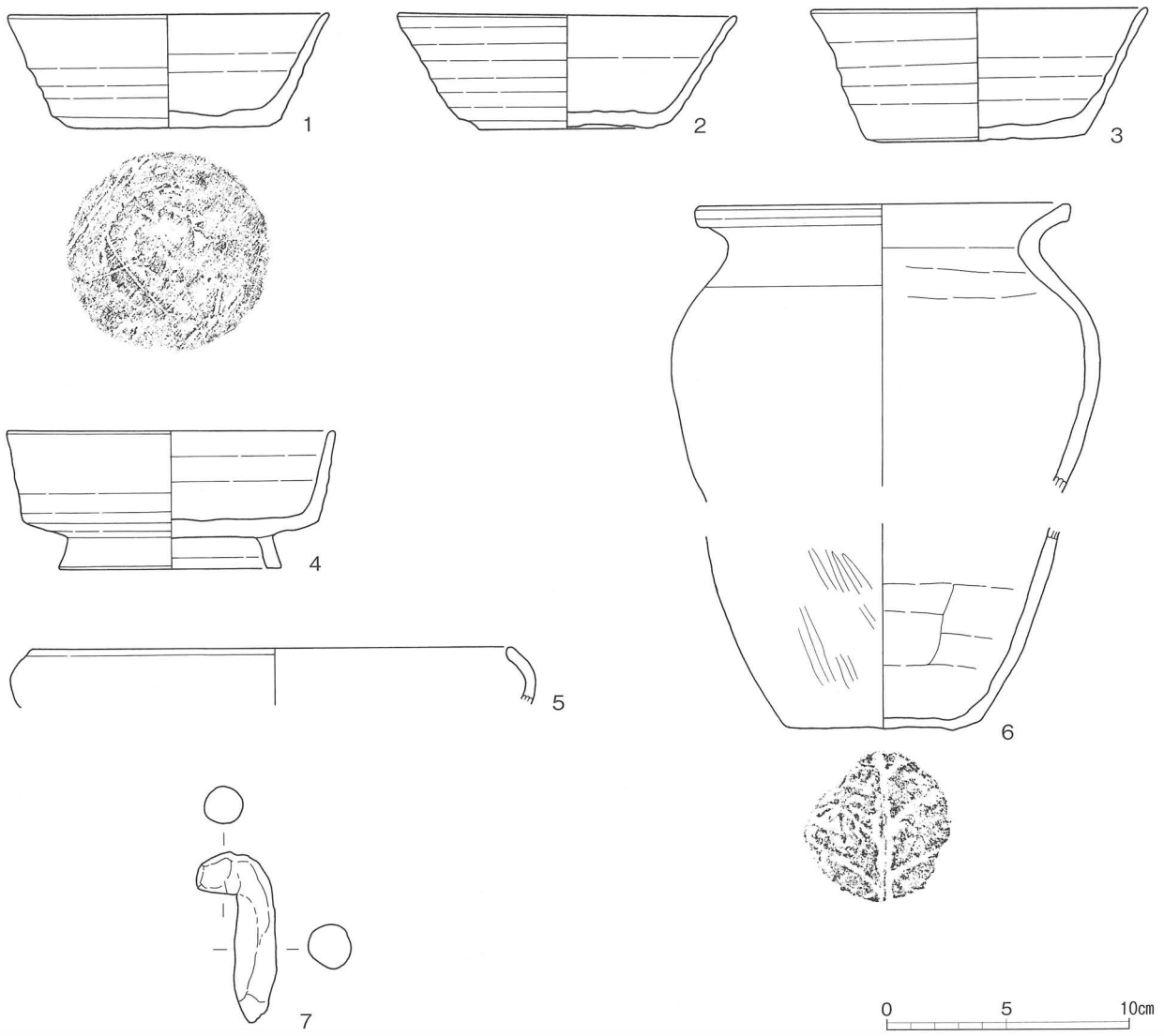




17号住居跡土層
1暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、粘土少量、炭化物少量、鹿沼パミスブロック少量、締まりあり
2明褐色　ロームブロック非常に多量、鹿沼パミスブロック微量、締まり強い
3明褐色　ロームブロック非常に多量、鹿沼パミスブロック微量、締まり強い
4褐色　ロームブロック少量、炭化物少量、締まり強い
5褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、鹿沼パミスブロック微量、締まり強い
6褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、焼土微量、締まりあり
7暗褐色　ロームブロック中量、ローム粒多量、炭化物少量、鹿沼パミス粒少量、締まり強い、粘性あり
8暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物少量、鹿沼パミス粒微量、締まり強い
9暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒多量、炭化物中量、鹿沼パミス粒少量、締まり強い
10暗褐色　ローム大ブロック多量、焼土微量、炭化物微量、鹿沼パミスブロック中量、締まりあり
11暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒少量、焼土中量、締まりあり
12暗褐色　ロームブロック非常に多い、締まり弱い、粘性強い
13暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒少量、焼土微量、鹿沼パミス粒微量、締まりあり
14暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、締まりあり、粘性強い、壁体痕か
15褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、締まり弱い、粘性強い、周溝
カマド
1明褐色　ロームブロック微量、粘土主体、焼土多量、炭化物微量、締まり強い、天井部落下層
2暗褐色　ロームブロック多量、炭化物微量、締まりあり、粘性強い
3明褐色　粘土主体、締まり非常に強い、袖部

第39図　17号住居跡

床　住居の中央部、カマドの前面から出入り口ピット付近にかけて特に硬化している。　**ピット**　５か所あり、Ｐ１からＰ４は主柱穴で、Ｐ５は出入り口ピットと考えられる。　**カマド**　北壁中央部にあり、両袖間の最大幅は約 140cm、燃焼室の幅は約 65cmある。袖部は粘土で構築され、右袖の基底部の幅は 46cmで、高さは 29cmまで残存している。　**覆土**　ロームブロックの含有が多い覆土で、炭化物や焼土も含まれている。　**遺物**　覆土中から、須恵器の坏や高台付坏、土師器の甕等が出土している。　**所見**　四本主柱穴を持つ中型の方形住居跡で、出土遺物から見て８世紀後半頃の住居跡と考えられる。



第 40 図　17 号住居跡出土遺物

表17　17号住居跡出土遺物観察表

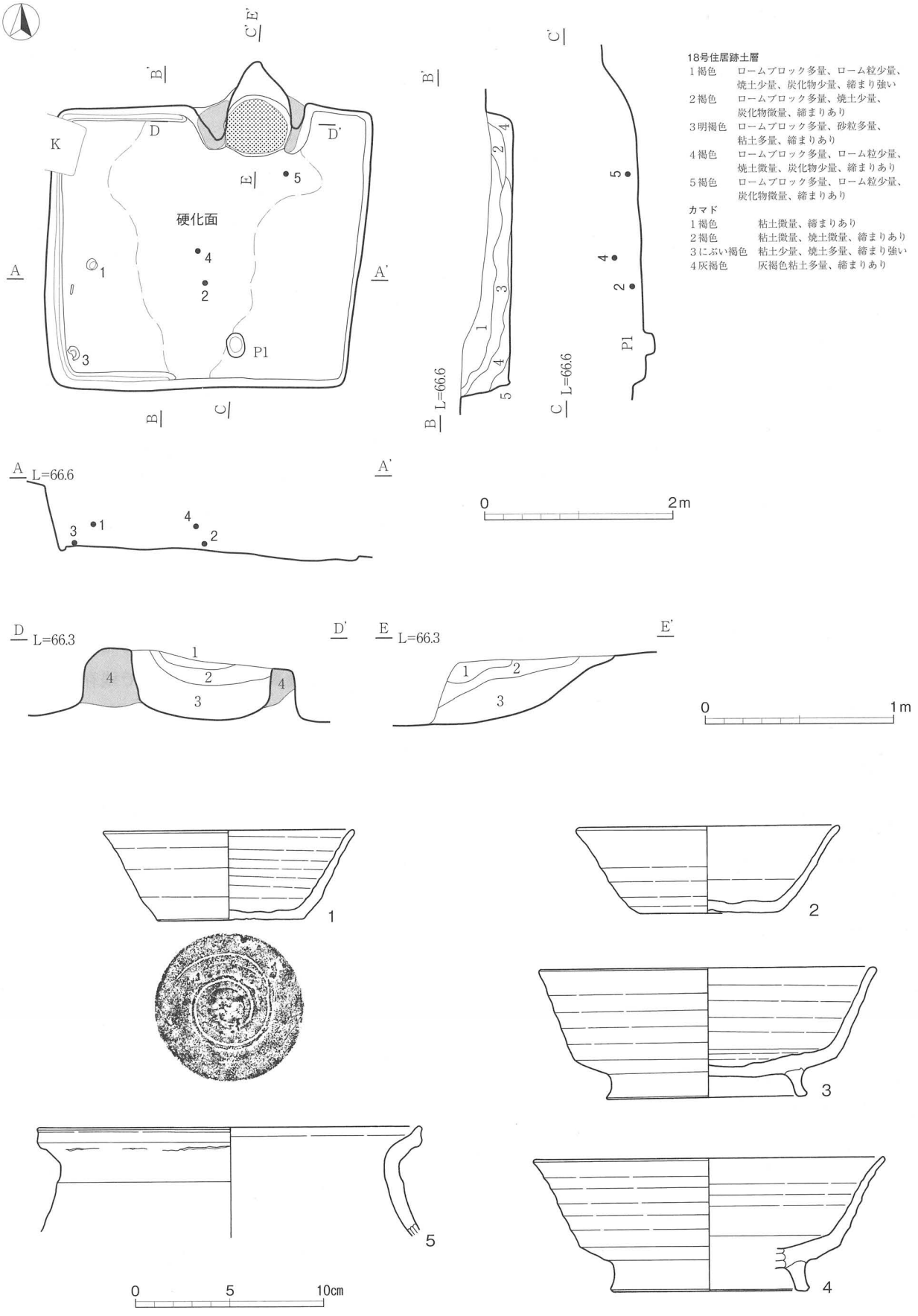
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.4) 4.7 8.4	底部回転ヘラ切り離し後、一方向ヘラケズリ。	灰白色岩片、海綿骨針	やや不良	灰色	60%
2	須恵器 坏	(14.2) 4.9 7.1	底部回転ヘラ切り離し、無調整。	白色粒、チャート、海綿骨針	普通	暗灰色	30%
3	須恵器 坏	14.0 5.5 8.6	底部回転ヘラ切り離し後、一方向ヘラケズリ。	白色粒、石英、海綿骨針、チャート	やや不良	明灰色	60%
4	須恵器 高台付坏	(13.7) 5.8 9.3	底部回転ヘラケズリ、後高台貼り付け。	白色礫、チャート、海綿骨針	良好	暗灰色	60%
5	須恵器 仏鉢	(20.0) － －	口縁部片。	石英、海綿骨針	やや不良	褐灰色	
6	土師器 甕	16.0 － 8.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半部ナデ、下半部ミガキ、内面横方向のヘラナデ。	長石、石英、雲母	普通	にぶい橙色	40%
7	土製品 不明土製品	長さ7.1cm、幅1.65cm、厚さ1.85cm、重さ26.9g。		長石、石英、角閃石	普通	明褐色	

18号住居跡（第41図）

位置　A区の中央部北西寄りのD1グリッド、標高66.0m地点にある。　**規模と平面形**　南北方向2.85m、東西方向3.20mの横長長方形。　**主軸方向**　N－2°－E。　**壁**　壁は最高65cmの高さまで残存している。**床**　住居の中央部の左寄りに当たる、カマドの前面から出入り口ピット付近にかけてが特に硬化している。壁溝は住居の左側半分については明瞭に残存している。　**ピット**　1か所あり、P1は出入り口ピットと考えられる。　**カマド**　北壁中央東寄りにあり、両袖間の最大幅は約130cm、燃焼室の幅は約69cmある。袖部は灰褐色粘土で構築され、左袖の基底部の幅は30cmで、高さは28cmまで残存している。　**覆土**　ロームブロックを多く含む褐色土を主体としている。　**遺物**　覆土中から、須恵器の坏や高台付坏、土師器の甕等が出土している。1の須恵器坏はほぼ完形で、底部調整は回転ヘラ切り無調整である。　**所見**　出土遺物から見て9世紀前葉頃の住居跡と考えられる。

表18　18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.4 4.8 7.8	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	海綿骨針、白色粒	普通	灰色	ほぼ完形
2	須恵器 坏	14.0 4.6 7.5	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	白色粒、石英、角閃石、海綿骨針	普通	灰色	25%
3	須恵器 高台付坏	18.0 6.9 10.6	底部回転ヘラケズリ、後高台貼り付け。	白色粒、角閃石、石英	良好	灰色	50%

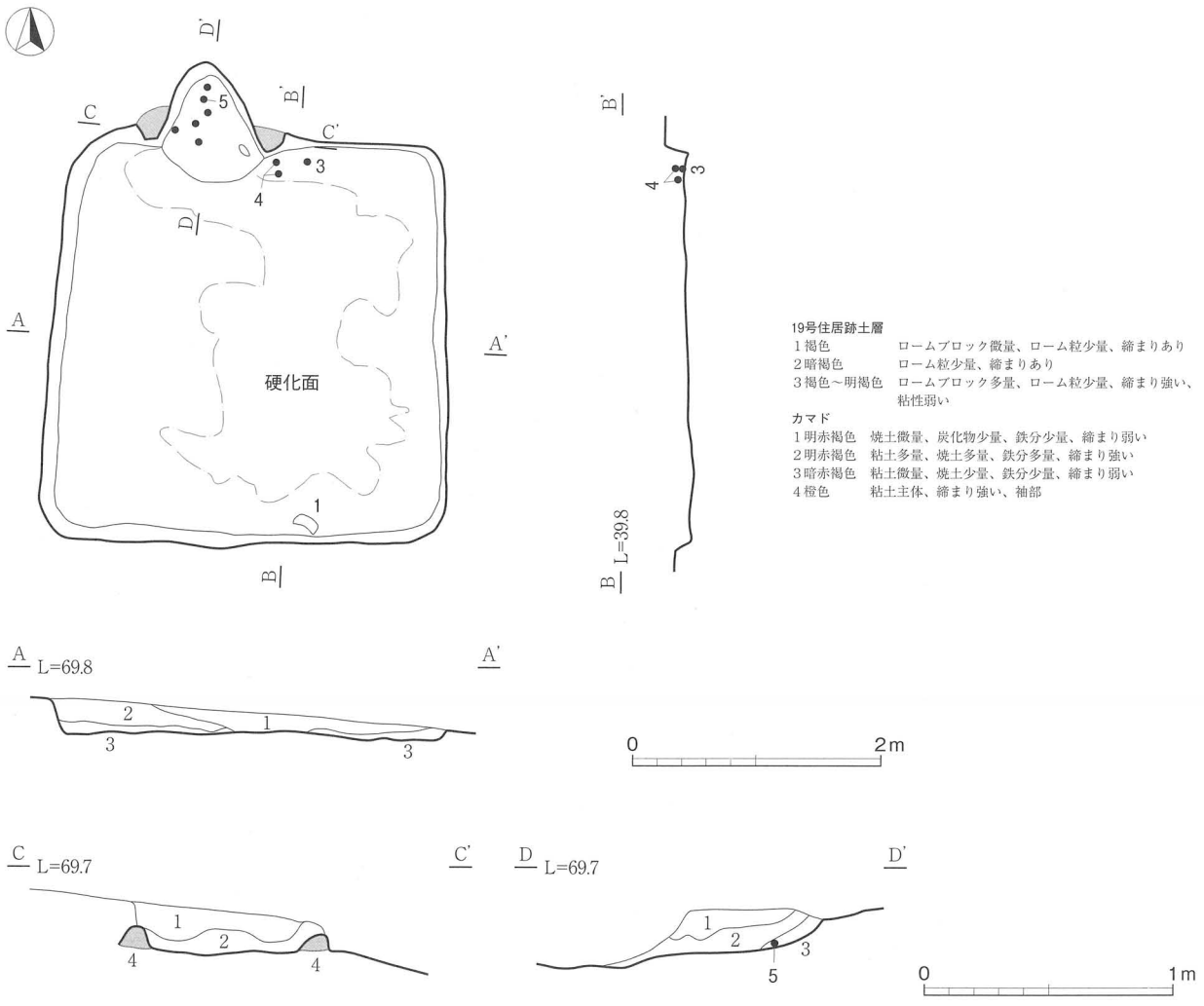


第41図　18号住居跡・出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	須恵器 高台付坏	(18.5) (7.1) (10.3)	底部回転ヘラケズリ、後高台貼り付け。	石英、角閃石、海綿骨針、白色粒	良好	灰色	10%
5	土師器 甕	(20.4) － －	口縁部～体部1/4片。口縁部ヨコナデ。内外面摩耗。	石英、白色粒、長石、雲母	良好	橙色	

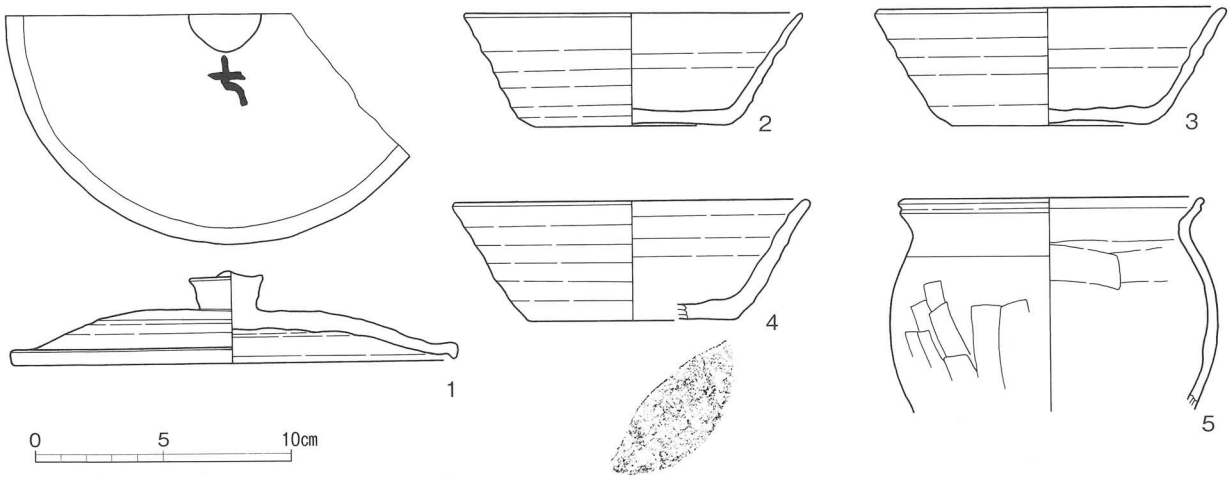
19号住居跡（第42・43図）

位置　Ａ区の中央部西端のＥ１グリッド、標高69.5ｍの最高地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.14ｍ、東西方向3.08ｍの僅かに縦長の方形。　**主軸方向**　Ｎ－２°－Ｅ。　**壁**　壁は最高28㎝の高さまで残存している。　**床**　住居中央部の右側半分と左に寄ったカマドの前面が特に硬化している。　**ピット**　なし。　**カ**



第42図　19号住居跡

マド　北壁中央部西寄りにあり、燃焼室が壁外に深く掘り込まれている。袖部の残存状況は悪いが、袖部の住居内への突出は短いものと見られる。両袖間の最大幅は約120cmある。袖部は粘土で構築され、袖の基底部の幅は約15cmである。　**覆土**　ローム粒の含有の少ない自然堆積と見られる、褐色～暗褐色土が堆積している。**遺物**　覆土中から、須恵器の坏や蓋、土師器の小型甕が出土している。1の須恵器蓋は天井部外面に墨書文字のようなものを標している。　**所見**　出土遺物は8世紀後葉頃のものと考えられる。



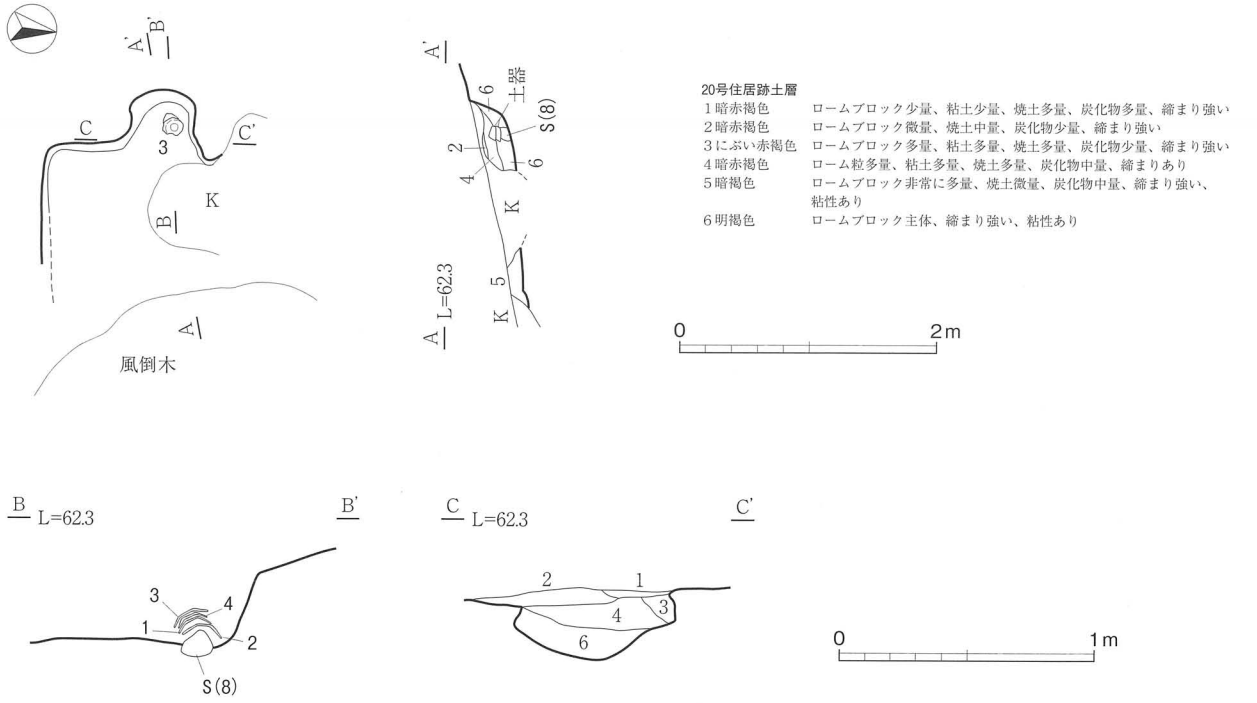
第43図　19号住居跡出土遺物

表19　19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	17.5 3.6 －	天井部外面墨書文字「ち」？、内面黒色付着物。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	灰色	60%
2	須恵器 坏	(13.2) 4.5 7.7	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ左回転。	石英、白色粒	普通	灰色	40%
3	須恵器 坏	(13.7) 4.7 7.6	底部回転ヘラ切り離し後、弱いヘラナデ。	石英、白色粒、チャート、角閃石、海綿骨針	不良	灰黄褐色	50%
4	須恵器 坏	14.0 4.7 8.3	底部一方向ヘラケズリ、ヘラ記号「—」。ロクロ右回転。	石英、海綿骨針、白色粒	普通	灰褐色	50%
5	土師器 甕	12.2 8.3 －	口縁部～体部1/4片。口縁部ヨコナデ。胴部縦方向のヘラケズリ。	長石、石英、雲母	良好	橙色	

20号住居跡（第44・45図）

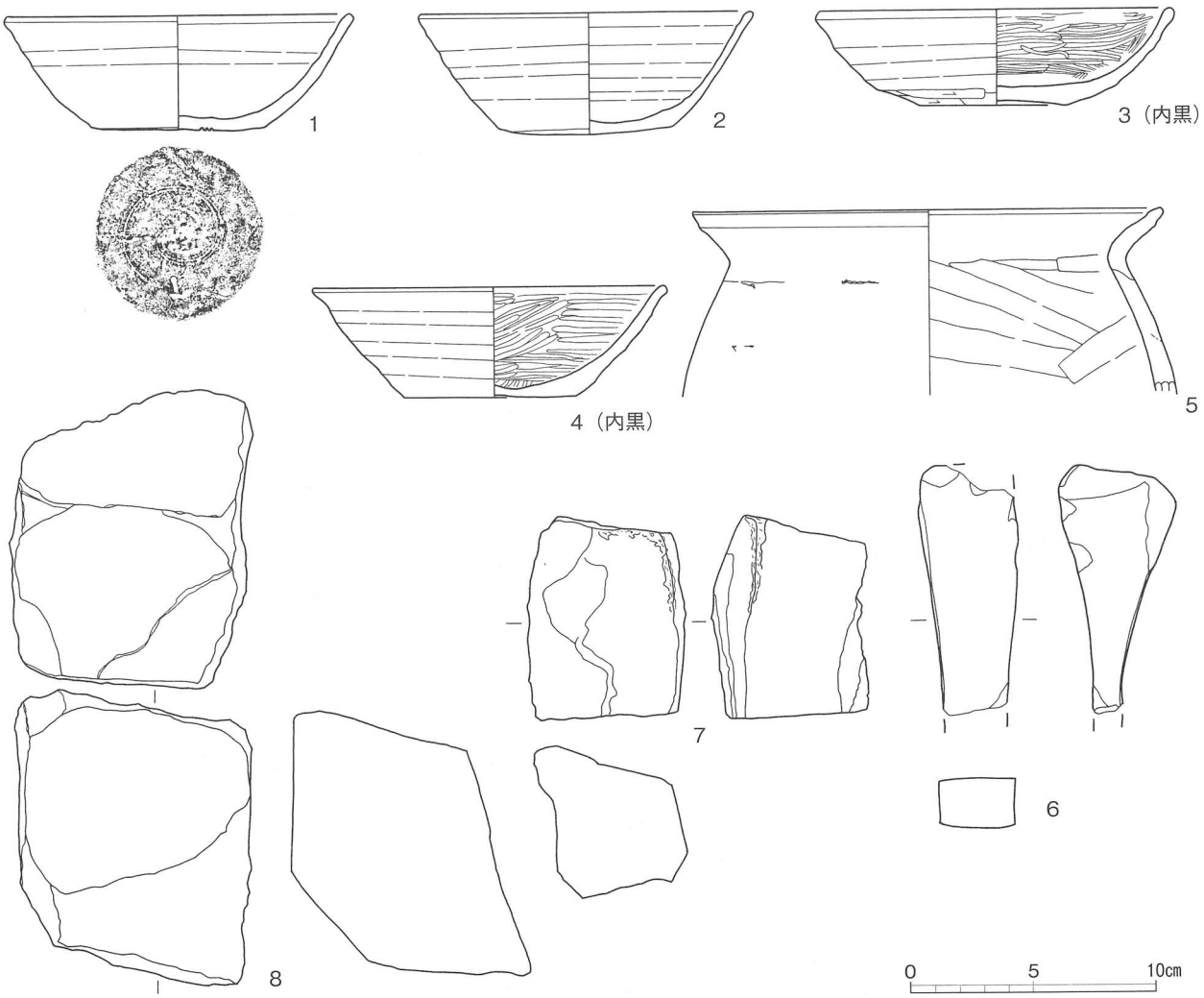
位置　Ａ区の中央部南寄りのＥ２グリッド、標高62.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　カマドとそれに続く南西の隅部分が残存している。　**主軸方向**　Ｎ－11°－Ｗ。　**壁**　壁は最高28cmの高さまで残存している。　**床**　住居の床部分は削平されて残存していない。　**ピット**　調査で住居の残存が確認された範囲内では確認されていない。　**カマド**　西壁中央部から南寄りにあるものと推測される。自然石と土器を使用した支脚が残存している。　**覆土**　５層の堆積は、ロームブロックを主体としており、住居床下の堆積層と考えられる。　**遺物**　カマドの支脚の構築材として、須恵器の坏と土師器の坏が自然石とともに使われて出土している。　**所見**　出土遺物は９世紀中～後葉頃のものと考えられる。



第44図　20号住居跡

表20　20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	14.1 4.8 7.0	底部回転ヘラ切り離し。ロクロ右回転。	石英、白色粒、チャート、角閃石	不良	灰色	完形
2	須恵器 坏	13.7 5.0 6.9	底部回転ヘラ切り離し、無調整。	石英、白色粒、チャート、角閃石	不良	灰白色	完形
3	土師器 坏	14.6 4.0 6.0	底部回転ヘラ切り離しか？ロクロ右回転。内面黒色処理・ミガキ。	石英、白色粒、角閃石	やや不良	にぶい黄褐色	ほぼ完形
4	土師器 坏	14.4 4.5 7.0	底部回転ヘラ切り離し後一方向ヘラケズリ。内面黒色処理・ミガキ。	石英、白色粒、角閃石	やや不良	にぶい黄橙色	ほぼ完形



第45図　20号住居跡出土遺物

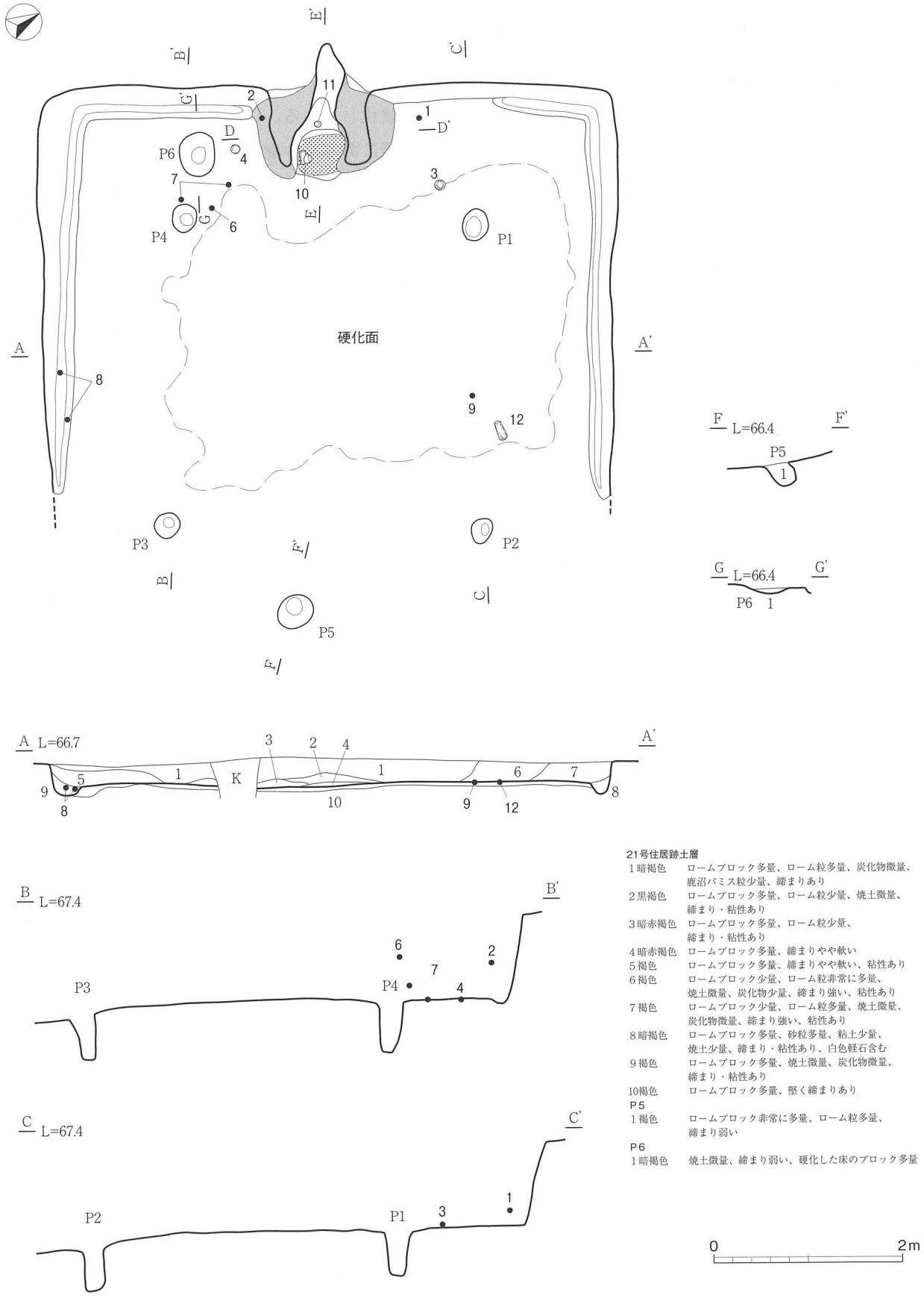
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	土師器 甕	(19.1) － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	石英、角閃石、赤褐色粒	良好	にぶい褐色	25%
6	石製品 砥石	長さ［10.2］cm、幅4.0cm、厚さ4.6cm、重さ［208.1］g、凝灰岩製。					
7	石製品	長さ8.3cm、幅6.5cm、厚さ6.3cm、重さ430.0g、凝灰岩製。敲打痕あり。					
8	支脚基部石	長さ12.2cm、幅9.3cm、厚さ9.6cm、重さ1535.0g、花崗岩。					

21 号住居跡（第 46 ～ 48 図）

位置　Ａ区の北部のＣ２グリッド、標高 66.5 ｍ地点にある。　**規模と平面形**　主軸方向（6.10）ｍ、主軸と直交する方向 5.65 ｍの僅かに縦長の方形と推定される。　**主軸方向**　Ｎ－65°－Ｗ。　**壁**　壁は最高 80cmの高さまで残存している。　**床**　住居中央部とＰ１付近が特に硬化している。　**ピット**　６か所あり、Ｐ１からＰ４は主柱穴で、Ｐ５は出入り口ピット、Ｐ６はカマドの際にある浅い掘り込みの穴である。　**カマド**　北壁中央部やや西寄りにあり、袖部に多量の粘土を使用して構築されている。両袖間の最大幅は約 150cm、燃焼室の幅は 45cmである。袖部は灰褐色粘土で構築され、よく残存している。燃焼室内には支脚が、原位置で残存している。支脚は、６層の焼土層の上面に設置され、５層の灰層、さらに落下した焼土層の４層を挟んで３層の灰層が堆積しており、２枚の火床面が残っている。　**覆土**　壁際には褐色土が堆積し、中央の堆積層はロームブロックを多く含んだ暗褐色土を主体としており、埋め戻しによる堆積層かと思われる。　**遺物**　床上から、３の須恵器蓋、４の須恵器坏が出土している。須恵器蓋・坏は雲母を含む。蓋には海綿骨針も観察される。覆土中から、土師器の坏や甕、カマドから 10 の土師器小型甕が出土している。　**所見**　出土遺物は、須恵器の坏と蓋から７世紀の第３四半期頃のものと考えられる。

表 21　21 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	12.7 4.5 －	丸底。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、底部ミガキ。内面ミガキ。	石英、海綿骨針、白色粒、角閃石	普通	橙色	80%
2	土師器 坏	(11.7) 3.8 －	丸底。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	石英、白色粒、角閃石	普通	黒褐色	80%
3	須恵器 蓋	10.2 2.4 －	天井部内面中央に指頭痕。	石英、白色粒、海綿骨針、雲母	普通	灰色	完形
4	須恵器 坏	9.5 3.1 －	ロクロ左回転。	白色粒、石英、雲母	良好	灰色	完形
5	須恵器 高坏	－ － (10.0)	脚部片。	石英、白色粒、雲母か	不良	灰色	40%
6	須恵器 甕	(19.8) － －	口縁部片。胴部外面平行叩き。	石英、白色粒、海綿骨針	普通	灰黄色	
7	土師器 甕	22.0 － －	口縁～体部片。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面下半部横位ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	石英、雲母、白色粒、角閃石、チャート、海綿骨針	普通	橙色	
8	土師器 甕	(21.0) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。	石英、白色粒、角閃石、チャート	普通	にぶい橙色	
9	土師器 甕	(20.0) － －	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦位ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	石英、白色粒、角閃石、チャート、礫多量	不良	にぶい黄橙色	20%
10	土師器 小型甕	(13.8) 11.3 6.4	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜位ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	石英、角閃石、白色粒	不良	明赤褐色	30%
11	土製品 支脚	上径 3.5cm、下径 9.7cm、長さ 16.9cm、重さ 650.0g。		角閃石、白色粒	良好	橙色	完形
12	土製品 支脚	上径 4.3cm、下径（6.8）cm、長さ 17.5cm、重さ［860.0］g。 口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ナデ。頸部に粘土付着。		角閃石、石英、白色粒	良好	明黄褐色	ほぼ完形



21号住居跡土層

1暗褐色	ロームブロック多量、ローム粒多量、炭化物微量、鹿沼パミス粒少量、締まりあり
2黒褐色	ロームブロック多量、ローム粒少量、焼土微量、締まり・粘性あり
3暗赤褐色	ロームブロック多量、ローム粒少量、締まり・粘性あり
4暗赤褐色	ロームブロック多量、締まりやや軟い
5褐色	ロームブロック多量、締まりやや軟い、粘性あり
6褐色	ロームブロック少量、ローム粒非常に多量、焼土微量、炭化物少量、締まり強い、粘性あり
7褐色	ロームブロック少量、ローム粒多量、焼土微量、炭化物微量、締まり強い、粘性あり
8暗褐色	ロームブロック多量、砂粒多量、粘土少量、焼土少量、締まり・粘性あり、白色軽石含む
9褐色	ロームブロック多量、焼土微量、炭化物微量、締まり・粘性あり
10褐色	ロームブロック多量、堅く締まりあり

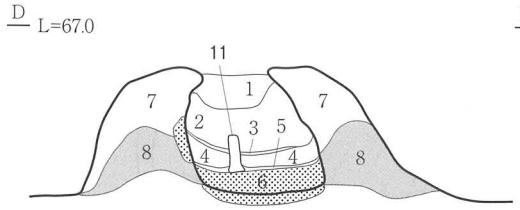
P5

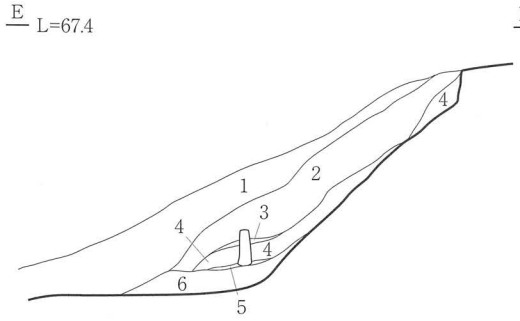
1褐色	ロームブロック非常に多量、ローム粒多量、締まり弱い

P6

1暗褐色	焼土微量、締まり弱い、硬化した床のブロック多量

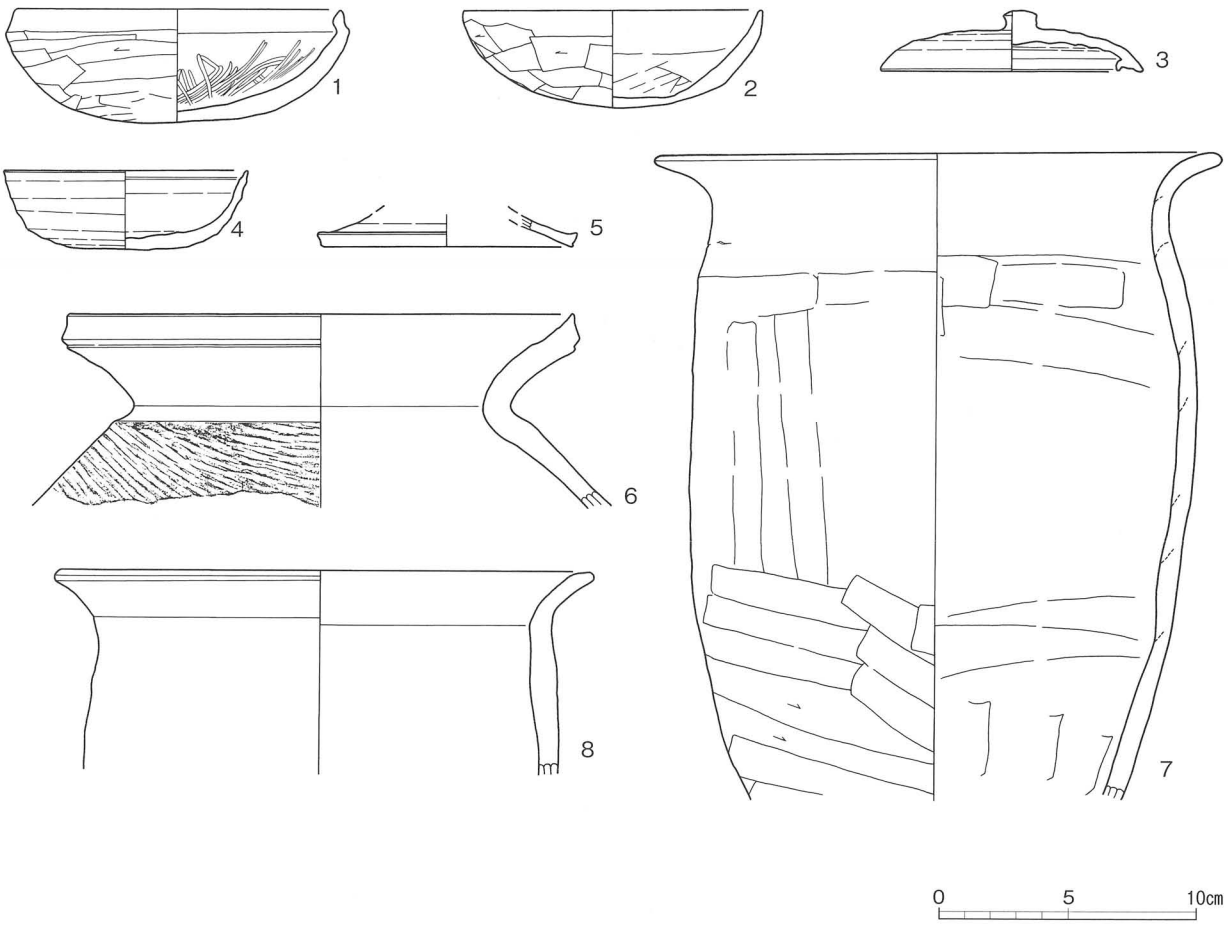
第46図　21号住居跡①



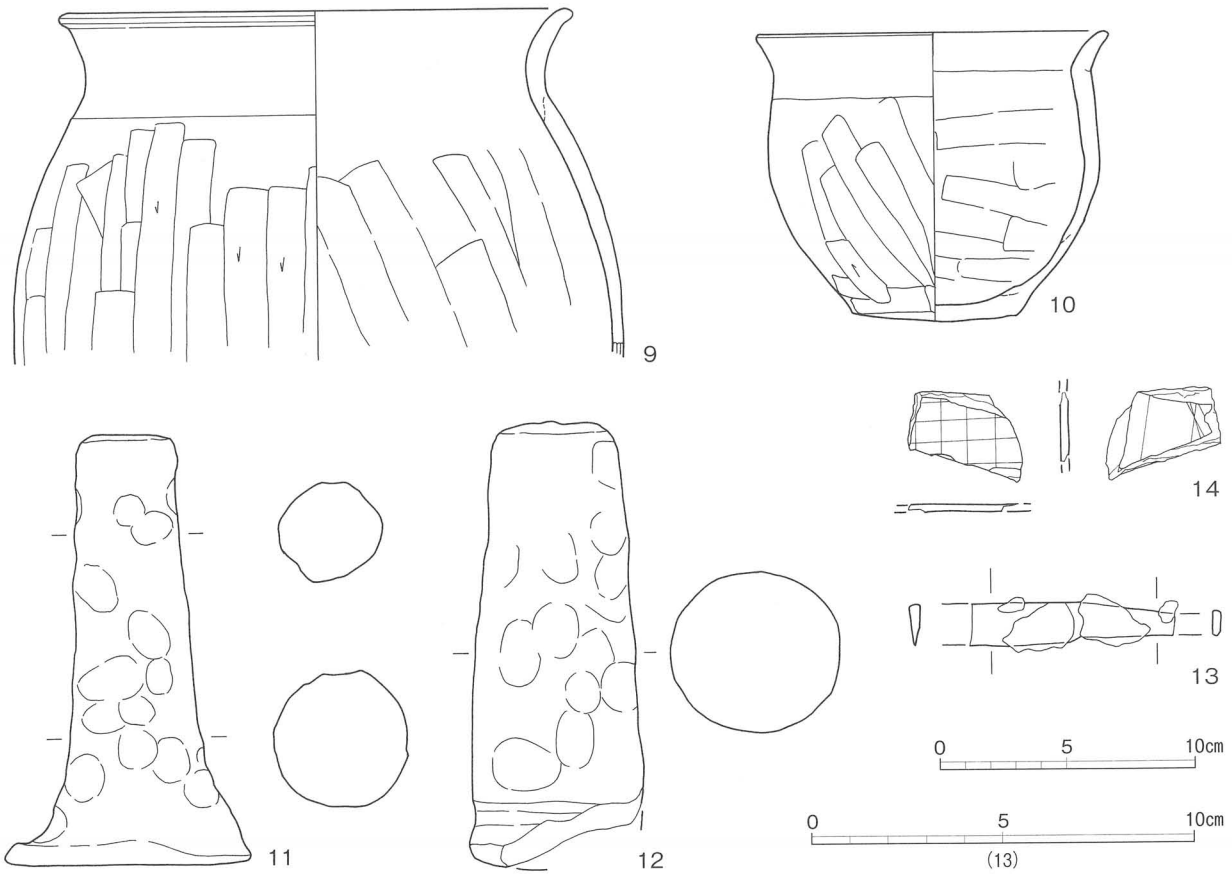


21号住居跡土層
カマド

1 褐色	ロームブロック・ローム粒多量、砂粒多量、粘土・焼土少量、炭化物多量、締まりあり、白色軽石多量
2 にぶい赤褐色	粘土非多、焼土・炭化物多量、締まりあり、天井部か
3 黒褐色	焼土多量、締まり弱い、炭化物混じりの灰層
4 暗赤褐色	粘土・焼土・炭化物多量、落下焼土、白色軽石
5 黒褐色	焼土多量、締まり弱い、炭化物混じりの灰層
6 黒褐色	焼土多量、締まり弱い、火床
7 黒褐色	黒色土小ブロック、粘土小～大ブロック、焼土小～中ブロック
8 灰褐色	灰褐色粘土大ブロック主体、袖部本体



第47図　21号住居跡②・出土遺物①

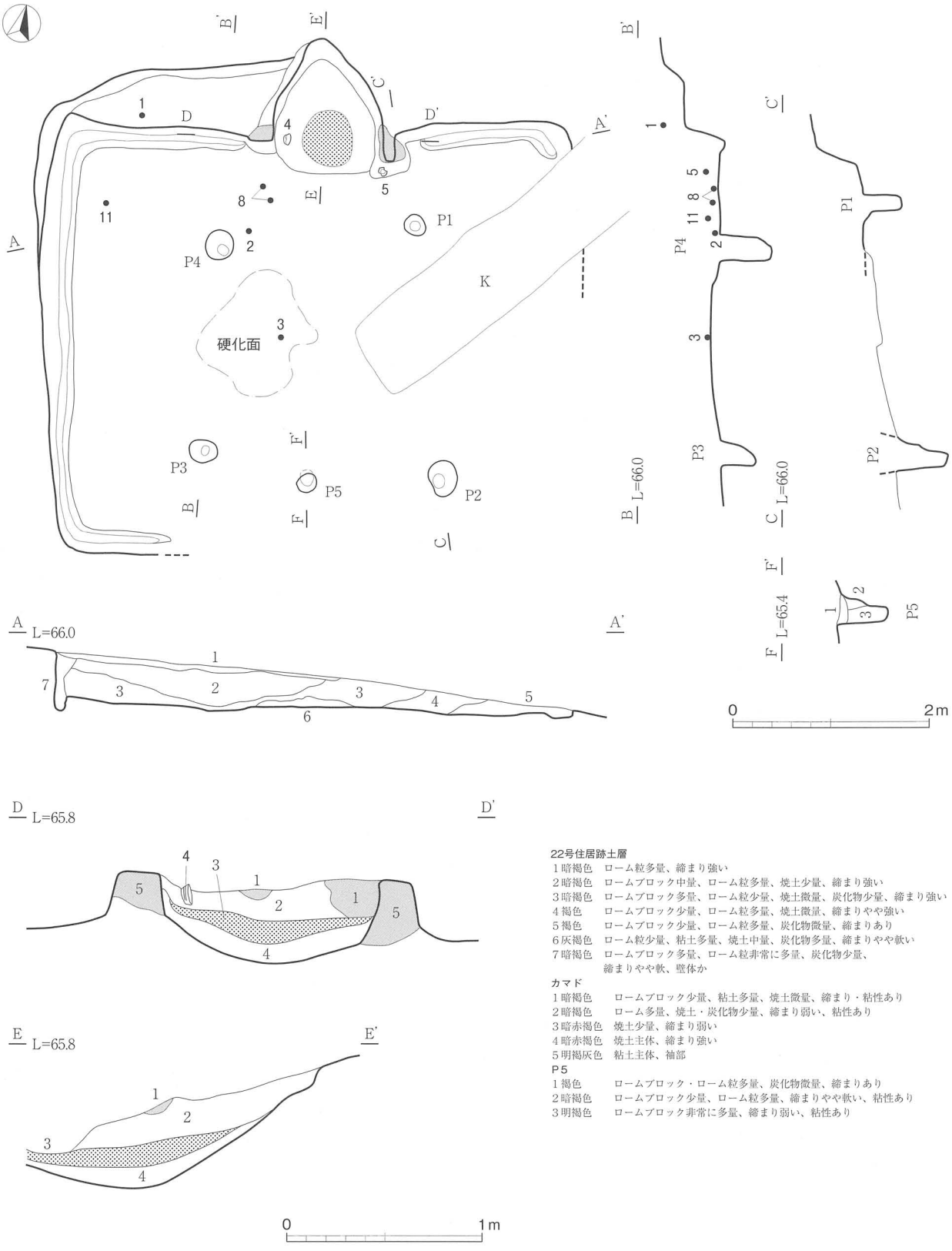


第48図　21号住居跡出土遺物②

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
13	鉄製品 刀子	長さ［5.1］cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm、重さ［8.1］g。					
14	石製品 石板状石製品	長さ［4.5］cm、幅［2.8］cm、厚さ0.3cm、重さ［6.4］g、粘板岩製。					

22号住居跡（第49・50図）

位置　A区の北部のＣ２～Ｄ２グリッド、標高65.5ｍ地点にある。　**規模と平面形**　主軸方向4.20ｍ、東西方向（5.20）ｍの横長の長方形。　**主軸方向**　Ｎ－16°－Ｗ。　**壁**　壁は最高54cmの高さまで残存している。　**床**　住居中央部を中心に全体に硬化している。　**ピット**　５か所あり、Ｐ１からＰ４は主柱穴で、Ｐ５は出入り口ピットと考えられる。　**カマド**　北壁中央部にあり、袖部に明褐灰色粘土を使用して構築されている。両袖間の最大幅は約160cm、燃焼室の幅は98cm、燃焼室は壁をやや深めに掘り込んで構築されている。　**覆土**　ロームブロックを多く含んだ暗褐色土を主体としており、埋め戻しによる堆積層かと思われる。



22号住居跡土層

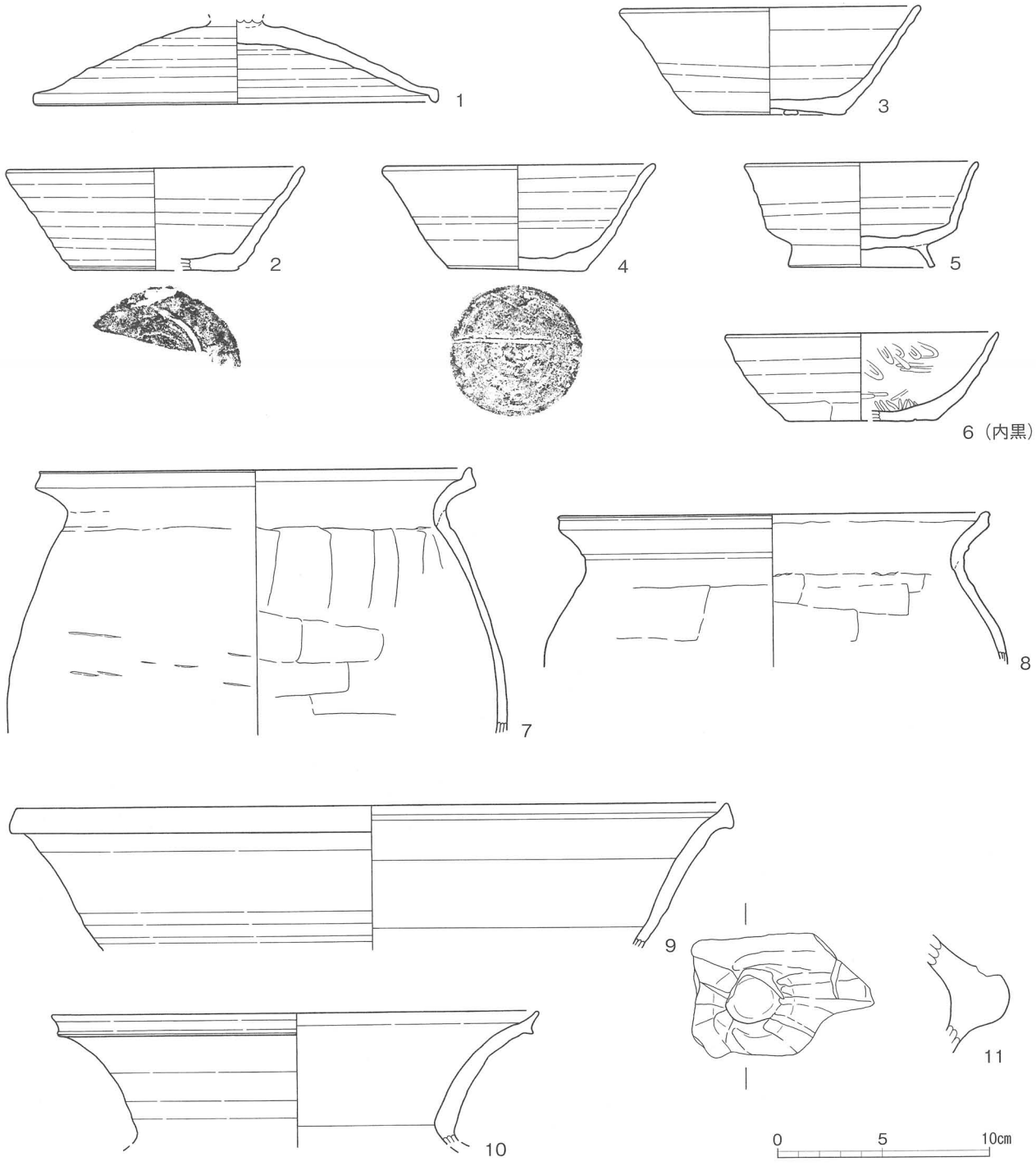
1暗褐色　ローム粒多量、締まり強い
2暗褐色　ロームブロック中量、ローム粒多量、焼土少量、締まり強い
3暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、焼土微量、炭化物少量、締まり強い
4褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、焼土微量、締まりやや強い
5褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物微量、締まりあり
6灰褐色　ローム粒少量、粘土多量、焼土中量、炭化物多量、締まりやや軟い
7暗褐色　ロームブロック多量、ローム粒非常に多量、炭化物少量、締まりやや軟、壁体か

カマド
1暗褐色　ロームブロック少量、粘土多量、焼土微量、締まり・粘性あり
2暗褐色　ローム多量、焼土・炭化物少量、締まり弱い、粘性あり
3暗赤褐色　焼土少量、締まり弱い
4暗赤褐色　焼土主体、締まり強い
5明褐灰色　粘土主体、袖部

P5
1褐色　ロームブロック・ローム粒多量、炭化物微量、締まりあり
2暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、締まりやや軟い、粘性あり
3明褐色　ロームブロック非常に多量、締まり弱い、粘性あり

第49図　22号住居跡

遺物　ほとんどの遺物が覆土下層からの出土である。底部が小さく器高の高い須恵器坏、やや器高の高い土師器の内黒坏が出土している。　**所見**　出土遺物とカマド燃焼室の壁外への掘り込みの深さから見て、9世紀の前葉頃の住居跡と考えられる。この時期の住居跡としては、四本柱を持ちやや大型の住居跡で、カマドも大型であるが、カマドの燃焼室は壁をやや深く掘り込んだ新しい時期の特徴を持っている。



第50図　22号住居跡出土遺物

表22　22号住居跡出土遺物観察表

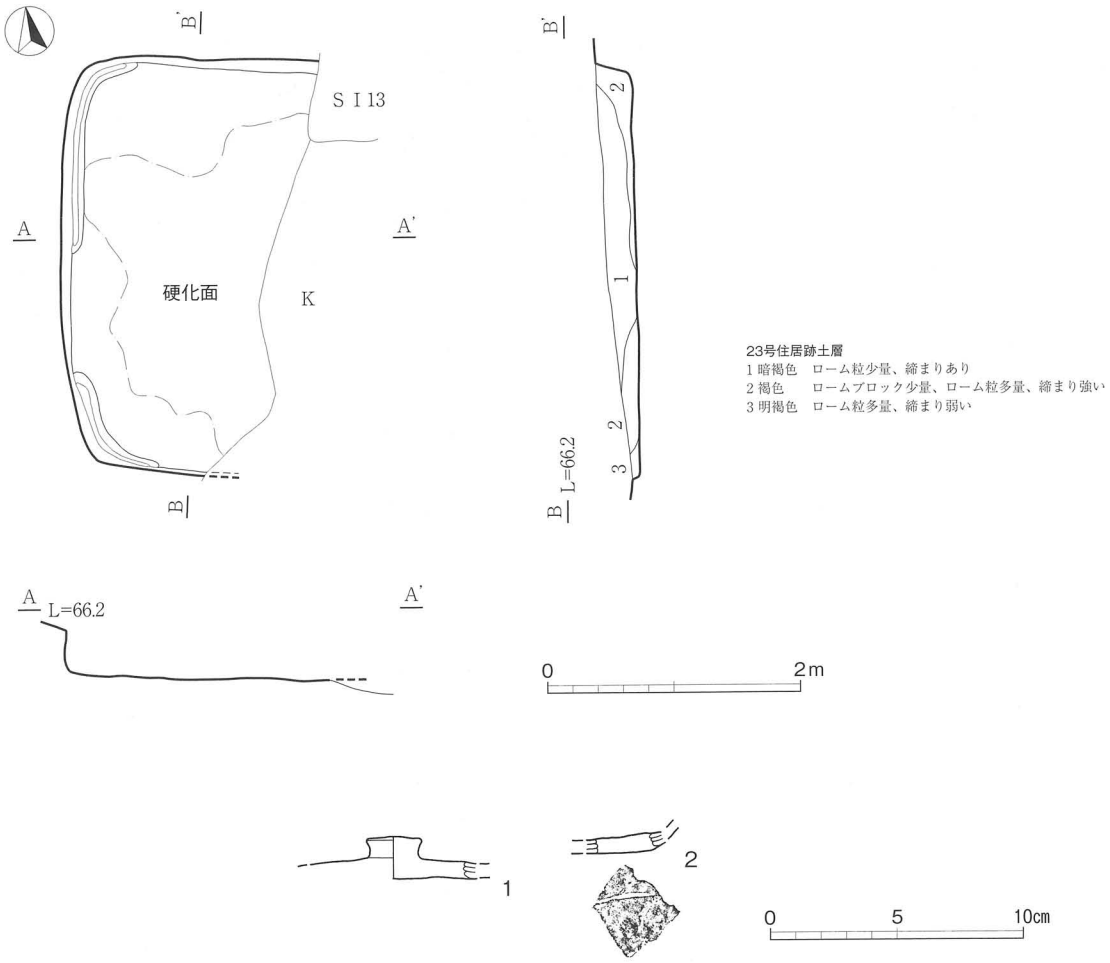
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	(19.3) － －	内外面ロクロナデ。	石英、海綿骨針、白色粒	良好	黄灰色	40%
2	須恵器 坏	(14.3) 5.0 (8.1)	底部回転ヘラ切り後一方向ナデか。	石英、白色礫、海綿骨針	普通	オリーブ灰色	40%
3	須恵器 坏	14.4 5.2 7.3	底部回転ヘラ切り離し後オサエ。	石英、白色礫	不良	オリーブ灰色	60%
4	須恵器 坏	13.0 5.1 6.4	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。底部ヘラ記号「一」。	石英、白色粒	普通	オリーブ灰色	ほぼ完形
5	須恵器 高台付坏	11.2 5.1 6.8	底部回転ヘラ切り離し後高台貼り付け。	白色粒、海綿骨針	良好	灰色	75%
6	土師器 坏	(13.0) 5.2 (7.2)	底部、及び体部下端回転ヘラケズリ。内面黒色処理、ミガキ。	石英、角閃石、白色粒	良好	にぶい黄橙色	25%
7	土師器 甕	(20.6) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半部ナデ。	チャート、白色粒、雲母	良好	橙色	
8	土師器 甕	(20.6) － －	口縁部内外面ヨコナデ。	石英、白色粒、雲母	やや不良	明赤褐色	
9	須恵器 鉢か	(34.0) － －	口縁部片。	白色粒、石英	不良	灰白色	
10	須恵器 甕	(23.2) － －	口縁部片。	白色粒	不良	灰白色	
11	須恵器 鉢	－ － －	鉢胴部外面の突起状の摘み部片。	石英、白色粒、海綿骨針	やや不良	灰白色	

23号住居跡（第51図）

位置　A区の中央部西寄りのE1グリッド、標高66.0m地点にある。　**規模と平面形**　南北方向3.20m、東半分は地形の削平によって失われている。　**主軸方向**　N－11°－E。　**壁**　壁は最高36cmの高さまで残存している。　**床**　住居中央部を中心に硬化している。西壁側に壁溝が部分的に確認されている。　**ピット**　床面の残存している範囲では確認できない。　**カマド**　住居の残存している範囲では確認できない。　**覆土**　ロームブロックをあまり含まない暗褐色土を主体としている。　**遺物**　覆土から細片で須恵器の蓋摘み部片や坏の底部片が出土している。摘みの形状から9世紀前葉頃のものかと思われる。　**所見**　小型の主柱穴をもたない住居跡で出土遺物から9世紀前葉頃のものと思われる。

表23　23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	摘み径2.2	蓋摘み部片。天井部回転ヘラケズリ。	白色粒、石英	良好	灰色	
2	須恵器 坏	－ － －	底部片。底部外面ヘラ記号「一」。	白色粒	良好	にぶい黄橙色	



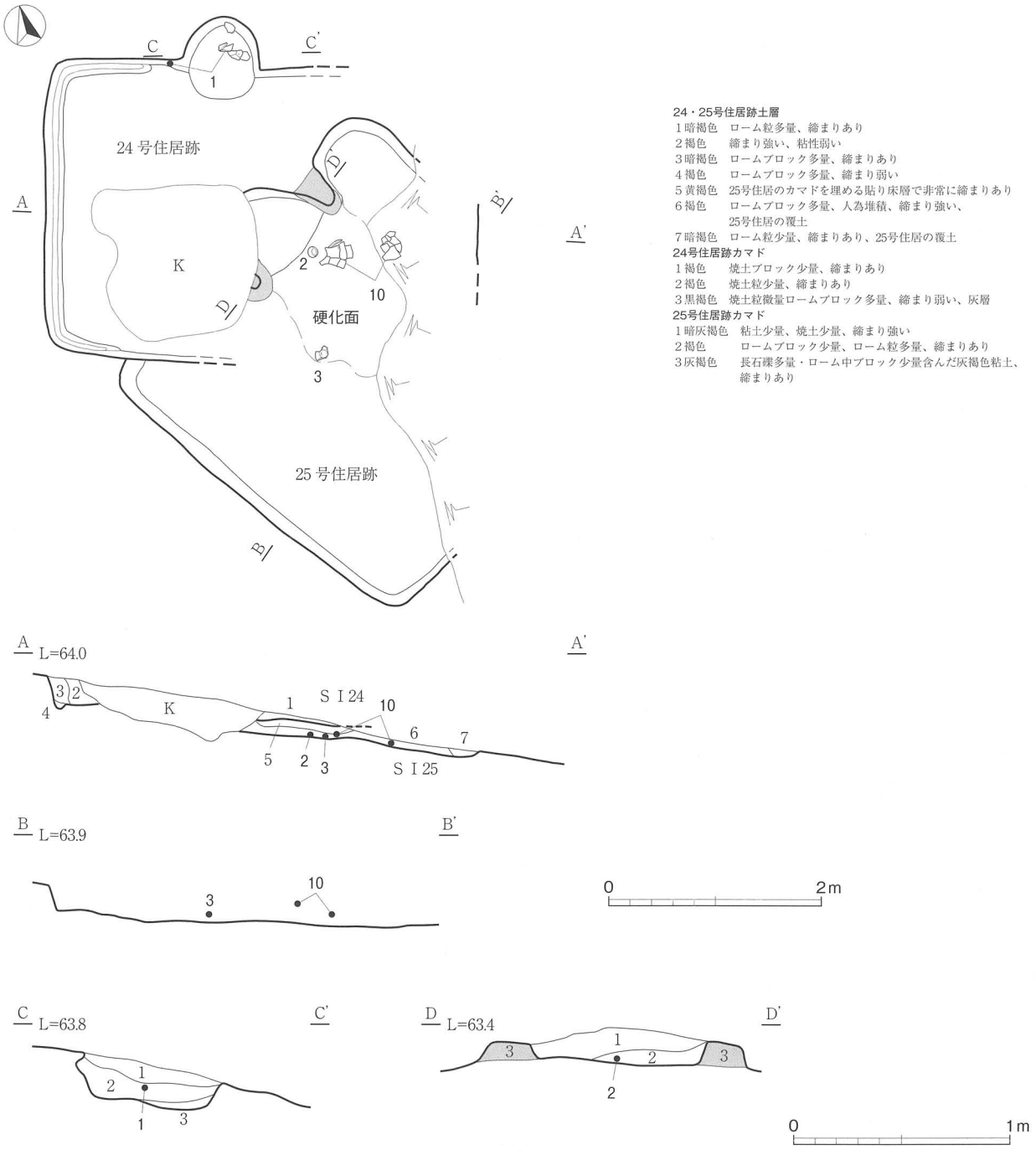
第51図　23号住居跡・出土遺物

24号住居跡（第52・53図）

位置　A区の南部F1グリッド、標高63.5ｍ地点にある。　**規模と平面形**　南北方向2.70ｍ、東西方向は地形傾斜による削平と木の根による攪乱のため不明。　**重複関係**　25号住居跡と重複し、25号住居跡よりも新しい。　**主軸方向**　N－11°－E。　**壁**　壁は最高28cmの高さまで残存している。　**床**　カマドの前面と北西部、南西部の床が残存している。残っている床面は硬化している。壁溝は床が残存している部分については、カマド部分を除いて全周している。　**ピット**　木の根による攪乱のため確認できていない。　**カマド**　北壁中央部にあり、両袖は残存していない。燃焼室は壁を掘り込んでおり焼土化した火床面が残存している。　**覆土**　締まりのある暗褐色土を主体として堆積している。　**遺物**　カマド覆土から1の須恵器甑底部片が出土している。　**所見**　東部を削平と攪乱で失っているが、主柱を持たない、小型横長の住居跡と思われ、9世紀中～後葉頃の住居跡かと思われる。

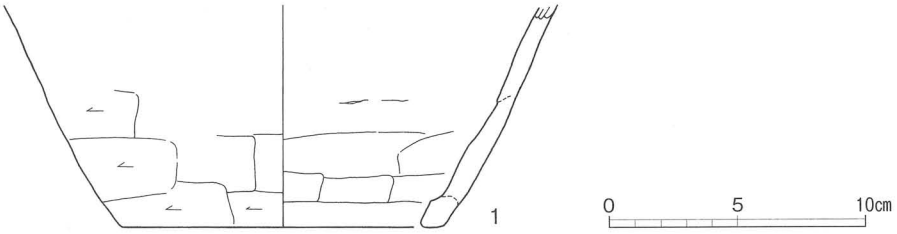
25号住居跡（第52・54図）

位置　Ａ区の南部Ｆ１グリッド、標高63.5ｍ地点にある。　**規模と平面形**　主軸方向3.38ｍ、主軸と直交する方向3.20mの僅かに縦長気味のほぼ方形。　**重複関係**　24号住居跡と重複し、24号住居跡よりも古い。　**主軸方向**　Ｎ－34°－Ｗ。　**壁**　壁は最高30cmの高さまで残存している。　**床**　カマドの前面の床がよく硬化している。壁溝は確認できなかった。　**ピット**　地形傾斜による削平のため確認できていない。　**カマド**　北西壁中央部向かってやや右寄りにある。両袖間の最大幅は約125cm、燃焼室の幅は75cm、袖部は灰褐色粘土で構築されており、左袖の基底部幅は約30cmで、高さは10cm程残存している。　**覆土**　ロームブロック



第52図　24・25号住居跡

を多量に含んだ褐色土を主体としており、人為的な埋め戻し層と見られる。　**遺物**　カマド前面の床上から2・3の須恵器坏と土師器の甑底部片が出土している。　**所見**　出土遺物は、8世紀後半代のものと思われる。



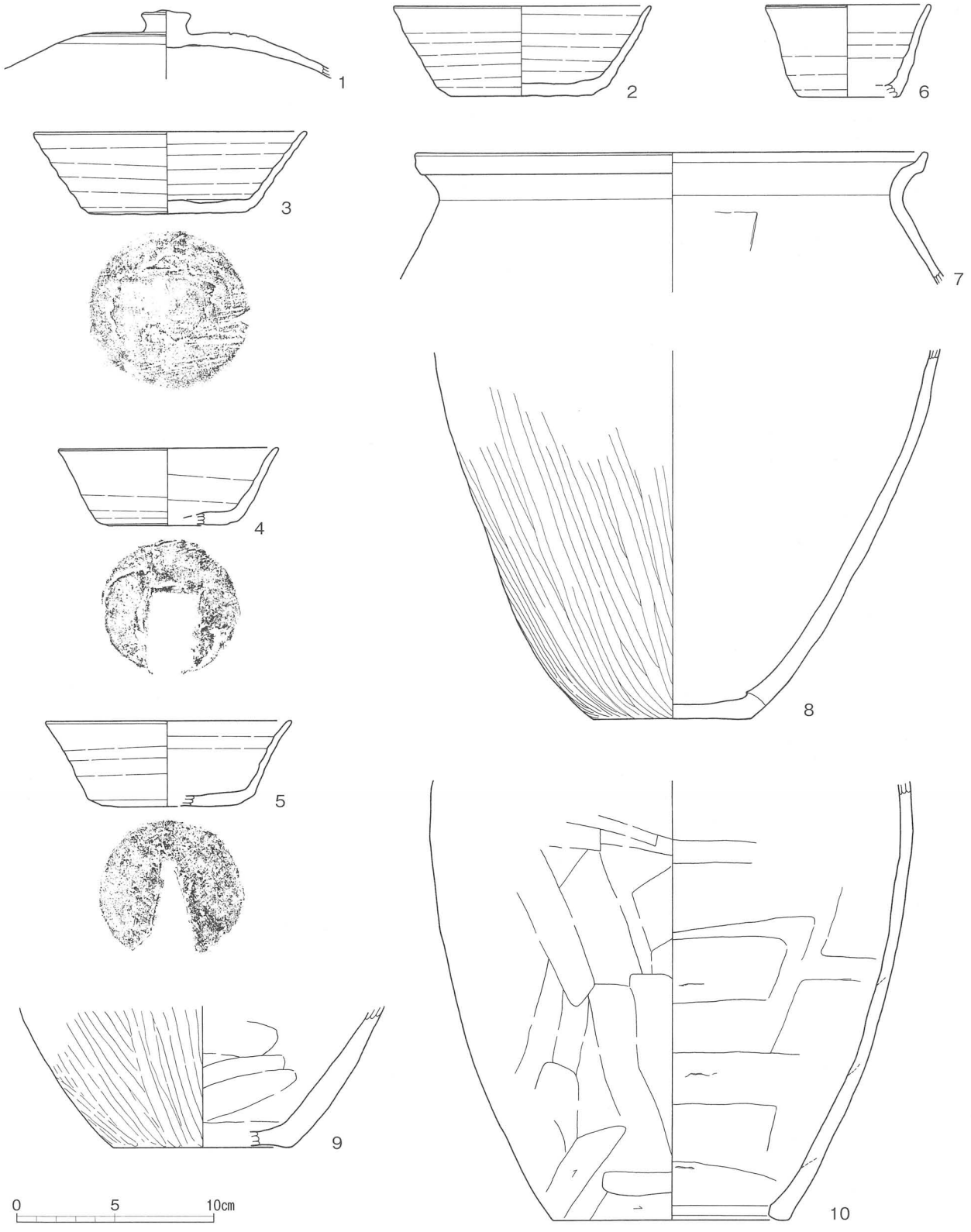
第53図　24号住居跡出土遺物

表24　24号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 甑	－ － (12.6)	底部片。底部2孔式か。	石英、角閃石、白色粒	不良	灰色	

表25　25号住居跡出土遺物観察表

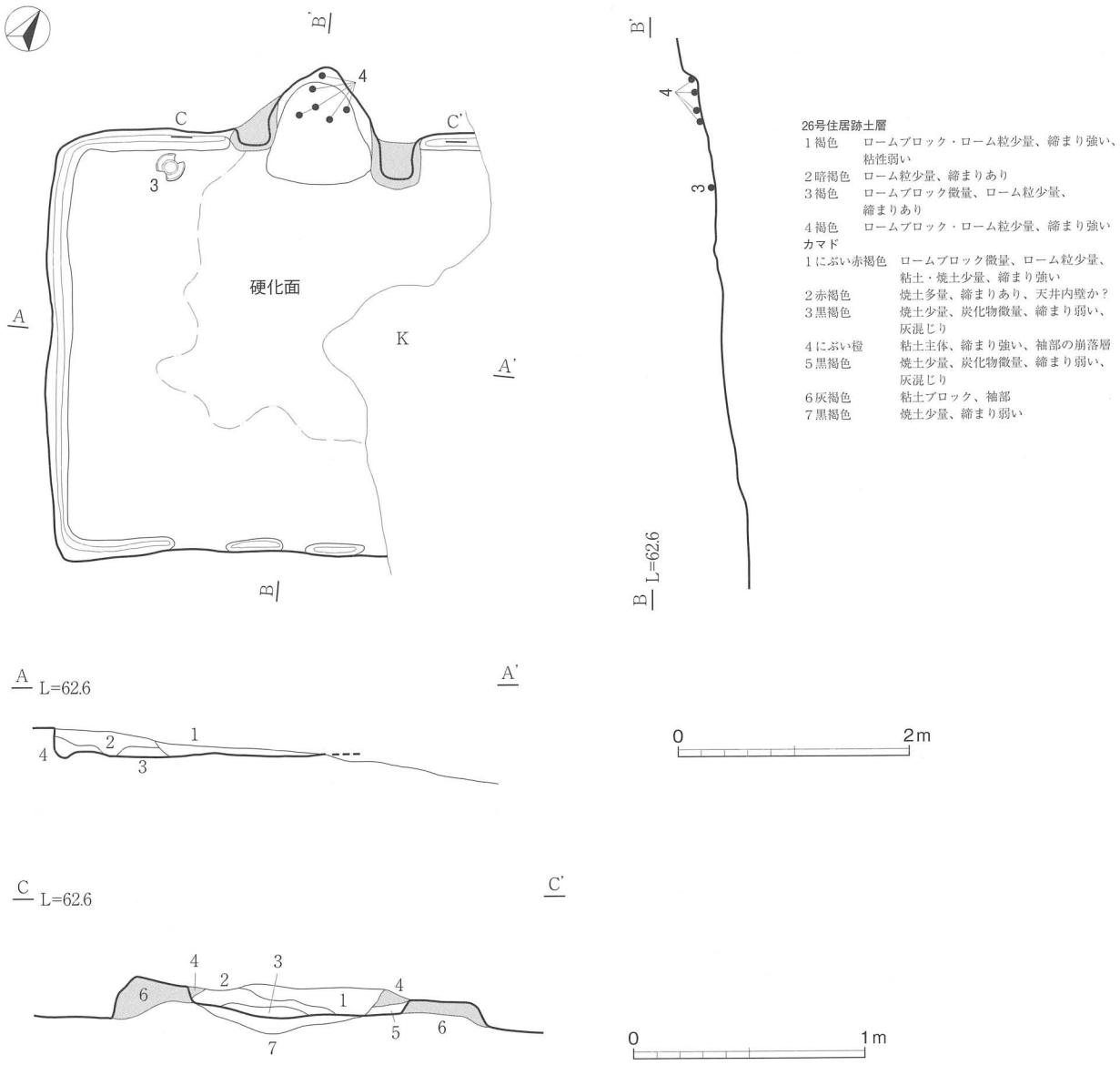
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	摘み径2.6 － －	蓋天井部片。天井部外面回転ヘラケズリ。内面に径10.7cmの重ね焼き痕跡。	石英、海綿骨針、白色粒、チャート	良好	灰色	50%
2	須恵器 坏	13.0 4.7 7.3	底部回転ヘラ切り離し。	石英、白色粒、海綿骨針、角閃石	やや不良	灰白色	ほぼ完形
3	須恵器 坏	(13.8) 4.1 7.8	底部回転ヘラ切り離し後一方向ヘラケズリ。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	普通	灰オリーブ色	60%
4	須恵器 坏	11.0 3.9 (6.0)	底部回転ヘラ切り後一方向ヘラケズリ。	白色粒・礫、チャート	不良	灰色	75%
5	須恵器 坏	(12.4) 4.3 (6.7)	底部周縁やや丸みを持ち、中央部2方向のヘラケズリ。	白色粒、海綿骨針	普通	灰色	50%
6	須恵器 坏	(8.4) 4.7 (5.2)	口縁部片。	白色粒、黒色粒	良好	灰色	25%
7	土師器 甕	(25.6) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	にぶい橙色	
8	土師器 甕	－ － (7.8)	胴下半部片。底部木葉痕。	石英、白色粒、雲母、チャート	普通	橙色	30%
9	土師器 甕	－ － (9.0)	底部片。胴部下半ミガキ、底部木葉痕。	石英、チャート、白色粒、雲母、赤褐色粒	普通	にぶい赤褐色	
10	土師器 甑	－ － 12.0	底～胴部片。胴部内・外面ヘラナデ、	石英、白色粒、赤褐色粒	良好	にぶい橙色	



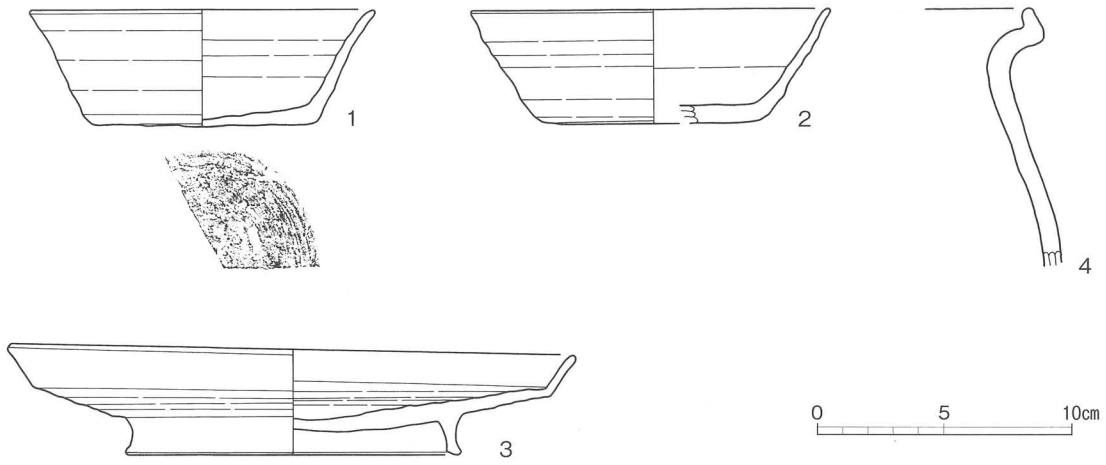
第54図　25号住居跡出土遺物

26号住居跡（第55・56図）

位置　A区の南部Ｆ１～２グリッド、標高62.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　主軸方向3.60ｍ、主軸と直交する方向は攪乱によって不明。　**主軸方向**　Ｎ－34°－Ｗ。　**壁**　壁は最高27cmの高さまで残存している。　**床**　カマドの前面から中央部の床がよく硬化している。壁溝は一部とぎれながらも全周しているものと見られる。　**ピット**　床面からは確認できていない。　**カマド**　北西壁中央部にあり、両袖間の最大幅は約127cm、燃焼室の幅は75cm、袖部は灰褐色粘土で構築されている。　**覆土**　締まりのある褐色土を主体としている。　**遺物**　カマド左側壁際の床上から３の須恵器盤が、カマド内から４の土師器甕片が出土している。　**所見**　出土遺物は、８世紀中頃のものと思われる。



第55図　26号住居跡



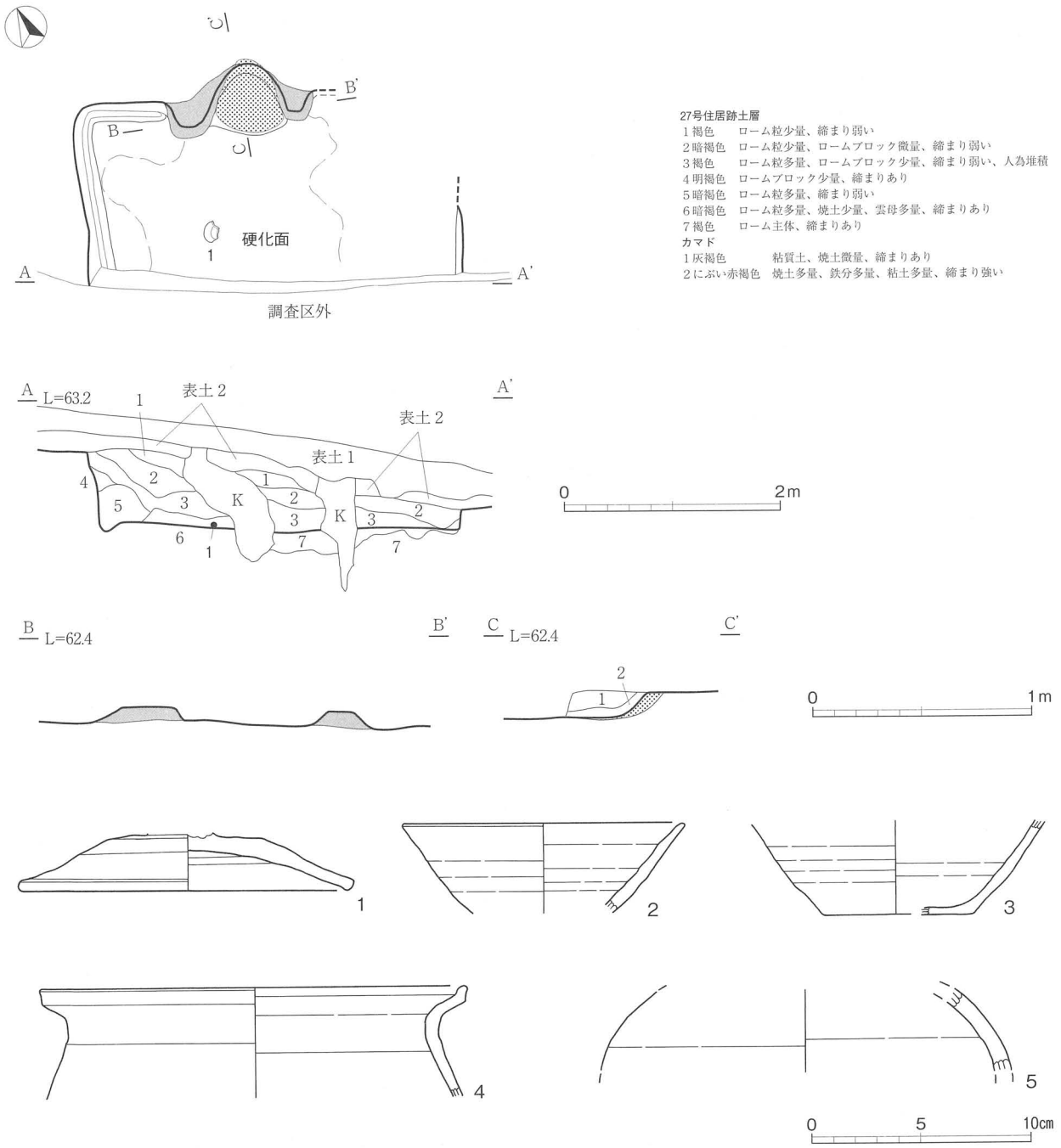
第56図　26号住居跡出土遺物

表26　26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.4) (4.6) (8.7)	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	石英、海綿骨針、白色粒	普通	灰色	30%
2	須恵器 坏	(14.0) (4.5) (8.4)	底部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転。	石英、白色粒、海綿骨針、角閃石、チャート	不良	淡黄色	20%
3	須恵器 盤	22.1 4.4 13.2	底部回転ヘラケズリ。	石英、白色粒、海綿骨針	やや不良	灰色	80%
4	土師器 甕	(23.4) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。	石英、白色粒、チャート	良好	明赤褐色	

27号住居跡（第57図）

位置　A区の南部F1グリッド、標高62.0m地点にある。　**規模と平面形**　主軸と直交する方向は幅3.15mで住居の南西部が調査区外に延びているため全体の規模と平面形は不明。　**主軸方向**　N－11°－W。　**壁**　壁は最高56cmの高さまで残存している。　**床**　カマドの前面の左側を中心によく硬化している。壁溝はカマド左手側の壁直下から北西壁側にかけて延びている。　**ピット**　調査範囲内では確認できていない。　**カマド**　北東壁中央部にあり、両袖間の最大幅は約130cm、燃焼室の幅は70cm、袖部は灰褐色粘土で構築されている。　**覆土**　中層にロームブロックを含む人為堆積層が一部入るが全体的には暗褐色～褐色土を主体とした自然堆積層である。　**遺物**　床面から1の須恵器蓋が出土している。覆土からは底径が小さく、体部が開く器形の須恵器坏や5の灰釉陶器長頸瓶の肩部片が出土している。　**所見**　出土遺物は、9世紀中葉頃のものと思われる。



第57図　27号住居跡・出土遺物

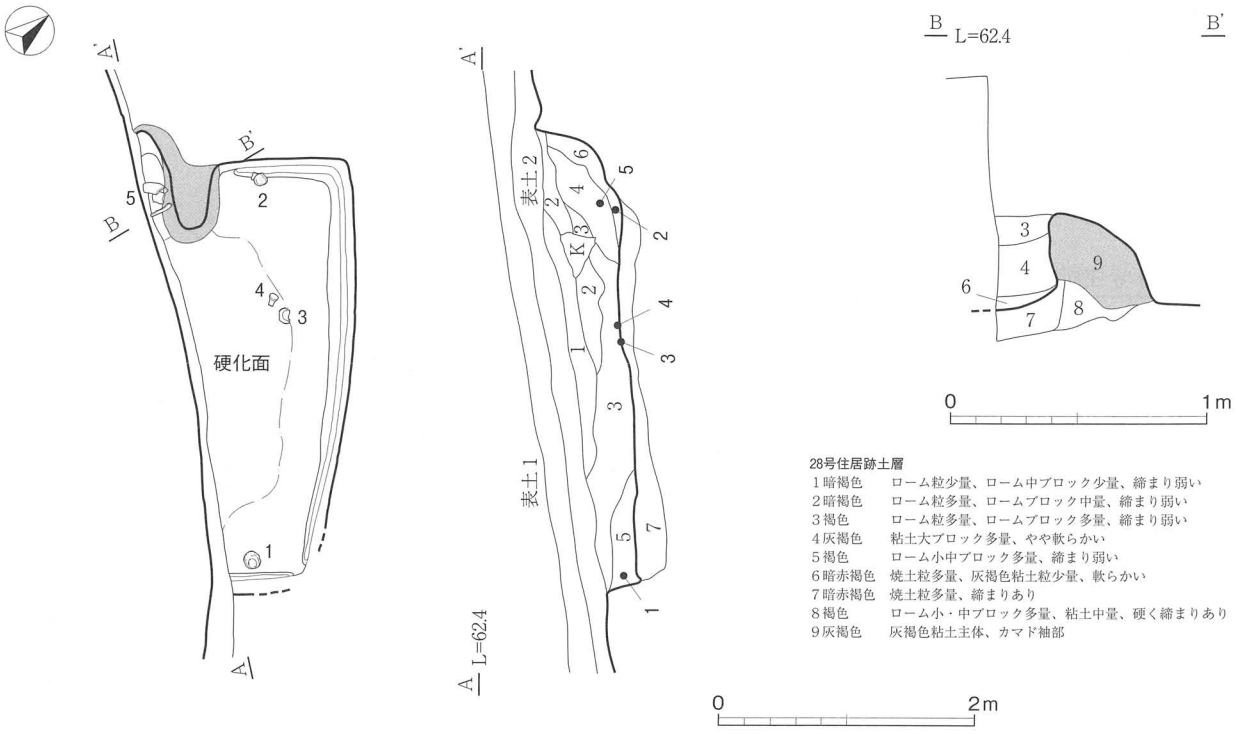
表27　27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	(15.5) – –	天井部外面上半部回転ヘラケズリ。内面に直径約8cmの範囲擦痕跡。	石英、白色粒・礫	普通	灰色	70%
2	須恵器 坏	(13.0) – –		石英、白色粒、海綿骨針、チャート、黒色粒	やや不良	褐灰色	20%

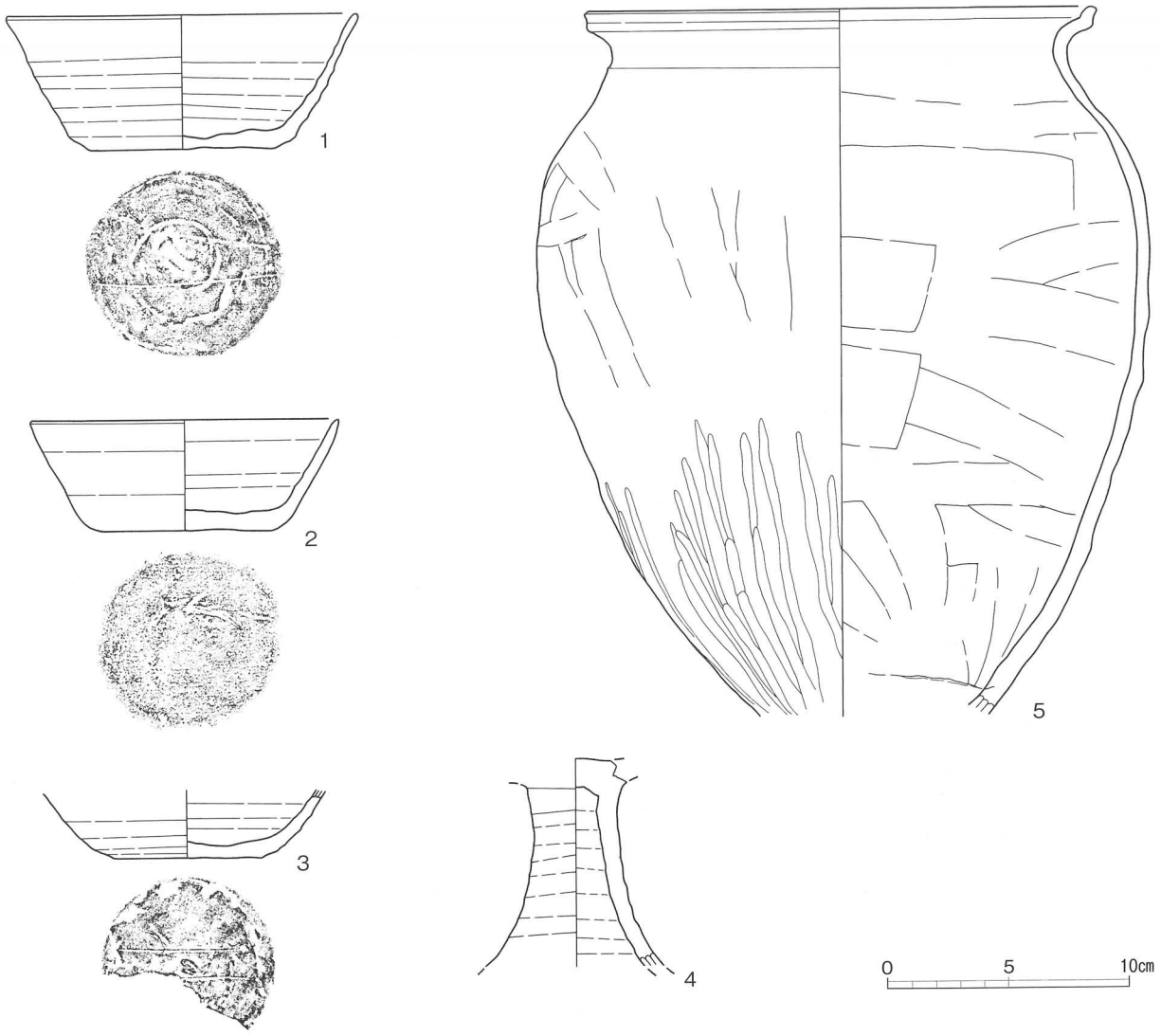
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 坏	－ － (6.8)	底部回転ヘラ切り無調整。	石英、白色粒･礫、チャート、海綿骨針	やや不良	灰色	20%
4	土師器 甕	(19.8) － －	口縁部片。口縁部内外面ヨコナデ、胴部ナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	にぶい橙色	
5	灰釉陶器 長頸瓶	－ － －	体部片。	石英・白色粒・チャート極少量	良好	オリーブ灰色	

28号住居跡（第58・59図）

位置　Ａ区の南部Ｆ２グリッド、標高61.5ｍ地点にある。　**規模と平面形**　主軸方向は3.25mで住居の南西部は調査区外に延びているため全体の規模と平面形は不明。　**主軸方向**　Ｎ－43°－Ｗ。　**壁**　壁は最高80cmの高さまで残存している。　**床**　カマド前面の住居中心部がよく硬化している。壁溝はカマド右手側の壁直下から北東壁側と南東壁側まで延びている。　**ピット**　調査範囲内では確認できていない。　**カマド**　北西壁側にあり、右袖部が灰褐色粘土を使用し硬くよく残っている。右袖の基部の燃焼室側には、幅15cm、高さ13cm程のローム小・中ブロックと粘土の混合土を芯として灰褐色粘土を厚く巻いて本体を構築している。右袖の基底部幅は約38cm、高さは35cm残存している。　**覆土**　全体にロームブロックを多く含み、締まりのない人為堆積層かと思われる暗褐色土を主体としている。　**遺物**　床面から２・３の須恵器坏と４の須恵器高坏脚部が出土している。カマドからは５の土師器甕が出土している。　**所見**　出土遺物は、９世紀前葉頃のものと思われる。



第58図　28号住居跡



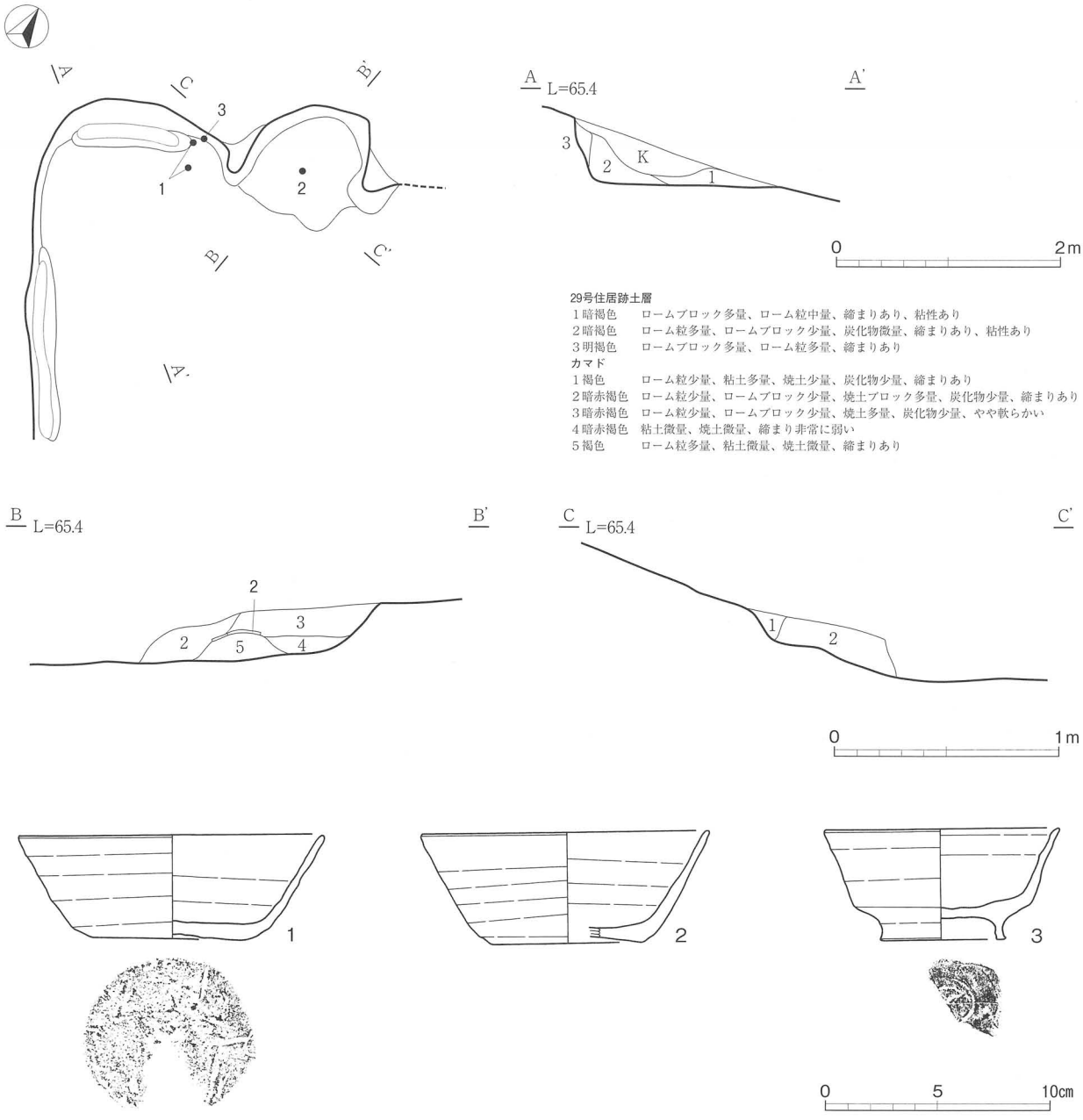
第59図　28号住居跡出土遺物

表28　28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	14.6 5.6 7.2	底部回転ヘラ切り離し、ヘラ記号「—」。ロクロ右回転。	石英、海綿骨針、チャート	不良	灰白色	70%
2	須恵器 坏	(12.8) 4.6 3.7	底部回転ヘラ切り離し後一方向ヘラケズリ。	石英、白色粒、チャート	不良	灰白色	30%
3	須恵器 坏	– – 6.3	底部回転ヘラ切り離し、ヘラ記号「=」。	長石礫、白色微粒	普通	灰色	30%
4	須恵器 高坏	– – –	脚部片。	海綿骨針、白色粒	普通	灰色	
5	土師器 甕	21.0 – –	口縁部内外面ヨコナデ、胴上部ナデ、下半部ミガキ。	石英、白色粒、雲母	普通	橙色	90%

29号住居跡（第60図）

位置　Ａ区の北部Ｃ２グリッド、標高65.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　カマドと住居北西の角部が残存するだけで、規模と平面形は不明。　**重複関係**　７号掘立柱建物跡のＰ５を壊している。　**主軸方向**　Ｎ－12°－Ｗ。　**壁**　壁は最高40cmの高さまで残存している。　**床**　カマド左前面の床の一部が僅かに硬化している。壁溝はカマド左手側の壁直下と北西壁側の一部に見られる。　**ピット**　調査範囲内では確認できていない。　**カマド**　北壁側にあり、袖部には一部粘土を使用しているが、全体に小振りなカマドである。　**覆土**　締まりのある暗褐色土を主体としている。　**遺物**　カマドの中層から２の須恵器坏が破片で、カマド左側の壁際覆土から１の須恵器坏と３の高台付坏が出土している。　**所見**　出土遺物は、９世紀前葉頃のものと思われる。



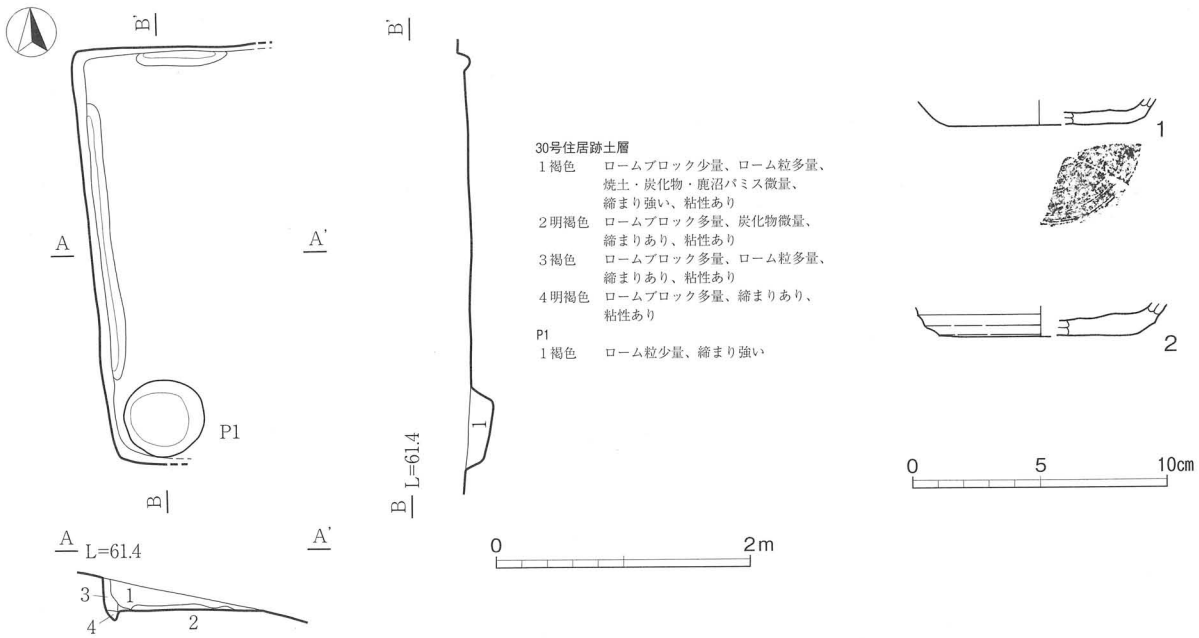
第60図　29号住居跡・出土遺物

表29　29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.8 4.7 7.1	底部回転ヘラ切り離し、ヘラ記号「—」。	石英、海綿骨針、白色粒	不良	灰オリーブ色	ほぼ完形
2	須恵器 坏	(13.0) 5.0 (6.8)	底部回転ヘラ切り離し後ナデか。	海綿骨針、白色粒	やや不良	灰色	30%
3	須恵器 高台付坏	(10.6) 5.0 (5.4)	底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号「—」。	石英、白色粒、黒色粒、海綿骨針	普通	灰黄色	30%

30号住居跡（第61図）

位置　A区の南部Ｅ２～Ｆ２グリッド、標高61.0ｍ地点にある。　**規模と平面形**　住居の西壁から北壁の一部が残存するだけで、全体の規模と平面形は不明。　**主軸方向**　Ｎ－３°－Ｗ。　**壁**　壁は最高26cmの高さまで残存している。　**床**　全体に軟質で、西壁と北壁には壁溝が見られる。　**ピット**　住居跡南西隅に径77cm、深さ18cmの浅い穴が開いている。　**カマド**　削平されたためか、残存していない。　**覆土**　締まりのある褐色土を主体としている。　**遺物**　覆土から１・２の須恵器坏底部片が小破片で出土している。　**所見**　出土遺物は、８世紀中葉頃のものだが、小片であり混入遺物かもしれない。



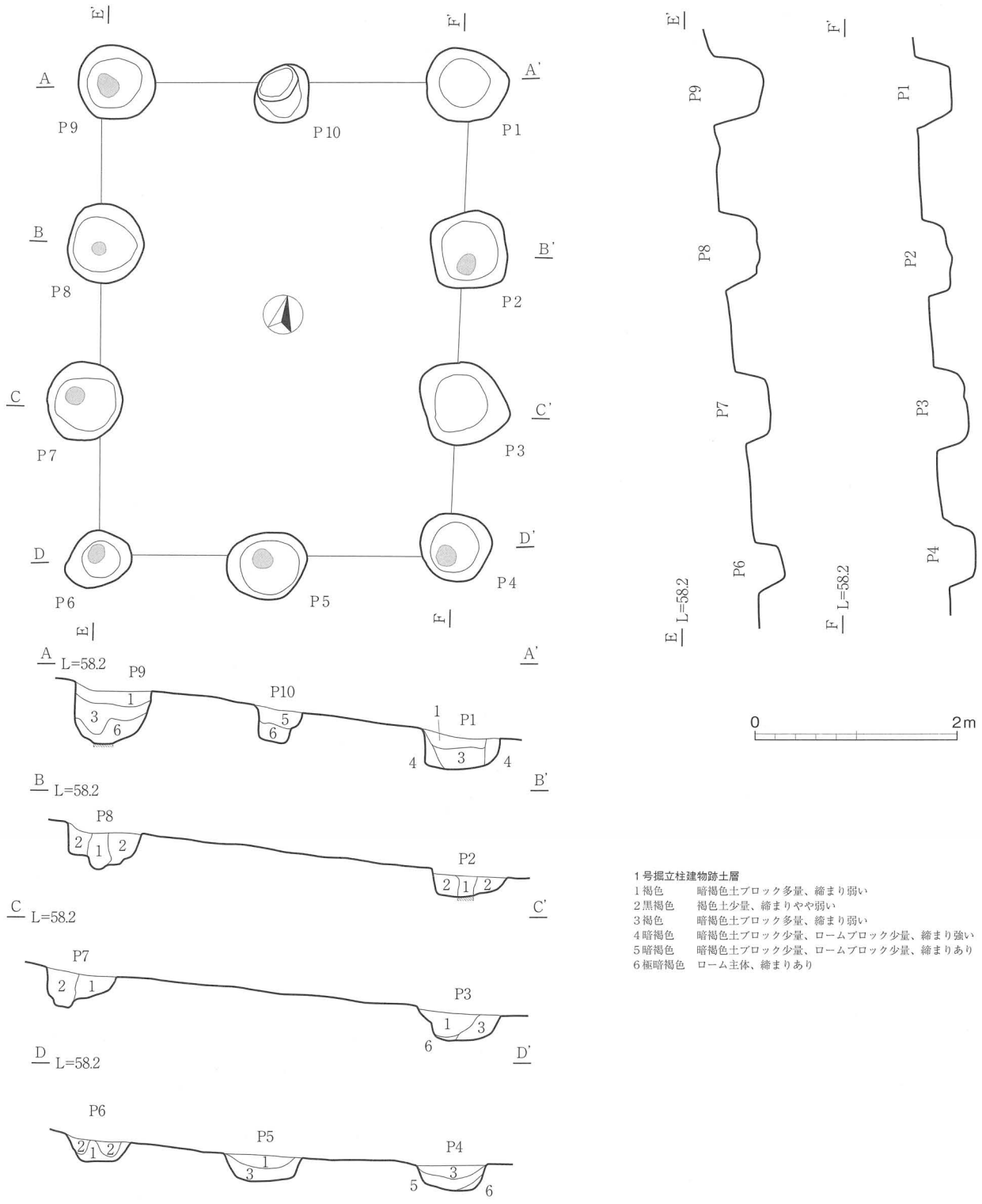
第61図　30号住居跡・出土遺物

表30　30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ － (7.0)	底部片。底部回転ヘラケズリ。	白色粒	普通	黄灰色	
2	須恵器 坏	－ － (7.8)	底部片。底部回転ヘラ切り離し後ナデか。	赤褐色粒、白色粒	不良	灰白色	

第２節　掘立柱建物跡

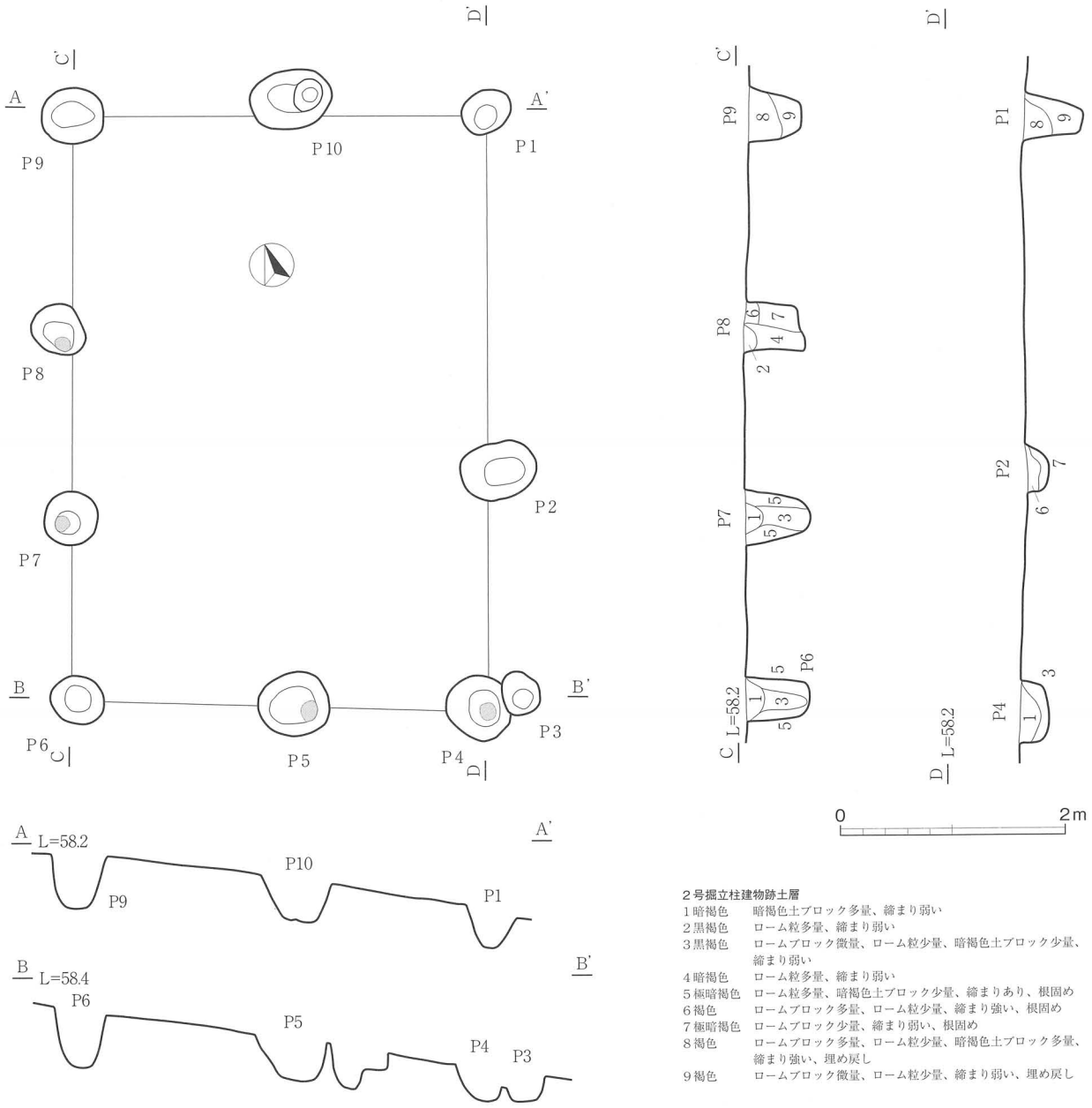
掘立柱建物跡の可能性のある遺構はＡ区から 14 棟確認されている。掘立柱建物跡の分布は、Ａ区の中央部南東寄りの標高の低い場所で２棟、そこからさらに北西方向に向かって標高を上げながら点々と 12 棟分布している。



第 62 図　１号掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第62図）

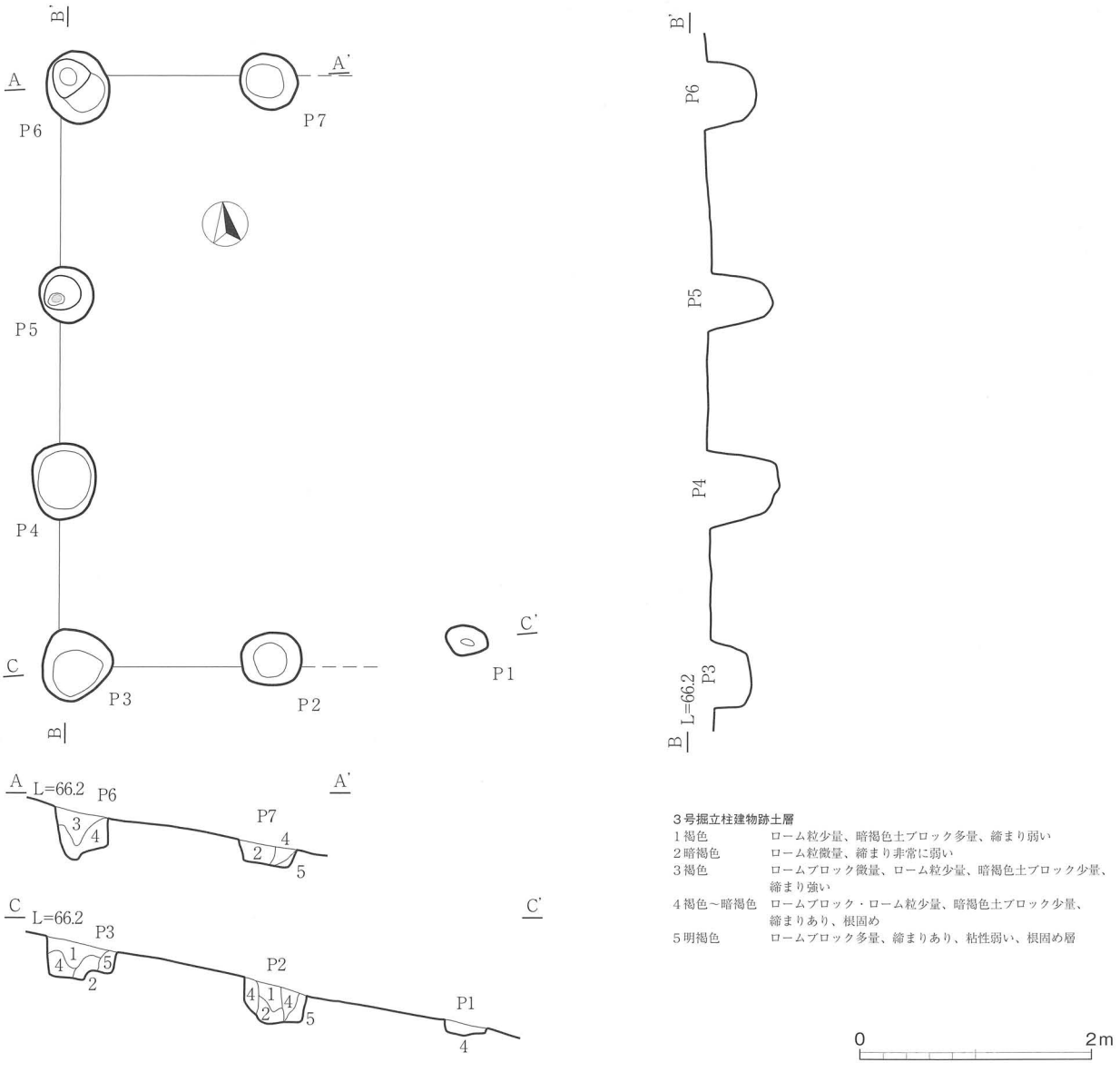
位置　E2グリッドにある。　**立地**　標高57.5mの東南東下がりの谷地形の底付近にあり、谷には黒褐色土が堆積しており、黒褐色土が確認面となっている。　**規模と構造**　桁行3間×梁行2間の側柱建物である。総長は桁行4.70m×梁行3.45mの長方形である。柱間は桁行が1.50～1.60mの等間。梁行は1.70～1.80mの等間と見られる。　**主軸方向**　N－10°－W。　**柱穴**　各柱穴の平面形は円形基調のものが主体で、P6が楕円形に近い。掘り方の大きさは径70～80cmである。P1掘り方底面に径約20cmの柱当たりが確認されている。　**柱穴覆土**　柱を固定するため、掘り方内に充填された土は、2層の黒褐色土や4～5層の締まりのある暗褐色土と見られる。据え付けられた柱の痕跡は土層断面としてP2、8で見られる。　**遺物**　遺物は出土していない。　**所見**　2号掘立柱建物跡とは柱どうしの直接の切り合い関係はないが、建物どうしの重複関係があり、前後関係があるものと見られる。



第63図　2号掘立柱建物跡

２号掘立柱建物跡（第 63 図）

位置　Ｅ２グリッドにある。　**立地**　標高 58.0m の東南東下がりの谷地形の底付近の緩斜面にあり、建物の長軸方向を等高線方向に合わせたように造られている。１号掘立柱建物跡と同様に黒褐色土が確認面となっている。　**規模と構造**　桁行３間×梁行２間の側柱建物と思われるが、東側桁行列の１本が確認されていない。総長は桁行 5.30 ｍ×梁行 3.60 ｍの長方形である。桁行の柱間は西側列北から 210、1.60、1.60 ｍ。梁行は南・北列とも西から 2.10、1.60 ｍと見られる。　**重複関係**　１号住居跡のカマド部分にＰ２が切られている。　**主軸方向**　Ｎ－21°－Ｅ。　**柱穴**　各柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、掘り方の大きさは径 37 ～ 70cmである。Ｐ４・５・７・８の掘り方底面に径約 15cm前後の柱当たり痕が確認されている。　**柱穴覆土**　土層断面で柱の据え付け痕跡がわかるものはＰ６・７・８で、柱穴覆土の５～７層は据え付け時の根固め土層である。　**遺物**　遺物は出土していない。　**所見**　１号住居跡が９世紀後半頃のものであり、２号掘立柱建物跡は９世紀前半以前の遺構と見られる。



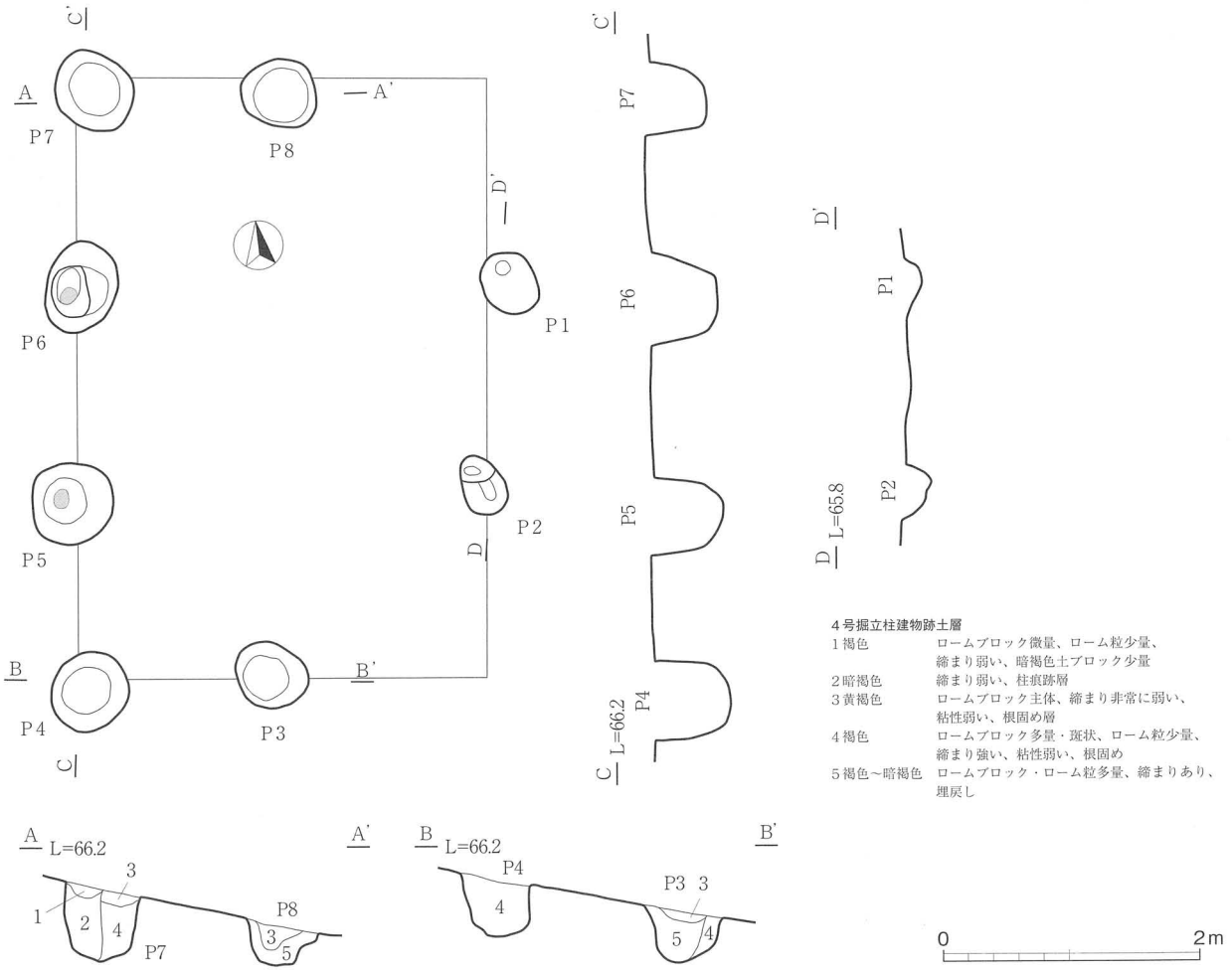
第 64 図　３号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（第64図）

位置　D1～2グリッドにある。　**立地**　調査区の北部、標高66.0mの斜面上にあり、建物の長軸方向を等高線方向に沿わせるように造られている。　**規模と構造**　桁行3間×梁行1間以上の建物と思われるが、東側桁行列が削平のため確認されていない。総長は桁行5.10mで梁行は削平のため不明である。桁行・梁行の柱間は約1.70mの等間と推定される。　**主軸方向**　N－6°－E。　**柱穴**　各柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、掘り方の大きさは径47～62cmである。　**柱穴覆土**　1・2層は柱本体の丁寧な抜き取りや立ち腐れ等による柱の痕跡層で、4・5層は柱据え付け時の根固め土層である。　**遺物**　遺物は出土していない。　**所見**　4・5号掘立柱建物跡と占地上の重複関係があるが、柱穴どうしが切り合っていないので、新旧関係は不明である。

4号掘立柱建物跡（第65図）

位置　D2グリッドにある。　**立地**　調査区の北部、標高66.0mの斜面上にあり、建物の長軸方向を等高線方向に沿わせるように造られている。　**規模と構造**　桁行3間×梁行2間の側柱建物で、東側桁行列の隅柱が2本削平のため確認されていない。総長は桁行4.80mで梁行は3.30mである。桁行・梁行の柱間は約1.60mの等間と推定される。　**主軸方向**　N－10°－E。　**柱穴**　各柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、掘り

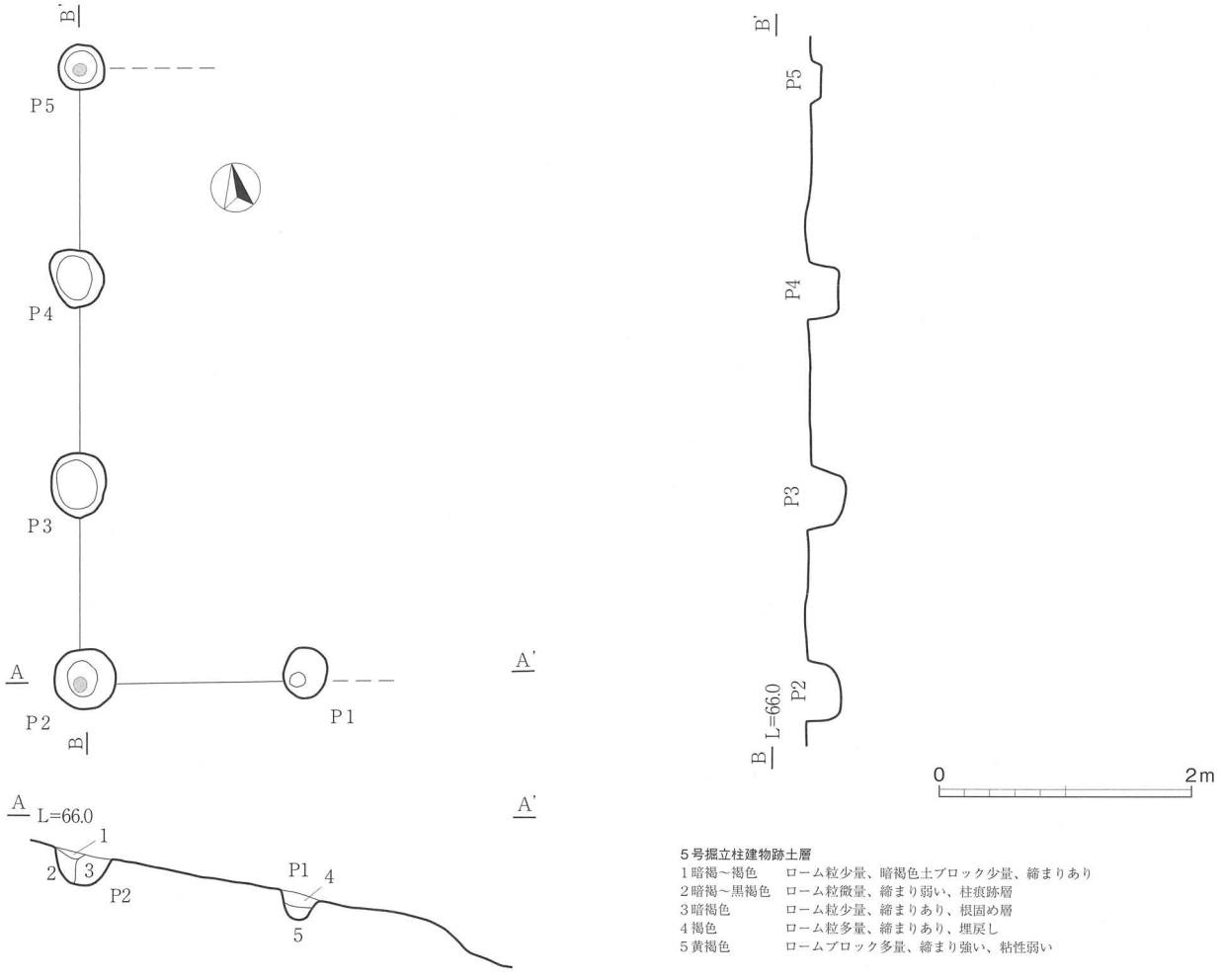


第65図　4号掘立柱建物跡

方の大きさは径54～74cmである。　**柱穴覆土**　２層は柱本体の痕跡層で、３・４層は柱据え付け時の根固め土層である。　**遺物**　遺物は出土していない。　**所見**　３・５号掘立柱建物跡と占地上の重複関係があるが、柱穴どうしが切り合っていないので、新旧関係は不明である。

５号掘立柱建物跡（第66図）

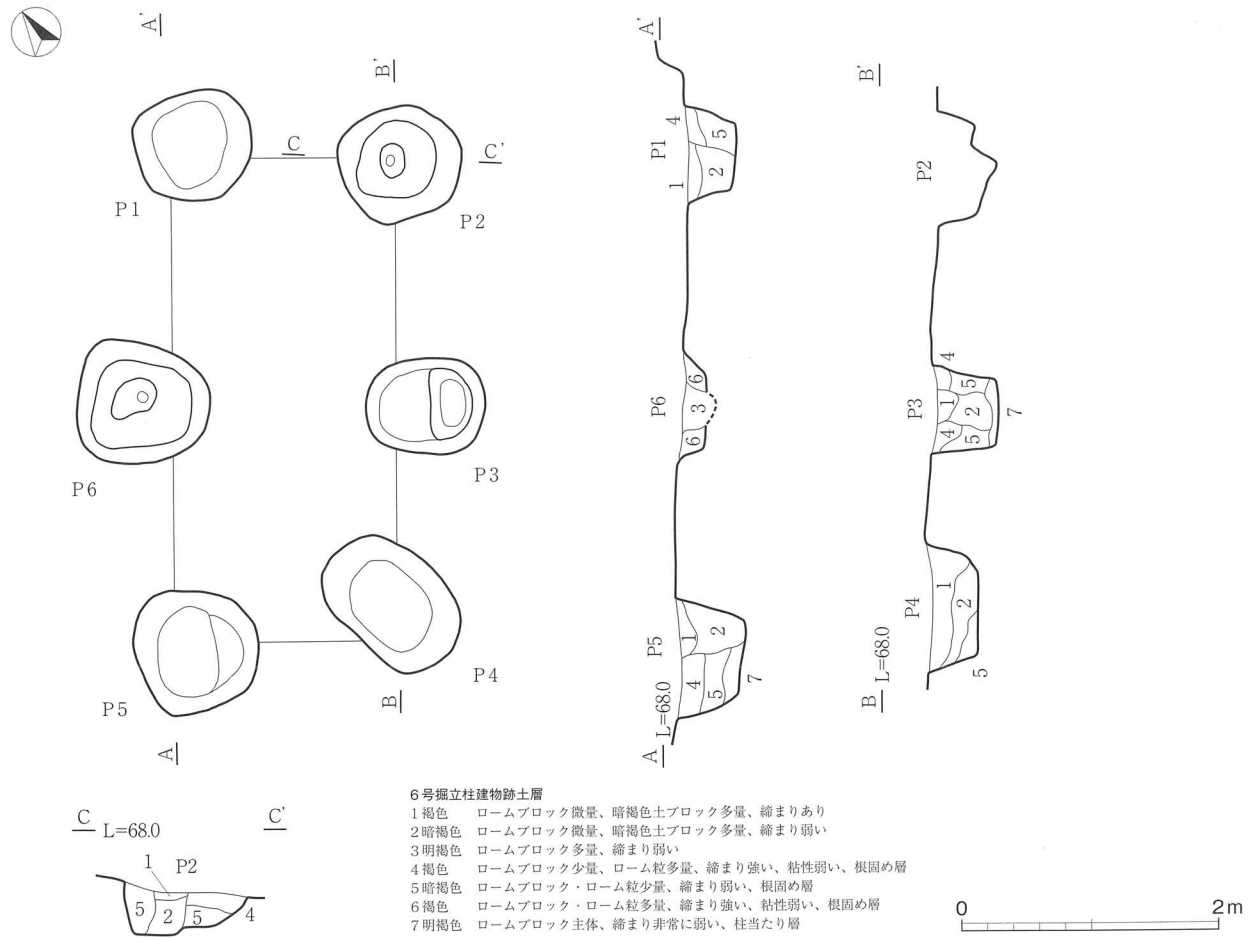
位置　Ｄ２グリッドにある。　**立地**　調査区の北部、標高66.0mの斜面上にあり、建物の長軸方向を等高線方向に沿わせるように造られている。　**規模と構造**　桁行３間×梁行１間以上の建物と思われるが、東側桁行列が削平のため確認されていない。総長は桁行4.95ｍで梁行は削平のため不明である。桁行・梁行の柱間は約1.65ｍの等間と推定される。　**主軸方向**　Ｎ－８°－Ｅ。　**柱穴**　各柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、掘り方の大きさは径38～51cmである。　**柱穴覆土**　２層は柱の痕跡層で、３層は柱据え付け時の根固め土層である。　**遺物**　遺物は出土していない。　**所見**　３・４号掘立柱建物跡と占地上の重複関係があるが、柱穴どうしが切り合っていないので、新旧関係は不明である。



第66図　５号掘立柱建物跡

６号掘立柱建物跡（第67図）

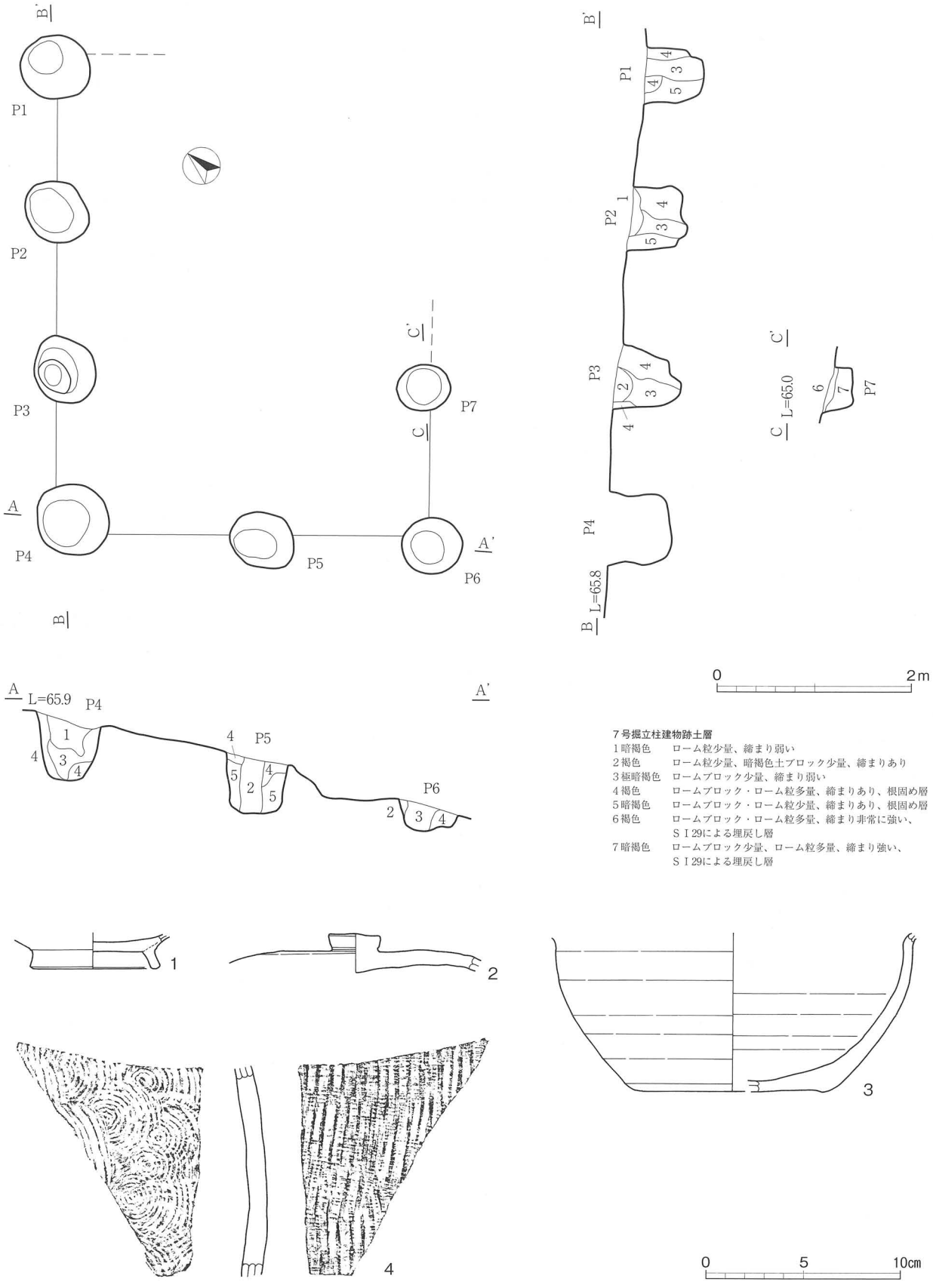
位置　Ｃ２グリッドにある。　**立地**　調査区の北部、標高68.0mの斜面上にある。　**規模と構造**　２間×１間以上の建物と思われるが、北西部が削平のため確認されていない。総長は3.60ｍである。柱間は約1.80ｍ前後の等間と推定される。　**主軸方向**　Ｎ－33°－Ｅ。　**柱穴**　各柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、掘り方の大きさは径93～120cmである。　**柱穴覆土**　１・２・３層は柱の痕跡層で、４・５・６・７層は柱据え付け時の根固め土層である。　**遺物**　遺物は出土していない。　**所見**　大型の掘り方を持つ掘立柱建物跡で、北西部にもう１間分延びていたなら、総柱の倉庫建物となる。その可能性はあると思われる。



第67図　６号掘立柱建物跡

７号掘立柱建物跡（第68図）

位置　Ｃ２グリッドにある。　**立地**　標高65.0mの東南東下がりの斜面にあり、建物の長軸方向を等高線方向に合わせている。　**規模と構造**　桁行３間×梁行２間の側柱建物で、総長は桁行4.80ｍ×梁行3.70ｍの長方形である。桁行の柱間は1.60ｍ。梁行は南列が西から2.10、1.60ｍと見られる。　**重複関係**　29号住居跡にＰ５・７が切られている。　**主軸方向**　Ｎ－47°－Ｅ。　**柱穴**　各柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、掘り方の大きさは径60～70cmである。　**柱穴覆土**　土層断面で柱の据え付け痕跡がわかるものはＰ１～３・



第68図　７号掘立柱建物跡・出土遺物

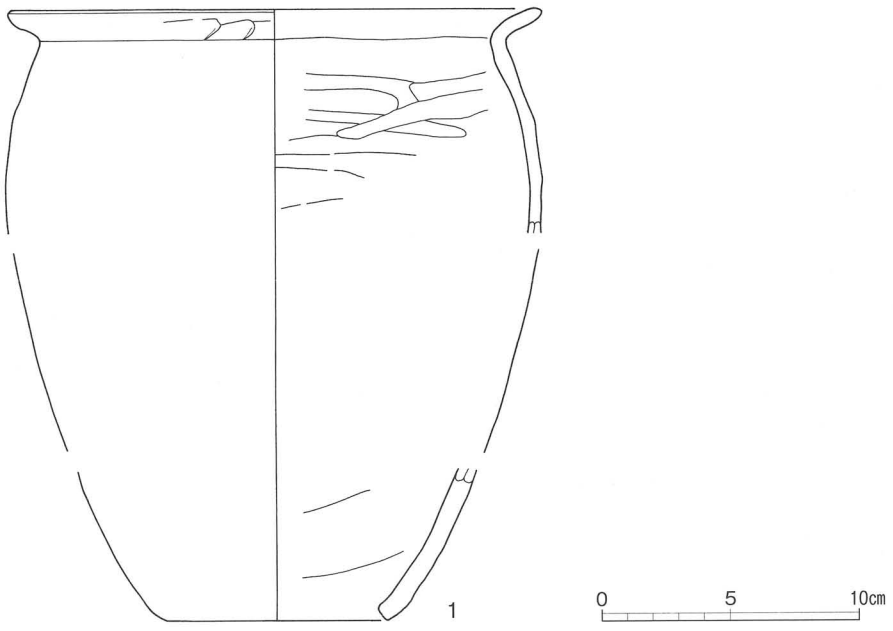
５・６で、柱穴覆土の４～５層は据え付け時の根固め土層である。　**遺物**　遺物はＰ２から１の須恵器高台付坏と４の須恵器甕胴部片、Ｐ４から２の須恵器蓋と３の須恵器鉢が出土している。２・３の須恵器は８世紀後葉頃のものと思われる。　**所見**　29号住居跡が９世紀前半頃のものであり、２号掘立柱建物跡は９世紀前半頃よりも古い遺構で、出土遺物から、８世紀後葉頃の遺構と見られる。

表31　７号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 高台付坏	－ － (6.7)	底部片。	石英、白色粒、海綿骨針	普通	灰色	30%
2	須恵器 蓋	－ － －	摘み部片。	石英、白色粒、海綿骨針	普通	灰色	30%
3	須恵器 鉢	－ － (9.9)	体部片。	石英、白色粒	普通	緑灰色	30%
4	須恵器 甕	－ －	胴部片。	石英、白色粒、海綿骨針？	良好	暗灰色	

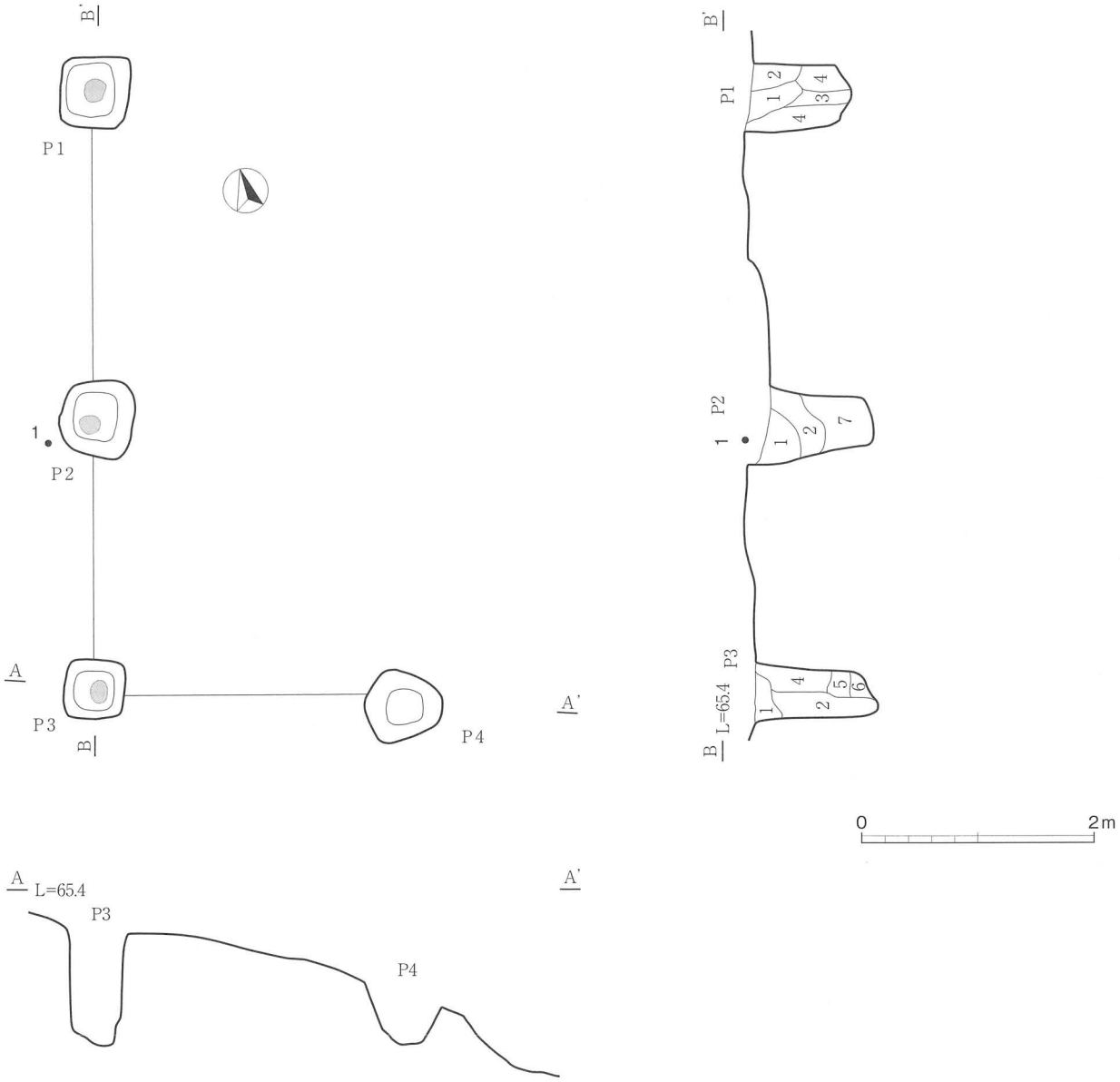
８号掘立柱建物跡（第69・70図）

位置　Ｄ１～２グリッドにある。　**立地**　標高65.0mのほぼ東下がりの斜面にある。　**規模と構造**　南北方向に２間、東西方向に１間分を確認している。柱間は南北方向は北から2.80m、2.25m、東西方向は2.60mである。　**主軸方向**　Ｎ－16°－Ｅ。　**柱穴**　各柱穴の平面形は方形を基調としており、掘り方の大きさは一辺52～65cmである。　**柱穴覆土**　土層断面で柱の据え付け痕跡がわかるものはＰ１・３である。　**遺物**



第69図　８号掘立柱建物跡出土遺物

Ｐ２の掘り方の西側の縁部分から炭化物とともに１の土師器の甑が出土している。　**所見**　Ｐ２の掘り方際から出土している土師器の甑が確実に遺構に伴うかどうかは難しいが、遺物は８世紀後葉頃のものと思われる。



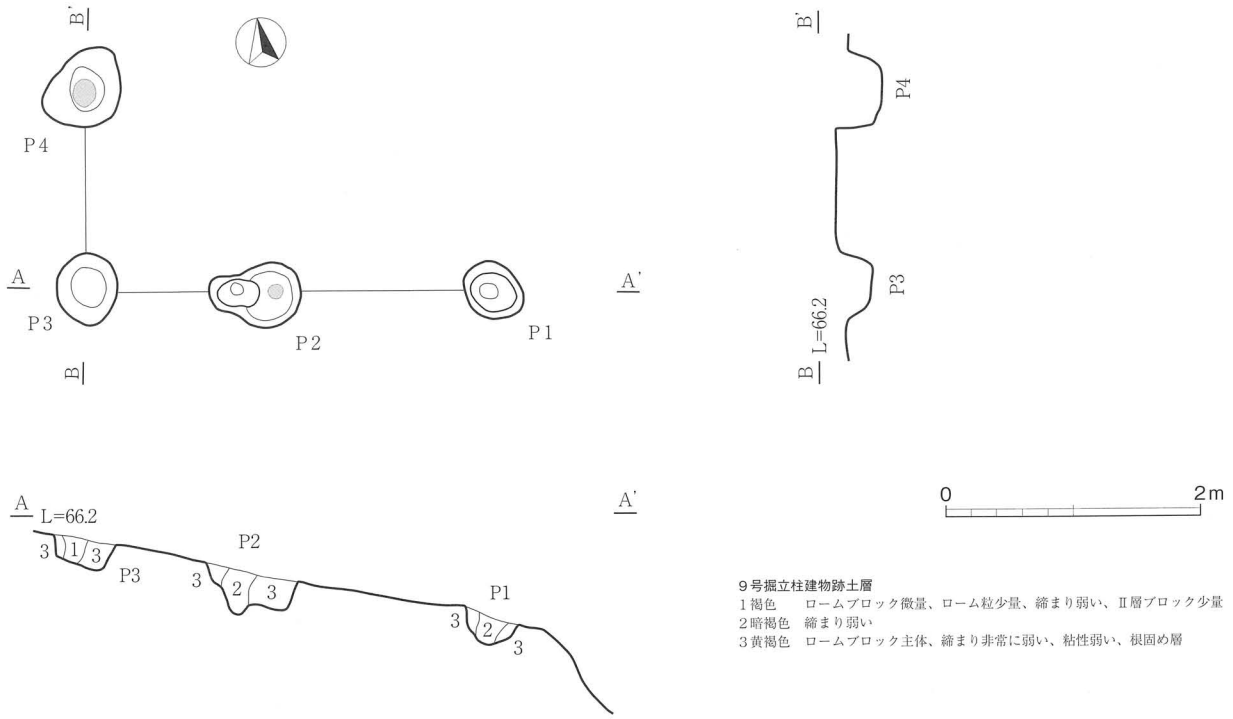
第 70 図　８号掘立柱建物跡

表 32　８号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甑	(21.0) – (8.6)	口縁～胴、底部	石英、海綿骨針、角閃石	普通	黒褐色	

9号掘立柱建物跡（第71図）

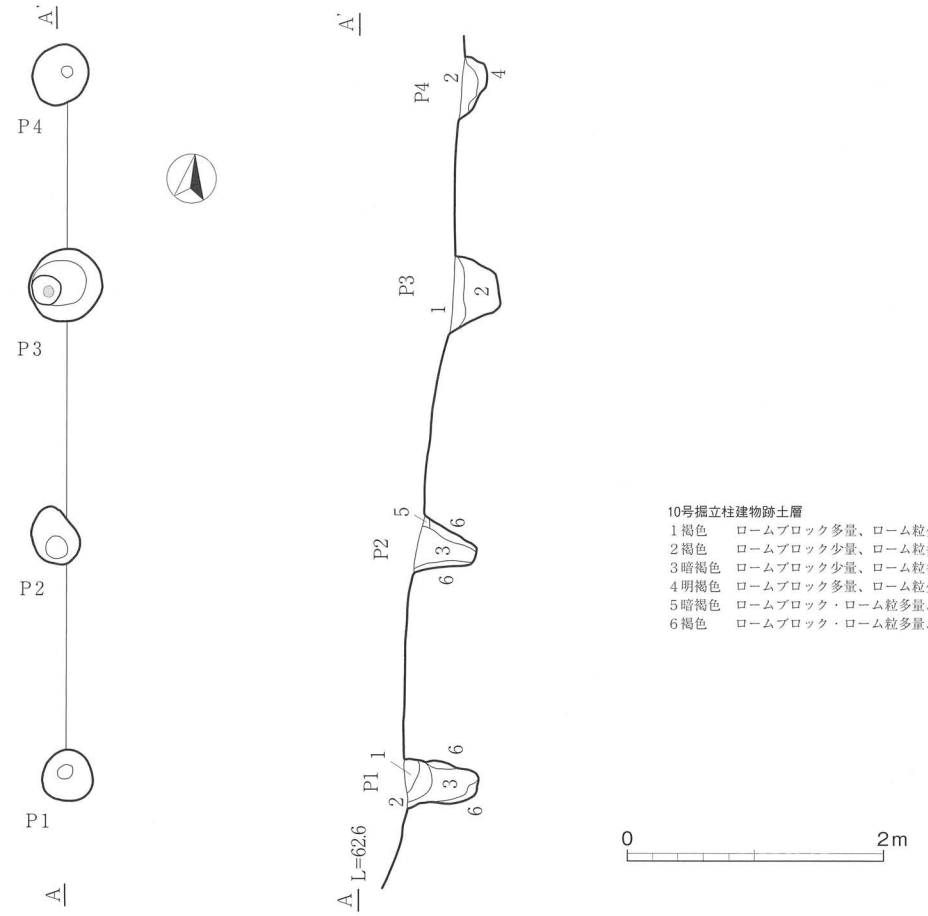
位置　D２グリッドにある。　**立地**　標高65.0mの東南東下がりの斜面にある。　**規模と構造**　南北方向に１間、東西方向に２間分を確認している。南北方向の２本のピットは４号掘立柱建物跡の西側梁行列のほぼ延長線上にある。柱間はすべて1.60ｍと見られる。　**主軸方向**　Ｎ－10°－Ｅ。　**柱穴**　各柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、掘り方の大きさは径45～60cmである。　**柱穴覆土**　土層断面で柱の据え付け痕跡がわかるものはＰ１・３で、Ｐ２の２層は、柱当たりの痕跡の位置と合わないので別の要因によるものと思われる。　**遺物**　遺物は出土していない。　**所見**　４号掘立柱建物跡と主軸方向、位置関係、柱間等の点で関係が深く、ほぼ同時期の建物跡かと思われる。



第71図　９号掘立柱建物跡

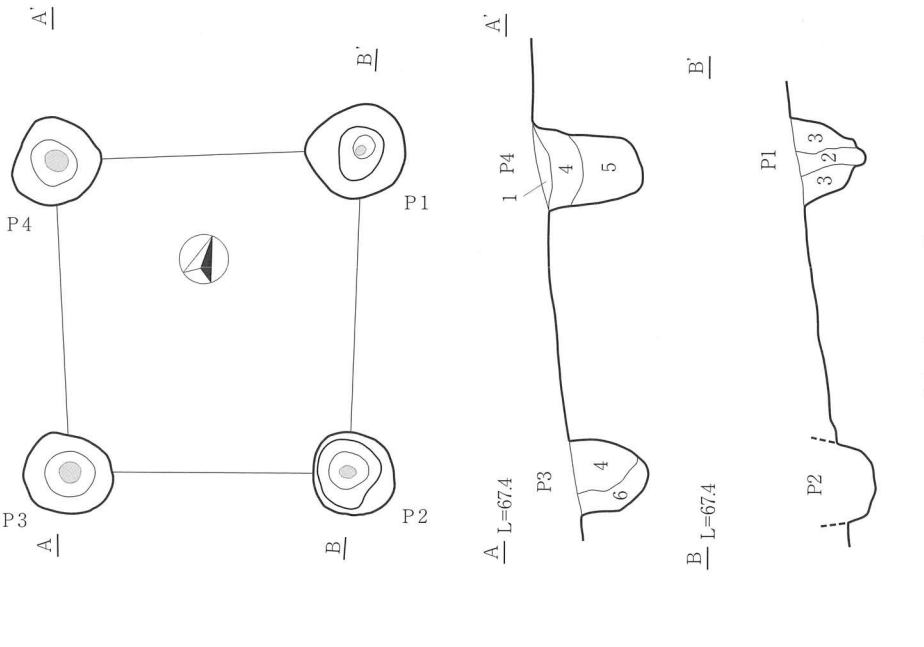
10号掘立柱建物跡（第72図）

位置　A区の中央部Ｅ２グリッドにある。　**立地**　標高62.0mの東下がりの斜面にある。　**規模と構造**　南北方向に３間分の柱穴列を確認している。柱間は北から1.8m、2.0m、1.8mである。　**主軸方向**　Ｎ－10°－Ｗ。　**柱穴**　各柱穴の平面形は楕円形を基調としており、掘り方の大きさは長径40～70cmである。　**柱穴覆土**　５・６層は、ロームブロックやローム粒を多量に含み、柱設置の際の根固め層と思われる。１～３層は、抜き取り等に伴う土層堆積と思われる。　**遺物**　出土していない。　**所見**　建物の東側が削平されているものと考えると、１号掘立柱建物跡のような２×３間の建物が想定される。１号掘立柱建物跡と比べると主軸方向は同じだが、柱間が違っている。



10号掘立柱建物跡土層
1 褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、締まりあり
2 褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、締まりあり
3 暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、締まりやや弱い
4 明褐色　ロームブロック多量、ローム粒少量、締まりあり
5 暗褐色　ロームブロック・ローム粒多量、締まり弱い
6 褐色　ロームブロック・ローム粒多量、締まり・粘性あり、根固め層

第72図　10号掘立柱建物跡



13号掘立柱建物跡土層
1 暗褐色　ローム粒少量、締まり弱い
2 黒褐色　ローム粒微量、締まり非常に弱い
3 暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、締まり強い、根固め層
4 褐色　ロームブロック・ローム粒多量、鹿沼パミスブロック少量、締まり強い
5 暗褐色　締まり弱い
6 黒褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、締まり弱い

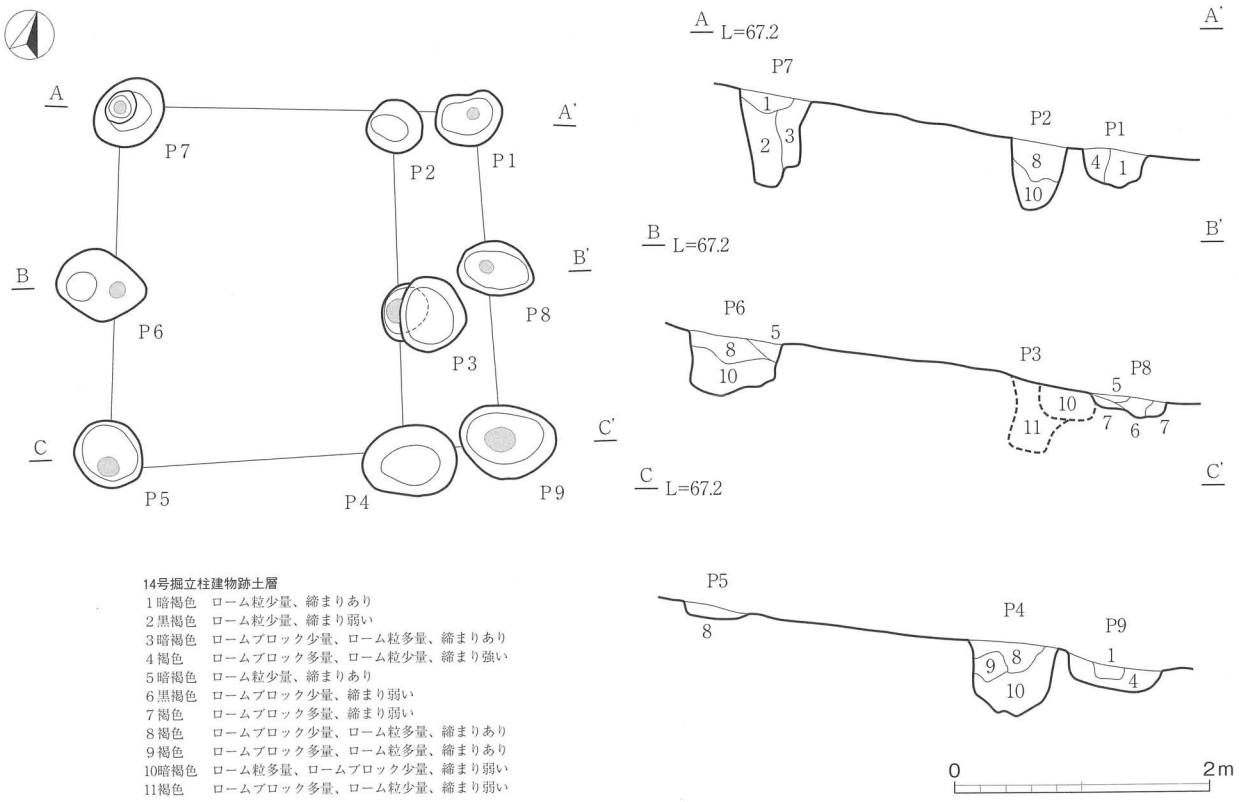
第73図　13号掘立柱建物跡

13号掘立柱建物跡（第73図）

位置　A区の北部D１グリッドにある。　**立地**　標高66.5mの東下がりの斜面にある。　**規模と構造**　１間四方分の柱穴列を確認している。柱間は東西方向2.2～2.35m、南北方向2.5mである。　**主軸方向**　N－23°－W。**柱穴**　各柱穴の平面形は楕円形で、底面には柱当たりの痕跡があり、柱穴であると思われる。掘り方の大きさは長径65～75cmである。　**柱穴覆土**　Ｐ１の３層は、締まりのある根固め層で、土層断面に柱痕が見られるが、その他のピットの土層は軟らかくロームブロックやローム粒を多量に含み、柱材の抜き取り後の堆積土層と思われる。　**遺物**　出土していない。　**所見**　調査時点では、掘立柱建物跡の柱穴として調査されているが、一間四方の建物であることと、他の掘立柱建物跡が地形の傾斜方向に対して桁行方向を直交させているのに対して、この建物は等高線とは無関係な方向を向いており、むしろ周囲の竪穴住居跡との主軸方向と近いものがある。

14号掘立柱建物跡（第74図）

位置　A区の北部D２グリッドにある。　**立地**　標高66.5mの東下がりの斜面にある。　**規模と構造**　南北方向に２間分の柱穴列、東西方向に１間ないし２間分の柱列を確認している。柱間は南北列は1.3m～1.4m、東西方向は西側列からＰ２・３・４列までが2.15m、Ｐ１・８・９列までは2.75～3.00mである。　**主軸方向**　N－15～20°－W。　**柱穴**　各柱穴の平面形は楕円形を基調としており、掘り方の大きさは長径44～66cmである。底面柱当たり痕が７箇所で確認されている。Ｐ３と６で柱穴に重なりがあるようで、Ｐ３の場合、新しい方の穴はＰ２と４を結ぶ線から東にずれている。Ｐ６の場合、底面の窪みと別に柱当たり痕があり、底面の窪みはＰ７と５を結ぶ線の西側にある。　**柱穴覆土**　Ｐ７層で土層断面に柱痕が見られる。　**遺**

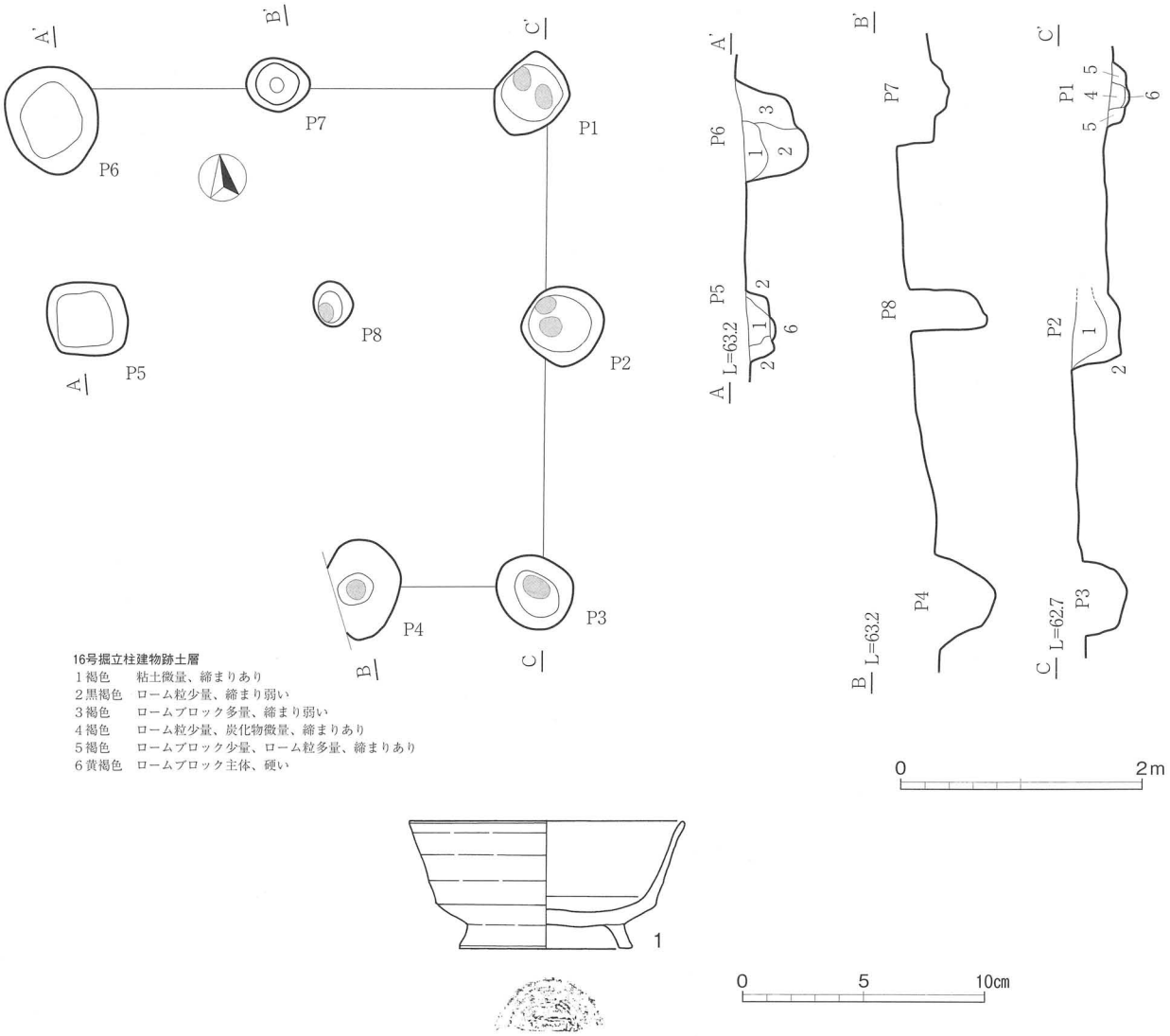


第74図　14号掘立柱建物跡

物　出土していない。　**所見**　南北方向２間、東西方向を１間と想定すると同じ位置に３度の建て替えが考えられる。

16号掘立柱建物跡（第75図）

位置　Ｄ２グリッドにある。　**立地**　調査区の北部、標高63.0mの斜面上にある。　**規模と構造**　２間×２間の総柱建物と思われるが、南西部が竪穴住居跡に削平されている。総長は4.15ｍ前後の方形である。柱間は1.60～2.10ｍの範囲であまり整わない。　**重複関係**　９号住居跡に南西隅のピットを壊されている。**主軸方向**　Ｎ－7°－Ｅ。　**柱穴**　各柱穴の平面形は、円形ないし楕円形のものと方形のものがある。掘り方の大きさは径50～93cmである。柱当たり痕を持つものはＰ１～４、Ｐ８で、Ｐ１とＰ２は柱当たり痕が２カ所ずつある。　**柱穴覆土**　Ｐ１の４層は柱痕で、６層は柱当たりの硬化層である。　**遺物**　Ｐ３から１の須恵器高台付坏が出土している。　**所見**　配列と柱間寸法の整わない総柱建物跡で、９世紀前葉に廃絶し



第75図　16号掘立柱建物跡・出土遺物

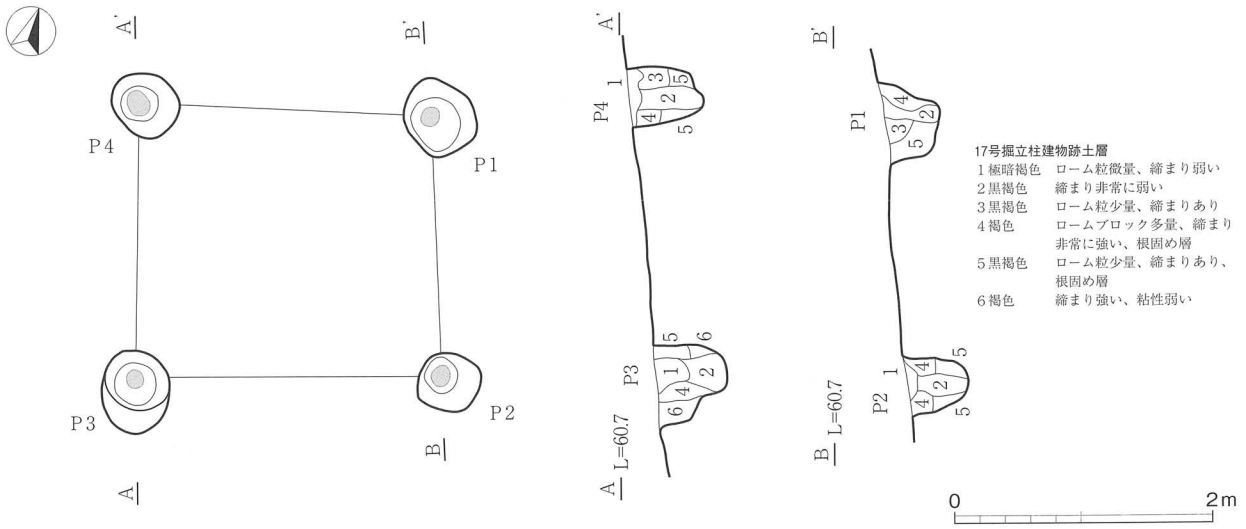
ていると見られる９号住居跡よりも古く、出土している須恵器高台付坏は８世紀後葉頃のものであることから、８世紀後半代の掘立柱建物跡と考えられる。

表 33　16 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(11.6) 5.3 7.2	底部刻書「市」カ。	海綿骨針、石英	良好	灰色	25%

17 号掘立柱建物跡（第 76 図）

位置　A区の北部Ｄ２グリッドにある。　**立地**　標高 60.5m の南東下がりの斜面にある。　**規模と構造**　1 間四方分の柱穴列を確認している。柱間は東西方向 2.3 ～ 2.4m、南北方向 2.1 ～ 2.2m である。　**主軸方向**　N－18°－W。　**柱穴**　各柱穴の平面形は楕円形で、底面には柱当たりの痕跡がある。掘り方の大きさは長径 48 ～ 60cmである。　**柱穴覆土**　各ピットともに土層断面に柱痕が明瞭に残り、柱周りは褐色土と黒褐色土を互層に詰め固めている。　**遺物**　ピットに伴うものは出土していない。　**所見**　掘立柱建物跡の柱穴として調査されているが、一間四方の建物であることと、等高線とは無関係な方向を向いていることなどから、床面が削られ、柱穴だけが残った竪穴住居主柱の可能性もある。



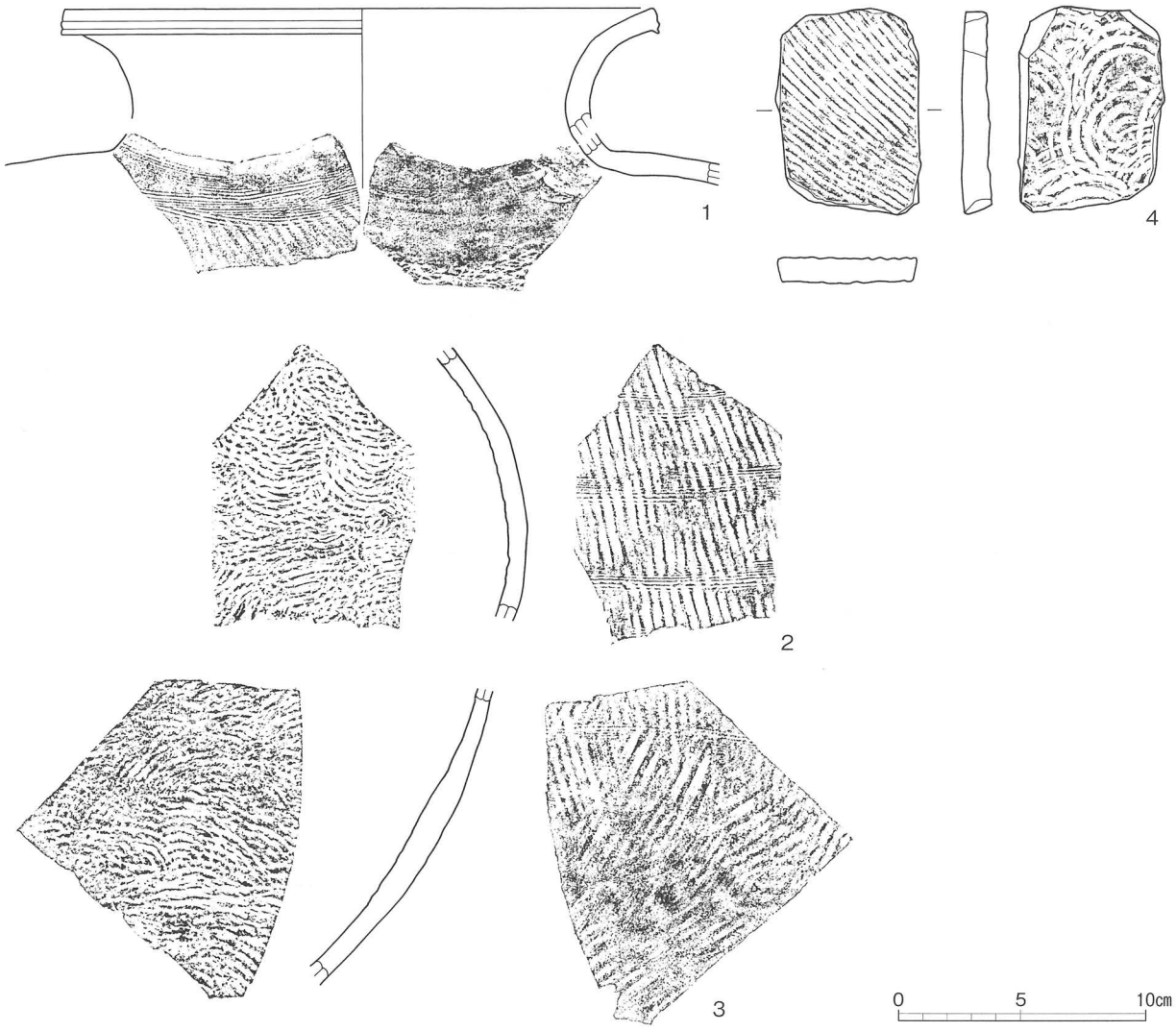
第 76 図　17 号掘立柱建物跡

第３節　溝

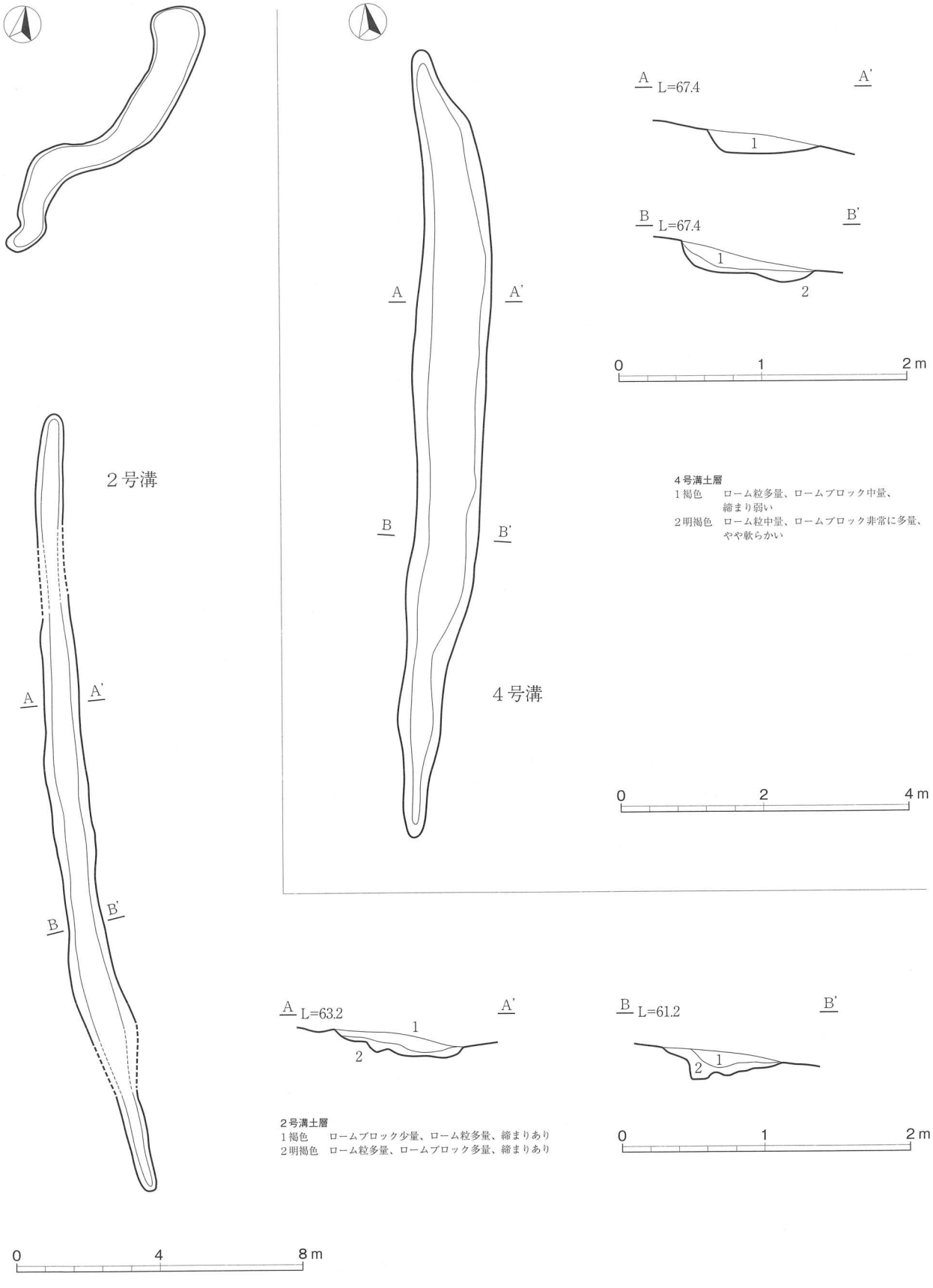
溝跡は３条確認された。中央部の２号溝と南西部の５号溝は、いずれも北北西から南南東に向かい、等高線を緩やかに下っていくように掘られている。北部の４号溝は北北東から南南西に向かって下っている。調査で４号住居跡を壊して延びているように捉えた旧１号溝跡は、後世に地形を削った結果造られた傾斜角度の変換点のラインと見られる。３号溝跡は欠番である。

２・４号溝（第 78 図）は、幅１ｍ以内で深さも浅く、出土遺物に乏しい。２号溝では古代のどの遺構よりも新しく、Ａ地区の中央部を南から北東部にかけて地形を削る地形改変のラインと平行して延びているので、地形を削ったときに外側を区画するために掘られた溝跡と推測されるが、時期については不明である。

５号溝（第 77・79 図）は、最大幅 1.6m、深さ 0.65m の逆台形の溝で、遺構確認の切り合い状況から、19 号住居跡よりは新しい。覆土から１～４のような須恵器の甕が出土している。１～３の須恵器大型甕は、胴

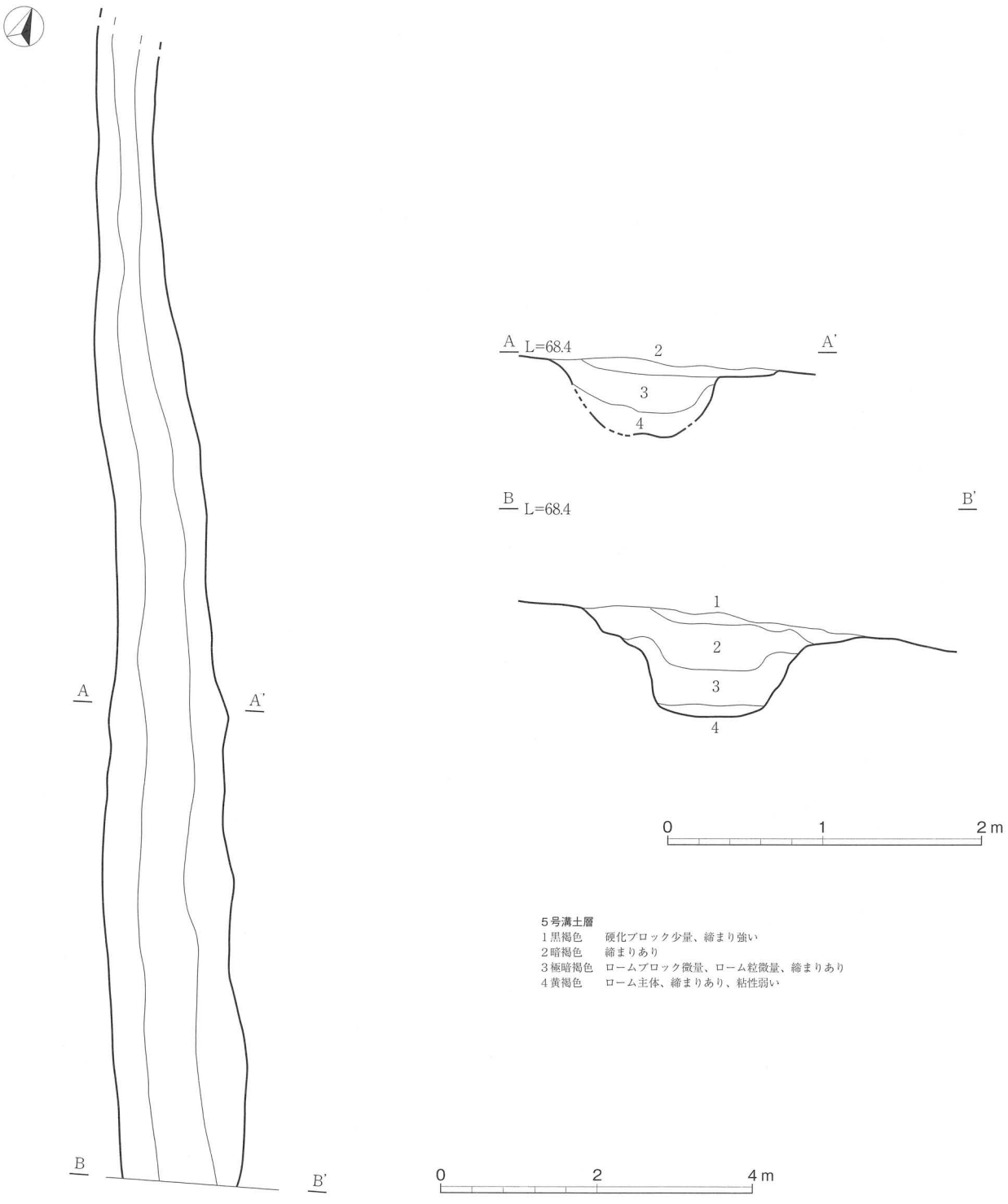


第 77 図　５号溝出土遺物


A
A'
L=67.4
1
B
B'
L=67.4
1
2
0
1
2m
4号溝土層
1褐色　ローム粒多量、ロームブロック中量、
締まり弱い
2明褐色　ローム粒中量、ロームブロック非常に多量、
やや軟らかい
4号溝
0
2
4m
2号溝
A
A'
B
B'
A
L=63.2
A'
1
2
B
L=61.2
B'
2
1
2号溝土層
1褐色　ロームブロック少量、ローム粒多量、締まりあり
2明褐色　ローム粒多量、ロームブロック多量、締まりあり
0
1
2m
0
4
8m

第78図　2・4号溝

部外面の斜位の平行叩きの上に刷毛工具による螺旋状文が施されてる。胴下半部の形状から丸底底部になるものと思われ、8世紀中葉以前の時期のものかと思われる。4の須恵器甕の胴部片は自然損壊による形状にしては、整った長方形であり、破面も二次的な摩耗痕があるため。破片としてなんらかの使用がされている可能性を考えて掲載した。



第79図　5号溝

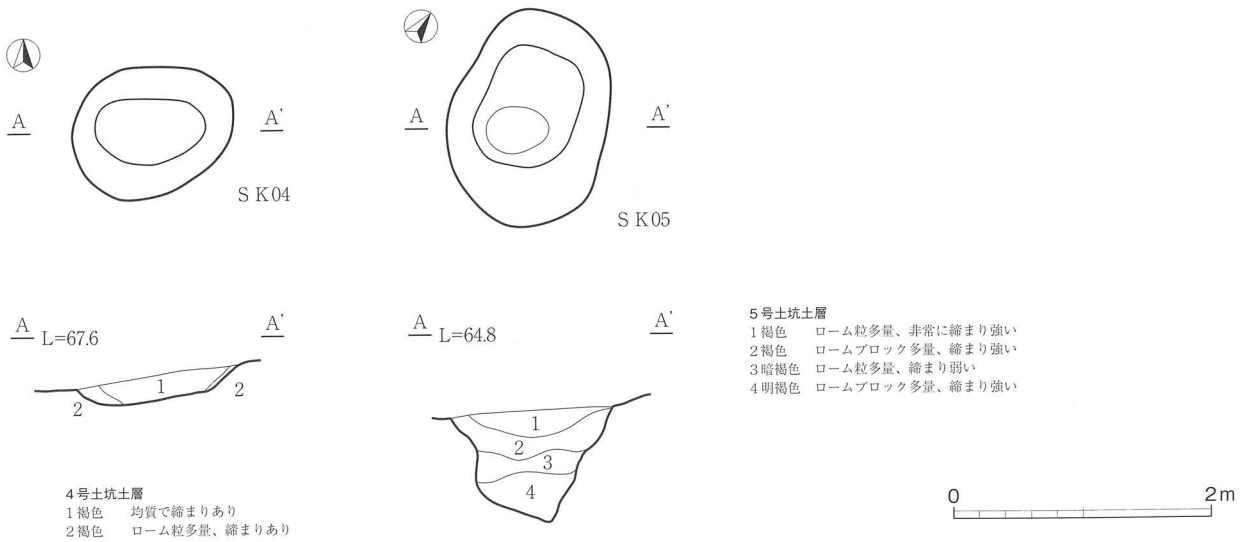
表34　5号溝出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 甕	(24.3) – –	口縁部片。肩部に幅の狭いカキ目痕。胴部斜位の平行叩き。	長石粒・礫	良好	暗灰色	2･3と同一個体
2	須恵器 甕	– – –	胴部片。外面斜位の平行叩き、幅の狭いカキ目のような螺旋状文が巡る。	長石粒・礫	良好	暗灰色	
3	須恵器 甕	– – –	胴部片。外面斜位の平行叩き、幅の狭いカキ目のような螺旋状文が巡る。	長石粒・礫	良好	灰色	
4	須恵器 甕	長さ8.4cm、幅5.4cm、厚さ1.1cm、重さ86.4g。		白色粒	良好	灰色	甕胴部をリサイクルし、土製品として使用か。

第4節　土坑

土坑は2基確認されている。北端部にある4号土坑は、掘立柱建物跡の際にある。南部の5号土坑は単独の大型土坑としてある。1～3号土坑は調査の結果根穴として欠番になっている。

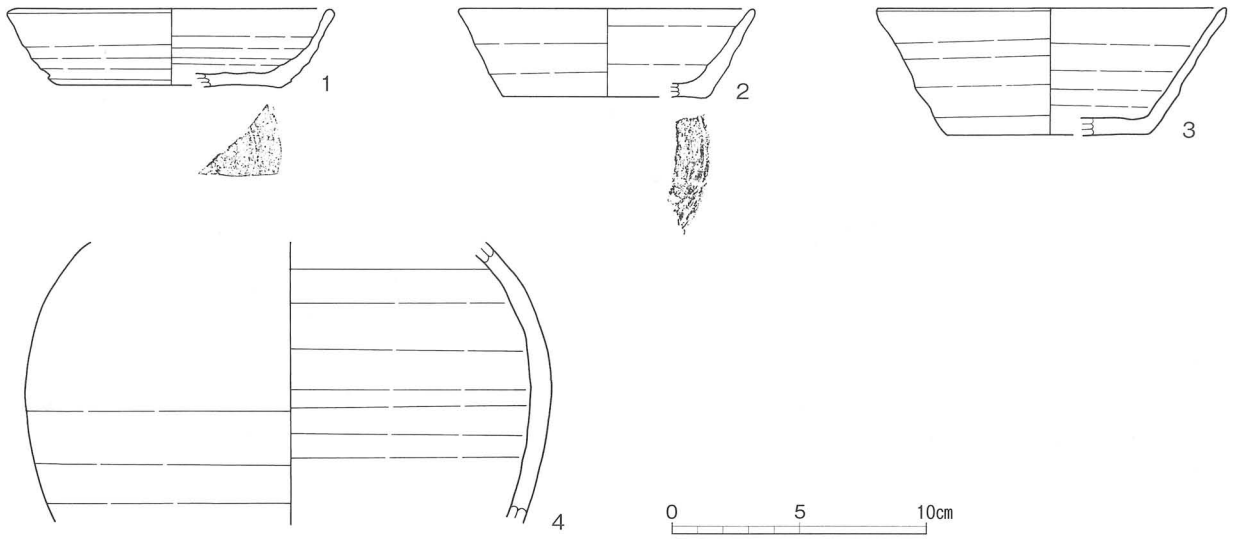
4号土坑（第80図）は、径1.20×0.98mの楕円形で深さ0.20m、覆土は褐色主体で締まりがあり、出土遺物はなく時期不明である。5号土坑（第80図）は、1.65×1.16mの楕円形で、深さ0.84mあり褐色土を主体としてロームブロックを多量に含む層で埋没している。出土遺物がなく時期不明である。



第80図　4・5号土坑

第５節　表採・遺構外出土遺物

Ａ区の表採・遺構外遺物として奈良・平安時代の遺物４点を掲載している（第81図）。１・２の須恵器坏は１号住居跡覆土から出土しているが、１号住居跡は９世紀後半代の住居跡で、１・２の須恵器坏は８世紀代のものであるので、混入遺物としてここに掲載する。３の須恵器坏は、調査区中央部西寄りの表土から出土している。９世紀前葉頃の時期のものと思われる。４の須恵器長頸瓶は、調査区北部の南寄りにある３・４・５号掘立柱建物跡の西側の表土から出土している。その他に縄文土器が奈良・平安時代の住居跡や溝から出土している。（土生）



第81図　遺構外出土遺物

表35　遺構外出土遺物観察表

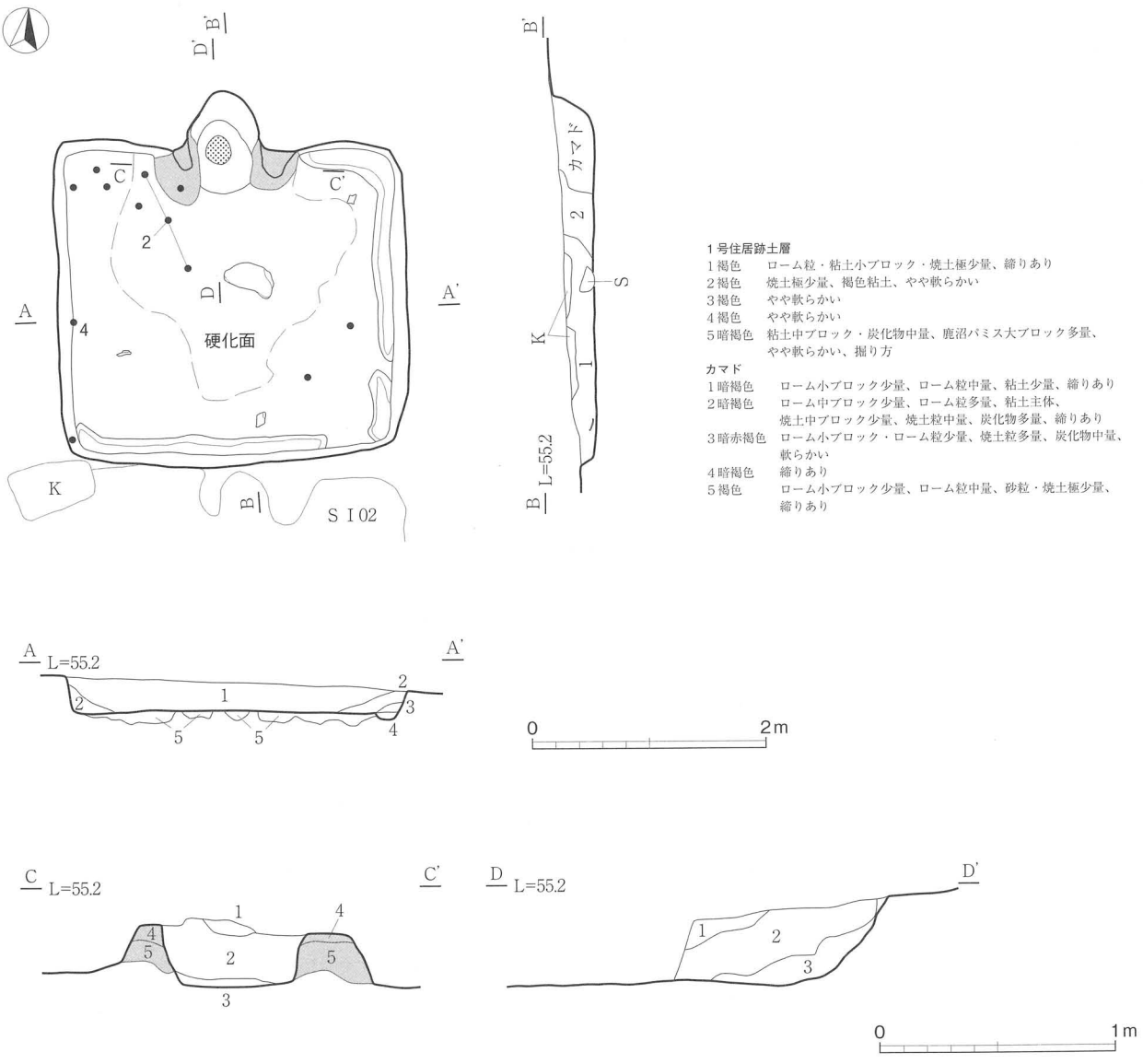
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(12.8) 3.1 (8.6)	体部下端及び底部回転ヘラケズリ調整、ロクロ右回転。	長石微粒、軟質黒色粒	良好	青灰色	10%、ＳＩ01覆土出土
2	須恵器 坏	(11.6) 3.5 (7.8)	底部回転ヘラケズリ調整、ロクロ右回転。	石英、チャート角丸礫少量	不良	灰白色	10%、ＳＩ01覆土出土
3	須恵器 坏	(13.6) 5.0 (7.9)	底部ヘラナデ。	白色粒	普通	灰色	40%、D1グリッド南東部表土
4	須恵器 長頸瓶	－ － －	体部ロクロナデ調整。外面肩部降灰により、僅かに自然釉が流れる。	白色粒	良好	灰色	50%、D1グリッド南東部表土

第Ⅴ章　B区の遺構と遺物

第1節　竪穴住居跡

1号住居跡（第82・83図）

位置　E3～F3グリッドにある。　**規模と平面形**　2.70×2.68mで隅角が丸い方形である。　**重複関係**　2号住居跡のカマド北側部分を壊している。　**主軸方向**　N－9°－W。　**壁**　壁高は30cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　硬化した範囲は全面ではなく、カマド前庭から南に170cm、最大幅200cm範囲とし南側で70cmと狭くなるが南壁までは達していない。壁溝は北隅角から南側に亘り断続的にめぐる。南東隅から40cm開口する。カマド対面にピットが無いことからこの開口部も出入り口としての可能性を残す。　**ピット**

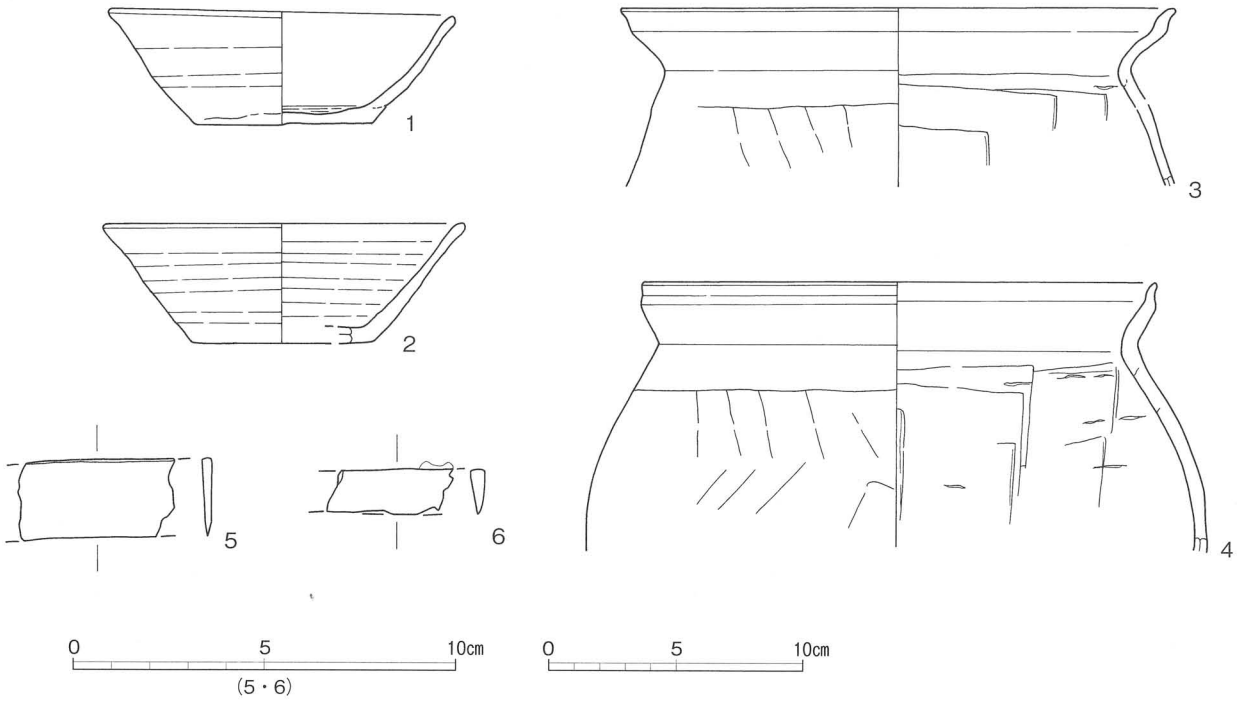


1号住居跡土層
1褐色　ローム粒・粘土小ブロック・焼土極少量、締りあり
2褐色　焼土極少量、褐色粘土、やや軟らかい
3褐色　やや軟らかい
4褐色　やや軟らかい
5暗褐色　粘土中ブロック・炭化物中量、鹿沼パミス大ブロック多量、やや軟らかい、掘り方

カマド
1暗褐色　ローム小ブロック少量、ローム粒中量、粘土少量、締りあり
2暗褐色　ローム中ブロック少量、ローム粒多量、粘土主体、焼土中ブロック少量、焼土粒中量、炭化物多量、締りあり
3暗赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒少量、焼土粒多量、炭化物中量、軟らかい
4暗褐色　締りあり
5褐色　ローム小ブロック少量、ローム粒中量、砂粒・焼土極少量、締りあり

第82図　1号住居跡

床面上に柱穴はない。　**カマド**　北壁のほぼ中央にあり、煙道部は地山内に切り込み、燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。袖部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部には火床面が残る。　**覆土**　自然堆積である。　**遺物**　カマド西側と床面南側に散見される。床面中央の扁平礫はカマド構築材であろう。1·2の須恵器坏はいずれも底部を回転ヘラ切りとする。　**所見**　9世紀中葉頃である。



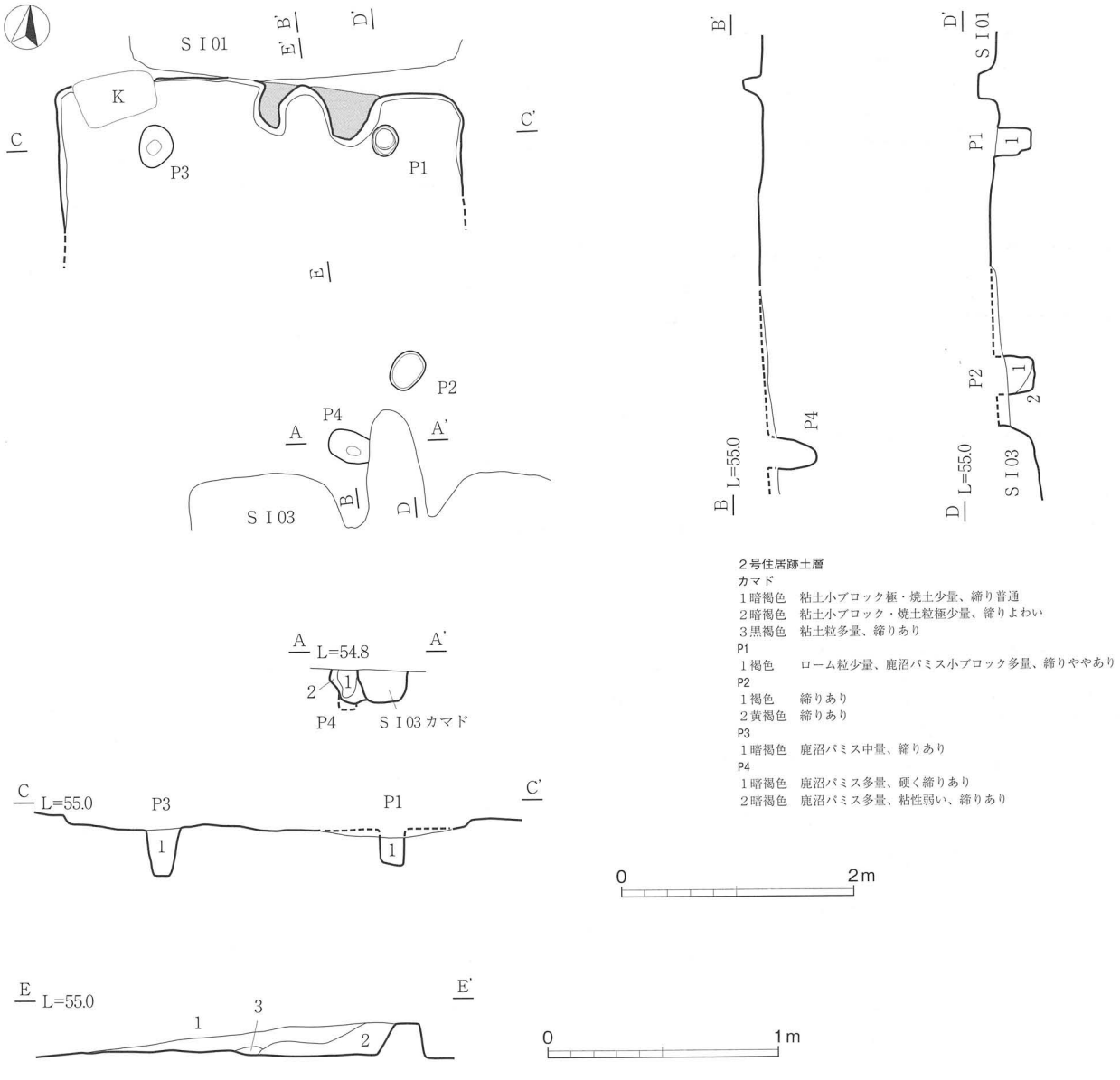
第83図　1号住居跡出土遺物

表36　1号住居跡出土遺物観察表

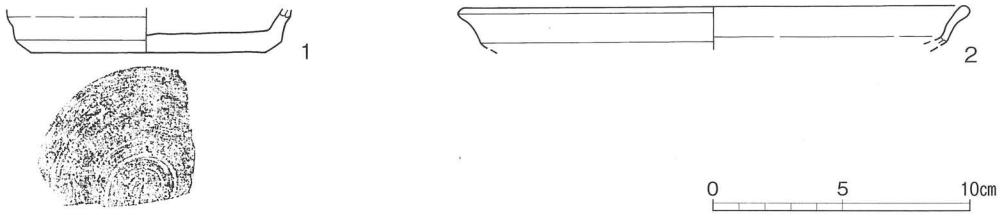
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.6 4.7 6.9	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。右回転。	石英、白色粒、海綿骨針、チャート、角閃石	良好	灰白色	80%
2	須恵器 坏	(14.1) [4.9] (7.2)	ロクロ成形。回転ヘラ切り。右回転。	石英、白色粒、海綿骨針、チャート、角閃石	未還元良好	橙色	40%
3	土師器 甕	21.5 12.2 –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：斜位ヘラナデ	石英、白色粒、海綿骨針、角閃石、雲母	良好	にぶい赤褐色	口縁部片
4	土師器 甕	(20.0) [10.7] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：斜位ヘラナデ	石英、白色粒、海綿骨針、チャート、角閃石、雲母	良好	にぶい赤褐色	口縁部
5	鉄製品 刀子	刀子の刃部片、断面二等辺三角形。長さ［4.0］cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ［9.36］g。					刃部片
6	鉄製品 刀子	刀子の刃部片、断面二等辺三角形。長さ［3.3］cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ［3.27］g。					刃部片

２号住居跡（第84・85図）

位置　Ｆ３グリッドにある。　**規模と平面形**　3.40 ×（2.70）ｍである。南側は３号住に切られ全貌は判らない。南北の遺存距離はP2までとした。　**主軸方向**　Ｎ－16°－Ｗ。　**壁**　壁高は9cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　特に硬化した範囲はない。全体に締まっている。　**ピット**　４箇所。主柱穴の南西隅は不明である。P4はカマド対面にあり出入り口ピットであろう。P1：26 × 22cm、深さ30cm、P2：34 × 26cm、深さ24cm、P3：36 × 30cm、深さ40cmである。P4：46 × 26cm、深さ28cm、。　**カマド**　北壁中央やや東寄りにあり、袖部は粘土を含んだ灰褐色土で構築されているが遺存状況は悪い。　**覆土**　北側からの自然堆積である。　**遺物**　覆土中からの出土である。1･2ともに須恵器供膳具である。　**所見**　遺物年代は８世紀代であろう。



第84図　２号住居跡



第85図　２号住居跡出土遺物

表37　２号住居跡出土遺物観察表

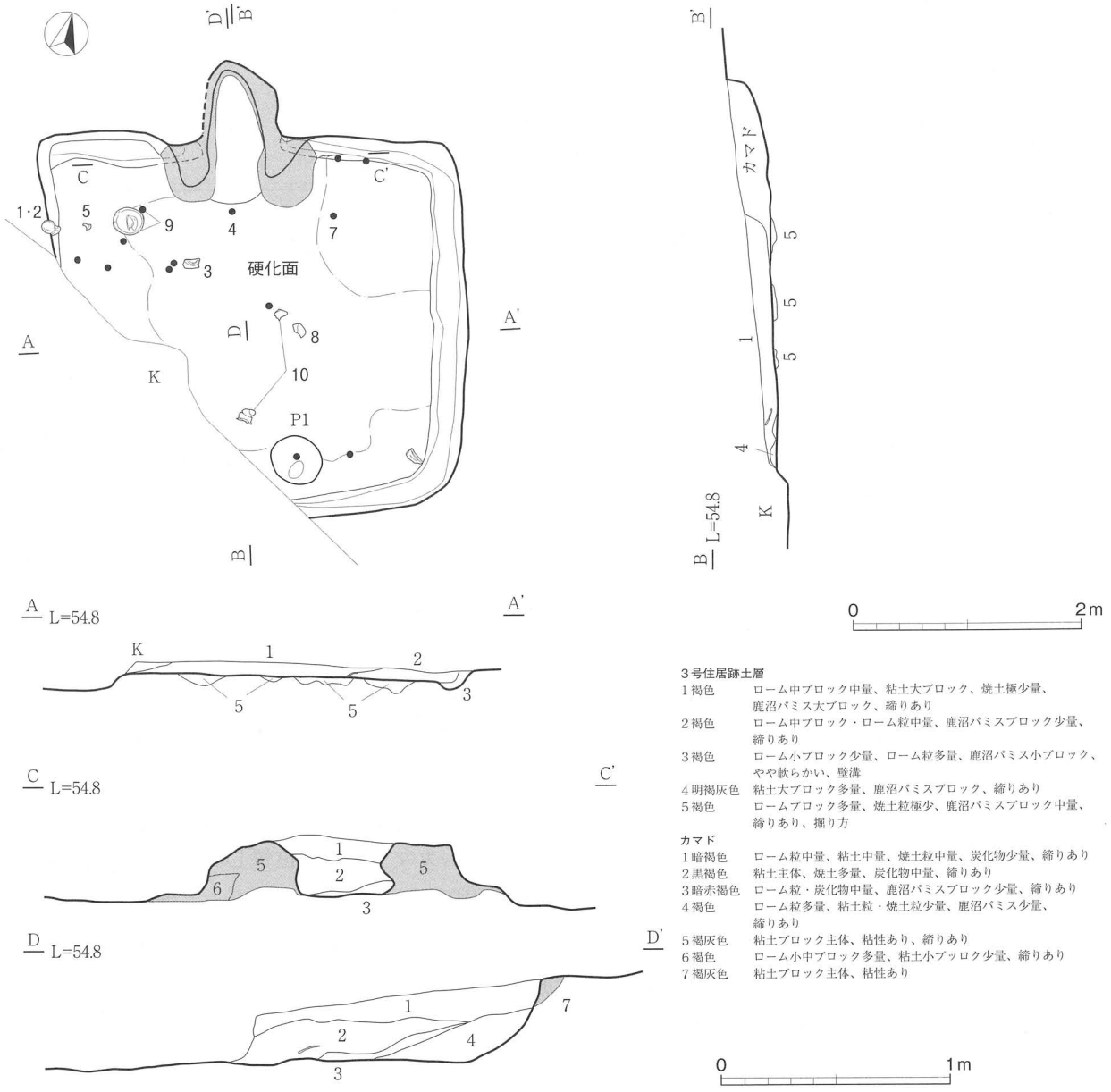
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ [1.8] (9.0)	下端～底部は回転ヘラ削り。	石英、白色粒	良好	灰白色	底部片
2	須恵器 盤	(29.0) [1.6] －	口縁部下に稜を付ける盤である。	石英、白色粒、チャート	良好	オリーブ灰色	口縁部片

３号住居跡（第86・87図）

位置　Ｆ３グリッドにある。　**規模と平面形**　3.30 × 3.44 ｍの方形。隅角は丸味を帯びる。床面南西側は撹乱を受けている。　**重複関係**　２号住が古い。　**主軸方向**　Ｎ－18－Ｗ。　**壁**　壁高は4cmである。　**床**　硬化範囲はカマド前庭部からP1までを幅160cmとするが、さらに中央から東側に幅100cmで「Ｌ字」に屈曲している。　**ピット**　P1：42 × 32cm、深さ15cmである。P1は浅いが、カマド対面に位置し出入り口に関するピットである。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部は粘土を含んだ褐灰色土で構築されている。煙道部は地山を大きく掘り込み粘土で被覆されている。断面形状は燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上る。　**覆土**　基本的には自然堆積であろうか。　**遺物**　カマド前庭部から床面全体に亘り、床着の出土である。1･2は重なった状況である。4、5は須恵器高坏脚部。6～10の土師器甕は常総型である。　**所見**　９世紀前半である。

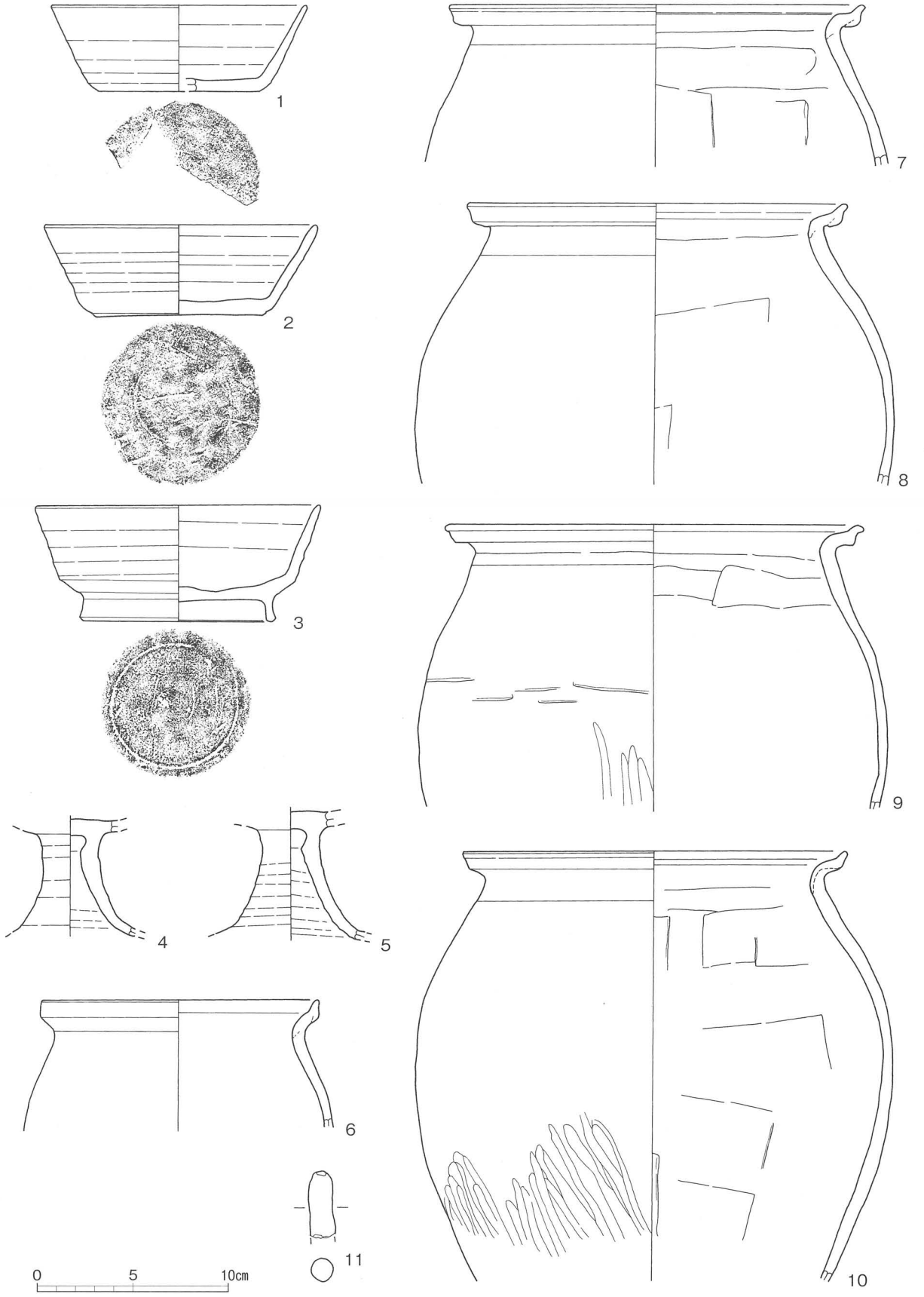
表38　３号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.3) [4.5] (8.2)	底部回転回転ヘラ削り。右回転。底部線刻あり。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	灰色	20%
2	須恵器 坏	14.2 4.8 8.8	底部回転ヘラ削り。右回転	石英、白色粒、チャート、海綿骨針、角閃石	良好	灰色	80%
3	須恵器 高台付坏	14.8 6.1 10.2	底部回転ヘラ削り。右回転	石英、白色粒、角閃石、チャート、海綿骨針	良好	灰色	90%
4	須恵器 高坏	－ [6.1] －	ロクロ成形。右回転。	石英、白色粒、海綿骨針、チャート、角閃石	良好	灰色	脚部
5	須恵器 高坏	－ [6.7] －	ロクロ成形。右回転	石英、白色粒、角閃石、海綿骨針、チャート	良好	灰色	脚部



第86図　3号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	土師器 甕	(14.4) [6.7] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	橙色	口縁部40%
7	土師器 甕	(21.5) [13.5] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：胴部下半ヘラ磨きタイプ。	石英、白色粒、白雲母	良好	にぶい黄橙色	口縁部20%
8	土師器 甕	(19.6) [14.8] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：胴部下半ヘラ磨きタイプ。	石英、白色粒、雲母	良好	明黄褐色	口縁～胴部10%
9	土師器 甕	21.7 [14.8] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：胴部下半ヘラ磨き。	石英、白色粒、雲母	良好	橙色	40%以下

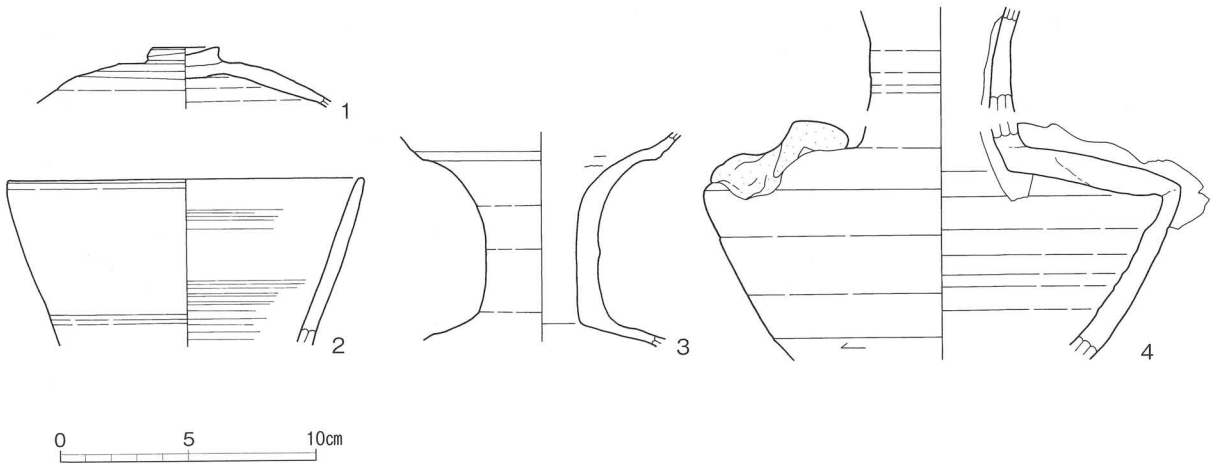


第87図　3号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	土師器 甕	(19.6) [22.6] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：胴部下半ヘラ磨き。	石英、白色粒、雲母、チャート	良好	灰黄褐色	口縁～胴部 20%
11	土製品 用途不明	小指大の手捻り成形。円柱で端部を丸く収める。 上径 1.3cm 、長さ［3.6］cm、幅 1.2cm、厚さ 1.2cm、重さ［6.2］g。		石英、白色粒、角閃石	良好	橙色	

4号住居跡（第 88・89 図）

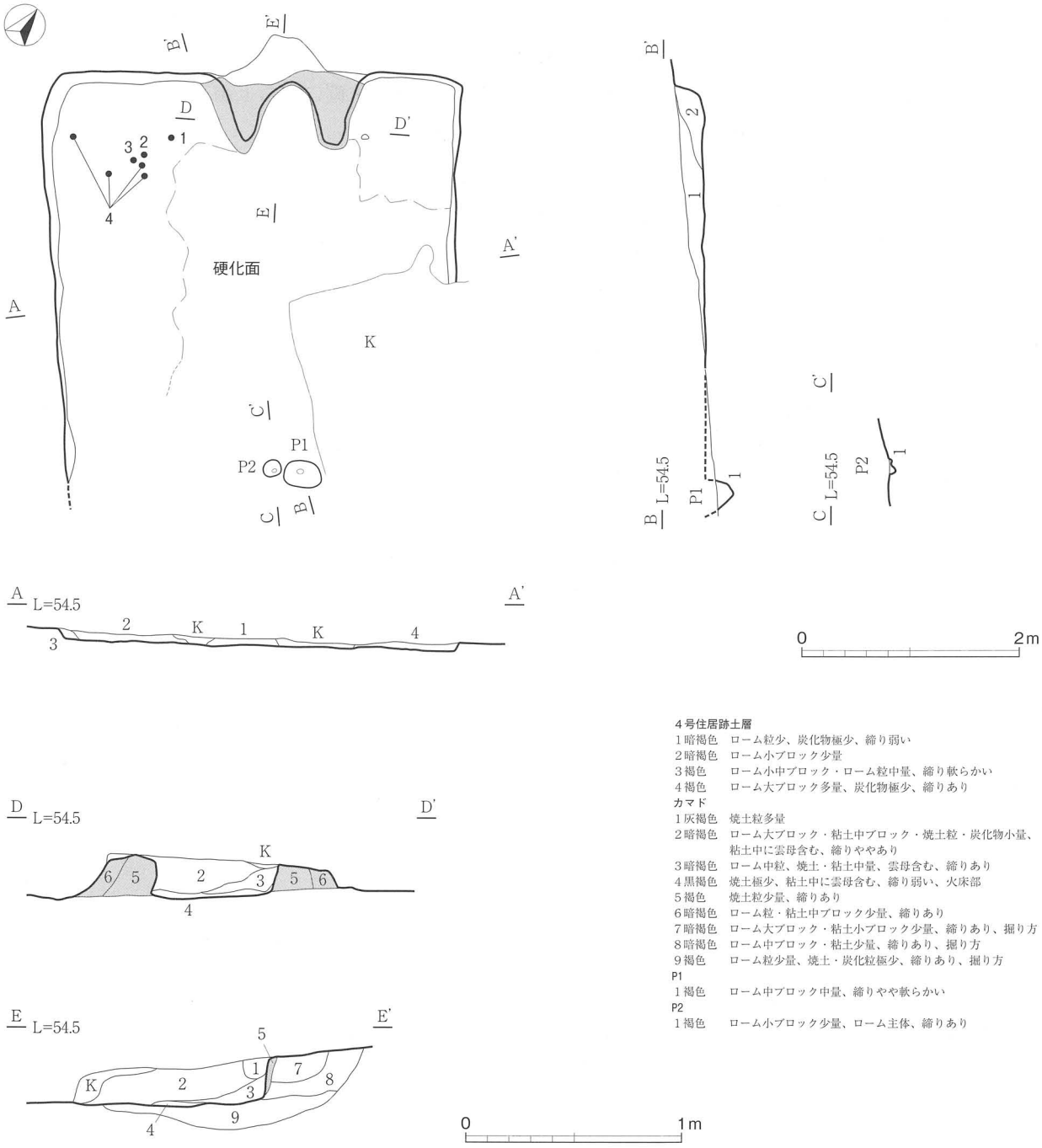
位置　E、F 3グリッドにある。　**規模と平面形**　3.60 ×（3.80）mの南北に長い方形である。南側は削平され、加えて南東隅は撹乱で壊されている。　**主軸方向**　N－36°－W。　**壁**　壁高は 22cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅 170cmで南北に長く P1・2まで 硬化範囲が広がり、さらに東側にも展開が見られる。　**ピット**　カマド対面南壁内側に 2 箇所検出された。P1：24 × 32cm、深さ 16cm、P2：16.0 × 14.0cm、深さ 5cmである。いずれも出入り口ピットである。床面が削平されているため確認面の状況は不明であるが新旧が推定される。　**カマド**　北壁中央からやや東寄りに位置する。地山を削りだし掘り方内に煙道部を造る。袖部は灰褐色粘土で構築されている。燃焼部から煙道部へは急角度で立ち上がる。　**覆土**　基本的には自然堆積である。　**遺物**　カマド南西隅を主体に出土している。4 の長頸壺は焼成時の窯壁が付着している。　**所見**　遺物は 8 世紀前葉代のものであろう。



第 88 図　4号住居跡出土遺物

表 39　4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 蓋	– [2.4] –	鈕はボタン状で天井部は 1/2 回転ヘラ削。	海綿骨針、白色粒	良好	灰色	
2	須恵器 鉢	(14.0) – –	ロクロ成形。	石英、海綿骨針	還元軟質	灰白色	口縁部片



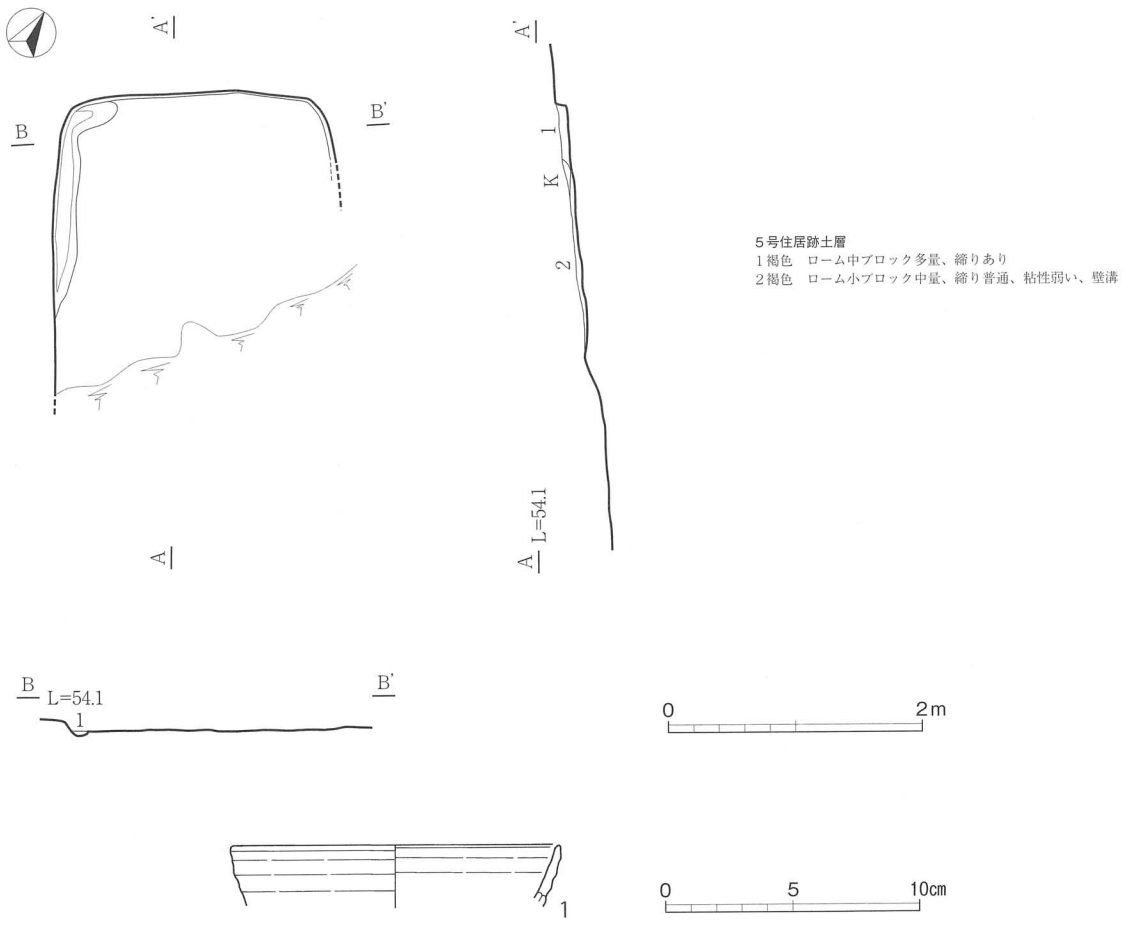
４号住居跡土層
１暗褐色　ローム粒少、炭化物極少、締り弱い
２暗褐色　ローム小ブロック少量
３褐色　ローム小中ブロック・ローム粒中量、締り軟らかい
４褐色　ローム大ブロック多量、炭化物極少、締りあり
カマド
１灰褐色　焼土粒多量
２暗褐色　ローム大ブロック・粘土中ブロック・焼土粒・炭化物小量、粘土中に雲母含む、締りややあり
３暗褐色　ローム中粒、焼土・粘土中量、雲母含む、締りあり
４黒褐色　焼土極少、粘土中に雲母含む、締り弱い、火床部
５褐色　焼土粒少量、締りあり
６暗褐色　ローム粒・粘土中ブロック少量、締りあり
７暗褐色　ローム大ブロック・粘土小ブロック少量、締りあり、掘り方
８暗褐色　ローム中ブロック・粘土少量、締りあり、掘り方
９褐色　ローム粒少量、焼土・炭化粒極少、締りあり、掘り方
P1
１褐色　ローム中ブロック中量、締りやや軟らかい
P2
１褐色　ローム小ブロック少量、ローム主体、締りあり

第89図　４号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器	－ [8.3] －	ロクロ成形。口縁部は頸部から大きく開く。	石英、白色粒	良好	灰色	頸部片
4	須恵器 長頸壷	－ － －	胴部は肩が張る三段成形。胴部下端は回転ヘラ削り。肩部に窯天井部の溶解したものが貼り付く。一部は内面にまで及んでいる。	白色粒、黒色粒	良好	灰色	体部

５号住居跡（第90図）

位置　E、F３グリッドにある。　**規模と平面形**　(2.30) × 2.10ｍの隅角が丸い方形、南側は削平されている。　**主軸方向**　N－31°－W。　**壁**　壁高は残りの良い箇所で11cm、垂直に立ち上がる。北西角から西側に亘り壁溝がわずかに残る。幅20cm、深さ5cmである。　**床**　全体に締まっている。　**ピット**　床面には検出されていない。　**カマド**　北側には検出していない。東側であろうか。　**覆土**　自然堆積である。　**遺物**　1は須恵器坏の口縁部で、覆土中の遺物である。　**所見**　東カマドだとすれば９世紀後葉以降であろう。



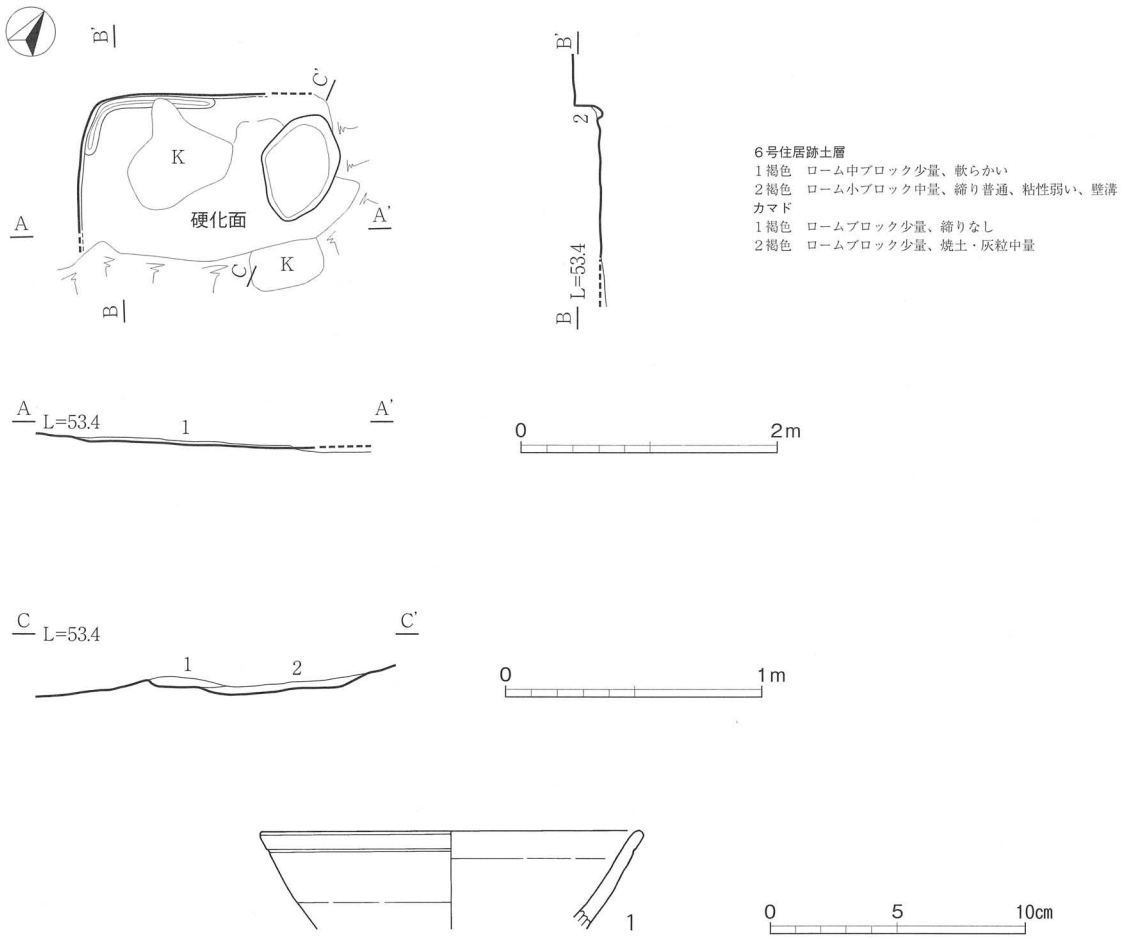
第90図　５号住居跡・出土遺物

表40　５号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(13.0) － －	ロクロ成形。	海綿骨針、白色粒	良好	灰色	口縁部片

６号住居跡（第 91 図）

位置　Ｆ３グリッドにある。　**規模と平面形**　方形と思われる。北西隅角の一部とカマド掘り方の遺存である。東南側は撹乱・削平で壊滅的である。　**主軸方向**　Ｎ－35°－Ｗ。　**床**　大半は削平されて明瞭でない。遺存部は硬化している。北西隅角に鈎状に壁溝が残る。幅 20cm、深さ 6cm。　**カマド**　掘り方から北壁に位置する。掘り方は 90 × 60cm、深さ 10cm。その東側周辺には灰が散見された。　**遺物**　遺物は須恵器坏破片のみである。　**所見**　９世紀後葉であろうか。



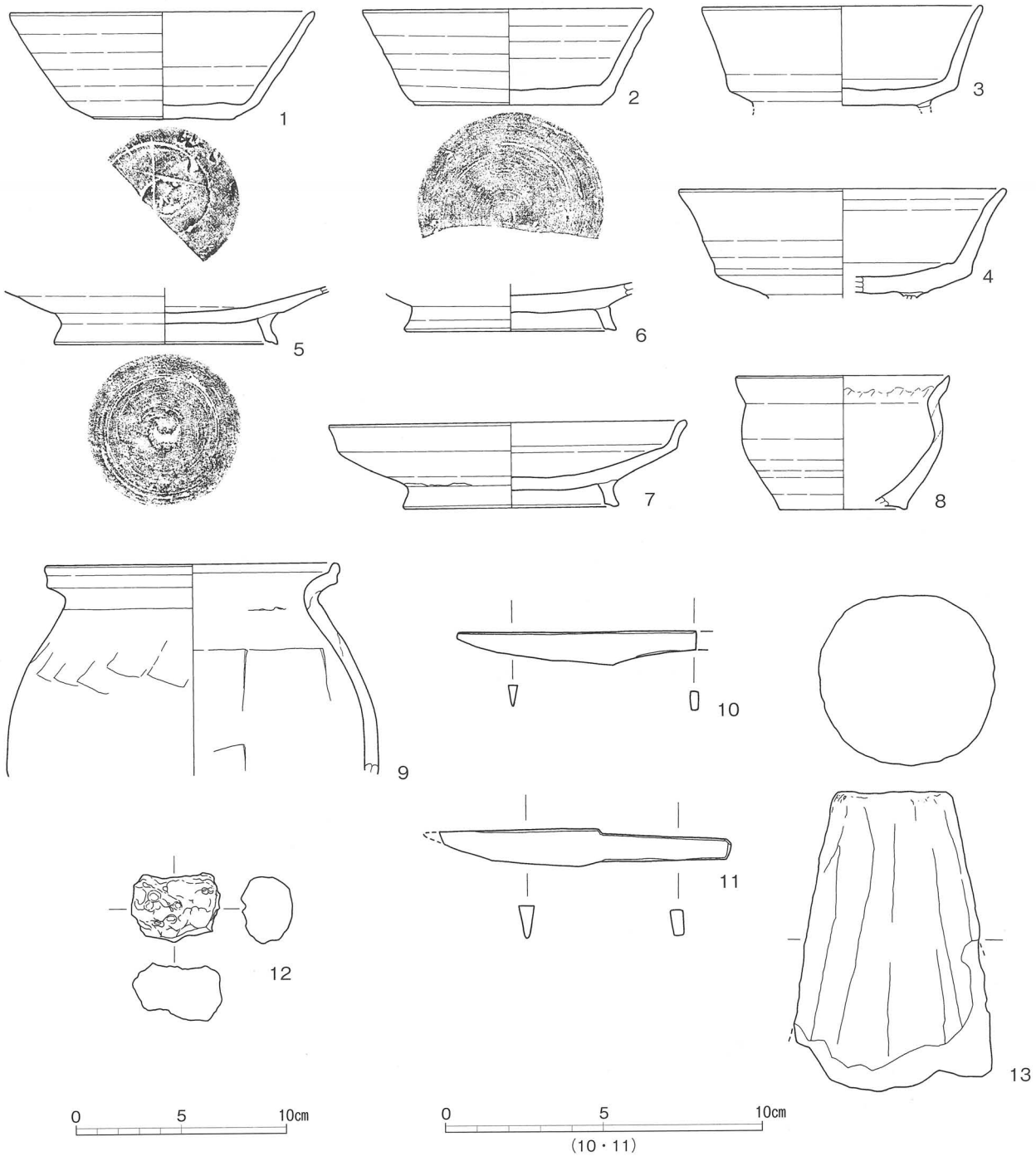
第 91 図　６号住居跡・出土遺物

表 41　６号住居跡出土遺物観察表

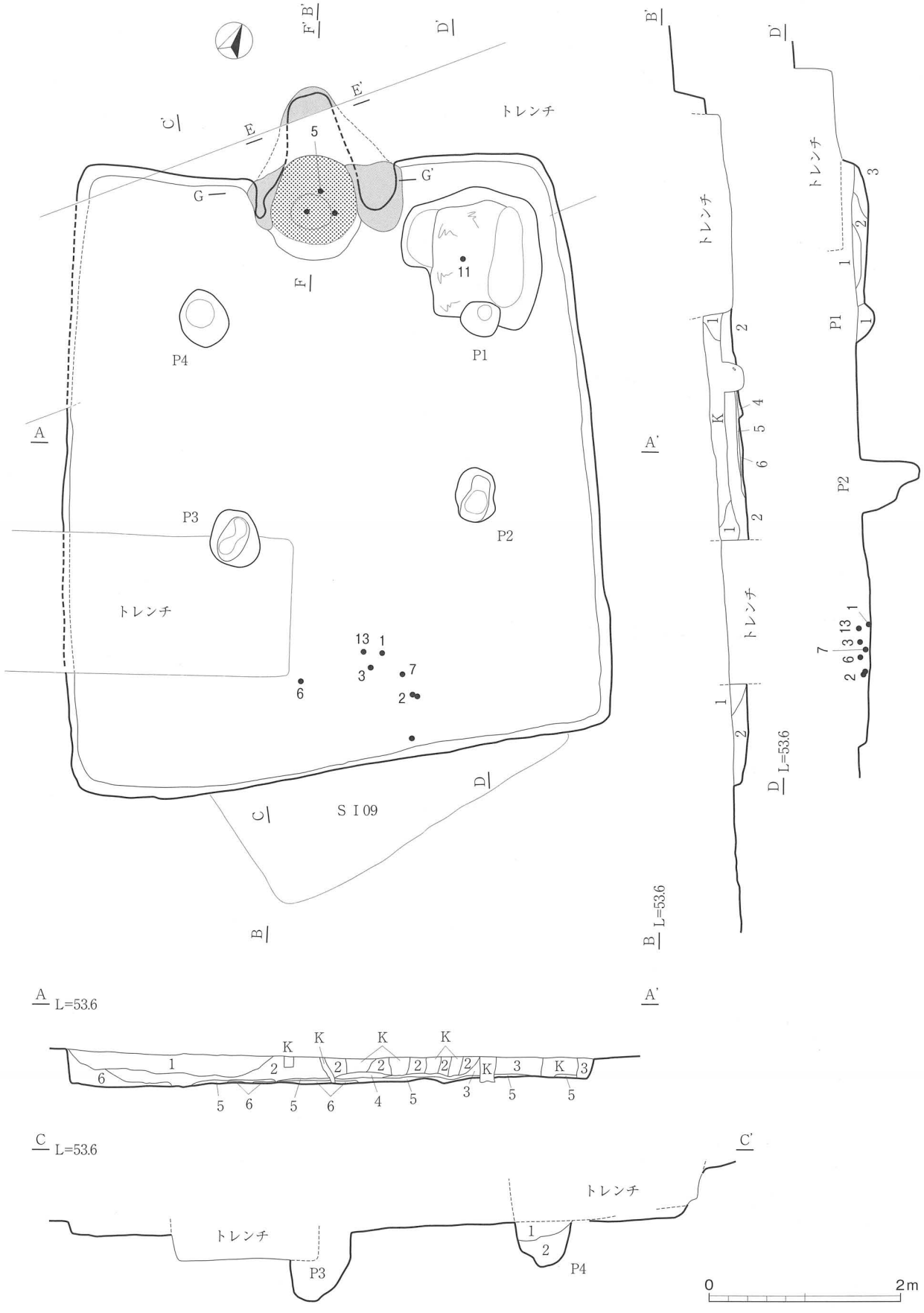
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(15.0) － －	ロクロ成形。	白色粒、海綿骨針少量	良好	灰色	口縁部片

７号住居跡（第 92 ～ 94 図）

位置　Ｅ３、４グリッドにある。　**規模と平面形**　6.30 × 5.45 m、南北方向が長い。また北壁より南壁が幅広く台形状となる。隅角は鋭角的で壁は直線的である。　**重複関係**　９号住が古い。　**主軸方向**　Ｎ－23°－Ｗ。　**壁**　壁高は北壁で 50cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　全体に硬化している。カマド右側に方形の土坑が検出された。長さ 1.4 m、幅 1.4m、深さ 30cm、 カマド側に張り出しを有する。底部は深さが均一ではなく、カマド側が緩やかな斜面となる。最深部幅は 35cmである。性格的には貯蔵穴であろう。　**ピット**　４箇所。

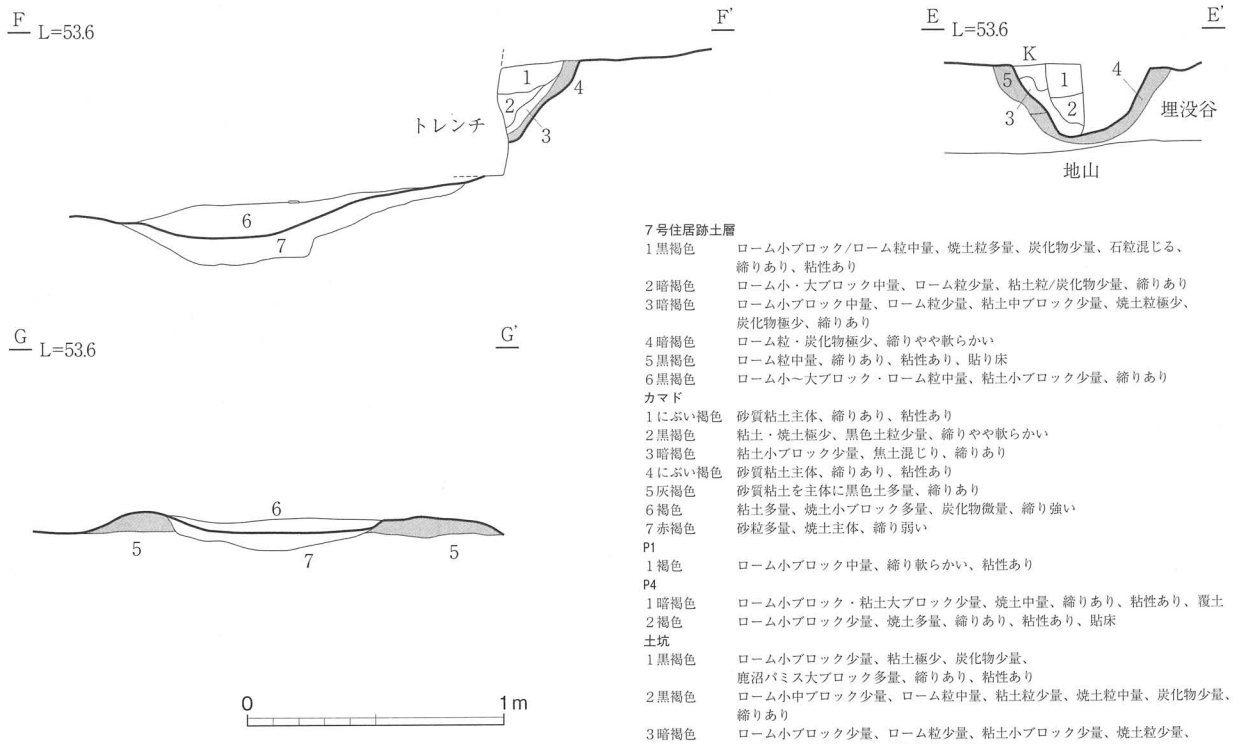


第 92 図　７号住居跡出土遺物



第 93 図　7 号住居跡①

出入り口ピットはない。P1:35 × 45cm、深さ 20cm、 P2:60 × 40cm、深さ 63cm、P3:60 × 54cm、深さ 80cm、P4：65 × 55cm、深さ 50cm。　**カマド**　北壁の中央である。煙道部地山を掘り込み、袖部から掘り方まで粘土構築材で構成されていた。　**覆土**　焼土・炭化物を少量含んだ、ロームブロックの目立つ暗褐色土を主体としている。　**遺物**　南壁周辺でのまとまりである。供膳具は須恵器で構成されている。　**所見**　8世紀後半頃であろう。



7号住居跡土層
1黒褐色　ローム小ブロック/ローム粒中量、焼土粒多量、炭化物少量、石粒混じる、締りあり、粘性あり
2暗褐色　ローム小・大ブロック中量、ローム粒少量、粘土粒/炭化物少量、締りあり
3暗褐色　ローム小ブロック中量、ローム粒少量、粘土中ブロック少量、焼土粒極少、炭化物極少、締りあり
4暗褐色　ローム粒・炭化物極少、締りやや軟らかい
5黒褐色　ローム粒中量、締りあり、粘性あり、貼り床
6黒褐色　ローム小～大ブロック・ローム粒中量、粘土小ブロック少量、締りあり

カマド
1にぶい褐色　砂質粘土主体、締りあり、粘性あり
2黒褐色　粘土・焼土極少、黒色土粒少量、締りやや軟らかい
3暗褐色　粘土小ブロック少量、焦土混じり、締りあり
4にぶい褐色　砂質粘土主体、締りあり、粘性あり
5灰褐色　砂質粘土を主体に黒色土多量、締りあり
6褐色　粘土多量、焼土小ブロック多量、炭化物微量、締り強い
7赤褐色　砂粒多量、焼土主体、締り弱い

P1
1褐色　ローム小ブロック中量、締り軟らかい、粘性あり

P4
1暗褐色　ローム小ブロック・粘土大ブロック少量、焼土中量、締りあり、粘性あり、覆土
2褐色　ローム小ブロック少量、焼土多量、締りあり、粘性あり、貼床

土坑
1黒褐色　ローム小ブロック少量、粘土極少、炭化物少量、鹿沼パミス大ブロック多量、締りあり、粘性あり
2黒褐色　ローム小中ブロック少量、ローム粒中量、粘土粒少量、焼土粒中量、炭化物少量、締りあり
3暗褐色　ローム小ブロック少量、ローム粒少量、粘土小ブロック少量、焼土粒少量、炭化物極少、締りあり、粘性あり

第94図　7号住居跡②

表42　7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(14.4) 5.1 (6.8)	底部回転ヘラ削り。右回転。底部線刻「×」。	石英、海綿骨針	良好	灰色	50%
2	須恵器 坏	(13.8) 4.5 (8.8)	底部回転ヘラ削り。右回転。	白色粒	良好	灰色	50%
3	須恵器 高台付坏	(13.2) – –	底部回転平削り。右回転。高台部破損後研磨して使用。	石英、海綿骨針、白色粒	良好	灰色	25%
4	須恵器 高台付坏	(15.4) – –	底部回転ヘラ削り。	海綿骨針、白色粒	良好	灰色	50%

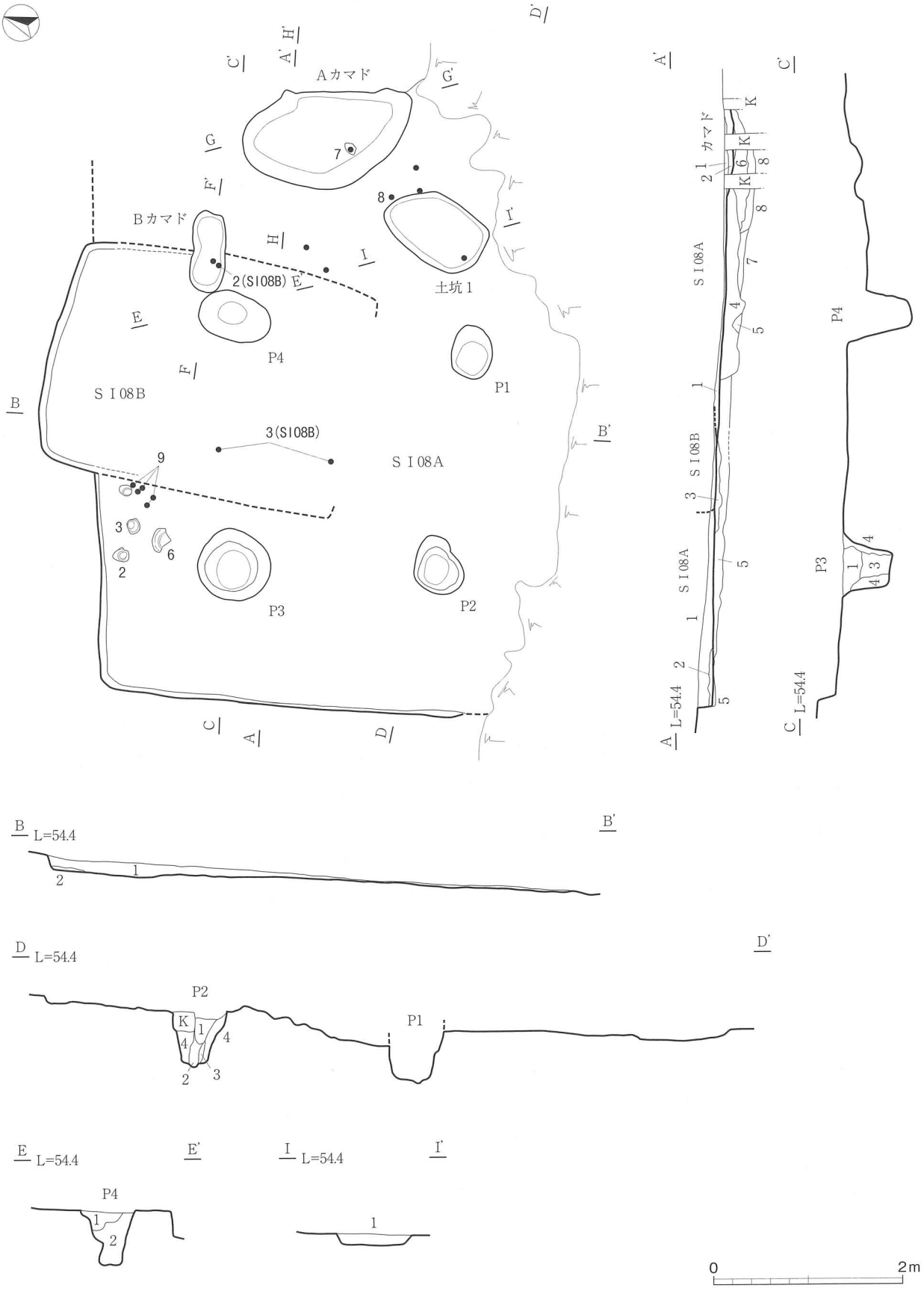
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	須恵器 盤	－ － 10.6	底部回転ヘラ削り。右回転。	石英	還元軟質	白灰色	底部片
6	須恵器 盤	－ － (10.1)	底部回転ヘラ削り。内底部擦痕顕著、転用硯か。	石英、白色粒、黒色融出粒	良好	灰色	底部片
7	須恵器 盤	(16.9) 4.0 (10.2)	底部回転ヘラ削り。右回転。	海綿骨針、白色粒	良好	灰色	70%
8	土師器 甕	(10.0) 6.3 (6.0)	ロクロ土師器。小型の甕。口縁部内面は黒色塊（オコゲ）が付着。	石英、角閃石、白色粒	良好	赤褐色	40%
9	土師器 甕	(14.0) － －	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：ヘラ削り。	石英、角閃石、白色粒	良好	暗赤褐色	口縁～胴部 50%
10	鉄製品 刀子	刃関あり。長さ［7.6］cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ［10.9］g。					
11	鉄製品 刀子	背関あり。長さ［9.2］cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ［14.5］g。					
12	鉄滓	長さ4.5cm、幅3.0cm、厚さ1.7cm、重さ60.3g。					
13	土製品 支脚	手捻り成形。円柱状に成形し縦位ヘラ削り。 上径5.2cm、長さ［14.2］cm、幅8.2cm、厚さ8.0cm、重さ1045.0 g。		白色粒、雲母	良好	暗橙色	

８Ａ号住居跡（第95～97図）

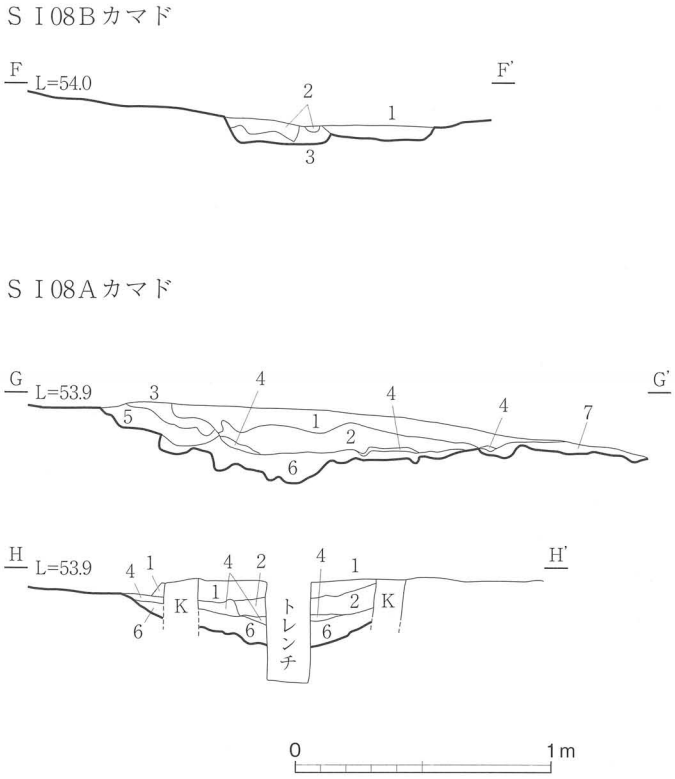
位置　Ｅ３・４グリッドにある。　**規模と平面形**　(6.50) × (5.00) mの方形、南側は削平され残っていない。　**重複関係**　８Ｂ号住が新しい。　**主軸方向**　Ｎ－75°－Ｅ。　**壁**　壁高は西壁で20cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　硬化範囲は特になく全体的に締まっている。　**ピット**　４箇所。P1：55 × 46cm、深さ55cm、P2：65 × 53cm、深さ62cm、P3：80 × 76cm、深さ52cm、P4：76 × 48cm、深さ70cmである。　**カマド**　構築物はすでに無く、掘り方での検出である。南北に長い楕円形で175 × 115cm、深さ26cmである。東壁のほぼ中央にある。　**覆土**　遺存が薄く明確でなかった。　**遺物**　供膳具は須恵器で構成されるが、土師器高台付坏も混じる。　**所見**　９世紀前葉頃であろう。

８Ｂ号住居跡（第95・96・98図）

位置　Ｅ３・４グリッドにある。　**規模と平面形**　2.15 × (1.70) mの方形。　**重複関係**　８Ａ号住が古い。　**主軸方向**　Ｎ－80°－Ｅ。　**壁**　壁高は15cm。　**床**　南側は削平されて消滅。全体に締まりはある。　**カマド**　東壁中央に掘り方が検出された。掘り方は長楕円形で85 × 56cm、深さ8cm。煙道部は壁から外側に構築されていた。　**覆土**　明確でない。　**遺物**　１は土師器皿である。２は土師器羽釜で口縁部下に鍔が付く。３は置きカマドである。掛け口、焚き口、底部の破片である。器肉は薄く内部は煤が付着する。推定で実測を行なった。　**所見**　10世紀前後であろう。



第95図　8号住居跡①



8号住居跡土層
1暗褐色　ローム粒中量、焼土極少、炭化物極少、締りあり、粘性ややあり
2暗褐色　粘土中ブロック主体、締りあり、粘性あり
3褐色　ローム中ブロック中量、砂粒多量、炭化物微量、締り強い、SI08A・B同じ
4褐色　ローム中ブロック・ローム粒多量、粘土粒多量大ブロック微量、焼土大ブロック微量粒中量、炭化物少量、締り強い
5褐色　ローム小ブロック・ローム粒少量、粘土・焼土微量、締り強い
6暗赤褐色　ローム小ブロック中量、ローム粒少量、焼土中ブロック中量、炭化物多量、やや軟らかい、灰層雲母粒散、カマド構築材
7褐色　ローム小中ブロック・ローム粒・焼土粒少量、炭化物微量、鹿沼パミス大ブロック少量、やや軟らかい、雲母粒散
8暗褐色　ローム小ブロック少量、ローム粒中量、粘土粒少量、焼土大ブロック粒多量、炭化物微量、鹿沼パミス小ブロック少量、締り強い、粘性弱い、焼土多量

カマドA
1赤褐色　ロームブロック少量、ローム粒少量、粘土微量、焼土多量、鹿沼パミス粒少量、締り非常に強い、鹿沼パミス粒少
2暗褐色　焼土多量、炭化物少量、鹿沼パミス粒微量、締り強い
3明赤褐色　焼土多量、締り強い
4暗灰褐　焼土微量、炭化物微量、灰・炭化層、締り強い、粘性弱い
5褐色　ローム粒多量、焼土少量、鹿沼パミス粒多量、締り非常に強い、掘り方
6明赤褐色　ローム粒少量、粘土少量、焼土少量、炭化物微量、鹿沼パミスブロック少量、締り非常に強い、粘性強い、貼床
7褐色　ローム粒少量、鹿沼パミスB多量、締り非常に強い、貼床

カマドB
1明褐灰色　粘土多量、焼土微量、鹿沼パミス少量、締り非常に強い、天井くずれ
2灰褐色　ローム粒・粘土少量、焼土多量、締り非常に強い、粘性弱い、天井くずれ
3黒褐色　ロームブロック少量、焼土少量、炭化物微量、締り弱い、灰層

土坑1
1黒褐色　ローム中ブロック・ローム粒多量、焼土粒少量、炭化物多量、締り弱、粘性強い

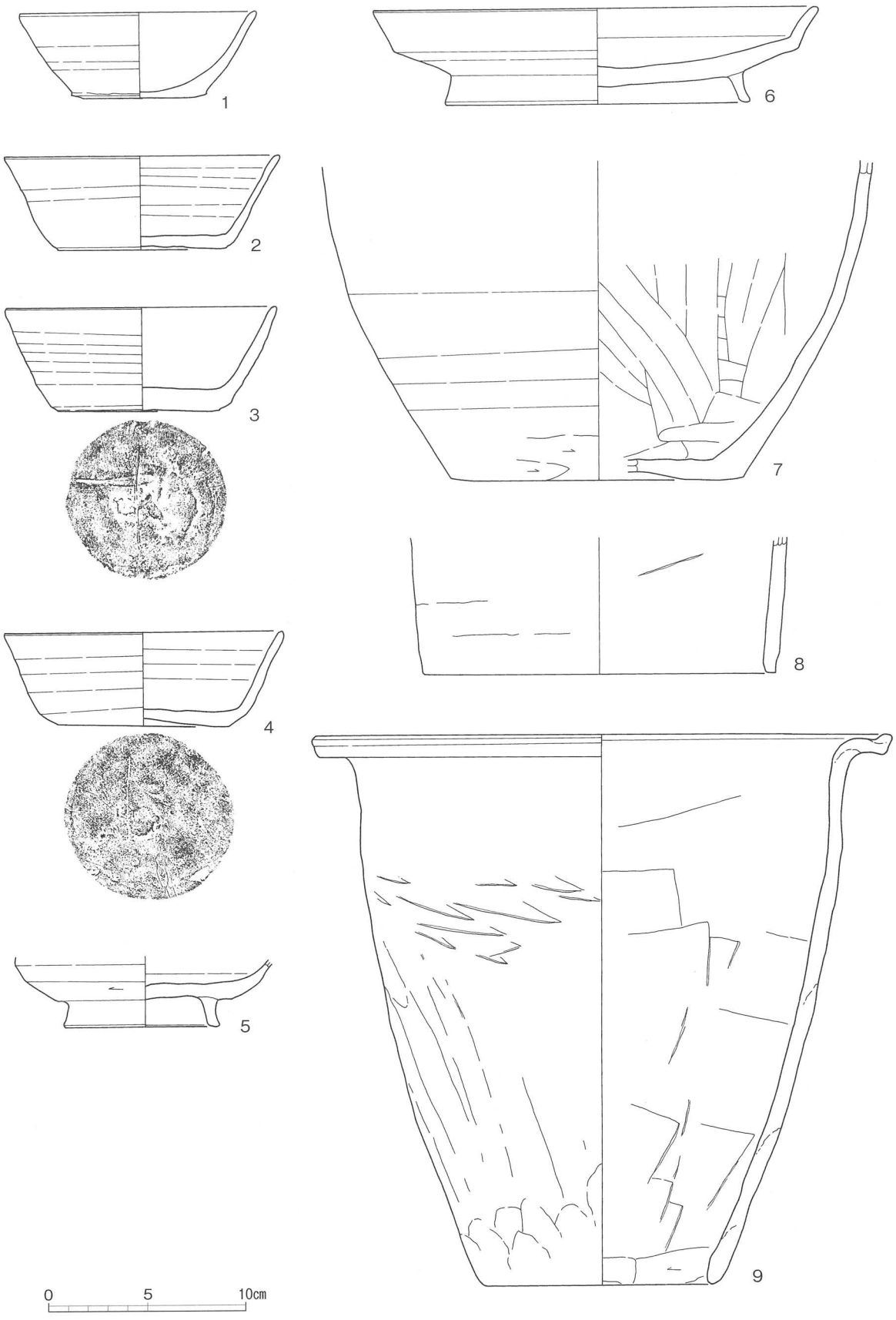
P2・3
1黒色　ローム粒少量、ローム小ブロック中量、締りあり
2黒褐色　ローム粒少量、締りなし
3黒褐色　ローム粒少量、ローム小ブロック少量、締りあり
4褐色　ローム中ブロック少量、締りあり

P4
1暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒少量、焼土粒極少、鹿沼パミス極少、締りあり
2褐色　ローム中ブロック少量、ローム粒中量、焼土粒極少、鹿沼パミス大ブロック少量、締りやや軟らかい、粘性強い

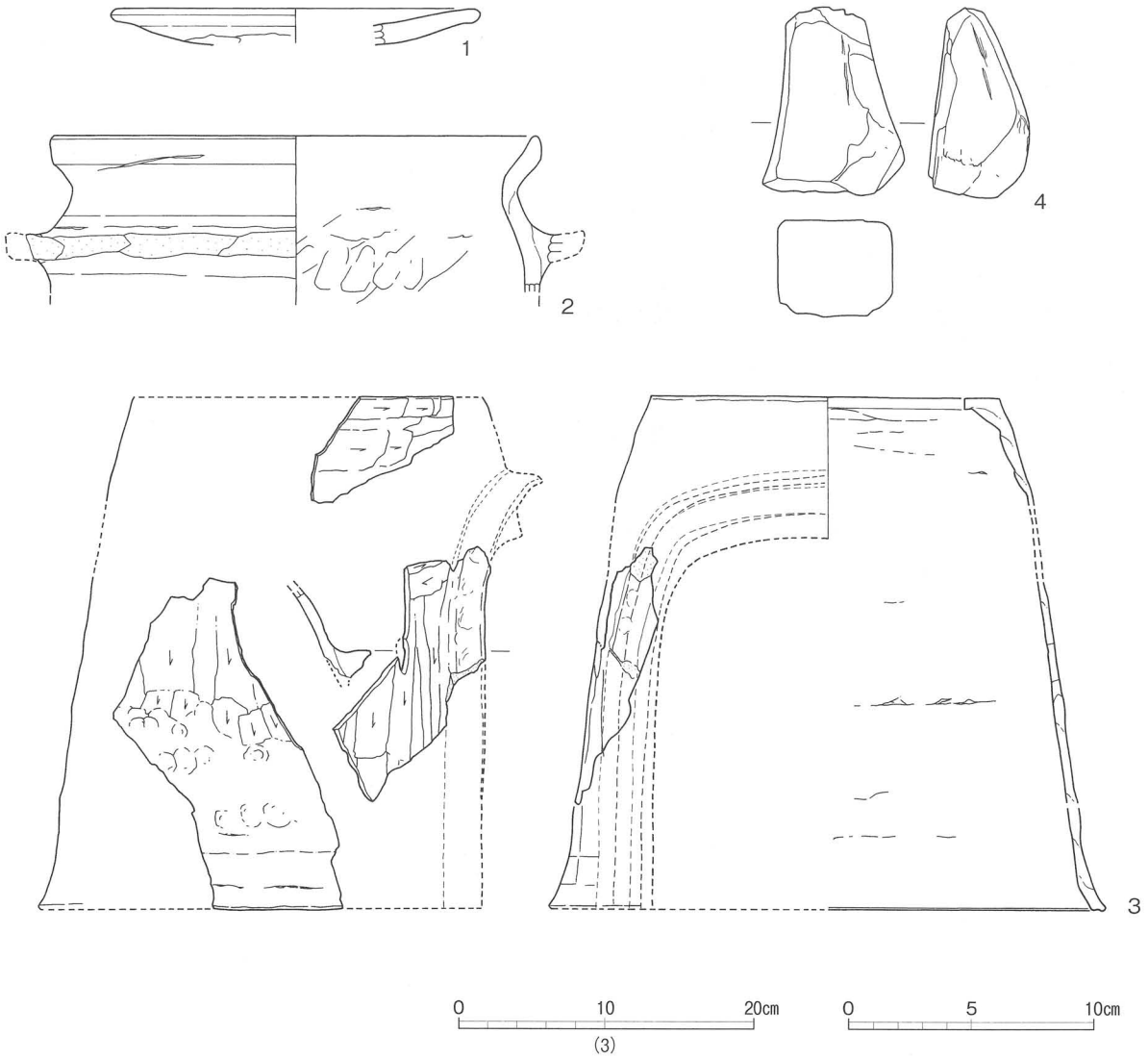
第96図　8号住居跡②

表43　8A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	12.0 4.4 (6.8)	底部回転ヘラ切り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色、黒	50%
2	須恵器 坏	14.0 4.8 8.5	底部回転ヘラ削り。右回転	石英、雲母、白色粒	良好	灰色	ほぼ完形
3	須恵器 坏	(13.8) 5.4 8.1	底部回転ヘラ削り。右回転。底部線刻「—」。	海綿骨針、白色粒、チャート	良好	灰色	75%
4	須恵器 坏	14.2 4.9 8.6	底部回転ヘラ削り後手持ちヘラ削り。右回転。底部線刻「—」。	海綿骨針、白色粒、チャート	良好	灰色	50%
5	土師器 高台付坏	– – (7.9)	体部下端～底部回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	雲母、石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色	底部片
6	須恵器 盤	12.6 5.0 15.5	底部刃自然釉で明確でないが回転ヘラ削りと思われる。内面は使用痕顕著。自然釉は外面の口縁～底部に及び、内面には及ばない、焼成時は倒位。	石英、チャート、黒色粒	良好	白灰色 自然釉調：オリーブ灰色	50%
7	須恵器 甕	– – (15.0)	ロクロ成形。胴部下端はヘラ削り。内面は縦位のヘラナデ。	石英、角閃石	未還元	にぶい黄橙色	胴～底部片
8	須恵器 甑	– – (18.0)	ロクロ成形。底部はヘラ削り。	石英、角閃石	良好	灰色	底部片
9	土師器 甑	(29.4) 28.2 5.6	口縁部は「L字」形に屈曲し端部は摘み出される。底部は単孔。内：斜・横位ヘラナデ、外：胴部縦位ヘラ削り、下端斜位ヘラ削り。	石英、チャート、雲母	良好	にぶい黄橙色	50%



第97図　8A号住居跡出土遺物



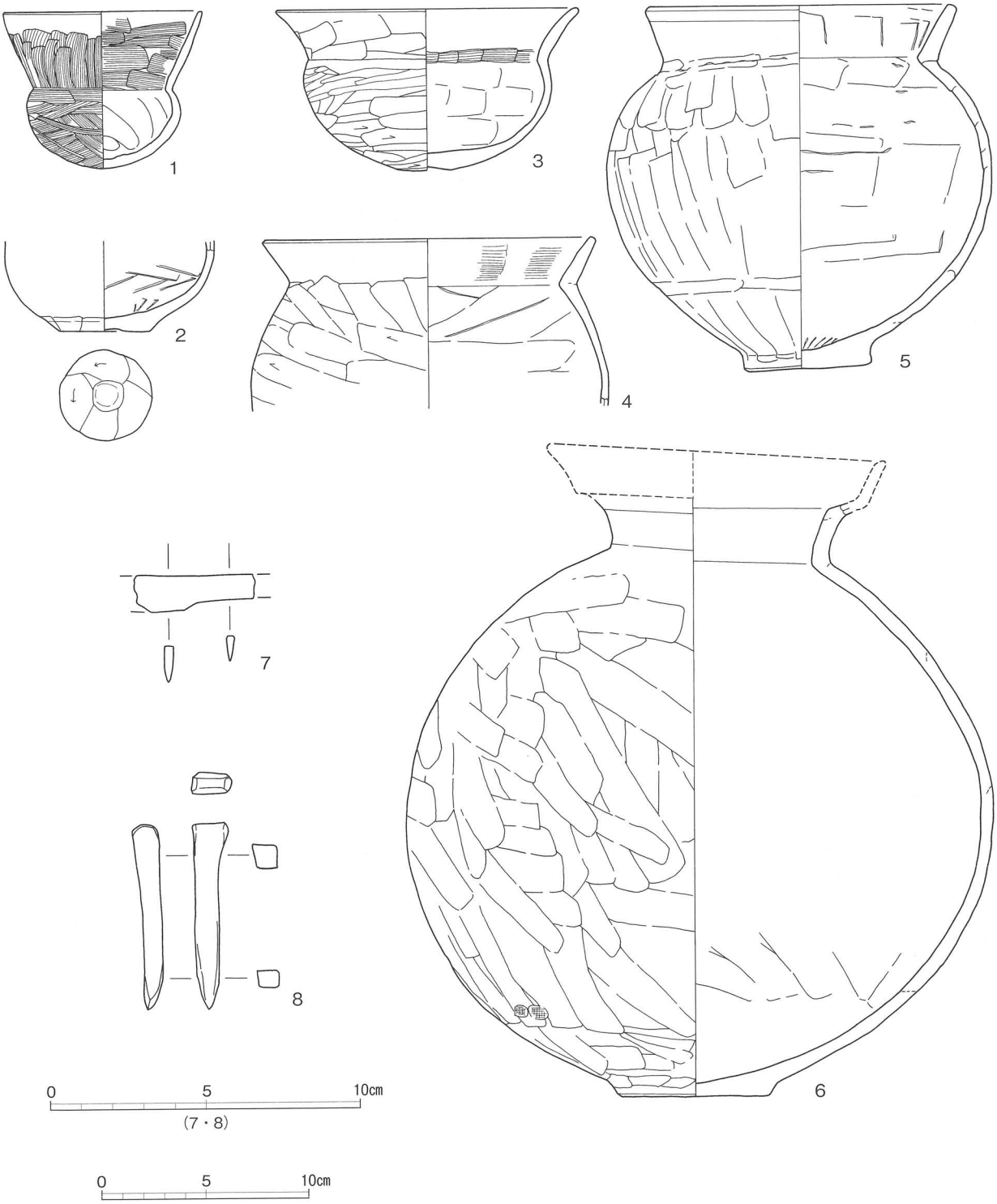
第 98 図　８Ｂ号住居跡出土遺物

表 44　８Ｂ号住居跡出土遺物観察表

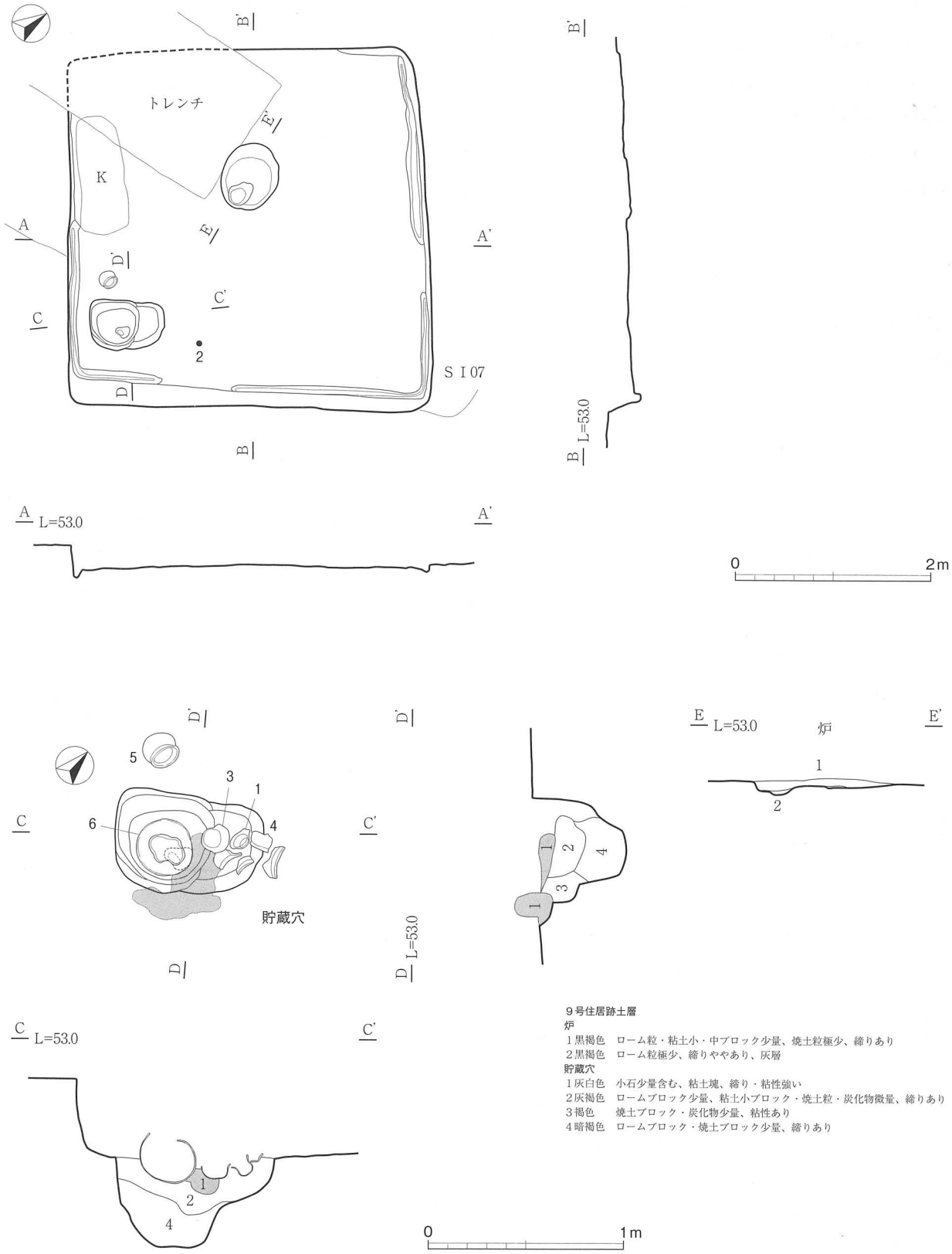
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 皿	(15.0) － －	ロクロ成形。底部はヘラ削り。内面はヘラ磨き、黒色処理。	石英、角閃石、白色粒	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
2	土師器 羽釜	(20.0) [6.5] －	甕型の羽釜である。口縁部一旦内傾しながら立ち上がり端部を摘み出す。口縁部下に鍔を貼り付ける。内外ナデ。	石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色	口縁部 25%
3	土製品 置きカマド	(24.0) 〔35.0〕 (38.0)	賭け口、焚き口の鍔、底部の三片。器肉は薄く内面は煤が付着する。外面は上位横位ヘラ削り、中位縦位ヘラ削り、下位は指圧、ナデ。	石英、角閃石、白色粒、チャート	良好	橙色	上部、鍔部、裾部片
4	石製品 砥石	四面使用。長さ 7.7cm、幅 5.7cm、厚さ 3.9cm、重さ 194.0g、凝灰岩製。					

9号住居跡（第99・100図）

位置　E4グリッドにある。　**規模と平面形**　3.65 × 3.62 mの方形。　**重複関係**　7号住が新しい。　**主軸方向**　N－56°－W。　**壁**　壁高は10cm、垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に締まっている。壁溝は南壁と東壁側の一部が途切れている。貯蔵穴は南の隅にある。方形で50 × 35cm、深さ30cm、形態は二段掘りのよ



第99図　9号住居跡出土遺物



９号住居跡土層

炉

１黒褐色　ローム粒・粘土小・中ブロック少量、焼土粒極少、締りあり

２黒褐色　ローム粒極少、締りややあり、灰層

貯蔵穴

１灰白色　小石少量含む、粘土塊、締り・粘性強い

２灰褐色　ロームブロック少量、粘土小ブロック・焼土粒・炭化物微量、締りあり

３褐色　焼土ブロック・炭化物少量、粘性あり

４暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量、締りあり

第 100 図　９号住居跡

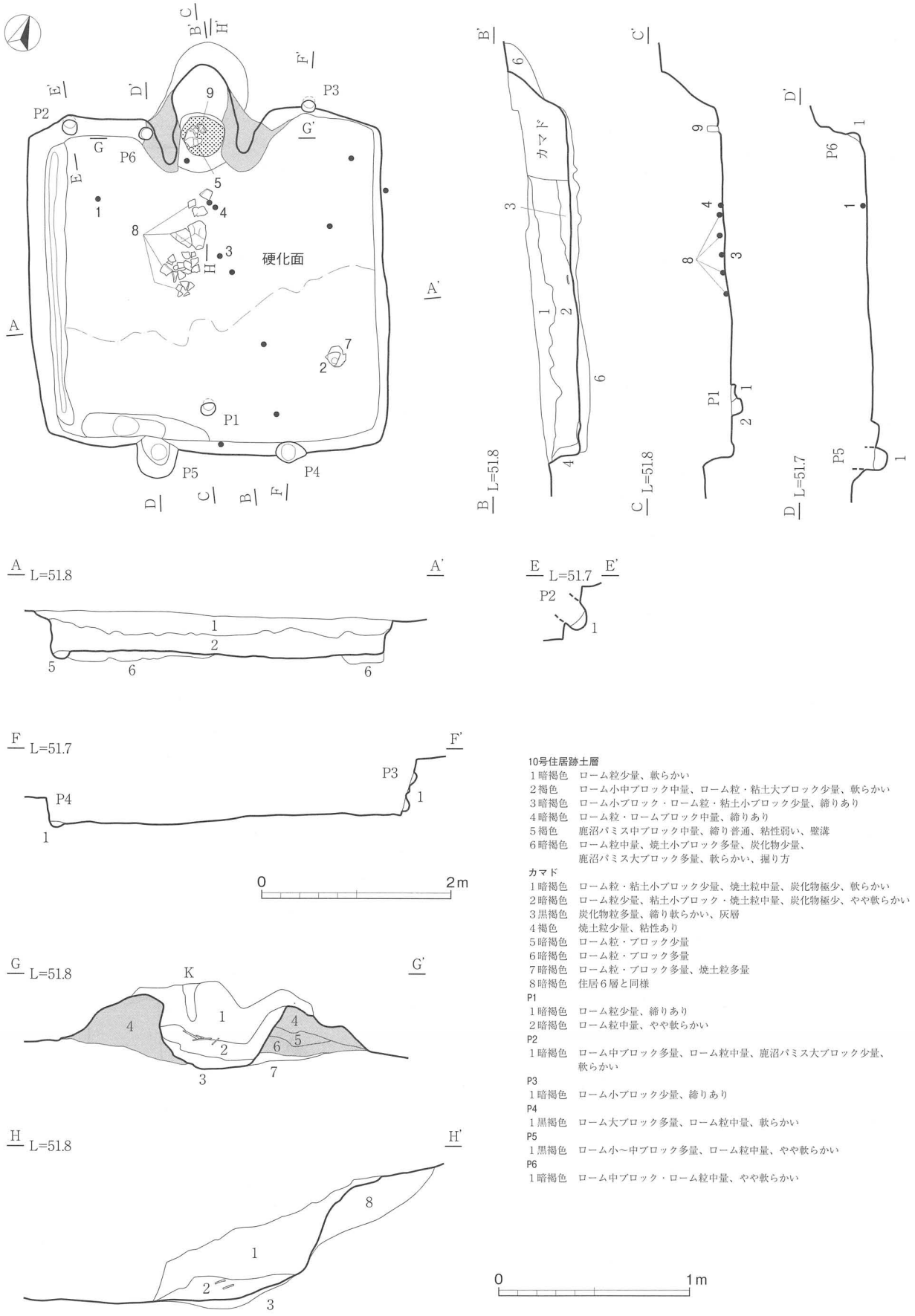
うに見えるが、２層底面を段の浅いものの底面と捉えると、深いものが古い貯蔵穴の可能性もある。貯蔵穴覆土の上層に青白色粘土が堆積している。粘土は貯蔵穴の南側床上からブロックで出土してる。　**ピット**　確認されていない。　**炉**　床面中央からやや北壁よりに位置する。楕円形で47×38cm、深さ5cm。　**覆土**　自然堆積と思われる。　**遺物**　出土遺物は、土師器の壺、鉢、甕と鉄製品の刀子と釘が出土している。貯蔵穴の直上や貯蔵穴周辺の床面上からの出土が多い。　**所見**　出土遺物は、完形品が目立つ出土状態であるが、4の甕や2の中型壺は破片で、6の壺も口縁部を欠失しており、全体には住居廃棄時の遺棄遺物と考えられる。

表45　9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 小型壷	9.6 7.6 －	口縁部はは器高の1/2であり外傾する。底部は丸く収める。内外ハケ目。内面は体～底部ナデ。	石英、白色粒、角閃石、チャート、海綿骨針	良好	橙色	ほぼ完形
2	土師器 中型壷	－ [4.4] 4.4	体部は内外ナデ、底部は輪高台となり面をヘラ削り。	石英、白色粒、角閃石、海綿骨針	良好	浅黄橙色	体部40%
3	土師器 鉢	14.6 7.9 2.5	口縁部は外反し、体部は扁球形、底部はわずかに窪む。体部はヘラ磨き、口縁部内面はハケ目、外面ヘラナデ。	石英、白色粒、角閃石、チャート、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	90%
4	土師器 甕	16.0 [8.3] －	口縁部は内稜をもって「くの字」形に開く。口縁部内面はハケ目、外面はナデ。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針、角閃石	良好	橙色	口縁～胴部
5	土師器 甕	14.9 17.9 6.1	口縁部は内稜をもって「くの字」形に開く。胴部は球形で、底部は突出した平底。内面ヘラナデ、外面縦位ヘラ削り。	石英、白色粒、角閃石、海綿骨針、チャート、雲母	良好	黒褐色	完形
6	土師器 複合口縁壷	－ [28.8] 7.2	口縁部は欠損するが頸部の残りから複合口縁となる。胴部は球形で底部は突出した平底である。内面ヘラナデ、外面斜位ヘラ削り。胴部最大径28.2ｃｍ。	石英、白色粒、チャート、角閃石、海綿骨針	良好	橙色	口縁部欠損
7	鉄製品 刀子	刃部、柄部も二等辺三角形である。長さ［3.9］cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ［5.5］g。					破片
8	鉄製品 釘	断面方形で頭部は面をなす。長さ5.0cm、幅1.2cm、厚さ0.7cm、重さ12.0g。					完形

10号住居跡（第101・102図）

位置　F3グリッドにある。　**規模と平面形**　3.45×3.20ｍの方形である。壁面は直線的で隅角は比較的角張る。　**主軸方向**　N－15°－W。　**壁**　壁高は60cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　カマド前庭部から南側に220cm、東西幅320cmで硬化している。その南端から出入り口ピットまで80cmの間は硬化してはいないが締まった状態であった。壁溝は西側と南側の西寄りであるが連続はしていない。幅は西側が22cm、深さ10cm、南側は幅24cm、深さ12cmである。南側の壁溝は幅広く、深さもP5の西側が深くなる。　**ピット**　P1は出入り口ピットで、断面からは南側から斜めに梯子が設定された状況が窺える。この他壁面にP2～6まで5箇所検出されている。断面はP4･5を除き住居側に内傾していた。P3は上下に2箇所ありいずれも内傾し、カマドを挟みP3はP4に、P5はP6に対応する。これらのピットは住居（竪穴）外柱穴であり、2本柱の伏屋式と思われる（桐生2005）。　**カマド**　北壁の中央に位置する。燃焼部から煙道部は掘り方を障壁としている。袖は灰褐色粘土で構築されているが煙道部には及んでいない。燃焼部から煙道部へ急に立ち上が



10号住居跡土層
1暗褐色　ローム粒少量、軟らかい
2褐色　ローム小中ブロック中量、ローム粒・粘土大ブロック少量、軟らかい
3暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒・粘土小ブロック少量、締りあり
4暗褐色　ローム粒・ロームブロック中量、締りあり
5褐色　鹿沼パミス中ブロック中量、締り普通、粘性弱い、壁溝
6暗褐色　ローム粒中量、焼土小ブロック多量、炭化物少量、
鹿沼パミス大ブロック多量、軟らかい、掘り方

カマド
1暗褐色　ローム粒・粘土小ブロック少量、焼土粒中量、炭化物極少、軟らかい
2暗褐色　ローム粒少量、粘土小ブロック・焼土粒中量、炭化物極少、やや軟らかい
3黒褐色　炭化物粒多量、締り軟らかい、灰層
4褐色　焼土粒少量、粘性あり
5暗褐色　ローム粒・ブロック少量
6暗褐色　ローム粒・ブロック多量
7暗褐色　ローム粒・ブロック多量、焼土粒多量
8暗褐色　住居6層と同様

P1
1暗褐色　ローム粒少量、締りあり
2暗褐色　ローム粒中量、やや軟らかい

P2
1暗褐色　ローム中ブロック多量、ローム粒中量、鹿沼パミス大ブロック少量、
軟らかい

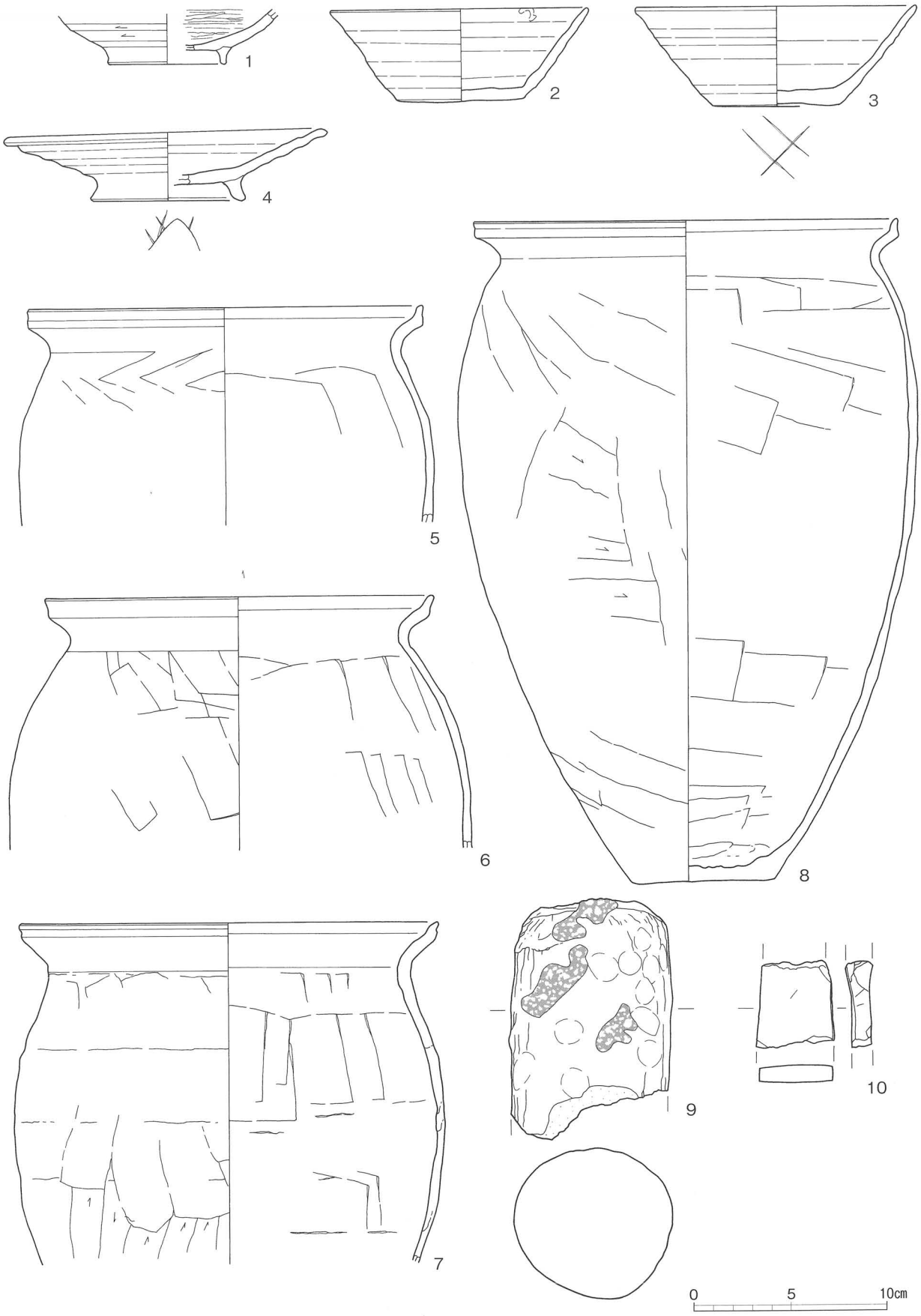
P3
1暗褐色　ローム小ブロック少量、締りあり

P4
1黒褐色　ローム大ブロック多量、ローム粒中量、軟らかい

P5
1黒褐色　ローム小～中ブロック多量、ローム粒中量、やや軟らかい

P6
1暗褐色　ローム中ブロック・ローム粒中量、やや軟らかい

第101図　10号住居跡



第 102 図　10 号住居跡出土遺物

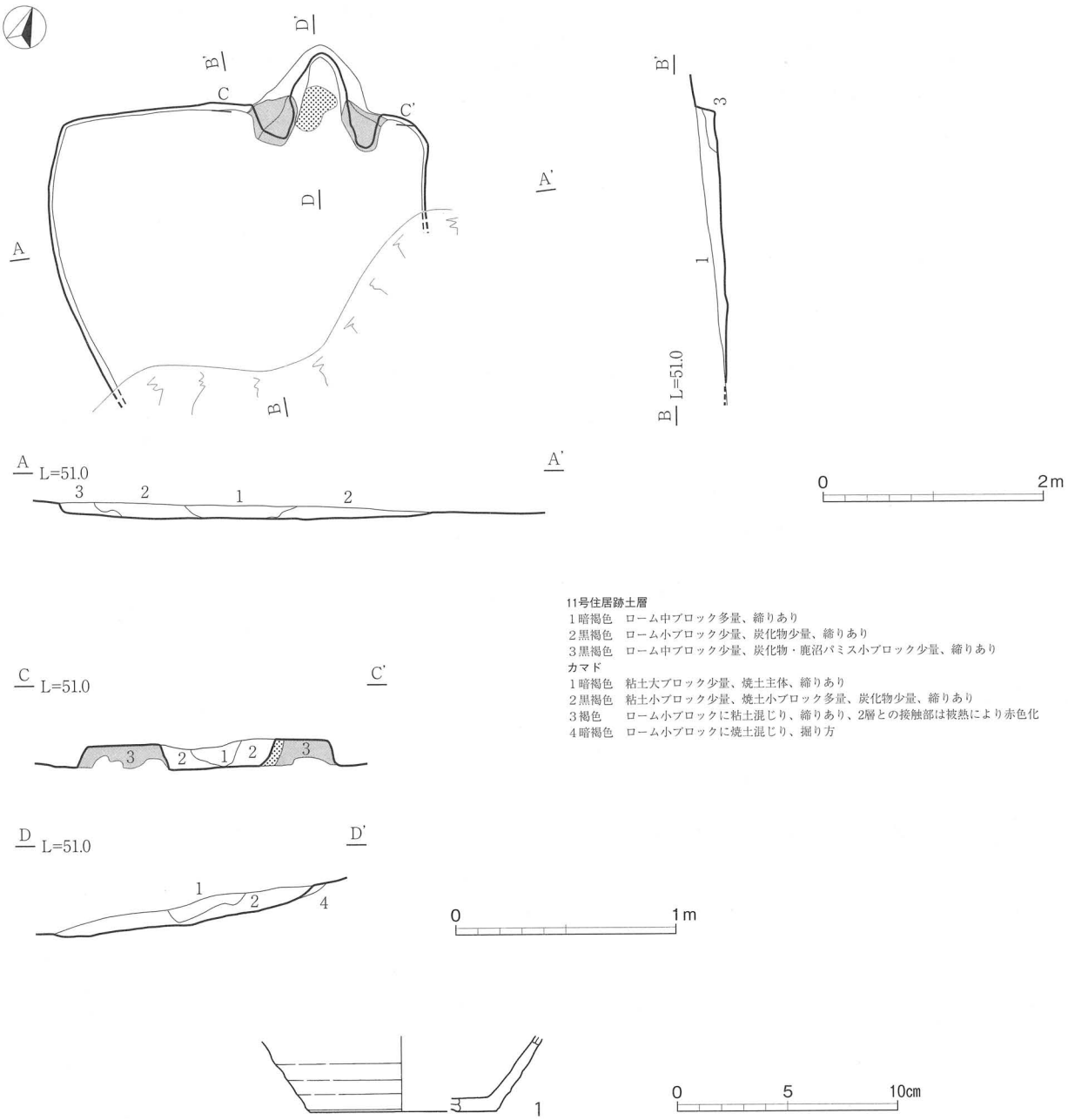
る。　**覆土**　自然堆積であろう。　**遺物**　1～4は供膳具で1が土師器、2～4が須恵器である。3の外底部には線刻「廾」、4は皿で底部は欠けているが線刻「＝ll」ヵであろう。煮炊き具は土師器甕（5～8）で口縁端部を摘み出す。　**所見**　皿（高台）の出現から9世紀中葉頃である。

表46　10住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 高台付坏	－ [2.9] (6.2)	体部下端～底部回転ヘラ削り。内面はヘラ磨き、黒色処理。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	底部片
2	須恵器 坏	13.5 4.9 6.8	底部回転ヘラ切り。右回転。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	灰色	50%
3	須恵器 坏	(14.7) 5.3 6.6	底部回転ヘラ切り。右回転。外底部線刻「＋」。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	灰色	40%
4	須恵器 皿	(16.9) 3.8 8.1	底部回転ヘラ切り。外底部線刻「＋」ヵ。	石英、白色粒、角閃石、チャート、海綿骨針	良好	灰色	60%
5	土師器 甕	(20.5) [11.5] －	口縁部は外反し端部で摘み上げられる。内：ヘラナデ、外：ヘラ削り後ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	橙色	口縁～胴部片
6	土師器 甕	20.2 [13.4] －	口縁部は外反し端部で摘み上げられる。内：ヘラナデ、外：ヘラ削り後ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	にぶい褐色	口縁～胴部片
7	土師器 甕	22.0 [17.9] －	口縁部は外反し端部で摘み上げられる。内：ヘラナデ、外：ヘラ削り後ヘラナデ。	石英、白色粒、角閃石	良好	橙色	口縁～胴部片
8	土師器 甕	22.1 35.0 7.3	口縁部は外反し端部で摘み上げられる。内：ヘラナデ、外：ヘラ削り後ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	にぶい赤褐色	90%
9	土製品 支脚	手捻り成形。カマド粘土材が付着。頂部は被熱痕が著しい。 上径8.5cm、長さ［12.8］cm、幅8.2cm、厚さ7.9cm、重さ［766.0］g。		石英、白色粒、角閃石、雲母	良好	にぶい黄橙色	30%
10	石製品 砥石	四面使用。長さ4.6cm、幅4.1cm、厚さ0.9cm、重さ33.5g、凝灰岩製。					

11号住居跡（第103図）

位置　F4グリッドにある。　**規模と平面形**　3.30×（2.40）mの方形で南側は削平されている。　**主軸方向**　N－19°－W。　**壁**　壁高は北側で18cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　硬化範囲としては見られないが全体に締まっている。　**カマド**　北壁の東隅にあり、袖部は粘土を含んだ褐色土で構築され、煙道部までは掘り方のみで粘土の構築は無い。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。袖部下の地山はわずかに突出、あるいは凹んでいた。3層粘土がズレないための工夫であろうか。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　覆土中の遺物である。1は須恵器坏、薄く軽量である。　**所見**　遺物年代は9世紀末。



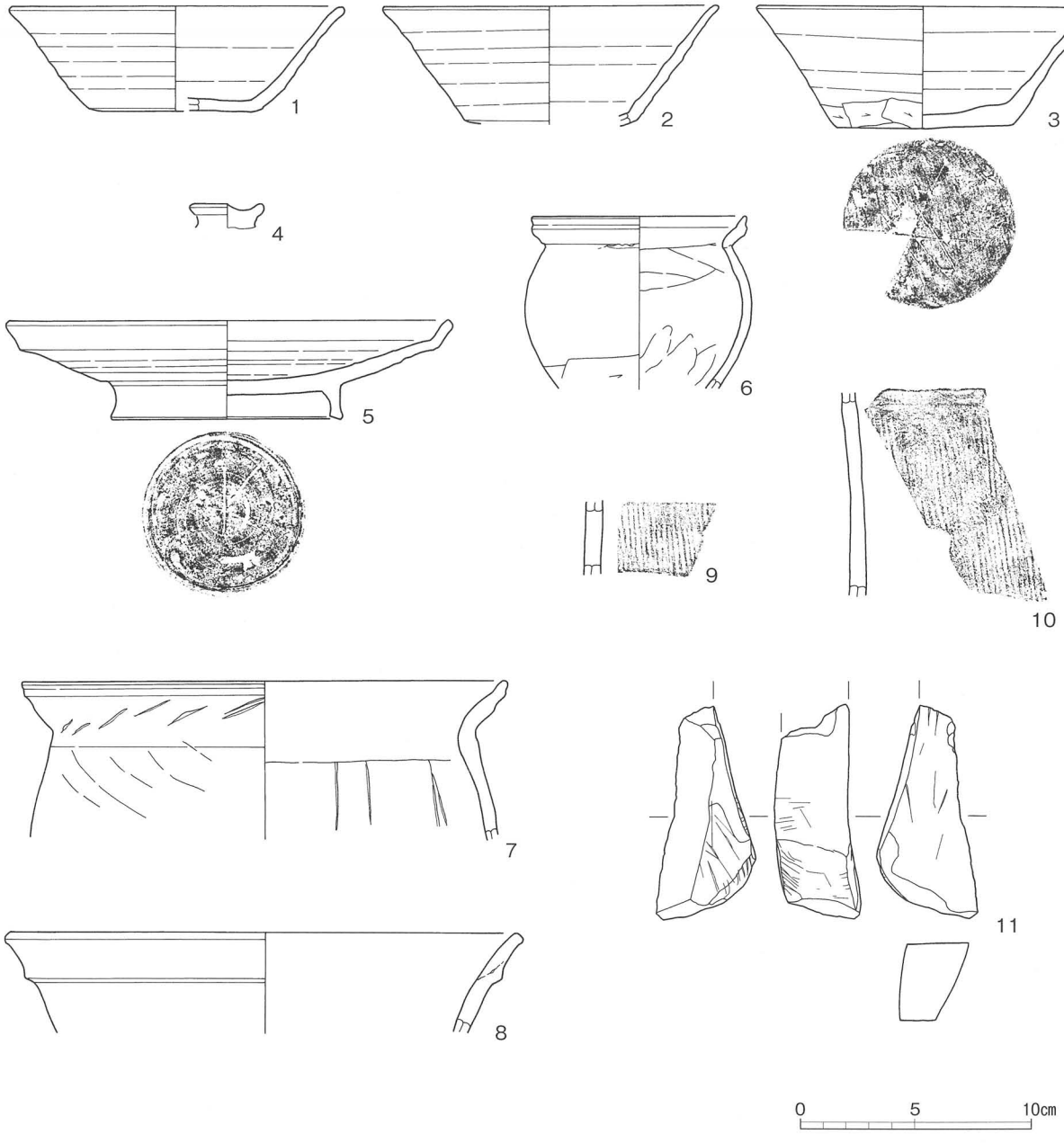
第103図　11号住居跡・出土遺物

表47　11号住居跡出土遺物観察表

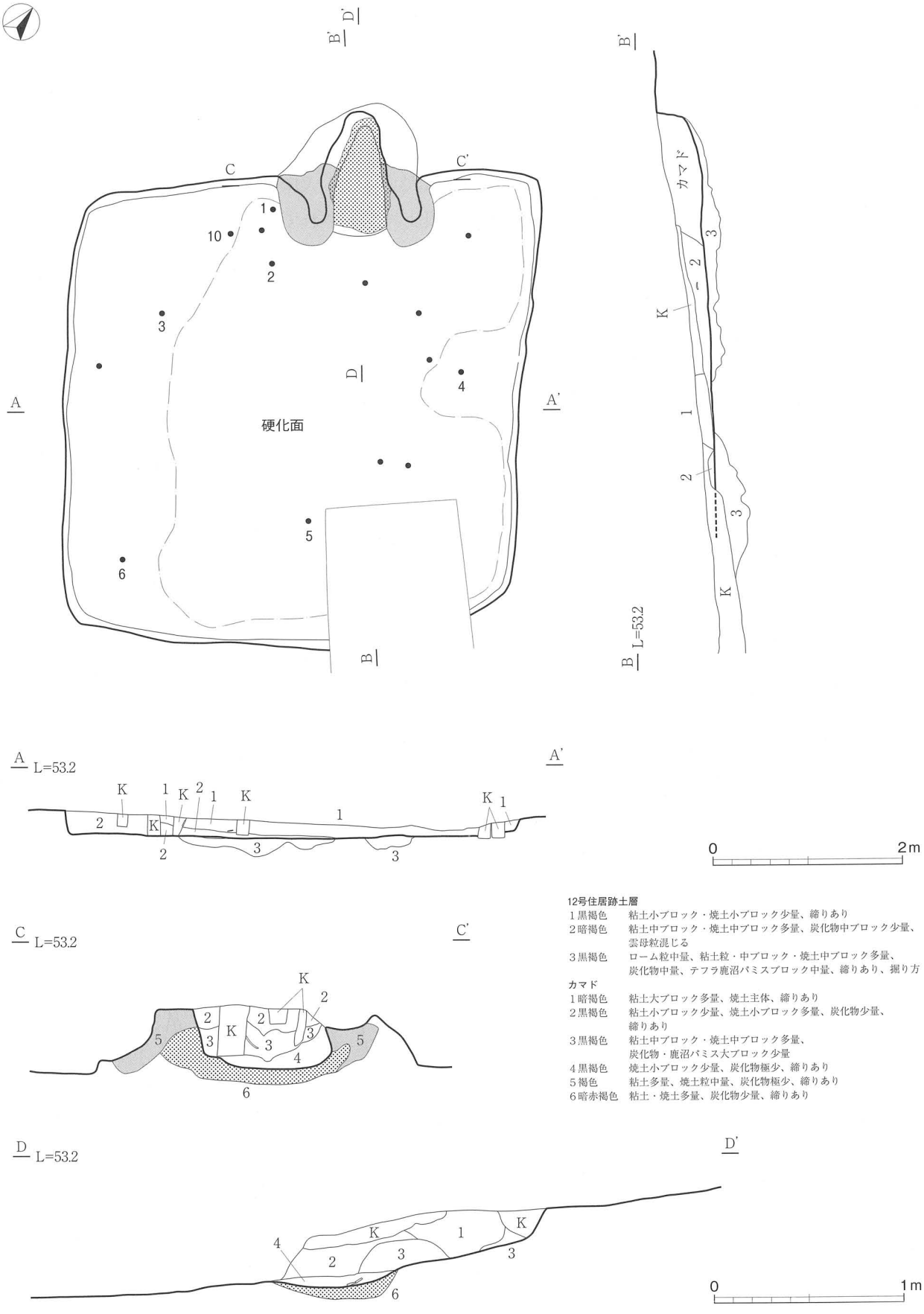
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ [3.4] (8.5)	底部は回転ヘラ切り。	白色粒、石英	良好	灰色	底部片

12号住居跡（第104・105図）

位置　E、3･4グリッドにある。　**規模と平面形**　4.95 × 4.65 mの方形、南壁より北壁が長く台形状となる。**主軸方向**　N－53°－W。　**壁**　壁高は25cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅350cmで硬化している。範囲はカマド前庭部から南壁に至るが、西壁側で通して100cm、東壁の中央付近で一部100cmが空白となる。その範囲には柱などの構造物は皆無であった。　**カマド**　北壁の東寄りにあり、袖部は粘土を含んだ褐色土で構築され、煙道部までは掘り方がありながらそこにまでは及んでいない。火床部下の6層は粘土混じりで構築され、焼土を含むなど構成・用途が異なるが、袖部と一体化して構築されていた。燃焼部から煙道部への傾斜



第104図　12号住居跡出土遺物



12号住居跡土層
1黒褐色　粘土小ブロック・焼土小ブロック少量、締りあり
2暗褐色　粘土中ブロック・焼土中ブロック多量、炭化物中ブロック少量、雲母粒混じる
3黒褐色　ローム粒中量、粘土粒・中ブロック・焼土中ブロック多量、炭化物中量、テフラ鹿沼パミスブロック中量、締りあり、掘り方

カマド
1暗褐色　粘土大ブロック多量、焼土主体、締りあり
2黒褐色　粘土小ブロック少量、焼土小ブロック多量、炭化物少量、締りあり
3黒褐色　粘土中ブロック・焼土中ブロック多量、炭化物・鹿沼パミス大ブロック少量
4黒褐色　焼土小ブロック少量、炭化物極少、締りあり
5褐色　粘土多量、焼土粒中量、炭化物極少、締りあり
6暗赤褐色　粘土・焼土多量、炭化物少量、締りあり

第105図　12号住居跡

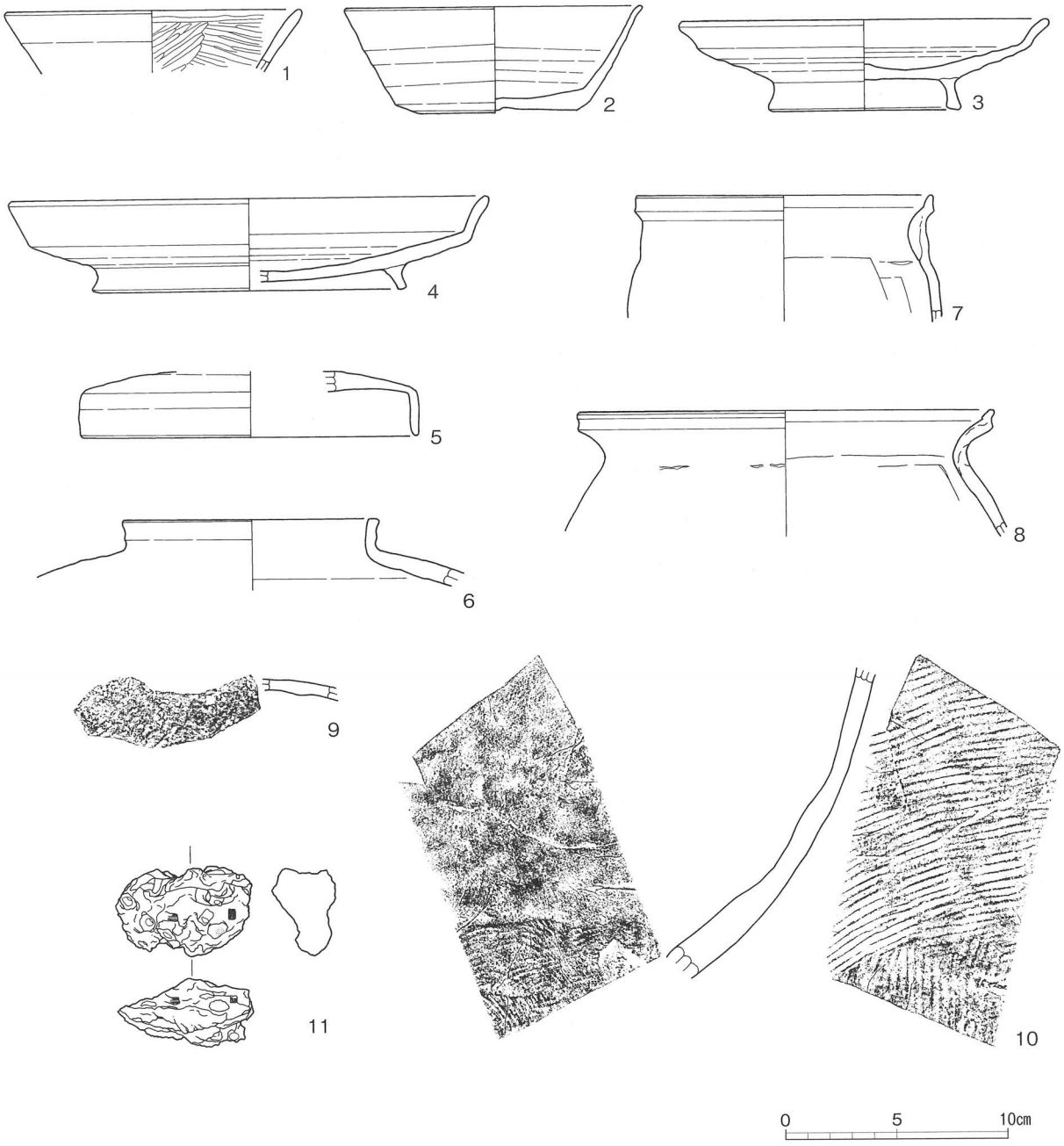
は撹乱で明確でないが立ち上がる様相である。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　カマド周辺と床面に散見される。1～3は須恵器坏、4は須恵器蓋、8～10は須恵器甕、7は土師器甕である。　**所見**　遺物年代は9世紀中葉頃である。

表48　12号住居跡出土遺物観察表

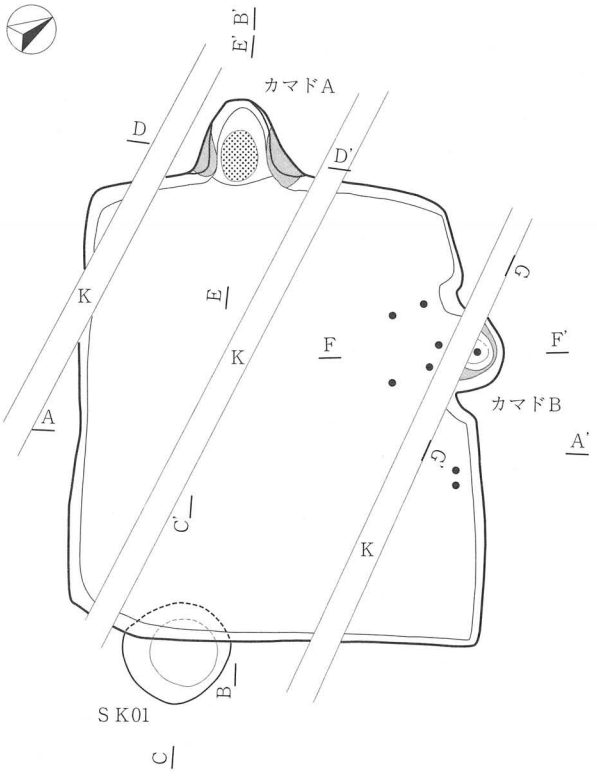
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(14.6) 4.6 7.4	底部回転ヘラ切り。	石英、白色粒、海綿骨針、チャート	良好	灰色	40%
2	須恵器 坏	14.6 [5.3] 7.4	底部回転ヘラ切り。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	灰色	50%
3	須恵器 坏	14.6 5.4 7.6	底部回転ヘラ切り後線刻「 ≠ 」。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	灰色	70%
4	須恵器 蓋	－ [1.0] －	ロクロ成形。扁平鈕である。	石英、白色粒	良好	灰色	鈕部
5	須恵器 盤	19.4 4.4 10.0	底部回転ヘラ削り後線刻「 米 」。	石英、白色粒	良好	褐灰色	ほぼ完形
6	土師器 小型甕	(9.3) [7.7] －	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：ヘラナデ、外：胴部は剥離で不明、下端は横位ヘラ削り。	石英、白色粒、雲母	良好	橙色	40%
7	土師器 甕	(21.0) [7.1] －	口縁部は外傾し端部で摘み出される。内：横位ヘラナデ、外：斜位ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	還元軟質	暗赤褐色	口縁部片
8	須恵器 甕	(22.1) [4.4] －	口縁部は外反し浅い周縁をなす。内外剥離で不明。	白色粒、雲母	還元軟質	灰色	口縁部片 新治産
9	須恵器 甕	－ － －	外面平行タタキ。	石英、白色粒、雲母	未還元軟質	にぶい黄橙色	胴部片
10	須恵器 甕	－ － －	外面平行タタキ。	石英、白色粒、雲母	未還元軟質	にぶい黄橙色	胴部片
11	石製品 砥石	四面使用。長さ9.3cm、幅4.1cm、厚さ3.5cm、重さ136.1g、凝灰岩製。					頭部欠損

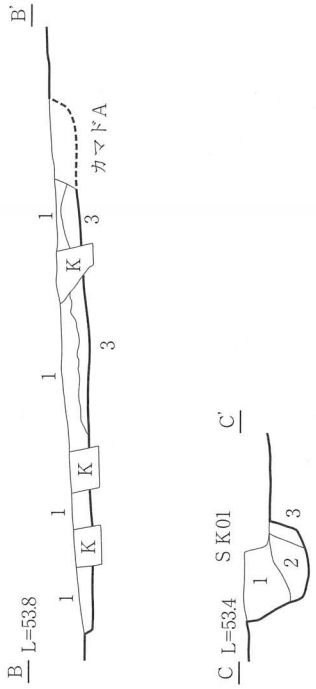
13号住居跡（第106・107図）

位置　E３グリッドにある。　**規模と平面形**　3.50 × 3.00 mの方形であるが、隅角は南東側を除き鈍角的で、北壁は2.70 m、南壁は3.00 mと台形状である。また南壁は南東隅角からカマド付近まで直線的である。北壁はやや膨らみ気味となる。　**主軸方向**　N－58°－W。　**壁**　壁高は15cm、垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面は無いが全体的に締まっている。　**カマド**　北側（カマドA）・東側（カマドB）の2箇所。カマドAは北壁中央やや西寄りにあり、袖部は粘土を含んだ暗褐色で構築されている。粘土は燃焼部付近まで残るが煙道部までは及んでいない。傾斜は燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。カマドBは東壁の北寄りに位置する。粘土で構築された袖はすでに無く、地山整形の袖がわずかに残る。粘土材は燃焼部から煙道部に

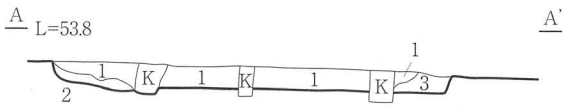


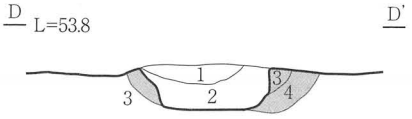
第106図　13号住居跡出土遺物

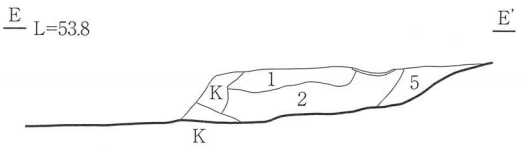


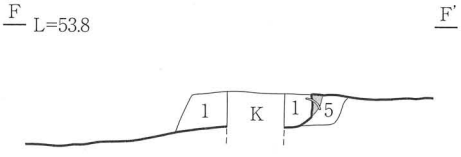


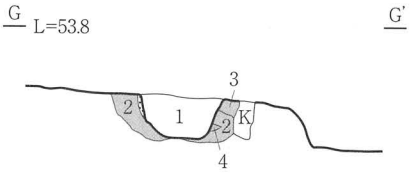
13号住居跡土層
1暗褐色　ローム粒・焼土粒・炭化物粒少量、軟らかい
2褐色　ローム小・中ブロック多量、ローム粒中量、締りあり
3暗褐色　砂粒少量、締りあり











13号住居跡土層
カマドA
1黒褐色　粘土多量、焼土粒少量、粘土ブロック大量層、締りあり
2暗褐色　粘土小中ブロック中量、焼土粒多量、雲母粒、締りあり
3暗褐色　ローム小ブロック少量、ローム粒・砂粒中量、粘土中ブロック少量、焼土粒中量、炭化物中ブロック少量、締りあり、掘り方
4暗褐色　灰褐色粘土ブロック中量、締りあり
5暗褐色　ローム中ブロック・砂粒少量、締りあり、掘り方
カマドB
1黒褐色　中ブロック少量、焼土粒少量小中ブロック、炭化物小ブロック少量、締りあり
2黒褐色　粘土多量、炭化物粒極少、締りやや軟らかい、粘性あり
3黒褐色　ローム粒少量、粘土小ブロック中量、焼土中ブロック少量粒多量、炭化物中量
4黒褐色　ローム粒少量、焼土微量、締りあり
5暗褐色　粘土小ブロック中量、締りやや軟らかい

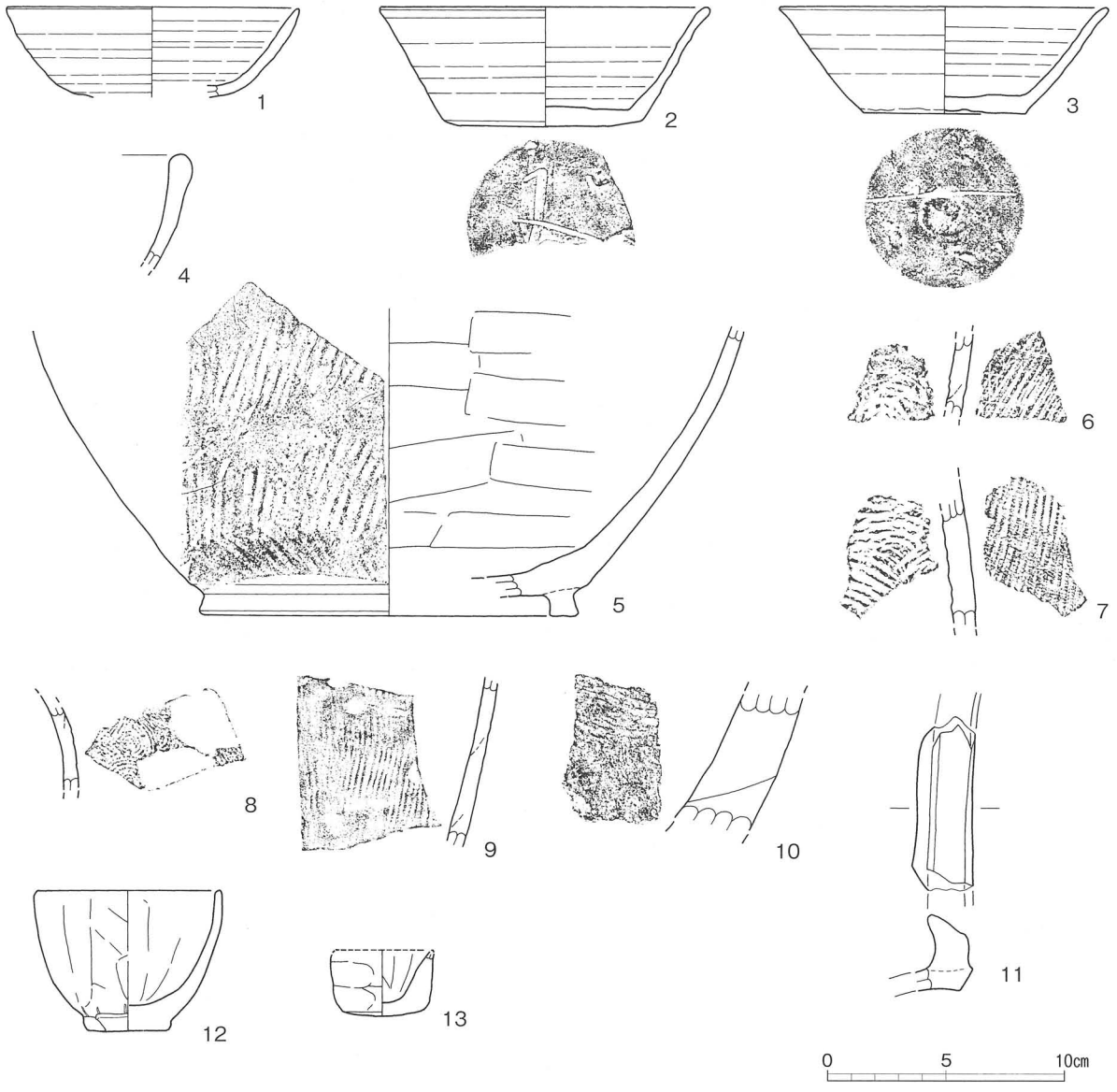
第107図　13号住居跡

及んでいた。傾斜は燃焼部から煙道部へ急激に立ち上がる。　**覆土**　自然堆積である。　**遺物**　カマド周辺と南側に散見される。1は土師器坏、2は須恵器坏、3·4は須恵器盤、5·6は須恵器短頸壷の蓋と壷である。7·8は土師器甕、9·10は須恵器甕である。9は薄手で外面に平行タタキを行う。10は球形の胴部で内面は底部に同心円当て具痕、外面に平行タタキ痕がみられる。11は鉄滓で炭化物が付着する。　**所見**　9世紀中葉頃の所産である。

表49　13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(13.4) [2.8] –	内面ヘラ磨き、黒色処理。	石英、白色粒、雲母、海綿骨針	良好	にぶい褐色	口縁部片
2	須恵器 坏	13.4 4.7 7.4	底部回転ヘラ切り。右回転。	石英、白色粒、海綿骨針、チャート	良好	オリーブ灰色	ほぼ完形
3	須恵器 盤	(16.6) 4.1 (8.6)	底部回転ヘラ削り。右回転	石英、白色粒、海綿骨針、角閃石、雲母、チャート	未還元	にぶい黄褐色	20%
4	須恵器 盤	21.5 4.2 14.1	底部回転ヘラ削り。右回転	石英、白色粒	良好	灰色	50%
5	須恵器 蓋	(15.3) [2.9] –	天井部回転ヘラ削り。	白色粒、黒色粒	良好	灰色	10%以上
6	須恵器 短頸壷	(11.6) [3.6] –	ロクロ成形。	石英、白色粒、黒色融出粒	良好	灰色	口縁部片
7	土師器 甕	(13.4) [5.7] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：ヘラナデ、外：ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	明赤褐色	口縁部片
8	土師器 甕	(18.8) [5.7] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内：ヘラナデ、外：ヘラナデ。	石英、白色粒、角閃石	良好	にぶい黄褐色	口縁部20%以上
9	須恵器 甕	– [1.0] –	外面は格子タタキ。	石英、白色粒	良好	オリーブ灰色	肩部片
10	須恵器 甕	– (13.9) –	胴部は球形となるタイプ。内：胴部下位は同心円当て具、外：平行タタキ。	石英、白色粒、黒色融出粒	良好	灰色	底部片
11	鉄滓	炭化物が付着。長さ6.1cm、幅4.5cm、厚さ3.0cm、重さ66.6g。					

第２節　遺構外出土遺物



第 108 図　遺構外出土遺物

表50　遺構外出土遺物観察表

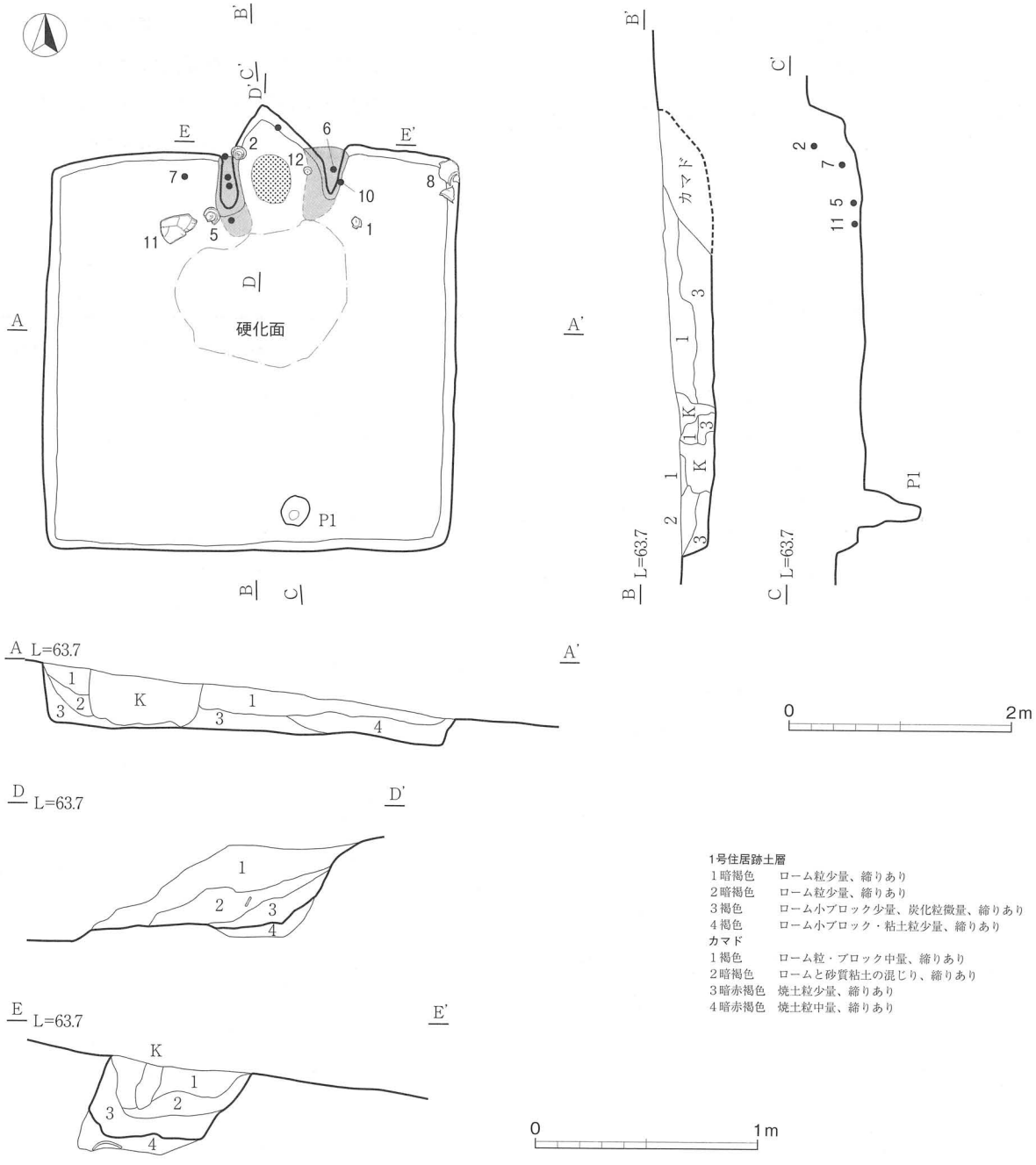
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(12.3) 3.8 –	底部が丸みを持つ古相の坏。	白色粒	良好	灰色	口縁部片
2	須恵器 坏	(14.0) 5.0 –	底部回転ヘラ切り後線刻「人」ヵ。	海綿骨針、石英、白色粒	良好	灰色	50%
3	須恵器 坏	(14.0) 4.5 6.8	底部回転ヘラ切り後線刻「一」。	海綿骨針、石英	良好	灰色	50%
4	須恵器 鉢	– – –	口縁部は内湾するタイプ。鉄鉢か。	海綿骨針、石英、白色粒	未還元軟質	黒色	口縁部片
5	須恵器 高台付鉢	– [13.0] (16.0)	口縁部欠損。体部は内湾しながら開く。底部に高台が貼り付けられる。内：ヘラナデ、外：平行タタキ。	石英、黒色粒	良好	灰色	体～底部片
6	須恵器 甕	– – –	内：同心円当て具、外：平行タタキ。	白色粒	未還元軟質	灰オリーブ色	胴部片 新治産ヵ
7	須恵器 甕	– – –	内：同心円当て具、外：平行タタキ。	白色粒	良好	灰色	胴部片
8	須恵器 甕	– – –	外：同心円タタキ。	石英、白色粒	未還元	灰黄色	胴部片 新治産
9	須恵器 甕	– – –	内：同心円当て具、外：平行タタキ。	角閃石、雲母	還元軟質	灰黄色	胴部片 新治産
10	須恵器 甕	– – –	内：ナデ、外：平行タタキ。	石英、白色粒	良好	灰色	胴部片
11	土製品 置きカマド	– – –	焚き口の鍔であろう。	石英、角閃石	良好	橙色	鍔部片
12	土製品 手捻り土器	(7.8) 5.9 3.5	鉢形の所謂ミニチュアであろうか。内外ヘラナデ。	石英、角閃石、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	50%
13	土製品 手捻り土器	– (2.8) 3.6	外面には指圧痕が残る。内面はヘラナデ。	海綿骨針、石英	良好	黒色	体～底部片

第Ⅵ章　Ｃ区の遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

１号住居跡（第 109 ～ 111 図）

位置　Ａ３グリッドにある。　**規模と平面形**　3.45 × 3.50 ｍで隅角が鋭角的な方形である。　**主軸方向**　Ｎ－0°－Ｗ。　**壁**　壁高は 50cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　硬化した範囲は全面ではなく、カマド前庭

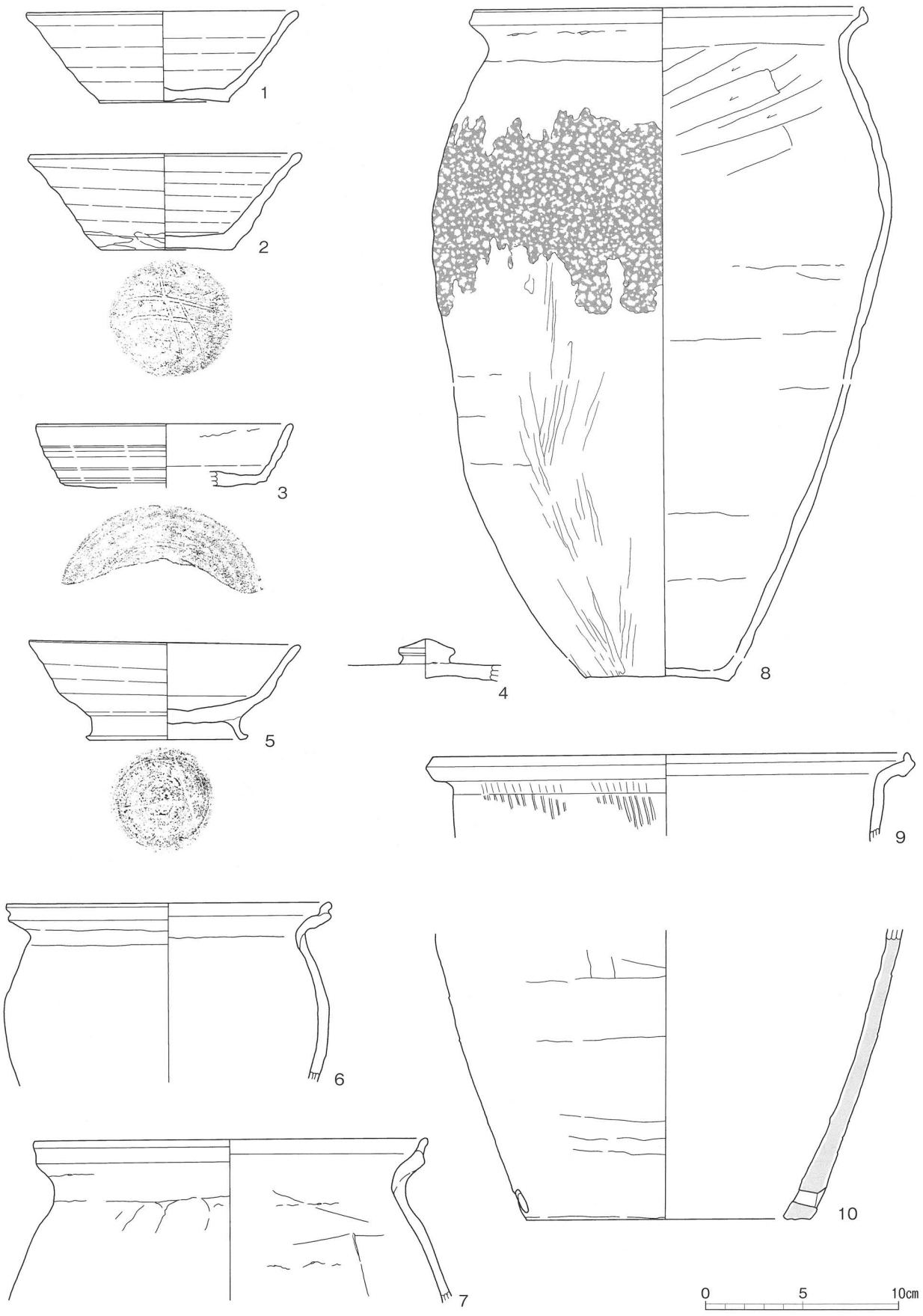


第 109 図　１号住居跡

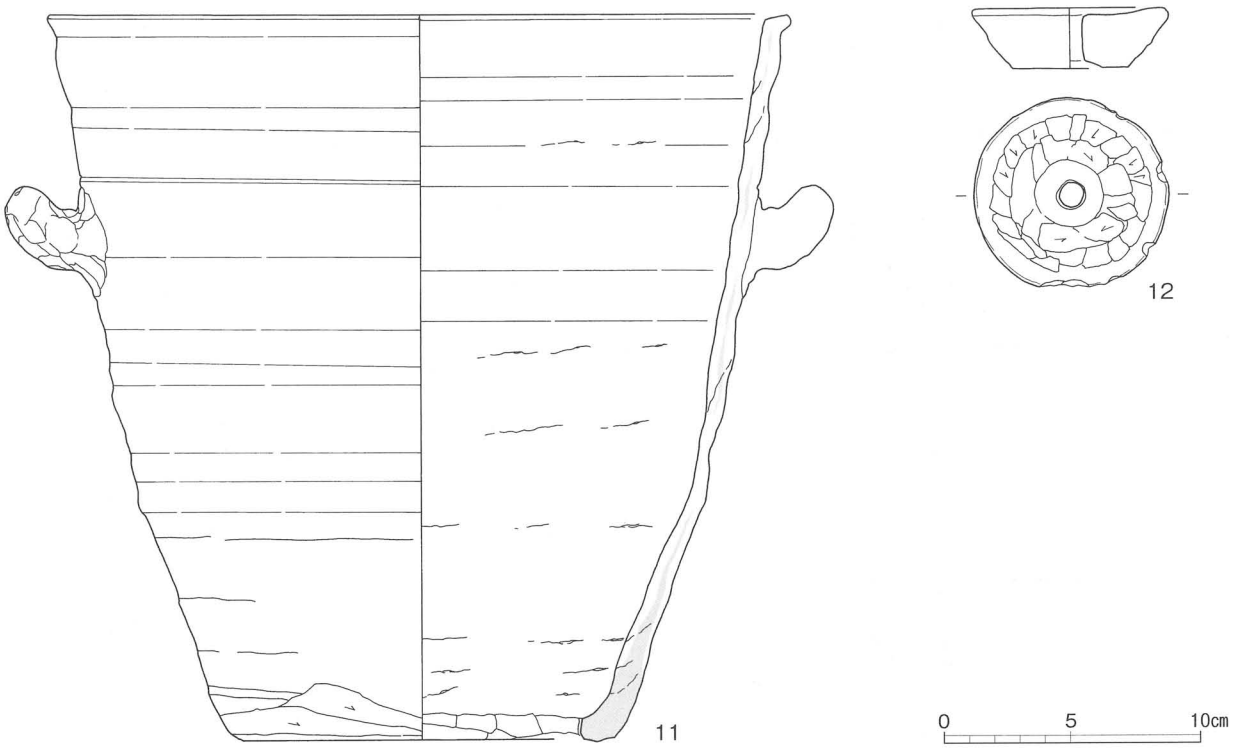
から南に120cm、幅160cmのわずかな範囲にあり、南壁までには至ってなかった。　**ピット**　床面上に柱穴はない。住居（竪穴）外柱穴である。P1はカマドの南側対面にやや中央から東に偏った位置にある。30×26cm、深さ55cmである。性格的には出入り口ピットであろう。　**カマド**　北壁のほぼ中央にあり、煙道部は地山内に切り込み、燃焼部から煙道部へ急激に立ち上がる。袖部は粘土を含んだ灰褐色で構築されているが杉の根で壊され、辛うじて燃焼部は免れた状況であった。袖部粘土の遺存は悪く、特に床面側はわずかな粘土範囲で想定した。　**覆土**　3、4層は水平に堆積され、人為的な様相であろうか。　**遺物**　カマド付近を主体と北東隅に散見される。1～5は須恵器供膳具である。2の底部には線刻「＝Ⅱ」ヵが見られる。6～8は土師器煮炊き具で常総型の甕である。8はカマドに使用された粘土が肩から胴部まで付着しており、カマドに固定されたものであろう。9の須恵器は新治産の甕である。10・11は須恵器甑で側面に牛角状の把手が付く。底部は基本的に2孔であるが10のように下端に孔を穿つものもある。おそらく棒状のものを通したものであろう。胎土は木葉下・大淵窯製品と同様であるが、特定は困難である。焼成はいずれも未還元の状況であり、還元範囲は内部のみである。またこの煮焚き具には新治窯産の甕9が混じる。土師器は坏類がなく甕で占められる。12の土製紡錘車は直径8cmの大型品で使用頻度は高い。　**所見**　須恵器から9世紀前～中葉頃である。

表51　1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(14.3) 4.8 6.8	底部は回転ヘラ切り離し後ナデ、ロクロ右回転。	石英2～3mm多量、チャート2mm少量	良好	淡黄色	40%
2	須恵器 坏	14.4 5.0 6.8	底部は回転ヘラ切り離し後ナデ、ロクロ右回転。底部線刻「＃」。	石英、白色、チャート、骨針	良好	灰オリーブ色	90%
3	須恵器 坏	(13.8) 3.3 (10.6)	口縁～体部は箱型となる。底部は回転ヘラ削り、ロクロ右回転。形態・胎土から地元産と異なる。	白色粒1mm以下、黒色融出少量　全体に木目細か	良好	灰色	30%
4	須恵器 蓋	－ (2.1) －	偏平鈕である。	石英極少量、チャート極少量	還元軟質	灰白色粒	鈕
5	須恵器 高台付坏	14.1 5.3 8.5	底部は回転ヘラ削り後ナデ。底部刻書「＃」。内面スサ粘土がわずかに付着している。	石英2～3mm、チャート少量、海綿骨針極少量	良好	灰色	90%
6	土師器 甕	17.0 (9.5) －	口縁部はナデ、胴部外面はヘラ削り後ナデ、胴部内面はヘラナデである。	石英多量、白色粒多量、雲母少量、赤褐色極小量	良好	にぶい褐色	50%
7	土師器 甕	20.4 (8.5) －	口縁部はナデ、胴部外面はヘラ削り後ナデ、胴部内面はヘラナデである。	石英多量、雲母粒少量、赤褐色極小	良好	にぶい褐色	50%
8	土師器 甕	20.3 35.0 7.5	口縁部はナデ、胴部外面はヘラ削り後ヘラ磨き、胴部内面はヘラナデである。胴部外面上半にはカマド粘土が付着し一周する。	石英多量、雲母多量、赤褐色粒少量	良好	にぶい褐色	70%
9	須恵器 甕	(15.0) (4.2) －	広口の甕である。口縁～胴部は外面平行タタキ（縦位）内面はナデである。	白色粒少量、雲母少量	還元軟質	灰白色粒	口縁部片 新治産
10	土師器 甑	－ (15.0) 14.4	胴部内外ロクロ成形。胴部上半に一対の把手が付くタイプ。底部には孔が穿たれ棒状のものを差し込んで使用する2孔式。還元範囲は外面まで及んでいない。	石英多量、チャート少量、赤褐色粒少量	未還元	にぶい褐色	底部片
11	須恵器 甑	29.0 28.5 15.0	胴部内外ロクロ成形。胴部上半に一対の把手が付く。底部は2孔式。	石英多量、チャート少量、海綿骨針極少量、白色粒多量	未還元	浅黄橙色	40%
12	土製品 紡錘車	上径7.7cm、下径4.1cm、厚さ2.4cm、孔径1.0cm、重さ102.7g。 断面台形状の紡錘車。下面は花弁状に細かいヘラ削りがなされる。		石英多量、角内石、海綿骨針極少量	良好	にぶい褐色	完形



第110図　1号住居跡出土遺物①



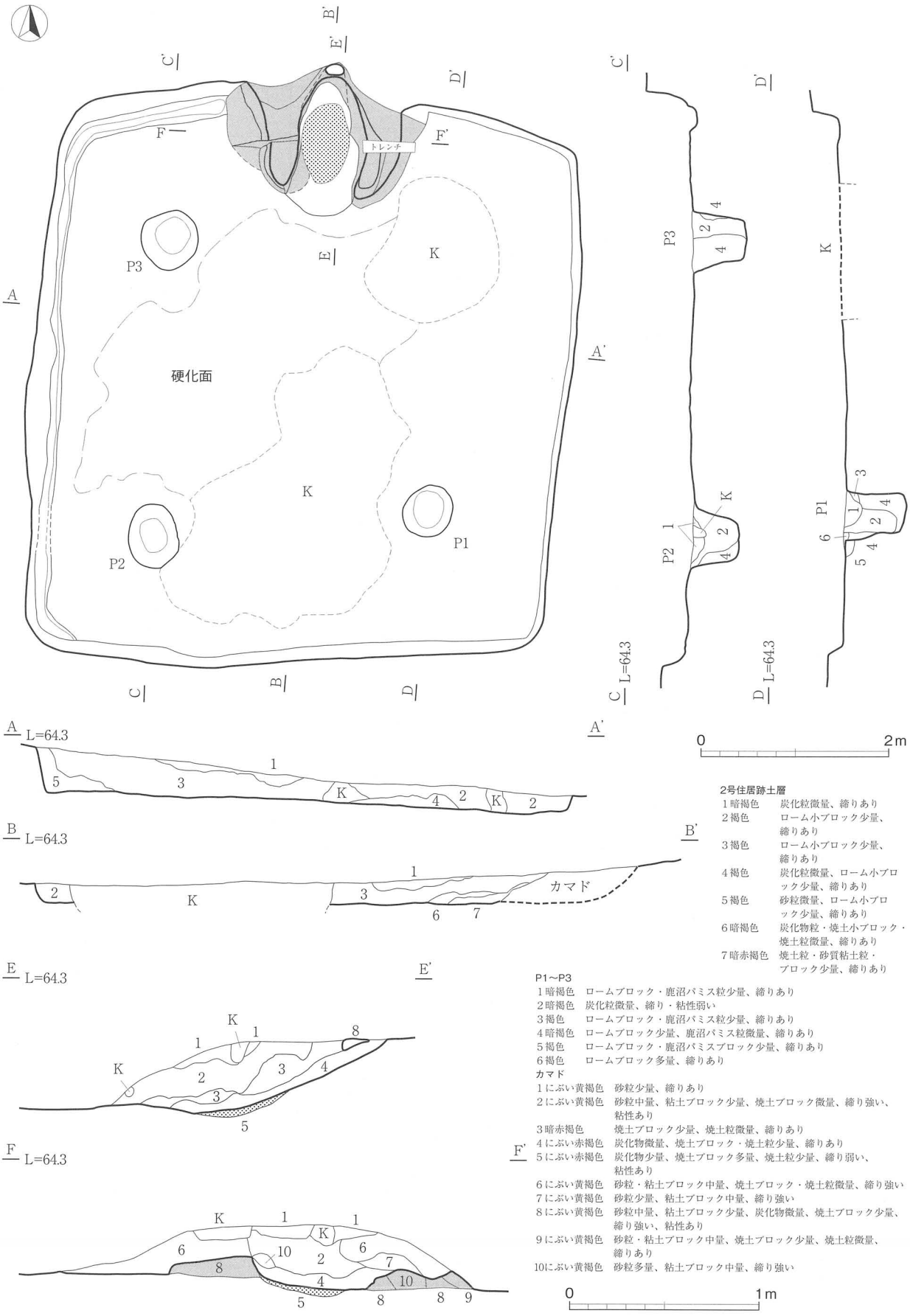
第111図　1号住居跡出土遺物②

2号住居跡（第112・113図）

位置　A、B3グリッドにある。　**規模と平面形**　6.00×5.40mの方形であるが、やや東側に偏った平行四辺形状となる。北側の壁面は直線ではなく、カマド部がやや突出気味となる。　**主軸方向**　N－5°－E。　**壁**　壁高は40cm、垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面は遺存の良い箇所では幅3mの範囲にあるが、カマド前庭部から各主柱穴内を範囲とするが植栽により壊され、特に南側は甚大である。　**ピット**　3箇所（基本的には4箇所、出入り口ピットは無い、北東のピットは植栽で破壊）。P1：52×65cm、深さ46cm、P2：70×50cm、深さ48cm、P3：64×64cm、深さ55cmである。土層からは柱の抜き取り痕（P1、2）が看取される。出入り口ピットは撹乱で不明。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。煙道部には煙出し孔が18×13cmの楕円形で遺存し、燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。**覆土**　全体的に締まってはいるものの西側（高位部）からの自然堆積である。　**遺物**　覆土中からの出土である。1～4は須恵器供膳具である。5は土師器常総型甕、6～8は須恵器貯蔵具、9は須恵器煮炊き具、10は砥石である。**所見**　遺物は覆土中であるが8世紀中葉～後葉であろう。

表52　2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(14.0) 4.0 (9.2)	下端～底部は回転ヘラ削り。	白色粒極少量、石英少量、雲母多量	還元軟質	灰色	20% 新治産
2	須恵器 坏	(14.0) 5.2 (7.2)	容量の深い坏、底部回転ヘラ切り。外体部に火襷痕、内面に漆が付着する。	白色粒、石英多量、海綿骨針多量	良好	暗灰黄色	30%



2号住居跡土層

1暗褐色	炭化粒微量、締りあり
2褐色	ローム小ブロック少量、締りあり
3褐色	ローム小ブロック少量、締りあり
4褐色	炭化粒微量、ローム小ブロック少量、締りあり
5褐色	砂粒微量、ローム小ブロック少量、締りあり
6暗褐色	炭化物粒・焼土小ブロック・焼土粒微量、締りあり
7暗赤褐色	焼土粒・砂質粘土粒・ブロック少量、締りあり

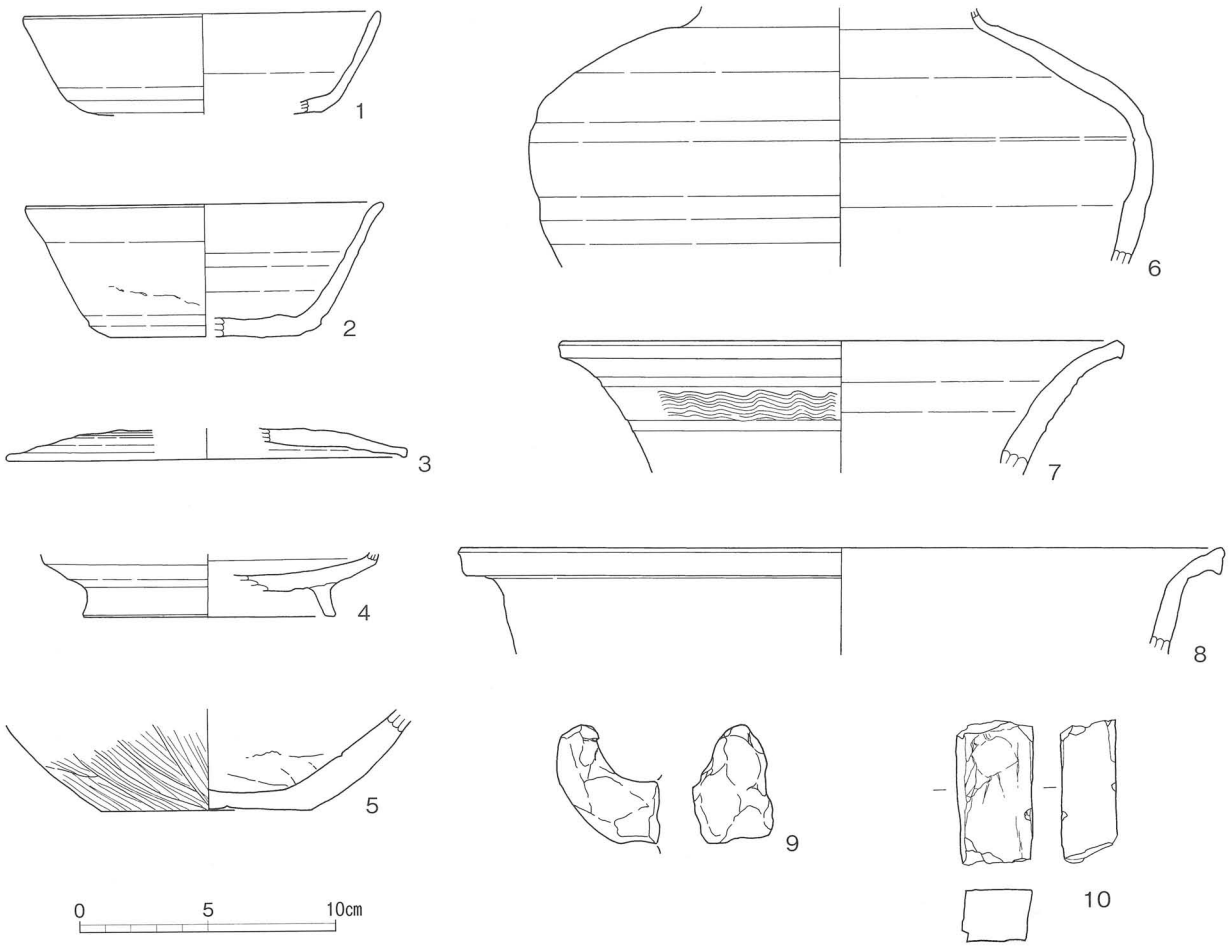
P1～P3

1暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス粒少量、締りあり
2暗褐色	炭化粒微量、締り・粘性弱い
3褐色	ロームブロック・鹿沼パミス粒少量、締りあり
4暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス粒微量、締りあり
5褐色	ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量、締りあり
6褐色	ロームブロック多量、締りあり

カマド

1にぶい黄褐色	砂粒少量、締りあり
2にぶい黄褐色	砂粒中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量、締り強い、粘性あり
3暗赤褐色	焼土ブロック少量、焼土粒微量、締りあり
4にぶい赤褐色	炭化物微量、焼土ブロック・焼土粒少量、締りあり
5にぶい赤褐色	炭化物少量、焼土ブロック多量、焼土粒少量、締り弱い、粘性あり
6にぶい黄褐色	砂粒・粘土ブロック中量、焼土ブロック・焼土粒微量、締り強い
7にぶい黄褐色	砂粒少量、粘土ブロック中量、締り強い
8にぶい黄褐色	砂粒中量、粘土ブロック少量、炭化物微量、焼土ブロック少量、締り強い、粘性あり
9にぶい黄褐色	砂粒・粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、焼土粒微量、締りあり
10にぶい黄褐色	砂粒多量、粘土ブロック中量、締り強い

第112図　２号住居跡

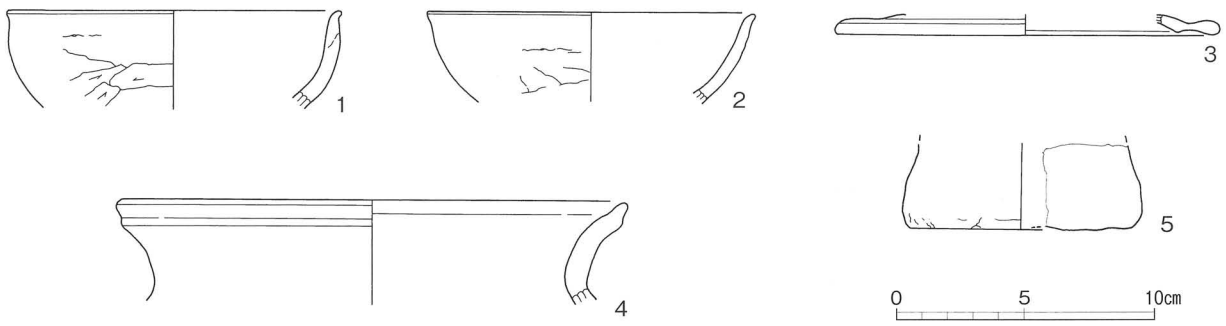


第113図　2号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 蓋	(15.6) (1.2) –	天井部2/3回転ヘラ削り。鈕は不明、端部の屈折はわずかである。重ね焼き痕あり。	白色粒少量、海綿骨針極少量	良好	灰色	口縁部片
4	須恵器 高台付坏	– [2.5] (10.0)	底部回転ヘラ削り。	白色粒極少量、海綿骨針極少量	良好	灰色	底部片
5	土師器 甕	– (4.0) 8.0	外胴部ヘラ磨き。外底部木葉痕あり。	石英多量、雲母多量、赤褐色粒少量、チャート極少量	良好	にぶい褐色	50%
6	須恵器 短頸壺	– 10.2 –	胴部片のみで形状は不明。焼成時の降灰多量に付着。	白色粒、石英少量、黒色融出粒多量	良好	灰色	胴部片 最大径24.2cm
7	須恵器 甕	(22.0) [5.2] –	口縁部は外傾し端部で屈曲する。中位に櫛描き波状文がある。	白色粒、石英2～3㎜角極少量、海綿骨針極少量	良好	灰色	口縁部片
8	須恵器 甕	(29.8) [4.2] –	口縁部は端部で屈曲し面をなす。バケツ状の甕である。残存部からは叩き痕は不明。	石英少量、赤褐色粒極小	良好	にぶい褐橙色	口縁部片
9	須恵器 甑	– – –	胴部上位にある牛角状の把手である。	石英、白色粒細粒多量、チャート少量	還元軟質	灰白色粒	把手部
10	石製品 砥石	長方形で側面の2面を使用。長さ5.7cm、幅2.6cm、厚さ2.1cm、重さ61.2g、凝灰岩製。					

３号住居跡（第 114・115 図）

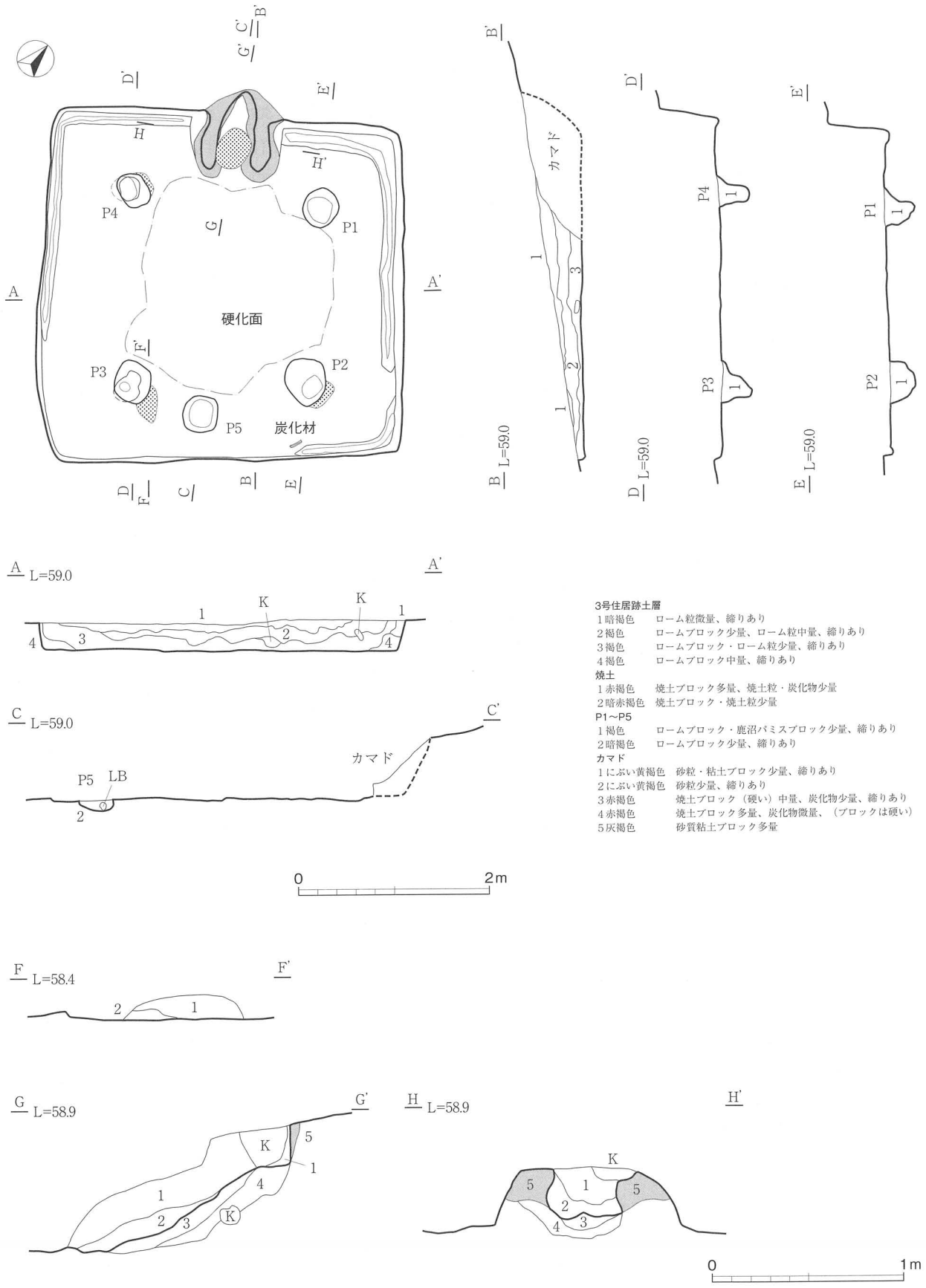
位置　Ｂ、Ｃ４グリッドにある。　**規模と平面形**　3.65 × 3.65 ｍの方形。　**主軸方向**　Ｎ－20°－Ｗ。　**壁**　壁高は 60cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅 200cmで硬化している。　**ピット**　５箇所。P1：43 × 36cm、深さ 30cm、P2:50 × 43cm、深さ 27cm、P3:41 × 36cm、深さ 30cm、P4:37 × 30cm、深さ 32cm、P5:40 × 35cm、深さ 10cmである。P5 は浅いが、位置、断面（南壁側に傾斜）から出入り口に関するピットと思われる。またP2 ～ 4 は接して焼土の小範囲が確認され、床面上には被熱痕はなくいずれも浮いた状況であった。焼土はピット抜き取り等に関わる行為の結果であろうか。　**カマド**　北壁中央から東寄りにあり、袖部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。左袖部は古い火床部（4 層）が下に潜っており、再構築であろう。断面形状は燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上り、上部で段状となる。　**覆土**　基本的には自然堆積であろうか。**遺物**　覆土中からの出土である。１・２は土師器非ロクロ坏、３は須恵器かえり蓋、４は土師器甕、５は土製支脚である。　**所見**　８世紀前半。



第 114 図　３号住居跡出土遺物

表 53　３号住居跡出土遺物観察表

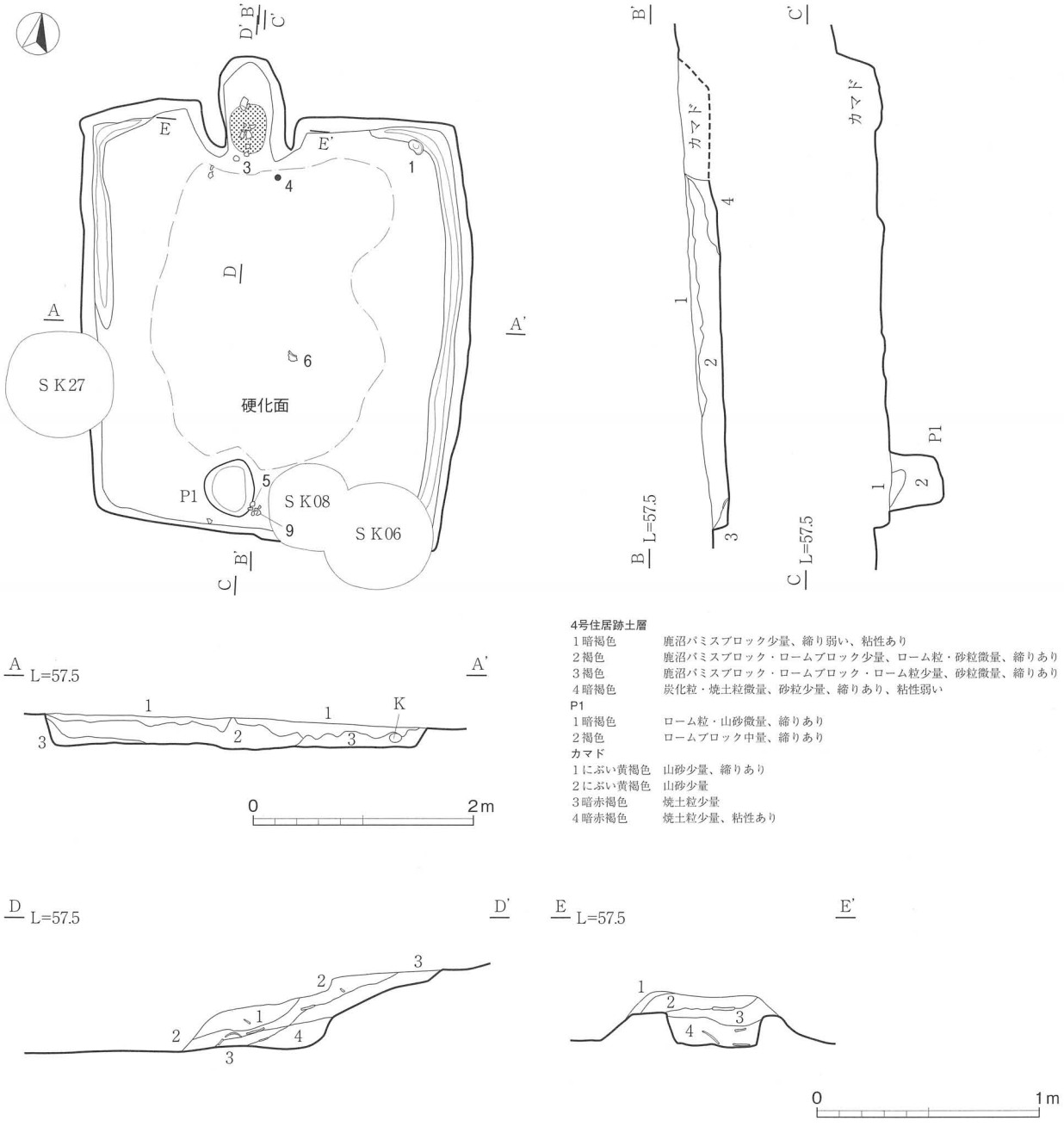
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(13.0) [3.8] －	非ロクロ坏。口縁部は口縁端部で小さめに丸くおさめる。外体～底部は手持ちヘラ削りである。	白色粒、石英少量	良好	黒色	口縁部片
2	土師器 坏	(12.8) [3.5] －	非ロクロ坏。外体～底部は手持ちヘラ削りである。	白色粒、石英少量	良好	にぶい褐色	口縁部片
3	須恵器 蓋	(15.0) [0.8] －	口縁端部はかえりが退化したもの。	石英細粒多量	良好	褐灰～黒色	口縁部片
4	土師器 甕	(20.0) [4.1] －	口縁部は屈曲し端部でさらに立ち上がる。	石英多量、雲母多量	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
5	土製品 支脚	上部は欠損。下径 8.4cm 、長さ［4.4］cm、重さ 55.1g。		白色粒多量、雲母多量	良好	にぶい褐色	25%


硬化面
炭化材
P1
P2
P3
P4
P5
カマド
LB
K
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
L=59.0
L=58.4
L=58.9
0
2m
1m
3号住居跡土層
1暗褐色　ローム粒微量、締りあり
2褐色　ロームブロック少量、ローム粒中量、締りあり
3褐色　ロームブロック・ローム粒少量、締りあり
4褐色　ロームブロック中量、締りあり
焼土
1赤褐色　焼土ブロック多量、焼土粒・炭化物少量
2暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒少量
P1～P5
1褐色　ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量、締りあり
2暗褐色　ロームブロック少量、締りあり
カマド
1にぶい黄褐色　砂粒・粘土ブロック少量、締りあり
2にぶい黄褐色　砂粒少量、締りあり
3赤褐色　焼土ブロック（硬い）中量、炭化物少量、締りあり
4赤褐色　焼土ブロック多量、炭化物微量、（ブロックは硬い）
5灰褐色　砂質粘土ブロック多量

第115図　3号住居跡

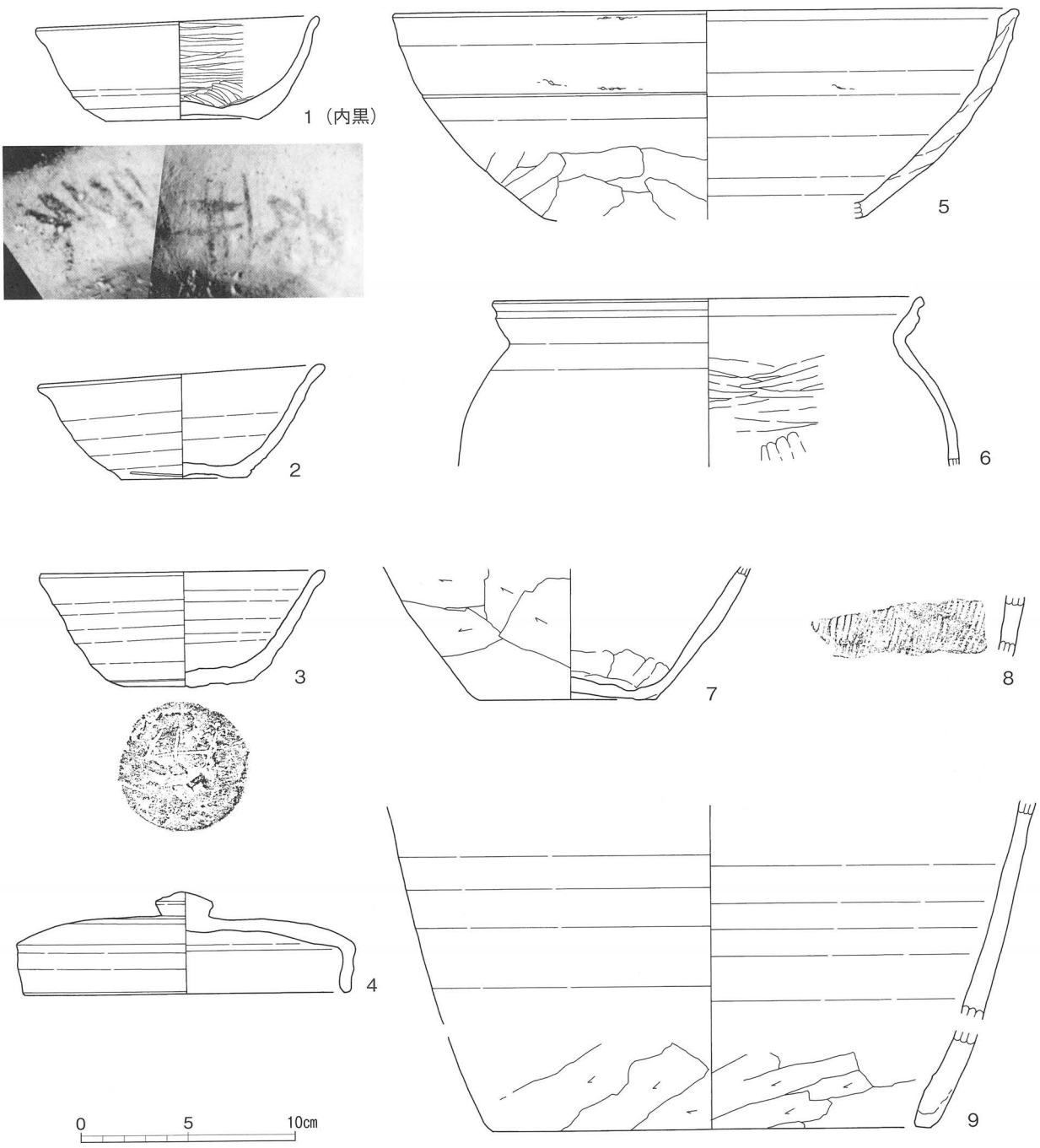
４号住居跡（第116・117図）

位置　Ｃ４、５グリッドにある。　**規模と平面形**　3.80 × 3.30ｍの南北に長い方形である。現状では西壁に比べ東壁が長く南東隅が鋭角的となるが、南東隅をＳＫ06で切られ形状は微妙である。　**主軸方向**　Ｎ－8°－Ｗ。　**壁**　壁高は30cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅205cmで南北に長く硬化している。壁溝はいずれも北東隅角から東、西側に延びるが、南壁にまでは達していない。特に西側は中途で切れていた。　**ピット**　住居（竪穴）外柱穴である。１箇所。P1：50 × 46cm、深さ48cmである。カマド対面南壁内側に位置する出入り口ピットである。　**カマド**　北壁中央からやや西寄りに位置する。袖部の基礎は地山を造り出し、上部に灰褐色粘土で構築されたものであるが上部はすでに流失していた。灰褐色粘土は煙道部までは達して



第116図　４号住居跡

いない。燃焼部から煙道部へは一旦段をなして緩やかに立ち上がる。　**覆土**　基本的には自然堆積である。**遺物**　カマドと北東隅、P1に近接して出土している。1は土師器坏で内面黒色土器、外体部に墨書痕がある。2・3は須恵器坏で3の外底部は刻書「山」である。4は須恵器短頸壷蓋、5は須恵器鉢形土器で体部は丸く深く、口縁端部が面をなす土器で鉄鉢に近い。底部は欠損し高台の有無は不明である。近接する塙谷遺跡A区60号住居跡出土鉢に類似する。6・7は土師器甕である。7は胴部下端ヘラ削りのみで磨きは見られない。8は須恵器甕、9は須恵器甑である。　**所見**　土師器坏、須恵器坏から9世紀中～後葉頃とした。



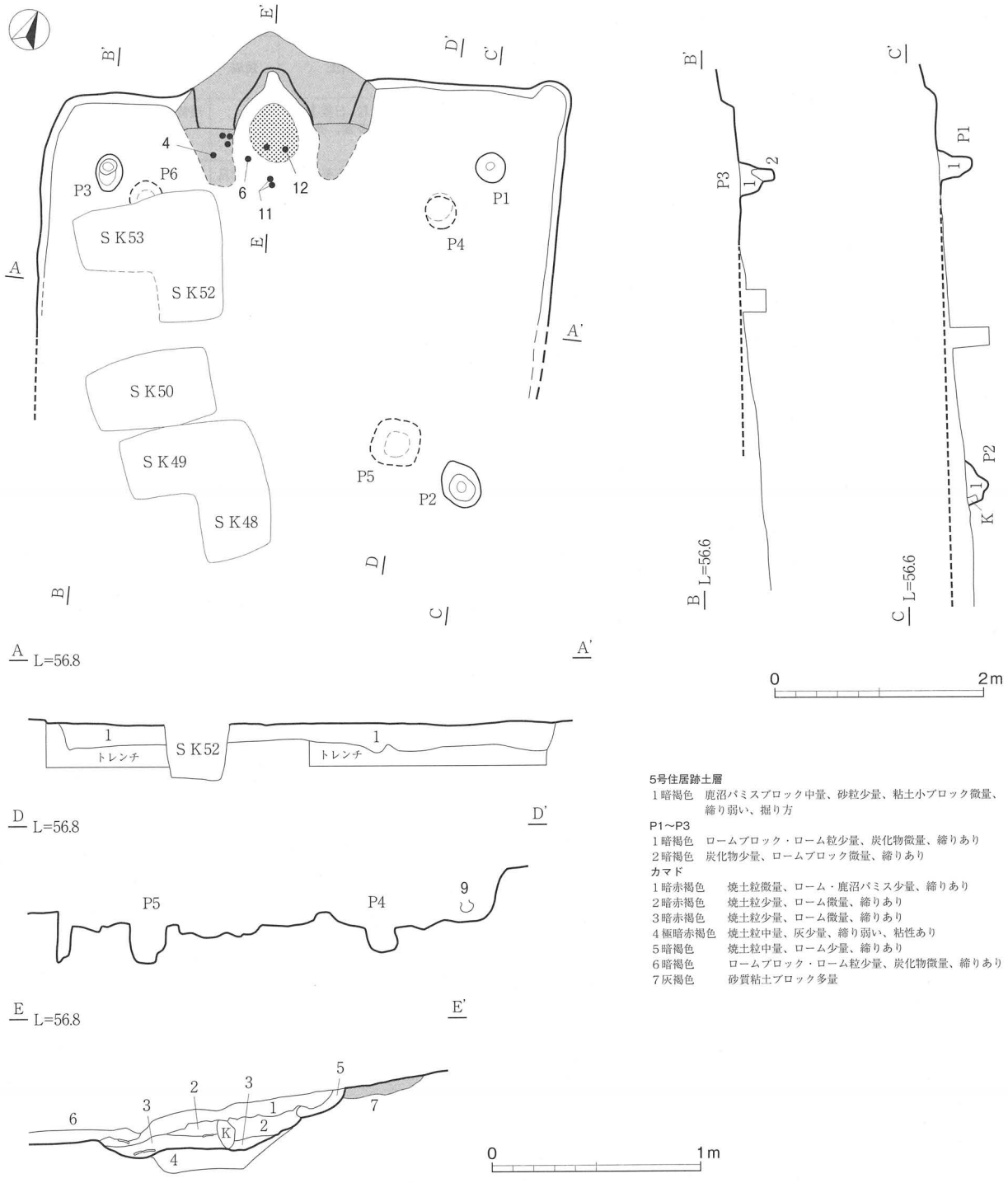
第117図　4号住居跡出土遺物

表54　4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	13.2 5.3 7.0	底部回転ヘラ切り、体部下端を回転ヘラ削り。右回転。内面黒色処理。	白色粒、石英多量、雲母多量、赤褐色	良好	浅黄橙色	95%
2	須恵器 坏	13.4 5.2 5.8	底部回転ヘラ切り。内外面カマド粘土付着。	白色粒、石英多量、チャート、海綿骨針少量	未還元良好	灰オリーブ色	95%
3	須恵器 坏	13.2 5.3 6.0	底部回転ヘラ切り後ナデ。外底部線刻「山」。筆順は正確であり識字層が書いたものである。	白色粒多量、海綿骨針少量	良好	灰色	完形
4	須恵器 短頸壺蓋	13.2 4.7 －	外天井部は回転ヘラ削りと思われるが降灰により明確でない。	白色粒、石英少量、黒褐色融出粒多量	良好	外：黄橙～オリーブ黒色 内：灰色	20%
5	須恵器 鉢	29.0 9.7 14.8	口縁～体部は丸味を持ちながら開き、端部は面をなす。体部下端はヘラ削りである。高台部は不明である。	チャート・白色粒・骨針	還元 軟質	オリーブ黒色	鉄鉢型ヵ
6	土師器 甕	20.0 [7.9] －	口縁部は外反しさらに短く立ち上がる。	石英、白色粒少量、雲母少量	良好	にぶい黄色	50%
7	土師器 甕	－ [6.2] 8.2	外底部はヘラ削りで磨きは不明。	チャート大粒、白色粒少量、雲母少量	良好	にぶい褐色	底部片
8	須恵器 甕	－ － －	外胴部縦位タタキ。	白色粒多量、雲母多量	還元軟質	黄灰色 橙色（器厚内）	胴部片 新治産
9	須恵器 甑	－ [15.0] (22.0)	ロクロ成形。内・外胴部下端ヘラ削り。底部は2孔と思われる。	白色粒、石英多量、海綿骨針少量	未還元良好	にぶい赤褐色 灰色（器厚内）	25%

5号住居跡（第118・119図）

位置　C4、5グリッドにある。　**規模と平面形**　4.10×4.75mの方形、SK48～50、52、53に切られる。遺存は悪くカマドと床面がわずかに残り辛うじて形状がわかる程度である。　**重複関係**　20号住と近接し直接ではないが20号住が古い。　**主軸方向**　N－16°－W。　**壁**　壁高は残りの良い箇所で12cm、垂直に立ち上がる。　**床**　硬化している範囲は見られなかった。　**ピット**　3箇所（基本的には4箇所であるが撹乱により壊されている。出入り口ピットも同様）。各隅角に寄って配列されている。P1：28×28cm、深さ32cm、P2：46×34cm、深さ（20）cm、P3：35×25cm、深さ35cmである。　**カマド**　北壁中央の西寄りにあり、袖部から煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。木の根により燃焼～前庭部はわずかで痕跡により復元した。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　カマド側にわずかに残る程度で大半は削平されていた。　**遺物**　カマドを中心に出土している。1～3は須恵器坏であるがいずれも口縁部を欠く。4・5は須恵器蓋、6は須恵器盤、7は須恵器長頸瓶である。9の短頸壷は掘り方からの出土である。10～12は土師器常総型甕である。　**掘り方**　現床面の20～30ｃｍ下に住居の掘り方が遺存していた。掘り方は特に形状はなく凹凸が顕著であった。そこから古いピットが3箇所（P4～6）確認され、各々新ピット（P1～3）の対角線内側に位置する。P4：30×30cm、深さ25cm、P5：45×40cm、深さ40cm、P6：35×－cm、深さ30cmである。掘り方から出土している9の短頸壷は掘り込みはないが正位の状況であり、住居改築等の祭祀行為であろうか。　**所見**　6の須恵器高台盤、9の短頸壷から8世紀中～後葉頃とした。

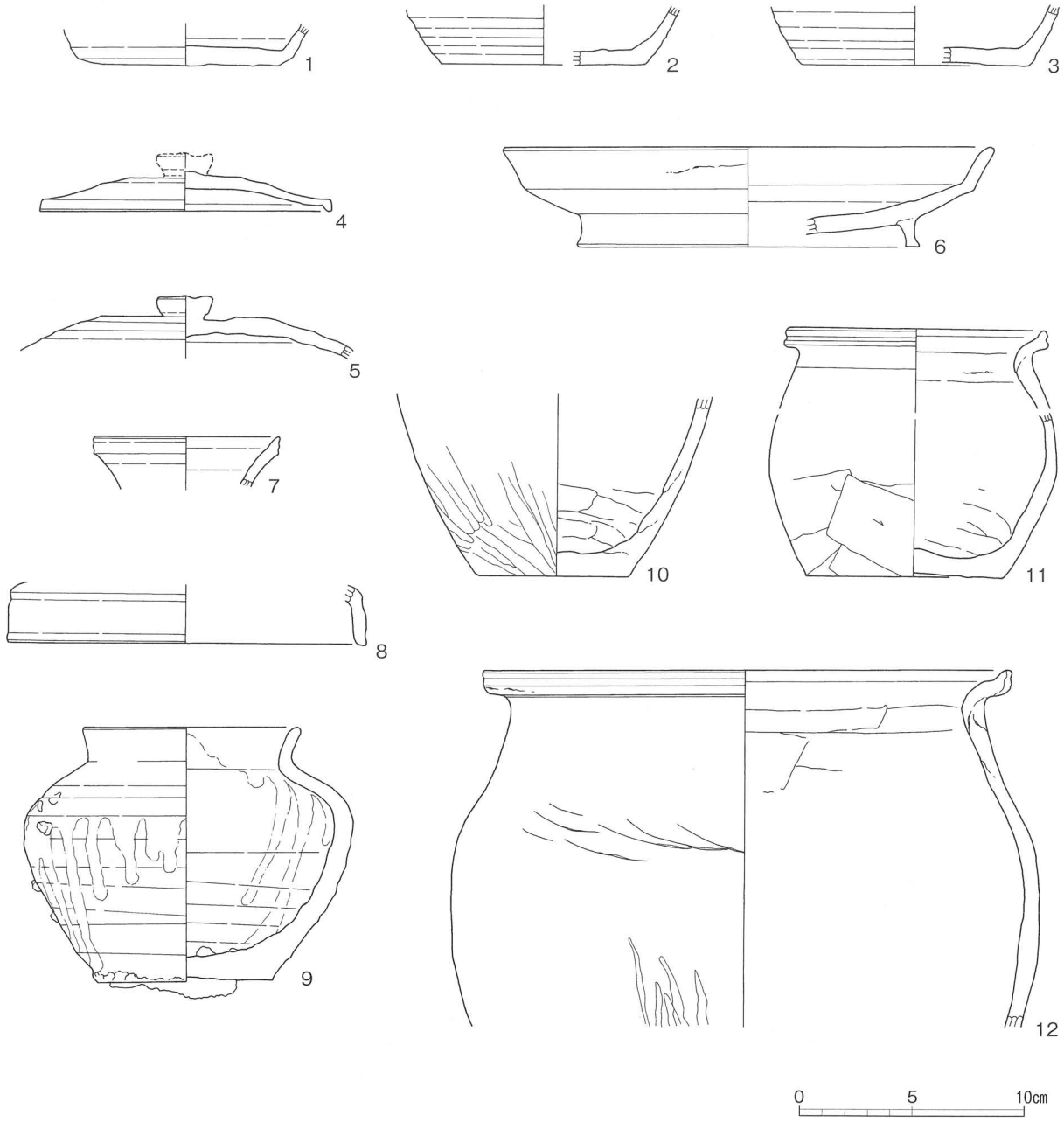


5号住居跡土層
1暗褐色　鹿沼パミスブロック中量、砂粒少量、粘土小ブロック微量、締り弱い、掘り方
P1～P3
1暗褐色　ロームブロック・ローム粒少量、炭化物微量、締りあり
2暗褐色　炭化物少量、ロームブロック微量、締りあり
カマド
1暗赤褐色　焼土粒微量、ローム・鹿沼パミス少量、締りあり
2暗赤褐色　焼土粒少量、ローム微量、締りあり
3暗赤褐色　焼土粒少量、ローム微量、締りあり
4極暗赤褐色　焼土粒中量、灰少量、締り弱い、粘性あり
5暗褐色　焼土粒中量、ローム少量、締りあり
6暗褐色　ロームブロック・ローム粒少量、炭化物微量、締りあり
7灰褐色　砂質粘土ブロック多量

第118図　5号住居跡

表55　5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ [1.9] 9.6	底部回転ヘラ切り後、底部周囲と体部下端を回転ヘラ削りである。	白色粒、石英、海綿骨針多量	良好	黄灰色	底部片



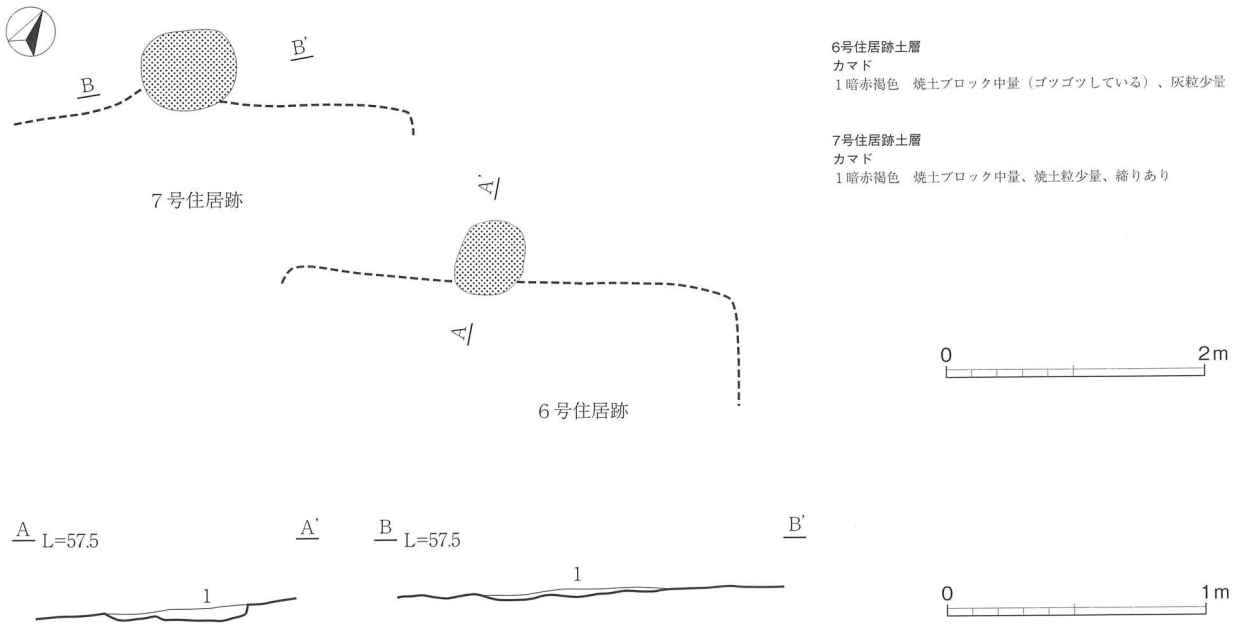
第119図　5号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	須恵器 坏	－ [2.7] (9.0)	底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ。	白色粒、石英多量	良好	灰色	底部片
3	須恵器 坏	－ [2.7] (10.0)	底部回転ヘラ切り後、ヘラナデ。	白色粒多量	還元軟質	黄灰色	底部片
4	須恵器 蓋	13.0 [1.8] －	口縁端部の屈折は短い。天井部1/2まで回転ヘラ削り。	白色粒、石英、黒色融出粒	良好	灰色	40%

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	須恵器 蓋	－ [2.7] －	天井部1/2まで回転ヘラ削り。	白色粒、石英、チャート、海綿骨針極少量	良好	灰色	70%
6	須恵器 盤	(22.0) 4.5 (15.2)	底部回転ヘラ削り。	石英多量、チャート極少量、黒色粒	良好	灰色	25%
7	須恵器 長頸壺	(8.2) [2.4] －	外反する口縁部は端部で摘み上げられる。	白色粒微粒多量、黒色粒多量	良好	オリーブ灰色	口縁部片
8	須恵器 短頸壺蓋	(15.6) [2.6] －	ロクロ成形。	白色粒、石英、黒褐色粒少量	良好	灰色	口縁部片
9	須恵器 短頸壺	9.6 11.5 7.8	肩の丸い短頸壺である。高温のため内底部にボタ落ち、外胴部には他の製品の付着が見られ、外底部は窯底が付着している。	白色粒、黒色粒融出粒多量	良好	灰色	ほぼ完形
10	土師器 甕	－ [8.2] 7.0	外胴部下端ヘラ磨き。	白色粒、石英多量、雲母多量、赤褐色粒少量	良好	暗橙色	底部
11	土師器 甕	11.6 [11.9] 8.0	口縁部は外反し、端部でさらに摘み上げられる。外胴部下端ヘラ磨き。外底部木葉痕。	白色粒、石英多量、雲母、赤褐色粒少量	良好	にぶい黄褐色 赤黒色（外胴部）	40%、20%
12	土師器 甕	23.6 [16.0] －	口縁部は外反し、端部でさらに摘み上げられる。外胴部上位にヘラ磨き。	白色粒、石英多量、褐色粒少量、雲母少量	良好	橙褐色	30%

6・7号住居跡（第120・121図）

位置　C4グリッドにある。　**規模と平面形**　ともに火床部のみの遺存である。　**主軸方向**　双方不明であるがカマドは北方向である。　**カマド**　辛うじて北壁であることは判明し、双方火床部のみ遺存。　**遺物**　6号住から須恵器坏が出土。　**所見**　6・7号住居は近接するが切り合いは不明。1の須恵器坏は9世紀前後頃である。



第120図　6・7号住居跡

第 121 図　６号住居跡出土遺物

表 56　６号住居跡出土遺物観察表

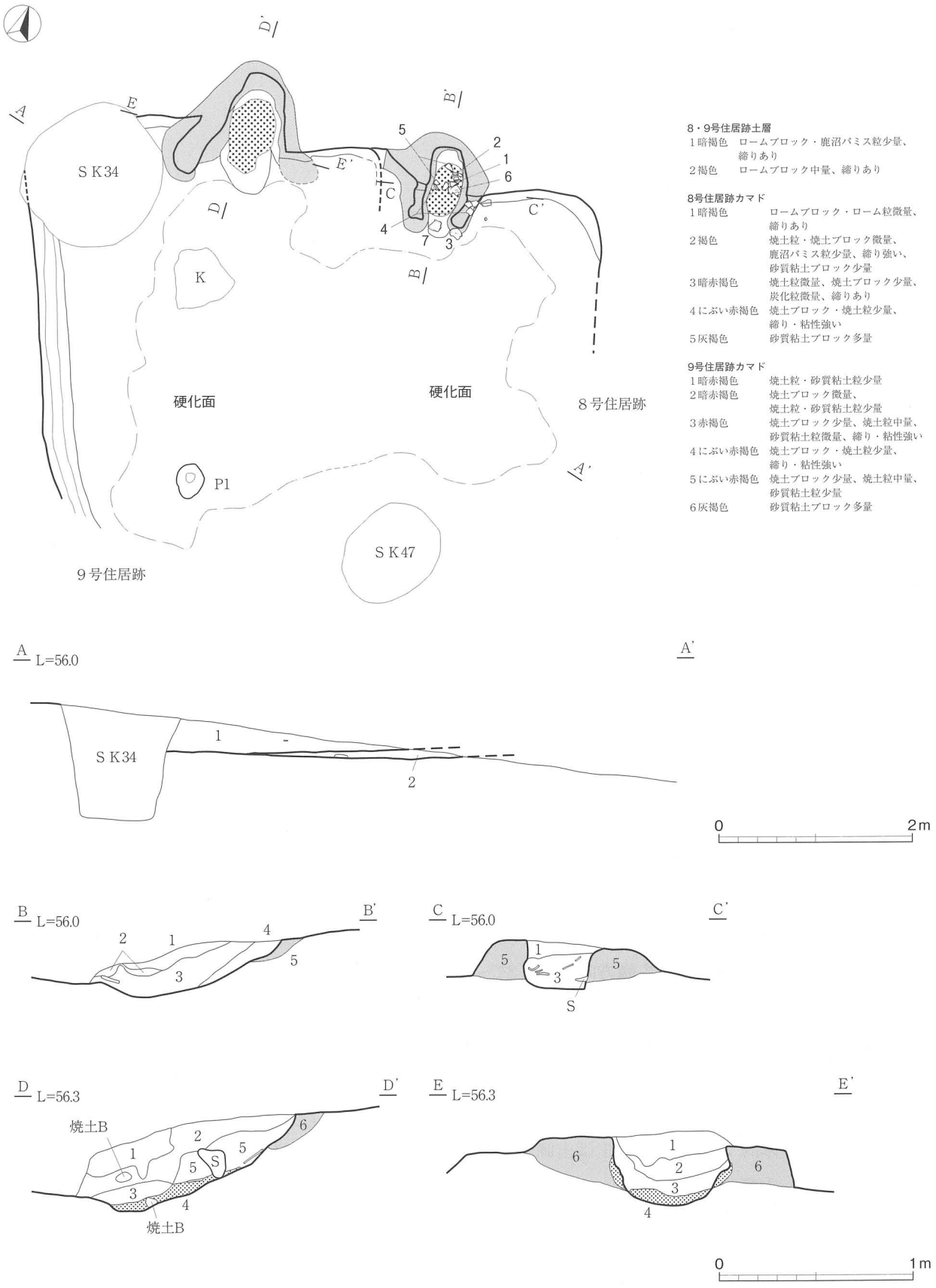
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ [1.4] 7.2	底部回転ヘラ切り、体部下端ヘラ状工具でのナデ。	白色粒、石英、チャート、海綿骨針少量	良好	にぶい赤褐色	底部

８号住居跡（第 122・123 図）

位置　Ｃ５グリッドにある。　**規模と平面形**　（3.0）×（2.0）ｍの方形か、北東隅角は丸く収める。南側は削平で遺存していない。　**重複関係**　９号住が新しい。　**主軸方向**　Ｎ－8°－Ｗ。　**壁**　壁高は北壁で 30cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　幅 150cmで硬化している。９号住との境は明確でない。　**カマド**　北壁にあり、袖～煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。カマド内に遺物が多数出土した。　**覆土**　わずかに２層（８号住）は１層（９号住）の下で確認された。　**遺物**　６の砥石をのぞき全て土師器である。１～３は供膳具である。１・２の高台は高めになる。４・５の甕はほぼ同一個体と思われる。口縁部は短く外反し端部の摘み上げは形骸化がなされている。胴部下端はヘラ削り、中位から上は縦・斜方向のナデである。７は置きカマドの掛け口片である。掛け口は面をなし、内部は煤が付着する。　**所見**　10 世紀前後頃であろう。

９号住居跡（第 122・124 図）

位置　Ｃ５グリッドにある。　**規模と平面形**　（4.20）×（3.40）ｍの方形、南側は削平され残っていない。　**重複関係**　8、11 号住が古い。　**主軸方向**　Ｎ－23°－Ｗ。　**壁**　壁高は北壁で 40cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　幅 130cmで硬化し、カマド前庭部から南北 380cmの範囲に延びていた。　**ピット**　１箇所。P1：38 × 29cm、深さ 15cmである。　**カマド**　北壁中央にあり、袖～煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部両側壁は被熱され赤色化が顕著である。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。住居壁の方向とカマド軸方向がややズレる。　**覆土**　遺存が薄く明確でなかった。　**遺物**　１～９は土師器供膳具である。２の底部回転糸切りは客体的である。10・11 は土師器甕、12 は置きカマドである。８号住－７と同一個体か。　**所見**　10 世紀前～中葉頃であろう。



8・9号住居跡土層

1暗褐色　ロームブロック・鹿沼パミス粒少量、締りあり
2褐色　ロームブロック中量、締りあり

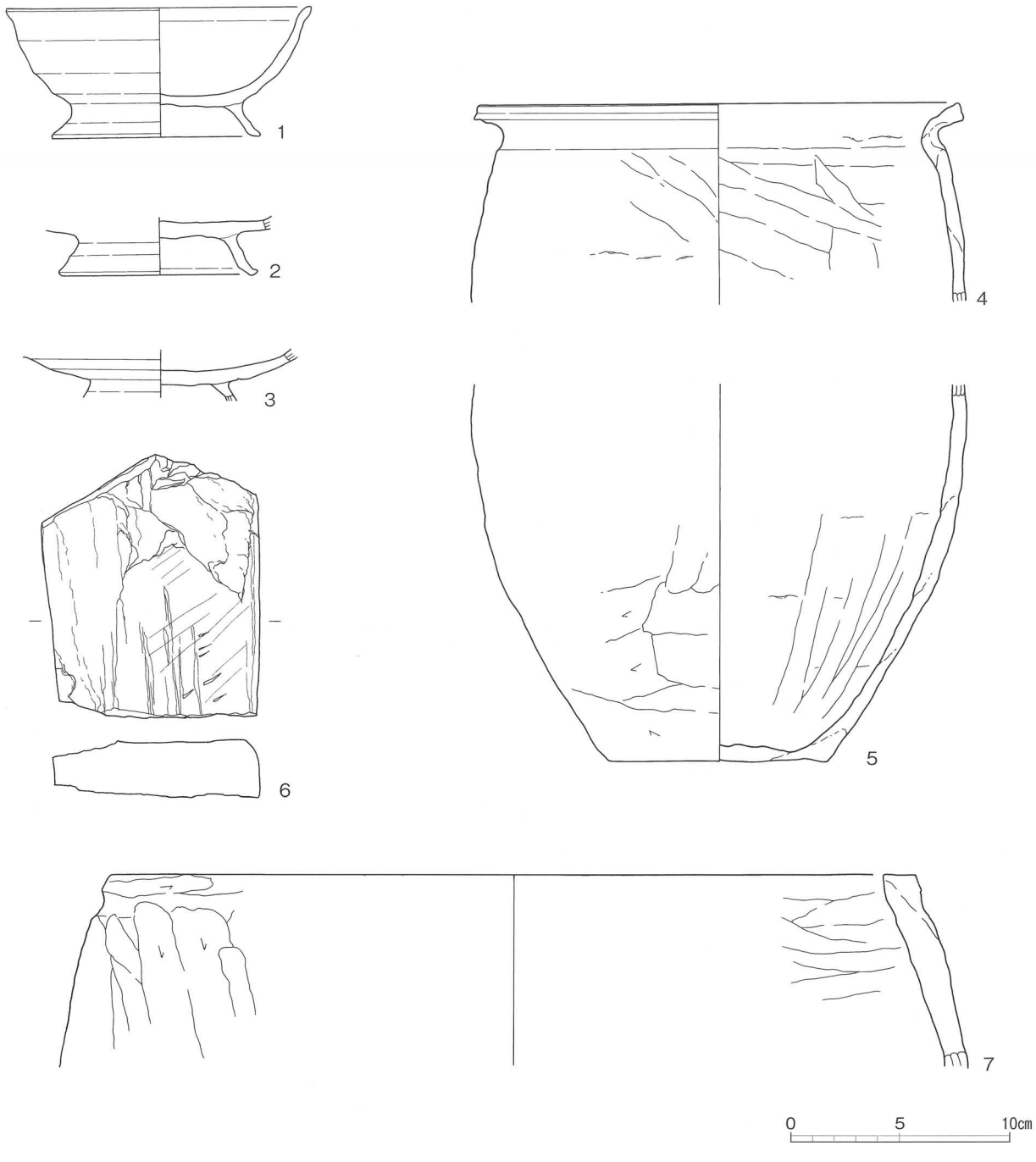
8号住居跡カマド

1暗褐色　ロームブロック・ローム粒微量、締りあり
2褐色　焼土粒・焼土ブロック微量、鹿沼パミス粒少量、締り強い、砂質粘土ブロック少量
3暗赤褐色　焼土粒微量、焼土ブロック少量、炭化粒微量、締りあり
4にぶい赤褐色　焼土ブロック・焼土粒少量、締り・粘性強い
5灰褐色　砂質粘土ブロック多量

9号住居跡カマド

1暗赤褐色　焼土粒・砂質粘土粒少量
2暗赤褐色　焼土ブロック微量、焼土粒・砂質粘土粒少量
3赤褐色　焼土ブロック少量、焼土粒中量、砂質粘土粒微量、締り・粘性強い
4にぶい赤褐色　焼土ブロック・焼土粒少量、締り・粘性強い
5にぶい赤褐色　焼土ブロック少量、焼土粒中量、砂質粘土粒少量
6灰褐色　砂質粘土ブロック多量

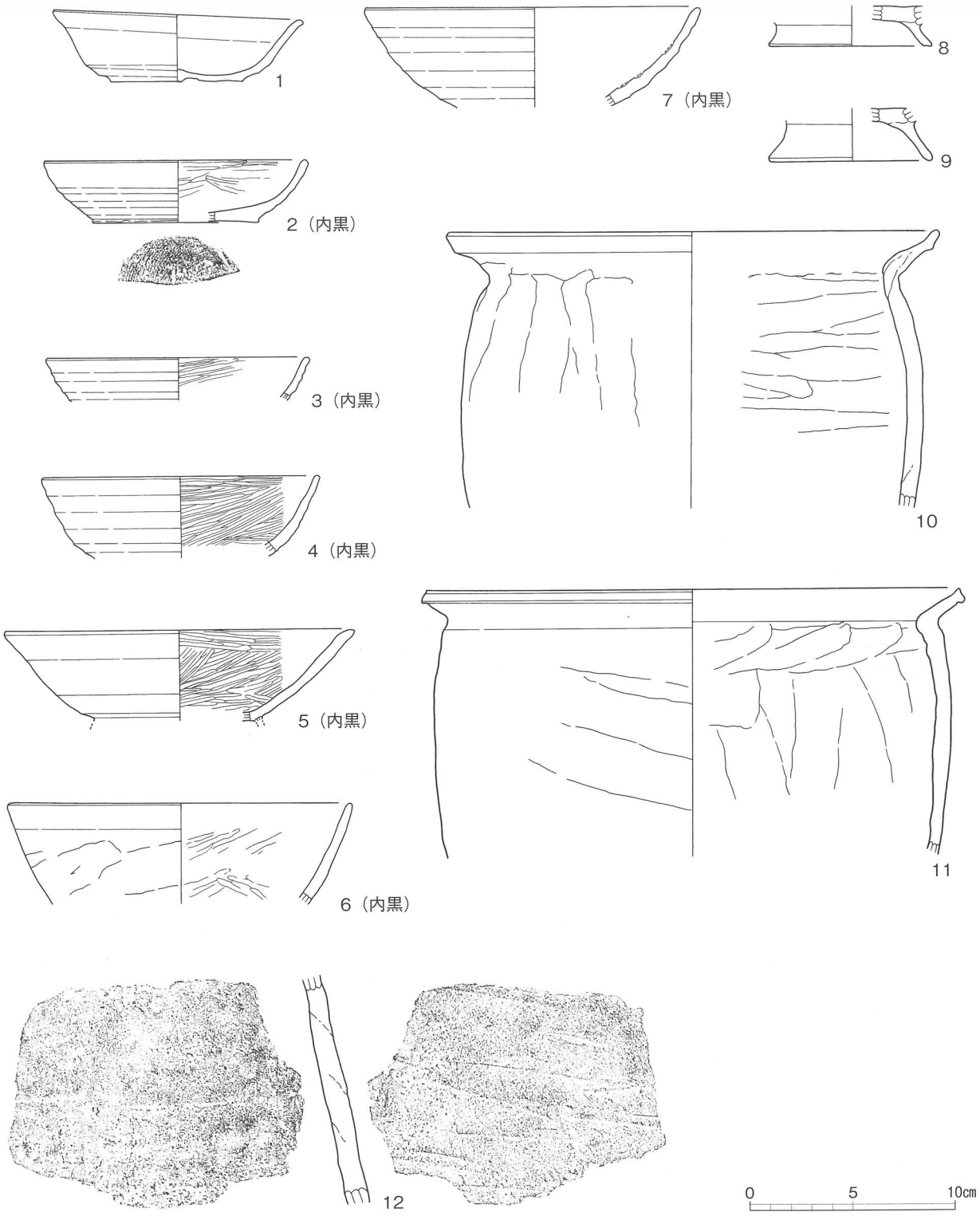
第122図　8・9号住居跡



第 123 図　８号住居跡出土遺物

表 57　８号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 高台付坏	14.0 6.0 9.5	底部回転ヘラ削り。口縁～体部内外は剥離が激しいが、内面はヘラ磨きがなされる。黒色処理はされていない。高台部の高さは 1.5cm。	白色粒、石英、海綿骨針少量	酸化軟質	暗灰黄色	50%
2	土師器 高台付坏	－ [2.7] 9.1	底部回転ヘラ削り。内面はヘラ磨きがなされる。黒色処理はされていない。高台部の高さは 1.7cm。	木目細かな石英、白色粒、赤褐色粒、海綿骨針	酸化軟質	にぶい橙色	底部片



第 124 図　9 号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	土師器 皿	－ [2.3] －	底部回転ヘラ削り。内面はヘラ磨きがなされる。黒色処理はされていない。	白色粒、石英、角閃石粒	良好	にぶい橙色	口縁・底部欠損
4	土師器 甕	(22.0) [9.2] －	口縁部は短く摘み上げは形骸化が窺われる。内外ヘラナデ。5と同一個体。	白色粒、石英	良好	にぶい褐色	口縁～胴部片
5	土師器 甕	－ [17.5] (10.0)	胴部内外ヘラナデ、外胴部下端ヘラ削り。	白色粒、石英	良好	にぶい褐色	胴～底部
6	石製品 砥石	上面と側面の2面使用されている。長さ12.3cm、幅10.0cm、厚さ2.7cm、重さ486.0ｇ、片岩製。					
7	土製品 置きカマド	(37.0) 8.8 －	外面は縦位ヘラ削り、内面横・斜めナデ。	白色粒、石英、角閃石粒	良好	にぶい橙色	口縁部片

表58　9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	12.2 3.6 6.4	口径の小さい坏である。底部は回転ヘラ切り、内面はナデのみ。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	橙色	50%
2	土師器 坏	(13.0) 3.1 (8.0)	底部は回転糸切り、内面は剥離しているがヘラ磨き・黒色処理。	白色粒、石英	良好	浅黄色	30%
3	土師器 坏	(13.0) [2.1] －	底部調整は不明、内面はヘラ磨き・黒色処理。外体部墨書「□」。	白色粒、石英	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
4	土師器 高台付坏	13.6 4.0 －	底部調整は不明、内面はヘラ磨き・黒色処理。	白色粒、石英、金雲母微量	良好	浅黄色	30%
5	土師器 高台付坏	17.2 [4.5] －	底部調整は不明､体部下端回転ヘラ削り。内面はヘラ磨き･黒色処理。右回転。	白色粒､石英多量、金雲母極少量	良好	橙色	口縁～体部片、底部欠損
6	土師器 高台付坏	(17.0) [4.1] －	底部調整は不明､体部中～下位ヘラ削り。内面はヘラ磨き･黒色処理。	白色粒、石英	良好	にぶい黄褐色	口縁部片
7	土師器 高台付坏	(16.2) [4.9] －	底部調整は不明。内面はヘラ磨き・黒色処理。カマド材付着。	チャート、白色粒	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
8	土師器 高台付坏	－ [2.0] (8.0)	底部は回転糸切り、1.2cmの高台が付く。	白色粒、石英、角閃石	良好	浅黄色	高台部片
9	土師器 高台付坏	－ [2.6] (8.0)	2.0cmの高台が付く。	白色粒、石英、角閃石	良好	にぶい橙色	高台部片
10	土師器 甕	(24.0) [13.7] －	口縁部は外傾し端部で摘み上げられる。外胴部は縦位ヘラ削り、内胴部は横ヘラナデ。	白色粒、石英	良好	浅黄色	口縁～胴部片
11	土師器 甕	(26.4) [13.3] －	口縁部は外傾し端部で摘み上げられる。外胴部は斜位ヘラナデ、内面は頸部が斜ヘラナデ、胴部は縦位ヘラナデ。カマド材付着。	白色粒、石英、角閃石	良好	橙色	口縁～胴部片
12	土製品 置きカマド	－ － －	8号住－7と同一個体か。	白色粒、石英	良好	明赤褐色	破片

10号住居跡（第125・126図）

位置　C5グリッドにある。　**規模と平面形**　(5.00) × (2.70) mの方形となろう。　**重複関係**　9、11号住が古い。　**主軸方向**　N－50°－W。　**壁**　壁高は10cm。　**床**　明確でなかった。　**カマド**　北壁中央にあり、火床部のみ遺存していた。　**覆土**　1層は覆土、2層は掘り方であろう。　**遺物**　1～3は土師器供膳具、4は新治産の須恵器甕、5は不明鉄製品である。　**所見**　10世紀中葉頃であろうか。

11号住居跡（第125・127図）

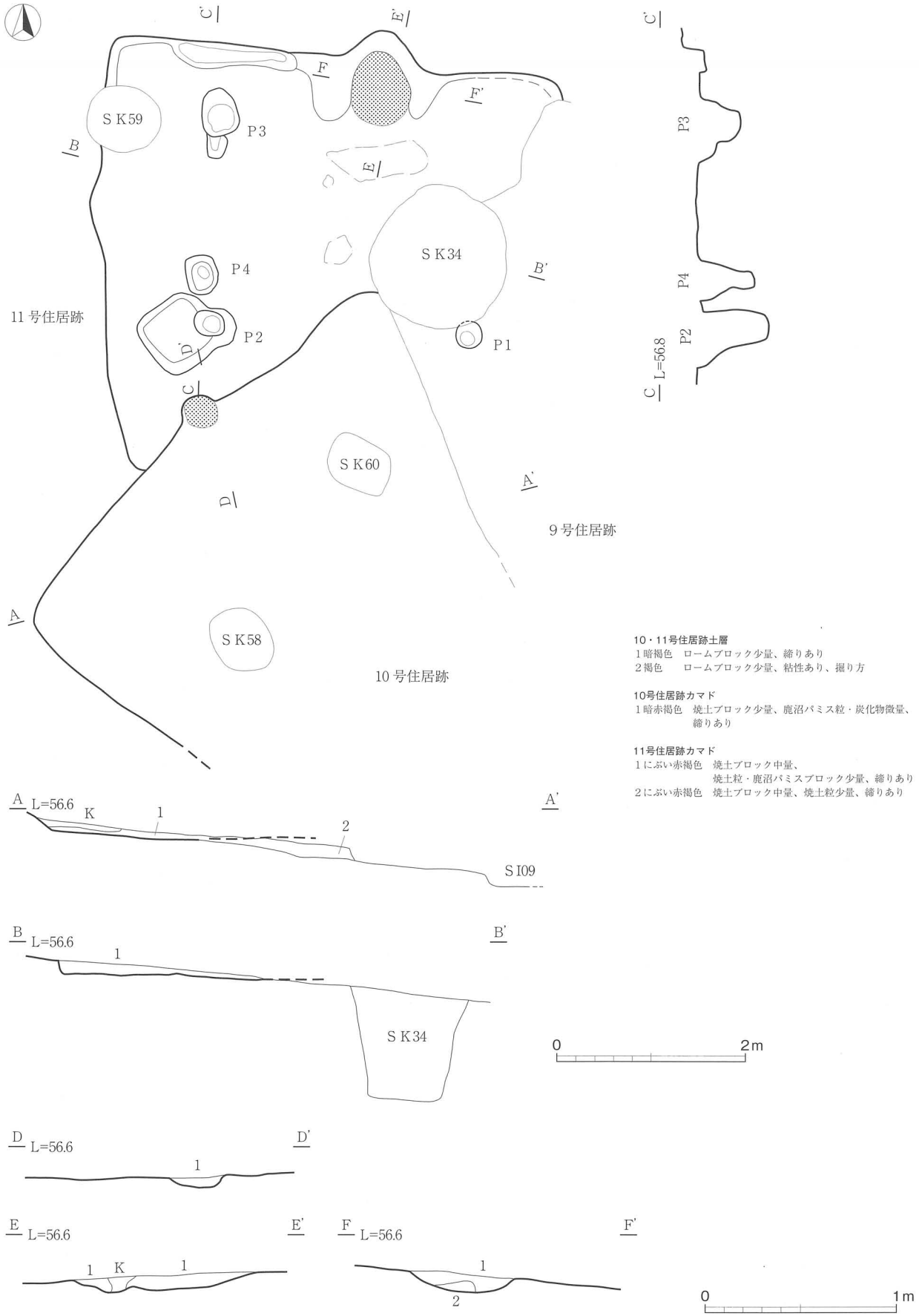
位置　C5グリッドにある。　**規模と平面形**　4.55 × 4.50 mの方形となろう。　**重複関係**　9、10号住が新しい。　**主軸方向**　N－9°－E。　**壁**　壁高は10cm、垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面はカマド前庭部にわずかに分散して出土した。　**ピット**　4箇所。P1：30 × 25cm、深さ40cm、P2：30 × 30cm、深さ70cm、P3：50 × 40cm、深さ50cm、P4：40 × 35cm、深さ60cmである。P4は柱穴間の線上に位置することから関連柱として抽出した。また従来のP1の位置には検出できなかった。　**カマド**　北壁中央やや東寄りである。火床部のみ遺存していた。**覆土**　自然堆積と思われる。　**遺物**　1は覆土中の遺物である。　**所見**　遺物年代は8世紀中葉頃である。

表59　10号住居跡出土遺物観察表

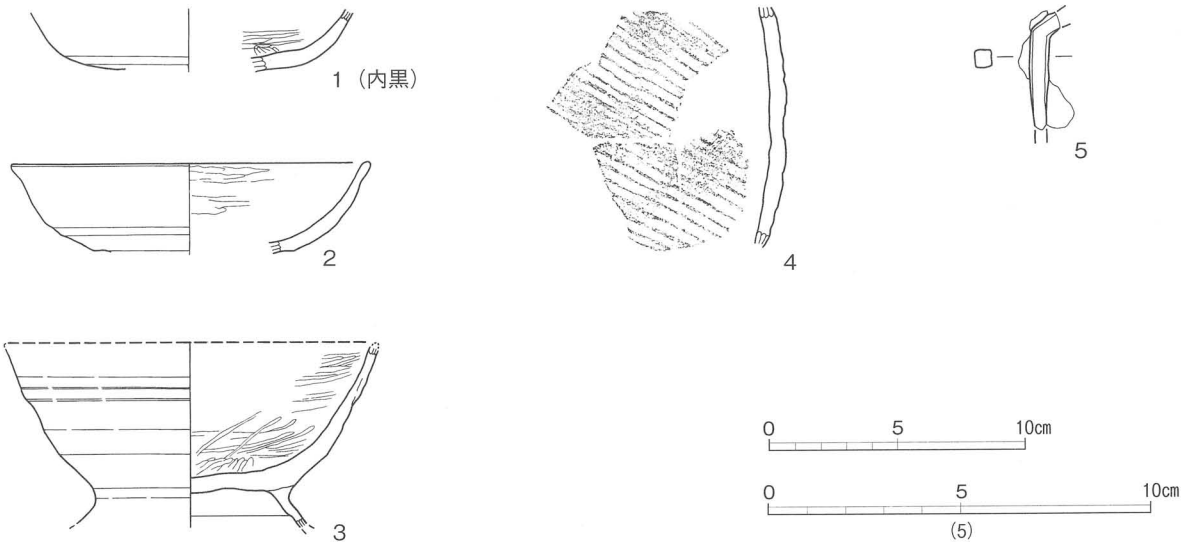
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	－ [2.3] －	底部は回転ヘラ削り。内面はヘラ磨き・黒色処理。	石英、雲母、赤褐色粒	良好	にぶい黄橙色	体～底部片
2	土師器 坏	(14.0) [3.4] －	底部は回転ヘラ削り。内面はヘラ磨き。	白色粒、石英、角閃石	良好	橙色	口縁部片
3	土師器 高台付坏	(14.6) [6.8] －	体部下端は回転ヘラ削り。内面はヘラ磨き。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	にぶい褐色	40%
4	須恵器 甕	－ － －	外胴部はタタキ	石英、雲母	還元軟質	オリーブ灰色	新治産
5	用途不明 鉄製品	断面は方形で上部が折れ曲がる。鏃または釘であろうか。長さ 3.2cm、幅 0.5cm、厚さ 0.5cm、重さ 3.5g。					

表60　11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ (4.4) 10.0	口縁～体部は直線的に立ち上がる箱型の坏である。底部は回転ヘラ切り後、体部下端と底部周囲を回転ヘラ削り。内底部は磨耗し使用頻度が高い。	石英、チャート、海綿骨針、黒色融出粒	良好	灰色	



第125図　10・11号住居跡



第126図　10号住居跡出土遺物

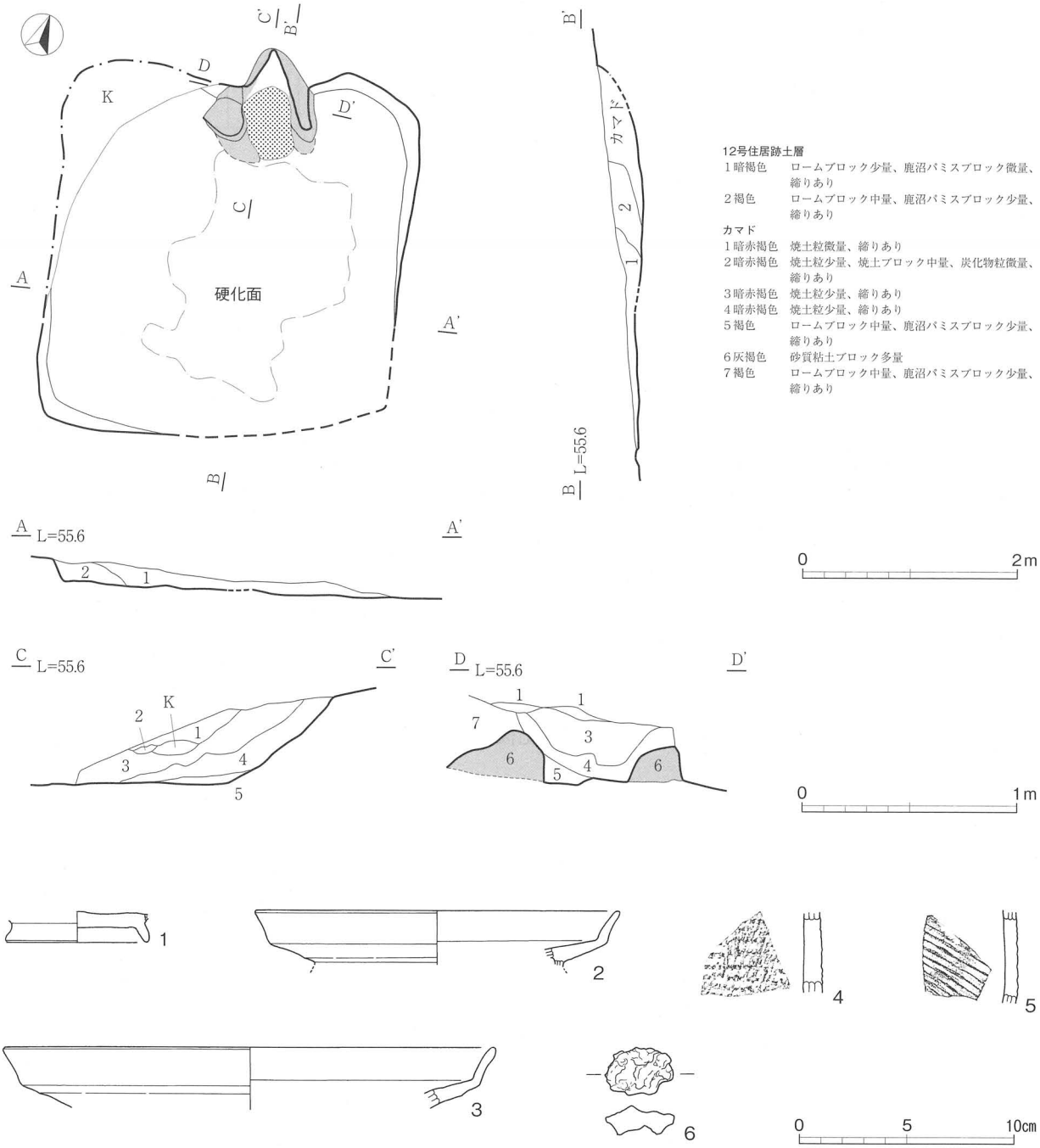
第127図　11号住居跡出土遺物

12号住居跡（第128図）

位置　C5グリッドにある。　**規模と平面形**　3.25×3.20ｍの方形であるが北壁はやや内向きとなる。北西隅は木の根により撹乱を受け詳細は明確でない。　**主軸方向**　N－15°－W。　**壁**　壁高は18cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅140cmで硬化している。　**ピット**　床面上にはない住居（竪穴）外柱穴である。　**カマド**　ほぼ北壁のやや東側に位置する。袖部から煙道部は灰褐色粘土で構築されているがカマド上部は崩落している。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　自然堆積であろう。　**遺物**　1～3は須恵器供膳具、4・5は須恵器貯蔵具、6は鉄滓である。　**所見**　遺物から8世紀後葉頃であろう。

表61　12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 高台付坏	－ [1.4] 6.6	底部は回転ヘラ切り、内底部は磨耗激しい、わずかな墨痕から転用硯であろう。	白色粒、角閃石	良好	暗灰色	高台部
2	須恵器 盤	(17.0) [2.5] －	ロクロ成形。	白色粒、石英	還元やや軟質	灰色	口縁部片



第128図　12号住居跡・出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 盤	(23.0) [2.8] –	ロクロ成形。	白色粒、石英、黒色融出粒	良好	暗灰色	口縁小片
4	須恵器 甕	– – –	外胴部平行タタキ。	白色粒、石英	良好	灰色	胴部片

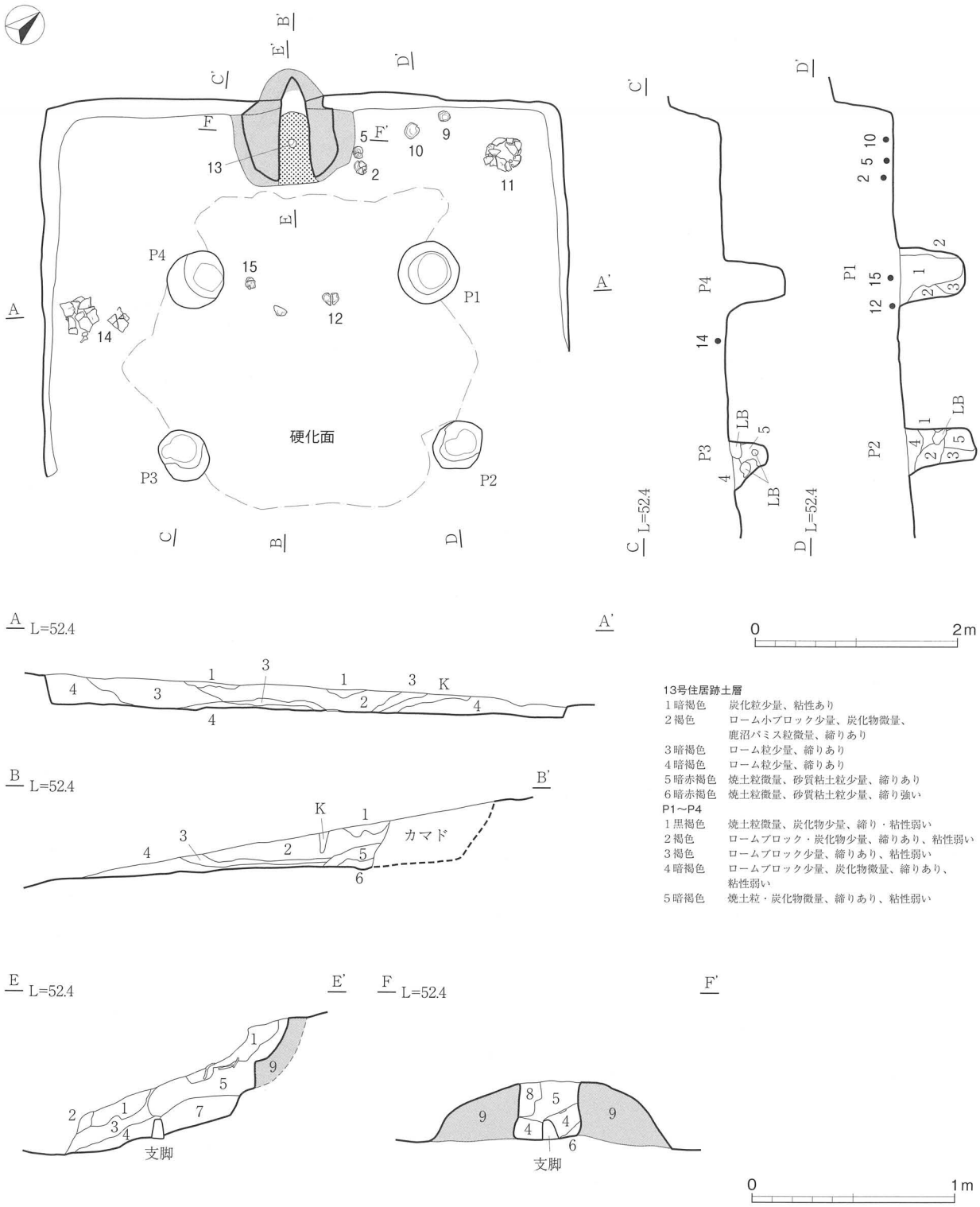
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	須恵器 甕	－ － －	外胴部平行タタキ。	白色粒、石英	良好	灰色	胴部片
6	鉄滓	炭等は見られない。長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ1.4cm、重さ6.4g。					

13号住居跡（第129～131図）

位置　C5グリッドにある。　**規模と平面形**　(3.55)×4.96mの方形で南側は削平されている。　**重複関係**　14号住居跡が新しい。　**主軸方向**　N－48°－W。　**壁**　壁高は北側で55cm、垂直に立ち上がる。　**床**　主柱穴間を幅350cmで硬化している。　**ピット**　4箇所。P1：65×60cm、深さ65cm、P2：46×45cm、深さ68cm、P3：55×45cm、深さ38cm、P4：60×54cm、深さ60cmである。P1は柱痕が顕著であった。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部から煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。燃焼部には土製の支脚が正位の状況で遺存していた。焼土範囲前庭部側から40cm、燃焼部内のやや段をなす高い面に位置する。煙道部内の被覆粘土は段状となっていたが故意ではなく、これは崩落した結果であろう。　**覆土**　東西両面から漸次自然堆積が見られる。　**遺物**　カマド周辺と西壁付近に散見される。1～3は土師器非ロクロ坏、4は須恵器蓋、5・6は須恵器坏、7は短頸壺、8～12・14は土師器甕、13は支脚、15は碗形滓である。　**所見**　7世紀後半頃である。

表62　13号住居跡出土遺物観察表

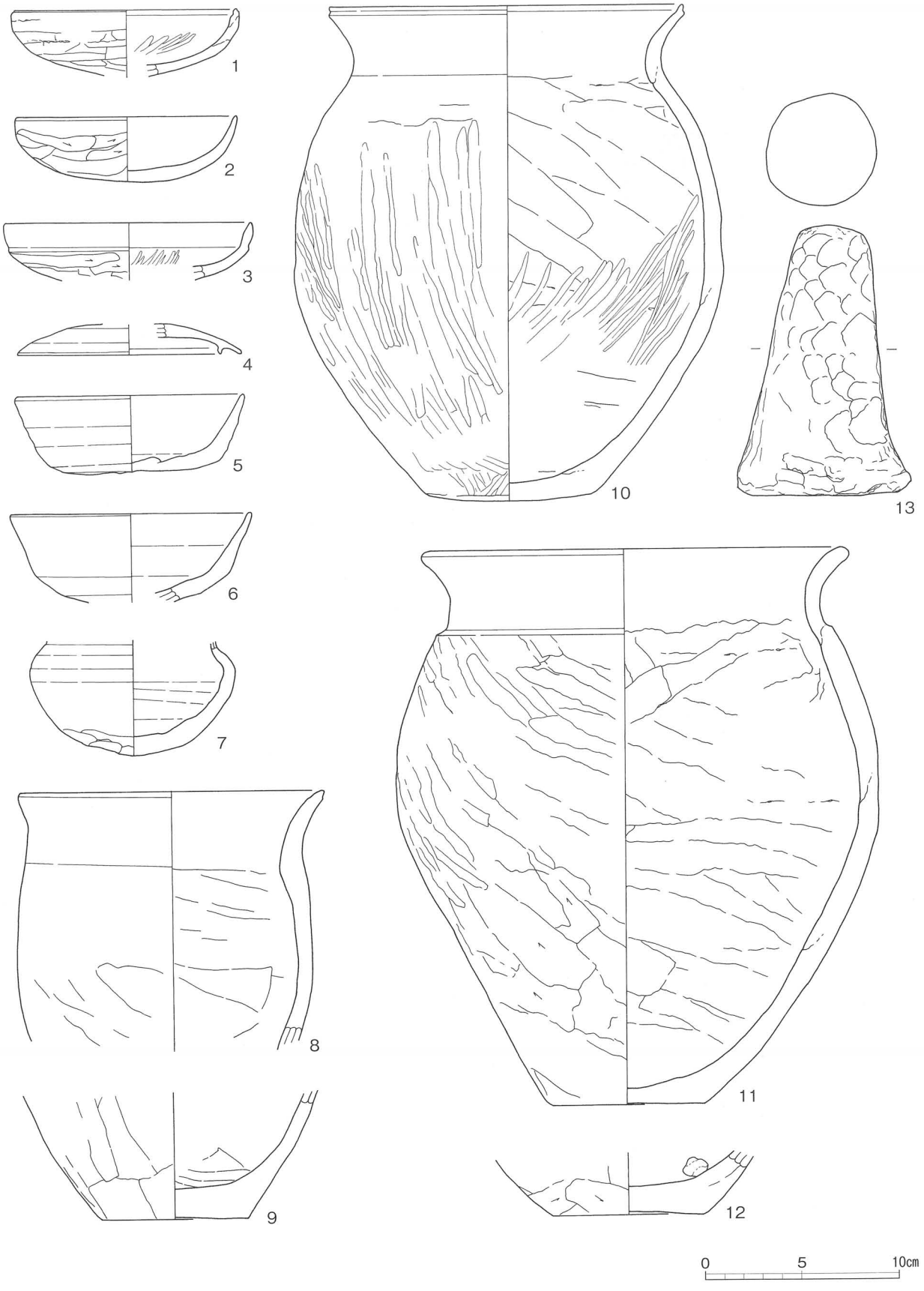
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(11.6) [3.5] －	非ロクロ坏。口縁端部は内側に沈線が入り金属模倣の特徴がみられる。外体～底部はヘラ削り、内面は放射状ヘラ磨き。	白色粒・石英微粒、赤褐色粒	良好	外：にぶい黄橙色 内：明黄褐色	口縁部片
2	土師器 坏	7.4 3.6 －	非ロクロ坏。外体～底部はヘラ削り、内面はヘラ磨き。	白色粒、石英微砂粒、海綿骨針	良好	橙色	完形
3	土師器 坏	(13.0) [3.0] －	非ロクロの須恵器蓋模倣坏。外体～底部はヘラ削り、内面はヘラ磨き。	白色粒・石英微粒、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
4	須恵器 蓋	(11.6) [1.6] －	無高台坏のかえり蓋。天井部1/3回転ヘラ削り。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	オリーブ灰色	口縁部片
5	須恵器 坏	12.0 4.1 7.4	底部は回転ヘラ切り、箱型。底部の厚みは薄い。成形時の粘土紐塊が内底部に残る。右回転。	石英、白色粒（φ1㎜多量）	良好	黄灰色	ほぼ完形
6	須恵器 坏	(12.6) [4.6] －	体～底部回転ヘラ削り。	白色粒・石英（φ1㎜多量）	良好	灰色	口縁部片
7	須恵器 短頸壺	－ [6.1] －	底部は丸く収める。肩の張りは少なく短い口縁部は立ち上がる。ロクロ成形、底部ヘラ削り。	白色粒・石英（φ1㎜多量）、角閃石粒	良好	灰黄色	胴部～底部片
8	土師器 甕	16.0 [13.5] －	口縁部はあまり開かない長胴の甕。外胴部斜位ヘラ削り、内胴部斜位ヘラナデ。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	橙色	口縁～胴部片



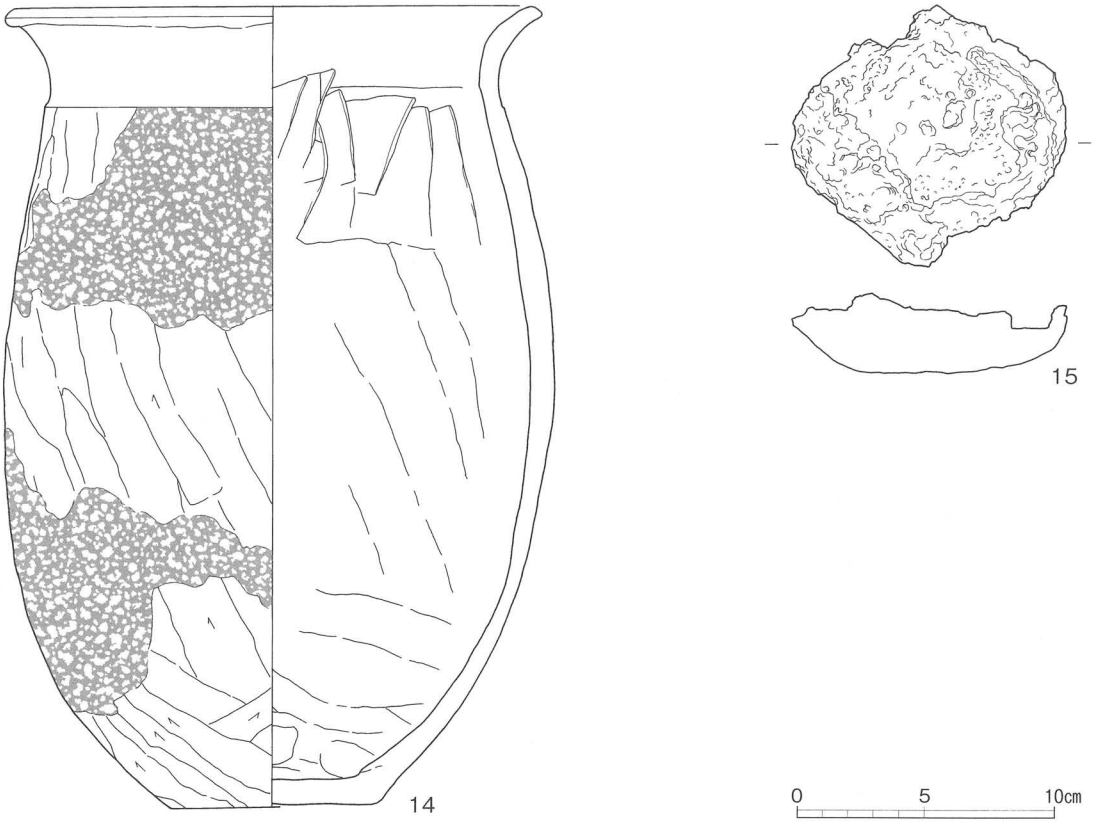
13号住居跡土層
1暗褐色　炭化粒少量、粘性あり
2褐色　ローム小ブロック少量、炭化物微量、鹿沼パミス粒微量、締りあり
3暗褐色　ローム粒少量、締りあり
4暗褐色　ローム粒少量、締りあり
5暗赤褐色　焼土粒微量、砂質粘土粒少量、締りあり
6暗赤褐色　焼土粒微量、砂質粘土粒少量、締り強い
P1～P4
1黒褐色　焼土粒微量、炭化物少量、締り・粘性弱い
2褐色　ロームブロック・炭化物少量、締りあり、粘性弱い
3褐色　ロームブロック少量、締りあり、粘性弱い
4暗褐色　ロームブロック少量、炭化物微量、締りあり、粘性弱い
5暗褐色　焼土粒・炭化物微量、締りあり、粘性弱い

カマド
1暗褐色　焼土粒微量、締りあり
2暗赤褐色　焼土粒微量、締りあり
3暗赤褐色　ロームブロック少量、締りあり
4暗赤褐色　焼土粒微量、炭化物粒微量、締りあり
5暗赤褐色　焼土粒少量、砂質粘土粒少量、締り強い
6暗赤褐色　焼土粒中量、灰微量、焼土ブロック少量、粘性あり
7暗赤褐色　焼土粒少量、灰微量、焼土ブロック微量、粘性あり
8灰褐色　砂質粘土ブロック、焼土混じり、構築材崩落土
9灰褐色　砂質粘土ブロック多量

第129図　13号住居跡



第 130 図　13 号住居跡出土遺物①

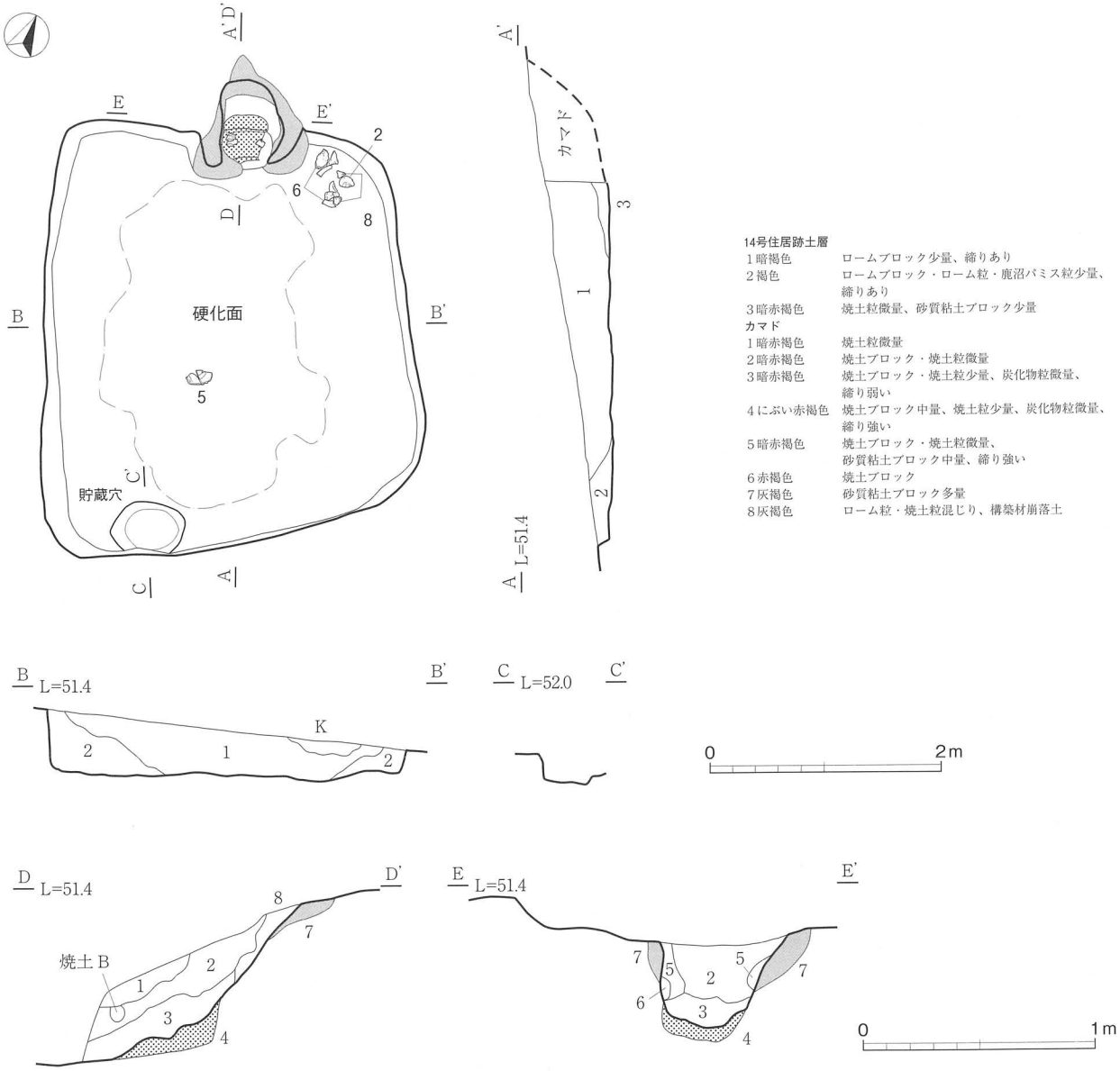


第 131 図　13 号住居跡出土遺物②

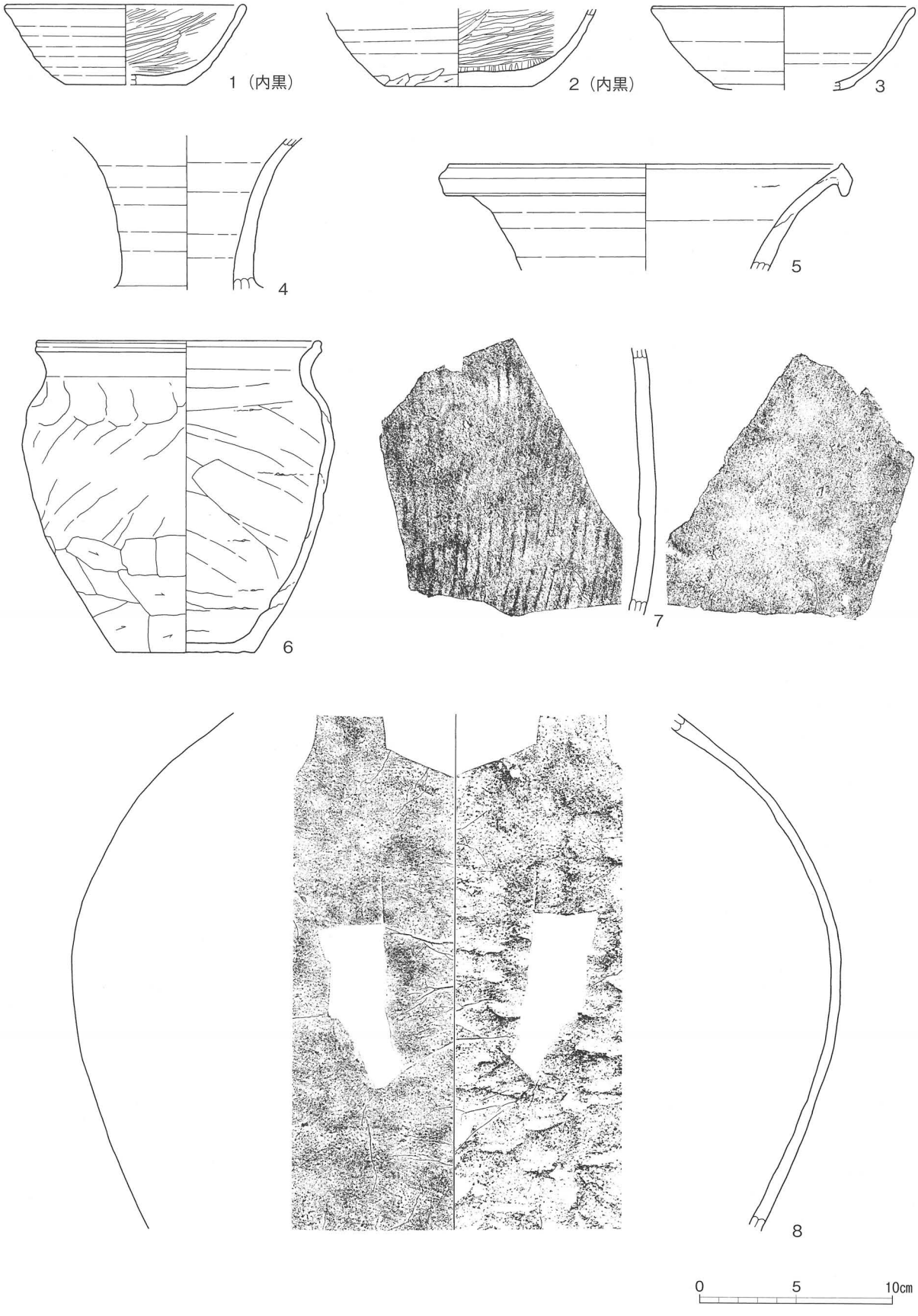
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	土師器 甕	－ [6.6] 7.5	外胴部ヘラ削り、内胴部ヘラナデ。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	外：褐色 内：明褐色	底部片
10	土師器 甕	18.4 26.1 8.7	口縁部は外反し端部で摘み上げられる。胴部は最大径を下位にとる。底部はやや突出気味の平底。外胴部底部～上位にヘラ磨き、内面は斜位ヘラナデ後下位はヘラ磨き。	石英・白色粒、雲母	良好	外：明黄褐色 内：黄橙色	60% 常総型甕
11	土師器 甕	22.1 29.2 8.0	口縁部は外反する。胴部は最大径を上位にとる。底部は平底。外胴部底部～上位にヘラ削り、内面は斜位ヘラナデ。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	橙色～黒色	60%
12	土師器 甕	－ [3.3] 8.0	底部は平底。外胴部はヘラ削り、内底部に鉄塊が付着。	白色粒、石英、チャート	良好	外：明黄褐色 内：橙色	底部片
13	土製品 支脚	指圧痕が顕著。上径 3.3cm、下径 7.6cm、長さ 14.2cm、重さ 698.0g。		白色粒・石英	良好	明黄褐色	完形
14	土師器 甕	20.9 31.7 8.2	長胴甕。口縁部は外反し、最大径を中位にとる。底部は平底。外胴部は縦・斜位のヘラ削り、内面はヘラナデ。カマド構築材が上位と下位に付着。	石英、白色粒、チャート	良好	外：にぶい褐色 内：にぶい黄褐色	ほぼ完形
15	鉄滓	大型の碗型滓。長さ 10.7cm、幅 10.3cm、厚さ 2.1cm、重さ 442.0g。					

14号住居跡（第132・133図）

位置　C５グリッドにある。　**規模と平面形**　1.78 × 1.44 mの方形。　**重複関係**　直接切り合わないが13号住が古い。　**主軸方向**　N－20°－W。　**壁**　壁高は50cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅160cmで硬化している。　**貯蔵穴**　南壁の南西コーナー寄りに付設されており、楕円形で32 × 20cm、深さ4cmである。　**カマド**　北壁中央やや東寄りにあり、袖部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　カマドとその東側を主体に散見される。1・2は土師器坏、3は須恵器坏、4は須恵器長頸壷、5・7・8は須恵器甕、6は土師器甕である。　**所見**　遺物から9世紀後葉頃である。



第132図　14号住居跡



第133図　14号住居跡出土遺物

表63　14号住居跡出土遺物観察表

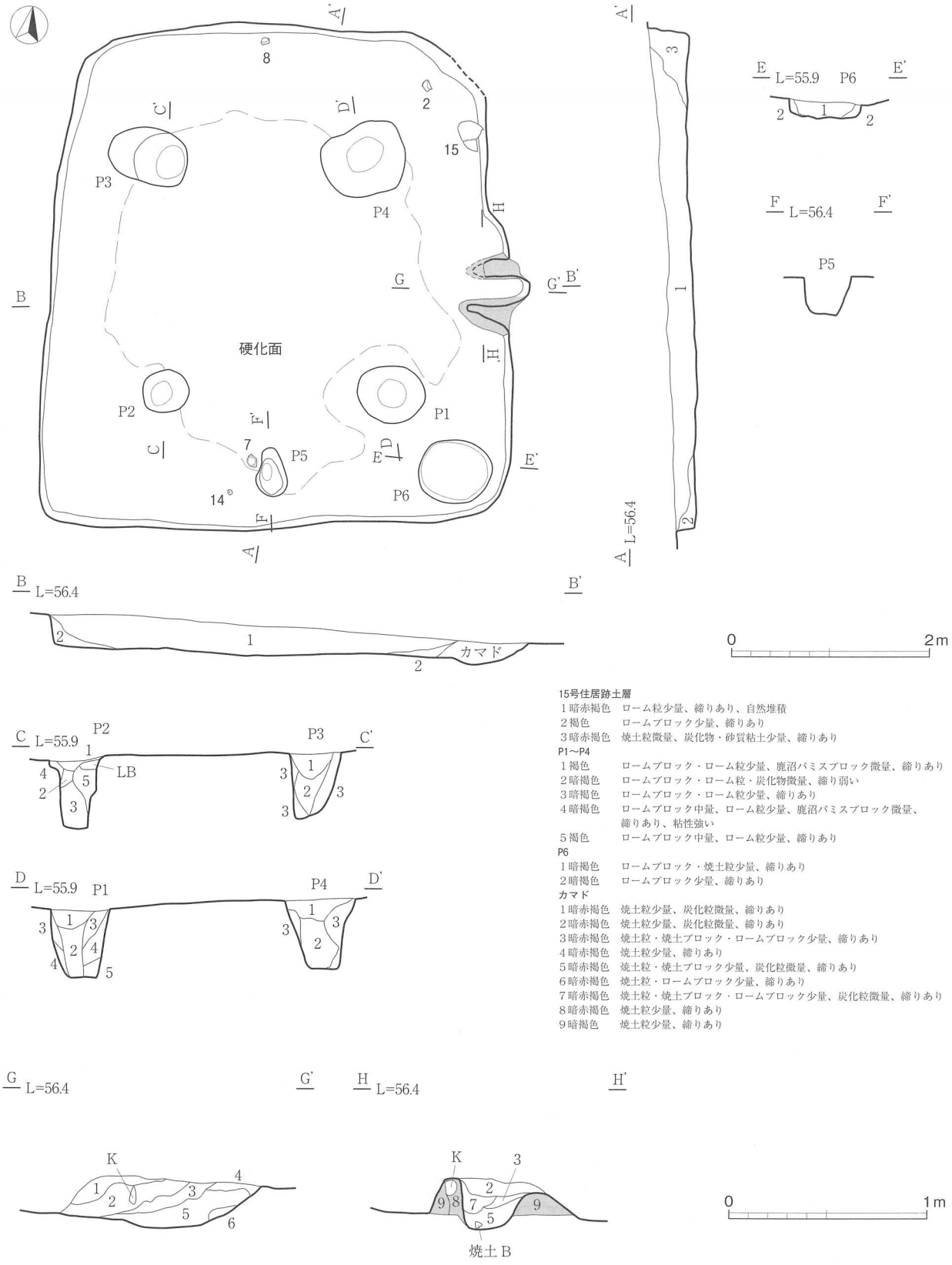
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(12.6) 4.1 6.2	底部は回転ヘラ切り後、周囲を回転ヘラ削り。内面はヘラ磨き後、黒色処理。	石英、白色粒、角閃石	良好	にぶい黄橙色	口縁～底部片
2	土師器 坏	– – 7.5	底部は回転ヘラ切り後、周囲を回転ヘラ削り。体部下端をヘラ削り、内面はヘラ磨き後、黒色処理。右回転。	石英、白色粒、角閃石	良好	にぶい黄橙色	体～底部片
3	須恵器 坏	(13.6) 4.3 (7.2)	ロクロ成形。	白色粒、石英、角閃石粒	良好	灰黄色	口縁～底部片
4	須恵器 長頸壺	– [7.8] –	ロクロ成形。内面は降灰により付着物多い。	白色粒、石英、黒色粒	良好	灰色	頸部片
5	須恵器 甕	11.2 [5.0] –	口縁部は外反し端部を縁帯。ロクロ成形。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	暗青灰色	口縁部片
6	土師器 甕	14.7 16.1 7.1	口縁部は短く湾曲気味に立ち上がり摘み上げられる。最大径は肩部とする。外胴部は上位を斜位ヘラナデ、下位を横位ヘラ削り。内面は斜位ヘラナデ。	石英、白色粒、角閃石	良好	にぶい赤褐色	70%
7	須恵器 甕	– – –	外面平行タタキ。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	暗オリーブ灰色	胴部片
8	須恵器 甕	– – –	外面板状工具でタタキ、内面当て具。	石英、黒色融出粒	良好	灰黄色	胴部片

15号住居跡（第134～136図）

位置　C5グリッドにある。　**規模と平面形**　4.95×4.45mの方形であるが、隅角は南西側を除き鈍角的で、北壁は3.80m、南壁は4.40mと台形状である。また東壁は南東隅角からカマド付近まで直線的であるが、その北側は若干内寄りとなる。　**主軸方向**　N－80°－E。　**壁**　壁高は40cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅304cmで硬化し、P5にまで及んでいる。　**貯蔵穴**　東壁の南東隅角寄りにP6が付設されており、楕円形で70×65cm、深さ18cmである。　**ピット**　5箇所。P1：70×60cm、深さ68cm、P2：45×42cm、深さ70cm、P3:80×55cm、深さ68cm、P4:85×70cm、深さ:70cm、P5:50×30cm、深さ40cmである。P5は出入り口ピットである。　**カマド**　東壁中央にあり、袖部は粘土を含んだ暗褐色で構築されている。煙道部側の粘土は壁が40cm遺存している割りにはそこまで構築されていない。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　自然堆積である。　**遺物**　南、北壁に近接して出土した。カマド、P6付近にはない。1･4は土師器坏、2･3は須恵器坏、5･6は須恵器蓋、7は須恵器盤、8･9は土師器甕、10～13･15は須恵器甕、14は紡錘車である。14･15は確認面、2･7は床着である。　**所見**　9世紀前葉頃であろう。

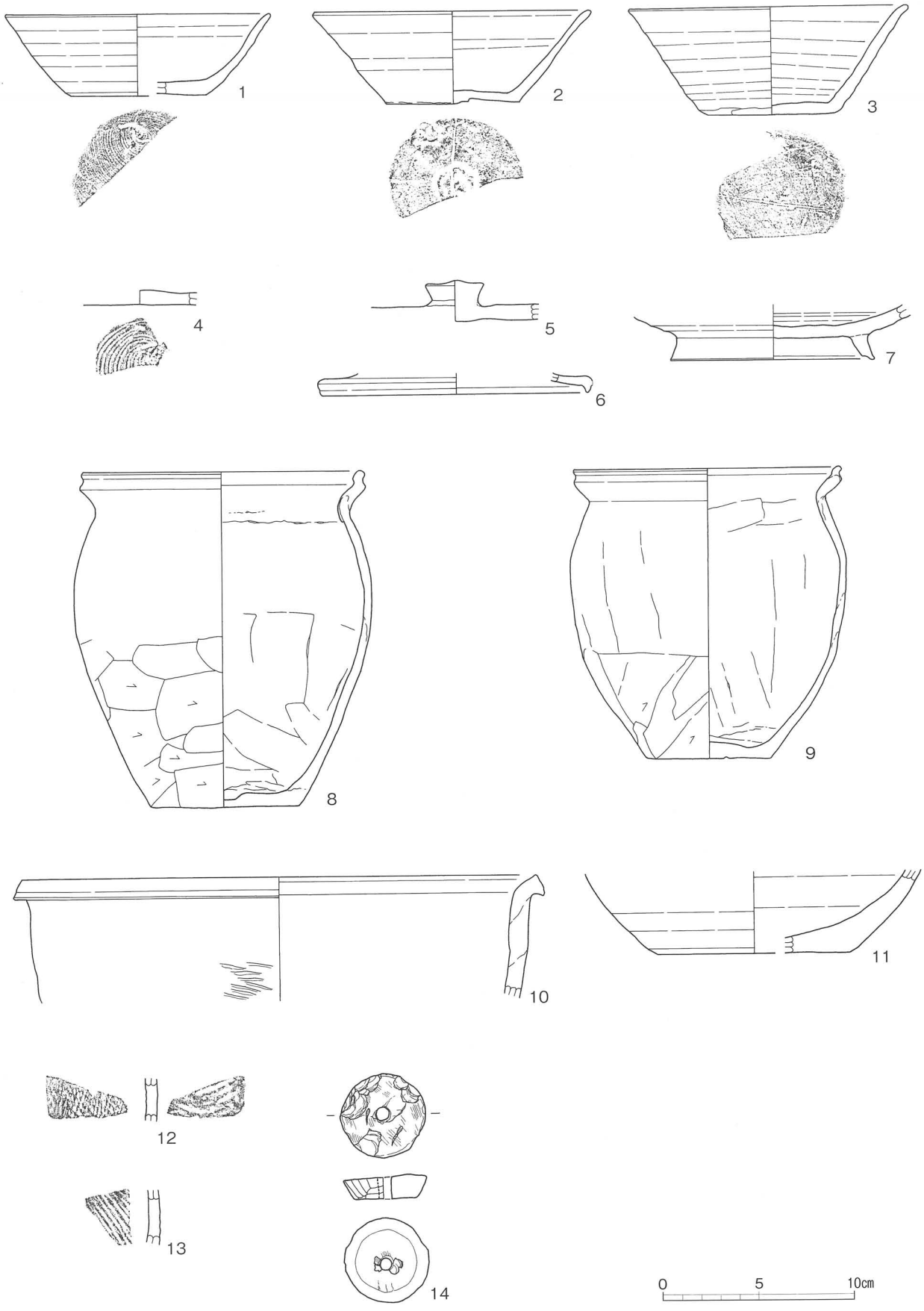
表64　15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	14.0 4.3 7.0	底部は回転糸切り。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	橙色	25%
2	須恵器 坏	14.6 4.9 6.9	底部は回転ヘラ切り。底部線刻「—」。	白色粒、海綿骨針、砂礫	良好	灰色	25%

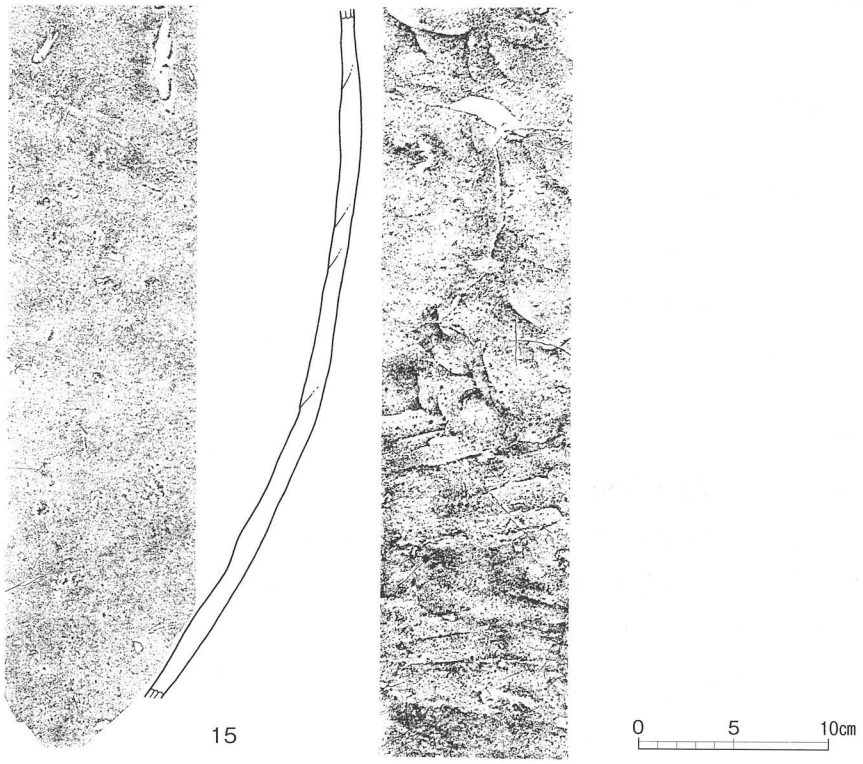


15号住居跡土層
1暗赤褐色　ローム粒少量、締りあり、自然堆積
2褐色　ロームブロック少量、締りあり
3暗赤褐色　焼土粒微量、炭化物・砂質粘土少量、締りあり
P1～P4
1褐色　ロームブロック・ローム粒少量、鹿沼パミスブロック微量、締りあり
2暗褐色　ロームブロック・ローム粒・炭化物微量、締り弱い
3暗褐色　ロームブロック・ローム粒少量、締りあり
4暗褐色　ロームブロック中量、ローム粒少量、鹿沼パミスブロック微量、締りあり、粘性強い
5褐色　ロームブロック中量、ローム粒少量、締りあり
P6
1暗褐色　ロームブロック・焼土粒少量、締りあり
2暗褐色　ロームブロック少量、締りあり
カマド
1暗赤褐色　焼土粒少量、炭化粒微量、締りあり
2暗赤褐色　焼土粒少量、炭化粒微量、締りあり
3暗赤褐色　焼土粒・焼土ブロック・ロームブロック少量、締りあり
4暗赤褐色　焼土粒少量、締りあり
5暗赤褐色　焼土粒・焼土ブロック少量、炭化粒微量、締りあり
6暗赤褐色　焼土粒・ロームブロック少量、締りあり
7暗赤褐色　焼土粒・焼土ブロック・ロームブロック少量、炭化粒微量、締りあり
8暗赤褐色　焼土粒少量、締りあり
9暗褐色　焼土粒少量、締りあり

第134図　15号住居跡



第 135 図　15 号住居跡出土遺物①



第136図　15号住居跡出土遺物②

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 坏	14.7 5.7 6.6	底部は回転ヘラ切り後、体部下端～底部周囲ヘラ削り。底部線刻「—」。	白色粒、砂礫	良好	灰色	25%
4	土師器 坏	– [0.8] –	底部は回転糸切り。	石英、角閃石	良好	外：にぶい黄橙色 内：灰白色粒	底部片
5	須恵器 蓋	– [2.2] –	ロクロ成形。	白色粒	良好	灰色	天井部片
6	須恵器 蓋	14.4 [1.1] –	口縁端部でわずかに屈曲する。	白色粒	良好	灰色	口縁部片
7	須恵器 盤	– [2.9] 10.6	高台径10.6cmから盤とした。底部は指ナデで調整は不明。	白色粒、海綿骨針、石英、チャート	良好	灰色	底部片
8	土師器 甕	14.7 17.7 7.9	口縁部は屈曲しながら立ち上がり端部で摘み上げられる。最大径は上位で底部は平底。底部木葉痕。外胴部上位縦位ヘラナデ、下位横位ヘラ削り。内面ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	橙色	50%
9	土師器 甕	14.0 15.3 6.4	口縁部は屈曲しながら立ち上がり端部で摘み上げられる。最大径は上位で底部は平底。底部木葉痕。外胴部上位縦位ヘラナデ、下位斜位ヘラ削り。内面縦位ヘラナデ。	石英、白色粒	良好	橙色	50%
10	須恵器 甕	(27.8) [6.5] –	口縁部は短く屈曲し面をなす。所謂バケツ状の甕。外胴部は平行タタキ。	白色粒、石英、海綿骨針、砂礫（4×2㎜）	良好	灰色	口縁部片
11	須恵器 甕	– [4.3] (10.0)	ロクロ成形。胴部下端は回転ヘラ削り。	白色粒、海綿骨針、砂礫（5×4㎜）	良好	外：灰白色粒 内：灰色	底部片
12	須恵器 甕	– [2.3] –	外面縄タタキ、内面同心円当て具。	白色粒	還元軟質	灰白色粒	胴部片

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
13	須恵器 甕	－ [3.0] －	外面平行タタキ。	白色粒、石英、雲母	還元軟質	外：灰白色粒 内：灰色	胴部片 新治産
14	石製品 紡錘車	上径4.5cm、下径3.3cm、孔径0.8～0.7cm、厚さ1.3cm、重31.6g、泥岩製。					
15	須恵器 甕	－ [36.5] －	外面ナデ。内面無文当て具、下位ナデ。	海綿骨針、砂礫	良好	外：灰オリーブ色 内：赤灰色	胴部片

16号住居跡（第137図）

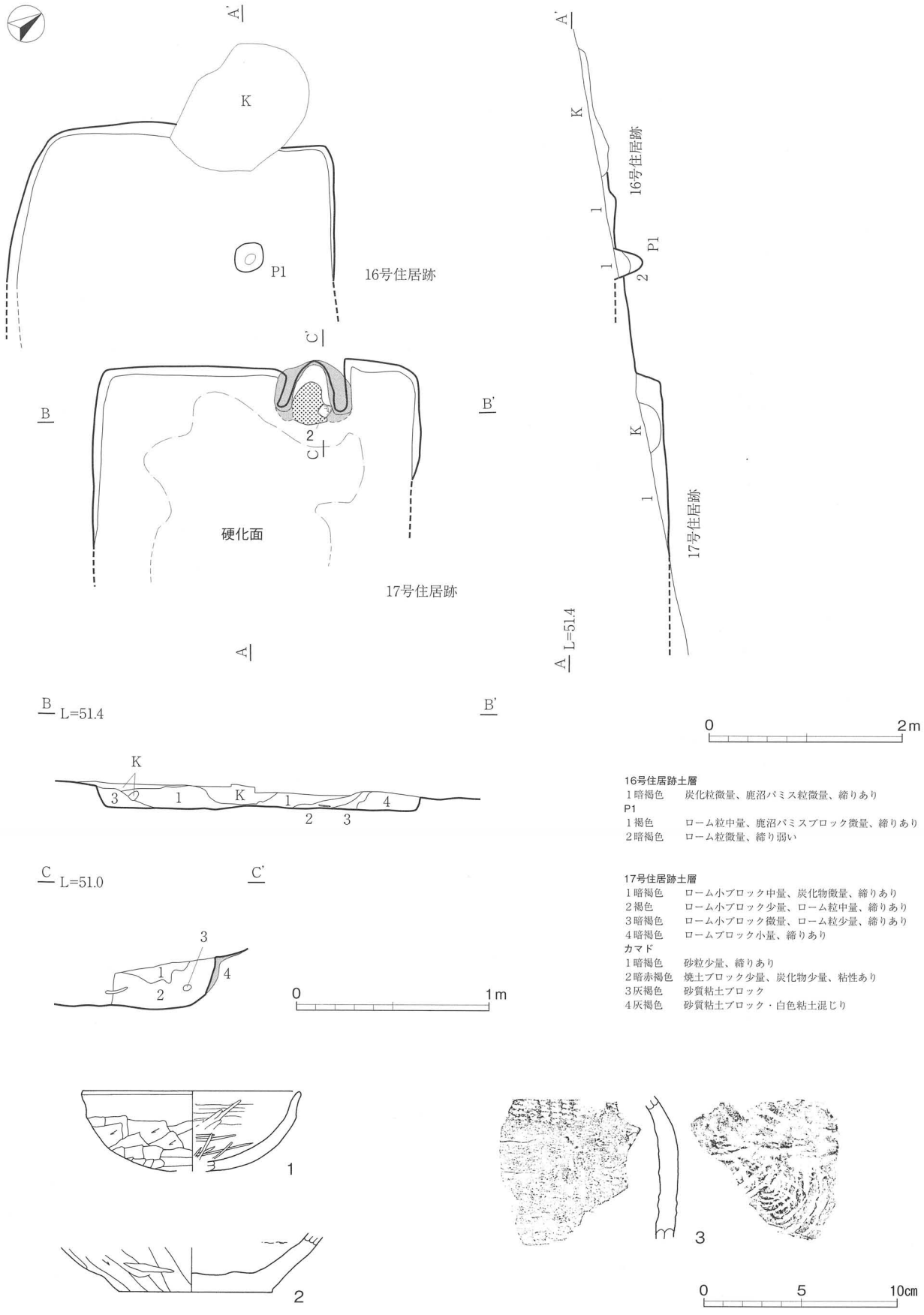
位置　C5グリッドにある。　**規模と平面形**　3.20×（2.25）mの方形で、西壁がやや弧状となる。　**重複関係**　17号住居跡が新しい。　**主軸方向**　N－52°－W。　**壁**　壁高は20cm、垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面は不明。　**ピット**　1箇所。P1：35×30cm、深さ30cmである。　**カマド**　不明。北壁東寄りに撹乱があり、その位置であろうか。粘土、焼土痕跡は明確でない。　**覆土**　残りはわずかで明確でない。　**遺物**　なし。　**所見**　重複から8世紀前葉以前。

17号住居跡（第137図）

位置　C5グリッドにある。　**規模と平面形**　3.15×（1.10）mの方形であろう。南側は削平され不明。　**重複関係**　16号住居跡が古い。　**主軸方向**　N－56°－W。　**壁**　壁高は22cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅223cmで硬化している。　**ピット**　床面上にはない住居（竪穴）外柱穴である。　**カマド**　北壁中央から東寄りにあり、袖部から煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部2層内に焼土ブロックがあることからカマド天井部の崩落であろう。燃焼部から煙道部へ急に立ち上がる。　**覆土**　自然堆積である。　**遺物**　1は土師器坏、3は土師器甕いずれも覆土中、2は須恵器甕カマド内である。　**所見**　遺物から8世紀前葉頃である。

表65　17号住居跡出土遺物観察表

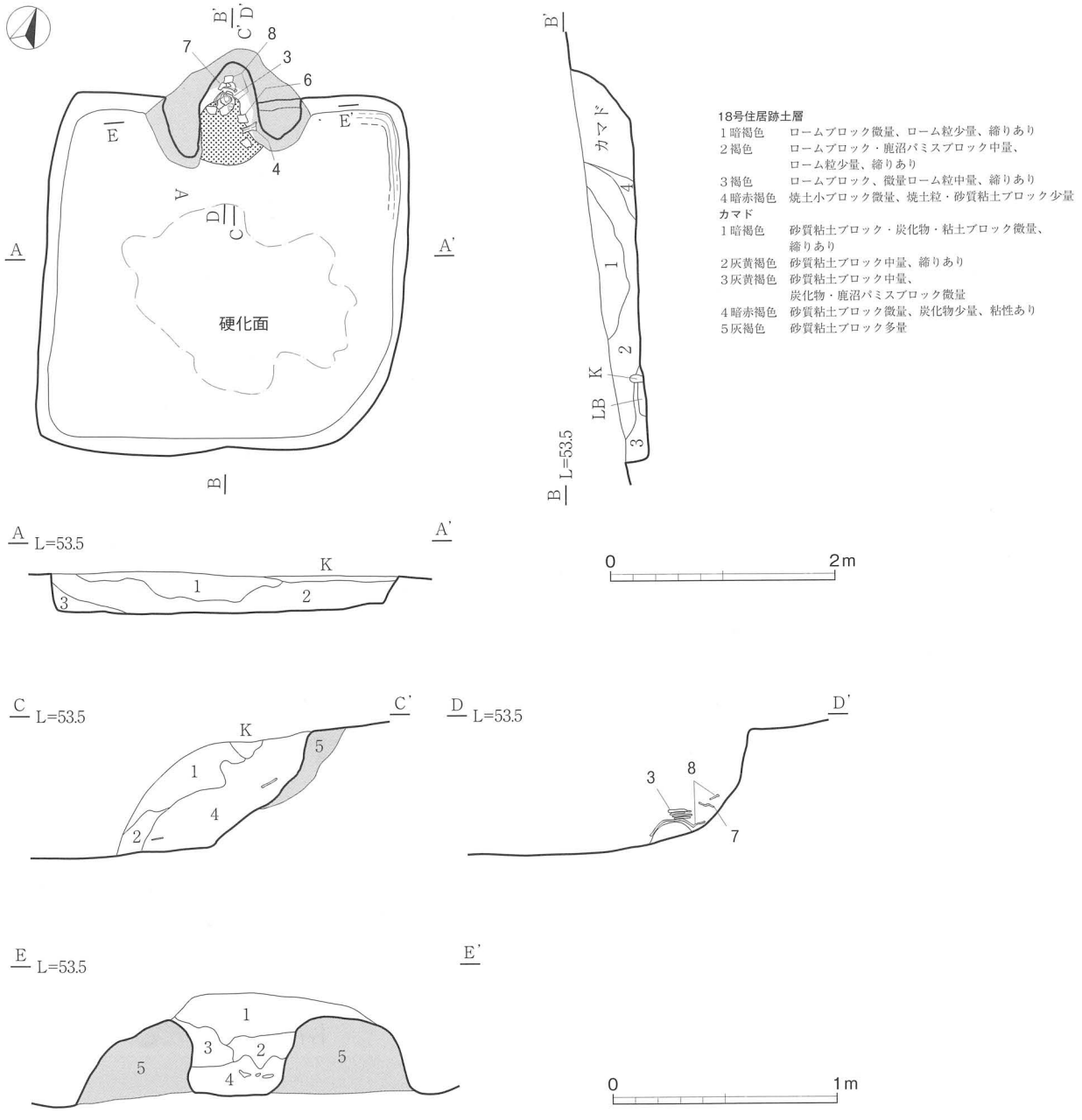
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	11.5 4.2 －	非ロクロ坏。外体～底部はヘラ削り、内面はヘラ磨き。	白色粒、チャート	良好	にぶい黄褐色	30%
2	土師器 甕	－ [2.3] 7.9	外胴～底部はヘラ削り、内面はナデ。	白色粒、石英、角閃石	良好	褐色	底部片
3	須恵器 甕	－ － －	外面は平行タタキ、内面は同心円当て具。	白色粒、黒色融出粒	良好	灰白色粒	胴部片



第137図　16・17号住居跡・17号住居跡出土遺物

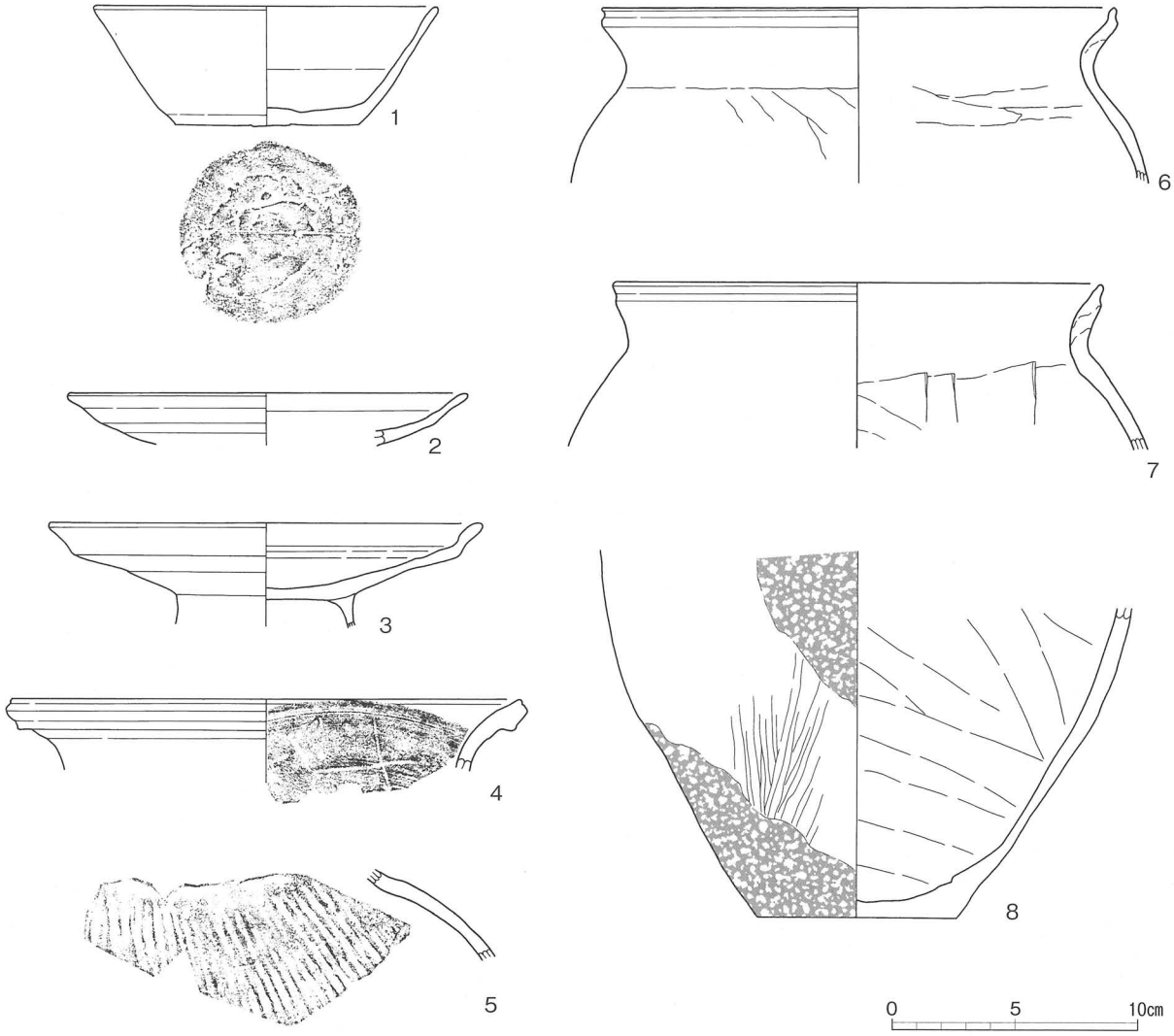
18号住居跡（第138・139図）

位置　C、D5グリッドにある。　**規模と平面形**　2.90×2.80mの方形であるが、東南部の隅角は丸くおさめる。　**主軸方向**　N－15°－W。　**壁**　壁高は30cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅180cmで中央を主体に硬化している。北東部の隅角付近には一部壁溝が残るが全周した否かはわからない。床面は硬化面と壁の間が非常に柔らかく、調査時に掘りすぎた可能性がある。　**ピット**　床面上にはない。住居（竪穴）外柱穴である。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部から煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ急に立ち上がる。　**覆土**　自然堆積である。　**遺物**　遺物はカマド内のみである。またカマド内の支脚は土器片を重ねて構成されていた。　**所見**　9世紀中葉。



18号住居跡土層
1暗褐色　ロームブロック微量、ローム粒少量、締りあり
2褐色　ロームブロック・鹿沼パミスブロック中量、ローム粒少量、締りあり
3褐色　ロームブロック、微量ローム粒中量、締りあり
4暗赤褐色　焼土小ブロック微量、焼土粒・砂質粘土ブロック少量
カマド
1暗褐色　砂質粘土ブロック・炭化物・粘土ブロック微量、締りあり
2灰黄褐色　砂質粘土ブロック中量、締りあり
3灰黄褐色　砂質粘土ブロック中量、炭化物・鹿沼パミスブロック微量
4暗赤褐色　砂質粘土ブロック微量、炭化物少量、粘性あり
5灰褐色　砂質粘土ブロック多量

第138図　18号住居跡



第139図　18号住居跡出土遺物

表66　18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	14.0 4.8 7.4	底部は回転ヘラ切り、外底部に線刻。	石英、雲母	還元軟質	灰黄色	40%
2	須恵器 盤	(16.2) － －	体部下端は回転ヘラ削り。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	灰色	口縁部片

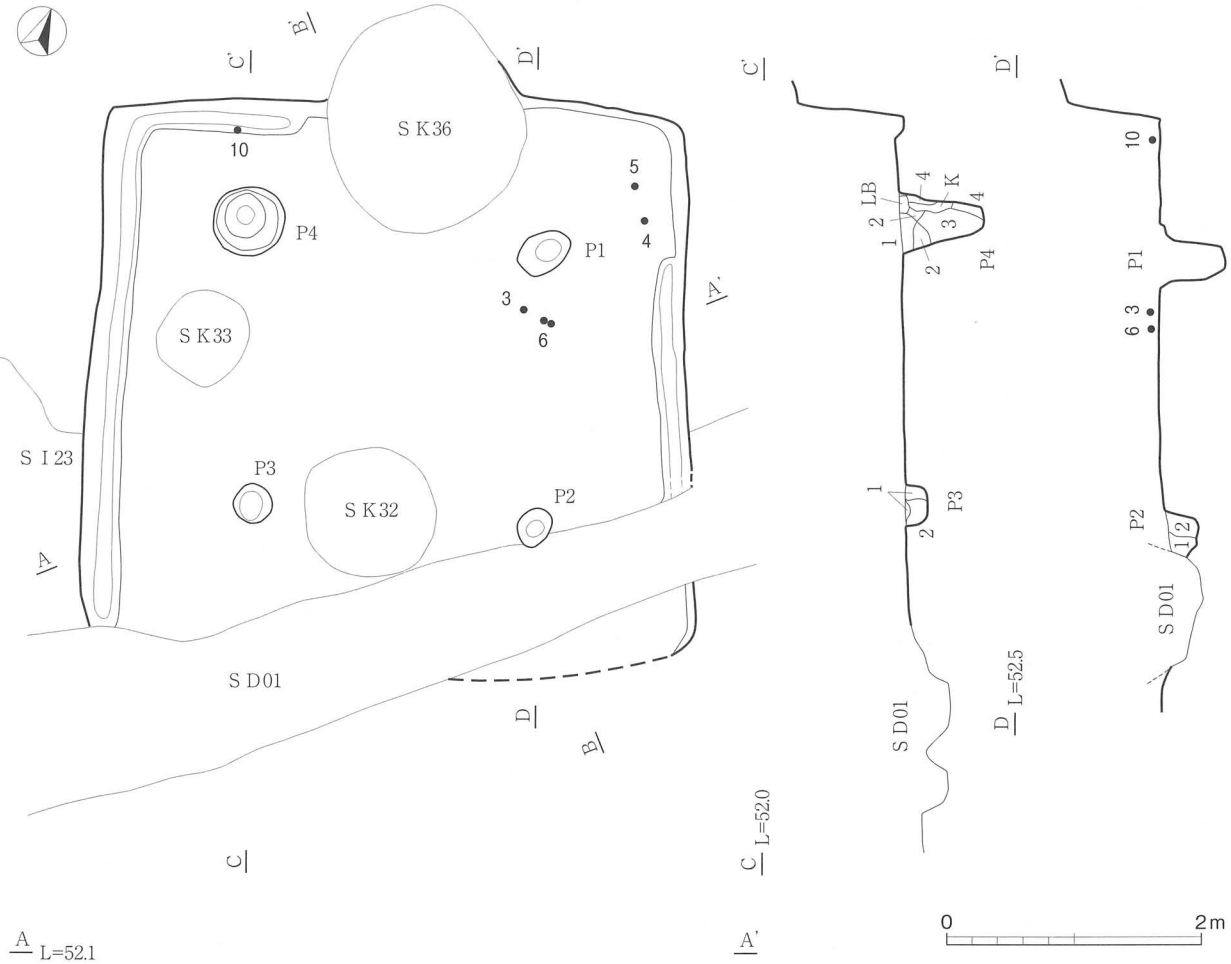
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 盤	17.6 [4.3] 7.4	体部下端は回転ヘラ削り。	石英、チャート、海綿骨針	未還元軟質	にぶい褐色	60%
4	須恵器 甕	(21.2) – –	口縁部は外反し端部は縁帯。ロクロ成形。口縁部内面線刻「×」。	石英、雲母	還元軟質	浅黄色	口縁部片 新治産
5	須恵器 甕	– – –	肩部に平行タタキ。	石英、雲母粒	良好	にぶい黄橙色	肩部片 新治産
6	土師器 甕	(21.0) – –	口縁部は外反し端部で摘み上げられる。外胴部斜位ヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	橙色	口縁部 常総型甕
7	土師器 甕	(20.0) – –	口縁部は外反し端部で摘み上げられる。内胴部ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	橙色	口縁部片 常総型甕
8	土師器 甕	– – 8.0	外胴部はヘラ磨き、内面は斜位ヘラナデ。外底部木葉痕。	白色粒、石英、雲母	良好	にぶい黄橙色	底部 常総型甕

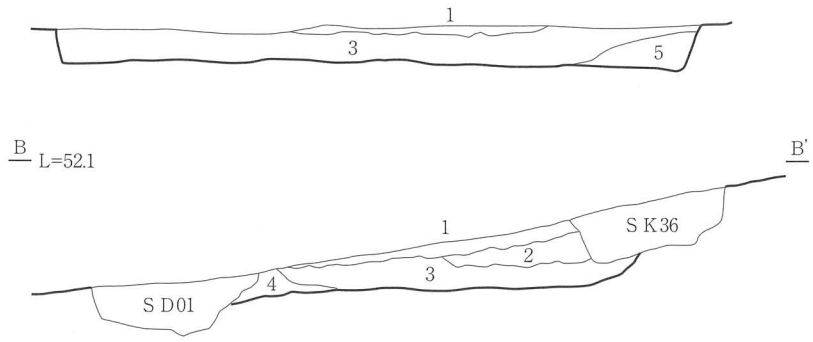
19号住居跡（第140・141図）

位置　D5グリッドにある。　**規模と平面形**　4.40 × 4.30 mの方形で、南側の壁が北壁より長く台形状に近い。　**重複関係**　23号住居跡が古く、1号溝、SK32、33、36が新しい。　**主軸方向**　N－19°－W。　**壁**　壁高は北側が80cmで垂直に立ち上がる。南側は削平されて残りはない。　**床**　硬化面は確認できなかった。　**ピット**　4箇所。P1：43 × 30cm、深さ50cm 、P2：30 × 25cm、深さ30cm 、P3：30 × 30cm、深さ20cm、P4：55 × 55cm、深さ64cmである。　南側のP2、P3は北側のピットに比べ浅く、これは柱取り替えに関わる所産であろうか。　**カマド**　北壁中央と推定されたがSK36で壊され面影はない。　**覆土**　自然堆積である。　**遺物**　東隅角とP1周辺に散見された。　**所見**　8世紀中葉頃である。

表67　19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 高台付坏	(15.2) [5.0] –	須恵器高台付坏模倣。底部周辺は回転ヘラ削り、内面はヘラ磨き、黒色処理。	石英、雲母、海綿骨針	酸化軟質	にぶい黄褐色	口縁～体部片
2	須恵器 坏	(14.0) 4.5 (9.0)	底部は回転ヘラ切り後体部下端・底部ヘラ削り。	白色粒、石英、チャート、海綿骨針φ2㎜大多量	良好	青黒色	30%
3	須恵器 坏	14.0 4.4 7.4	底部は回転ヘラ削り。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針φ2㎜大多量	良好	青黒色	50%
4	須恵器 坏	14.4 5.0 8.0	底部は回転ヘラ切り、外底部線刻「×」。	白色粒、石英、チャート、海綿骨針、褐色噴出粒	良好	オリーブ灰色	80%
5	須恵器 高台付坏	– [2.9] 8.0	底部は回転ヘラ削り。体部との変換点から周囲を打ち欠く。内底部磨耗、墨痕付着。外底部線刻「×」。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	オリーブ灰色	底部片 転用硯





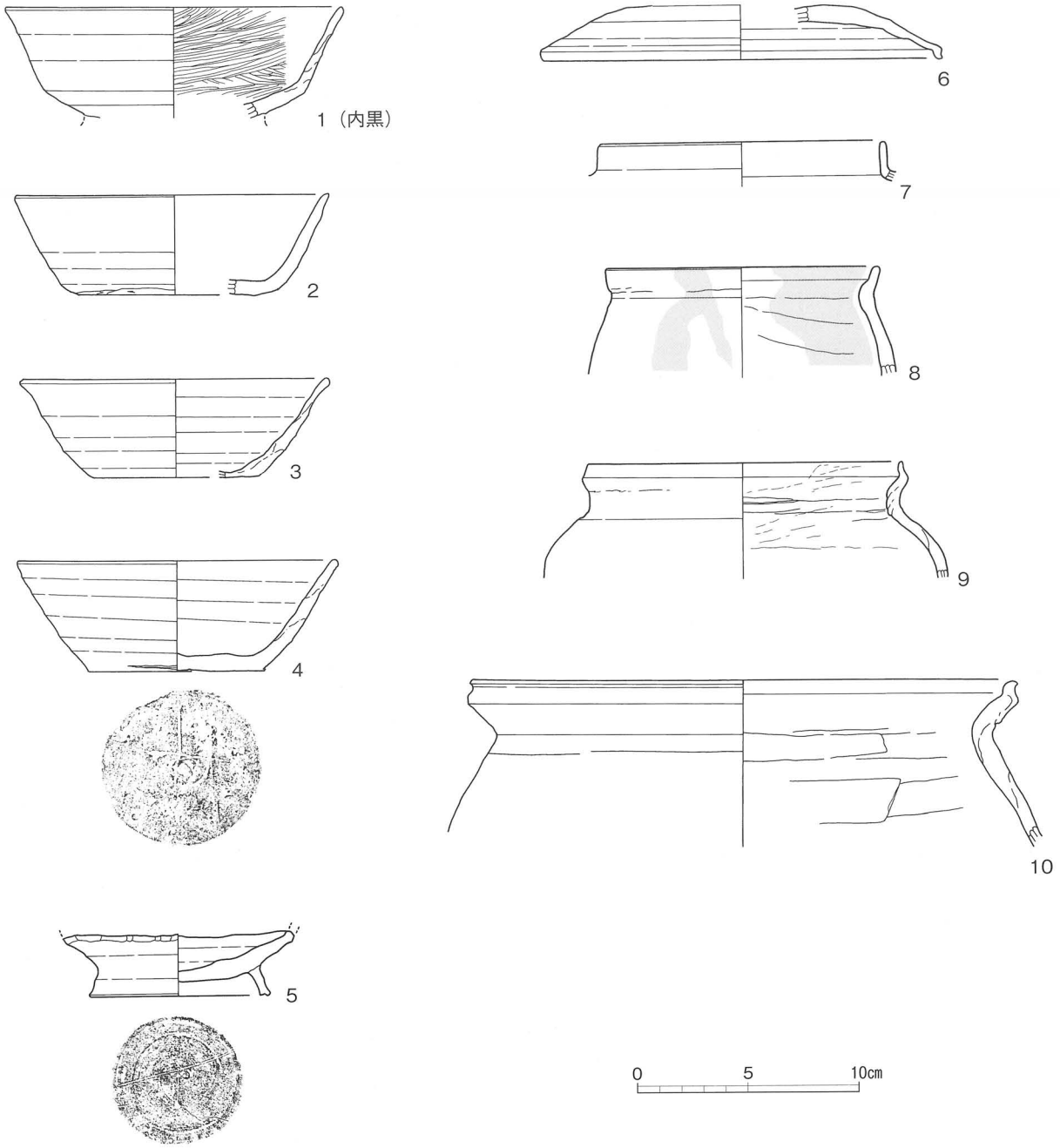
19号住居跡土層
1黒褐色　炭化粒微量、締りあり
2暗褐色　ローム粒微量、締りあり
3暗褐色　ローム粒・鹿沼パミスブロック少量、締りあり
4暗褐色　ローム粒・鹿沼パミスブロック・炭化粒・焼土粒微量、締りあり
5褐色　ローム粒・ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量、締りあり

P2・P3
1褐色　ロームブロック少量、ローム粒少量、締りあり
2暗褐色　締りあり

P4
1暗褐色　ロームブロック少量、ローム粒、締りあり
2褐色　ロームブロック少量、ローム粒中量、締りあり
3暗褐色　ローム粒少量、炭化物微量、締り・粘性弱い
4褐色　鹿沼パミスブロック微量、ロームブロック中量、ローム粒少量、締り・粘性弱い

第140図　19号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	須恵器 蓋	17.8 [2.5] –	外天井部は回転ヘラ削り。口縁端部は短く屈折する。	石英、チャート、海綿骨針	良好	灰色	口縁部片
7	須恵器 短頸壺	13.0 [1.9] –	ロクロ成形。表面は暗オリーブ色の自然釉。	石英	良好	灰色	口縁部片

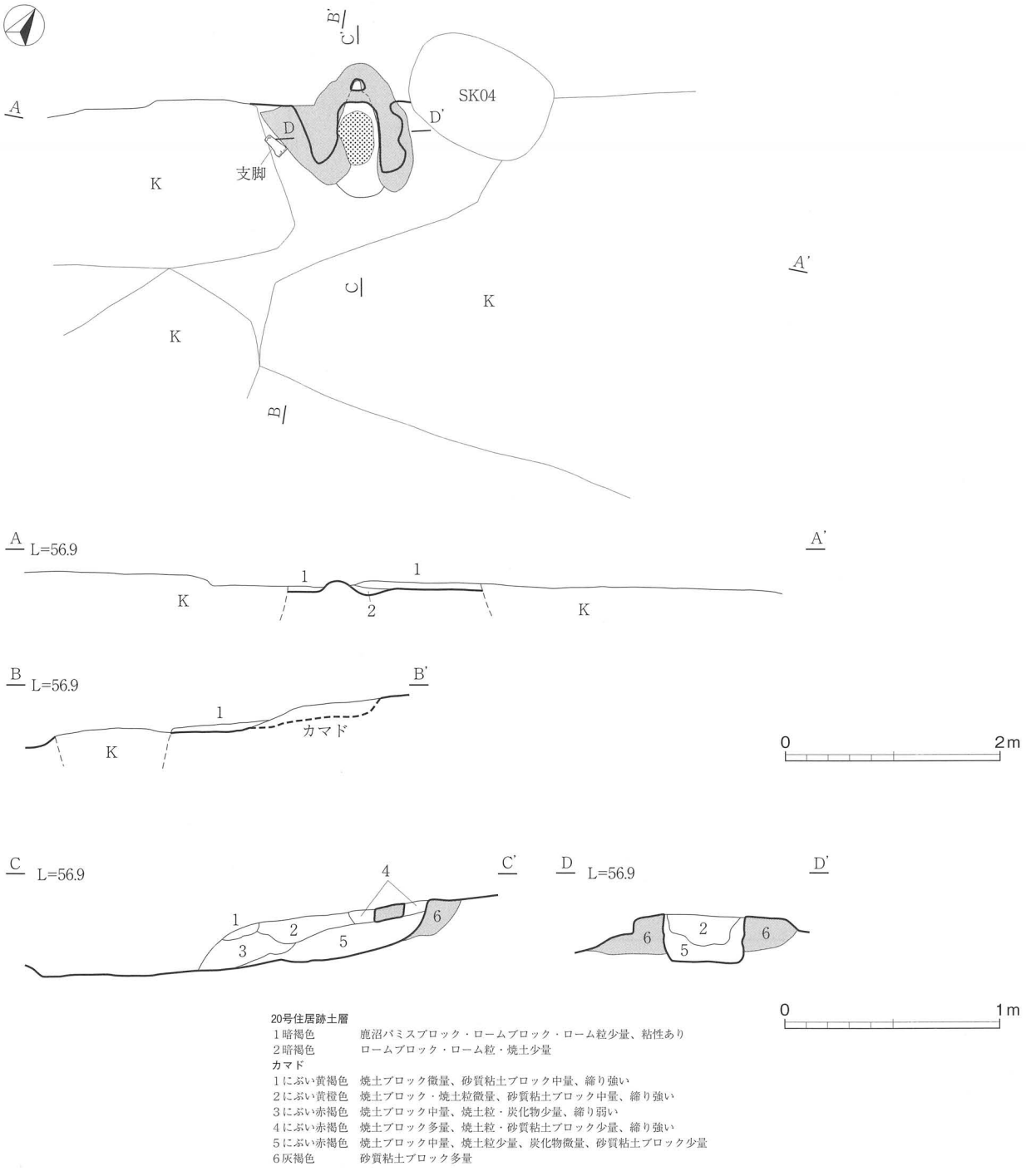


第141図　19号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
8	土師器 甕	(6.2) [5.0] –	口縁部は外反気味に立ち上がり端部で摘み上げる。内外ヘラナデ、吹きこぼれ付着。	石英、白色粒	良好	暗赤褐色	口縁部片
9	土師器 甕	(14.0) [5.2] –	口縁部は外反気味に立ち上がり端部で摘み上げる。内外ヘラナデ、吹きこぼれ付着。	石英、白色粒、雲母	良好	暗赤褐色	口縁部片
10	土師器 甕	(24.5) [7.5] –	口縁部は外反気味に立ち上がり端部で摘み上げる。内外ヘラナデ。	白色粒、石英、雲母粒	良好	にぶい橙色	口縁部片 常総型甕

20号住居跡（第142・143図）

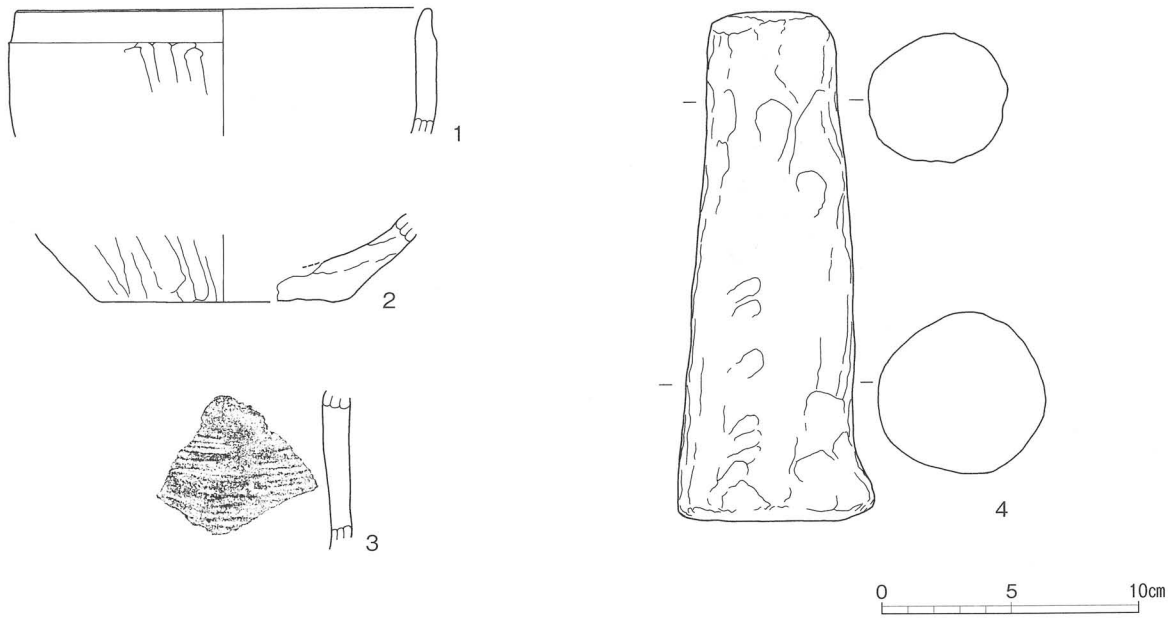
位置　Ｃ４、５グリッドにある。　**規模と平面形**　複数の撹乱によりカマドのみの残存である。　**重複関係**　直接の切り合いはないが５号住に近接しほぼ20号住の床面を切っており当該住居が古い。　**主軸方向**　カマド方向からはＮ－35°－Ｗ。　**壁**　立ち上がりはほとんど無い。　**床**　大半は撹乱で壊され、わずかにカマド前庭部が遺存する程度であり硬化面は見られなかった。　**カマド**　北壁にあり、袖部は粘土を含んだ灰褐



20号住居跡土層
１暗褐色　鹿沼パミスブロック・ロームブロック・ローム粒少量、粘性あり
２暗褐色　ロームブロック・ローム粒・焼土少量
カマド
１にぶい黄褐色　焼土ブロック微量、砂質粘土ブロック中量、締り強い
２にぶい黄橙色　焼土ブロック・焼土粒微量、砂質粘土ブロック中量、締り強い
３にぶい赤褐色　焼土ブロック中量、焼土粒・炭化物少量、締り弱い
４にぶい赤褐色　焼土ブロック多量、焼土粒・砂質粘土ブロック少量、締り強い
５にぶい赤褐色　焼土ブロック中量、焼土粒少量、炭化物微量、砂質粘土ブロック少量
６灰褐色　砂質粘土ブロック多量

第142図　20号住居跡

色で構築されている。地山に掘られた煙道部（直径10cm）が遺存していた。燃焼部から煙道部へ急に立ち上がる。　**遺物**　覆土中の遺物は1～3、4の支脚は左袖の出土である。　**所見**　8世紀後葉頃であろうか。



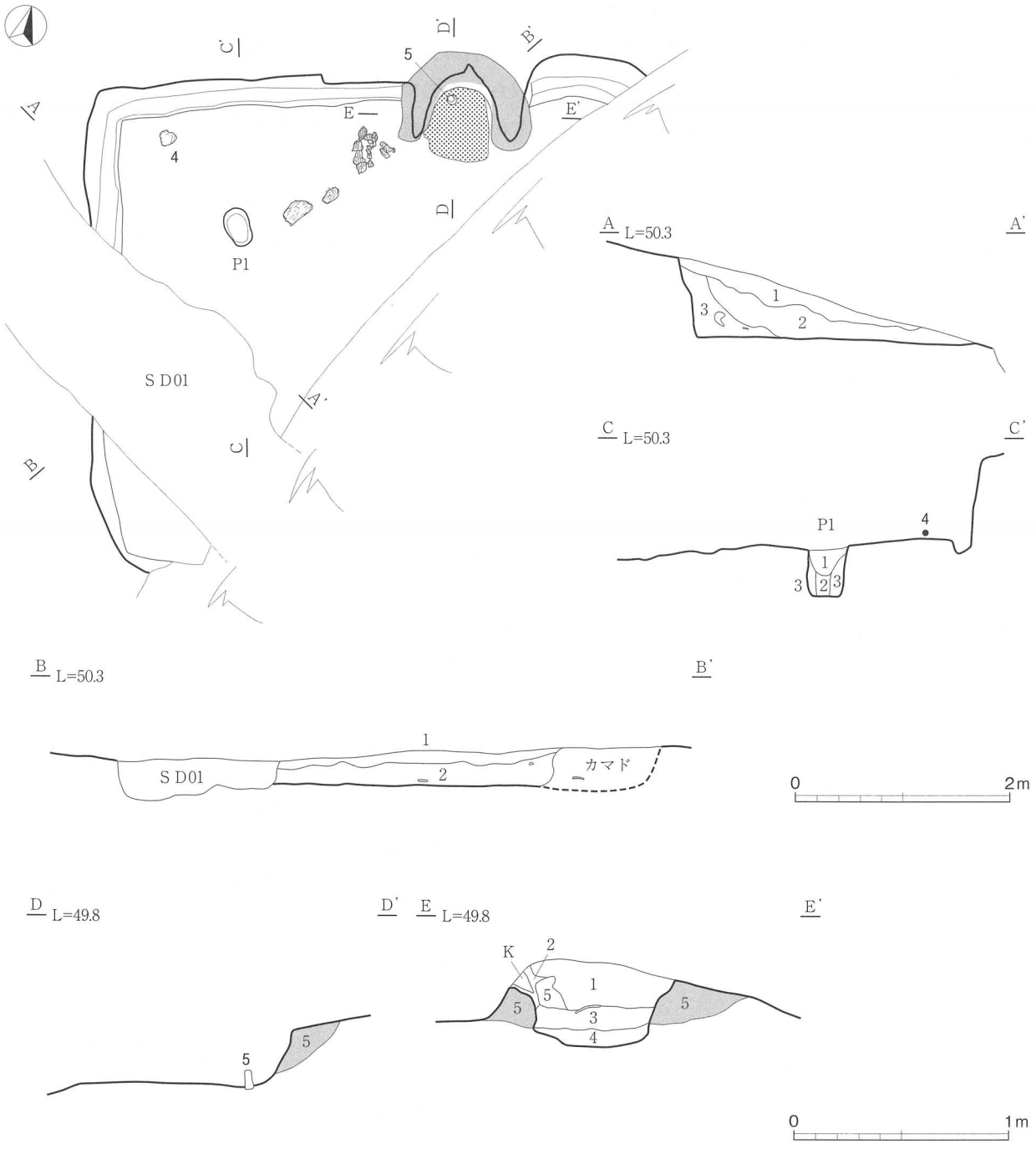
第143図　20号住居跡出土遺物

表68　20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 鉢	(16.0) [5.0] –	口縁～体部は立ち上がる。外体部は縦位ヘラ削り、内面は横位ヘラナデ。	白色粒、石英、雲母	良好	オリーブ黒色	口縁部片
2	土師器 甕	(14.0) 3.5 –	底部は平底、外胴部はヘラ磨き。	石英、砂岩丸粒	良好	にぶい橙色	底部片 常総型甕
3	須恵器 甕	– – –	外胴部は平行タタキ痕があるが自然釉がかかる。	白色粒、石英、黒色融出粒	良好	灰色	胴部片
4	土製品 支脚	手捻りで成形。上径5.3cm、下径7.7cm、長さ20.2cm、重さ825.0g		白色粒、石英、雲母粒	良好	にぶい橙色	完形

21号住居跡（第144・145図）

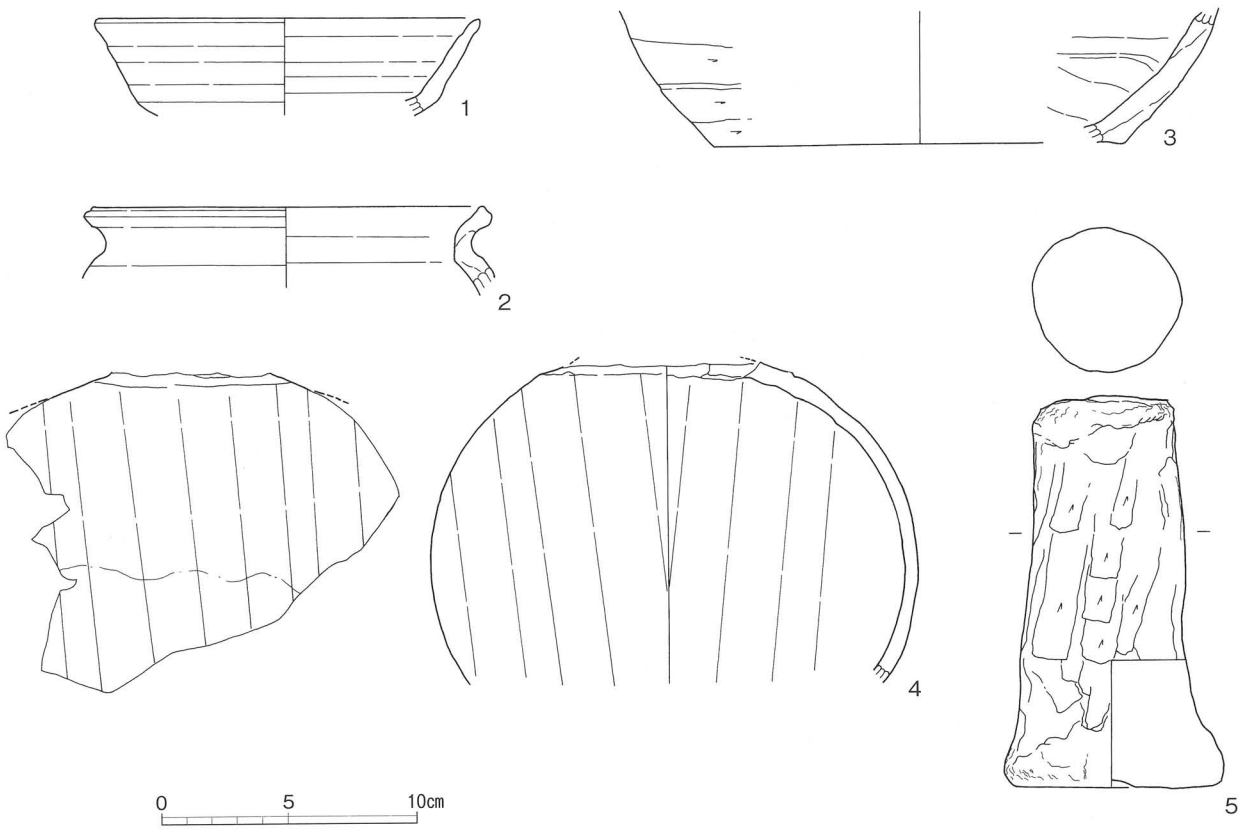
位置　D5グリッドにある。　**規模と平面形**　4.45×（4.60）mの方形でやや東西方向が長い。床面は東南側半分は後世に削られた崖によって遺存していない。　**重複関係**　SD01が新しい。　**主軸方向**　N－24°－W。　**壁**　壁高は北壁で85cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面はない。カマド南西側のP1との間に炭化材が帯状に検出されたが、炭化材範囲は元よりそれ以外にも被熱された痕跡は肉視できなかった。お



21号住居跡土層
1褐色　ロームブロック微量、ローム粒少量、締りあり
2褐色　ロームブロック少量、ローム粒中量、締りあり
3褐色　ロームブロック・ローム粒少量、締りあり
カマド
1暗赤褐色　焼土ブロック・炭化物微量、締りあり
2赤褐色　焼土ブロック多量、焼土粒少量、締りあり
3暗赤褐色　焼土ブロック少量、焼土粒・炭化粒・炭化物微量、締り
4極暗赤褐色　焼土ブロック・焼土粒・炭化粒・炭化物少量、締り
5灰褐色　砂質粘土ブロック多量
P1
1褐色　ロームブロック・ローム粒少量、締りあり
2暗褐色　ローム粒・炭化物微量、締り弱い、粘性あり
3暗褐色　ローム粒微量、締りあり

第144図　21号住居跡

そらく焼失ではなかろう。　**ピット**　遺存部では1箇所であるが基本的には4本であろう。P1：38×25cm、深さ50cmである。断面は柱の抜き取り痕が観察される。1層は抜き取り痕、2層は柱痕である。平面形がやや瓢箪型となっており、やや幅の広い北西側から抜き取られたのであろう。　**カマド**　北壁中央からやや東か、袖部から煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。袖部左側は崩れており、燃焼部内に5層と同材（カマド構築材の崩落土）の落下が見られた。早くに崩壊が始まったのであろう。燃焼部から煙道部へ急激に立ち上がる。燃焼部には土製の支脚が正位で遺存していた。　**覆土**　主に北西側からの自然堆積である。**遺物**　1～3は覆土中、4の須恵器はフラスコ瓶である。床面よりやや浮いた状況で出土した。　**所見**　4からは7世紀代となるが、明確でない。



第145図　21号住居跡出土遺物

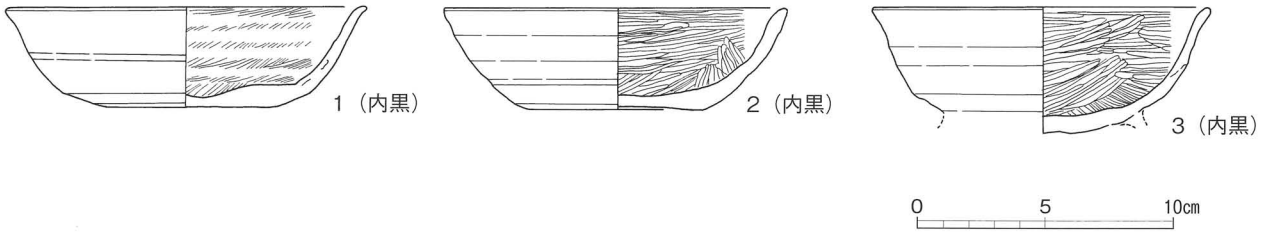
表69　21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(15.0) [3.8] –	ロクロ成形。調整不明。	白色粒、石英、チャート	良好	灰白色	口縁部片
2	土師器 甕	(16.0) [3.2] –	口縁部は短く屈曲し端部で摘み上げられる。内外ナデ主体。	白色粒、石英、角閃石	良好	にぶい橙色	口縁部片

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 甕	(16.0) [5.3] –	外胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	暗灰色	底部片
4	須恵器 長頸壺	– [12.5] –	所謂フラスコ瓶である。自然釉付着。	白色粒、黒色融出粒多量	良好	灰色	胴部片
5	土製品 支脚	手捻り成形。外部ヘラ削り。上径5.5cm、下径8.4cm、長さ15.3cm、重さ827g。		白色粒、石英多量	良好	赤褐色	完形

22号住居跡（第146・147図）

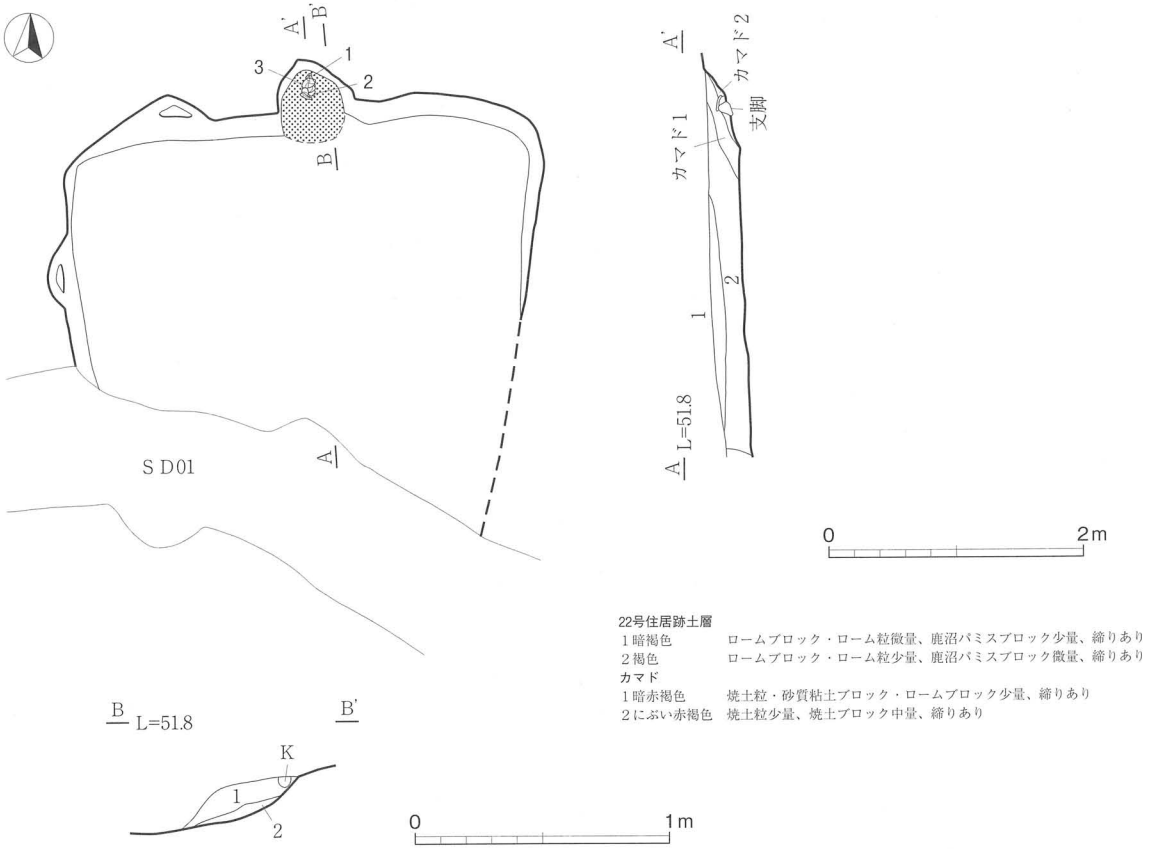
位置　C、D5グリッドにある。　**規模と平面形**　3.5×（3.15）mの方形、現状からは南側が狭い台形状であろうか。　**重複関係**　SD01が新しい。　**主軸方向**　N－0°－W。　**壁**　壁高は25cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面は明確でなかった。　**ピット**　写真にある掘り込みは撹乱である。　**カマド**　北壁中央にあり、構造物はすでに無く火床部のみ残る。燃焼部は地山を大きく掘り込み煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　崩れた土製支脚上に土師器坏（1～3）が重なっていた。煮炊き具の熱効率を調整したものであろうか。　**所見**　遺物は10世紀前後頃である。



第146図　22号住居跡出土遺物

表70　22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	17.2 4.0 6.6	体部下端～底部は回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	白色粒、石英、海綿骨針、チャート	良好	黒～黄褐色	70%
2	土師器 坏	13.5 6.7 4.0	体部下端～底部は回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	にぶい黄色	40%
3	土師器 高台付坏	(13.2) [5.0] –	体部下端～底部は回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き、黒色処理。	石英、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	口縁部片・高台部欠損



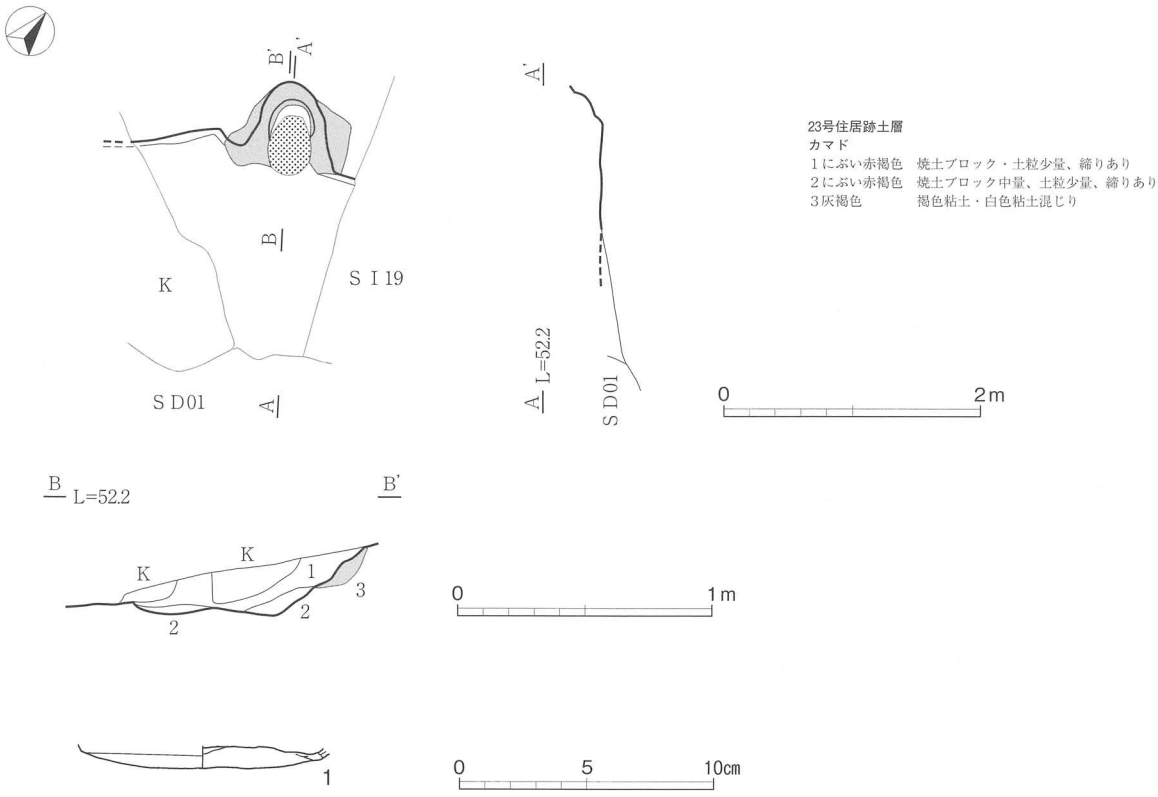
第147図　22号住居跡

23号住居跡（第148図）

位置　D5グリッドにある。　**規模と平面形**　遺構、撹乱によって遺存は悪く形状は分からない。(1.70)×(1.70) mの方形であろう。　**重複関係**　19号住、S D 01が新しい。　**主軸方向**　N－36°－W。　**壁**　壁高は30cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　遺存範囲には硬化面はない。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部から煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。袖は住居内にわずかに遺存していた。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　1の須恵器坏底部は丸みを帯び、古相が窺われる。　**所見**　遺物から8世紀前葉頃であろうか。

表71　23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	9.3 1.0 －	底部はやや丸く回転ヘラ切り。	石英、チャート	未還元軟質	浅黄色	底部片



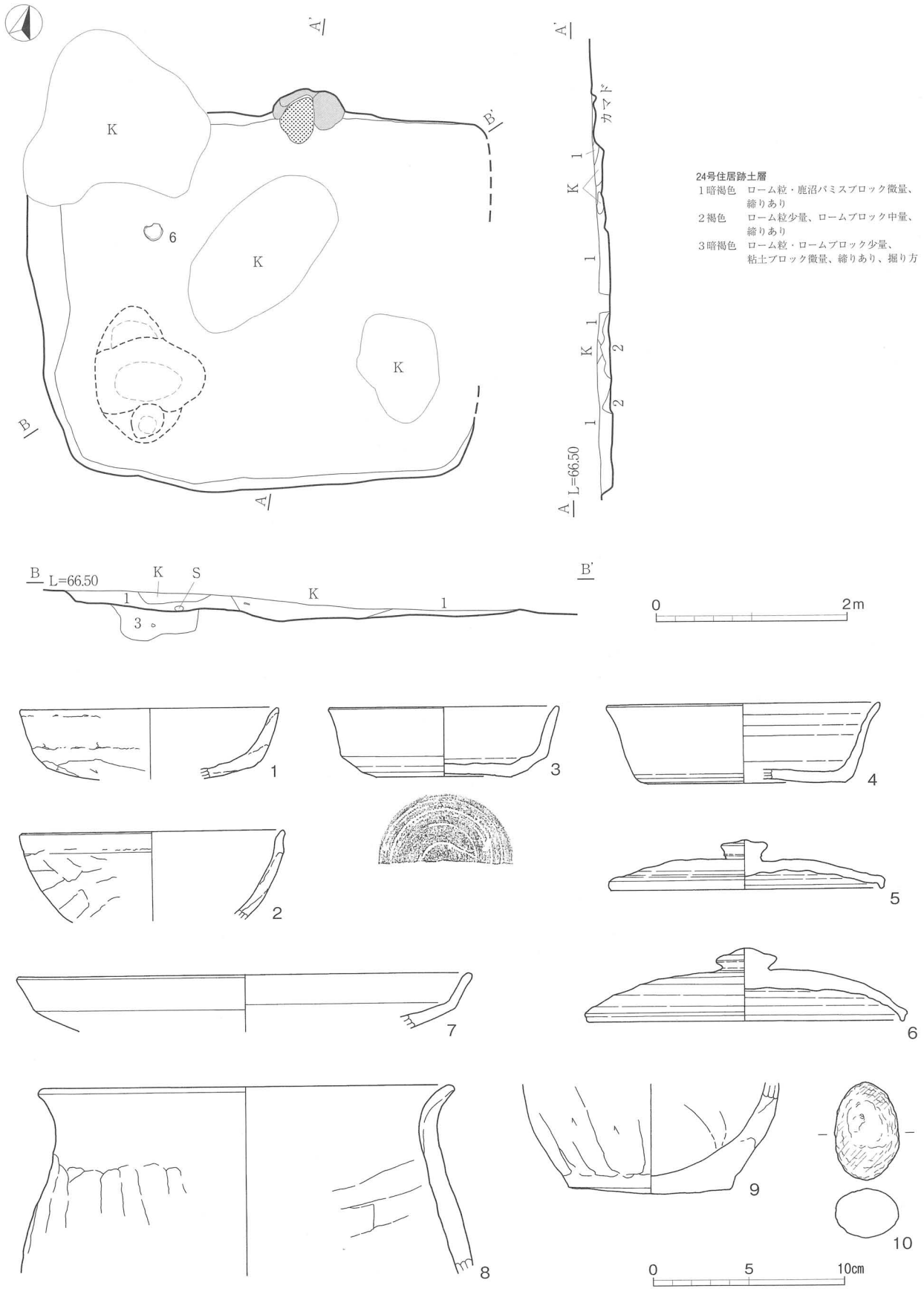
第 148 図　23 号住居跡・出土遺物

24 号住居跡（第 149 図）

位置　A、B 2 グリッドにある。　**規模と平面形**　4.50 × 3.70 mの方形、東西に長い。　**主軸方向**　N－16°－W。　**壁**　壁高は 10cm、垂直に立ち上がる。　**床**　大半が撹乱され硬化面は明確でなかった。南西隅角の掘り込みは床下（掘り方）である。ロームブロックを主体としていた。　**カマド**　北壁中央からやや東にあり、袖部から煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。現況は火床部が辛うじて残っていた。　**覆土**　自然堆積であろう。　**遺物**　1 ～ 5 は覆土中、6 の須恵器蓋（転用硯）が床着となる。　**所見**　8 世紀中葉頃である。

表 72　24 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(13.6) [3.8] －	非ロクロ坏。底部ヘラ削り。内面ナデ。	白色粒、石英	良好	にぶい橙色	口縁部片
2	土師器 坏	(14.0) [4.7] －	非ロクロ坏。体部上半～底部ヘラ削り。内面ナデ。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	浅黄色	口縁部片



第149図　24号住居跡・出土遺物

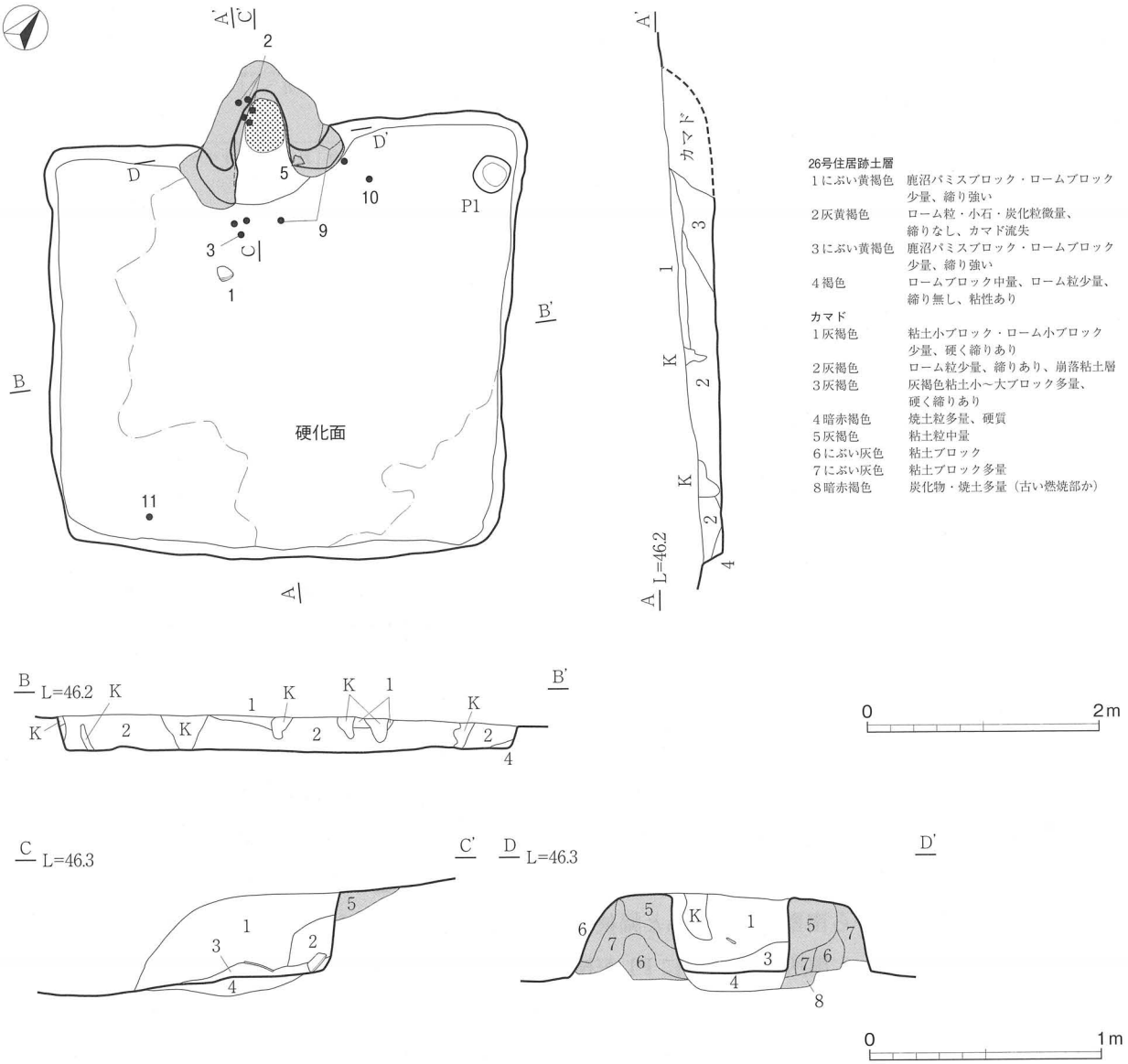
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 坏	12.0 3.7 6.8	底部はヘラ削り。	白色粒、石英、黒色融出粒	良好	オリーブ灰色	40%
4	須恵器 坏	(14.4) 4.2 (10.6)	底部はヘラ削り。	白色粒、海綿骨針	良好	オリーブ灰色	口縁部片
5	須恵器 蓋	(14.0) 2.6 −	天井部は1/2回転ヘラ削り。口縁部は端部で短く折れ曲がる。	白色粒、石英、黒色融出粒	良好	暗灰色	口縁部片
6	須恵器 蓋	16.4 4.9 −	天井部は1/2以上回転ヘラ削り。口縁部は端部で短く折れ曲がる。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	オリーブ灰色	60%
7	須恵器 盤	(24.0) [2.9] −	ロクロ成形。	白色粒、石英、海綿骨針、黒色粒	良好	灰色	口縁部片
8	土師器 甕	(22.0) [9.7] −	口縁部は内傾気味の胴部から外反する。外胴部は縦位ナデ、内面は斜位ヘラナデ。	白色粒、石英、角閃石	良好	橙色	口縁部片
9	土師器 甕	− [5.9] 8.4	外胴・底部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	にぶい橙色	底部
10	小礫	中央の一部を除き油煙付着。単体での出土であるため性格不明。長さ5.2cm、幅3.5cm、厚さ2.6cm、重さ57.5g、安山岩製。					

26号住居跡（150～152図）

位置　D6グリッドにある。　**規模と平面形**　3.80×3.50mの方形、北壁は南壁に比べ0.30m長く、そのため台形状となる。　**重複関係**　直接はないが27号住と近接している。　**主軸方向**　N−44°−W。　**壁**　壁高は26cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅335cmで硬化し、南壁まで達している。出入り口ピットは検出されなかったが、南側1/4から南壁まで155cmと幅狭くなっており、この方向が出入り口と思われる。　**ピット**　柱穴としてはないが、1箇所北東隅角にP1が検出されている。30×30cm、深さ17cmである。明確であるため記載したが性格はわからない。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部～煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ急激に立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　カマド内外主体の出土である。1～3・5は須恵器坏、9・10は土師器甕、11の須恵器甕はカマド対面の南壁に近接する。その他盤が出土した。　**所見**　9世紀前～中葉頃である。

表73　26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	14.1 4.8 6.8	底部は回転ヘラ切り。外底部線刻「—」。	白色粒、石英φ2～3mm角粒多量、チャート、海綿骨針	良好	オリーブ灰色	ほぼ完形
2	須恵器 坏	14.2 5.4 7.3	底部は回転ヘラ切り。外底部線刻「—」。	白色粒、石英φ3mm角粒多量、チャート3～4mm粒少量、海綿骨針	良好	緑灰色	ほぼ完形
3	須恵器 坏	13.8 4.7 7.1	底部は回転ヘラ切り後ヘラナデ、体部下端ヘラ削り。外底部線刻「×」ヵ。	石英、白色粒、チャート	良好	灰白色	40%

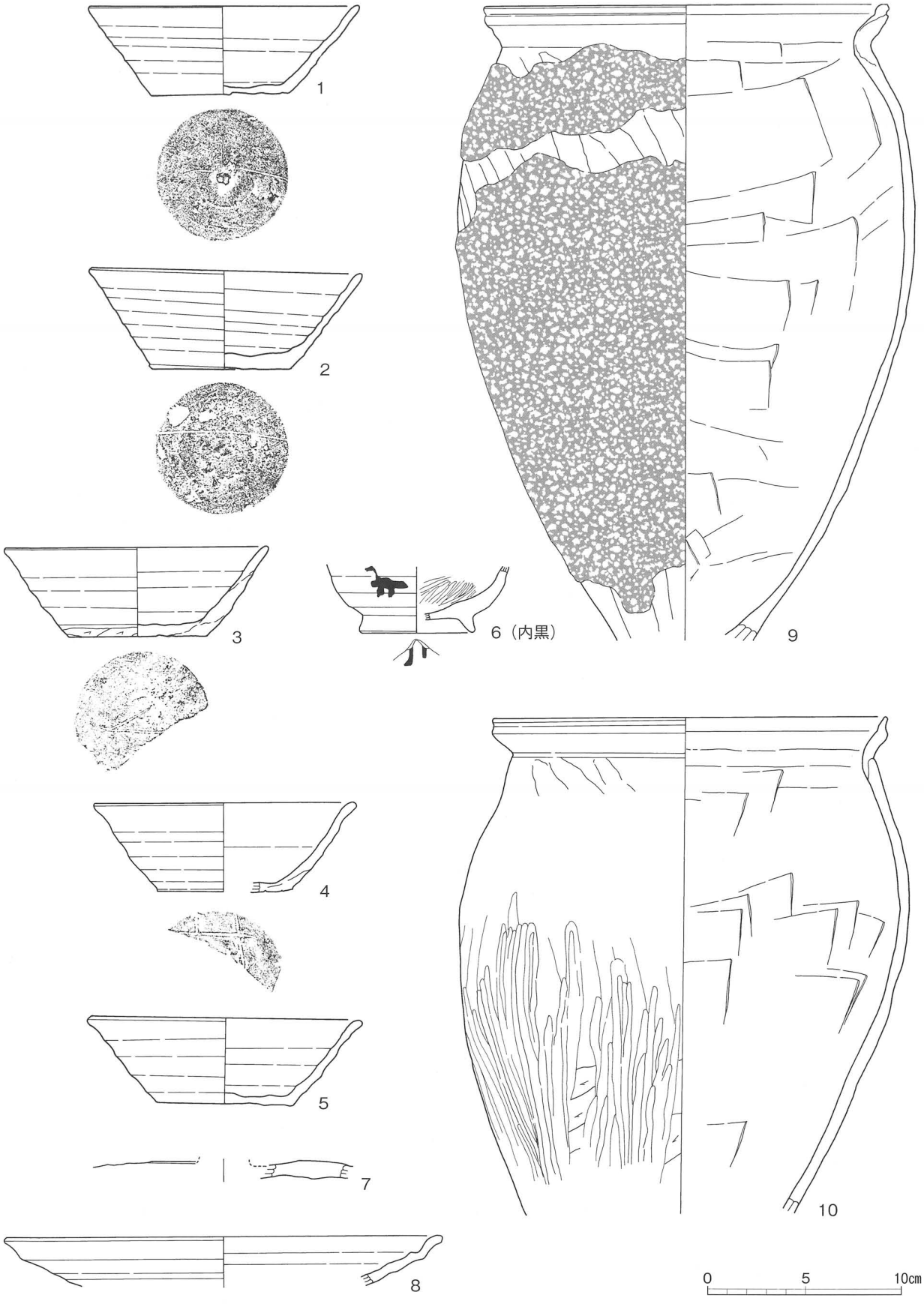


26号住居跡土層

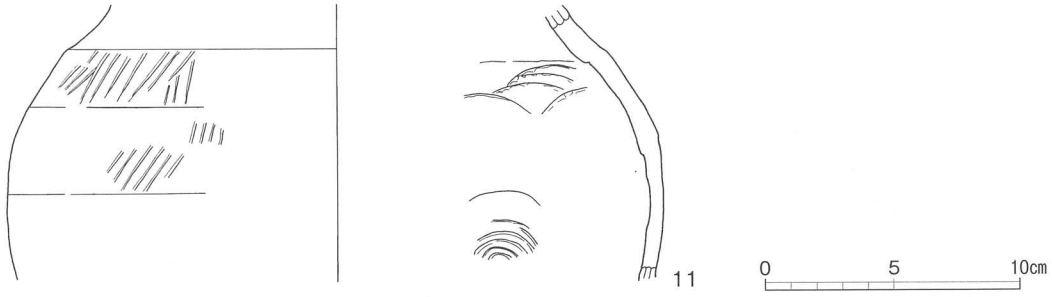
1にぶい黄褐色	鹿沼パミスブロック・ロームブロック少量、締り強い
2灰黄褐色	ローム粒・小石・炭化粒微量、締りなし、カマド流失
3にぶい黄褐色	鹿沼パミスブロック・ロームブロック少量、締り強い
4褐色	ロームブロック中量、ローム粒少量、締り無し、粘性あり
カマド	
1灰褐色	粘土小ブロック・ローム小ブロック少量、硬く締りあり
2灰褐色	ローム粒少量、締りあり、崩落粘土層
3灰褐色	灰褐色粘土小～大ブロック多量、硬く締りあり
4暗赤褐色	焼土粒多量、硬質
5灰褐色	粘土粒中量
6にぶい灰色	粘土ブロック
7にぶい灰色	粘土ブロック多量
8暗赤褐色	炭化物・焼土多量（古い燃焼部か）

第150図　26号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	須恵器 坏	(13.8) 4.6 (7.0)	底部は回転ヘラ切り後ナデ。外底部線刻「＃」ヵ。	石英、チャート	良好	灰白色	20%
5	須恵器 坏	14.4 4.5 7.0	底部は回転ヘラ切り。	石英、角閃石、チャート、海綿骨針	良好	灰白色	ほぼ完形
6	土師器 高台付坏	(6.0) [3.6] －	体部下端は回転ヘラ削り、内面はヘラ磨き・黒色処理。外体部墨書「＃」ヵと外底部「□」。	石英、チャート、海綿骨針	良好	橙色	底部片
7	須恵器 蓋	－ － －	天井部回転ヘラ削り。	石英、雲母	還元軟質	灰白色	天井部片



第151図　26号住居跡出土遺物①



第152図　26号住居跡出土遺物②

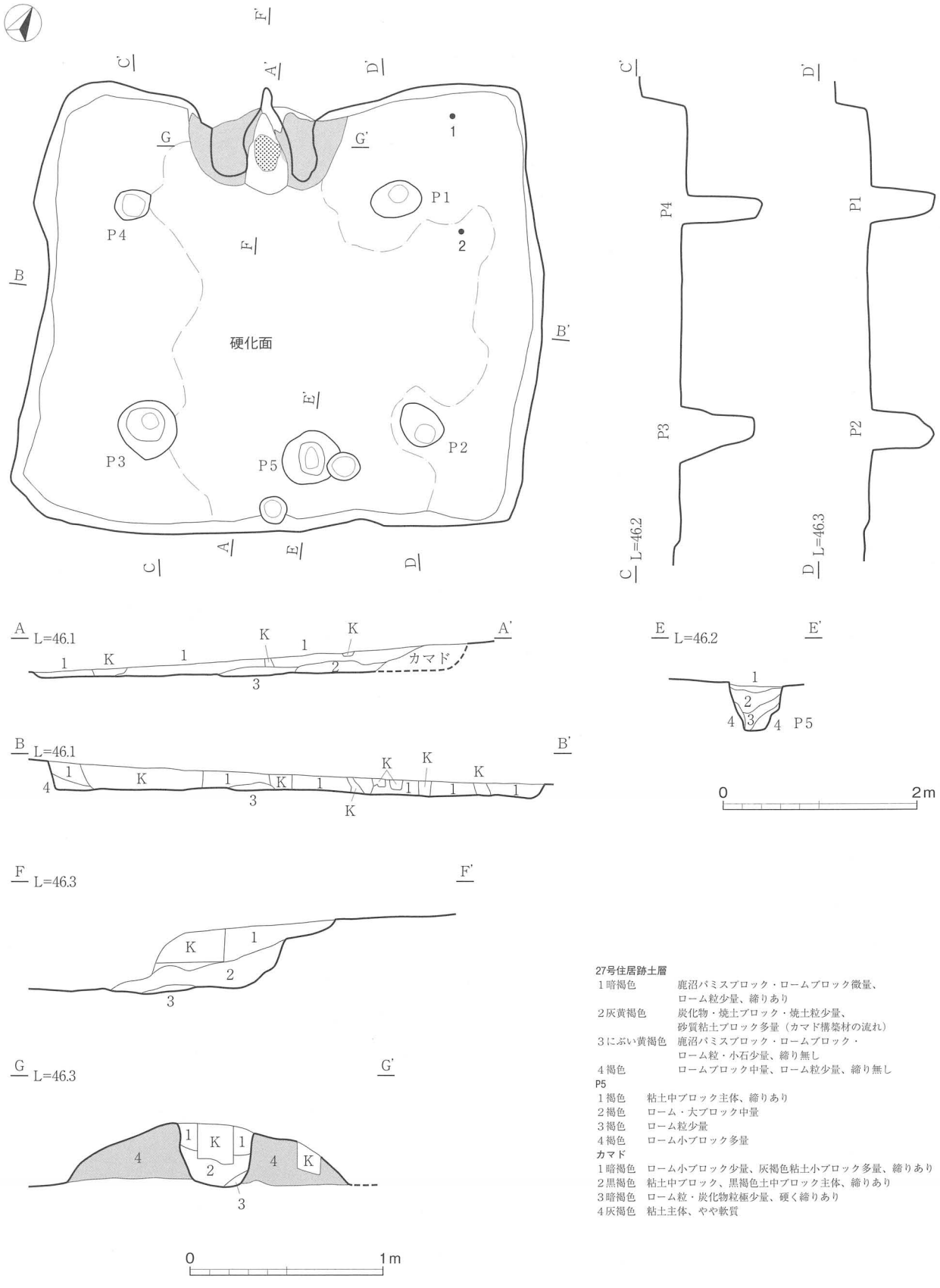
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
8	須恵器 盤	(22.8) [2.6] －	外体部下端回転ヘラ削り。	白色粒、石英、砂岩礫、海綿骨針	良好	赤灰色	口縁部片
9	土師器 甕	(21.0) [33.5] －	口縁部は外反し端部を摘み上げる。外胴部縦位ヘラ削り、内面横・斜位ヘラナデ。外胴部にカマド粘土材3/4付着。	チャート、石英、海綿骨針、雲母	良好	外：橙色 内：赤褐色	底部欠損
10	土師器 甕	20.5 [26.2] －	口縁部は外反し端部を摘み上げる。外胴部斜位ヘラ削り後ヘラ磨き、内面横・斜位ヘラナデ。	石英、チャート、雲母	良好	にぶい黄橙色	底部欠損
11	須恵器 甕	－ － －	外胴部は平行タタキ、内面同心円当て具。	石英、チャート、海綿骨針	良好	緑灰色	胴部片

27号住居跡（第153・154図）

位置　D6グリッドにある。　**規模と平面形**　4.50×4.15ｍの方形で、形が崩れた様相である。　**重複関係**　直接はないが26号住と近接している。　**主軸方向**　N－23°－W。　**壁**　壁高は48cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅170～320cmで硬化している。　**ピット**　5箇所。P1：55×35cm、深さ65cm、P2：50×40cm、深さ63cm、P3：60×62cm、深さ77cm、P4：35×30cm、深さ83cm、P5：60×55cm、深さ50cmである。P5は出入り口ピットで、土層から抜き取りと思われた。P5と重複あるいは近接したピットは当該住居より新しいものであろう。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ立ち上がり、煙道部は緩い傾斜となる。カマドは内側に位置する。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　1・2は須恵器坏、3の須恵器皿としたものは盤に形態が類似する。　**所見**　8世紀中葉頃であろうか。

表74　27号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(14.0) 3.5 (7.4)	底部は体部下端まで回転ヘラ削り。	石英、チャート	還元やや軟質	灰白色	口縁部片
2	須恵器 坏	14.5 4.7 8.1	底部は体部下端まで回転ヘラ削り。	石英、白色粒	良好	灰白色	80%



27号住居跡土層

1暗褐色	鹿沼パミスブロック・ロームブロック微量、ローム粒少量、締りあり
2灰黄褐色	炭化物・焼土ブロック・焼土粒少量、砂質粘土ブロック多量（カマド構築材の流れ）
3にぶい黄褐色	鹿沼パミスブロック・ロームブロック・ローム粒・小石少量、締り無し
4褐色	ロームブロック中量、ローム粒少量、締り無し

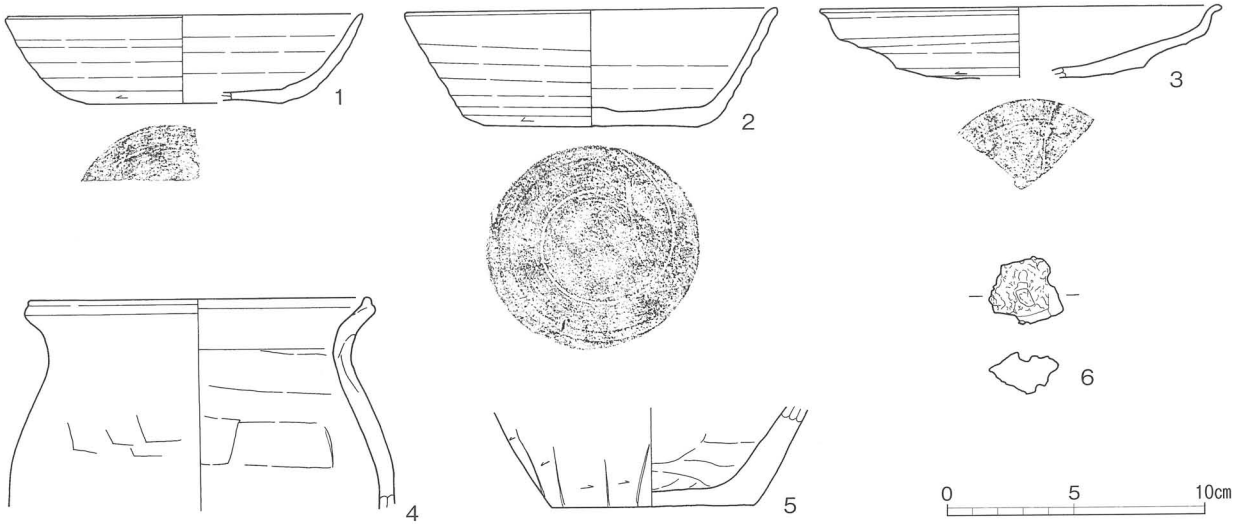
P5

1褐色	粘土中ブロック主体、締りあり
2褐色	ローム・大ブロック中量
3褐色	ローム粒少量
4褐色	ローム小ブロック多量

カマド

1暗褐色	ローム小ブロック少量、灰褐色粘土小ブロック多量、締りあり
2黒褐色	粘土中ブロック、黒褐色土中ブロック主体、締りあり
3暗褐色	ローム粒・炭化物粒極少量、硬く締りあり
4灰褐色	粘土主体、やや軟質

第153図　27号住居跡



第154図　27号住居跡出土遺物

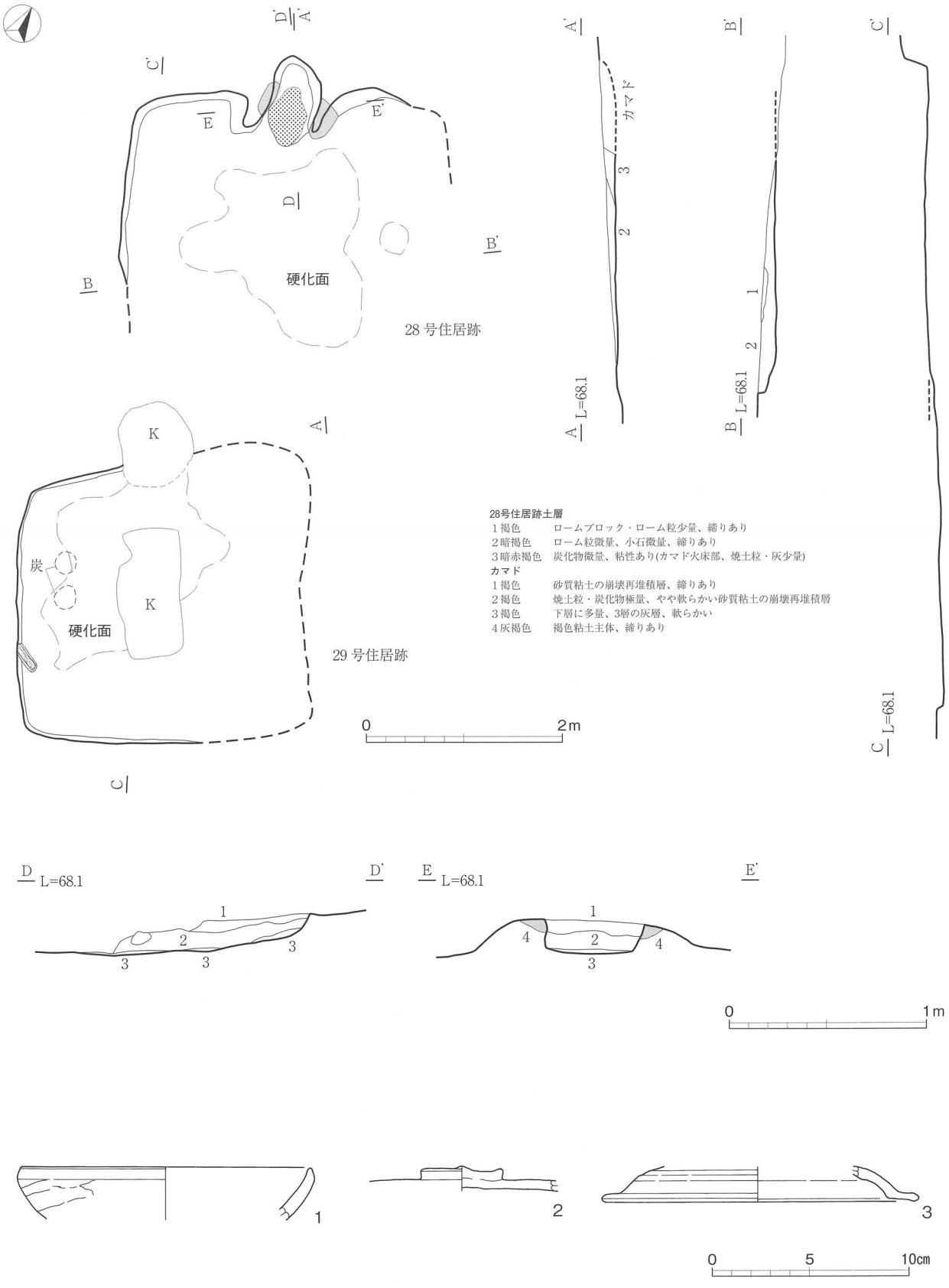
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須恵器 皿	(15.6) [3.2] －	口縁部は盤状に段を有し、端部で短く外反する。底部は体部下端まで回転ヘラ削り。	石英、白色粒、砂礫（5×4mm）	良好	灰白色	25%
4	土師器 甕	(13.6) [8.3] －	口縁部は外反し端部で摘み上げる。内外ナデ。	石英、白色粒	良好	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	口縁部片
5	土師器 甕	－ [3.9] 7.8	外胴部は横位ヘラ削り、内面は指ナデ。外底部は木葉痕。	石英、角閃石、白色粒、チャート	良好	にぶい黄橙色	底部
6	鉄滓	炭化物の付着は見られない。長さ2.9cm、幅2.7cm、厚さ1.5cm、重さ13g。					

28号住居跡（第155・156図）

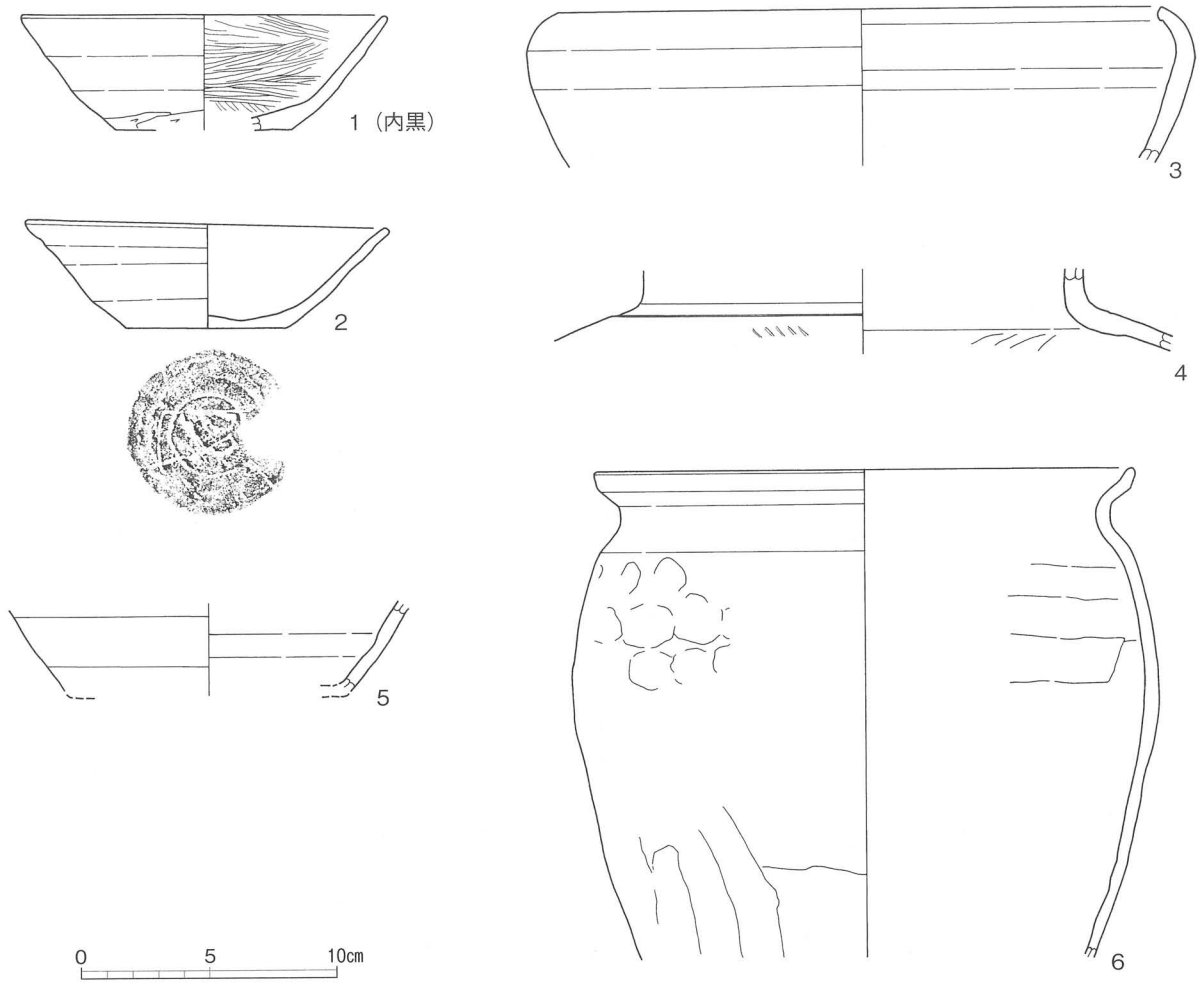
位置　A、B2グリッドにある。　**規模と平面形**　大半は削平され数値は残である。(3.30)×(2.20)mの方形である。　**重複関係**　29号住が古い。　**主軸方向**　N－30°－W。　**壁**　壁高は10cmである。　**床**　幅170cmで硬化している。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　全て覆土中の遺物であるが床面より10cmにあり、共伴遺物とした。　**所見**　9世紀後半代。

29号住居跡（第155図）

位置　B2グリッドにある。　**規模と平面形**　2.80×(2.20)mの方形で、東側半分は削平されていた。遺存部から台形状に復元されよう。　**重複関係**　28号住が新しい。　**主軸方向**　N－34°－W。　**壁**　壁高は10cmである。　**床**　幅120cmで硬化しているが東側は削平されたものと思われる。　**カマド**　撹乱により検出されてない。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　2・3の須恵器蓋は新治産である。　**所見**　遺物年代は8世紀前葉である。



第 155 図　28・29 号住居跡・29 号住居跡出土遺物



第156図　28号住居跡出土遺物

表75　28号住居跡出土遺物観察表

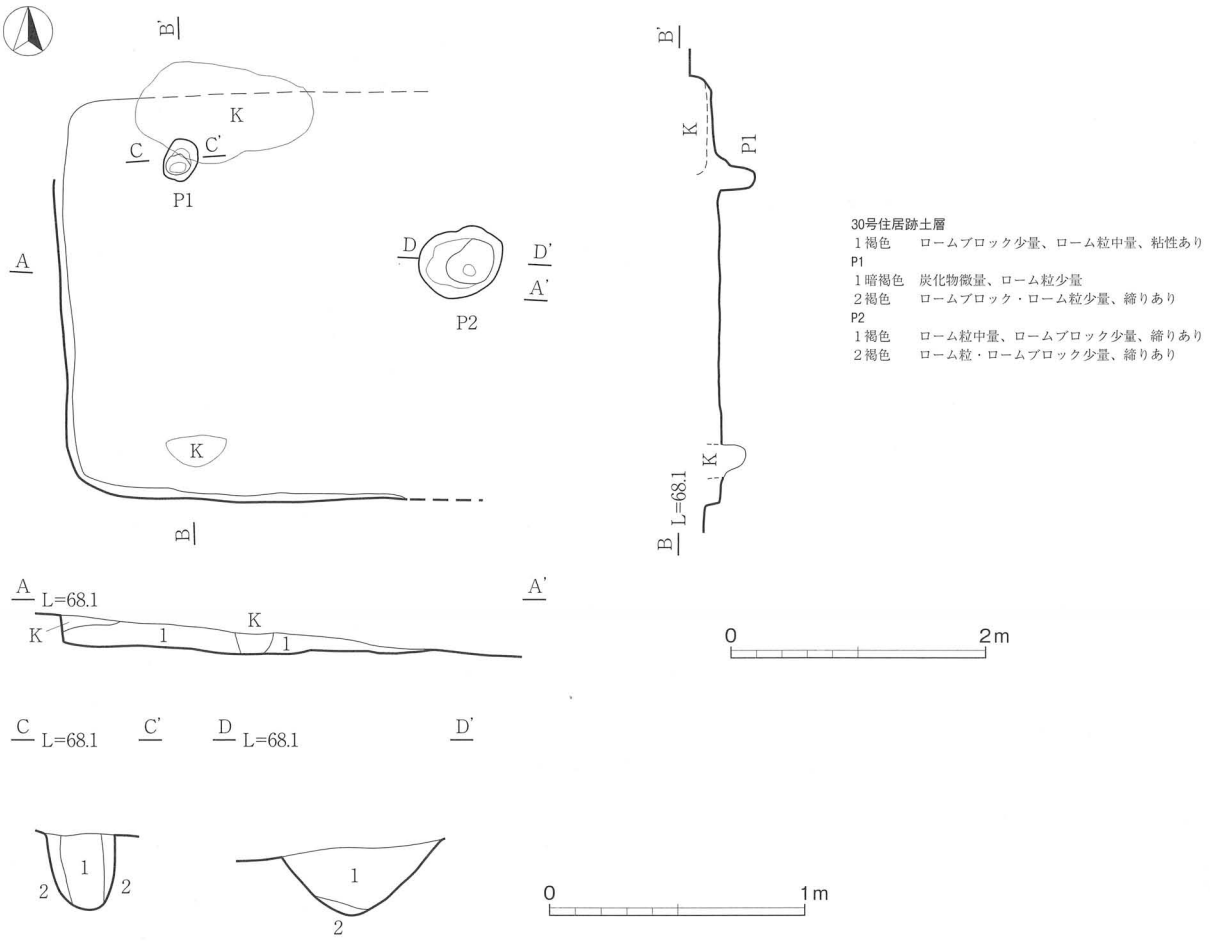
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	14.4 4.5 (6.8)	底部は回転ヘラ削り、体部下端ヘラ削り。内面ヘラ磨き・黒色処理。	φ 8mm角粒、石英、白色粒	良好	明黄褐色	30%
2	須恵器 坏	14.2 4.3 6.2	底部は回転ヘラ切り。線刻「コ」ヵ	石英、白色粒、海綿骨針	良好	オリーブ灰色	80%
3	須恵器 鉢	(23.4) [6.1] －	ロクロ成形。口縁部は内湾し端部で面をなす。所謂鉄鉢型である。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	灰色	口縁部片
4	須恵器 短頸壺	－ － －	頸部と胴部の接点にわずかに平行タタキがみられる。	白色、黒色融出粒	良好	黄灰色	頸部片
5	灰釉陶器 瓶	－ [4.0] (10.8)	体部下端回転ヘラ削り。	白色粒、石英（赤みを帯びる）	良好	灰オリーブ色	体～底部片
6	土師器 甕	(21.2) [19.2] －	口縁部は外反し端部を摘み上げる。外胴部下位縦位ヘラ削り、上位指圧。内面横位ヘラナデ。	白色、石英粒	良好	橙色	口縁～胴部片

表76　29号住居跡出土遺物観察表

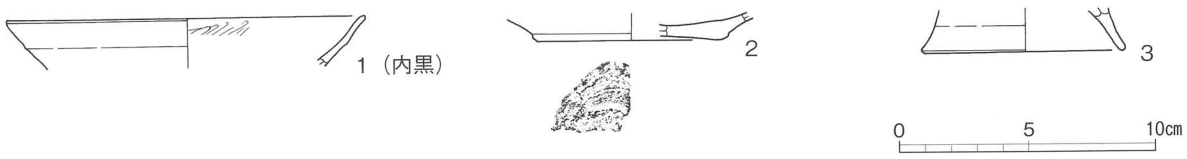
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	13.0 － －	非ロクロ坏。外体部はヘラ削り。	石英	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
2	須恵器 蓋	－ [1.3] －	天井部は回転ヘラ削り。鈕は扁平。	白色粒、石英、雲母	未還元軟質	にぶい黄橙色	天井部片 新治産
3	須恵器 蓋	(16.2) [1.8] －	天井部は回転ヘラ削り。口縁端部はかえりを有する。	白色粒、石英	還元軟質	灰色	口縁部片 新治産

30号住居跡（第157・158図）

位置　B3グリッドにある。　**規模と平面形**　3.00×（2.20）mの方形であろう。　**主軸方向**　N－0°－W。　**壁**　壁高は20cm、垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面は検出されていない。　**ピット**　2箇所。P1：35×25cm、深さ60cmである。土層からは柱痕が確認され立ち腐れと思われる。南西隅に撹乱された穴がありP1と対面することからピット（撹乱との重複）の可能性が生じている。P2：65×55cm、深さ50cmである。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　土師器のみで構成される。　**所見**　10世紀後葉頃である。



第157図　30号住居跡



第158図　30号住居跡出土遺物

表77　30号住居跡出土遺物観察表

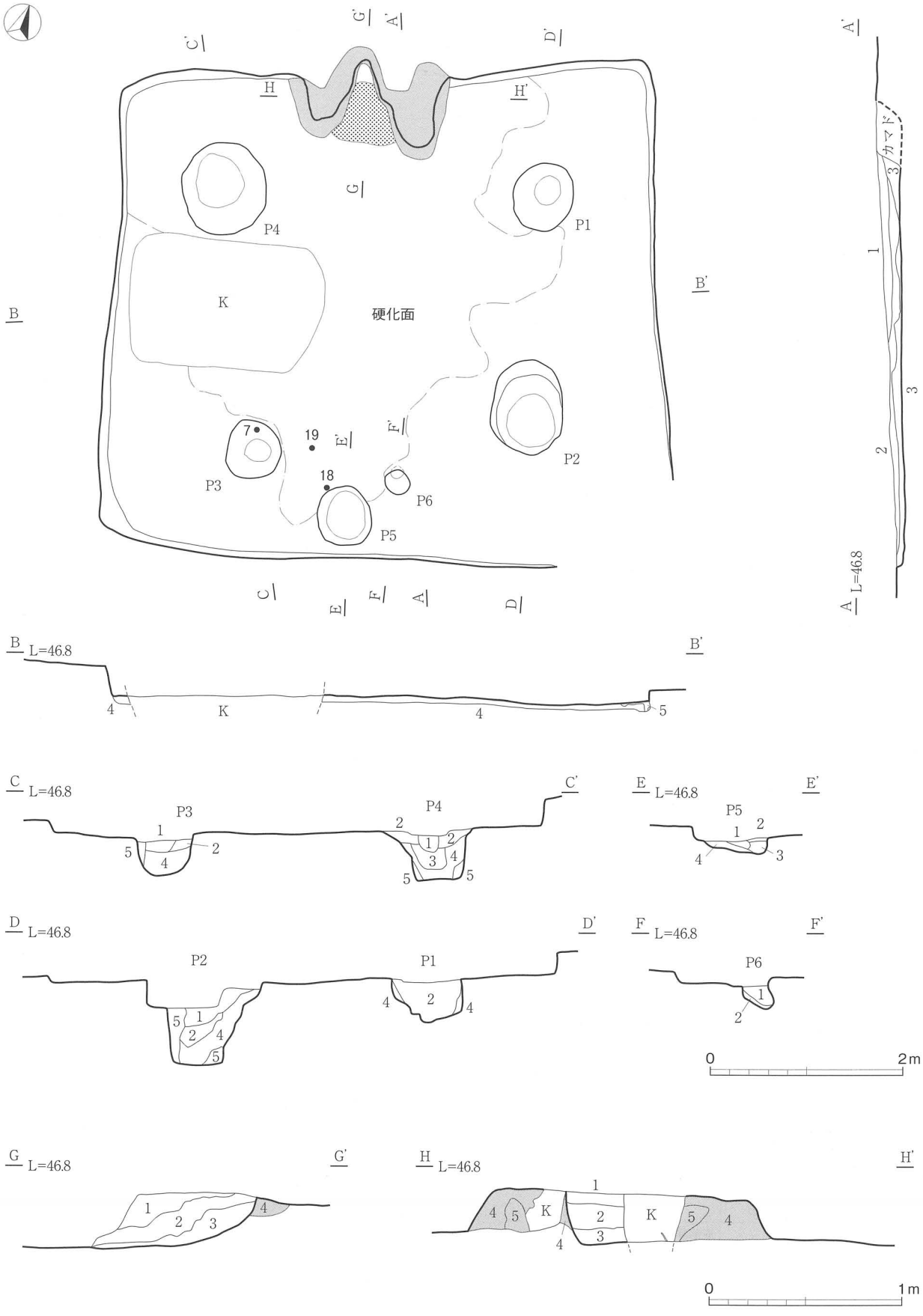
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(14.0) [2.0] －	内口縁～体部はヘラ磨き・黒色処理。	白色粒、石英粒	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
2	土師器 坏	－ － 7.2	底部は回転糸切り。	石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色	底部
3	土師器 埦	－ [1.7] (8.0)	高台部はやや高足。	石英、白色粒	良好	浅黄色	高台部片

31号住居跡①（第159・161図）

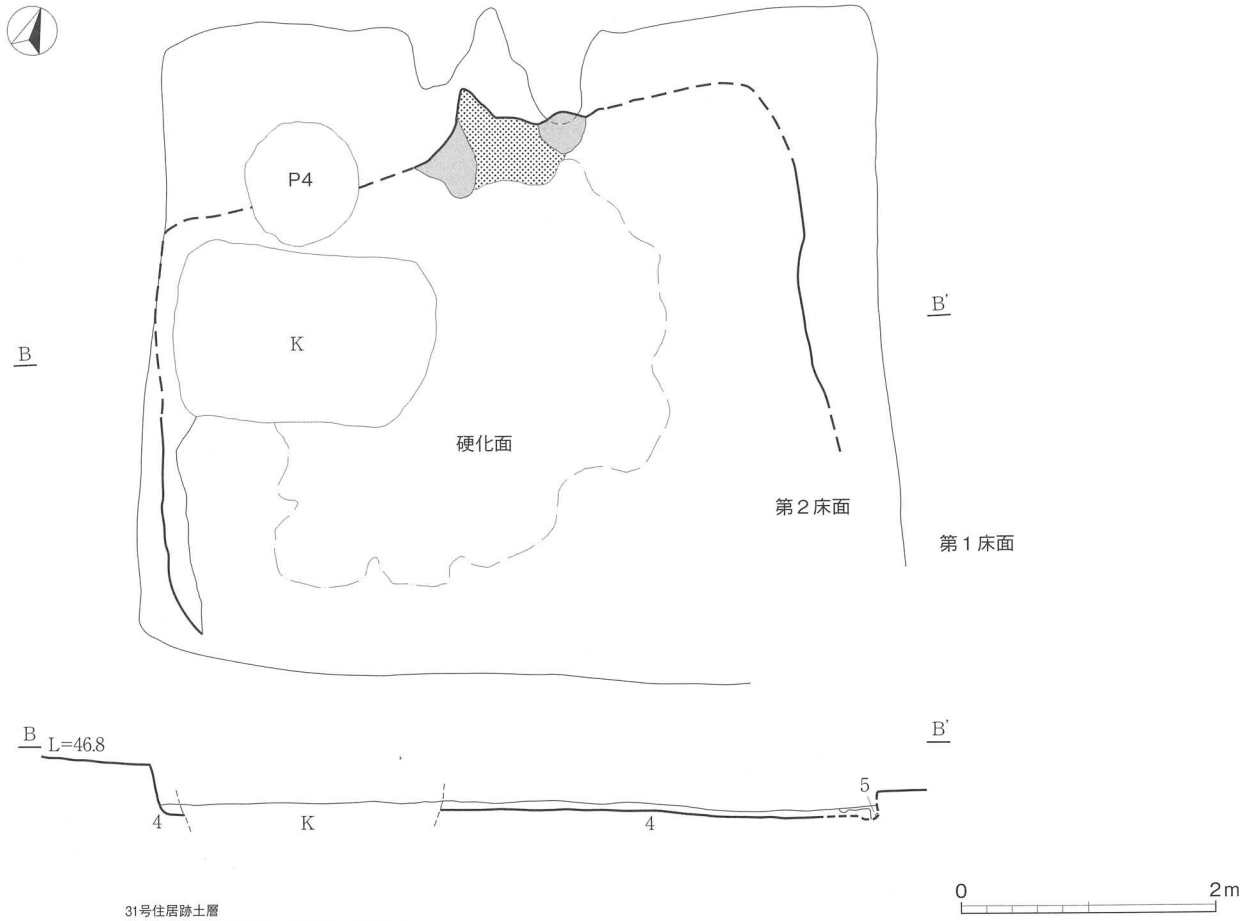
位置　D6グリッドにある。　**規模と平面形**　5.60×5.50ｍの方形で、北壁に比べて南壁が長い台形状となる。　**重複関係**　43号住が新しい。　**主軸方向**　N－12°－W。　**壁**　壁高は30cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅350cmで硬化し、P5、6に連続していた。範囲は北壁、北西隅から南壁に達する。　**ピット**　6箇所。P1：72×63cm、深さ40cm、P2：100×75cm、深さ90cm、P3：60×55cm、深さ45cm、P4：95×85cm、深さ55cm、P5：65×55cm、深さ20cmで、底部はやや南に傾斜し、1、3層は出入り口に関わる梯子の痕跡であろう。P6：25×25cm、深さ35cmで断面は南壁に向かって斜めとなる。　**カマド**　北壁中央やや西側にあり、袖部～煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。カマド右袖はやや幅広く造り替えの可能性がある。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　人為堆積か。　**遺物**　供膳具は須恵器で占めるが、新たに土師器坏（糸切り）・灰釉陶器が供伴する。　**所見**　9世紀中～後葉頃である。

31号住居跡②（第160図）

位置　D6グリッドにある。31号住の床面下5cmに床面が検出された。精査の結果、31号住①と方向が異なるカマドを伴った住居（31号住居跡②）が検出された。　**規模と平面形**　4.85×（3.20）ｍの東西に長い方形である。　**主軸方向**　N－35°－W。　**壁**　壁高は10cm。　**床**　幅190cmでやや西側を主体に硬化している。　**カマド**　北壁ほぼ中央にあり、大半は痕跡をとどめるのみである。両袖部は粘土、火床部は焼土化の範囲で形状が確認できた。　**遺物**　出土していない。　**所見**　31号住①、②は壁面併行ではないが、①、②の東壁が同じ位置にある事、①の範囲より逸脱しない事から建て替えと思われる。



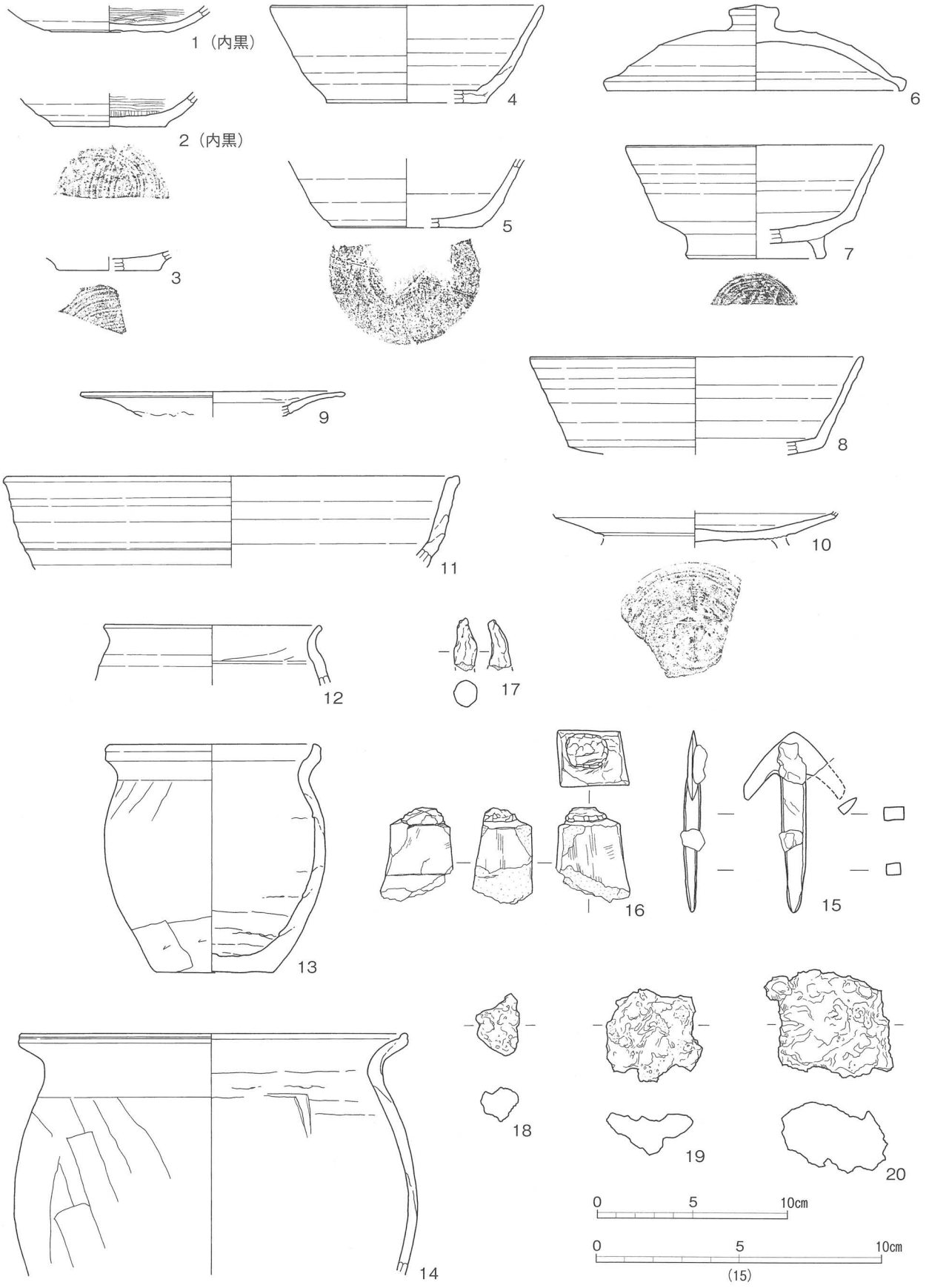
第159図　31号住居跡①



第160図　31号住居跡②

表78　31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	－ [1.4] (6.0)	底部は回転ヘラ切り。内面はヘラ磨き・黒色処理。	白色微砂粒多量、海綿骨針	良好	外：浅黄色 内：黒色	底部片
2	土師器 坏	－ [1.7] (6.0)	底部静止糸切り。内面はヘラ磨き・黒色処理。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	外：にぶい黄色 内：黒色	底部片
3	土師器 坏	－ [1.0] (5.4)	底部は回転糸切り。内面はヘラ磨き。	白色粒	良好	にぶい黄橙色	底部片

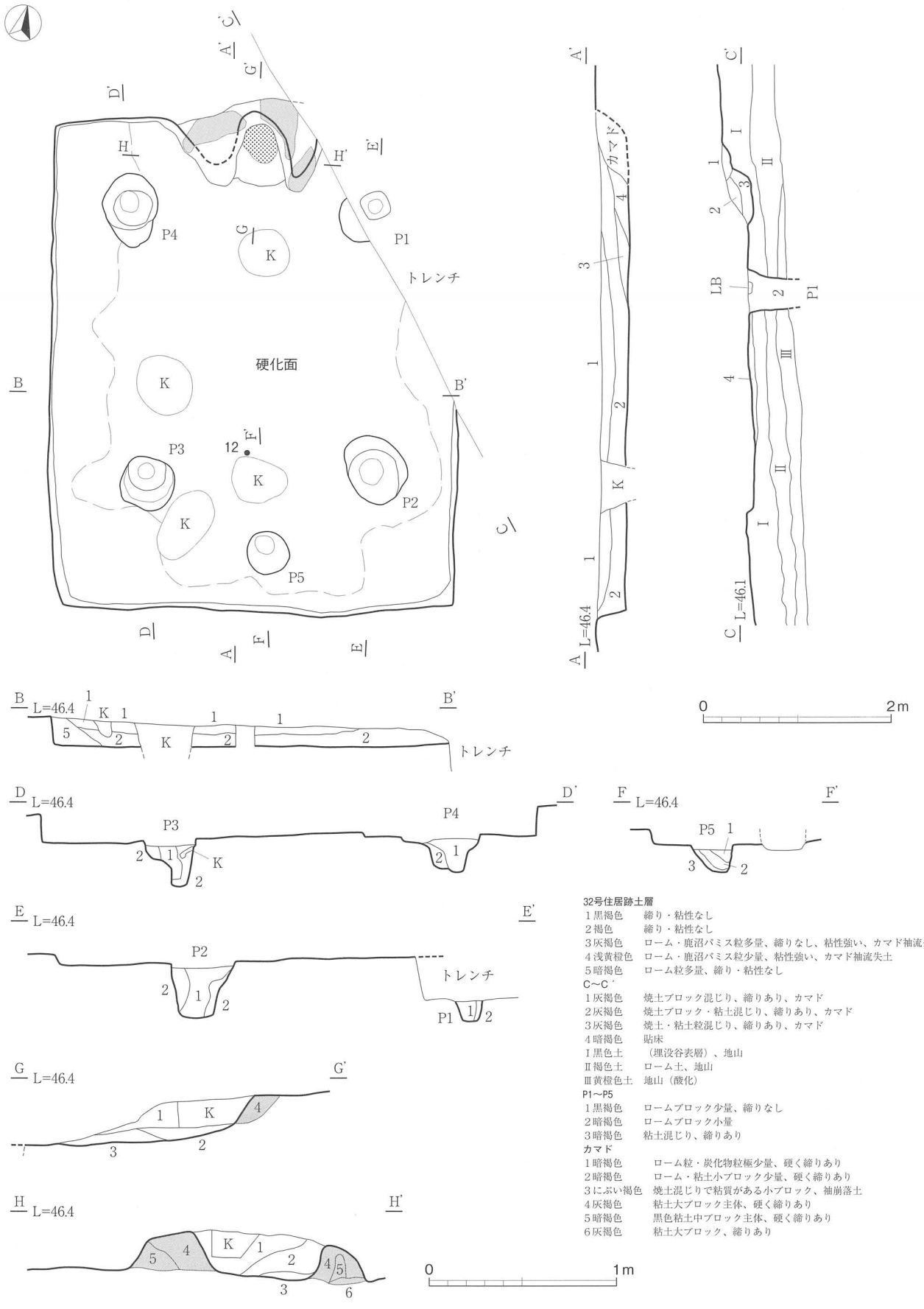


第161図　31号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	須恵器 坏	(14.4) (5.2) (8.4)	底部は回転ヘラ切り。	白色粒、石英、海綿骨針、チャート	良好	灰黄色	口縁～体部片
5	須恵器 坏	– [3.7] 8.0	底部は回転ヘラ切り。外底部線刻「—」	白色粒、石英、海綿骨針	良好	灰色	50%
6	須恵器 蓋	16.0 4.5 –	天井部1/2回転ヘラ削り。鈕は宝珠。口縁端部は屈折する。重ね焼き痕有り。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	外：灰色 内：黄灰色	45%
7	須恵器 高台付坏	(13.6) [6.1] (7.0)	底部回転ヘラ削り。外底部線刻「二」カ。	白色粒、石英、チャート、海綿骨針	良好	灰色	50%
8	須恵器 高台付坏	(17.4) [5.2] –	高台欠損。	石英、チャート、海綿骨針	良好	外：灰黄褐色 内：黄灰色	口縁～体部片
9	須恵器 灰釉皿	(14.0) (1.3) –	所謂段皿である。内体部に浅い段が付く。釉はハケ塗り。	白色粒	良好	灰黄色	口縁部片
10	須恵器 盤	(15.0) [1.5] –	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。線刻「十」	石英、チャート、海綿骨針	良好	灰褐色、にぶい褐色	底部片
11	須恵器 鉢	(24.0) (4.9) –	口縁部は外傾し、端部は面をなす。鉄鉢型であろうか。	白色粒、石英	良好	灰黄色	口縁部片
12	土師器 小型甕	(11.4) [3.0] –	ロクロ土師器。口縁部は外反する。	白色粒、細かな雲母多量	酸化やや軟質	にぶい橙色	口縁部片
13	土師器 小型甕	(11.4) 12.1 6.2	口縁部は外反し端部を摘み上げる。内・外胴部は被熱により剥離激しい、下端はヘラ削り。	石英、白色粒	良好	外：明褐色 内：灰黄褐色	60%
14	土師器 甕	(20.6) [12.8] –	口縁部は外反し端部を摘み上げる。外胴部は縦位ヘラ削り後ナデ、内面は横位ヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	良好	にぶい黄橙色	口縁～胴部片
15	鉄製品 鉄鏃	飛燕鏃。長さ6.5cm、幅3.0cm、厚さ0.5cm、重さ8.3g。					
16	石製品 砥石	本体を四角柱に、頂部の突起状の摘みを成形する。四面使用。 長さ5.0cm、幅3.8cm、厚さ3.0cm、重さ79.1g、凝灰岩製。					
17	土製品 ミニチュア土器	ミニチュア土器（甑）の把手か。長2.7cm、幅1.2cm、厚1.1cm、		雲母、石英	良好	明黄褐色	把手部
18	鉄滓	長さ3.3cm、幅2.4cm、厚さ1.8cm、重さ11.7g。					
19	鉄滓	碗型滓。長さ5.2cm、幅4.9cm、厚さ2.2cm、重さ52.8g。					
20	鉄滓	碗型滓。部分的に炭化物付着。長さ5.7cm、幅6.8cm、厚さ3.8cm、重さ161.6g。					

32号住居跡（第162・163図）

位置　C、D6グリッドにある。　**規模と平面形**　5.05×4.15ｍの方形で南北に長い。隅角は鋭角的でほぼ直角である。　**主軸方向**　N－16°－W。　**壁**　壁高は30cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅300cmで硬化している。範囲の始点はカマド前庭部からではなく、北壁からで主柱穴内にとどまらずP2、3の東、西壁側にまで及びP5を超えてほぼ南壁まで達し、地山上に直接貼り床（4層）がなされていた。　**ピット**　5箇所。P1：48×（60）cm、深さ70 cm、P2：75×60cm、深さ60cm、P3：55×50cm、深さ50cm、P4：80×60cm、深さ45cm、P5：45×43cm、深さ30cmである。P5は出入り口ピットである。柱穴の深さはP1、2側が深く、



32号住居跡土層
1黒褐色　締り・粘性なし
2褐色　締り・粘性なし
3灰褐色　ローム・鹿沼パミス粒多量、締りなし、粘性強い、カマド袖流失土
4浅黄橙色　ローム・鹿沼パミス粒少量、粘性強い、カマド袖流失土
5暗褐色　ローム粒多量、締り・粘性なし

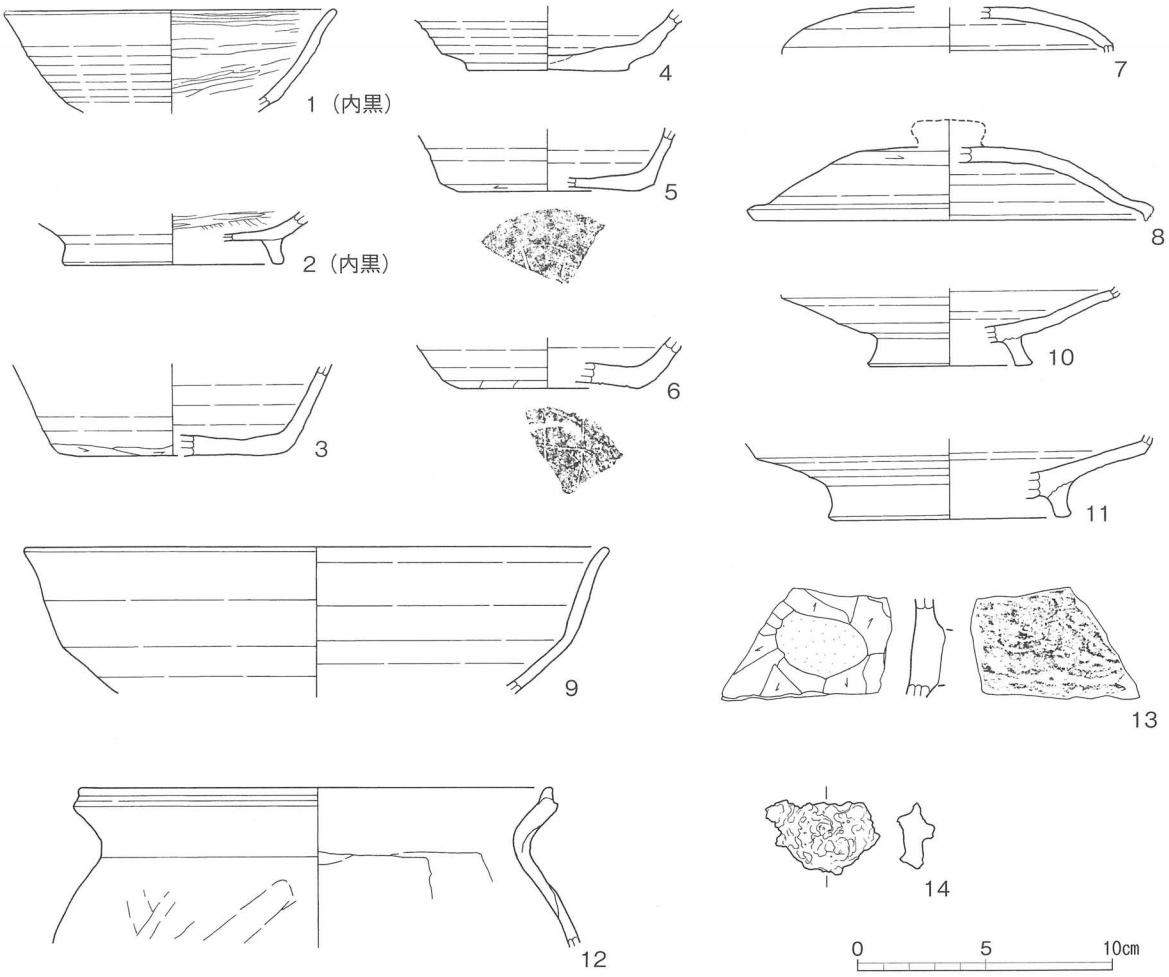
C～C'
1灰褐色　焼土ブロック混じり、締りあり、カマド
2灰褐色　焼土ブロック・粘土混じり、締りあり、カマド
3灰褐色　焼土・粘土粒混じり、締りあり、カマド
4暗褐色　貼床
Ⅰ黒色土　（埋没谷表層）、地山
Ⅱ褐色土　ローム土、地山
Ⅲ黄橙色土　地山（酸化）

P1～P5
1黒褐色　ロームブロック少量、締りなし
2暗褐色　ロームブロック小量
3暗褐色　粘土混じり、締りあり

カマド
1暗褐色　ローム粒・炭化物粒極少量、硬く締りあり
2暗褐色　ローム・粘土小ブロック少量、硬く締りあり
3にぶい褐色　焼土混じりで粘質がある小ブロック、袖崩落土
4灰褐色　粘土大ブロック主体、硬く締りあり
5暗褐色　黒色粘土中ブロック主体、硬く締りあり
6灰褐色　粘土大ブロック、締りあり

第162図　32号住居跡

P3、4側が浅い。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部～煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　須恵器供膳具が多いなか土師器供膳具も散見される構成である。床着は12のみである。　**所見**　遺構からは8世紀末であるが遺物年代はかなり混ざっている。8世紀末頃とした。



第163図　32号住居跡出土遺物

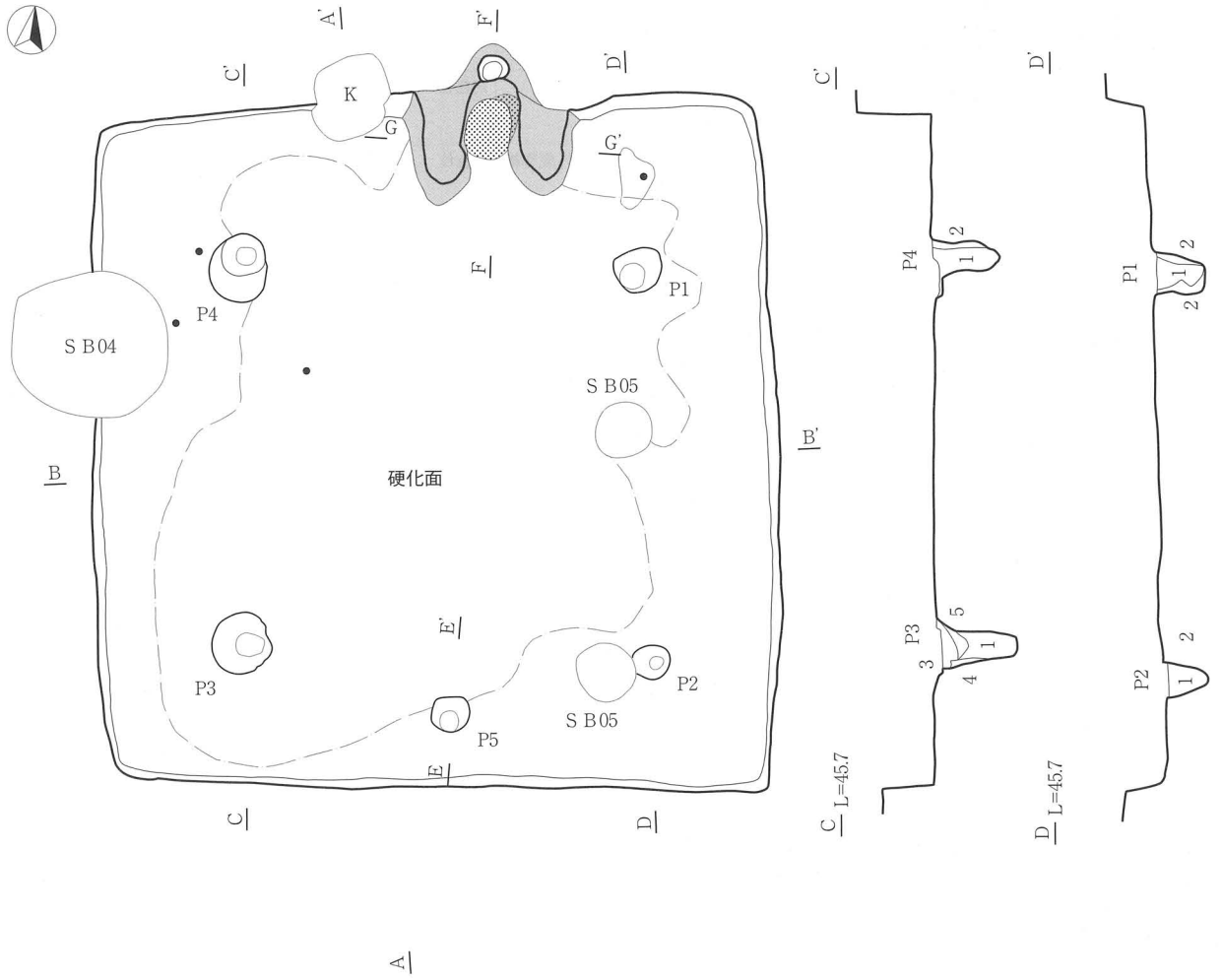
表79　32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(13.0) [4.0] –	ロクロ成形。内面ヘラ磨き・黒色処理。	石英、海綿骨針	良好	浅黄橙色	口縁部片
2	土師器 高台付坏	– [2.1] (8.7)	ロクロ成形。内面ヘラ磨き・黒色処理。	海綿骨針、石英、砂礫（φ3㎜）	良好	橙色	高台部片
3	須恵器 坏	– [3.6] (8.9)	底部は回転ヘラ切り後、体部下端～底部ヘラ削り。	石英、海綿骨針	良好	灰色	底部片

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	須恵器 坏	－ [2.5] 6.5	底部は回転ヘラ切り後ナデ。	白色粒、海綿骨針	良好	灰色	50%
5	須恵器 坏	－ [2.5] (7.0)	底部は体部下端～底部回転ヘラ削り。右回転。外底部線刻「一」。	白色粒	良好	灰色	底部片
6	須恵器 坏	－ [2.0] (7.0)	底部は体部下端ヘラ削り、底部回転ヘラ削り。右回転。外底部線刻「一」。	海綿骨針、白色粒	良好	灰色	底部片
7	須恵器 短頸壺蓋	－ [1.8] (13.0)	天井部はややドーム状となる。1/2回転ヘラ削り。自然釉多量、重ね焼き痕。	海綿骨針、白色粒	良好	灰色	25%
8	須恵器 蓋	－ [2.9] 16.0	天井部は1/3回転ヘラ削り。口縁端部は屈折して断面三角状をなす。	海綿骨針、白色粒、砂礫（φ3mm）	良好	灰色	50%
9	須恵器 高台付坏	(23.0) [5.8] －	ロクロ成形。大振りの高台付坏。	黒色粒	良好	灰白色	口縁部片
10	須恵器 盤	－ [3.1] (6.4)	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け。	白色粒、海綿骨針	良好	灰色	底部片
11	須恵器 盤	－ [3.2] (9.6)	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け。	海綿骨針、砂礫（5×2mm）、白色粒	良好	灰色、黄灰色	底部片
12	土師器 甕	(19.0) [6.4] －	口縁部は外反し端部を摘み上げる。内外ヘラナデ。	石英、白色粒	良好	橙色	口縁部片
13	須恵器 甑	－ － －	貼り付け把手。周囲は放射状のナデ付け。内面同心円当て具。	白色粒、石英	良好	灰黄色	把手部
14	鉄滓	わずかながら粒状滓。長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ1.5cm、重さ18.2g。					

33号住居跡（第164～166図）

位置　調査区の中央寄り、D6グリッドにある。　**規模と平面形**　5.50×5.20mの方形、東壁が若干長く台形状をなす。　**重複関係**　SB04・05が新しい。　**主軸方向**　N－7°－W。　**壁**　壁高は60cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅320cmで硬化している。　**ピット**　5箇所。P1：30×30cm、深さ47cm、P2：29×27cm、深さ30cm、P3：45×40cm、深さ64cm、P4：33×25cm、深さ55cm、P5：30×28cm、深さ26cmである。P5は出入り口ピットである。　**カマド**　北壁中央やや東側にあり、袖部～煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ急に立ち上がる。煙道部には直径15cmの煙出しが遺存し、内部は被熱されていた。カマド4層内の小ピットは支脚座であろう。4層は袖粘土（5・6層）下で焼土粒を含み床下に潜ることから古いカマドに由来する層であろう。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　カマドからやや離れた位置に散見された。供膳具は1・2の土師器非ロクロ坏、3・4須恵器坏、煮沸具は5の土師器甕である。特異な遺物は8の鞴羽口と9･10の鉄滓であるが覆土中の遺物である。33号住周辺に鍛冶炉は検出されてない。**所見**　遺構・遺物から8世紀前葉頃とした。

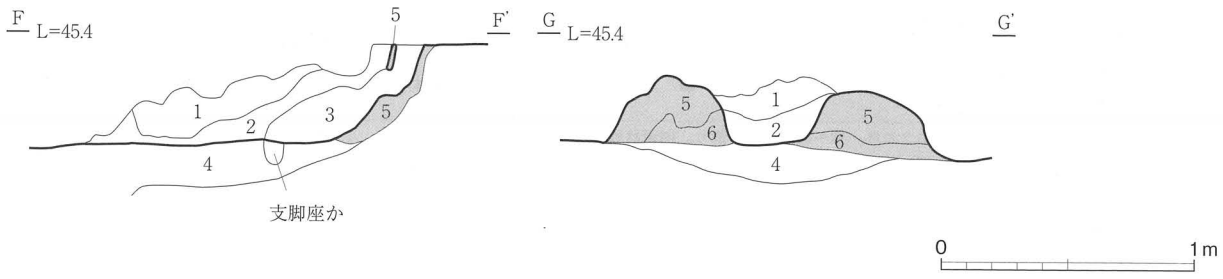


33号住居跡土層
1暗褐色　ローム粒少量、締りあり、粘性なし
2暗褐色　ローム粒多量、ローム小ブロック少量、締りあり、粘性なし
3暗褐色　黒色粘土ブロック・鹿沼パミス少量、締りあり、粘性なし
4暗褐色　黒色粘土ブロック・鹿沼パミス粒少量、締りあり、粘性なし
5黒褐色　鹿沼パミス小粒・焼土粒多量、締りあり、粘性なし

P1～P4
1暗褐色　締りなし、柱痕
2暗褐色　ロームブロック多量、締りあり、粘性なし
3黒褐色　ローム粒多量、締りあり、粘性なし
4褐色　ローム小ブロック多量、締りあり
5褐色　ロームブロック粒多量、締りあり、粘性なし

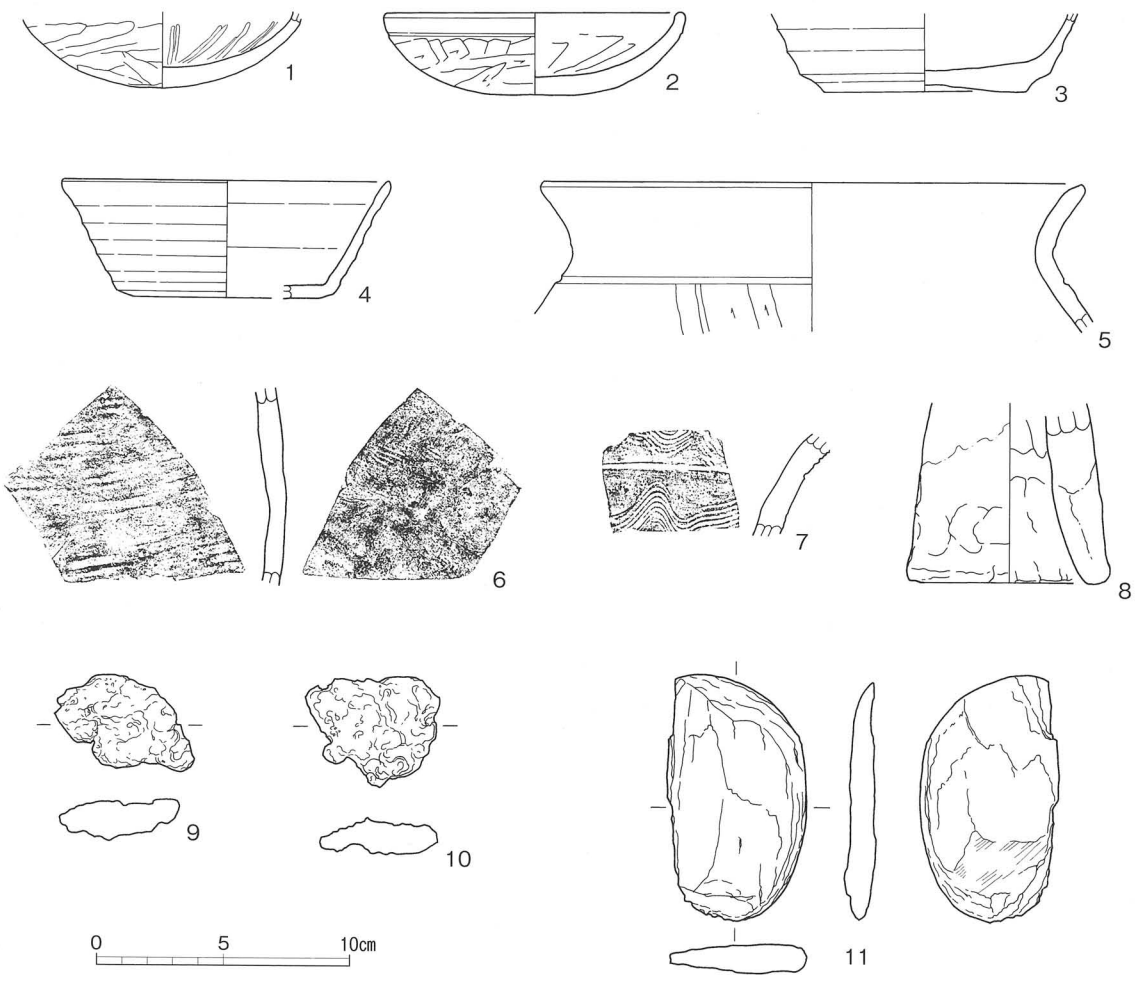
P5
1褐色　ローム小ブロック多量、締りあり
2褐色　ローム小ブロック少量、締りあり
3暗褐色　ローム粒多量、締りあり
4暗褐色　ローム小ブロック少量、締りあり、粘性なし

第164図　33号住居跡①



33号住居跡土層
カマド
1暗褐色　ローム粒・ローム小ブロック中量、締り・粘性あり
2暗褐色　ローム粒・ローム小ブロック中量、ローム大ブロック多量、締り・粘性あり、焼土粒少量
3黒褐色　焼土粒極少量、締り・粘性あり
4暗褐色　焼土を含む、締まりなし
5灰褐色　粘土小ブロック多量締まりあり
6灰褐色　焼土粒混じり、カマド再築に由来するものか

第165図　33号住居跡②



第166図　33号住居跡出土遺物

表80　33号住居跡出土遺物観察表

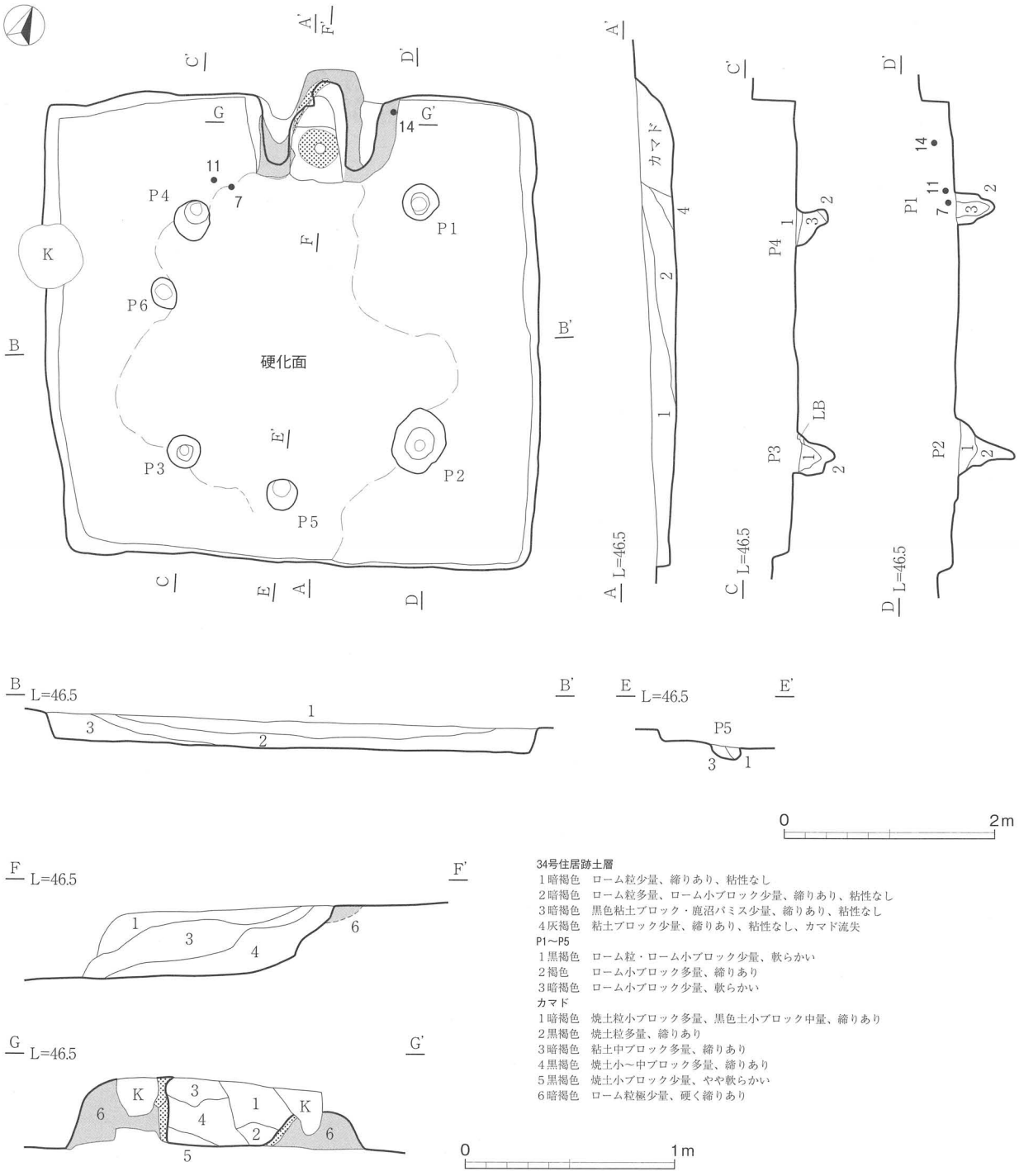
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	－ [2.8] －	非ロクロ坏。体～底部はヘラ削り。内面は放射状の暗文。	石英、チャート	良好	にぶい橙色	底部片
2	土師器 坏	(12.0) 3.2 －	非ロクロ坏。体～底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	石英、チャート	良好	橙色	30%
3	須恵器 坏	－ [3.1] 8.0	底部は回転ヘラ切り。	石英、白色粒、チャート	良好	灰黄色	底部
4	須恵器 坏	(13.0) [4.6] 7.2	底部は体部下端から回転ヘラ削り。	白色粒、石英	良好	灰色	20%
5	土師器 甕	(21.6) － －	口縁部は緩やかに外反する単口縁である。胴部は縦位ヘラ削り。内面は横位ナデ。	白色粒、石英	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
6	須恵器 甕	－ － －	内：無文当て具、外：平行タタキ。	白色粒、石英、黒色融出粒	良好	灰色	胴部片
7	須恵器 甕	－ － －	外口縁部櫛状工具での羽状文。	白色粒、石英、黒色粒	良好	オリーブ黒	口縁部片
8	土製品 羽口	内面を中空とした手捻り成形。上位に還元化した範囲がわずかに残る。下径（8.0）cm、長さ［7.1］cm。		白色粒、石英	良好	橙色	30%
9	鉄滓	長さ4.6cm、幅3.6cm、厚さ1.3cm、重さ33.57g。					完形
10	鉄滓	粒状付着。長さ4.6cm、幅4.1cm、厚さ1.2cm、重さ34.82g。					完形
11	石製品 砥石	扁平な円礫を使用。片面の一部に擦痕が顕著。長さ9.4cm、幅［5.3］cm、厚さ1.0cm、重さ91.5g。片岩製。					完形

34号住居跡（第167・168図）

位置　D6グリッドにある。　**規模と平面形**　4.35×4.35mの方形、隅角は鋭角的である。　**重複関係**　43号住が新しい。　**主軸方向**　N－20°－W。　**壁**　壁高は42cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅190cmで硬化している。硬化範囲は基本的にカマド前庭部からおおむね主柱穴内を経由してP5に至るが、当該住居ではP1の内側を大きく逸脱していた。恒久的に立ち入れない場所であろうか。　**ピット**　6箇所。P1：35×35cm、深さ40cm、P2：60×50cm、深さ60cm、P3：32×30cm、深さ35cm、P4：40×35cm、深さ40cm、P5：30×30cm、深さ12cm、P6：30×23cm、深さ16cmである。P6は特にP3からP4間の線上に位置するものではないが硬化面の範囲に掛かり、P3とP6との間でやや範囲が突出することから支柱穴として抽出した。　**カマド**　北壁中央やや東寄りにあり、袖部～煙道部は灰褐色粘土主体で構築されている。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。燃焼部には土製支脚が遺存していたが、脆弱で取り上げられなかった。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　カマド周辺に散見される。　**所見**　遺物は8・9が8世紀代であるが、1～7は10世紀代で43号住の所産であろう。

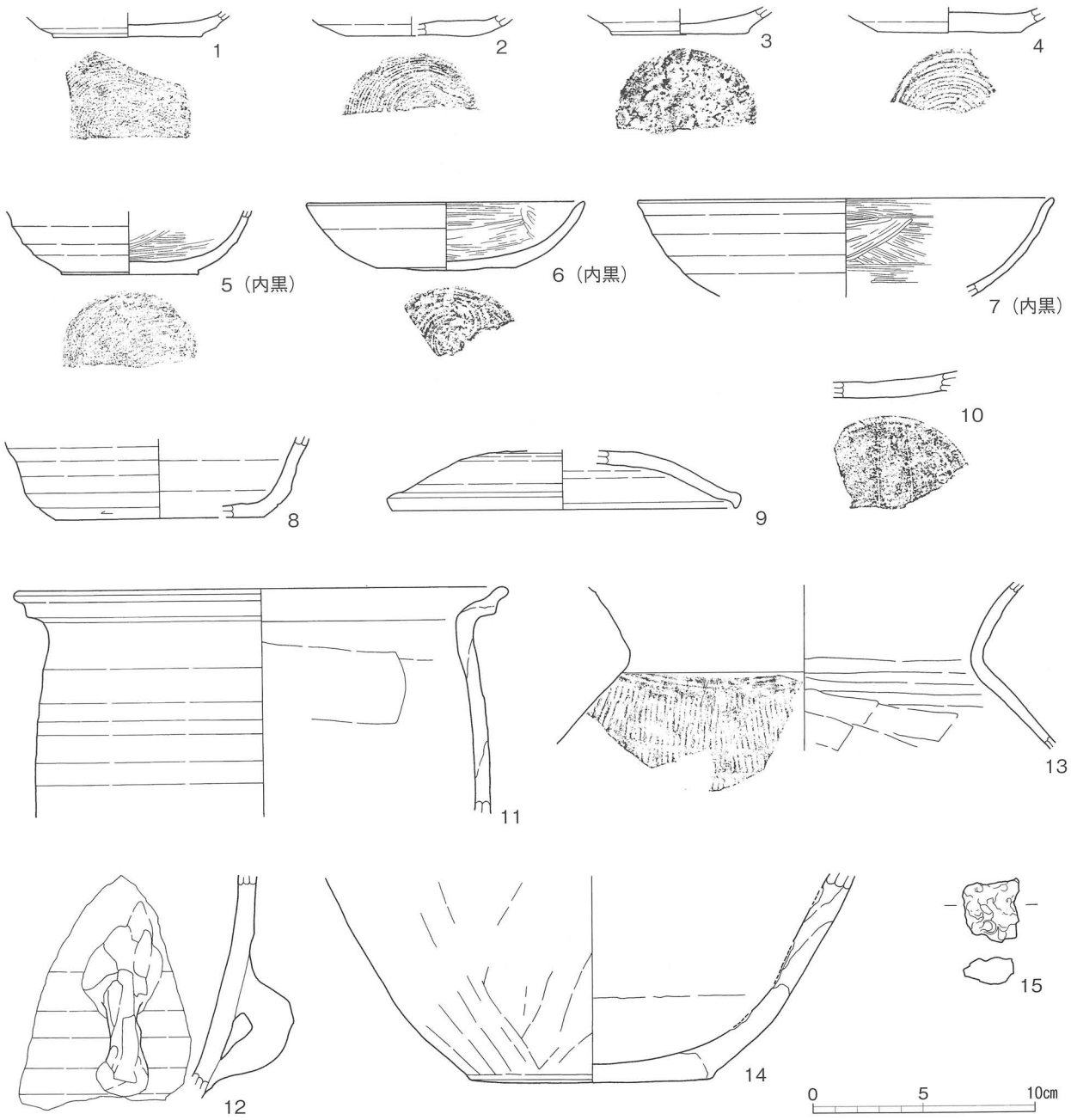
表81　34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	－ [1.1] (6.6)	底部は回転糸切り。	金雲母、石英	良好	橙色	底部片



第167図　34号住居跡

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	土師器 坏	－ [0.9] (6.0)	底部は回転糸切り。	石英	良好	にぶい黄橙色	50%
3	土師器 坏	－ [1.2] (6.3)	底部は回転糸切り。	石英	良好	橙色	50%



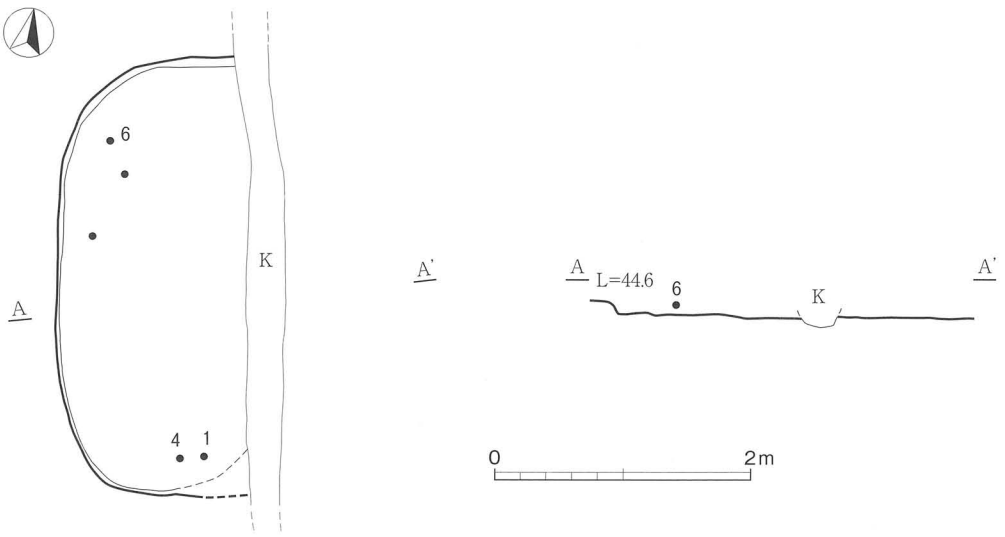
第168図　34号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	土師器 坏	－ [1.1] (6.5)	底部は回転糸切り。	石英	良好	にぶい橙色	底部片
5	土師器 坏	－ [2.9] (6.3)	底部は回転糸切り。内面はヘラ磨き・黒色処理。	金雲母、石英	良好	外：浅黄橙色 内：黒色	50%
6	土師器 坏	(12.6) 3.2 (6.2)	底部は回転糸切り。内面はヘラ磨き・黒色処理。	石英	良好	外：にぶい黄橙色 内：黒色	体～底部片

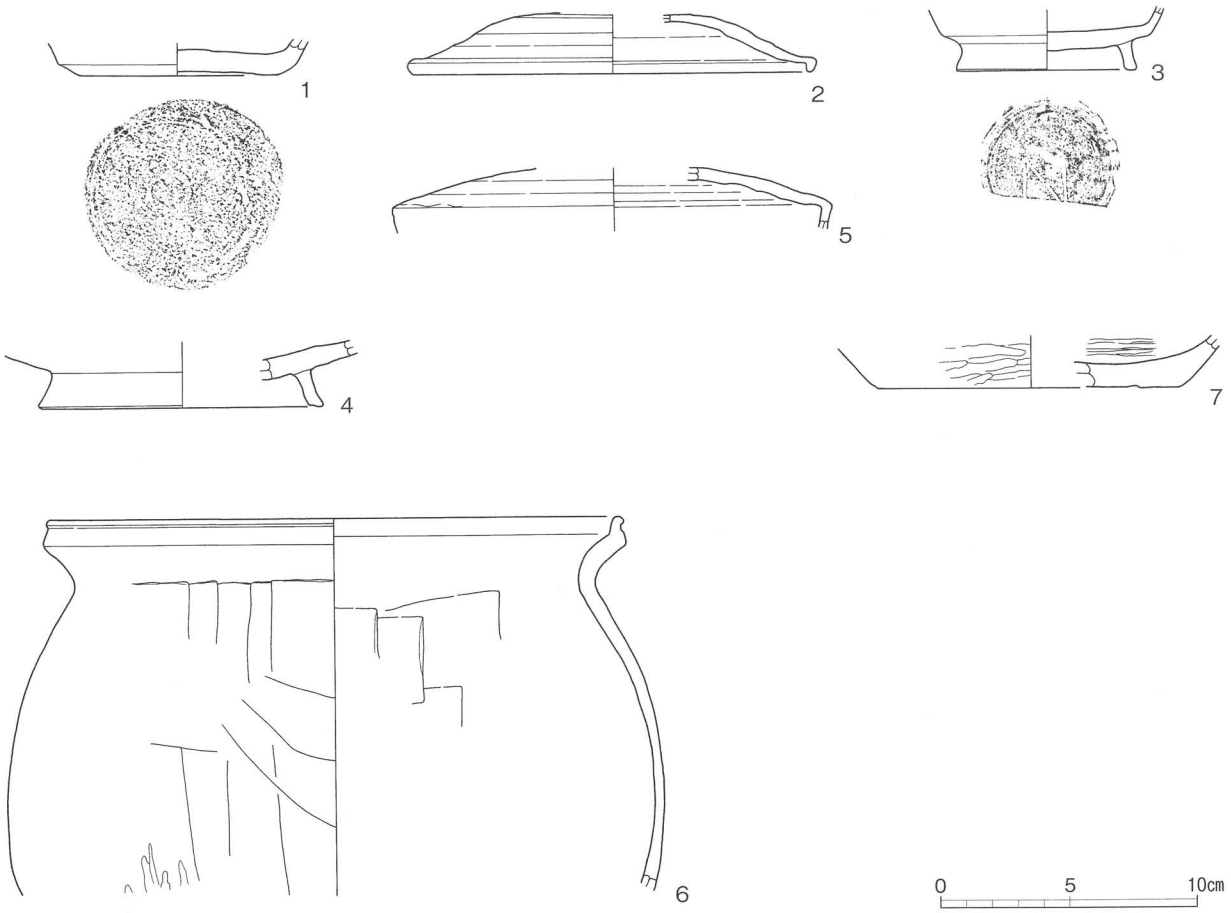
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特　　徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土師器 坏	(19.0) [4.5] –	大振りの坏。内面はヘラ磨き・黒色処理。	金雲母	良好	外：橙色 内：黒色	口縁部片
8	須恵器 坏	– [3.7] (9.4)	底部体部下端～底部回転ヘラ削り。右回転。	白色粒、石英	良好	灰白色	体～底部片
9	須恵器 蓋	15.4 [2.7] –	天井部1/2回転ヘラ削り。口縁端部は屈折。	白色粒、石英、砂礫、海綿骨針	良好	灰色、灰白色	30%
10	須恵器 盤	– [1.2] –	底部回転ヘラ削り。外底部線刻「二」ヵ	白色粒	良好	灰色	底部片
11	土師器 甕	(22.6) [10.4] –	ロクロ成形。口縁部は外反し端部で摘み出される。内面はヘラナデ。	石英、海綿骨針	良好	にぶい橙色	口縁～胴部片
12	土師器 甑	– – –	ロクロ成形。胴部に貼り付ける把手であろう。	金雲母、石英、白色粒	良好	にぶい橙色	把手部
13	須恵器 甕	– [7.6] –	外胴部平行タタキ。内面はヘラナデ。	石英、白色粒、雲母	未還元軟質	外：黄灰色 内：暗黄灰色	頸部片 新治産
14	土師器 甕	– [9.5] (11.0)	外胴～底部はヘラナデ。内面は剥離で不明。	白色粒、石英	酸化軟質	外：にぶい黄橙色 内：灰白色	底部
15	鉄滓	長さ2.9cm、幅2.6cm、厚さ1.3cm、重さ16.9g。					

35号住居跡（第169・170図）

位置　D7グリッドにある。調査範囲内で最も低い44.40mに位置する。　**規模と平面形**　3.30×（1.40）mの隅丸方形、東側は近代の溝、削平によりない。　**主軸方向**　カマドが無いので方向は明確でないが西壁を基本とするとN－11°－W。　**壁**　壁高は15cm。　**覆土**　谷部の下位にあり粘質の強い覆土であった。　**遺物**　須恵器供膳具を主体に出土した。　**所見**　竪穴状の掘り込みはあるものの家屋であるかは明確でない。遺物年代は9世紀前半代である。



第169図　35号住居跡



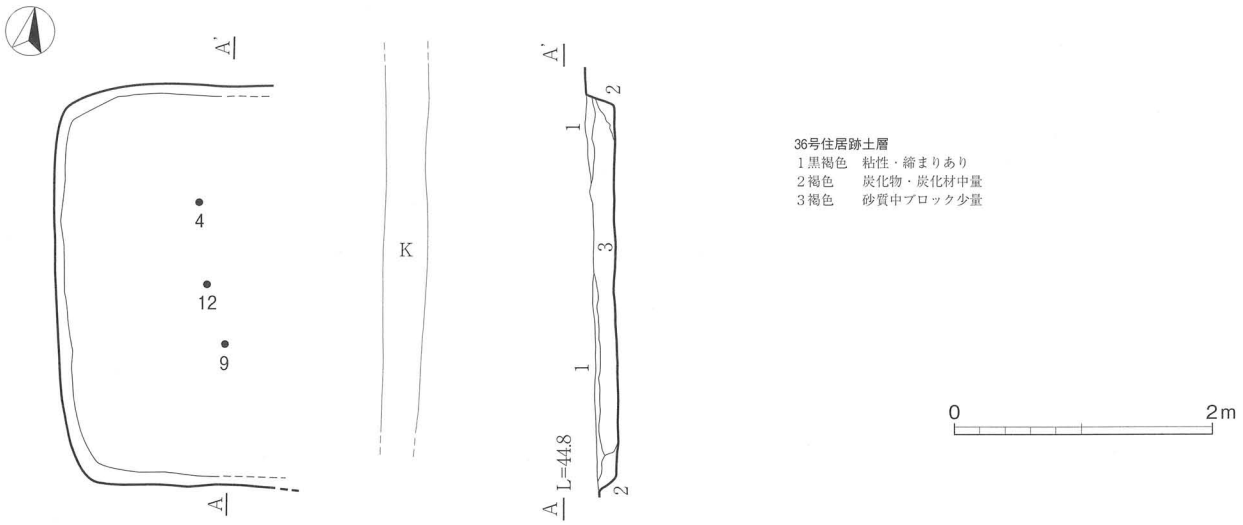
第 170 図　35 号住居跡出土遺物

表 82　35 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ [1.3] 7.6	底部は体部下端～底部回転ヘラ削り。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	灰色	底部
2	須恵器 蓋	(15.6) [2.3] －	天井部 1/2 回転ヘラ削り。口縁端部は屈折。	石英、海綿骨針	良好	オリーブ灰色	口縁部片
3	須恵器 高台付坏	－ [2.4] (7.0)	底部は回転ヘラ削り。外底部に線刻「N」。	白色、石英、海綿骨針	良好	灰色	底部
4	須恵器 高台付坏	－ [2.1] (11.2)	底部は回転ヘラ削り。	白色粒、石英	良好	黄灰色	底部片
5	須恵器 短頸壷蓋	(16.8) [2.5] －	天井部の調整は自然釉で不明。口縁端部は屈折範囲が長く、全貌は明らかでないがおそらく短頸壷の蓋であろう。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	灰色	天井部片
6	土師器 甕	(22.6) [14.7] －	口縁部は外反し端部で摘み出される。胴部縦位ヘラ削り、下位はヘラ磨き。内面はヘラナデ。	白色粒、石英、雲母	良好	にぶい橙色	口縁部片
7	土師器 鉢	－ [1.6] (11.8)	底部は器肉厚く 1cmある。外底部ヘラ磨き。内面ヘラ磨き・黒色処理。	石英、赤褐色粒、海綿骨針、木目細かい粘土	酸化軟質	にぶい橙色	底部片

36号住居跡（第171・172図）

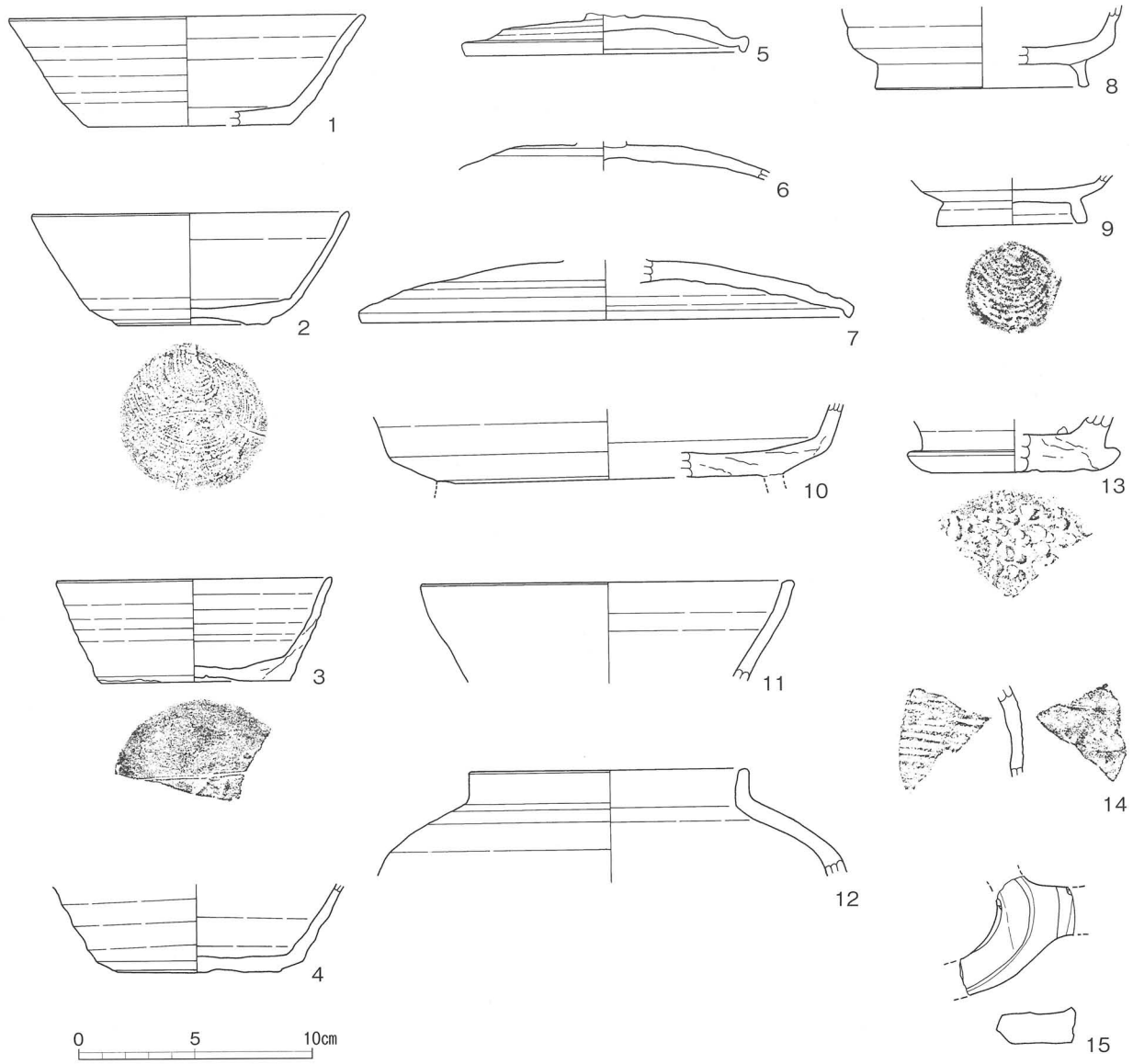
位置　C7グリッドにある。　**規模と平面形**　3.00×（1.20）mの方形、東側は近代の溝、削平により消滅している。　**主軸方向**　カマドが無いので分からないが西壁を基本とすればN－11°－W。　**壁**　壁高は22cm、垂直に立ち上がる。　**床**　硬化面は見られなかった。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　須恵器を主体に多数出土している。　**所見**　9世紀前半。



第171図　36号住居跡

表83　36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(15.2) 4.7 (8.6)	底部は回転ヘラ切り。	白色粒、石英	良好	灰色	30%
2	須恵器 坏	(13.6) 4.8 (6.7)	底部は回転糸切り。外底部線刻「—」。	白色粒多量（φ2㎜）	良好	オリーブ灰色	40%
3	須恵器 坏	(11.8) 4.4 (8.2)	底部は回転ヘラ切り後、ナデ。外底部線刻「—」。	白色粒、石英	良好	灰色	20%
4	須恵器 坏	－ [3.7] 7.2	底部は回転ヘラ切り。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	灰白色	体～底部
5	須恵器 蓋	12.0 [1.7] －	天井部2/3回転ヘラ削り。口縁部は屈曲。	白色粒、石英、チャート、海綿骨針	良好	灰色	鈕欠損
6	須恵器 蓋	－ [1.3] －	天井部1/3回転ヘラ削り。	白色粒、石英	良好	青灰色	天井部片
7	須恵器 蓋	(20.8) [2.6] －	大振りの高台付坏蓋。天井部2/3回転ヘラ削り。口縁部は屈曲。	白色粒、石英	良好	灰色	口縁部片
8	須恵器 高台付坏	－ [3.5] (9.2)	底部は回転ヘラ削り。	白色粒	良好	灰色	底部片
9	須恵器 高台付坏	－ [2.0] 6.4	底部は回転糸切り。	白色粒	良好	青灰色	底部

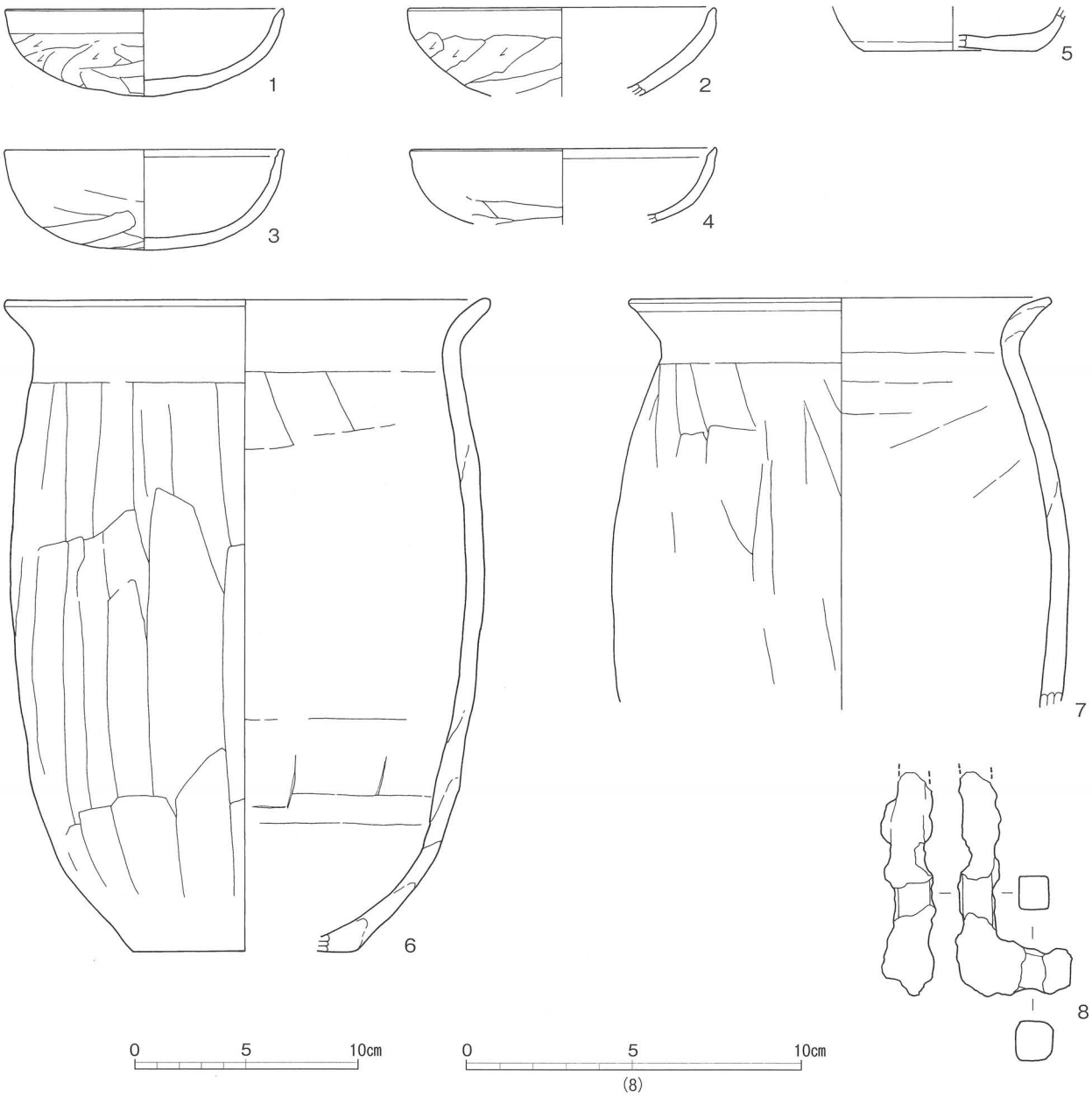


第172図　36号住居跡出土遺物

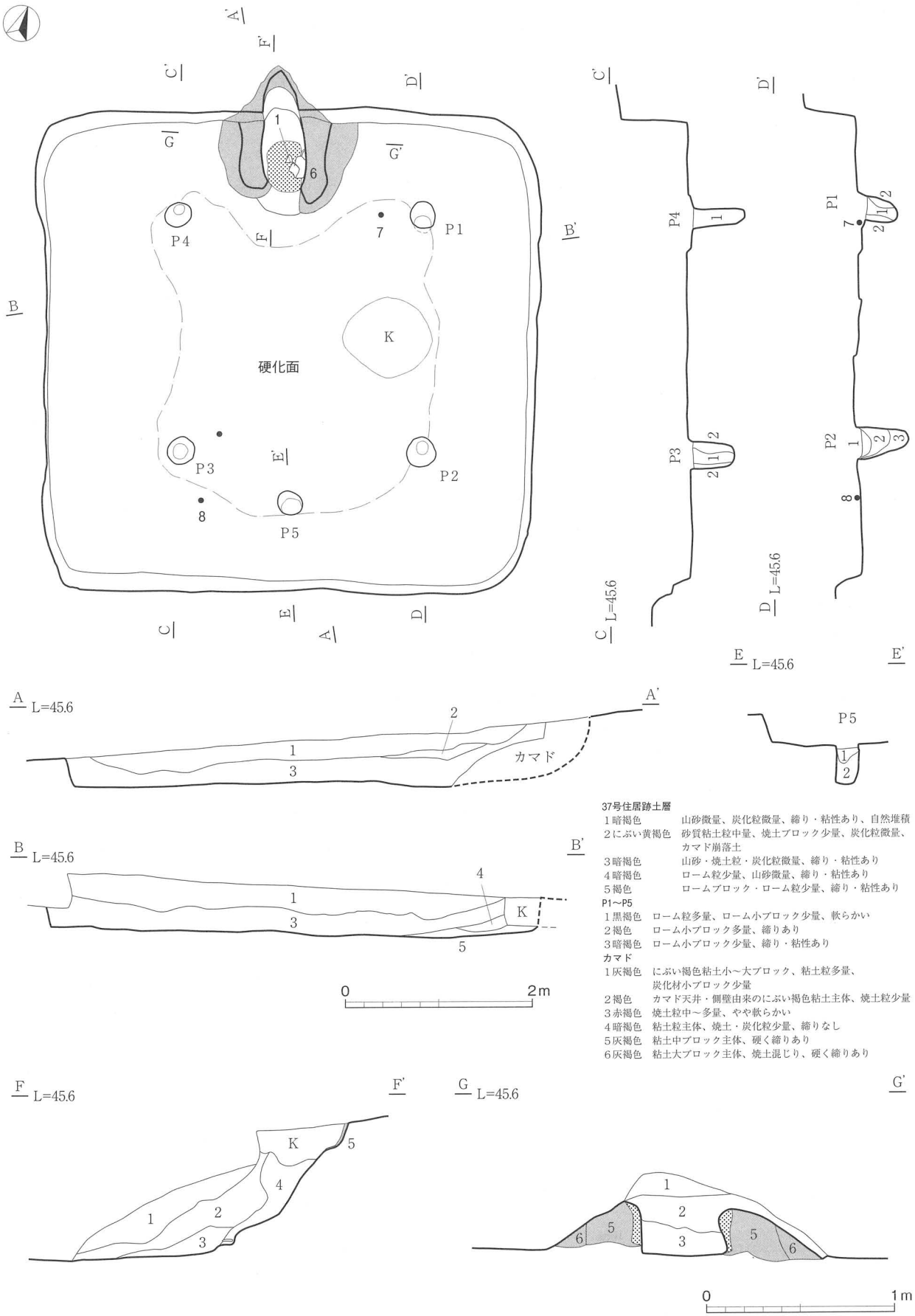
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	須恵器 盤	－ [3.0] 14.8	底部は回転ヘラ削り。内面に漆付着。	白色粒、チャート	良好	灰白色	底部片
11	須恵器 鉢	(16.0) [4.2] －	口縁部は内反気味に開き、端部は面をなす。	白色粒、石英	良好	灰色	口縁部片
12	須恵器 短頸壺	12.0 [3.4] －	ロクロ成形。肩部は丸く収める。	白色粒、石英	良好	灰色	口縁部片
13	須恵器 すり鉢	－ [2.3] (7.6)	底部は厚手の円盤状にとなり、外面に多数の刺突痕。内面は自然釉が付着。	白色粒	良好	灰色	底部片
14	須恵器 甕	－ － －	内：無文当て具、外：平行タタキ。	白色粒、雲母	還元軟質	灰黄色	胴部片 新治産
15	土師器 甑	－ － －	底部は五孔となる。ヘラ削り。	石英	未還元	にぶい黄橙色	底部片

37号住居跡（第173・174図）

位置　C6グリッドにある。　**規模と平面形**　5.05×4.90ｍの方形、やや南北が長く隅角はやや鈍角となる。　**主軸方向**　N－23°－W。　**壁**　壁高は70cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅270cmで硬化している。　**ピット**　5箇所。P1：30×30cm、深さ45cm、P2：35×35cm、深さ55cm、P3：30×30cm、深さ47cm、P4：28×28cm、深さ60cm、P5：26×26cm、深さ40cmである。P5は出入り口ピットである。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部～煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　自然堆積である。　**遺物**　供膳具は土師器非ロクロ坏が多く、須恵器は客体的である。　**所見**　8世紀初頭である。



第173図　37号住居跡出土遺物



37号住居跡土層
1暗褐色　山砂微量、炭化粒微量、締り・粘性あり、自然堆積
2にぶい黄褐色　砂質粘土粒中量、焼土ブロック少量、炭化粒微量、カマド崩落土
3暗褐色　山砂・焼土粒・炭化粒微量、締り・粘性あり
4暗褐色　ローム粒少量、山砂微量、締り・粘性あり
5褐色　ローム粒ブロック・ローム粒少量、締り・粘性あり

P1～P5
1黒褐色　ローム粒多量、ローム小ブロック少量、軟らかい
2褐色　ローム小ブロック多量、締りあり
3暗褐色　ローム小ブロック少量、締り・粘性あり

カマド
1灰褐色　にぶい褐色粘土小～大ブロック、粘土粒多量、炭化材小ブロック少量
2褐色　カマド天井・側壁由来のにぶい褐色粘土主体、焼土粒少量
3赤褐色　焼土粒中～多量、やや軟らかい
4暗褐色　粘土粒主体、焼土・炭化粒少量、締りなし
5灰褐色　粘土中ブロック主体、硬く締りあり
6灰褐色　粘土大ブロック主体、焼土混じり、硬く締りあり

第174図　37号住居跡

表84　37号住居跡出土遺物観察表

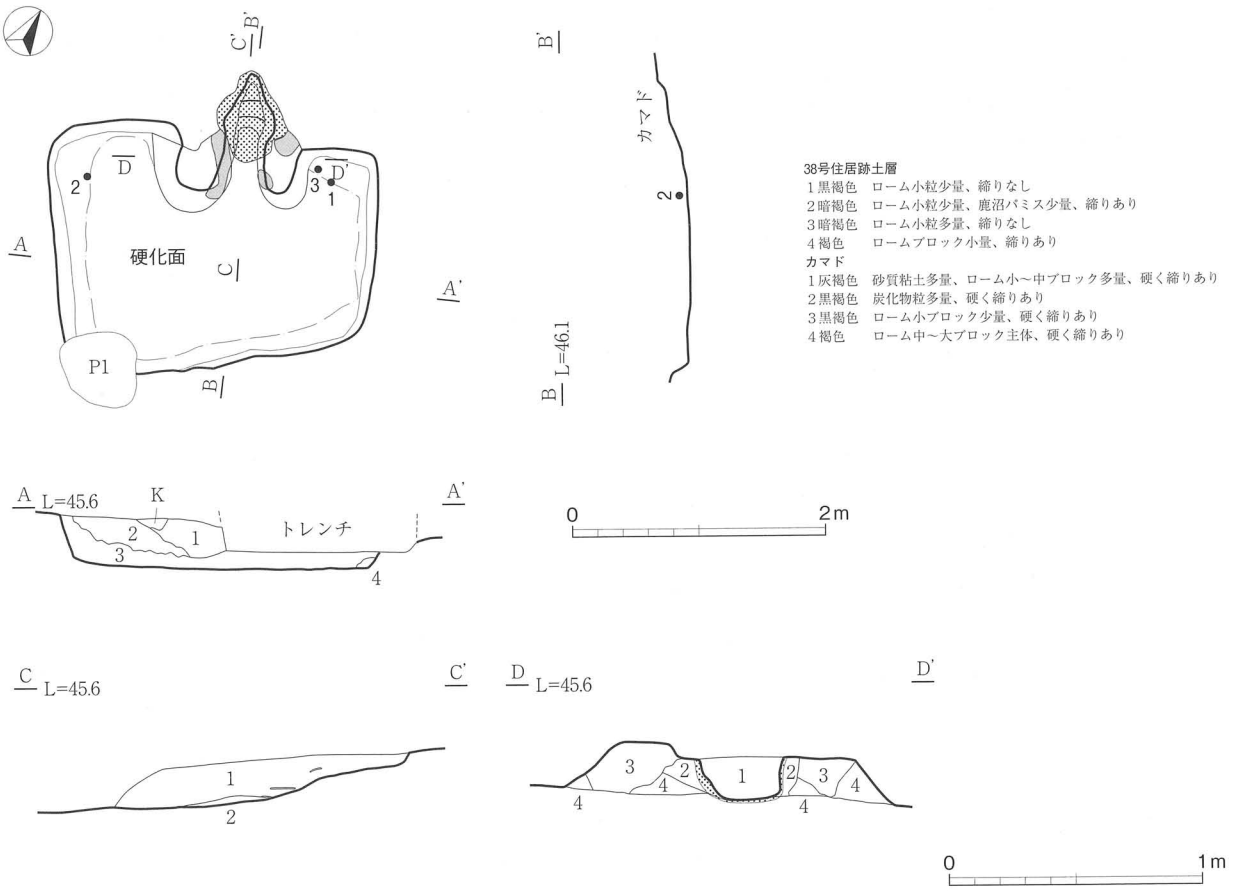
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(12.6) [3.9] －	非ロクロ坏。外体～底部ヘラ削り。	石英、角閃石	良好	橙色	50%
2	土師器 坏	(13.3) [4.9] －	非ロクロ坏。外体～底部ヘラ削り。	石英	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
3	土師器 坏	(12.6) 4.5 －	非ロクロ坏。外体～底部ヘラ削り。口縁内面は浅い沈線を有する。金属模倣坏か。	角閃石、石英	良好	橙色	25%
4	土師器 坏	(13.8) [3.4] －	非ロクロ坏。外体～底部ヘラ削り。	角閃石、石英	良好	橙色	口縁部片
5	須恵器 坏	－ [1.5] －	底部は回転ヘラ削り。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	灰色	底部片
6	土師器 甕	(21.6) 29.5 (10.0)	口縁部は外反する長胴甕。外胴部縦位ヘラ削り。内面は横位ヘラナデ。	石英、金雲母、チャート、砂礫	良好	橙色	25%
7	土師器 甕	(18.8) [18.4] －	口縁部は外反する長胴甕。外胴部縦位ヘラ削り。	白色粒、チャート、石英	良好	橙色	口縁～胴部 25%
8	用途不明 鉄製品	断面は方形で「L字」に屈曲。長さ6.5cm、幅3.3cm、厚さ1.0cm、重さ21.31g。					

38号住居跡（第175・176図）

位置　D6グリッドにある。　**規模と平面形**　2.30×1.75mの方形、東壁が短くそのため東西に長い歪な台形状をなす。　**主軸方向**　N－29°－W。　**壁**　壁高は35cm、ほぼ垂直に立ち上がる。　**床**　ほぼ全面に亘り硬化している。　**ピット**　床面上にはない住居（竪穴）外柱穴である。　**カマド**　北壁中央やや東側にあり、袖部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。燃焼部から煙道部へ緩やかに立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　カマド周囲に散見される。　**所見**　9世紀後半代。

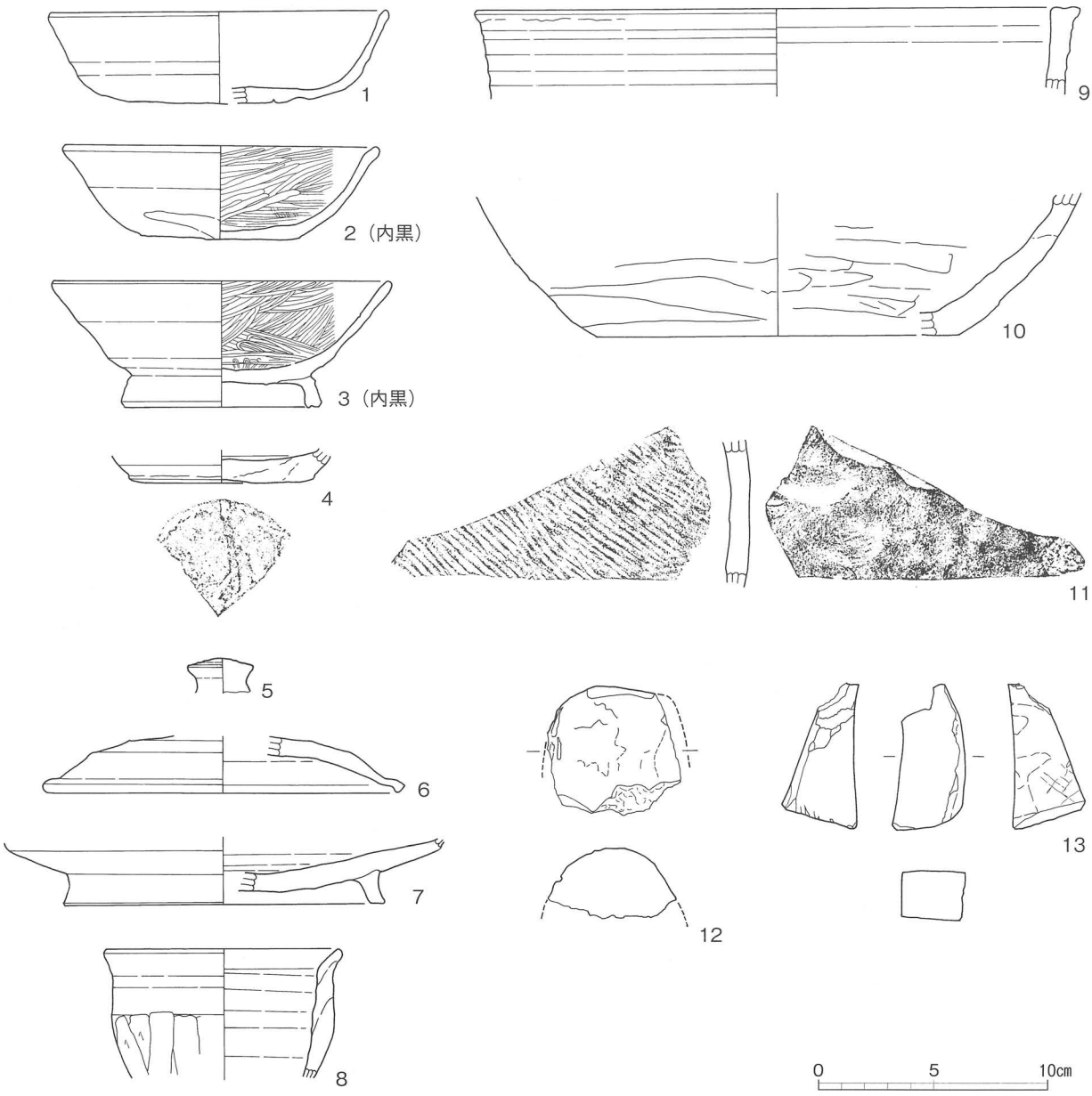
表85　38号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(15.0) (4.1) (8.0)	底部は回転ヘラ切り。	石英、角閃石	良好	浅黄色	30%
2	土師器 坏	(14.0) (4.0) (7.0)	底部は回転ヘラ切り。内面ヘラ磨き黒色処理。	白色粒、石英	良好	外：灰黄褐色 内：黒色	30%
3	土師器 高台付坏	15.0 5.6 8.6	底部は回転ヘラ切り。内面ヘラ磨き黒色処理。	白色粒、石英、角閃石	良好	外：明黄褐色 内：黒色	60%
4	須恵器 坏	－ [1.5] (8.0)	底部は回転ヘラ切り。	石英、雲母	還元軟質	灰白色	底部片 新治産
5	須恵器 蓋	－ [1.5] －	ロクロ成形。擬宝珠鈕。	石英、黒色粒	良好	灰色	鈕
6	須恵器 蓋	(15.4) (2.5) －	天井部は1/2回転ヘラ削り。口縁端部は屈折し断面三角形。	石英、黒色融出粒	良好	灰白色	天井部片



第175図　38号住居跡

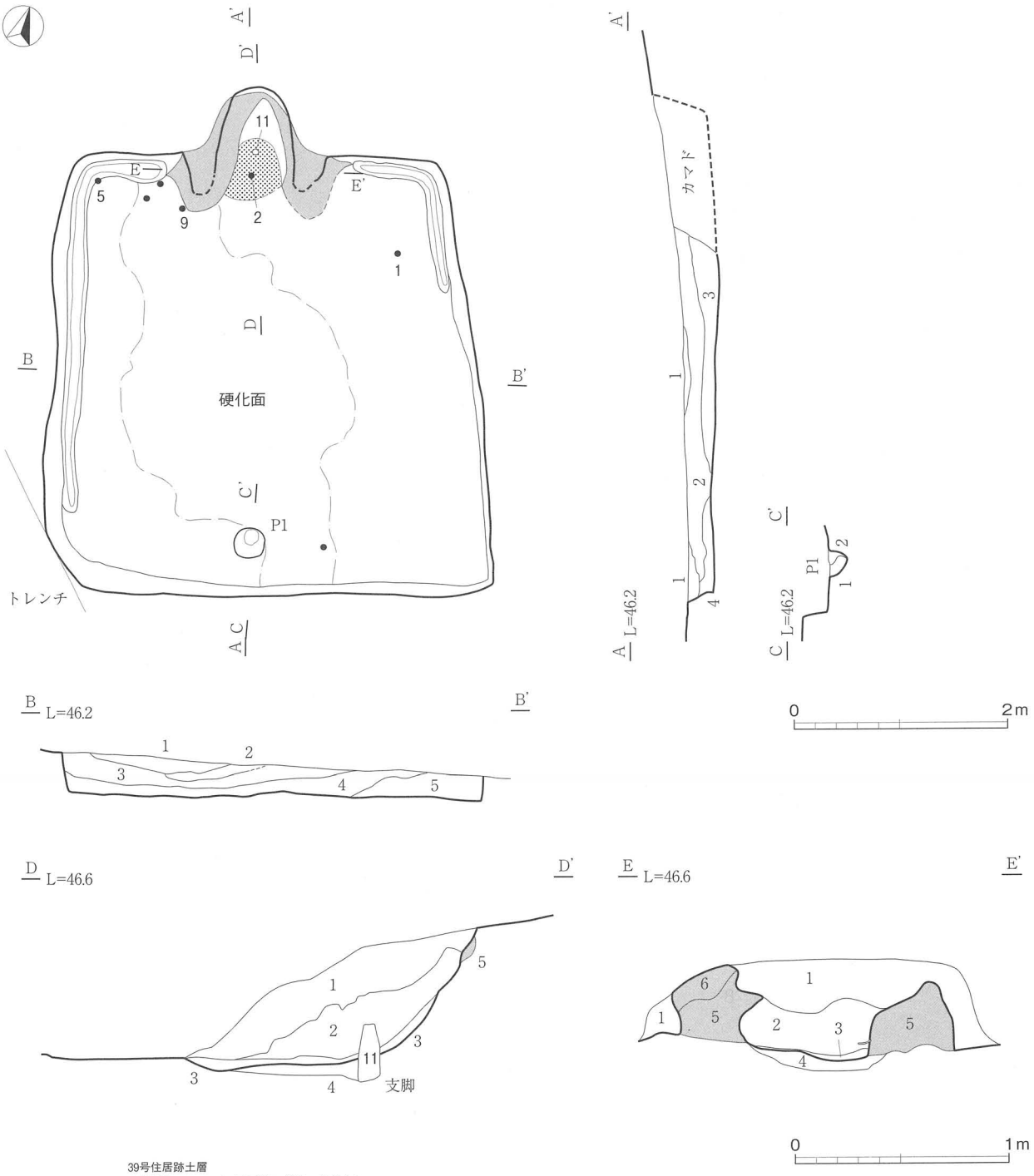
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	須恵器 盤	－ [2.9] (14.2)	底部は回転ヘラ削り。	石英、黒色融出粒	良好	黄灰色	底部片
8	土師器 甕	10.6 [5.7] －	小型甕。ロクロ成形、胴部下端ヘラ削り。	白色粒、石英	良好	明黄褐色	口縁～胴部 50%
9	須恵器 甑	(26.6) [3.9] －	ロクロ成形。口縁端部は面をなす。	石英、白色粒	良好	灰オリーブ色	口縁部片
10	須恵器 甕	－ (6.3) (16.0)	胴部下端は横位ヘラ削り、内面は指ナデ。	石英、チャート、 海綿骨針	良好	灰黄褐色	底部片
11	須恵器 甕	－ (6.5) －	内：無文当て具、外：平行タタキ	石英	良好	外：黒色 内：灰色	胴部片
12	土製品 支脚	手捻り成形。上径［3.6］cm、長さ［5.2］cm、幅［5.9］cm、 重さ86.8g。		白色粒、石英	良好	浅黄色	頂部片
13	石製品 砥石	台形状をなし、四面を使用。長さ6.4cm、幅3.2cm、厚さ2.2cm、重さ65.3g。凝灰岩製。灰白色。					ほぼ完形



第 176 図　38 号住居跡出土遺物

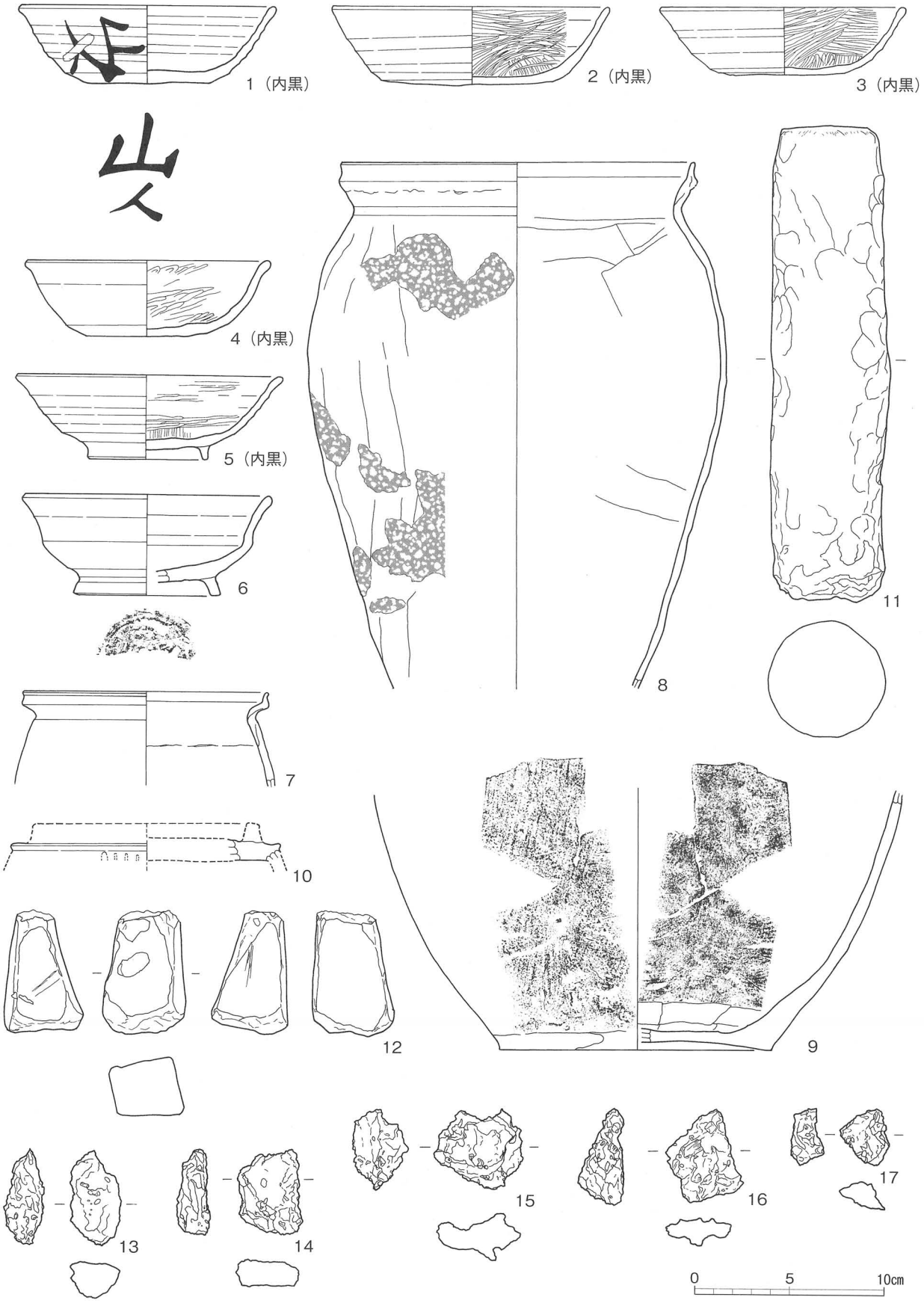
39 号住居跡（第 177・178 図）

位置　Ｃ６グリッドにある。　**規模と平面形**　4.00 × 3.80 ｍの方形、北壁に比べ南壁が長く、南北に長い台形状をなす。　**主軸方向**　Ｎ－17°－Ｗ。　**壁**　壁高は 55cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅 210cmで硬化している。硬化面は北壁からカマド西側を介し P1 に接しながら東側を通って南壁に達する。そのほか北東隅角と北西隅角から西壁に亘り壁溝が検出された。　**ピット**　１箇所。P1：30 × 30cm、深さ 18cmである。主柱穴はなく住居（竪穴）外柱穴である。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部はロームブロックを主体とし硬く締った構築材である。灰褐色粘土は袖上面に僅かにみられる程度であった。燃焼部から煙道部へ急に立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　土師器主体に鉄滓が混じる。　**所見**　９世紀中葉頃である。



39号住居跡土層
1灰褐色　ローム小粒多量、締り・粘性なし
2黒褐色　ローム小粒・鹿沼パミス多量、締り・粘性なし
3黒褐色　ローム中粒多量、締り・粘性なし
4黒褐色　ローム中粒多量、締り・粘性なし、焼土粒・炭化粒多量
5褐色　ローム粒・ローム小ブロック少量、締り・粘性なし
カマド
1黒褐色　ローム小粒・鹿沼パミス多量、締り・粘性なし
2暗褐色　粘土中ブロック多量、締りあり、天井崩落層
3暗赤褐色　焼土粒少量、硬く締りあり、火床部
4暗褐色　焼土粒混じり、やや締りなし
5灰褐色　砂質粘土大・中ブロック多量、硬く締りあり
6灰褐色　焼土粒・粘土小ブロック多量、硬く締りあり
P1
1暗褐色　ローム粒極少量、軟い
2暗褐色　ローム粒多量、ローム小ブロック少量、締りあり、やや軟い

第177図　39号住居跡



第178図　39号住居跡出土遺物

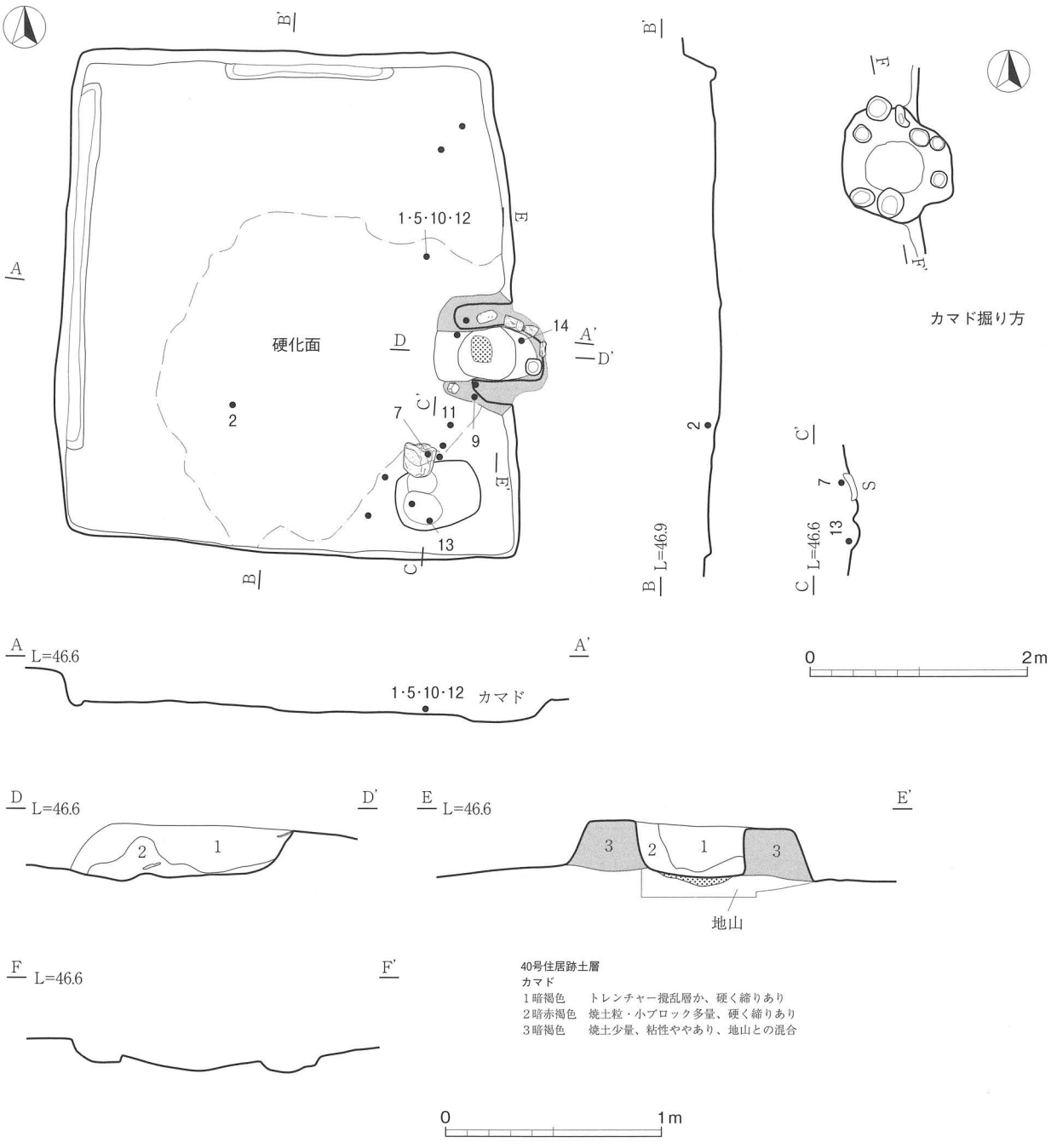
表86　39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	13.6 4.1 6.3	下端～底部は下端回転ヘラ削り、内面は剥離で明確でない。墨書外体部に横位「山人」、体～底部に正位「山人」。黒色処理。	石英、白色粒、海綿骨針、チャート	良好	外：明黄褐色 内：黒色	完形
2	土師器 坏	14.7 4.2 9.1	底部は回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き・黒色処理。	石英、白色粒、角閃石	良好	外：にぶい黄橙色 内：黒色	ほぼ完形
3	土師器 坏	13.0 3.6 6.2	底部は回転ヘラ切り、内面ヘラ磨き・黒色処理。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	外：明黄褐色 内：黒色	ほぼ完形
4	土師器 坏	(13.0) (4.1) －	底部は回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き・黒色処理。	白色粒、石英	良好	外：にぶい黄橙色 内：黒色	口縁～底部 30%
5	土師器 高台付坏	(14.2) 4.4 6.4	下端～底部は回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き・黒色処理。	石英、白色粒、チャート、海綿骨針	良好	外：にぶい黄橙色 内：黒色	口縁～底部 30%
6	須恵器 高台付坏	(13.2) 5.3 (7.8)	底部は回転ヘラ削り。稜椀。底部線刻。	白色粒、チャート、海綿骨針	良好	灰色	口縁～底部 50%
7	土師器 甕	(13.0) [4.9] －	口縁部は外反し端部を摘み出す。	白色粒、石英	良好	外：褐色 内：黒褐色	口縁部片
8	土師器 甕	(18.6) (27.9) －	口縁部は外反し端部を摘み出す。外胴部は縦位ヘラ削り、内面ヘラナデ。長胴気味でカマド材が多量に付着。	石英、チャート、海綿骨針	良好	明赤褐色	口縁～胴部 20%
9	須恵器 甕	－ [13.7] (14.4)	内：無文当て具、外：平行タタキ。	白色粒、海綿骨針、黒色粒	良好	灰色	胴部～底部片
10	須恵器 円面硯	－ － －	硯部の外提部。上位凸帯下の縦位平行刻みがわずかに残る。	チャート	良好	暗灰色	外提片
11	土製品 支脚	棒状に手捻り成形。 上径 4.4cm、下径 6.0cm、長 25.3cm、重 1160.0g。		チャート、石英、海綿骨針	良好	明黄褐色	完形
12	石製品 砥石	台形状で四面使用。長さ 6.5cm、幅 4.5cm、厚さ 3.1cm、重さ 124.4g。凝灰岩製。灰白色。					完形
13	鉄製品 鉄滓	長さ 5.1cm、幅 2.7cm、厚さ 2.1cm、重さ 31.8g。					
14	鉄製品 鉄滓	長さ 4.5cm、幅 3.5cm、厚さ 1.8cm、重さ 39.1g。					
15	鉄製品 鉄滓	砂付着。長さ 4.7cm、幅 4.3cm、厚さ 2.9cm、重さ 43.6g。					
16	鉄製品 鉄滓	炭化物付着。長さ 5.0cm、幅 4.1cm、厚さ 2.4cm、重さ 42.7g。					
17	鉄製品 鉄滓	長さ 3.0cm、幅 2.6cm、厚さ 1.7cm、重さ 14.5g。					

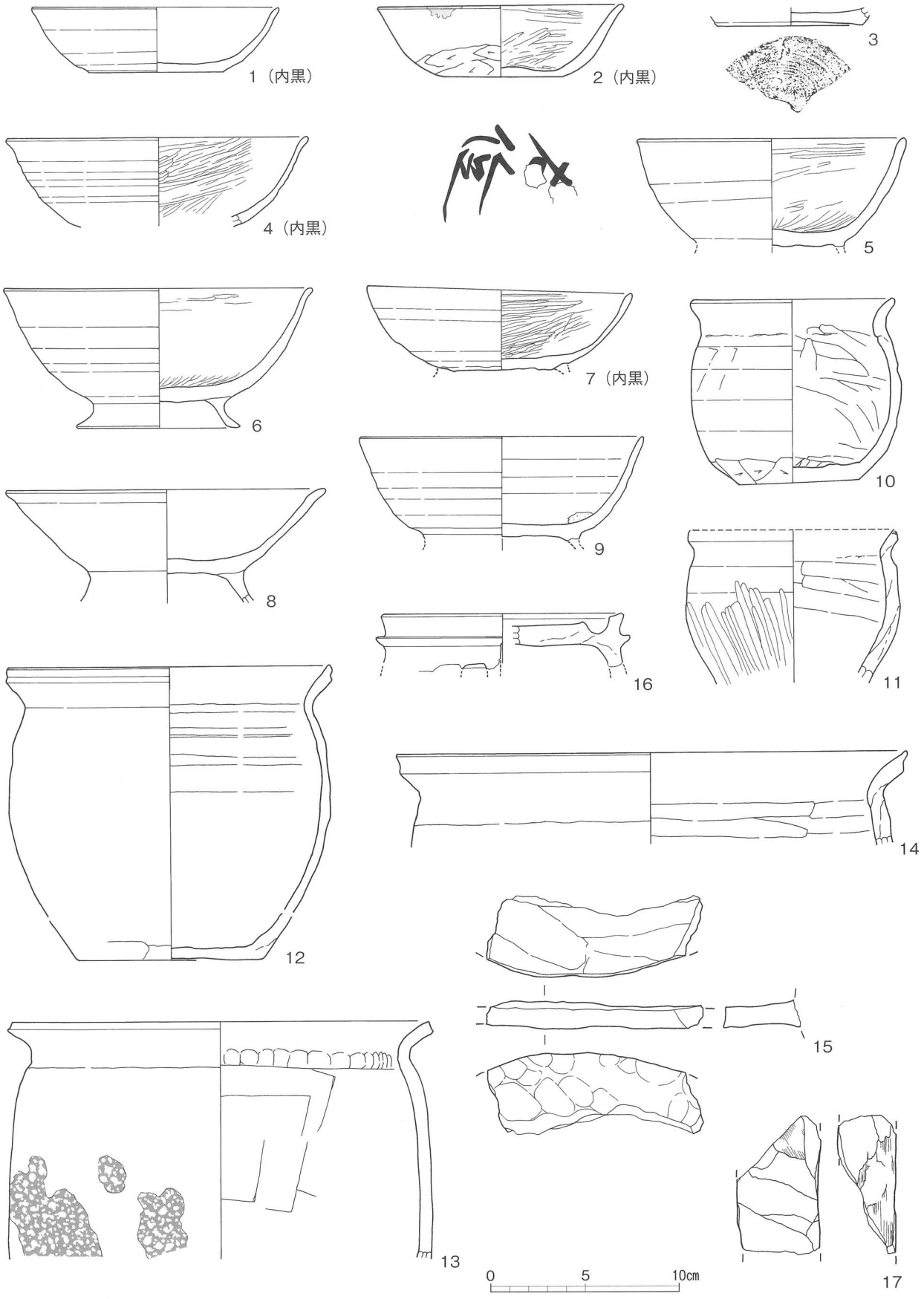
40号住居跡（第179・180図）

位置　C6グリッドにある。　**規模と平面形**　4.50 × 4.00 mの北壁に比べ南壁が長い歪な方形、隅角は鋭角的である。　**主軸方向**　N－94°－E。　**壁**　壁高30cm、垂直に立ち上がる。　**床**　幅300cm硬化している。範囲はカマドから住居中央を経て南壁に至るが、北・西壁側は硬化していない。またこの両壁には壁溝があり硬化面との相関が窺える。　**貯蔵穴**　東南隅角に付設されており、方形、80 × 60cm、深さ25cmである。その掘り込みに雲母片岩の板石が僅かにかかっていた。性格的には台石でろうか。　**カマド**　所謂東向きの

カマドである。東壁の南寄りにあり、袖部は焼土含んだ暗褐色で構築されている。構築材には砂岩礫を採用し特に袖北側ではそれが顕著にみられた。このような砂岩礫を構築材に使用した例は県内では少ない。カマド掘り方では煙道を除き小ピットが見られ礫の掘り方と思われる。傾斜は燃焼部から煙道部へ急に立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　カマド、貯蔵穴周辺に散見される。供膳具は土師器坏を主体とする。2の墨書土器は床面上である。特異な遺物は15の置きカマド、16の円面硯である。　**所見**　9世紀後半代であろう。18の灰釉碗は細片の為、写真で対応した。



第179図　40号住居跡



第 180 図　40 号住居跡出土遺物

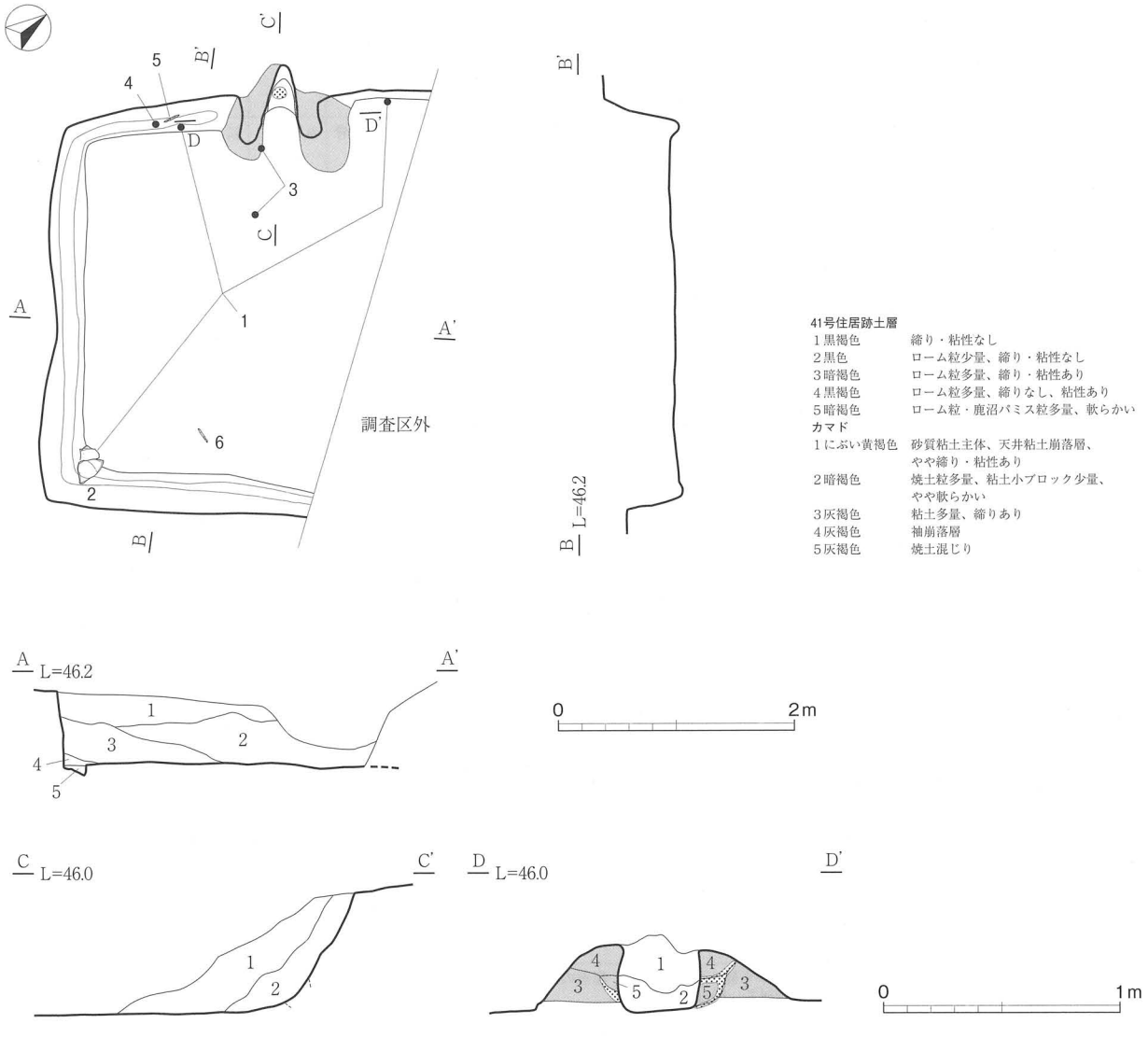
表87　40号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	13.0 3.5 7.0	底部は回転ヘラ削り。内面は剥離しているがヘラ磨き・黒色処理。	白色粒、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	50%
2	土師器 坏	13.0 3.8 6.2	底部は回転ヘラ切り後ナデ、体部下端はヘラ削り。内面はヘラ磨き・黒色処理。墨書外底部「右後」ヵ。	白色粒、石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色	ほぼ完形
3	土師器 坏	－ [0.9] (7.6)	底部は回転糸切り。	石英、白色粒	良好	橙色	底部片
4	土師器 坏	(16.0) [4.7] －	ロクロ成形。内面はヘラ磨き・黒色処理。	チャート、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	口縁～体部 30%
5	土師器 高台付坏	(14.2) [5.5] －	底部は回転ヘラ切り。内面はヘラ磨き。内底部は放射状。	雲母、海綿骨針	酸化軟質	にぶい黄橙色	50%高台欠損
6	土師器 高台付坏	(16.4) 7.4 (8.6)	底部は回転ヘラ切り。内面はヘラ磨き。内底部は放射状。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	にぶい褐色	20%
7	土師器 高台付坏	(14.0) [4.5] －	ロクロ成形。内面はヘラ磨き・黒色処理。	雲母	酸化軟質	にぶい黄橙色	25%
8	土師器 高台付坏	(17.0) [5.9] －	底部は回転ヘラ切り。高台残部1.5cmの足高。	白色粒、石英、雲母	良好	明赤褐色	口縁～底部片
9	土師器 高台付坏	(15.0) [5.5] －	底部は回転ヘラ切り。内面はヘラ磨きであるが剥離で図示不能。	雲母、白色粒、石英、チャート	良好	にぶい黄橙色	60%高台欠損
10	土師器 小型甕	10.8 9.8 6.3	ロクロ成形。口縁部は外反する。胴部下端～底部ヘラ削り。内面ナデ。	白色粒、石英、海綿骨針を含む木目細かな粘土	酸化軟質	にぶい褐色	80%
11	土師器 小型甕	(10.8) [8.0] －	ロクロ成形。口縁部は外反し、端部をやや摘み上げる。胴～底部ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	白色粒、石英、海綿骨針を含む相細かな粘土	酸化軟質	黄褐色	50%
12	土師器 小型甕	(17.2) [16.0] (10.0)	口縁部は外反し、端部を摘み上げる。胴～底部斜ヘラ削り。全体に煤付着。内面ヘラナデ。	白色粒、石英	良好	にぶい黄褐色	20%
13	土師器 甕	(22.4) [12.6] －	口縁部は外反し、端部は面をなす。胴～底部斜ヘラ削り後ナデ。カマド材付着。内面ヘラナデ。	石英、白色粒、角閃石	良好	にぶい黄褐色	口縁部片
14	土師器 甕	(27.0) [4.8] －	口縁部は外反し、端部を摘み上げる。内面ナデ。	白色粒、石英、角閃石、チャート	良好	にぶい橙色	口縁部片
15	土製品 置きカマド	－ － －	鍔部である。内：指圧、外：ヘラナデ、小口：ナデ。	白色粒、石英、角閃石	良好	橙色	鍔片
16	須恵器 円面硯	上径12.8 － －	硯部で上位凸帯から陸・海部が残る。脚部の透かしと平行刻みの一部が残る。陸は研磨痕顕著。	白色粒	良好	灰色	硯部片
17	石製品 砥石	三面使用。長さ7.3cm、幅4.2cm、厚さ3.1cm、重さ100.6g。凝灰岩製。浅黄色。					
18	灰釉陶器 碗	－ － －	ロクロ成形。	白色粒	良好	灰色	体部片 写真のみ

41号住居跡（第181・182図）

位置　C6グリッドにある。　**規模と平面形**　3.50×（3.20）mの方形、隅角は鋭角的である。　**主軸方向**　N－54°－W。　**壁**　壁高は65cm、垂直に立ち上がる。　**床**　特に硬化した範囲は見られなかった。強いて言えば全体的にローム上の小さな凹凸があり締まった状況ではあった。カマド西から南壁に壁溝が検出され

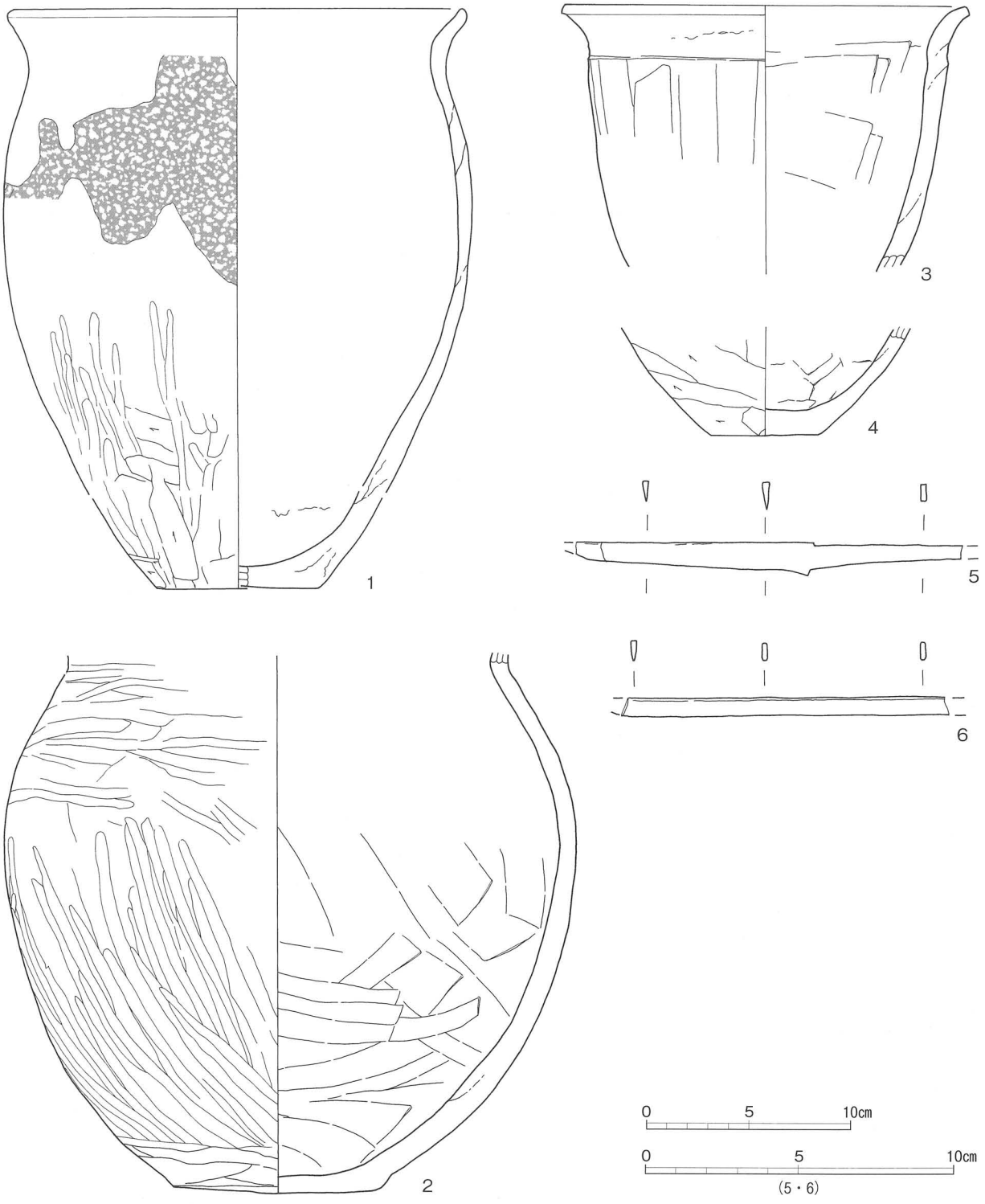
た。　**カマド**　北壁中央にあり、袖部～煙道部は粘土を含んだ灰褐色で構築されている。袖内の焼土は修復である。燃焼部から煙道部へ急に立ち上がる。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　煮沸具を主体に１～４の土師器甕、５・６の鉄製品が出土。　**所見**　８世紀後葉頃であろう。



第 181 図　41 号住居跡

表 88　41 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	(20.2) (28.6) 7.8	口縁部は外反し端部を摘み出す。外胴部はヘラ削り後ヘラ磨き、上半にカマド材付着。内面剥離激しく不明。	石英、白色粒	良好	外：明褐色 内：褐色	30%
2	土師器 甕	－ [31.3] 9.8	胴部は球形状。外胴部は上半が横位ヘラ磨き、中～下半は縦位ヘラ磨き。内面斜位ヘラナデ。貯蔵用か。	石英	良好	外：暗褐色 内：黒褐色	胴～底部



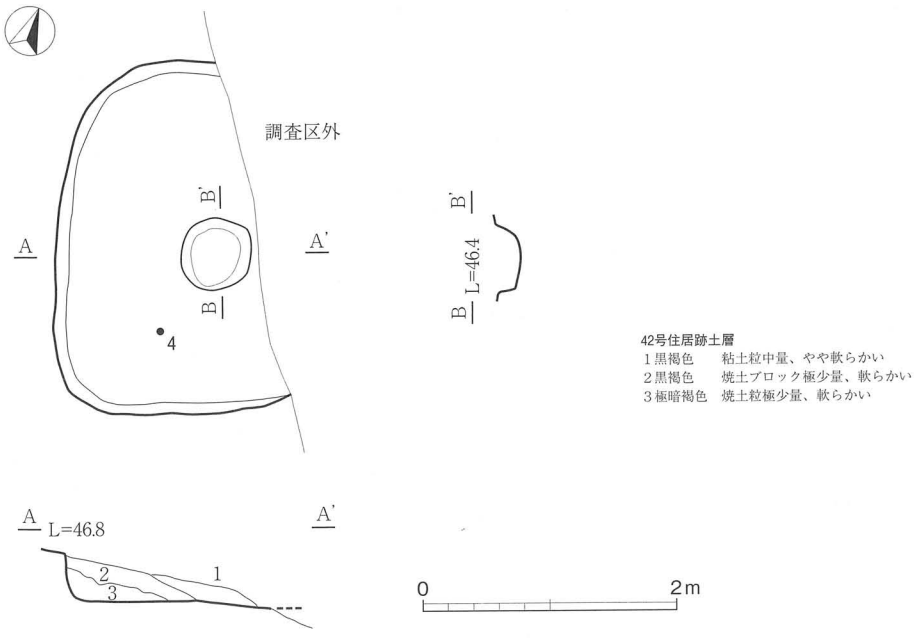
第182図　41号住居跡出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	土師器 甕	19.6 [13.3] –	口縁部を最大径とすることから甑の可能性もある。外胴部縦位（幅広）ヘラ削り、内面横位ヘラナデ。	白色粒、石英、角閃石	良好	外：明黄褐色 内：にぶい黄褐色	口縁～胴部片

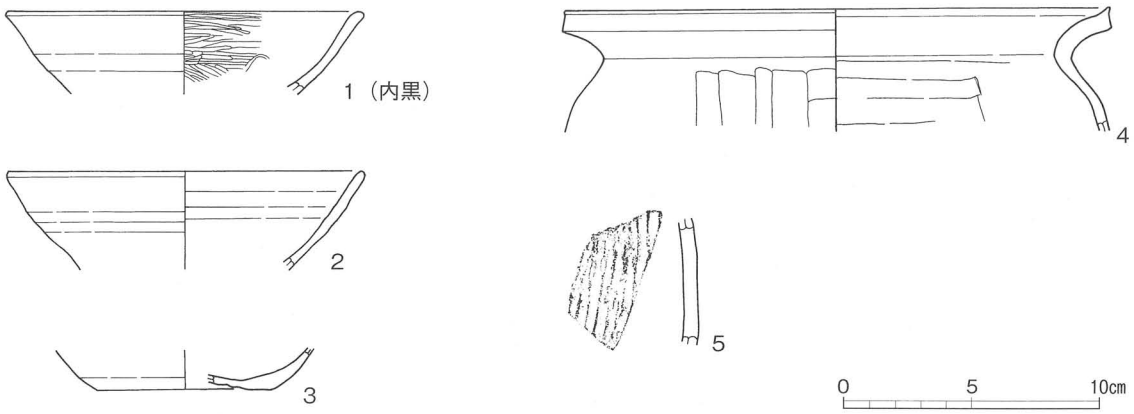
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	土師器 甕	－ [5.3] 5.6	外胴部下端はヘラ削り、内面ヘラナデ。	白色粒、石英	良好	外：褐色 内：黒褐色	底部
5	鉄製品 刀子	先端部欠損。背・刃関がある。長さ 12.6] cm、幅 0.9cm、厚さ 0.2cm、重さ 9.5g。					ほぼ完形
6	用途不明 鉄製品	両端部欠損。先端側は片面に刃が付き、他の部分は断面長方形。長頸鏃の可能性も有する。 長さ［10.7］cm、幅 0.6cm、厚さ 0.2cm、重さ 8.6g。					破片

42号住居跡（第183・184図）

位置　C６グリッドにある。　**規模と平面形**　2.60 ×（1.80）mの隅丸方形、東側は近代溝で切られ全貌は不明である。　**主軸方向**　N－19°－W。　**壁**　壁高は32cm、垂直に立ち上がる。　**床**　全体的に軟弱である。ほぼ中央に楕円形で55 × 55cm、深さ20cmの掘り込みがある。　**覆土**　自然堆積。　**遺物**　供膳具の割合は須恵器が多く、6の灰釉陶器皿が細片で出土、実測不能から写真のみ。　**所見**　35・36号住と同様に隅丸タイプであるが、いずれもカマドの存在は不明であり、住居跡として扱ってよいか分からない遺構である。厳密には竪穴状遺構とすべきであろう。9世紀中葉頃である。



第183図　42号住居跡



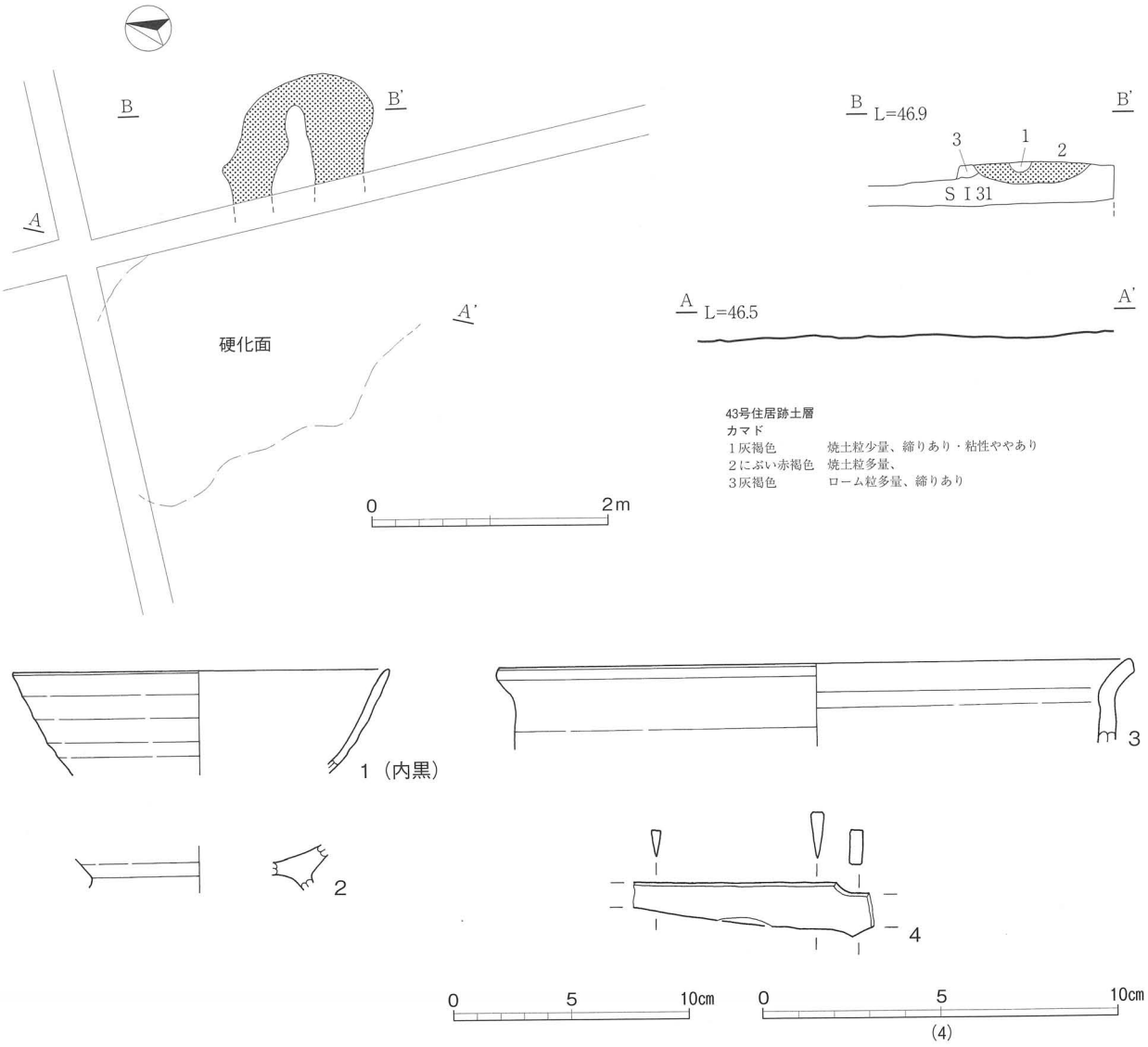
第 184 図　42 号住居跡出土遺物

表 89　42 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(14.0) [3.3] －	ロクロ成形。内面ヘラ磨き・黒色処理。	白色粒、石英	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
2	須恵器 坏	(14.0) [3.9] －	ロクロ成形。	白色粒、石英、角閃石	良好	灰白色	口縁部片
3	須恵器 坏	－ [1.6] (6.6)	底部は回転ヘラ切り。	白色粒、石英	還元軟質	黒褐色	底部片
4	土師器 甕	(21.4) [4.8] －	口縁部は外反し端部で摘み上げる。外胴部縦位ヘラ削り、内面は横位ヘラナデ。	石英、白色粒	良好	橙色	口縁部片
5	須恵器 甕	－ － －	外胴部は平行タタキ。	雲母	還元軟質	灰黄色	胴部片
6	灰釉陶器 皿	－ － －	ロクロ成形。釉調は黄灰色。	黒色粒	良好	灰白色	底部片 写真のみ

43 号住居跡（第 185 図）

位置　Ｄ６グリッドにある。　**重複関係**　31 号住が古い。　**主軸方向**　Ｎ－77°－Ｅ。　**床**　幅 200cmで硬化している。　**カマド**　東壁であるが正確な位置までは分からない。焼土範囲での検出である。焼土の範囲は長さ、幅ともに１ｍあり、カマドの火床部とするには大きすぎる。硬化面とセットで住居跡とした。　**遺物**　須恵器はなく灰釉陶器瓶の細片（写真）が出土。　**所見**　10 世紀前半代。



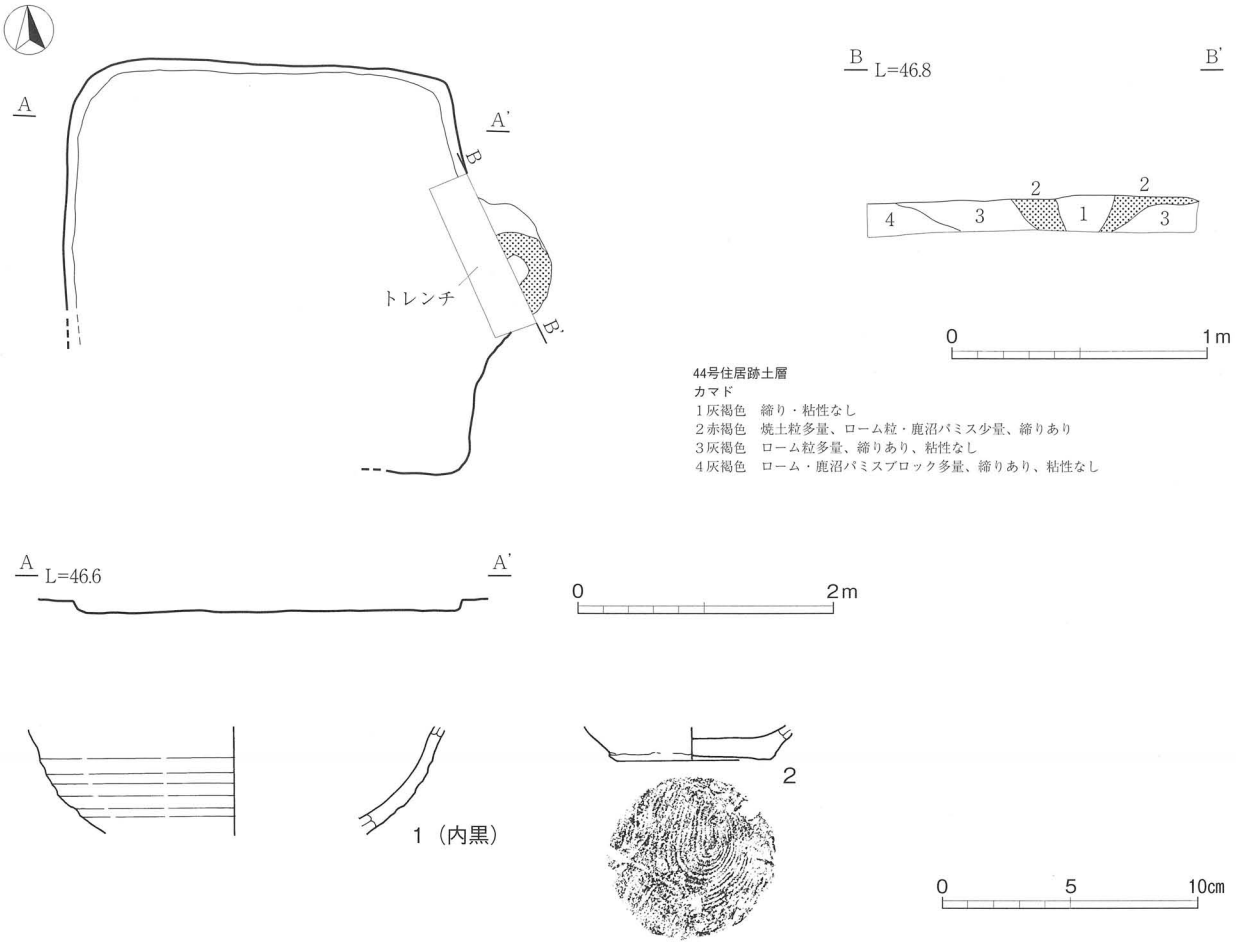
第185図　43号住居跡・出土遺物

表90　43号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(16.0) [4.2] －	ロクロ成形。内面は剥離激しい、ヘラ磨き・黒色処理。	白色、石英	良好	明黄褐色	口縁部片
2	土師器 高台付坏	－ [1.8] －	ロクロ成形。	白色粒、石英粒	酸化軟質	橙色	底部片
3	土師器 甕	(27.0) [3.4] －	ロクロ成形。口縁部は外傾し端部は面をなす。	石英、チャート	良好	橙色	口縁部片
4	鉄製品 刀子	長さ 6.7] cm、幅 1.3cm、厚さ 0.4cm、重さ 9.02g。					
5	灰釉陶器 瓶	－ － －	ロクロ成形。釉調は黄灰色。	黒色粒	良好	灰白色	体部片 写真のみ

44号住居跡（第186図）

位置　Ｄ６グリッドにある。　**規模と平面形**　3.10 × 3.00 ｍの方形。　**重複関係**　34号住が古い。　**主軸方向**　Ｎ－94°－Ｅ。　**壁**　壁高は10cm。　**床**　特に硬化した範囲は見られなかったが締まった状況ではある。　**カマド**　東壁中央にあり、袖部は削平されてない。焼土が半環状に検出された。　**遺物**　土師器のみ出土。　**所見**　10世紀前～中葉頃である。



第186図　44号住居跡・出土遺物

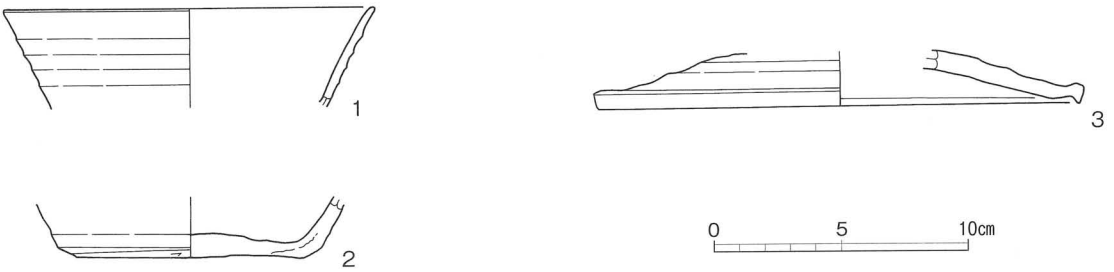
表91　44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	－ [4.3] －	ロクロ成形。内面は剥離激しい、ヘラ磨き・黒色処理。	石英、白色粒	良好	外：浅黄橙色 内：黒色	体部片
2	土師器 坏	－ [1.3] 6.6	底部は回転糸切り。	石英、白色粒、角閃石	良好	外：橙色 内：にぶい黄橙色	底部

第２節　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第 187・188 図）

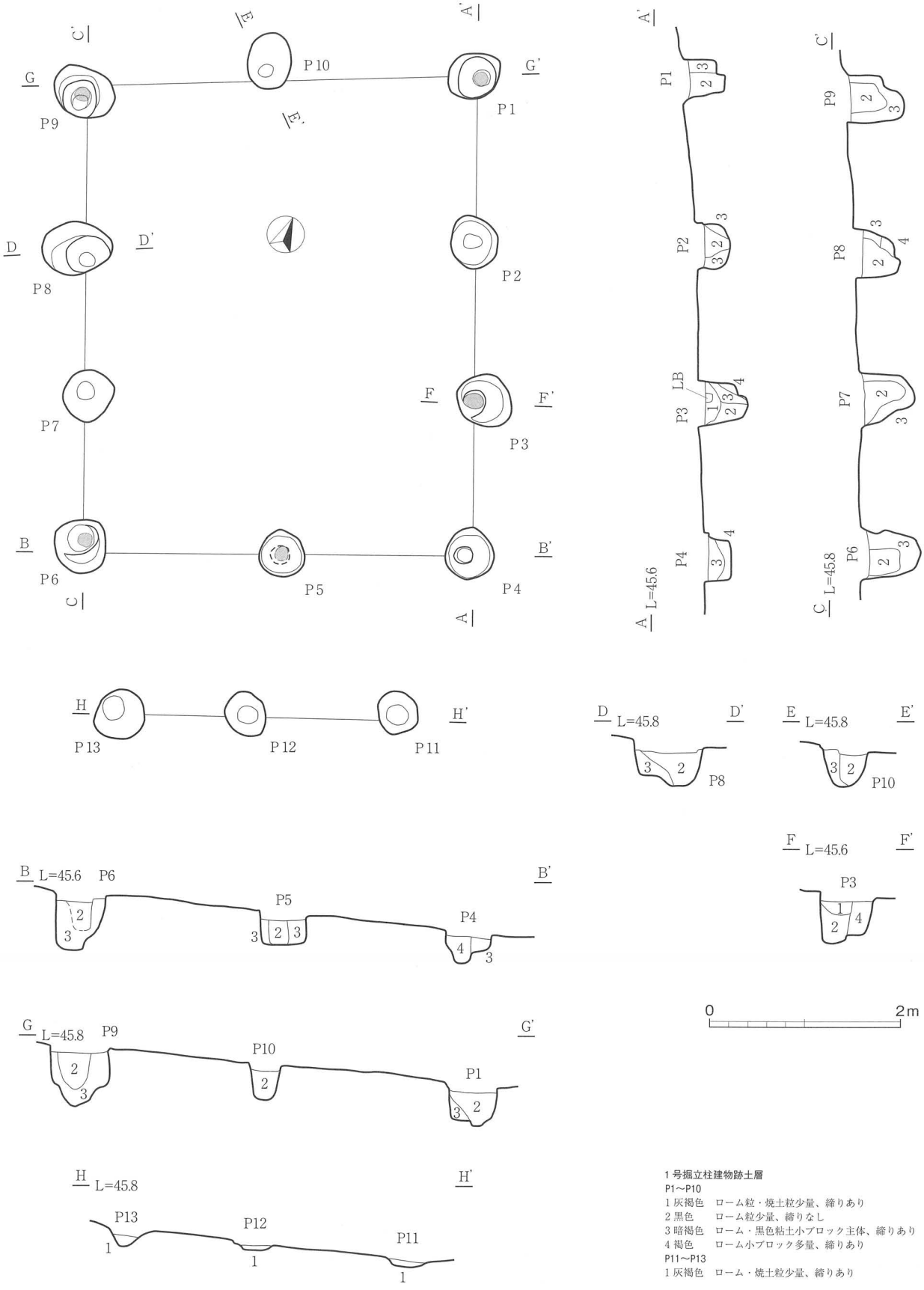
位置　C、D６グリッドにある。　**立地**　北西側～南東側に低くなる緩斜面にある（東側 2°、南側 11°）。**規模と柱構造**　桁行３間×梁行２間の側柱建物である。総長は桁行 5.00 m×梁行 4.00 mの長方形である。柱間は桁行西側が 4.80 m（1.80、1.50、1.50）、東側は 5.00 m（1.80、1.50、1.70）で西側がやや短い。梁行は北側が 4.12 mで（1.88、2.24）、南側は 4.00 m（2.00：2.00）である。建物形状は西側桁行が東側桁行より 20cm長いため菱形状となる。　**主軸方向**　N－24°－W。南北棟である。　**柱穴**　P1～10 の平面形は楕円形主体である。規模は最大（P8）で 70×50cm、最小（P5）50×45cmである。また南側桁行の南方 1.80 m に P11～13 の浅い柱穴が確認された。ＳＢ 01 とＳＢ 02 のように西側桁筋が通るが、この柱穴は梁間よりも短く東西には伸びない。並びは先の桁行と併行している事からＳＢ 01 に関わりのある柱穴と推定したが、南側は下り斜面となり柱穴の遺存も悪く、少量なくとも P13 の東側には検出されなかった。距離は南側の梁行から 0.90 mであるが、梁行と併行するだけで柱筋とも対応しないが、現段階では性格不明ながら関連する遺構とした。柱穴覆土　白色粒粘土と鹿沼土、ローム土、黒色土で固めているが互層の状況は捉えられなかった。柱痕は P1、5、6、9、抜き取りは P3、７、８である。　**遺物**　いずれも覆土中からである。１は P3、２は P9、３は P1 からである。**所見**　９世紀中葉である。



第 187 図　１号掘立柱建物跡出土遺物

表 92　１号掘立柱建物跡出土遺物観察表

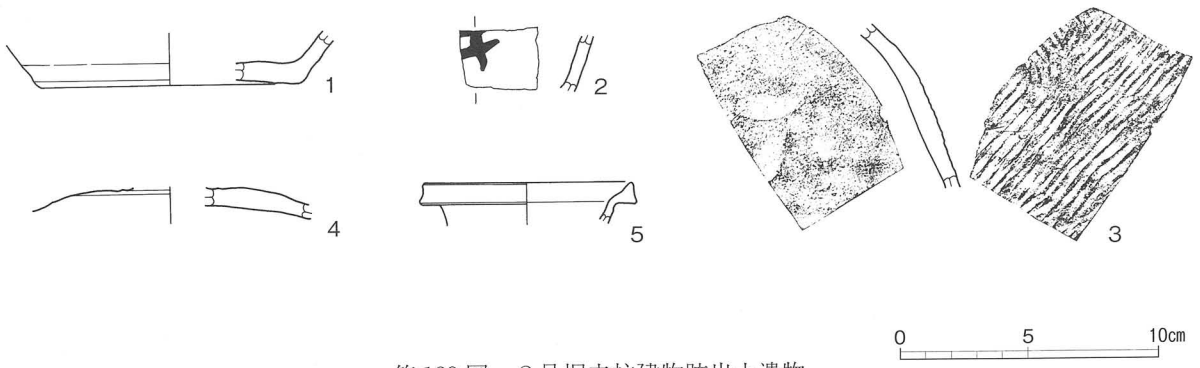
図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	(14.6) [3.9] －	ロクロ成形。	白色粒、海綿骨針	良好	灰色	口縁部片
2	須恵器 坏	－ [2.1] (8.9)	底部回転ヘラ削り。	白色粒、石英	良好	灰色	底部 25%
3	須恵器 蓋	(21.8) [2.1] －	天井部は1/2回転ヘラ削り、口縁端部は三角状に突出する。	白色粒、黒色融出粒	良好	灰色	天井部片



第188図　１号掘立柱建物跡

２号掘立柱建物跡（第 189・190 図）

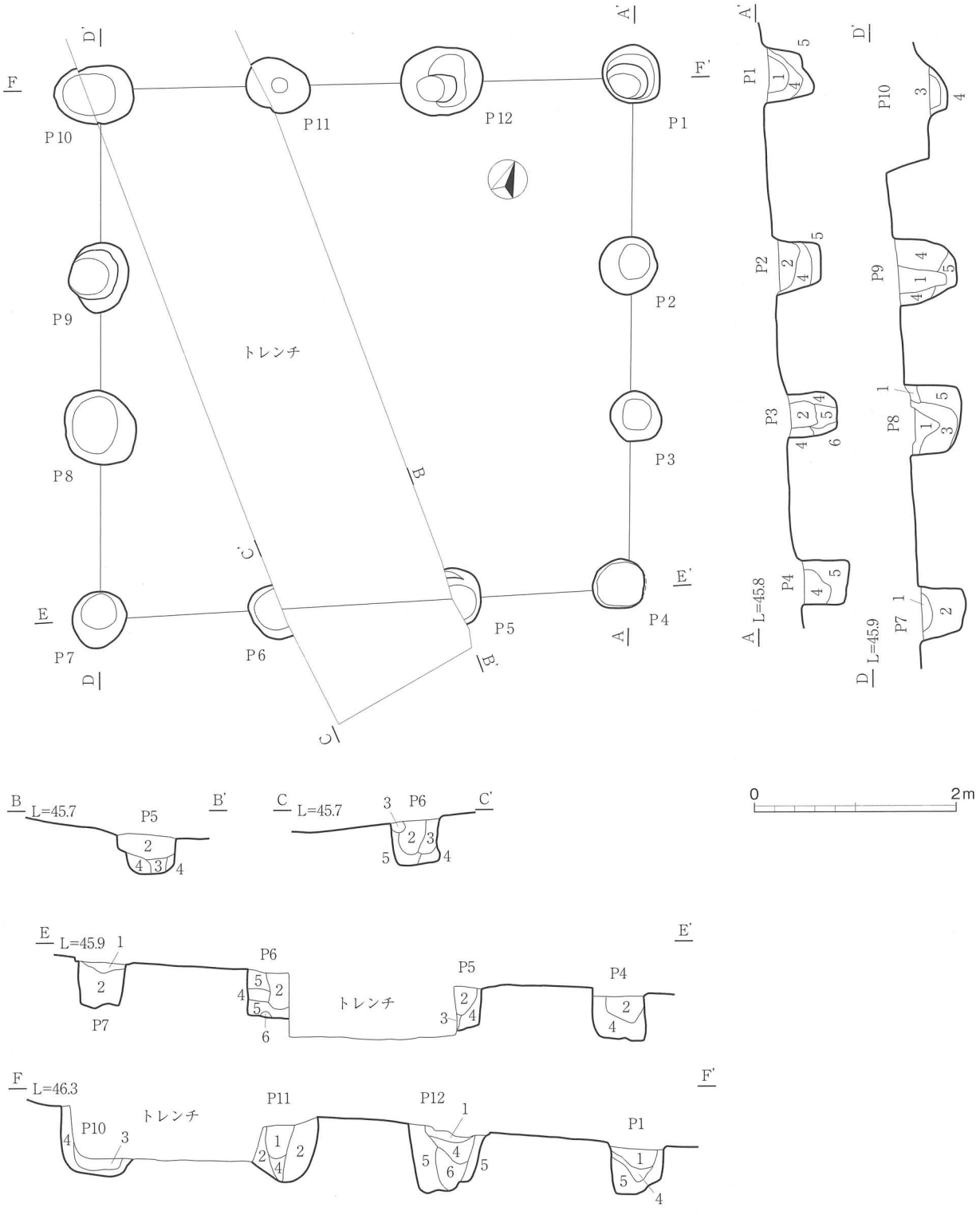
位置　Ｃ６グリッドにある。　**立地**　北西側～南東側に低くなる緩斜面にある（東側 5°、南側 11°）。　**規模と柱構造**　桁行３間×梁行３間の側柱建物である。総長は桁行 5.30 m×梁行 5.20 mの方形である。柱間は桁行西側が 5.30 m（1.80、1.50、2.00）、東側は 5.10 m（1.80、1.50、1.80）でやや短い。梁行は南北とも 5.20 mであるが北側が（1.80、1.50、1.90）、南側は（1.88、1.40、1.92）である。建物形状は西側桁行が東側桁行より 10cm短いため菱形状となる。建物の柱は側柱のみで、内部には側柱と同規模の柱穴は皆無であることから総柱建物ではない。またその位置は大半が試掘坑で壊され、P2 ～ 9 と P5 ～ 12、P3 ～ 8 と P5 ～ 12 の交点は念入りに精査したが確認には至らなかった。床束を有する可能性も残る建物である。　**主軸方向**　N －24° －W。南北棟である。　**柱穴**　P1 ～ 12 の平面形は楕円形主体である。北側梁行、西側桁行側に比べその対面側の柱穴は小規模であるが、これは立地に由来するためである。規模は最大（P12）で 42 × 32cm、最小（P3）26 × 25cmである。　**柱穴覆土**　白色粒粘土と黒色土で固め P3、6、11、12 は互層となる。柱痕は P3、6、9、11、12、抜き取りは P8 である。　**遺物**　いずれも覆土からである。１は P11、２は P9、３は P8、４は P12、５は P2 からである。２は墨書土器で「井」ヵ。　**所見**　３×３間の建物は仏堂としての性格付けがなされている（須田 2005）。ＳＢ 01 とＳＢ 02 は西桁筋が通ることから同様の性格を持つ建物である。



第 189 図　２号掘立柱建物跡出土遺物

表 93　２号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	－ [1.7] (10.0)	底部回転ヘラ切り。	白色粒、黒色粒	良好	灰白色	底部片
2	須恵器 坏	－ － －	ロクロ成形。外体部に墨痕「井」ヵ。	白色粒、海綿骨針	未還元	橙色	体部片
3	須恵器 甕	－ － －	外胴部平行タタキ、内部は当て具痕。外体部	白色粒	良好	灰色	胴部片 新治産
4	須恵器 蓋	－ － －	天井部は 1/3 回転ヘラ削り。	白色、石英、海綿骨針	良好	灰色	天井部片
5	須恵器 長頸壺	(8.2) [1.6] －	ロクロ成形。口縁部は端部を摘み出し断面三角形である。	白色粒、黒色粒	良好	灰色	口縁部片



２号掘立柱建物跡土層

1 灰褐色　ローム粒・焼土粒少量、締りあり
2 暗褐色　ローム粒少量、締りなし
3 黒褐色　ローム粒少量、締りあり
4 暗褐色　灰白色粘土・ローム小～中ブロック中量、ローム粒、締りあり
5 暗褐色　混じりの少ない暗褐色土、締りあり
6 黒褐色　灰褐色小ブロック少量、ローム小ブロック中量、軟らかい、柱痕

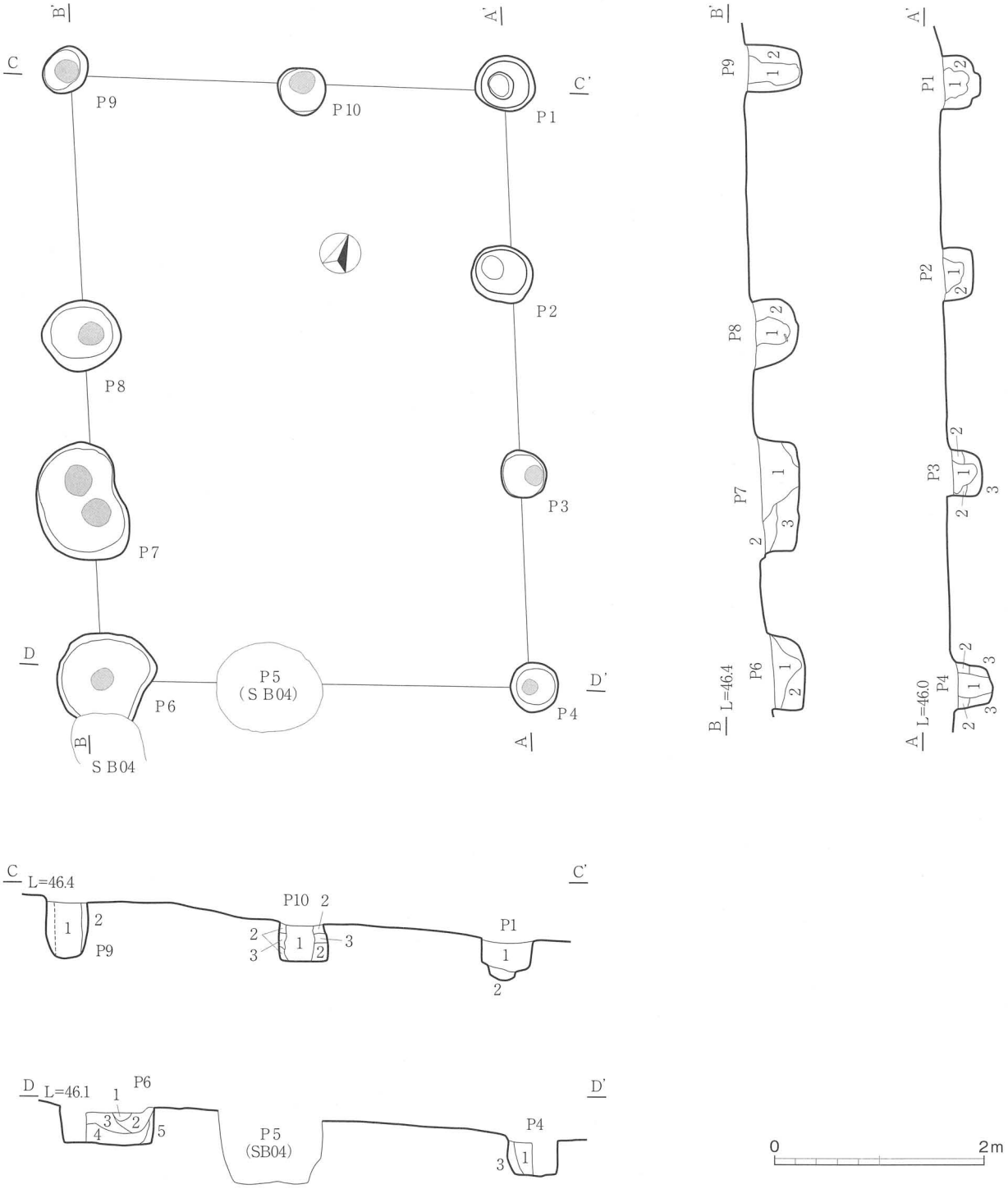
第 190 図　２号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（第191・192図）

位置　D6グリッドにある。　**立地**　北西側～南東側に低くなる緩斜面にある（東側5°、南側2°）。　**規模と柱構造**　桁行3間×梁行2間の側柱建物である。総長は桁行5.40 m×梁行4.10 mの長方形である。柱間は桁行西側が5.90 m（2.60、1.70、1.60）、東側は5.90 m（1.80、2.20、2.10）である。梁行は北側が4.10 mで（2.20、1.90）、南側は4.10（1.90：2.20）で、南梁行中柱の位置はSB 04の柱穴に切られ分からないが最長でも1.90 mである。建物形状は桁行、梁行ともに同じ長さであるが平行四辺形となる。　**重複関係**　SB4 P1、P12との切合い、方向性からSB 04が新しい。　**主軸方向**　N－25°－W。南北棟である。　**柱穴**　P1～10の平面形は楕円形主体で、桁行西側P6～8の規模が大きい。規模は最大（P7）で120×75cm、最小（P3）45×45cm、大半は50cm前後である。　**柱穴覆土**　基本的にP10が示すように覆土は互層をなすようである。柱痕はP1、4、8～10、抜き取りはP2、3、底部のアタリはP3、4、6、6～10である。柱筋は両梁行では通るが、桁行では通りが悪い。隅角のP4、9はいずれも柱痕、アタリ（P1、6）上に柱筋が通っている。　**遺物**　須恵器主体に出土している。1·2·9がP8、4·5·7·8·11·12がP7、3·6がP2、10がP3である。　**所見**　遺物年代は9世紀中葉であろう。

表94　3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(14.0) [3.6] –	ロクロ成形。内部はヘラ磨き、黒色処理。	白色粒、石英	酸化軟質	外：橙色 内：黒色	口縁部片
2	土師器 坏	(13.0) [3.5] –	ロクロ成形。内部はヘラ磨き。	石英、海綿骨針	良好	橙色	口縁部片
3	須恵器 坏	(14.2) [4.5] –	ロクロ成形。	白色粒、石英、チャート	良好	にぶい黄橙色	口縁部片
4	須恵器 坏	– [1.6] (7.0)	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り後線刻「二」。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	灰白色	底部片
5	須恵器 高台付坏	(14.3) 5.1 (8.8)	底部回転ヘラ削り。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	黄灰色	25%
6	須恵器 高台付坏	13.7 8.3 5.5	底部回転ヘラ削り。	白色粒、石英、海綿骨針	良好	灰色	70%
7	須恵器 盤	(21.8) 4.7 (14.0)	ロクロ成形。	白色粒、石英	良好	灰色	20%
8	土師器 甕	(20.0) [6.5] –	口縁部は外反し端部は摘み出される。	白色粒、石英、雲母	良好	にぶい褐色	口縁部片
9	土師器 甕	(18.0) [8.9] –	口縁部は外反し端部は摘み出される。	白色粒、石英、雲母	良好	にぶい褐色	口縁部片
10	須恵器 盤	– – –	内：当て具痕、外：平行タタキ。	石英、白色粒、黒色粒	良好	灰色	胴部片
11	土製品 甕	– – –	手捻り。甕・甑等の把手。	白色粒、角閃石	良好	橙色	把手部
12	鉄製品 鏃	断面方形の棒状で大型鏃の茎であろうか。長さ［7.7］cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm、重さ8.7g。					茎部



３号掘立柱建物跡土層

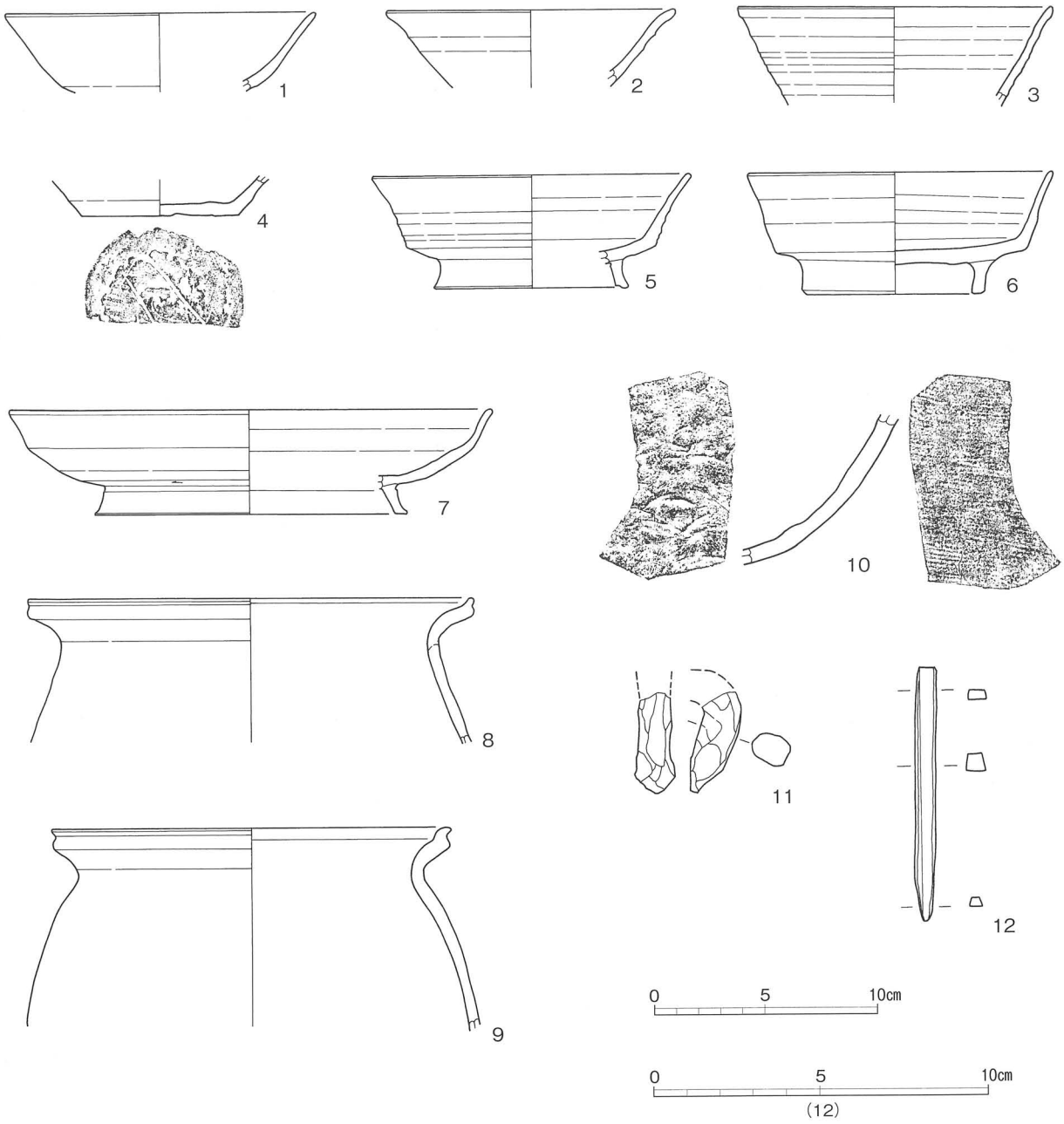
P1～5、P7～10

1 黒褐色　粘性のあるにぶい褐色ローム粒少量、わずかに軟らかい、粘性あり、炭化物極少量
2 黒褐色　ローム粒中量、硬く締り・粘性あり、黒色土中ブロック少量
3 黒褐色　ローム粒少量、硬く締り・粘性あり

P6

1 褐色　　締りなし、粘性なし
2 黒褐色　ローム粒少量、締りあり
3 黒褐色　ローム粒中量、締りあり
4 黒褐色　ローム粒少量、締りあり、粘性なし、炭化物少量
5 黒褐色　ローム粒少量、締りあり

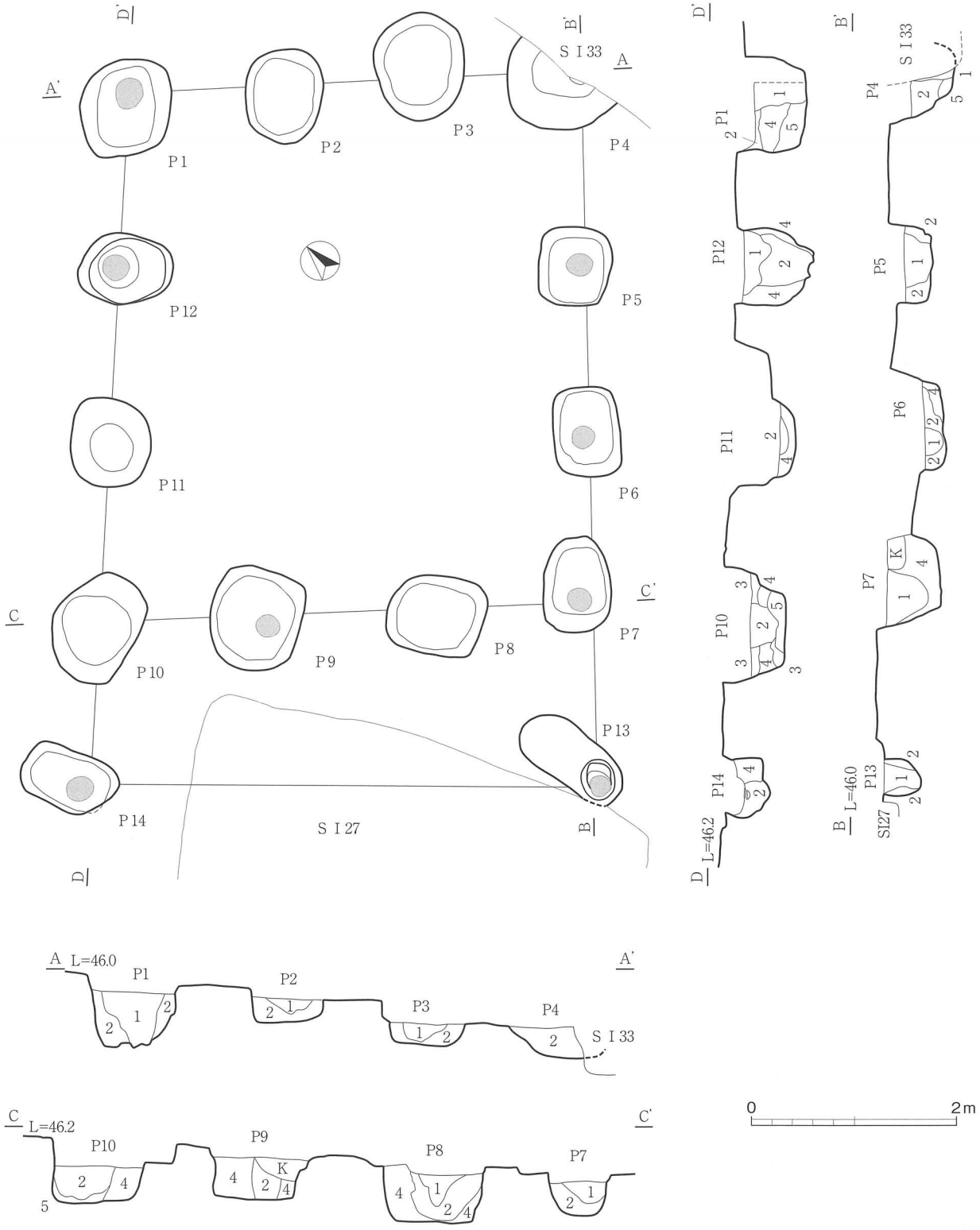
第 191 図　３号掘立柱建物跡



第192図　3号掘立柱建物跡出土遺物

4号掘立柱建物跡（第193・194図）

位置　D6グリッドにある。　**立地**　SB01～03、05が位置する緩斜面のやや西にある（東側2°、南側4°）。　**規模と柱構造**　桁行3間×梁行3間の側柱建物である。総長は桁行5.20～5.50m、梁行4.50～4.95mの台形である。建物の形状は柱痕、あたりが確認された東桁筋と北梁筋とが直角となるためこれを基準に決め、柱間もそれに従って行なった。柱間は桁行東側が5.20m（1.80、1.80、1.60）、西側は5.50m（1.80、1.80、1.90）でやや長い。梁行は北側が4.50m（1.50、1.50、1.50）で等間となる。南側は4.95m（1.80、1.80、1.35）であり、桁行、梁行ともに長いため建物は台形となる。このほか南梁の南側には、側柱穴より小規模の柱穴P13、14が東、西桁行の延長上にある。その間は7号住居跡に切られその梁筋はわからない。この梁筋があっ

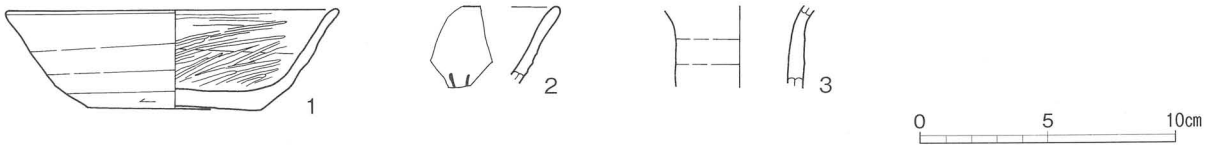


４号掘立柱建物跡土層

1 黒褐色　ローム粒・ロームブロック少量、やや軟らかい
2 暗褐色　ローム中ブロック中量、黒色粘土ブロック少量、締りなし
3 黒褐色　黒色粘土主体、ローム粒少量、締りあり
4 暗褐色　ローム小ブロック中量、黒色粘土ブロック少量、締りあり
5 暗褐色　ローム中ブロック中量、黒色粘土ブロック中量、締りあり

第 193 図　４号掘立柱建物跡

たと仮定するとP13、14の柱穴規模は小さく、P1～12は規模も大きく揃っていることから、この間が身舎でP13、14筋は 片面廂が推定される。　**重複関係**　ＳＢ03が古い。　**主軸方向**　Ｎ－43°－Ｅ。当該遺構のみ東西棟である。　**柱穴**　平面形は楕円形主体であり、P5～9は略方形である。他の建物より規模は大きい。規模は最大(P9)で100×90cm、最小(P5)80×75cmである。　**柱穴覆土**　黒色土主体とロームブロックで締めているが、互層と判断出来たのはP1、12である。柱痕はP1、6、7、9、12、13、あたりはP5～7、抜き取りはP8、10である。前述した片面廂は東側桁筋の南側1.80ｍにP13、西側桁筋の南側1.50mにP14が確認された。P13の規模は40×32cm、P14は90×60cmである。いずれも楕円形である。　**遺物**　土師器坏と須恵器長頸壷の出土である。1はP1 、2･3はP7 である。2は外体部に墨痕がある。　**所見**　遺物年代は9世紀後半代であろう。



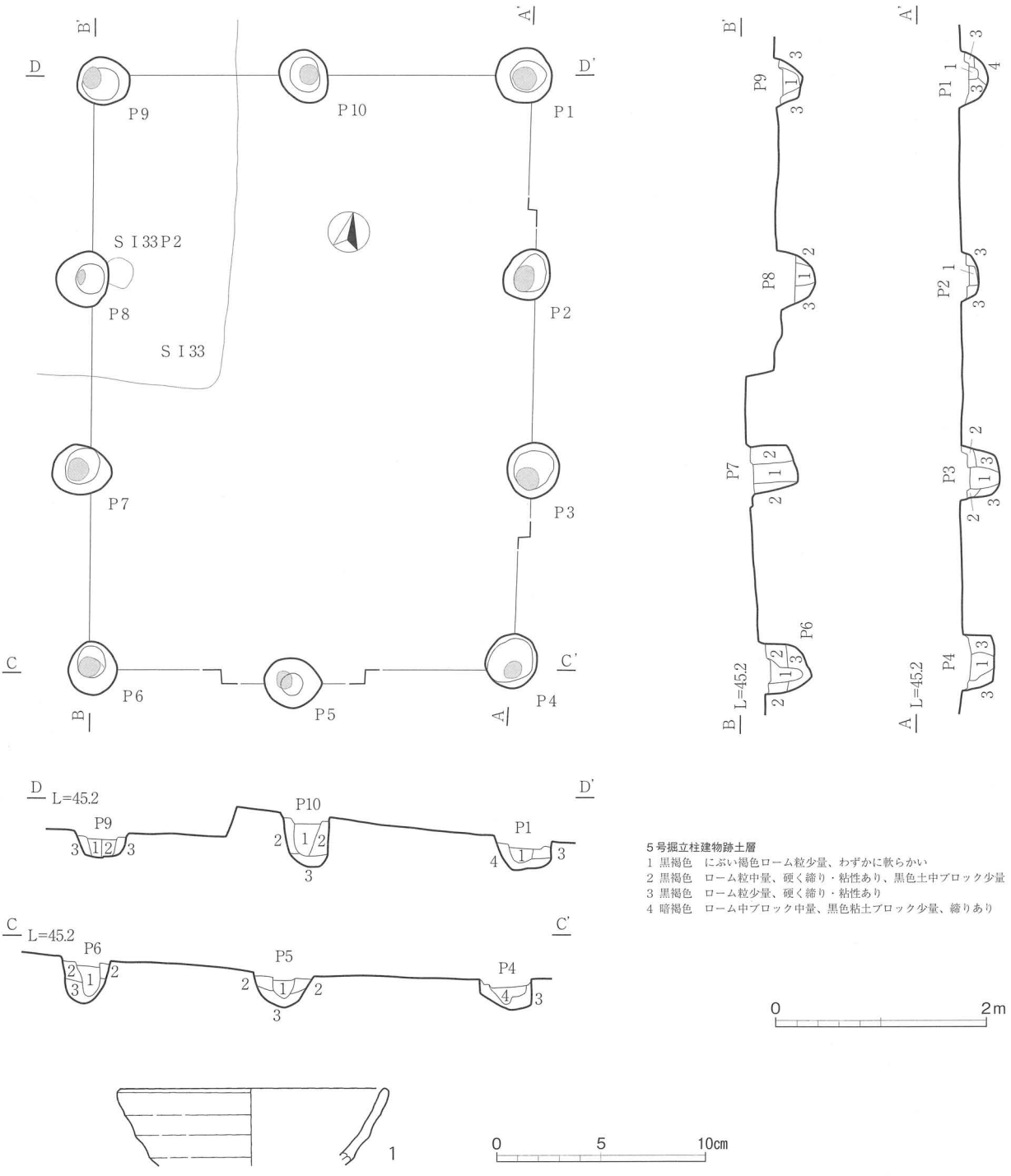
第194図　4号掘立柱建物跡出土遺物

表95　4号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	13.1 4.0 6.8	体部下端～底部回転ヘラ削り。内部ヘラ磨き、黒色処理。	白色、石英、海綿骨針	良好	外：にぶい黄橙色 内：黒色	70%
2	土師器 坏	－ － －	ロクロ成形。外体部墨痕。内部ヘラ磨き、黒色処理。	白色粒、石英	良好	にぶい褐色	口縁部片
3	須恵器 長頸壷	－ [3.0] －	ロクロ成形。最大径5cm。	白色粒、石英	良好	灰色	頸部片

５号掘立柱建物跡（第195図）

位置　Ｄ６グリッドにある。　**立地**　北西側～南東側に低くなる緩斜面にある（東側0°、南側6°）。　**規模と柱構造**　桁行3間×梁行2間の側柱建物である。総長は桁行5.80ｍ×梁行4.00ｍの長方形である。柱間は桁行西側が5.80ｍ(2.00、1.80、2.00)、東側も5.80ｍ(2.00、1.90、1.90)である。梁行は北側が4.00ｍで(2.00、2.00)の等間、南側は（1.90、2.10）である。　**重複関係**　33号住居跡を切る。　**主軸方向**　Ｎ－7°－Ｗ。　**柱穴**　P1～10の平面形は楕円形主体である。規模は最大（P1）で55×54cm、最小（P2）50×45cmであるが他はほぼ均一である。　**柱穴覆土**　黒色土とロームブロックを混ぜた暗褐色を主体とし雲母を含む粘性の強い覆土である。残りが浅いため互層をなすかは分からなかった。柱痕はP2～10、アタリはP1～10の全てで確認された。　**遺物**　1はP1からの出土である。　**所見**　遺物年代は概ね9世紀代であろう。



第 195 図　５号掘立柱建物跡・出土遺物

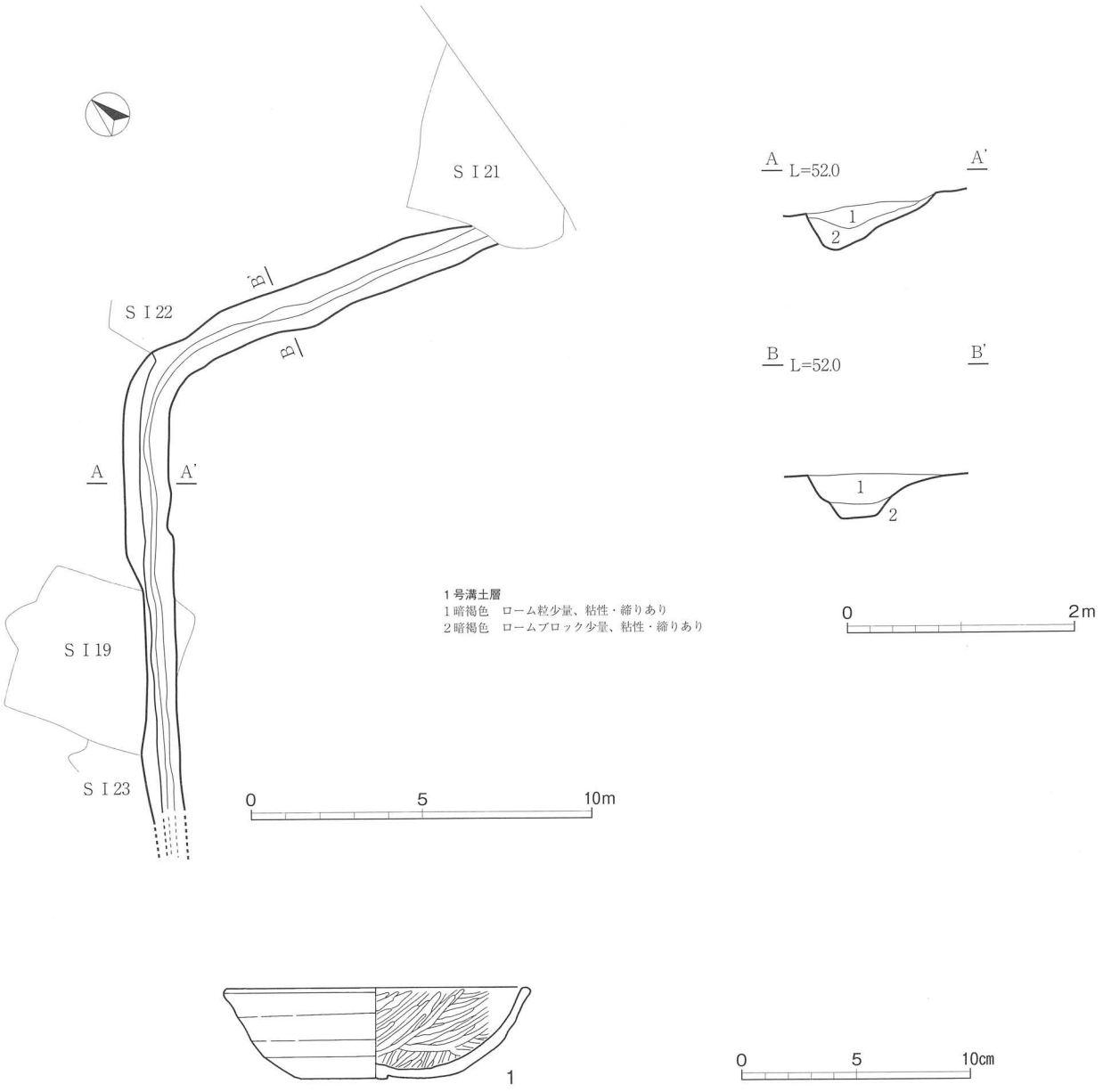
表 96　５号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(13.0) [3.7] –	ロクロ成形。内部ヘラ磨き、黒色処理。	石英、海綿骨針	良好	外：橙色 内：黒色	口縁部片

第３節　溝

１号溝（第 196 図）

位置　Ｄ５グリッドに位置する。　**規模と平面形**　長さ 45 m、幅 2.0 ～ 2.5 m、深さ 0.35 ～ 0.40 m。南西～北東、北西～南東方向に直角に折れ曲がる。断面は逆台形である。　**遺物**　土師器坏内黒である。　**所見**　調査時には６条検出され検討した結果、ＳＤ 01 以外は近世以降の所産とした。ＳＤ 01 は時期の特定はできなかったがＳＩ 19・21・22 を切っており、覆土も住居跡とほぼ同様で平安時代あるいは、中世段階であろう。



第 196 図　１号溝・出土遺物

表97　1号溝出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	13.5 7.2 4.0	底部回転ヘラ切り、内部はヘラ磨き、黒色処理。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	にぶい黄橙色	60%

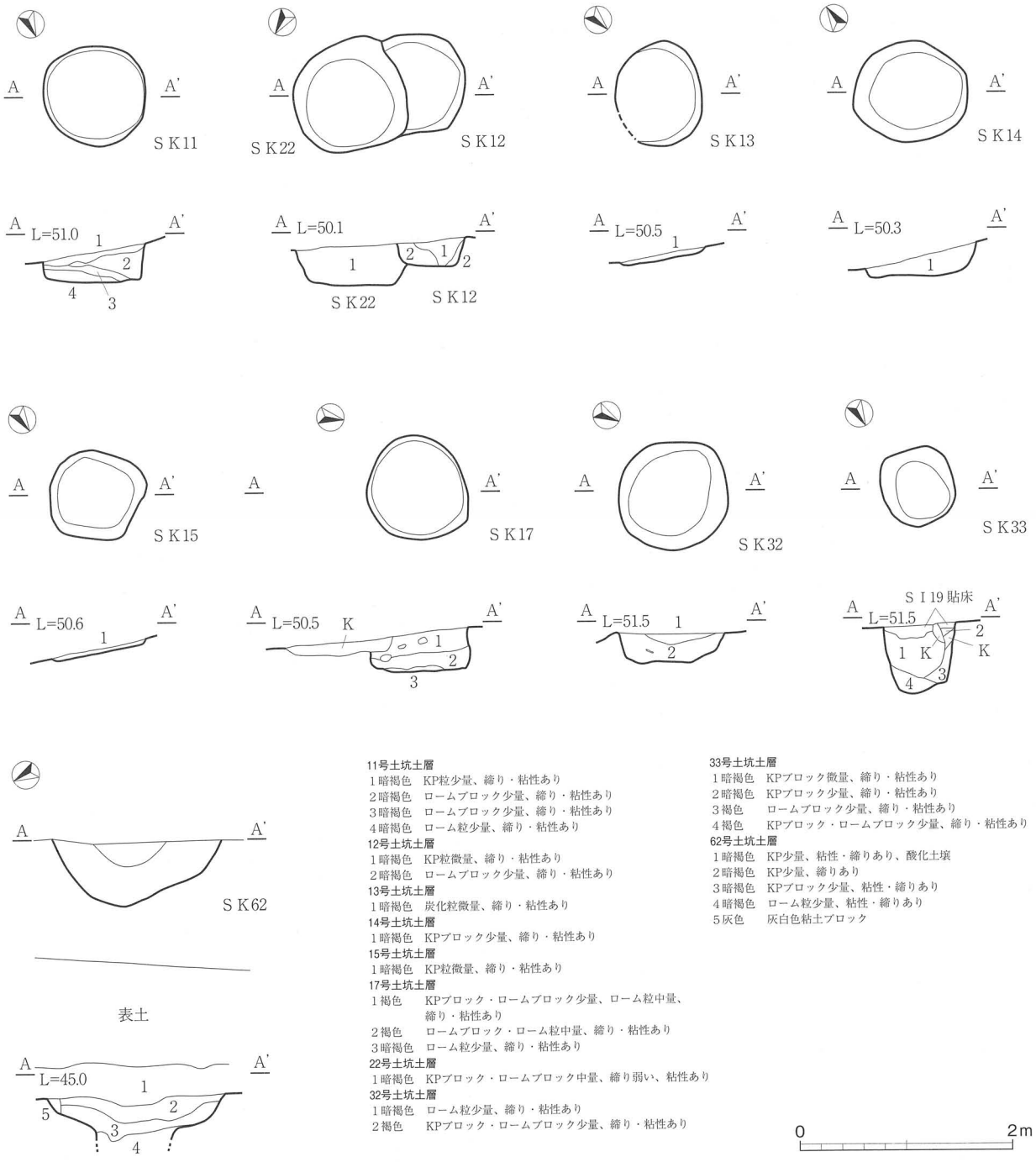
第4節　土坑

調査時では土坑とした穴は62基検出された。その後現地、整理調査で検討を行なった結果、大半はイモ穴、ゴミ穴の類であることが判明し、その全容を一覧（表98）にし、土坑番号は調査時に付したものを踏襲した。掲載土坑（第197・198図）は覆土の締り具合からＳＫ11～　15、17、22、32、33、62の10基とした。時期は概ね遺物と覆土のしまり具合から平安時代以降、近世以前とした。なおＳＫ62は井戸と思われるが時期については明確でない。また上記以外の土坑出土遺物についても掲載した。（松田）

表98　C区土坑一覧表

遺構名	位置	平面形態	規模（cm）			備考
			長径	短径	深さ	
1号土坑	B3	円形	52	46	32	近世
2号土坑	B3	楕円形	70	67	33	イモ穴か？
3号土坑	B3	円形	105	95	39	近世
4号土坑	C4・5	楕円形	67	51	78	イモ穴
5号土坑	—	—	—	—	—	欠番
6号土坑	C5	円形	22	22	33	近世　SI4→SK6
7号土坑	B・C4	円形	115	109	26	近世
8号土坑	C5	円形	25	24	19	近世　SI4→SK8
9号土坑	B5	楕円形	160	113	41	カクラン
10号土坑	C5	楕円形	108	105	26	カクラン
11号土坑	C5	円形	96	94	38	
12号土坑	C5	円形	96	95	32	SK22→SK12
13号土坑	C5	円形	100	80	9	
14号土坑	C5	円形	106	97	28	
15号土坑	C5	円形	82	82	5	
16号土坑	C5	方形	50	49	125	ゴミ穴
17号土坑	C5	円形	103	98	39	
18号土坑	C5	円形	86	75	22	近世
19号土坑	C5	方形	141	109	72	イモ穴
20号土坑	C5	方形	103	96	47	イモ穴
21号土坑	C5	方形	133	111	72	イモ穴
22号土坑	C5	楕円形	104	99	35	近世　SK22→SK12
23号土坑	D5	方形	171	84	59	ゴミ穴（2ヶ所？）
24号土坑	C5	方形	112	36	64	イモ穴
25号土坑	D5	方形	83	46	151	イモ穴
26号土坑	B5・6	—	106	145	174	人為的埋め戻し、遺物で判断（ゴミ穴）
27号土坑	C4	楕円形	180	165	33	近世
28号土坑	C5	方形	150	101	30	イモ穴
29号土坑	C6	楕円形	198	110	72	イモ穴
30号土坑	C6	楕円形	170	122	76	イモ穴
31号土坑	C6	楕円形	75	62	24	イモ穴

遺構名	位置	平面形態	規模（cm）			備考
			長径	短径	深さ	
32号土坑	D5	円形	103	100	28	
33号土坑	D5	楕円形	72	67	64	
34号土坑	C5	楕円形	103	96	110	イモ穴
35号土坑	C5	方形	110	47	57	イモ穴
36号土坑	D5	楕円形	152	124	27	近世
37号土坑	C5	方形	89	88	47	イモ穴
38号土坑	C5	方形	82	71	67	イモ穴
39号土坑	D5	方形	220	173	55	イモ穴
40号土坑	D5	方形	256	132	52	イモ穴
41号土坑	D5	方形	239	120	32	イモ穴
42号土坑	B4・5	方形	176	79	76	イモ穴
43号土坑	B4・5	方形	176	126	93	イモ穴
44号土坑	B・C4	方形	100	58	66	イモ穴
45号土坑	C4	方形	62	61	65	イモ穴
46号土坑	B2	円形	66	47	37	イモ穴
47号土坑	C5	楕円形	111	88	61	イモ穴
48号土坑	C4	方形	120	68	—	イモ穴・L字型
49号土坑	C4	方形	60	65	—	イモ穴・L字型
50号土坑	C4	方形	119	71	—	イモ穴
51号土坑	C5	方形	66	66	94	ゴミ穴
52号土坑	C4	方形	32	28	—	イモ穴・L字型
53号土坑	C4	方形	71	42	—	イモ穴・L字型
54号土坑	C4	方形	120	63	—	イモ穴
55号土坑	C5	方形	139	91	50	イモ穴
56号土坑	C5	方形	50	30	—	イモ穴
57号土坑	B・C4	略方形	30	29	—	イモ穴
58号土坑	C5	楕円形	76	65	17	近世　SI10→SK58
59号土坑	C5	楕円形	77	71	55	近世　SI11→SK59
60号土坑	C5	方形	67	52	78	近世　SI10→SK60
61号土坑	C6	円形	180	175	30	ゴミ穴
62号土坑	D7	円形	160	(60)	50+α	井戸か



11号土坑土層
1暗褐色　KP粒少量、締り・粘性あり
2暗褐色　ロームブロック少量、締り・粘性あり
3暗褐色　ロームブロック少量、締り・粘性あり
4暗褐色　ローム粒少量、締り・粘性あり

12号土坑土層
1暗褐色　KP粒微量、締り・粘性あり
2暗褐色　ロームブロック少量、締り・粘性あり

13号土坑土層
1暗褐色　炭化粒微量、締り・粘性あり

14号土坑土層
1暗褐色　KPブロック少量、締り・粘性あり

15号土坑土層
1暗褐色　KP粒微量、締り・粘性あり

17号土坑土層
1褐色　KPブロック・ロームブロック少量、ローム粒中量、締り・粘性あり
2褐色　ロームブロック・ローム粒中量、締り・粘性あり
3暗褐色　ローム粒少量、締り・粘性あり

22号土坑土層
1暗褐色　KPブロック・ロームブロック中量、締り弱い、粘性あり

32号土坑土層
1暗褐色　ローム粒少量、締り・粘性あり
2褐色　KPブロック・ロームブロック少量、締り・粘性あり

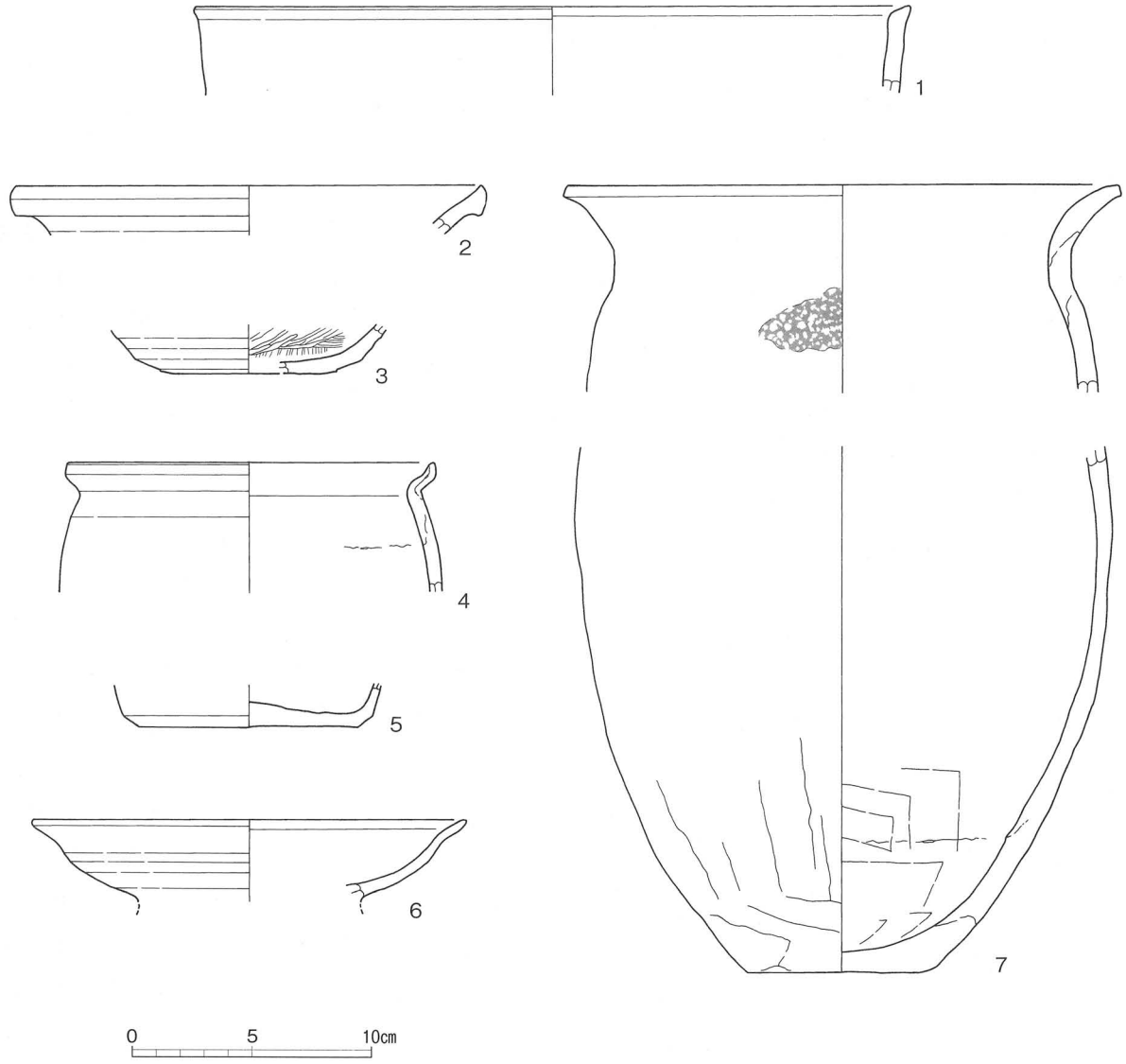
33号土坑土層
1暗褐色　KPブロック微量、締り・粘性あり
2暗褐色　KPブロック少量、締り・粘性あり
3褐色　ロームブロック少量、締り・粘性あり
4褐色　KPブロック・ロームブロック少量、締り・粘性あり

62号土坑土層
1暗褐色　KP少量、粘性・締りあり、酸化土壌
2暗褐色　KP少量、締りあり
3暗褐色　KPブロック少量、粘性・締りあり
4暗褐色　ローム粒少量、粘性・締りあり
5灰色　灰白色粘土ブロック

第197図　土坑

表99　土坑出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 甑	(30.0) [3.6] –	ロクロ成形。口縁端部は面をなす。胴部に牛角状の把手を付けるタイプ。	白色、石英、チャート	未還元軟質	にぶい黄橙色	口縁部片 1号土坑出土
2	須恵器 甕	(19.6) [2.0] –	ロクロ成形。口縁部は外反し端部は摘み出される。	石英、黒色粒	良好	灰色	口縁部片 1号土坑出土



第198図　土坑出土遺物

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	土師器 坏	－ [1.8] (7.2)	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。内部ヘラ磨き、黒色処理。	白色粒、石英	良好	外：黄灰色 内：黒色	底部片 3号土坑出土
4	土師器 甕	(15.4) [5.4] －	ロクロ成形。口縁部は外反し端部は摘み出される。	石英、白色粒	良好	明赤褐色	口縁部片 6号土坑出土
5	須恵器 坏	－ － (9.0)	ロクロ成形。体部下端～底部回転ヘラ削り。	石英、白色粒	良好	灰色	底部片 17号土坑出土
6	土師器 高台付坏	(18.2) [3.4] －	坏部は器高が低くなり高台が高くなるタイプ。口縁部は二段に亘り内・外反しする。内部ヘラ磨き。	石英、角閃石	良好	暗灰黄色	口縁部片 18号土坑出土
7	土師器 甕	(22.8) [30.0] 7.9	同じ固体とした。口縁部は外反し、端部は摘み出されてない長胴タイプ。内：ヘラナデ、外：中位は縦位ヘラ削り、下端は斜位ヘラ削り。	石英、白色粒	良好	橙色	口縁部片、胴～底部60% 18号土坑出土

第５節　祭祀土坑

祭祀土坑は、遺跡全体からすると最も東端部に当たる、C区の南東部の現水田面の高さに近い低地の際から２基確認されている。

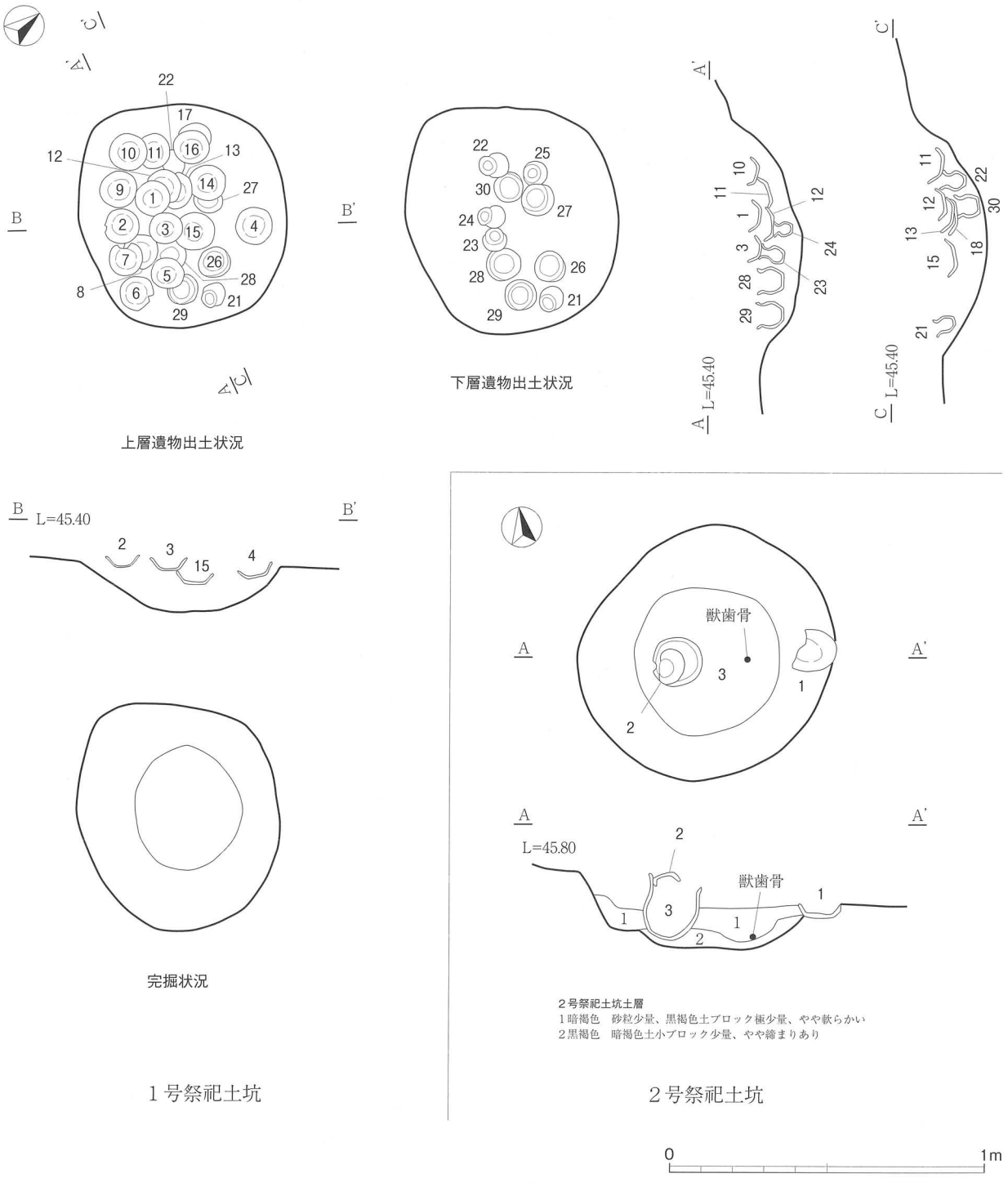
１号祭祀土坑（第199・200図）

位置　C区の南東部C６グリッド、標高45.5メートル地点にある。　**規模と平面形**　長径0.74ｍ、短径0.63ｍの楕円形で、深さ14cm。底面は皿状でやや起伏がある、壁は底面から緩やかに傾斜して立ち上がっている。　**覆土**　やや軟らかい暗褐色土を主体としており、砂粒を微量に含んでいる。　**遺物**　土師器坏20個体、土師器ミニチュア甕５個体、土師器ミニチュア壺５個体が出土している。土器は原位置を保ったまま、暗褐色土によって被覆されており、現在残っている遺物がこの土坑の底面に置かれたすべての土器と考えられる。土器はすべて正位に置かれた状態で、土坑の底面中央部にミニチュアの壺と甕を並べ置き、その上から土坑の立ち上がり斜面にかかるように坏を重ね並べている。配置の状況は、底面上の壺・甕は、北西から南東方向に向かって長く４～６個体分が２列に置かれたように並んでいる。27と26の甕の間が16cm程開いて、ここに土器は置かれていない。この開いた空間の上層からは15の坏が出土し、そこから少し離れて北東の土坑縁近くから４の坏が出土している。坏類は、４の坏のように土坑の縁近くに単独にあるもの、15の坏のように中央部に単独であるものもあれば、14の坏のように甕の上に重なるもの、また17・16のように少しずれて２枚重なったもの、重なりの多いところでは30の甕の上に18･13･12･1の坏を互い違いに４段重なったものがある。１の坏は、体部下半に丸味を持ち、ロクロ目が少なく、体部下端に手持ちヘラケズリが見られる特徴がある。２～20の坏は、体部下半に丸味を持った形状で、外面のロクロ目が細かく、底部は回転ヘラ切り離し・未調整を基本としている。ほぼすべての個体が全体に黄橙色の明るい酸化焔焼成の仕上がりである。４の坏は内面に灯明皿として使用した油煙痕が明瞭に残っている。14の坏にも油煙痕と思われる痕跡が残っている。他に10・11・20の坏は内面口縁部に黒化した跡が見られるが、焼成時の黒斑か判別が難しい。ミニチュア甕は、口縁部が短く外反し、底部径が器高に比べ大きく、体部にやや膨らみがある形状で、制作技法は外面ナデとヘラケズリ、内面指ナデである。ミニチュア壺は頸部から口縁部が長く、体部調整が上半部指ナデかヘラナデ、下半部ヘラケズリで、底面はナデ調整である。坏・甕に口縁部の破損したものは少なく、ほぼ完形品ばかりであるが、壺は５点とも一部口縁部が欠けている。　**所見**　甕は、大きさの点から明らかに実用甕と違うミニチュア土器として造られている。壺は、大きさからは小瓶のサイズであるが、製作・調整技法の点から、実用サイズの広口瓶をイメージしたミニチュア土器と思われる。壺は埋められる前に口縁部が欠けており、なんらかの用途で使用されていたものの再利用かと思われる。坏は、普通サイズのものと考えられるが、灯明皿以外は実用食器等として使用されていた痕跡に乏しい。甕・壺の口縁部は共通して摘み上げの退化が見られ、全体形状から10世紀以降のものと思われる。坏類は、外面のロクロ調整の細かさや明るい色調の酸化焔焼成、底部の回転ヘラ切り未調整の特徴がある。器形から見ると、器高が低く径も小さい点は、土師器小皿出現前段階頃のもので、実年代に比定するなら10世紀第３四半世紀頃のものと見られる[1)]。

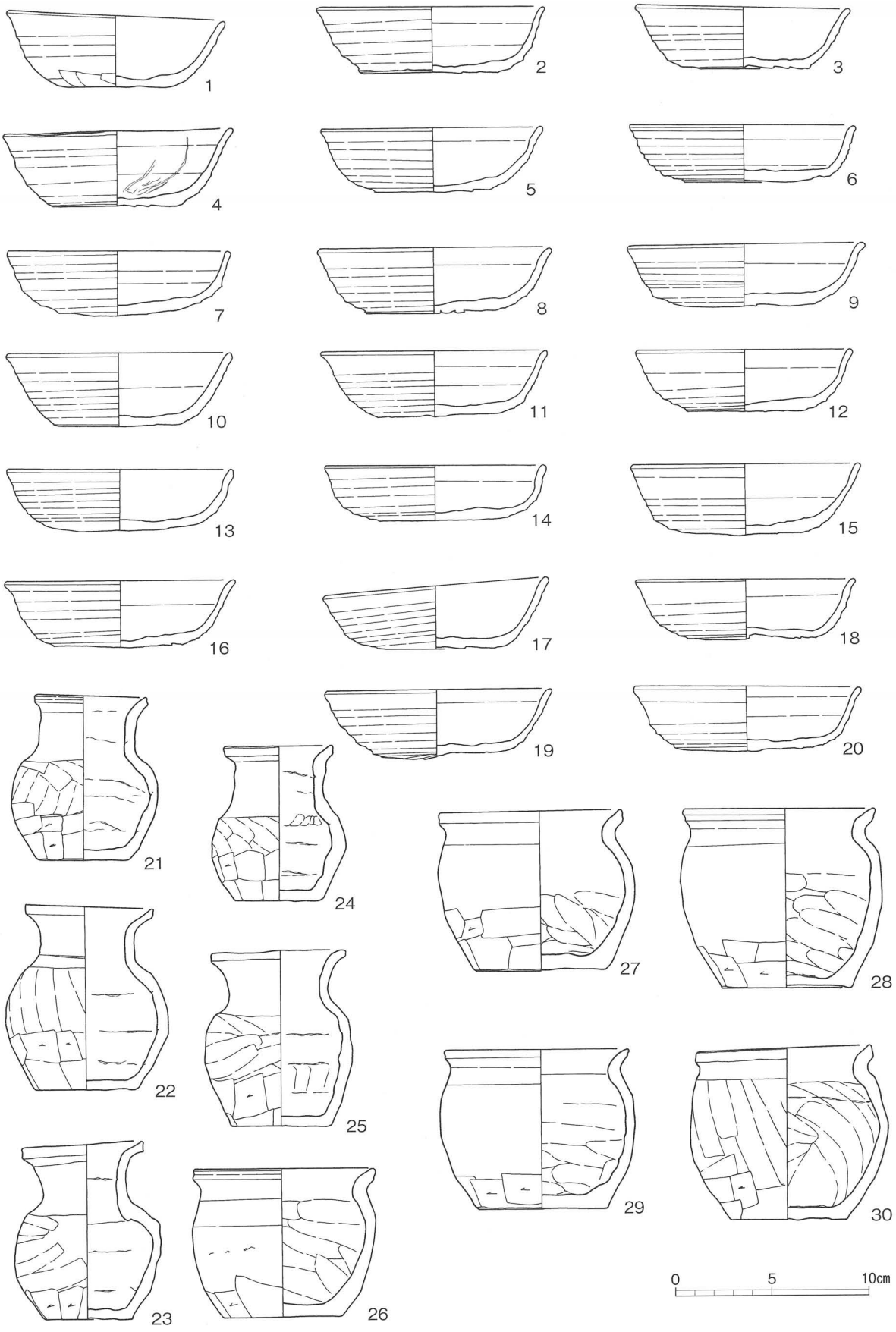
２号祭祀土坑（第199・201図）

位置　C区の南東部C６グリッド、標高約45.7メートル地点、１号祭祀土坑の北西約３ｍにある。　**規模と平面形**　長径0.79ｍ、短径0.73ｍの楕円形で、深さ23cm。底面は皿状で、壁は底面から緩やかに傾斜して立ち上がっている。　**覆土**　２層に分かれ、２層は、ローム主体の掘り方層で、１層はやや軟らかい暗褐

色の覆土で砂粒を少量含んでいる。　**遺物**　土師器の坏２個体、土師器甕、イノシシか豚の歯骨が出土している。土師器の甕は正位で土坑の底面西寄りに設置され、２の坏が逆位で蓋のように被され、底面の東寄りから歯骨が、土坑の東縁から１の坏が正位で出土している。１の坏は、黒斑を持った不安定な酸化焔焼成でつくられた土器である。２の坏は体部下端を幅広く手持ちヘラケズリし、焼成は１の坏と同じである。はっきりとした灯明皿としての使用痕が見られる。甕は短く屈曲した口縁部や口縁部の断面形状、やや寸胴形の胴部など１号祭祀土坑出土のミニチュア甕の形にやや似た雰囲気がある。歯骨は、イノシシか豚の左下顎歯



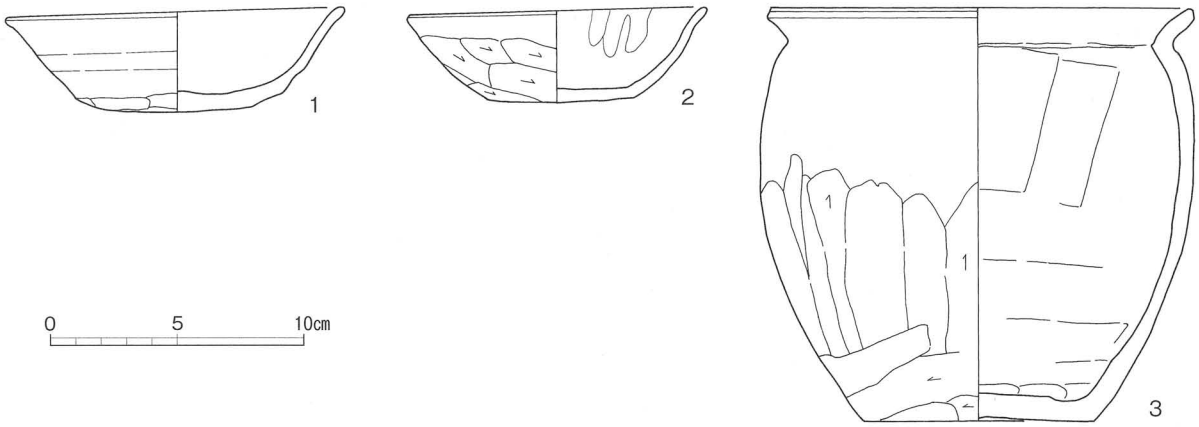
第199図　１・２号祭祀土坑



第200図　1号祭祀土坑出土遺物

Ｍ１・２・３、と上顎歯M3で、下顎歯M1が少し摩滅しており、他の歯は萌出前のため１歳未満の若い個体とされる[2)]。　**所見**　土器類の特徴から、10世紀第２四半世紀頃の祭祀土坑と考えられる[1)]。

注　1) 土器の時期については佐々木義則氏の教示による。　2) 西本豊弘氏の教示による。



第201図　２号祭祀土坑出土遺物

表100　１号祭祀土坑出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	11.2 4.0 5.6	体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り離し後押さえ。ロクロ右回転。	長石、石英、角閃石、チャート	良好	にぶい黄橙色	完形
2	土師器 坏	11.7 3.5 7.2	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	長石、石英、角閃石、チャート、海綿骨針	良好	橙色	ほぼ完形
3	土師器 坏	11.2 3.4 6.6	底部回転ヘラ切り離し､内面ロクロ目弱い。ロクロ右回転。	長石、石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色	完形
4	土師器 坏	11.9 4.1 6.7	底部回転ヘラ切り離し。ロクロ右回転。口縁部歪み。内面2/5の範囲黒化、灯芯の付着痕か。	長石・石英微粒多量、角閃石微量	やや良好	橙色	完形 灯明皿か
5	土師器 坏	11.3 3.4 6.4	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	長石、石英	普通	黄橙色	完形
6	土師器 坏	11.6 3.0 6.5	底部回転ヘラ切り離し、一部手持ちヘラケズリ。ロクロ右回転。	長石､石英､チャート、海綿骨針	普通	黄橙色	ほぼ完形
7	土師器 坏	11.5 3.4 6.6	底部回転ヘラ切り離し後押さえ、一部ヘラナデ。ロクロ右回転。	長石、石英多量、チャート、海綿骨針微量	普通	黄橙色	ほぼ完形
8	土師器 坏	12.0 3.4 6.6	底部外面中央成形段階の粘土紐露出、底部周縁篦ナデ調整。ロクロ右回転。	長石､石英､チャート、角閃石	良好	明黄褐色	ほぼ完形
9	土師器 坏	12.2 3.3 7.2	底部回転ヘラ切り離し。ロクロ右回転。	長石、石英、角閃石、チャート	普通	橙色	完形
10	土師器 坏	11.6 3.9 6.7	底部回転ヘラ切り離し後押さえ、不明圧痕（植物か？）。ロクロ右回転。	石英、角閃石	良好	にぶい黄橙色	完形
11	土師器 坏	11.6 3.5 6.8	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	長石、石英、角閃石	普通	明赤褐色	完形
12	土師器 坏	11.2 3.4 6.2	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	石英、赤褐色粒、角閃石	良好	にぶい黄橙色	ほぼ完形
13	土師器 坏	11.7 3.3 6.7	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	石英、赤褐色粒、角閃石少量	普通	黄褐色	ほぼ完形

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
14	土師器 坏	11.5 2.9 6.5	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。内面炭素付着。	長石、石英、チャート	良好	明黄褐色	完形 灯明皿か
15	土師器 坏	11.8 3.8 3.4	底部回転ヘラ切り離し。体部外面上半ロクロ目弱く、下半ロクロ目強い。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、角閃石微量	良好	黄橙色	完形
16	土師器 坏	11.9 3.5 6.6	底部回転ヘラ切り離し、無調整、粘土削り屑付着。ロクロ右回転。	長石・石英微砂粒多量、チャート	良好	明黄褐色	完形
17	土師器 坏	11.6 3.7 6.8	底部回転ヘラ切り離し、無調整、粘土削り屑付着。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート	良好	浅黄橙色	完形
18	土師器 坏	11.6 8.2 6.7	底部回転ヘラ切り離し。ロクロ右回転。	長石・石英多量、角閃石・チャート少量	やや不良	にぶい黄橙色	完形
19	土師器 坏	11.8 3.8 3.4	底部回転ヘラ切り離し。ロクロ右回転。	長石、石英、チャート、海綿骨針・角閃石微量	やや不良	にぶい黄橙色	ほぼ完形
20	土師器 坏	11.7 3.6 7.4	底部回転ヘラ切り離し、無調整。ロクロ右回転。	長石、石英、角閃石	普通	にぶい黄橙色	ほぼ完形
21	土師器 ミニチュア壺	5.8 8.6 4.6	口縁部ヨコナデ。胴上半部ヘラナデ、下半部ヘラケズリ。底部ナデ。	長石・石英多量、角閃石・チャート少量	良好	にぶい黄橙色	完形
22	土師器 ミニチュア壺	6.6 9.6 5.2	口縁部ヨコナデ。胴上半部縦方向のヘラナデ、下半部ヘラケズリ。底部ナデ。	長石・石英多量、角閃石・チャート少量	良好	明黄褐色	完形
23	土師器 ミニチュア壺	6.3 9.3 4.5	口縁部ヨコナデ。胴上半部指ナデ、下半部ヘラケズリ。底部ナデ。	長石、石英	良好	橙色	ほぼ完形
24	土師器 ミニチュア壺	5.7 8.1 4.4	口縁部ヨコナデ。胴上半部指ナデ、下半部ヘラケズリ。底部ナデか。	長石・石英主体チャート少量	良好	橙色	ほぼ完形
25	土師器 ミニチュア壺	7.0 9.1 5.2	口縁部ヨコナデ。胴上半部ヘラないし指ナデ、下半部ヘラケズリ。底部ナデか。	長石・石英主体、角閃石、チャート、海綿骨針微量	良好	にぶい黄橙色	完形
26	土師器 ミニチュア甕	9.2 7.8 6.0	口縁部ヨコナデ。胴上半部弱いナデ、下半部ヘラケズリ。底部ナデか。	石英、チャート	良好	褐灰色	完形
27	土師器 ミニチュア甕	9.3 8.4 6.6	口縁部ヨコナデ。胴上半部押さえ、下半部ヘラケズリ。底部ナデ。	長石、石英、角閃石微量	良好	明黄褐色	完形
28	土師器 ミニチュア甕	10.0 9.3 6.6	口縁部ヨコナデ。胴上半部ナデ、下半部ヘラケズリ。底部砂目。	長石、石英、チャート	良好	橙色	完形
29	土師器 ミニチュア甕	9.5 8.3 6.7	口縁部ヨコナデ。胴上半部押さえ、下半部ヘラケズリ。底部ナデ。	長石、石英、角閃石	良好	明黄褐色	完形
30	土師器 ミニチュア甕	9.0 9.1 6.0	口縁部ヨコナデ。胴上半部ヘラナデ、下半部ヘラケズリ。底部ナデか。内面指ナデ。	長石・石英多量、チャート少量	良好	にぶい橙色	完形

表101　2号祭祀土坑出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	13.4 4.1 5.7	体部内外面ロクロ調整。底部中央～底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ。焼成時の黒斑があるが、内面に油煙痕も不明瞭に残る。	石英、白色粒	良好	明赤褐色	完形
2	土師器 坏	11.9 3.4 6.2	体部外面下半部を幅広に手持ちヘラケズリ、底部回転ヘラ切り後ヘラナデか。内面口縁部に油煙痕が残る。	石英、白色粒	良好	明赤褐色	70%
3	土師器 甕	16.3 16.3 9.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴上半部ナデ、下半部縦方向のヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ。底部内面周縁部指ナデ、外面ヘラナデ後オサエと不明小粒の圧痕が付く。	石英、角閃石、白色粒	良好	橙色	完形

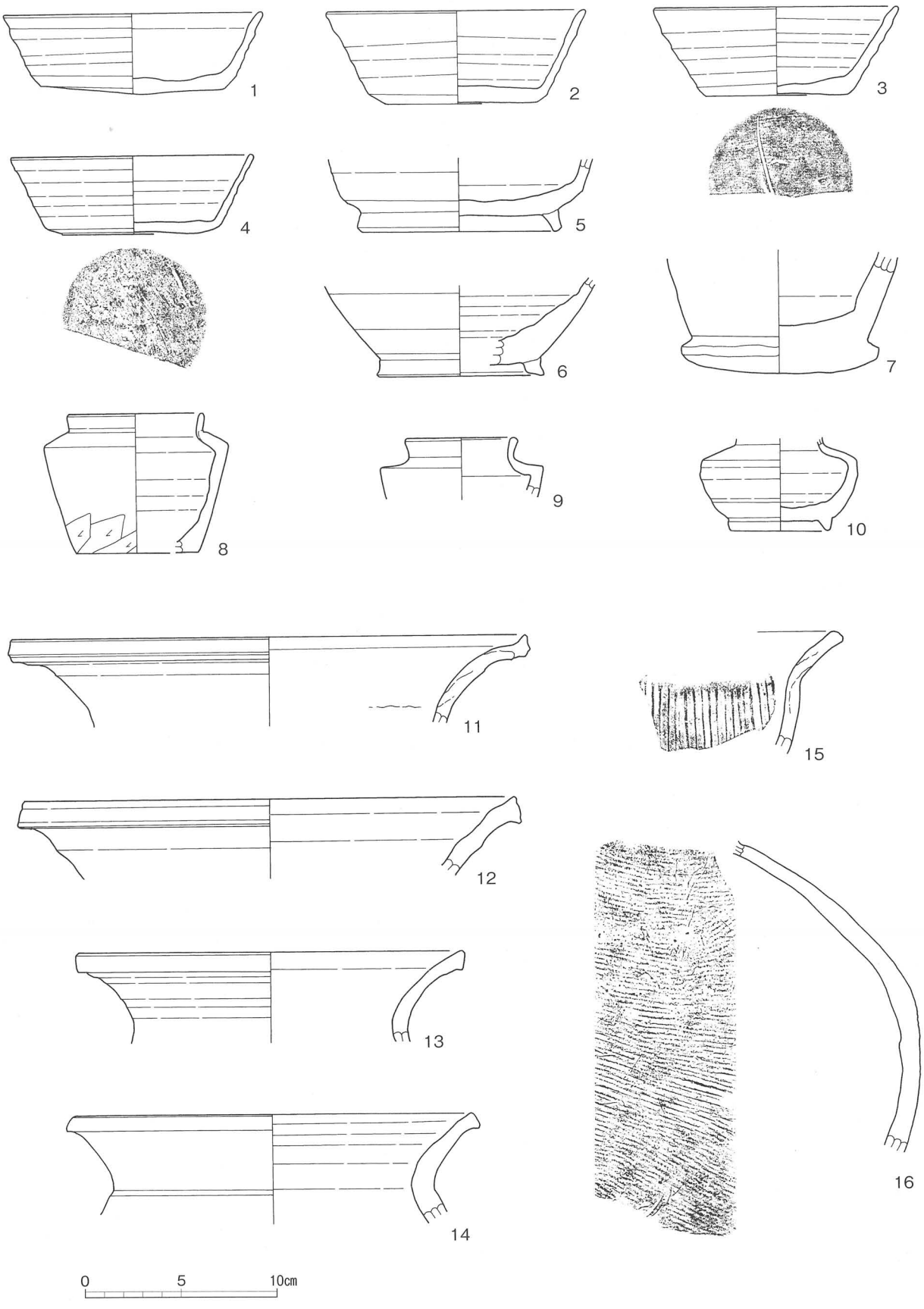
第６節　埋没谷出土遺物・表採遺物

埋没谷出土遺物（第 202・203 図）

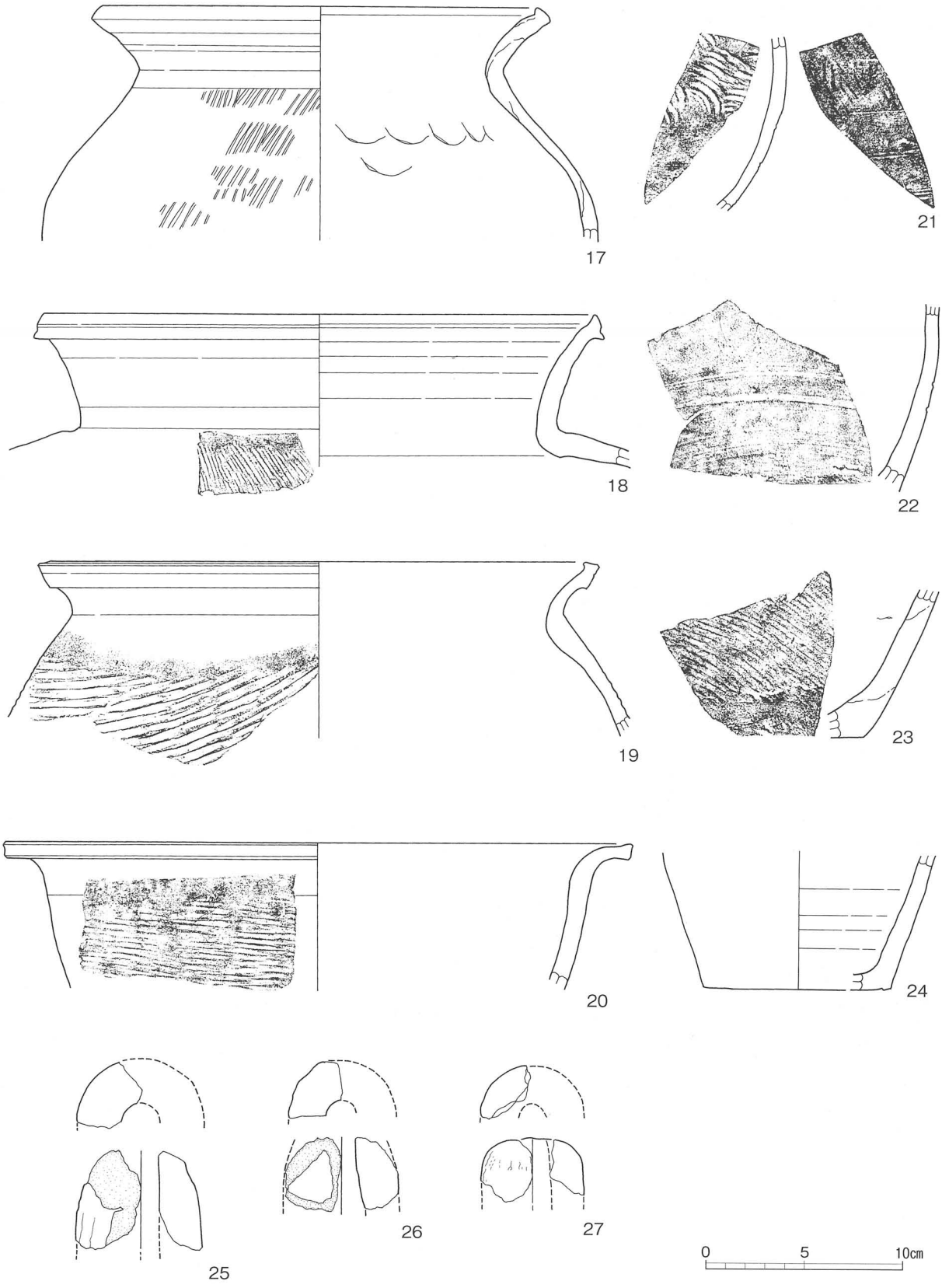
Ｃ区の埋没谷は、２箇所ある。１箇所は調査区内の東端、Ｃ・Ｄ、6・7 グリッド、遺構は 35 ～ 37 号住、1・2 号掘立の位置である。この箇所は遺物を包蔵していなかった。今一つは調査区外であるがＢ区との間Ｄ・Ｅ、４・５グリッドで、遺物が包蔵していることから採集にあたった。本来であれば表採遺物として取り扱うが黒色の土壌に包蔵していることから区別して掲載した。土師器は当該遺構での時期と同じため省略したが、須恵器については、7 の鉢、８～ 10 の短頸壷、11・12・16・18・19 の大型甕、21 の内面同心円当て具の残る古相の甕など遺構には出土していない土器がある。

表 102　埋没谷出土遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 坏	13.6 4.2 9.5	体部下端～底部回転ヘラ削り。右回転。	石英、白色粒	未還元良好	にぶい黄橙色	50%
2	須恵器 坏	13.6 4.9 7.9	体部下端～底部回転ヘラ削り後一方向のヘラ削り。右回転。	石英、白色粒	良好	灰色	80 %
3	須恵器 坏	12.8 7.4 4.6	体部下端～底部回転ヘラ削り。外底部線刻「—」。右回転。	石英、白色粒、海綿骨針、チャート	良好	灰色	50%
4	須恵器 坏	(12.6) 4.1 8.8	体部下端回転ヘラ削り、底部は一方向のナデ。外底部線刻「×」。右回転。	石英、白色粒	良好	灰色	50%
5	須恵器 高台付坏	– [3.8] 10.7	体部下端～底部回転ヘラ削り。内・外底部擦痕顕著、転用硯か。	石英、白色粒、海綿骨針、チャート、角閃石	良好	外：褐灰色 内：灰黄褐色	底部
6	須恵器 長頸壷	– [4.7] (8.8)	胴部下端～底部回転ヘラ削り。右回転。高台は貼り付け。	白色粒、石英粒	良好	黄灰色	底部片
7	須恵器 鉢	– [6.3] 10.1	底部は体部径より突出し丸く納める。内部の使用痕は顕著、外体部は自然釉で覆われる。	石英、白色粒、海綿骨針、黒色粒	良好	外：灰色 内：灰白色	底部
8	須恵器 短頸壷	(5.9) 7.2 (6.4)	ロクロ成形。体部下端は斜位ヘラ削り、底部は一方向のヘラ削り。	白色粒、石英、黒色粒	良好	灰色	25%
9	須恵器 短頸壷	(5.9) [3.2] –	ロクロ成形。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	灰色	口縁～肩部
10	須恵器 短頸壷	– [4.8] (5.0)	ロクロ成形。体部下端～底部は回転ヘラ削り。最大径 8.2 ㎝。8･9 と異なり肩部は丸く納める。	石英、白色粒、角閃石	良好	灰色	20%
11	須恵器 甕	(27.0) [4.6] –	口縁部は外反し端部で摘み出される。内面は降灰が著しい。	石英、白衣色粒、海綿骨針	良好	灰色	口縁部片
12	須恵器 甕	(28.6) [8.8] –	口縁部は外反し端部で面をなす。	石英、白色粒	良好	灰色	口縁部 20%
13	須恵器 甕	(20.2) [4.7] –	口縁部は外反し端部で面をなす。内部自然釉顕著。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	暗灰色	口縁部片
14	須恵器 甕	(11.4) [5.7] –	ロクロ成形。口縁部は外反し端部で垂下する。	石英、白色粒	良好	灰色	口縁部片



第 202 図　埋没谷出土遺物①



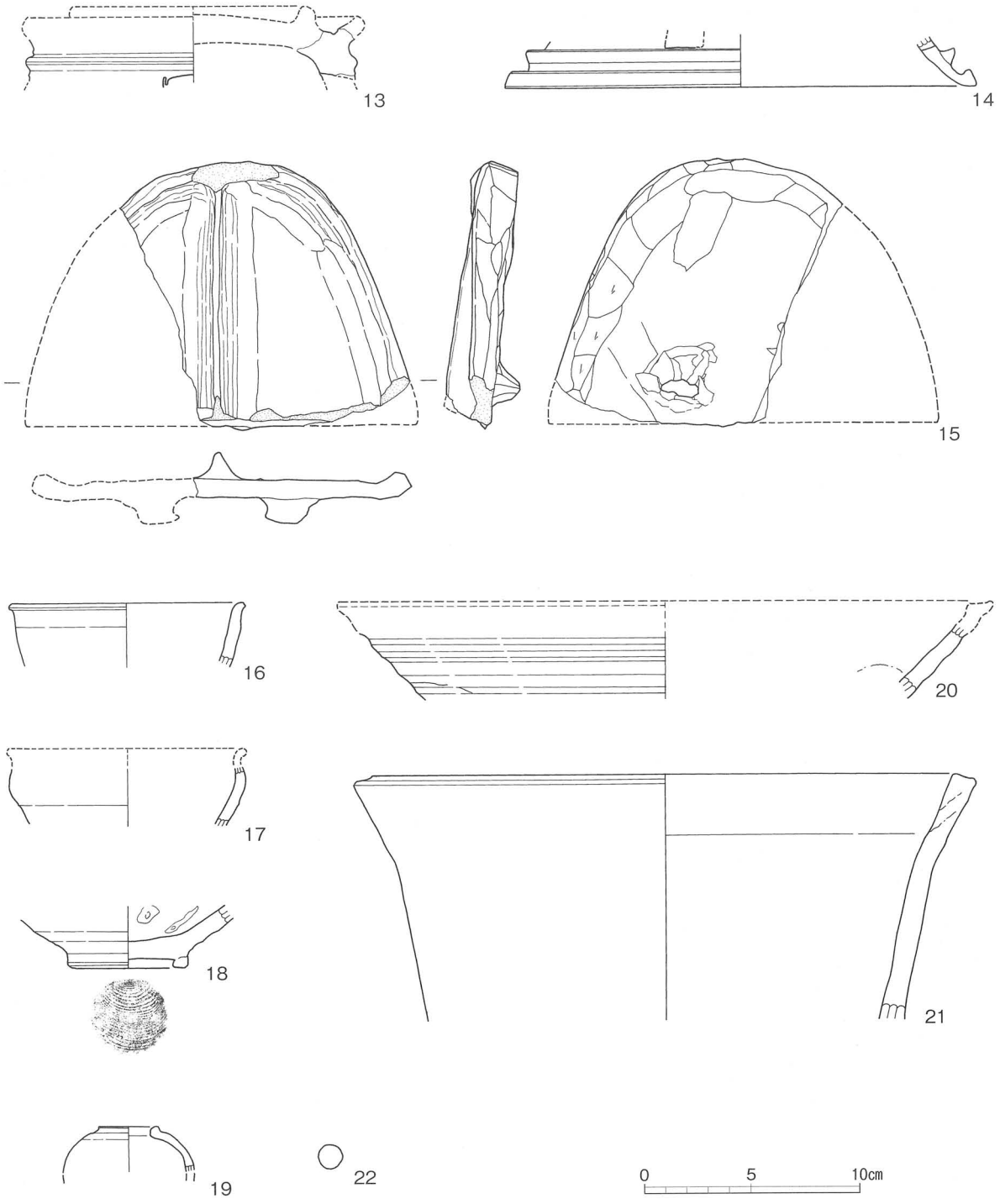
第 203 図　埋没谷出土遺物②

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
15	須恵器 甕	－ [6.4] －	外面縦位平行タタキ。	石英、白色粒、海綿骨針	還元軟質	灰色	口縁部片
16	須恵器 甕	－ [16.4] －	外面横・斜位の平行タタキ。	石英、白色粒、角閃石	良好	黄灰色	胴部
17	須恵器 甕	(22.1) [11.9] －	口縁部は外反し端部は摘み出される。内：無文当て具、外：平行タタキ。	石英、白色粒	良好	灰色	口縁部～胴部片
18	須恵器 甕	(28.0) [7.8] －	大型の甕である。口縁部は外反し端部で周縁帯を形成し、断面三角形である。外：平行タタキ。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	灰色	口縁部片
19	須恵器 甕	(25.8) [4.1] －	ロクロ成形。口縁部は外反し端部で周縁帯を形成。内：当て具痕、外：平行タタキ。	石英、白色粒	良好	青灰色	口縁部片
20	須恵器 甕	(32.0) [7.5] －	口縁部は短く外反し端部で摘み出される。所謂バケツ型の甕である。外：平行タタキ。焼成で詳述すると表面1mmまでは還元化、内部は酸化である。	石英、白色粒	還元軟質	灰色	口縁部片 新治産
21	須恵器 甕	－ [8.9] －	内：同心円宛具、外：縦位の平行タタキ。	石英、白色粒	良好	灰色	胴部片
22	須恵器 甕	－ [9.5] －	胴部下端回転ヘラ削り。2条の沈線。	石英、白色粒	良好	灰色	胴部片
23	須恵器 甕	－ [7.4] －	胴部は斜位の平行タタキ、下端はヘラ削り。	石英、白色粒、角閃石、チャート		灰色	胴部～底部片
24	須恵器 甕	－ [6.9] (9.5)	ロクロ成形。底部ヘラ削り。	石英、白色粒	良好	灰色	胴部～底部
25	土製品 鞴	最大径（6.4）cm、孔径（2.0）cm、厚さ2.4cm。		石英、白色粒、雲母	良好	橙色	頭部片
26	土製品 鞴	最大径（5.6）cm、孔径（1.6）cm、厚さ2cm。頭部還元化。		石英、白色粒、雲母	良好	橙色	頭部片
27	土製品 鞴	最大径（5.2）cm、孔径（1.6）cm、厚さ（1.6）cm。		石英、白色粒、雲母	良好	橙色	頭部片

表採遺物（第204・205図）

大半は遺構から出土したものと大差ないが、1は金属器模倣、4は深椀、8は21号住付近であり4のフラスコ瓶と類似している。9は外面同心円タタキの新治産須恵器、13・14は円面硯、15は風字硯である。これら硯からも遺跡の性格が垣間見られよう。16～19は中世の所産であり東方の行者遺跡1号堀跡との関連が指摘される。

第204図　表採遺物①



第 205 図　表採遺物②

表 103　表採遺物観察表

図版番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 坏	(14.6) [4.9] –	非ロクロ坏。口縁部内側には沈線を有する金属模倣坏。内：ヘラ磨き、外：ヘラ削り。	白色粒、角閃石、赤褐色	良好	橙色	口縁～底部片
2	須恵器 坏	(11.4) [3.4] (7.4)	底部は回転ヘラ削り。	白色、石英、チャート、海綿骨針	良好	外：黄灰色 内：暗黄灰色	30%
3	須恵器 坏	11.3 3.7 6.9	底部は手持ちヘラ削り。	白色、石英、黒色、（角閃石？）	還元軟質	暗黄灰色	ほぼ完形
4	土師器 高台付坏	15.6 [5.7] 6.8	ロクロ成形。内部は細かい丁寧なヘラ磨き。	白色、石英、雲母	良好	明黄褐色	高台部欠損
5	須恵器 高台付坏	14.1 5.7 8.5	底部は回転ヘラ削り。	白色、石英、チャート	良好	外：灰色 内：灰黄色	50%
6	須恵器 蓋	– (2.1) –	鈕はボタン状で天井部 1/2 は回転ヘラ削り。鈕径 3.8cm	石英、白色粒	良好	灰色	天井部
7	須恵器 蓋	15.0 [2.8] –	天井部の 1/2 は回転ヘラ削り。口縁端部は屈曲する。	白色、石英、海綿骨針	良好	灰色	40%
8	須恵器 長頸壷	(9.0) [3.0] –	ロクロ成形。口縁部は外反し端部で摘み出される。口縁部下に沈線。	石英、白色粒	良好	灰色	口縁部片
9	須恵器 甕	– – –	外面に細い同心円タタキ。	石英、雲母	還元軟質	灰白色	胴部片 新治産
10	土師器 甕	19.2 31.9 7.9	長胴の甕。口縁部は外反し端部で摘み出される。胴部外面はヘラ削り。上位 1/3 にカマド粘土材が残る。	石英、白色粒	良好	外：明黄褐色 内：にぶい黄色	80%
11	土師器 甕	(24.2) (16.4) –	長胴の甕。口縁部は外反し端部で摘み出される。胴部外面はヘラ削り。上位 1/3 にカマド粘土材が残る。	石英、白色粒、海綿骨針	良好	外：橙色 内：明黄褐色	口縁～胴部 25%
12	土師器 甕	(20.4) [23.1] –	口縁部は外反する。胴部外面は横位ヘラナデ。	白色粒、石英、チャート	良好	外：明赤褐色 内：褐色	口縁～胴部 50%
13	須恵器 円面硯	硯部。透かし部と平行刻みが残る。 上位凸帯（15.4）cm、器高（2.7）cm		白色粒、石英、黒色粒	良好	灰色	硯部片
14	須恵器 円面硯	脚部。透かし部が残る。下位凸帯（22.0）cm、器高［2.2］cm		白色、石英、黒色融出粒	良好	暗灰色	脚位片
15	須恵器 風字硯	三角状で先端は丸く中央に間仕切りを設ける。裏面に脚部が 2 箇所貼り付けられる。長さ［12.5］cm、幅（18.3）cm、器高 3.3cm		石英、白色粒	良好	外：暗灰黄色 内：灰色	70%
16	古瀬戸 天目茶埦	(11.0) – –	口縁部は端部で短く開く。内外褐釉が掛かる。	ざっくりとした素地に黒色粒	良好	釉調：褐色	口縁部片
17	古瀬戸 天目茶埦	– – –	口縁部は一旦内湾し端部で屈曲する。内外鉄（黒褐）釉が掛かる。	ざっくりとした素地に黒色粒	良好	釉調：黒褐色	体部片
18	古瀬戸 平埦	– [2.9] 5.4	底部は回転糸切りで高台は貼り付け。内底部に重ね焼き胎土目痕が残る。内外灰釉が掛かる。	ざっくりとした素地	良好	釉調：浅黄色	底部片
19	古瀬戸 合子	(2.8) (2.1) –	口縁部は短く肩部は丸く収める。内外鉄（黒）釉が掛かる。	ざっくりとした素地	良好	釉調：黒色	口縁部片
20	古瀬戸 折縁深皿	– – –	体部片であるが形状から口縁部は折縁となるタイプ。	ざっくりとした素地に黒色粒	良好	浅黄色	体部片
21	土師器 内耳鍋	(29.0) (11.5) –	内耳鍋で深い。の外面は煤が付着。	石英、角閃石、海綿骨針		にぶい橙色	口縁部片
22	鉛製品 鉄砲玉	酸化して白色となる。径 1.1cm、重さ 8.568g。					完形品

第Ⅶ章　縄文時代の遺物

第１節　縄文土器（第206図）

当該遺跡における縄文時代の遺構は後世の削平により皆無であり、特にＡ区の高位部で顕著であった。

縄文時代の遺物は、遺跡全体の表採とＡ・Ｃ区での表採あるいは遺構外から資料を得ることができた。ここでは遺跡全体から概観した表採遺物として取り扱った。時代を概観すると概ね草創期から後期に亘る約6000年の時間を断続的に埋める事が出来た。表104はその時代・形式区分と調査区・表採別に数量で表した。それによると当該遺跡では前期黒浜式と浮島式の土器が多く、時期が新しくなるにつれて減少し、縄文時代で最も盛行した中・後期の土器は少ない。この傾向は海進後の前期に丘陵上に集落がなされ、海退と歩調をあわせて低地に集落を移動した結果と思われる。

掲載した遺物は全量の313点の内50点である。Ａ区は１～10、Ｃ区は11～26、表採は27～50である。

Ａ区で最も古い土器形式は早期である。１・２は田戸下層式である。沈線文を主体とし、２では貝殻腹縁文がみられる。前期は３・４が黒浜式である。胎土に繊維を含み単節縄文を施文する。５・６は浮島式である。５は口縁部に刻み、共に平行沈線文を施す。いずれも浮島Ⅱ式である。７・８は興津式である。半載竹管による平行沈線文を施す。９・10は前期末の粟島台式で側面圧痕文を施す。

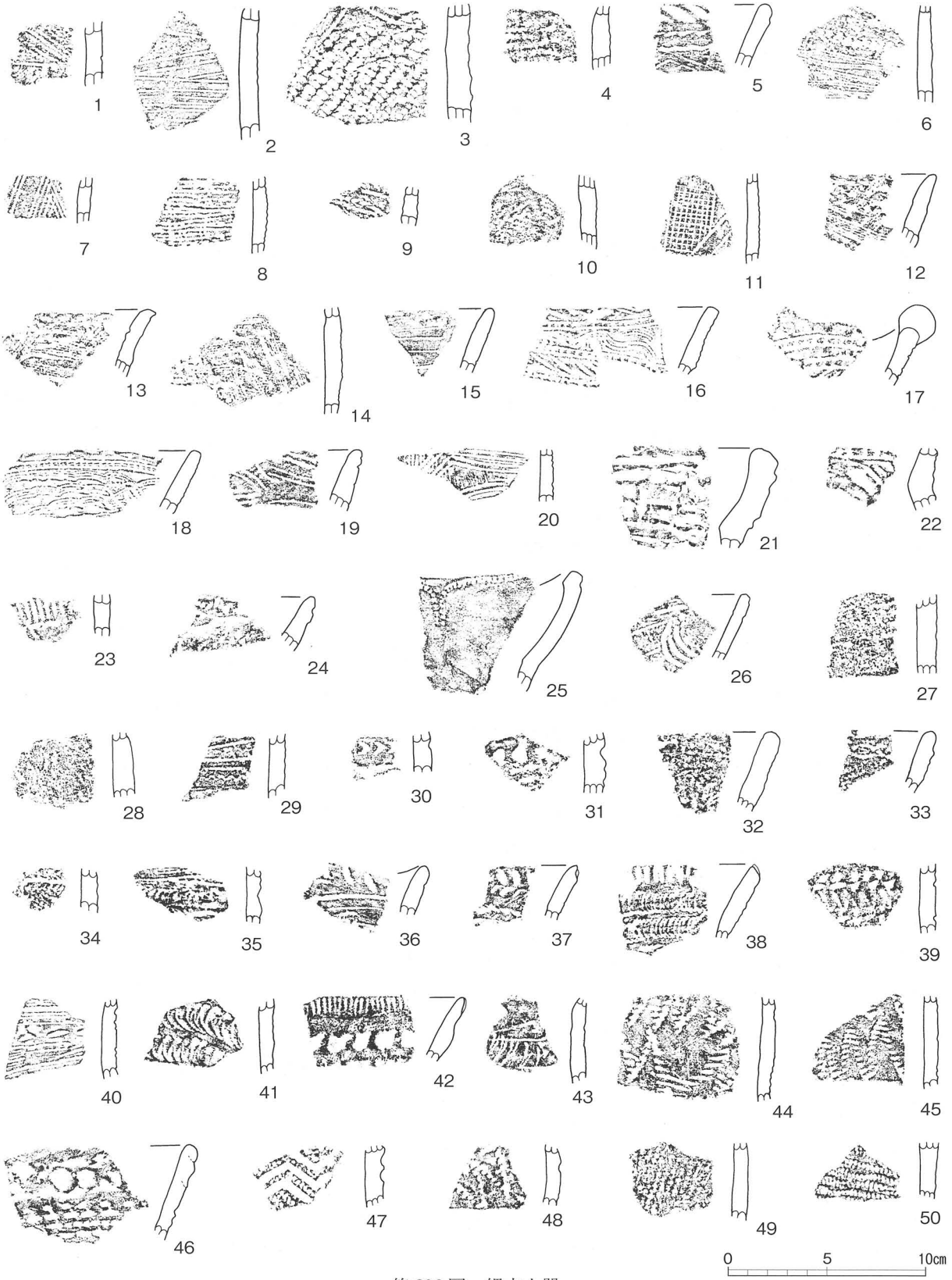
Ｃ区で最も古い土器形式は早期である。11は三戸式で格子文を特徴とする早期前半の土器である。12～14は黒浜式である。いずれも櫛歯状文を施文する繊維土器である。15～20は浮島式である。半載竹管での平行沈線文と爪形文を施文する。21～23は前期終末の十三菩提式である。21は細い粘土紐をソーメン状浮線文、22は半載竹管による押し引き文、23は竹管での平行沈線文である。24は粟島台式である。側面圧痕文を施す。25は中期阿玉台式土器である。口縁部下に「Ｙ字状」に半載竹管で押し引いた角押し文を施文する阿玉台Ⅱ式である。26は後期堀之内式土器である。口縁部下に刺突文を基点とする弧状沈線文を施す堀之内Ⅰ式である

27～50は遺跡全体の表採遺物である。27・28は草創期末の天矢場式土器である。内面を磨き、外面を荒く削り取る。29～31は早期田戸下層式である。29は代表的な施文貝殻復縁文である。32・33は前期黒浜式である。いずれも繊維を含む。34・35は諸磯ｂ式である。34は沈線文下に爪型文、35は浮線文を施文する。36～40は浮島式である。36・37は口縁部に刺突し、37は側面圧痕文が施される。38は口縁部に刻み目、爪型文を39は刺突文と爪型文、40は条線文と刺突文、41･43は爪型文、42は口縁部に刻み目、刺突文を施文する。44・45は復縁貝殻で鋸歯状の爪型文を施文する。46は前期末葉十三菩提式である。格子状の連続刺突文と押し引き文を施す。

表104　縄文土器・弥生土器一覧表

時期	形式名	区		表採	合計	備考
		Ａ区	Ｃ区			
草創期	天矢場	0	0	4	4	
早期	田戸下層	2	0	10	12	
	茅山	1	0	0	1	
前期	黒浜	26	35	21	82	
	諸磯Ｂ	0	0	4	4	
	浮島	14	29	78	121	
	興津	2	0	10	12	
	十三菩台	0	3	1	4	
	大木５	0	0	2	2	
	粟島台	3	15	9	27	
中期	阿玉台	4	1	0	5	
	加曾利Ｅ	0	5	0	5	
後期	堀之内	0	1	0	1	
	安行	2	0	0	2	
弥生時代		4	5	0	9	二軒屋・十王台？
不明		0	4	16	20	
合計		59	99	155	313	

47・48は大木５式である。47は地文に鋸歯状の沈線文、48は貝殻復縁での爪型文である。49・50は粟島台式である。いずれも単節縄文を施す。弥生土器についてはＡ区で４点、Ｃ区で５点であったが、いずれも細片のため掲載しなかった。（松田）



第206図　縄文土器

第Ⅷ章　総括

寺上遺跡は、笠間市小原地内の標高44m～69mの丘陵斜面上にある。調査区内からは、奈良・平安時代を主体とする竪穴住居跡88軒、掘立柱建物跡14棟、溝4条、土坑14基、井戸1基が確認されている。調査区はA～C区に分かれ、A区は西部の標高の高い東向き斜面に、B区は、南部の南向き緩斜面に、C区は、北東部の緩斜面にある。各調査区の間の空間にもほぼ同数程度の竪穴住居跡があるものと見られ、遺跡全体では150軒を超える竪穴住居跡を主体とする集落遺跡になると思われる。

第1節　A区

A区は、北西部の標高の高い斜面にあり、竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡14棟と最も多く、遺跡全体の中では集落の西側主要部に当たっている。A区の遺構は、主に標高57～67mの間に分布し、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が東から北西に向かって高度を上げながら分布している。

最も古い時期の竪穴住居跡は、7世紀後葉の2・21号住居跡の2軒である。21号住居跡は北部の標高の高い地点にあり、4本主柱穴を持ったやや大型の住居跡である。21号住居跡の北側にある6号掘立柱建物跡は時期不明であるが、21号住居跡の主軸の傾き角度に近く関連があるかもしれない。2号住居は斜面を下った中央部の南寄りにあり、21号住居跡よりやや小さい。この時期の竪穴住居跡は全体に希薄に分布しており、集落の開始期の様相と見られる。

A区の出土遺物には8世紀前葉頃の遺物も少量あり、8世紀前葉においても、A区の外で集落は継続して維持されているものと見られる。次の8世紀中葉になると竪穴住居跡の数が急に増加してくる。

8世紀中葉から後半の時期の竪穴住居跡は、4・5・7・13・14・15・26号住居跡で、A区中央部から南部に分布している。

8世紀後葉から9世紀の初め頃の竪穴住居跡は、3・8・9・12・16・17・19・25号住居跡で、前代の竪穴住居跡に近接して建てられており、各戸の占有エリアが決められているかのように見える。掘立柱建物跡では、北部の7号掘立柱建物跡がこの時期のものである。柱間寸法の類似から、2号掘立柱建物跡もこの時期頃のものかと思われる。その他の掘立柱建物跡は時期のわからないものが多いが、北部の3～5号掘立柱建物跡では、同じ場所で3回立て替えが行われており、一定の狭いエリア内での竪穴住居跡の立て替えと似ていることを重視すれば、8世紀後半期を中心とした時期のものかもしれない。

9世紀の竪穴住居跡は、9世紀前葉が、北部で22･29号住居跡の2軒、中央部で23号住居跡の1軒である。北部の22号住居跡は、4本主柱穴を持ったやや大型の竪穴住居跡であり、7世紀後葉のやや大型な住居跡や8世紀代と推測する掘立柱建物跡の集中エリアに近く、それらと連続性を持って関連するものだとしたら、北部のこのエリアは、特別なエリアなのかもしれない。

9世紀中葉は、中央部から南部にかけて10・18・27号住居跡の3軒がある。いずれも前代の竪穴住居跡に近い位置に占地しており、前代とのつながりがあるものと見られる。

9世紀後葉は、中央部で1・6・20号住居跡と南部の24号住居跡の4軒がある。単独で占地するような様子が伺える。A区では、次の10世紀以降の時期の遺構はみられない。

A区の出土遺物は、土師器･須恵器を主体として、僅かに灰釉陶器、土製品で円面硯、置きカマド、支脚、石製品で紡錘車、砥石、鉄製品で刀子が出土している。墨書文字では「ち」「家？」、刻書では「九」が見られた。

土師器では、8世紀以降の遺物の中で、甕と甑が注目される。甕は、大きく分けて常総甕の特徴を持ち胴部に丸みを持った甕と長胴で口縁部が外反し胴部を縦方向にケズリやナデするものがある。胎土から見て常総型甕の多くは、筑波山南麓部からの搬入製品であり、口縁部外反品は在地産の製品と見られる。在地の製品の中にも、口縁部を摘み上げ、胴部を膨らませた常総型風の甕も8世紀後葉～9世紀初め頃の住居跡から出土しており、在地でも常総甕は8世紀後葉頃から生産を開始しているようである。

ところで、本報告の本文中では、胎土が在地のもので、口縁部が外反する甕と同じような大きさの土師器について、全体形がわからないまま甕として報告している。しかし、A区の25号住居跡からは在地胎土の土師器甑胴下半部が出土している。この例からすると、8世紀の前葉から中葉においては、在地胎土の長胴もしくは、僅かに胴部に膨らみのある口縁部の外反製品は甑器形になるものが多いのかもしれない。甑は口縁部から底部まで、完形で残るものがほとんどないことと、須恵器の甑があるため、土師器の長胴製品の破片について躊躇なく「甕」と呼んでしまっているのかもしれない。もしそうならば、新治産甕はカマド甕として、在地胎土の長胴製品は甑として使われている可能性が見えてくる。今後検討が必要と思われる。

須恵器では7世紀の21号住居跡から出土している須恵器の坏と蓋が注目される。両者とも長石を主体とする白色砂粒を多く含み、器面は少し荒れた、仕上がりが悪い製品である。やや小振りで、蓋天井部、つまみ、かえりの形状と坏の全体形状から水戸市山田窯の製品段階よりも古く、東海村馬頭根窯の製品よりも新しい、7世紀第3四半世紀頃のものと思われる。胎土は、共通して銀白色光沢の雲母を微量含み、蓋では海綿骨針が観察されている。生産窯がどこにあるのか、今後の課題と思われる。

8世紀代の須恵器では、11・14・15号住居跡から横瓶が3点出土している。笠間市域の遺跡からは、石井台遺跡からも横瓶が出土しており、笠間市周辺の在地窯では、比較的多くの横瓶生産を行っているものと見られる。（土生）

第2節　B区

B区は、A区の東に位置し、標高51～54mの緩斜面に立地する。遺構は調査区の南～西端部に沿って分布する。調査区の北側半分は埋没谷地形にあり黒色土上にも住居跡が検出された。周辺の遺跡は南側の谷を介して対峙する行者遺跡があり、ほぼ同じ高さにある。遺構は竪穴住居跡14軒、土坑1基である。時期は全体的には平安時代を主体とする集落跡であるが、古くは古墳時代からの開始である。

古墳時代前期（4世紀代）の住居は、9号住である。隅角に貯蔵穴を持ち、遺物は大半が貯蔵穴上にある。行者遺跡11号住と住居形態からはほぼ同じで、遺物年代からは当該9号住がやや先行であろうか。本遺跡は後世の削平が著しく焔滅した遺構も多いと見られ、この時期の遺構も例外ではなかろう。このことは行者遺跡の前期古墳との相関関係からも指摘されよう。

遺構の年代は概ね、奈良・平安時代に集約される。7世紀代は4号住、8世紀後葉は3号住、9世紀前葉は2・8b号住、9世紀中葉は1・12・13号住である。　9世紀後葉は5・6・10・11号住、9世紀後葉～10世紀代は8b号住である。なかでも1～3号住、7・12号住では連続性が窺われ、住居構築の際には前代住居の近辺とする事が窺え、代々の土地占有に関わることであり、今後の検討が必要である。

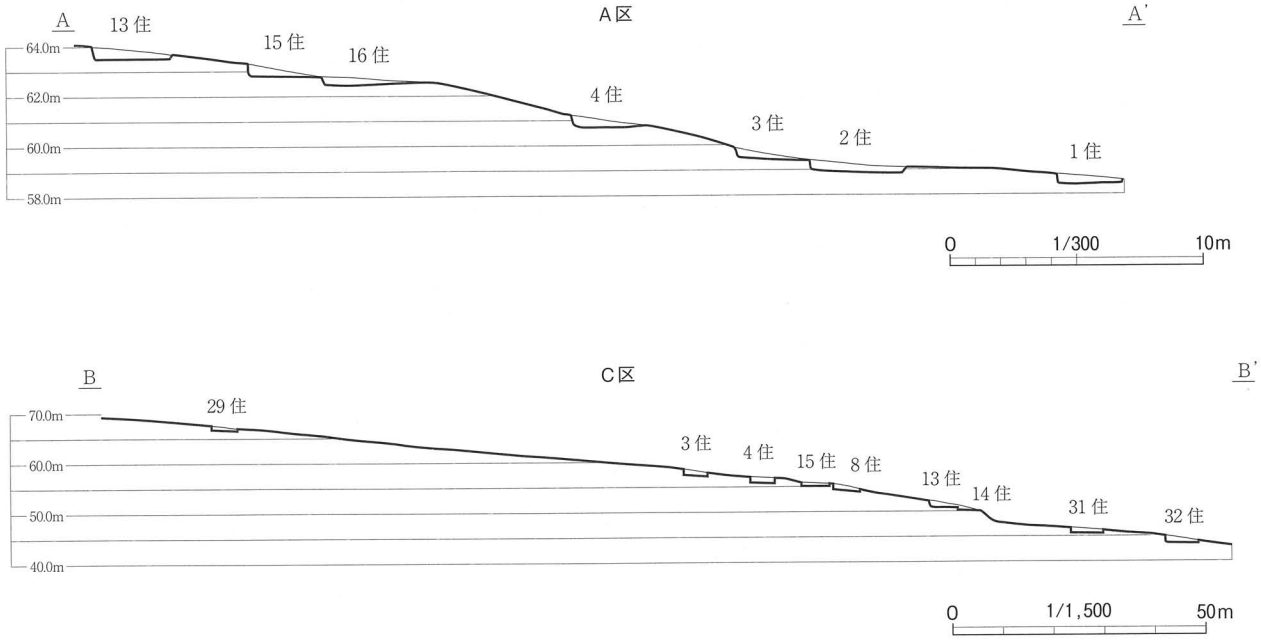
遺物は土師器、須恵器のほかに置きカマド、支脚、鉄製品刀子、石製品砥石がある。土師器は常総型甕の「口縁部外反、端部をつまみ出しの特徴を9世紀後半まで踏襲している。8b号住の羽釜は数少ない例である。羽釜と置きカマドは各々破片での出土であり、推定復元ではあるが羽釜鍔下の径と、置きカマド賭け口の径

がほぼ同じであることからセット関係が指摘されよう。坏（内黒）は、住居跡年代は9世紀代が多いなか絶対量は少ない。須恵器は4号住の蓋、長頸壷が7世紀末～8世紀前葉である。特に4号住3の鼈は出土例が少なく、4の長頸壷には窯の溶解したものが付着しており、遺跡周辺に鼈を加えた新たな窯跡の存在が指摘される。（松田）

第3節　C区

C区はA、B区の浅い谷を介して東側に位置する。調査区は諸般の事情により3箇所（C1区、C2区、C3区）に分割して行なった。C1区は最も高位部にあたり標高68m、C2区は63m、C3区は緩斜面の中途54mから最低部43mの高さにある。寺上遺跡の立地する地形を下から概観すると斜度は20°位の急斜面に感じた。比高は25mであるが、地形図から計測した斜度は平均8°であった（第207図）。おそらくC3区の断切りで視覚的に急斜面と感じたのであろう。これに削平部分を考慮すれば、おそらくこの数値以下となり、立地的には丘陵の東緩斜面となろう。

遺構は、竪穴住居跡43軒、掘立柱建物跡5棟、溝跡1条、祭祀土坑2基、土坑10基、溝跡1条が検出された。時期と性格は奈良・平安時代を主体とした集落跡である。竪穴住居跡の分布状況はC1・2区は6軒であるが地形の流れ的にはA区遺構の範疇に入るようである。C3区では竪穴住居跡が33軒である。調査区の南西側に分布し、北側は皆無であった。おそらく北側は急斜面であることと、遺跡の北側に支谷が東から貫入し、丘陵の北面になることから竪穴住居跡は構築されなかったのであろう。地形はC1・2区、C3区上面はほぼ平坦面、同区中位は緩斜面、低位面は平坦面を形成している。また同区の標高49m付近では後世の



第207図　A区・C区東西方向地形横断図（竪穴住居跡は投影）

断切りによってほぼ2mの崖となっている。これにより標高47m付近の等高線に沿って存在していた遺構は、幅約10mに亘り煙滅した可能性が高い。

最も古い竪穴住居跡は、7世紀後葉の13号住居跡、そのほかこの時期と思われる21号住居跡がある。いずれも断切り上の標高52mの斜面中位にある。13号住居跡は規模も大きく4本柱、主軸の方向はほぼ北西である。2号住居跡は規模はほぼ同じであるが主軸方向はやや北に触れる。当該期の遺構は遺跡全体から見ても少ない。

続く8世紀前葉の竪穴住居跡は、3・23・29・33・37号住居跡の5軒である。C区では高～低位部全域に亘って分布する。この時期は集落として機能し始めた頃であろう。

8世紀中～後葉（8世紀代）の竪穴住居跡は、2・5・11・12・16・17・19・24・27・32・34・41号住居跡の12軒で、竪穴住居跡が急増する時期である。遺構は規模も大きく、基本的に4本の主柱穴と出入り口ピットが付帯するタイプと、前者より住居規模は小さく床面に柱穴を待たない、所謂竪穴外柱を有するタイプが推定される。竪穴外柱は削平により確認されなかったがおそらくこのタイプであろう。主軸方向は前代に引き続きほぼ同じである。おそらく集落としての機能がなされ、住居形態に規制が窺われる時期であろう。

9世紀前～中葉の竪穴住居跡は、1・15・18・26・35・36号住居跡の6軒である。前代に比べ軒数は少なく、高位部と低位部ではほぼ分布しなくなる。またこの時期、竪穴住居跡の周辺に前代住居跡が在るパターンが見られ、A区と同様に占有エリアがあった可能性がみられる。おそらくこの時期、1～3・5号掘立柱建物が立ち並び、中でも2号掘立柱建物跡はその中心的な建物である。2号掘立柱建物跡は3×3間の間取りであり性格が問われる建物である。

9世紀中～後葉の竪穴住居跡は、4・14・28・31・38・39・42号住居跡の7軒で、前代と同様に希薄である。前述の掘立柱建物は引き続き存続する。

10世紀前～中葉の竪穴住居は、8・9・10・22・30・43・40・44号住居跡の8軒である。全域に亘って展開し、主軸方向は基本的には8・9世紀代と変化がないが、40・43・44号住居跡は東方向とする。またこの時期は1・2号祭祀土坑が2号掘立柱建物の東側に見られ、何等かの祭祀が行なわれていたことが判明し、その遺物年代は小皿出現前段階の10世紀第3四半期としている。この時期をもって寺上遺跡における集落跡は廃絶される。これ以降は中世遺物が表採されており、行者遺跡の中世城郭との関連が窺われる。

C区の遺物は、土師器、須恵器を主体として、わずかに灰釉陶器、土製品で円面硯、風字硯、置きカマド、紡錘車、支脚、鞴羽口、鉄製品で刀子、鏃、用途不明鉄製品、鉄滓、石製品で紡錘車、砥石が出土している。墨書土器は「山人」、「右後」、刻書は「山」「井」「一」「二」「十」「×」「N」が見られた。

土師器では、10世紀中葉とした椀と甕が注目される。40号住居跡出土の黒色処理（内黒）椀は、小椀・深椀として灰釉陶器の模倣とする意見は興味深い（佐々木1999）。甕は基本的に口縁端部が摘み出される所謂常総型甕であるが、10世紀中葉に入ると40住居・43住居のよう摘み出されないものが出現し、この時期供膳具・煮沸具共に画期がみられる。

須恵器では甑が注目される。甑はバケツ型の胴部に1対の牛角状把手を付ける底部2孔式がある。当該遺跡では1・2・38号住居跡で出土している。これらは焼成が悪く所謂未還元（焼成）のものが多い。未還元（焼成）は1号住居跡の10・11の断面に図示したように表面は浅黄色で断面内部（スクリーントーン）が還元色（灰色）となり、全体に還元化されてない須恵器である。時期はいずれも9世紀中～後葉段階である。胎土には海綿骨針・チャートが入り、木葉下窯跡群で焼成された須恵器である。塙谷遺跡は寺上遺跡から東に850mの距離にある。平成20年度の調査でも前述の甑が6点出土している。7・17・19・41・65・75号住居跡である。

胎土は当該遺跡と同様で、焼成は良好・普通が7・17・65号住居跡で、不良は半数の19・41・75号住居跡である。この不良はここで云う未還元（焼成）である。時期も9世紀前葉～10世紀前葉に亘り、水戸市木葉下窯跡群に特徴的な胎土である。赤井氏によれば「木葉下窯跡群では8世紀前葉に把手が付く甑が確認されており、タタキが施されている。8世紀後半では2本のブリッジがかけられ3孔式となる」その後寺上・塙谷両遺跡で確認された形態の「口縁部は直立し、把手は上位に、底部のブリッジは1本となり、タタキは認められない」として9世紀段階まで存続することを指摘している（赤井1997）。文中には焼成については言及されていないものの、おそらく焼成不良の多さからすれば、木葉下窯跡の最終段階である三ヶ野2号段階（9世紀中葉）であろう。

掘立柱建物跡は5棟検出された。以下、号掘立と略述する。位置はC3区の低位面の埋没谷から低湿地に亘る緩斜面である。建物の方向（桁行方向）は南北棟が4棟、東西方向は1棟であった。建物の規模は3×2間が3棟（1·3·5号掘立）、3×3間（2·4号掘立）である。掘り方の形状は1～3、5号堀立が楕円形、4号掘立は全てではないが略方形であり規模も他より大きく、建物方向は唯一東西棟となる。また4号掘立は西梁間側に廂的な構造物が付設する。

時期は8世紀前葉の33号住居、8世紀中葉の27号住居を各々5号掘立と4号掘立が切っており、掘立柱建物群を通して少なくとも8世紀中葉以降の建築である。さらに掘立柱建物群中においても3号掘立⇒4号掘立の切合いがあり、建物方向からも1～3・5号掘立⇒4号掘立への変遷が捉えられた。

1号掘立は2号掘立と南桁が通り、建物の間寸法は双方の柱間と同寸法（2号掘立P5～P6と1号掘立P9～P6と双方のP9間が1.40m）であること、双方の梁筋の西側柱間が東側柱間より短い寸法であることなど共通点が窺われる。このことから1・2号建物は、関連した同時存在、あるいは1号掘立が後から付設された建物と思われる。いずれにしても同じ性格の建物であろう。

遺跡の特徴的な遺物は、円面硯、風字硯、鉄鉢などから仏教的な様相がみられるものの具体的な寺名などの墨書土器はなかった。円面硯は覆土中であるが2号掘立の北側39・40号住に出土している。39号住は2号掘立から北に2m、40号住は10mの距離にある。風字硯は表採、鉄鉢は高位部の28号住、鉄鉢型の鉢は4号住から出土している。

このことからC3の掘立柱建物群は、所謂村落内寺院の可能性が見られた。村落内寺院の建物構造について、須田氏は村落内寺院の中心的建物である正堂を3類型に分類している。これによれば概ねⅠ類は4×3間の掘立柱建物から身舎が正堂から出発し、やがて礼堂を付設するタイプで片面廂から四面廂へと発展するタイプ。Ⅱ類は3×2間の身舎を基本とし、やがて廂を付設するタイプであるが集落内の倉や住居と区別付き難く、建物構造からは寺と峻別し難いとしている。Ⅲ類は竪穴住居を掘立柱建物に発展させた構造の仏堂で3×3間を基本とし、集落内に比較的多い構造である。身舎だけのものと片廂、四面廂構造に細分される。このタイプは正堂の平面空間が正方形に近いため、奥行き空間が広いのが特徴としている（須田2005）。

掘立柱建物群の2号掘立は3×3間の側柱建物であった。これは須田分類のⅢ類であり、身舎だけからの出発となる。すなわち2号掘立は仏堂（正堂）、1号掘立は後続して付設する礼堂と見れないだろうか。確かに西側の桁筋は通るが東側の桁筋は通らず均等でない。これについて須田氏はさらに、「集落内の掘立柱建物に類似する」と「村落内寺院建築水準の低さ」を指摘され、このことを「在地の伝統建築を受け継いだ点に特徴がある」としており、定型的な配置あるいは、建築水準の高い寺院とは異なり、集落内の竪穴住居跡レベルの建物と理解できよう。他の3・5号掘立はこのレベルでの建物軸が同じであることから同時期に存在する屋の可能性が高い。この1・2号掘立の次に出現するのが3×3間の4号掘立であり、前代の構

造を引き続き踏襲しながら新たに南側の梁側に廂を付設する礼堂とする仏堂である。10世紀前・中葉の4・43・44号住居跡の主軸と4号掘立の主軸が同じ向きであることからほぼ同時期とみられる。建物の変遷を推定すれば大まかに1・2期に分かれる。

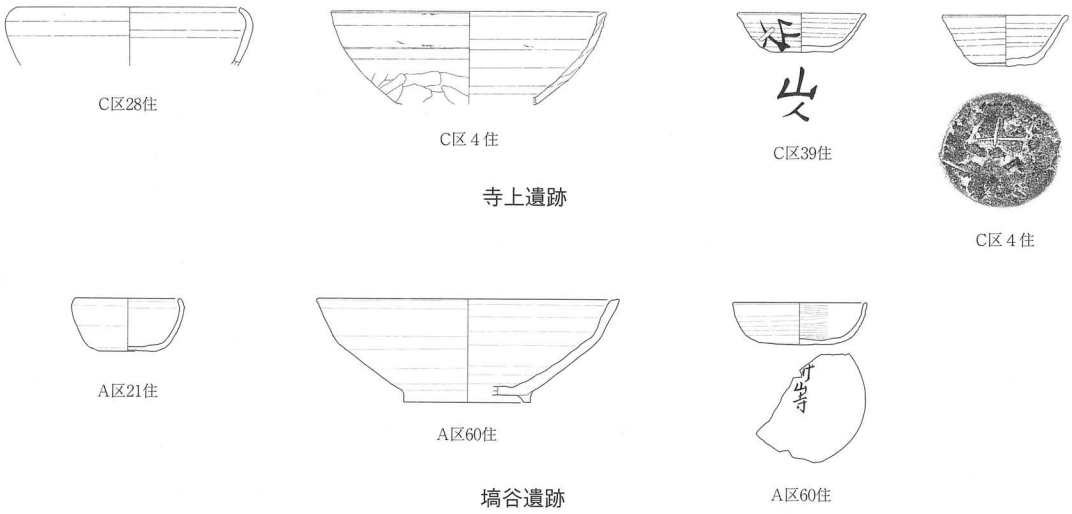
1　期

2号掘立すなわち身舎を正堂とし、同時期かその後の付け足しかは明確でないが1号掘立を付設する。この時期についてはは明確ではないが、おそらく主軸方向が同じ3号掘立と32号住（8世紀末葉）が近接しすぎているため、それ以降の9世紀前葉と思われる。また2号掘立の北側に位置する39号住居は、南側桁筋が通ることからも仏堂の機能した時期にはすでに39号住は存在した可能性は高い。山林寺院とされる千葉県木更津市久野遺跡（8世紀後葉）は、基壇建物・四面廂の建物を主体とする山林寺院で、その他の遺構は竪穴住居跡である。遺物は香炉のほか墨書「赤穂寺」「大般若」が出土している。建物が瓦葺きであるなど一時期複数の正堂がみられるがその割りには倉、僧坊、食堂などは不明である。筆者は「修行僧は竪穴住居に住まいし、修行したのでは…」とし、集落における寺院の有り様を述べている（千葉県1999）。当該遺跡の39号住居（9世紀後葉）は配列以外に、出土遺物の円面硯からも竪穴住居跡が修行僧の住まう僧坊としての性格が推定される。

2　期

4号掘立柱建物は前代よりやや南に位置し、身舎規模はほぼ同じ、構造も（3×3間）踏襲している。相違点は掘り方が大きく、柱間は換算尺、主軸が東西方向、廂構造の礼堂が建築当初から付設され、建築水準は集落レベル以上となる。前代に配列された屋などの建物はなくなり礼堂を付設する仏堂となる。40・43・44号住がほぼ同時期で、10世紀中葉であろう。この時期をもって集落も寺院も廃絶される。このように、須田分類Ⅲ類Aを元にすると、2号掘立（下総井戸向遺跡仏堂=3×3間）⇒4号掘立（上総大堆遺跡第2地点仏堂=3×3間＋片廂）と構造的にも変遷が捉えられた。

当該遺跡から東方850mに塙谷遺跡がある。60号住居からは墨書「□山寺」と須恵器鉢（鉄鉢型か）のほか7号掘立は3×2間の片廂が付設されるなど須田分類Ⅲ類Aで当該遺跡と同様の村落寺院である。当



第208図　寺院関連遺物（実測図1：8、拓本1：4）

該遺跡39号住居の出土遺物の円面硯、砥石、墨書「山入」は特徴的である。さらに行者遺跡5号住の墨書「刀良」は修行僧名ではなかろうか。想像の域をでることが許されるなら、墨書「山入」はA区の掘立柱建物群あるいは丘陵の高位部にあった山林寺院を示唆しているのかも知れない。さらに遺跡名である小字「寺上」あるいは東に対峙する「行者」、南方の「岡寺」についても何等無関係ではあるまい。平成23年度の調査では瓦塔片が出土するなどまさに寺上遺跡は村落寺院であった事が分かる。さらに2号掘立柱建物の北に位置する1・2号祭祀土坑からは祭祀用の土器が出土した。問題を指摘すれば①祭祀土坑の性格、②仏堂との関与、③5単位の土器と獣骨の関係、④仏堂とした建物変遷との関連など今後に検討課題は残る。

寺上遺跡は、村落寺院であった。このことは当該遺跡が決して特異な集落ではなく、8世紀から10世紀代に亘る郷単位の集落であれば、普通に寺院は付設されている。事由はここでは言及しないが、集落における仏堂（正堂）では仏以外の「国玉神」「歳神」「竈神」などの在地神も含め集落民は個人的な利益のために祈願し、一方集落の管理者は農業活動あるいは生産活動など利益の追求への祈願であった。このことを須田氏は「村落寺院は、致富を目指す豪族と農民との、新たな精神結合の装置として機能した」としている。（松田）

参考文献

赤井博之　1997「茨城県」古代生産史研究会　97シンポジュウム　『東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜の－』古代史生産史研究会　栃木県考古学会　栃木県立博物館

浅井哲也　1992　「茨城県内における奈良・平安時代・平安時代の土器（Ⅰ）」『研究ノート』創刊号

浅井哲也　1993　「茨城県内における奈良・平安時代・平安時代の土器（Ⅱ）」『研究ノート』2号

井鍋誉之ほか　2010　『堂ヶ谷廃寺･堂ヶ谷経塚－平成17～21年度　静岡空港県単独空港整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所堂ヶ谷

桐生直彦　2005　「Ⅴ竪穴外柱穴を持つ竪穴建物跡の様相」『竈を持つ竪穴建物の研究』　六一書房

櫛原功一　1992　「平安時代の寺院址」『山梨県考古学協会誌』5号

佐々木義則　1994　「岩間町蜂沢窯跡の須恵器紹介」『婆良岐考古』第16号　婆良岐考古同人会

佐々木義則　1999　「茨城県北半部における土師器椀の形式変遷」『婆良岐考古』第21号　婆良岐考古同人会

佐々木義則　2009　「武田遺跡群における平安時代土師器坏・小皿編年」『婆良岐考古』第31号　婆良岐考古同人会

笹生　衛　1998「古代集落と仏教信仰」『仏のすまう区間－古代霞ヶ浦の仏教信仰－』上高津貝塚ふるさと歴史の広場

須田　勉　1985　「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢』Ⅱ　早稲田大学出版部

須田　勉　2005　「村落内寺院の構造とその信仰」『古代の信仰を考える』第71回日本考古学協会総会　国士舘大学実行委員会

田中広明　2005　「東国の地方官衙・集落と陶硯」『古代地方官衙周辺における集落の様相―常陸国河内郡を中心として―』茨城県考古学協会シンポジュウム

千葉県　1966　「久野遺跡」『千葉県の歴史　資料編　考古3　奈良・平安時代』

富永樹之　1994　「村落内寺院の展開―地方に於ける仏教の受容」（上）神奈川考古　第30号　神奈川考古同人会

富永樹之　1995　「村落内寺院の展開―地方に於ける仏教の受容」（中）神奈川考古　第31号　神奈川考古同人会

富永樹之　1996　「村落内寺院の展開―地方に於ける仏教の受容」（下）神奈川考古　第32号　神奈川考古同人会

土生朗治ほか　2011　『行者遺跡－県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書－』笠間市教育委員会　㈲毛野考古学研究所

土生朗治ほか　2011　「第Ⅷ章　総括　第4節平安時代」『塙谷遺跡2－県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書－』笠間市教育委員会　㈲毛野考古学研究所

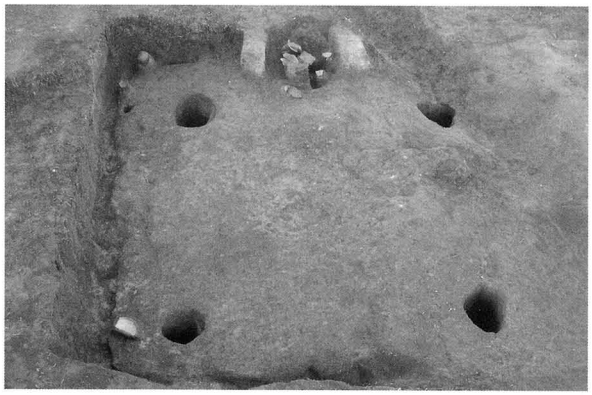
松井　章　2008　『動物考古学』京都大学学術出版会

写　真　図　版

1号住居跡遺物出土状況（西から）

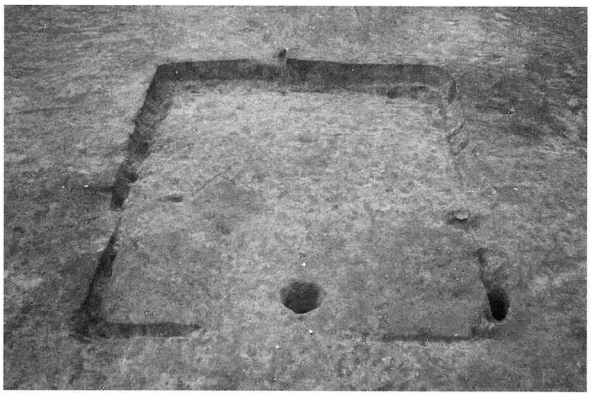
2号住居跡完掘状況（南から）

3号住居跡完掘状況（南から）

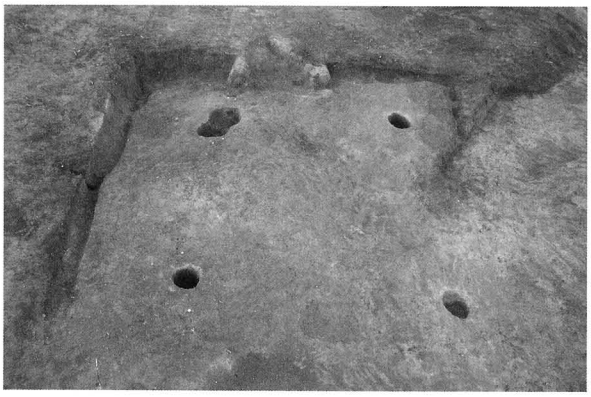


4号住居跡遺物出土状況（南から）

5号住居跡遺物出土状況（南から）



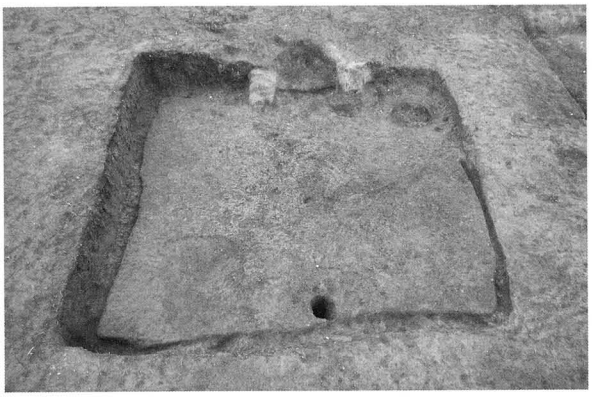
6号住居跡完掘状況（東から）



7号住居跡完掘状況（南から）

8号住居跡遺物出土状況（南から）

8号住居跡カマド遺物出土状況（南から）



8号住居跡完掘状況（南から）

8号住居跡カマド完掘状況（南から）

9号住居跡遺物出土状況（南から）

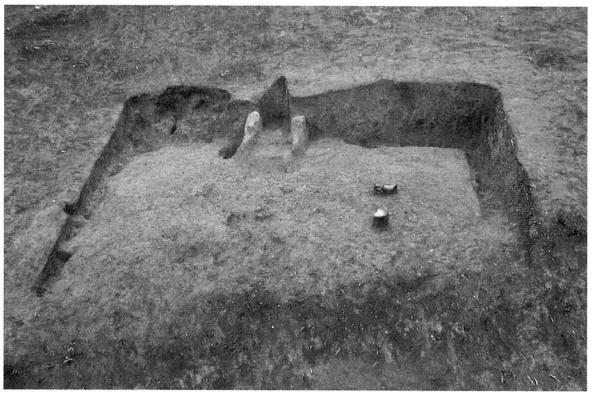
10号住居跡完掘状況（南から）

12号住居跡遺物出土状況（南から）

12号住居跡カマド完掘状況（南から）

13号住居跡完掘状況（南から）

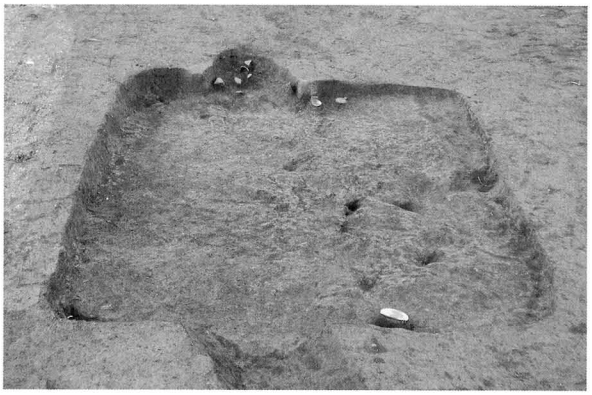
13号住居跡カマド完掘状況（南から）


14号住居跡遺物出土状況（東から）

14号住居跡カマド完掘状況（東から）

15・16号住居跡遺物出土状況（南から）

18号住居跡遺物出土状況（南から）


19号住居跡遺物出土状況（南から）

20号住居跡カマド支脚出土状況（南から）

21号住居跡完掘状況（南東から）

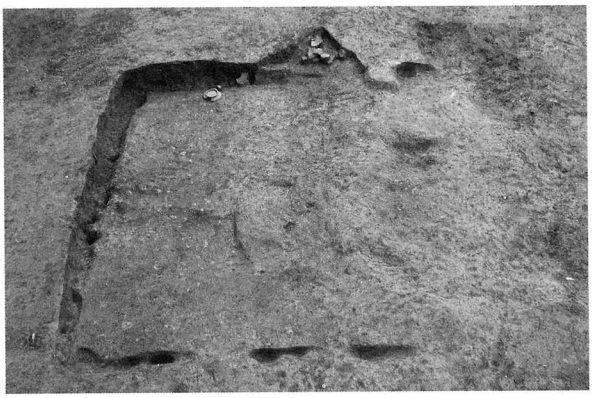
21 号住居跡カマド完掘状況（南東から）

21 号住居跡遺物出土状況（南東から）

22 号住居跡完掘状況（南から）

24 号住居跡完掘状況（南から）

25 号住居跡完掘状況（南東から）

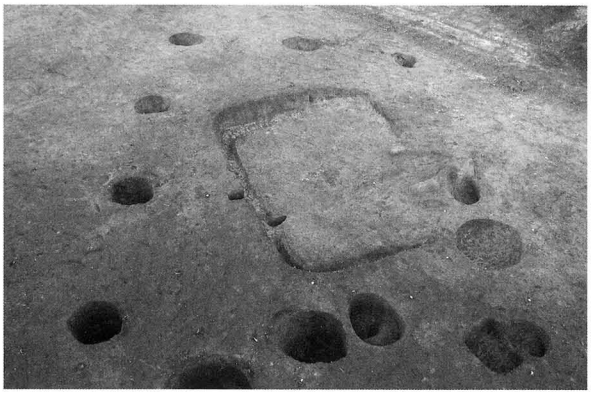


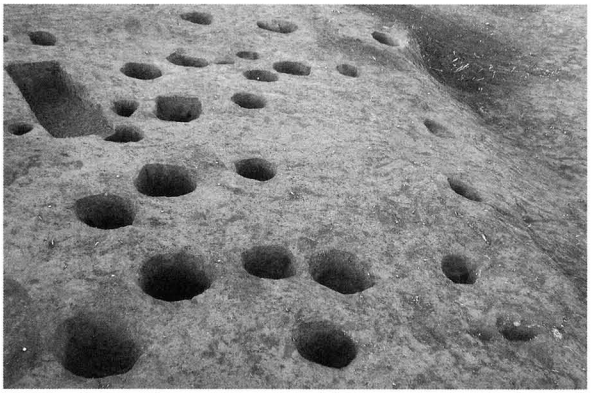
26 号住居跡完掘状況（南東から）

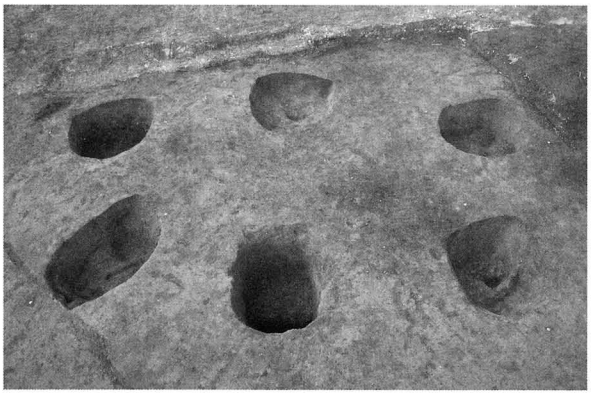
27 号住居跡完掘状況（南西から）

28 号住居跡完掘状況（南東から）

1号掘立柱建物跡（北から）


2号掘立柱建物跡（南から）


3号掘立柱建物跡（南から）


6号掘立柱建物跡（東から）

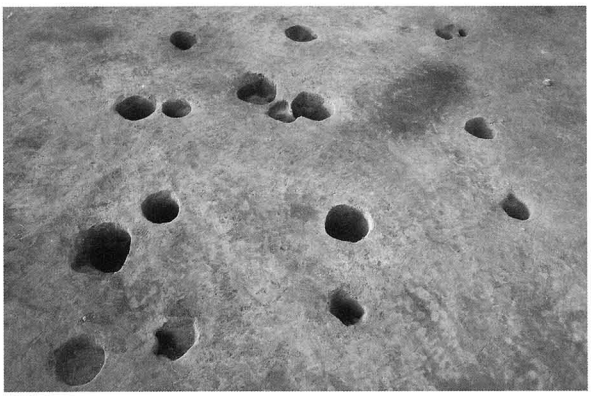
7号掘立柱建物跡（南西から）

8号掘立柱建物跡（南から）

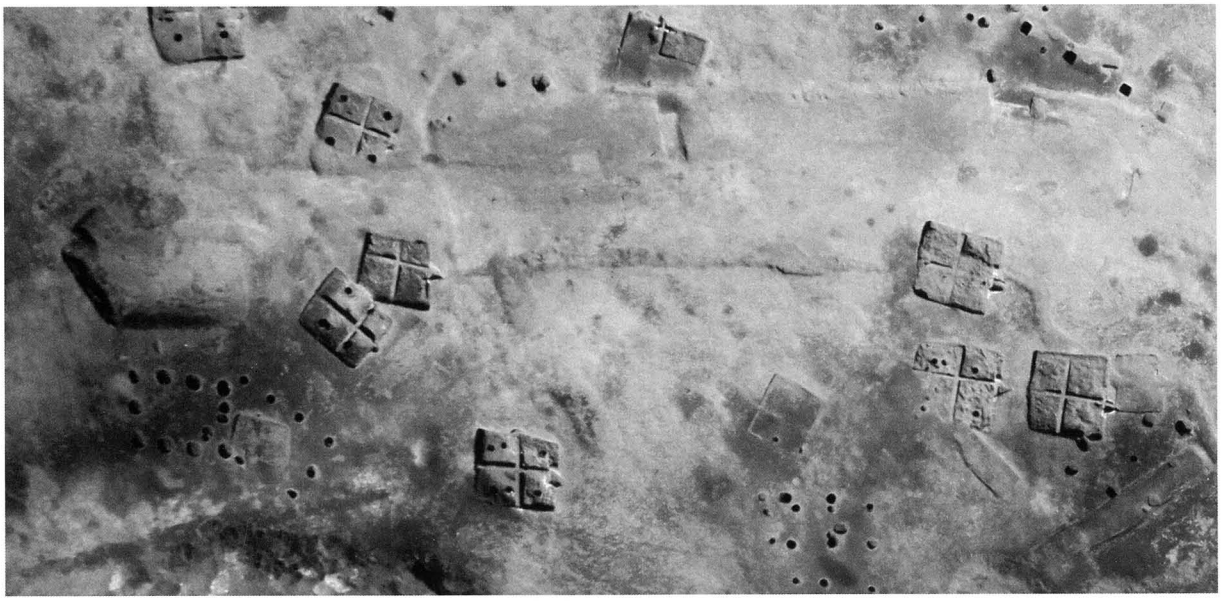
10号掘立柱建物跡（南から）

14号掘立柱建物跡（南から）

16号掘立柱建物跡（南から）

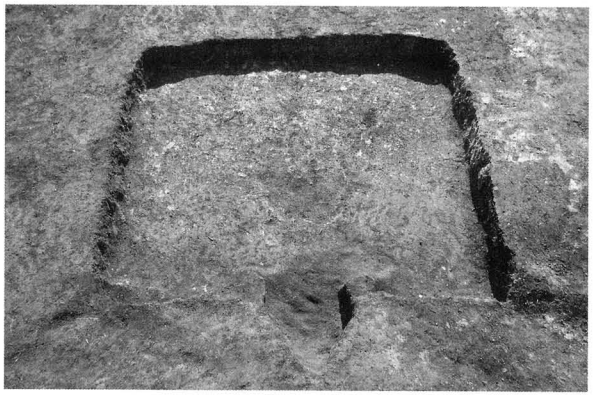


17号掘立柱建物跡（南から）



1・2・8・10・16・17号掘立柱建物跡（写真の上が西方向）

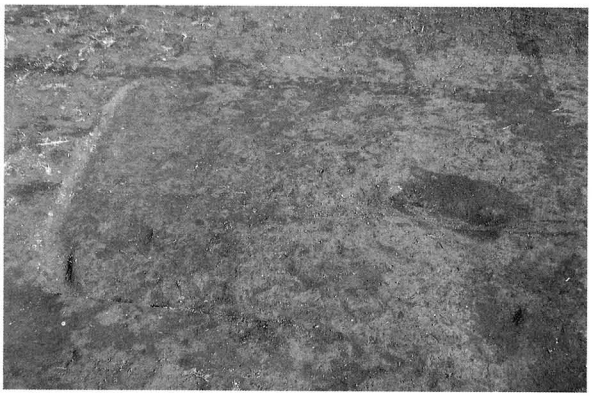
3～7・9・13・14・16号掘立柱建物跡（写真の上が北西方向）



1号住居跡完掘状況（南から）

3号住居跡完掘状況（南から）

4号住居跡完掘状況（南東から）



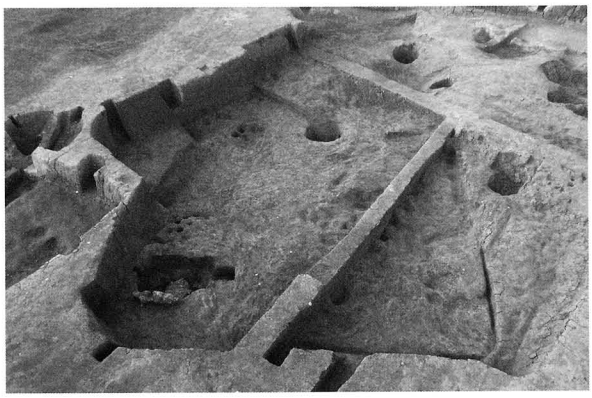
5号住居跡完掘状況（南から）

6号住居跡完掘状況（南東から）

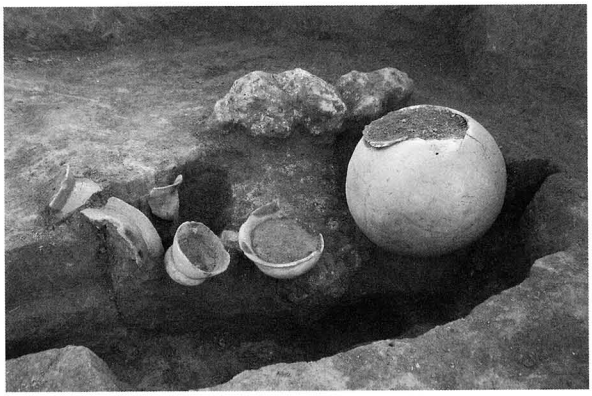
7・9号住居跡完掘状況（南東から）

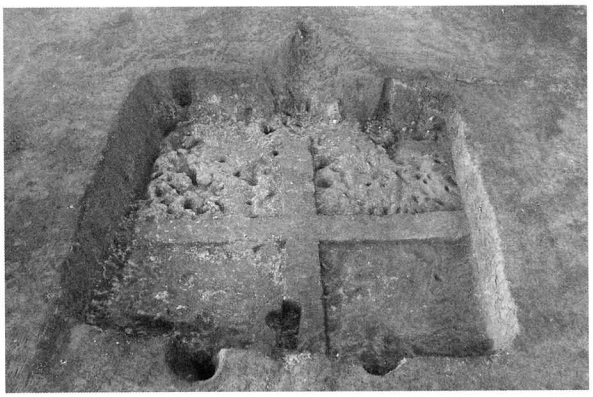
7号住居跡カマド（南東から）

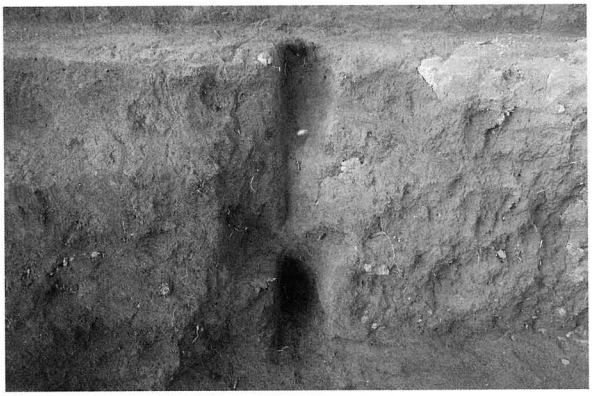
8号住居跡完掘状況（南西から）


9号住居跡完掘状況（東から）

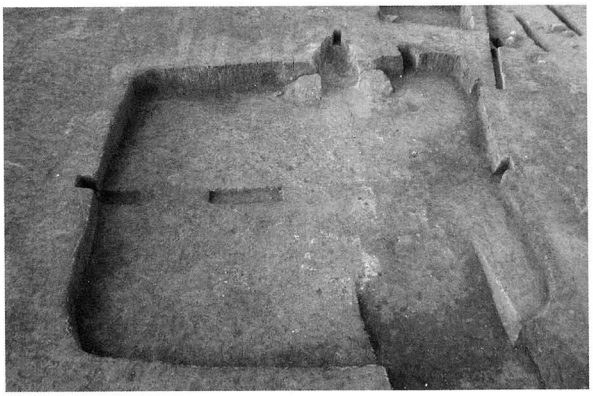
9号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（北西から）

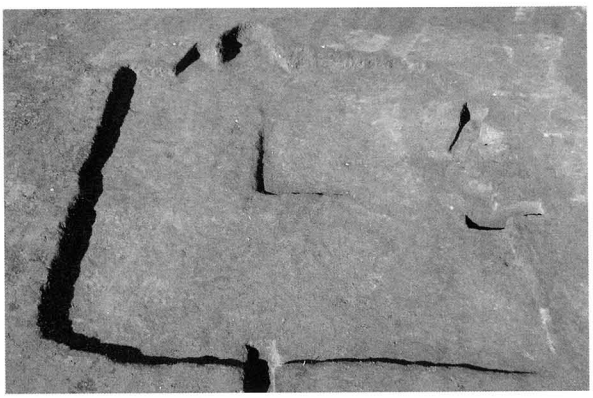

9号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（西から）


10号住居跡掘り方完掘状況（南東から）

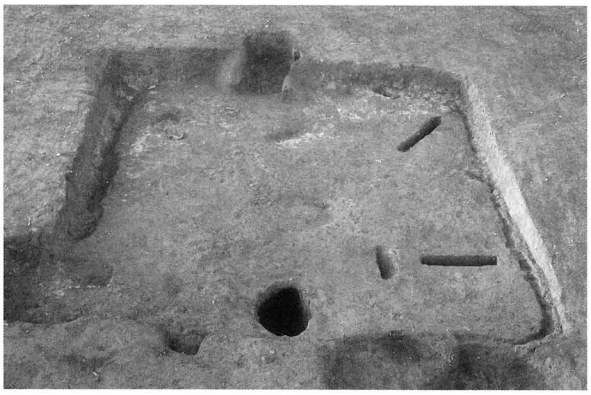

10号住居跡ピット03確認状況（南から）

10号住居跡ピット04セクション（西から）


12号住居跡完掘状況（南東から）


13号住居跡完掘状況（南東から）

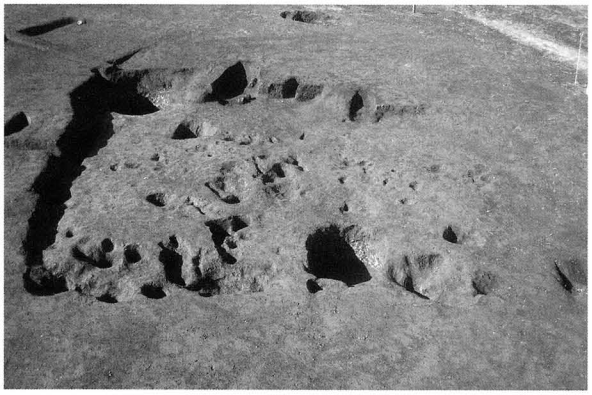
3号住居跡完掘状況（南東から）



4号住居跡完掘状況（南から）

4号住居跡遺物出土状況（南東から）

5号住居跡遺物出土状況（南から）



8・9号住居跡完掘状況（南東から）

9号住居跡完掘状況（南東から）

10・11号住居跡完掘状況（南東から）

13・14号住居跡遺物出土状況（南東から）

14号住居跡遺物出土状況（南東から）

15号住居跡遺物出土状況（西から）

18号住居跡完掘状況（南から）

18号住居跡カマド遺物出土状況（南から）

19号住居跡、32・33号土坑完掘状況（南から）

26号住居跡完掘状況（南東から）

27号住居跡完掘状況（南から）

31号住居跡完掘状況（南から）

33号住居跡完掘状況（南から）

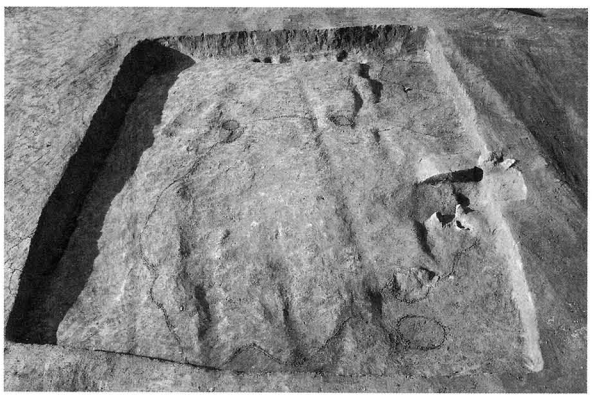
34号住居跡完掘状況（南から）

37号住居跡完掘状況（南から）

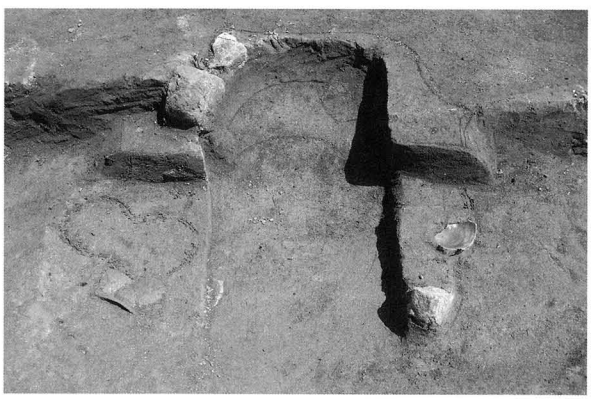
38号住居跡完掘状況（南東から）

39号住居跡完掘状況（南から）

39号住居跡カマド遺物出土状況（南から）



40号住居跡完掘状況（南から）

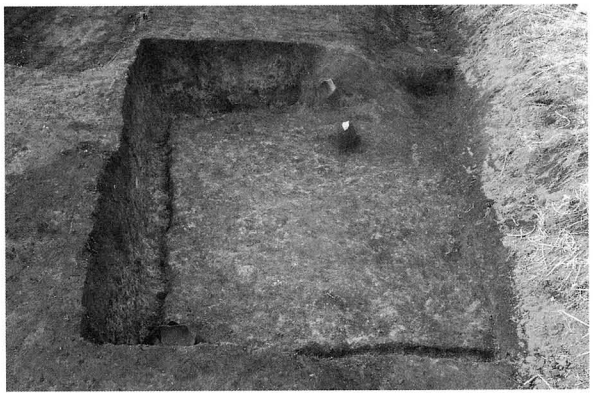


40号住居跡カマド遺物出土状況（西から）

PL.12

40号住居跡墨書土器出土状況（東から）

40号住居跡墨書土器「山人」



41号住居跡床面確認状況（南東から）

41号住居跡完掘状況（南東から）

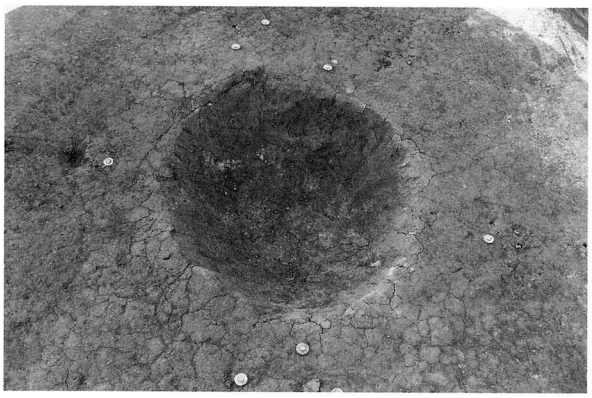
43号住居跡完掘状況（西から）

1・2号掘立柱建物跡（北から）

5号掘立柱建物跡（南から）

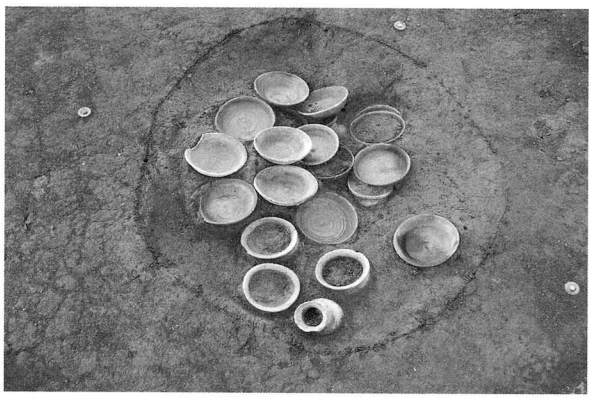
4号掘立柱建物跡（北東から）

C区掘立柱建物群



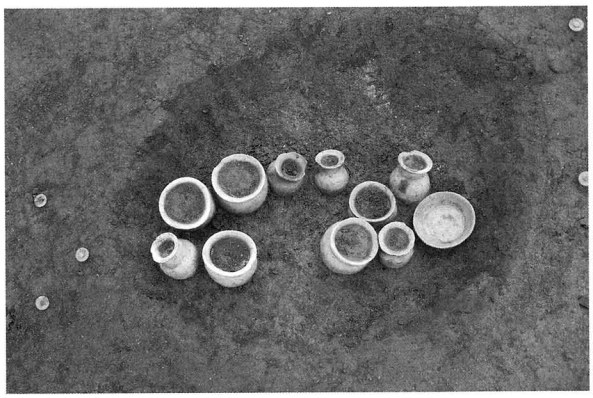
1号祭祀土坑完掘状況（東から）

1号祭祀土坑上層遺物出土状況（東から）



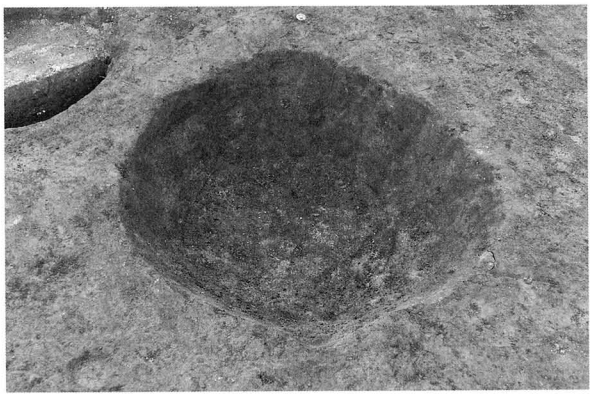
1号祭祀土坑上～中層遺物出土状況（西から）

1号祭祀土坑中～下層遺物出土状況（南から）



1号祭祀土坑下層遺物出土状況（南から）

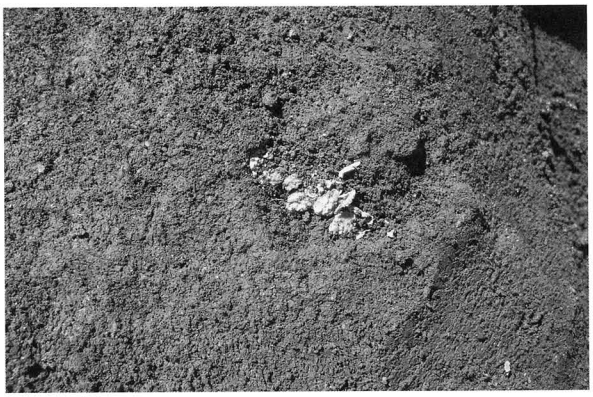
1号祭祀土坑下層遺物出土状況（東から）



2号祭祀土坑完掘状況（東から）

2号祭祀土坑遺物出土状況（東から）

2号祭祀土坑下層獣歯出土状況（南から）

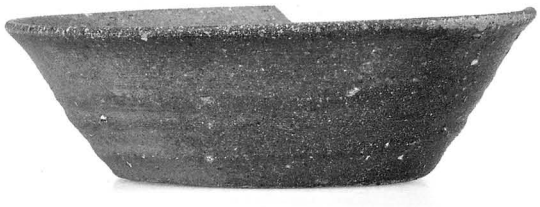


2号祭祀土坑獣歯出土状況（北から）

1号溝完掘状況（北西から）

11～13・17・22号土坑完掘状況（東から）

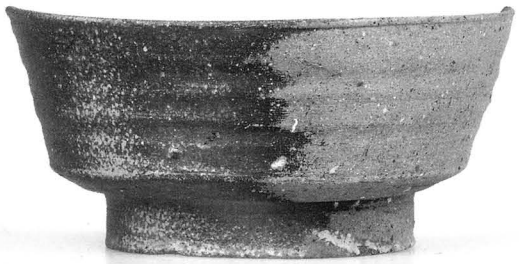
3住—4



3住—5

3住—6

4住—3



4住—5

4住—8

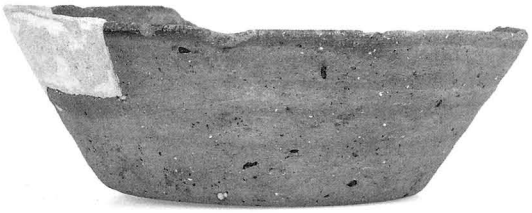
5住—3

5住—5

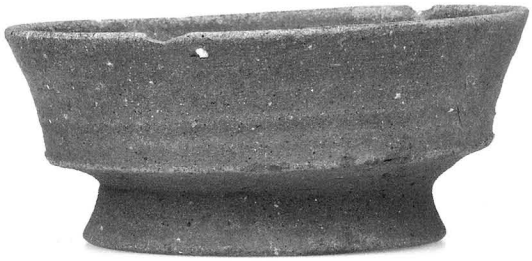
7住—1

7住—3

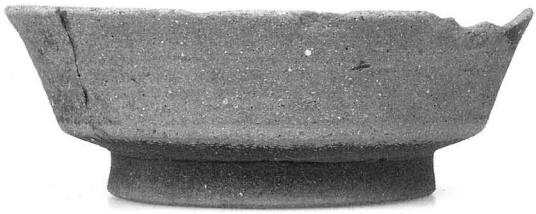
8住—1



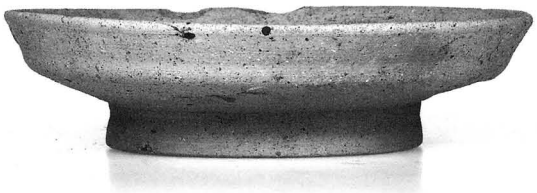
8住—3



8住—6



8住—8



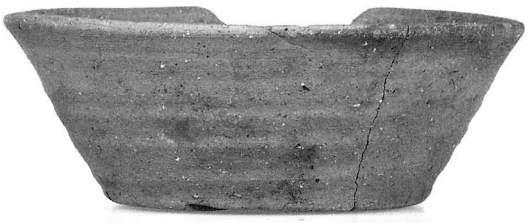
8住—9

9住—1

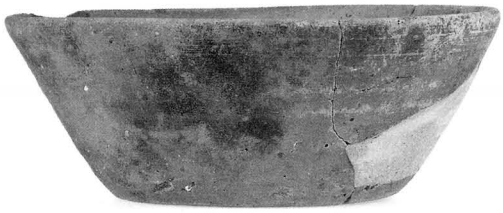
9住—2

12住—2

12住—7



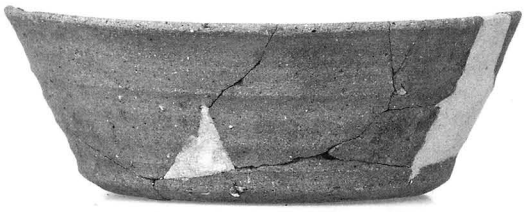
13住—3



13住—4

13住—8

16住—2



17住—1

17住—6

17住—7

18住—1

18住—3

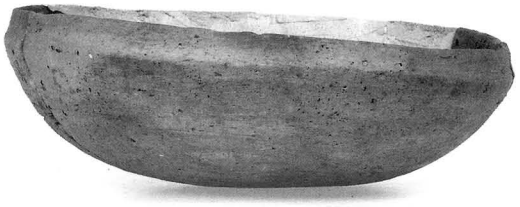
19住—1

20住—1

20住—2

20住—3

20住—4



21住—1

21住—2

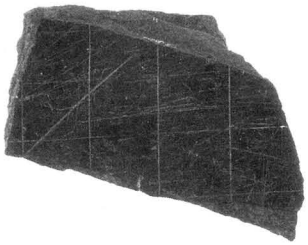
21住—3

21住—4

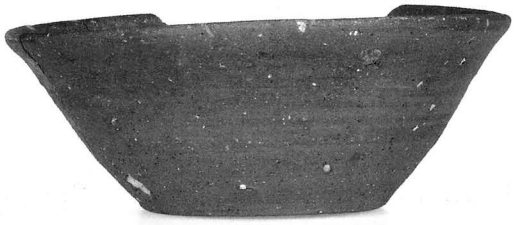
21住—7

21住—11

21住—13



21住—14

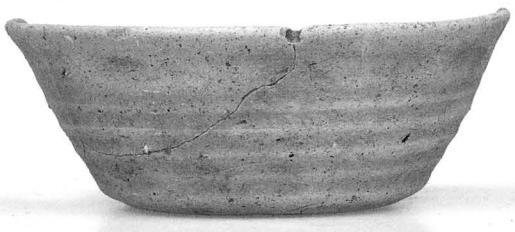


22住—4

22住—5

25住—2

25住—4

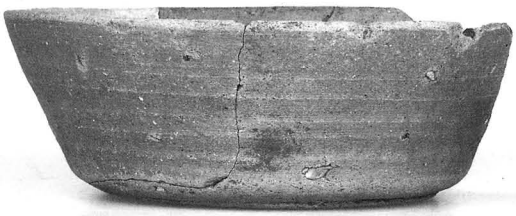


28住—1

28住—5

29住—1

1住—1

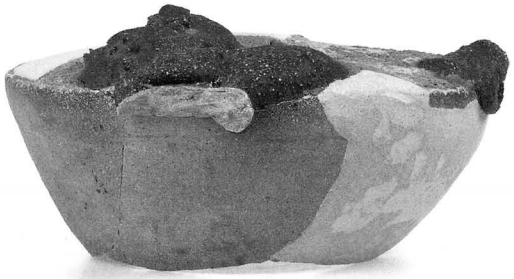


3住—2

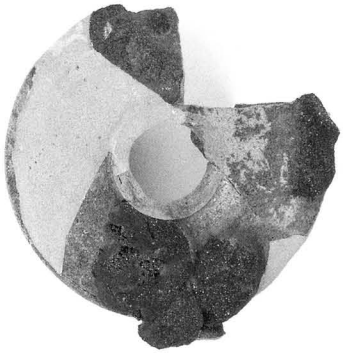
3住—3

3住—4

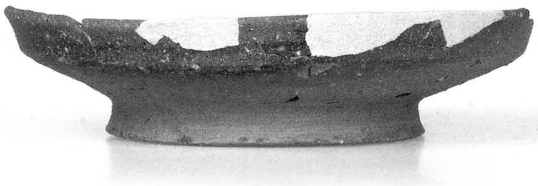
3住—5



4住—4



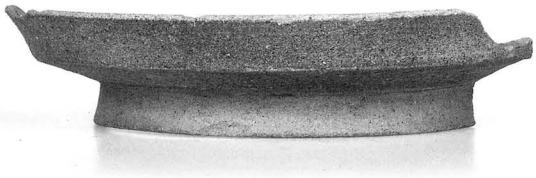
4住—4



7住—7

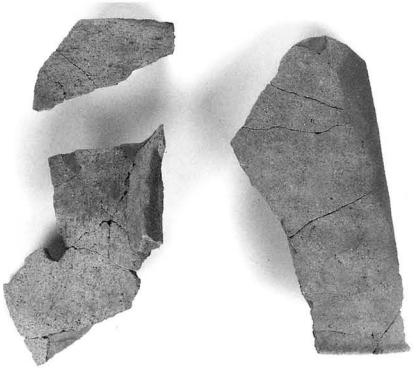
7住—11

8A住—3



8A住—6

8A住—9



8B住—5

9住—1

9住—3

9住—6

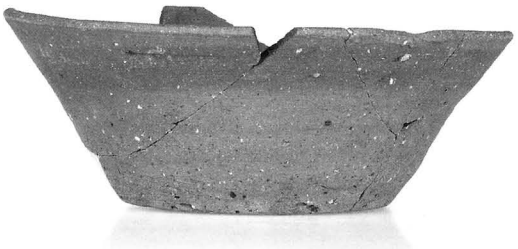
9住—5

9住—4

10住—2

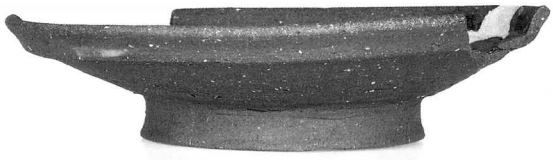
10住—4

10住—8



12住—3

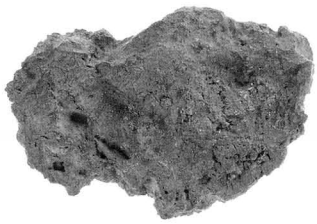
12住—3



12住—5

12住—5

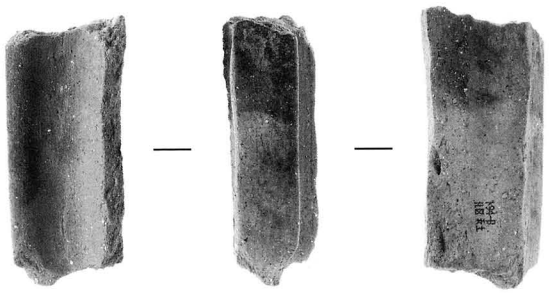
13住—2



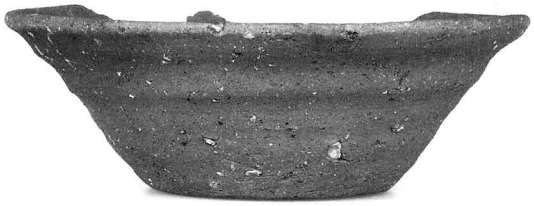
13住—11

遺構外—12

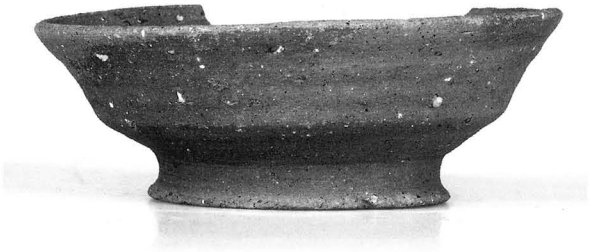
遺構外—13



遺構外—11



1住—1



1住—5

1住—8

1住—11

1住—12

4住—1

4住—2

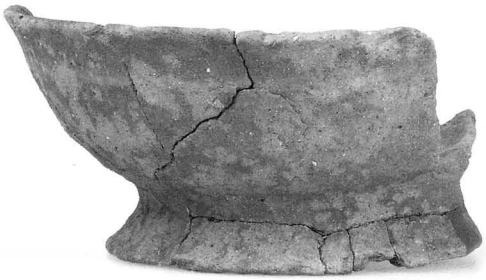
4住—3

4住—5

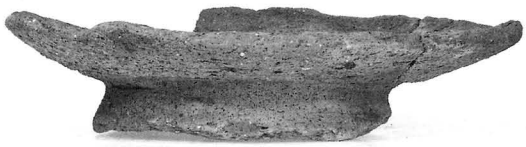
5住—5

5住—9

5住—12

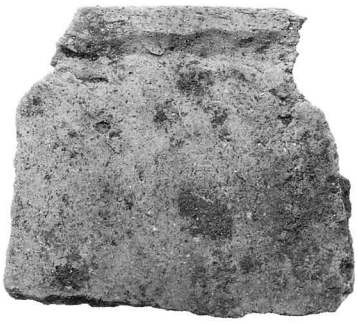


8住—1



8住—2

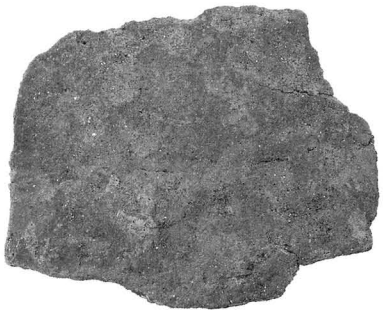
8住—6



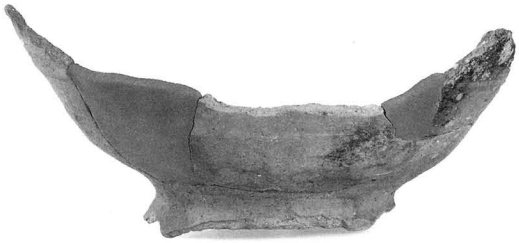
8住—7

9住—1

9住—5



9住—12



10住—3

10住—5

12住—6

13住—2

13住—4

13住—5

13住—7

13住—11

13住—12

13住—13

13住14

13住—15

13住—15

14住—6

15住—8

15住—9

15住—14

19住—4

20住—4

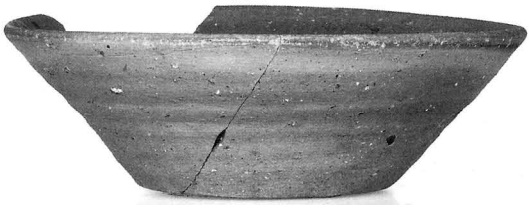
21住—4

21住—5

22住—1

24住—6

24住—10



26住—1

26住—2

26住—3

26住—6

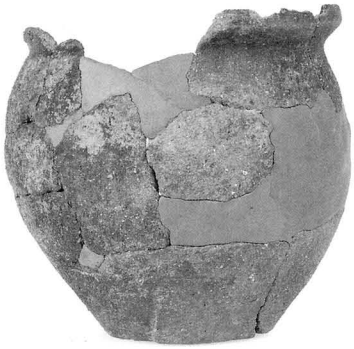
26住—9

26住—10

28住—2

31住—5

31住—6

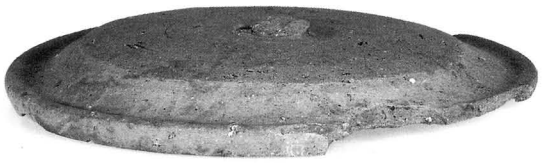


31住—13

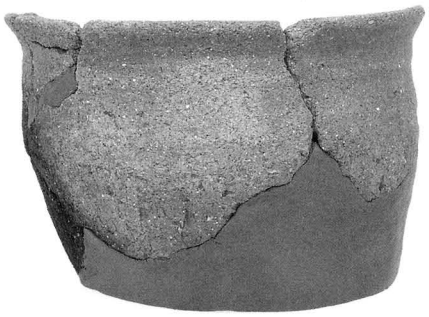
31住—15

31住—16

31住—16

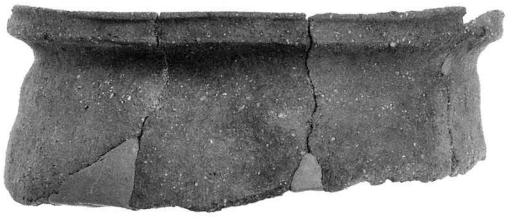


36住—5



38住—8

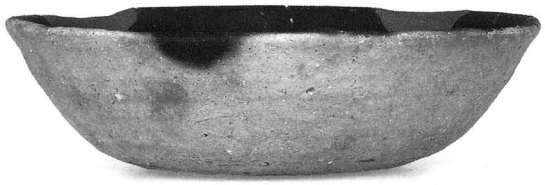
38住—3



39住—7

39住—1

39住—2

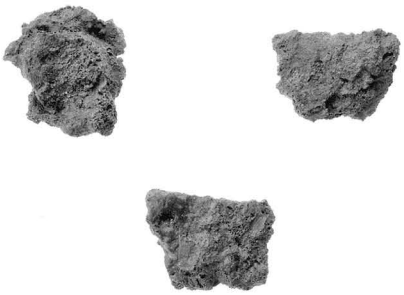


39住—3

39住—6

39住—12

39住—11

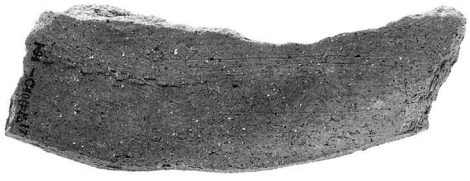


39住—15・14・16

40住—10

40住—1

40住—2

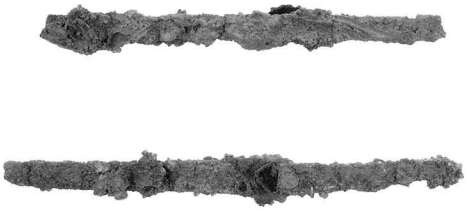


40住—15

40住—15

40住—18

40住—16



41住—6・5

42住—6

43住—5

43住—4

1祭—1

1祭—2

1祭—3

1祭—4

1祭—5

1祭—6

1祭—7

1祭—8

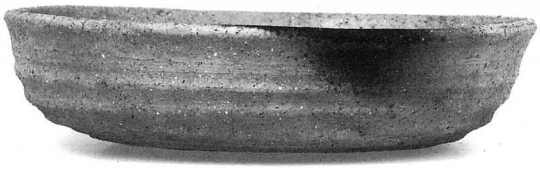
1祭—9

1祭—10

1 祭—11

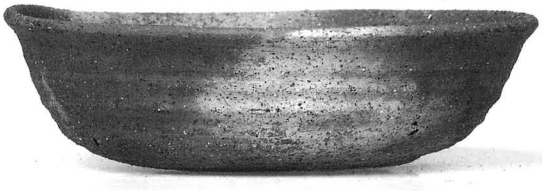
1 祭—12

1 祭—13



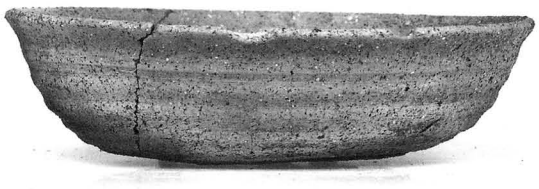
1 祭—14

1 祭—15



1 祭—16

1 祭—17



1 祭—18

1祭—19

1祭—20

1祭—21

1祭—22

1祭—23

1祭—25

1祭—24

1祭—26

1祭—27

1祭—28

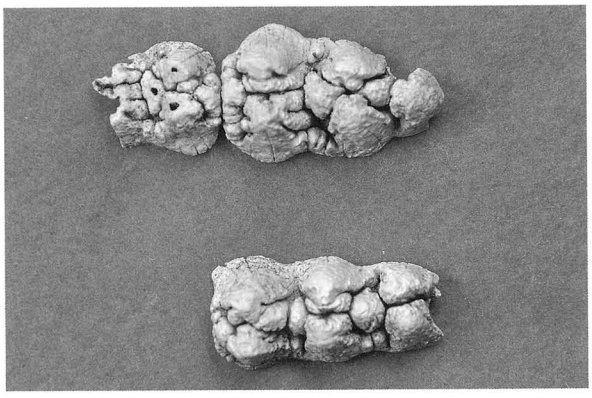
1祭—29

1祭—30

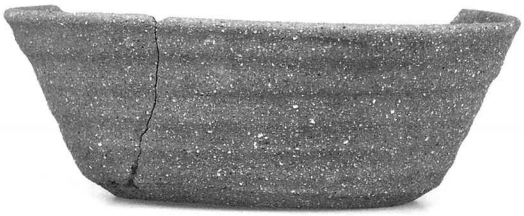
2祭—1

2祭—2

2祭—3



2祭—獣歯

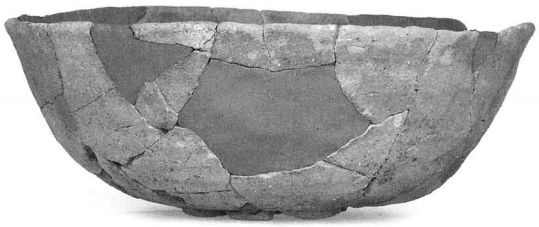


埋没谷―2

埋没谷―7

遺構外―15

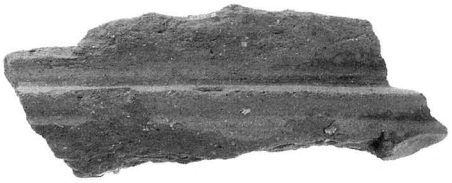
遺構外―15



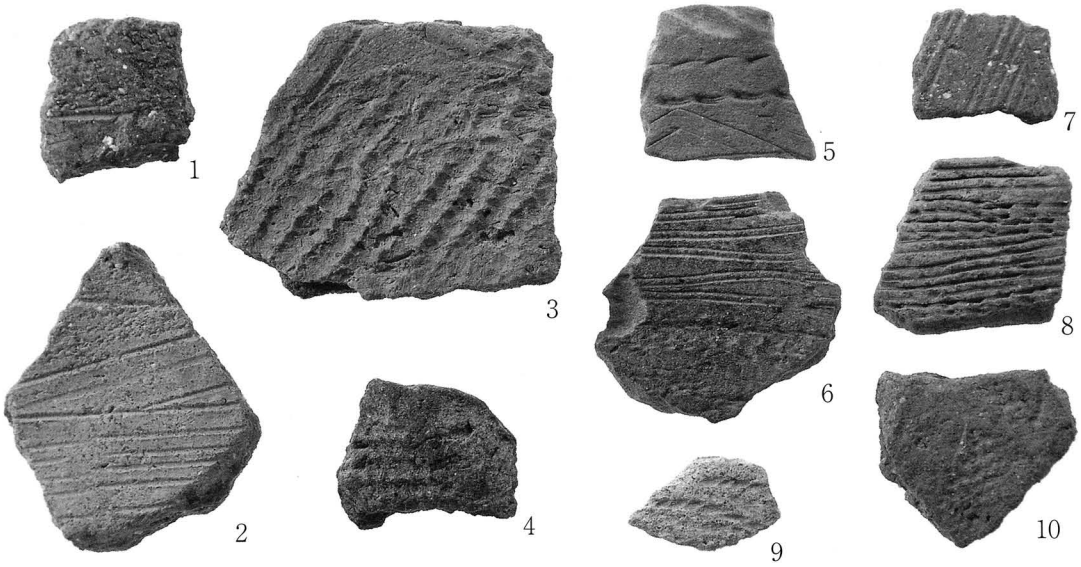
表採―4

表採―3

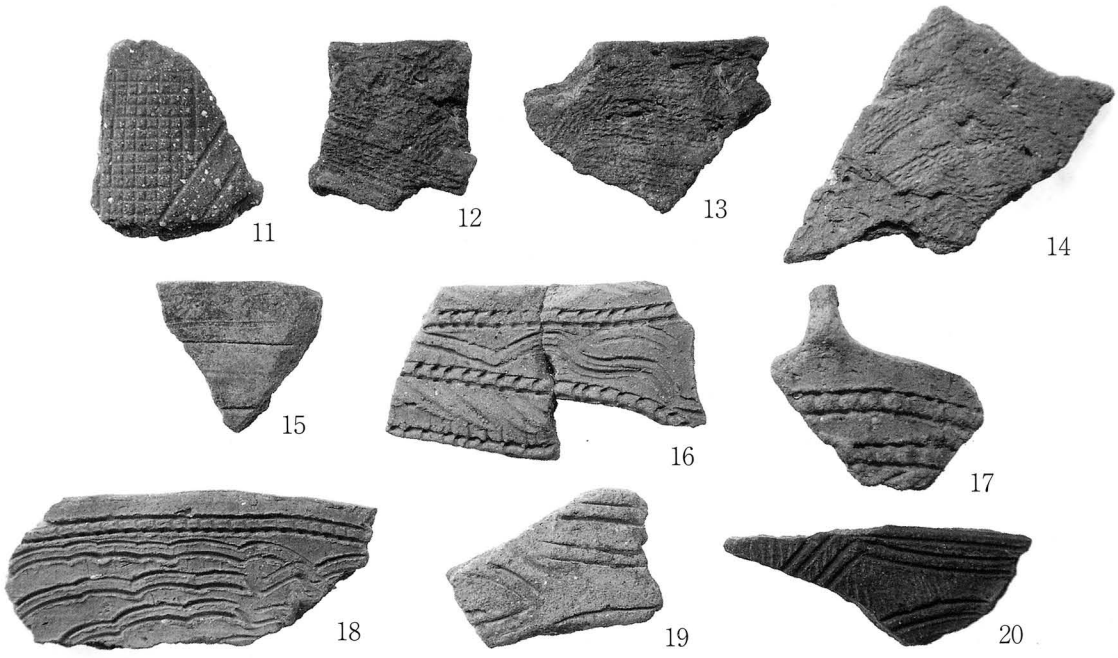
表採―14



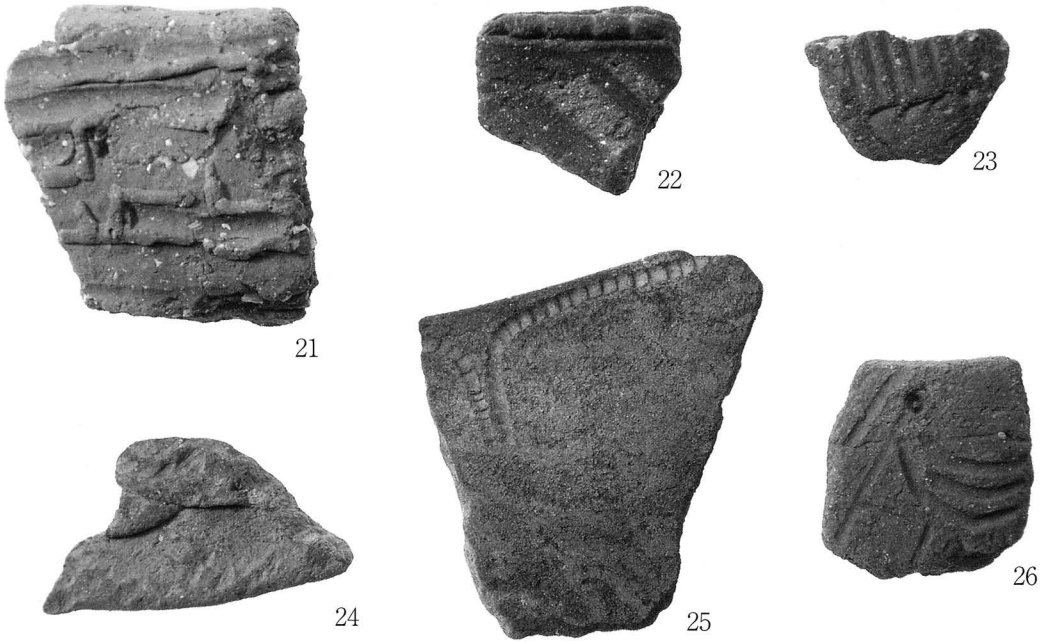
表採―13



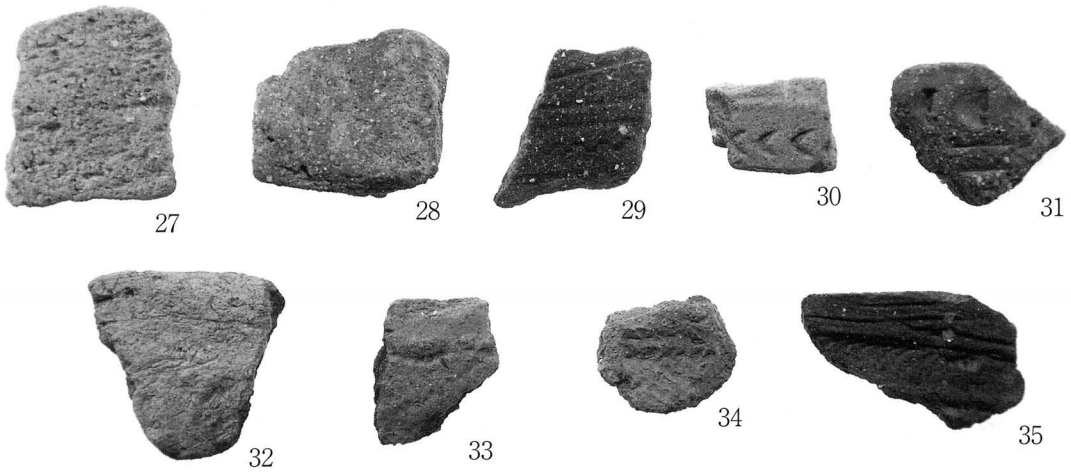
縄文土器



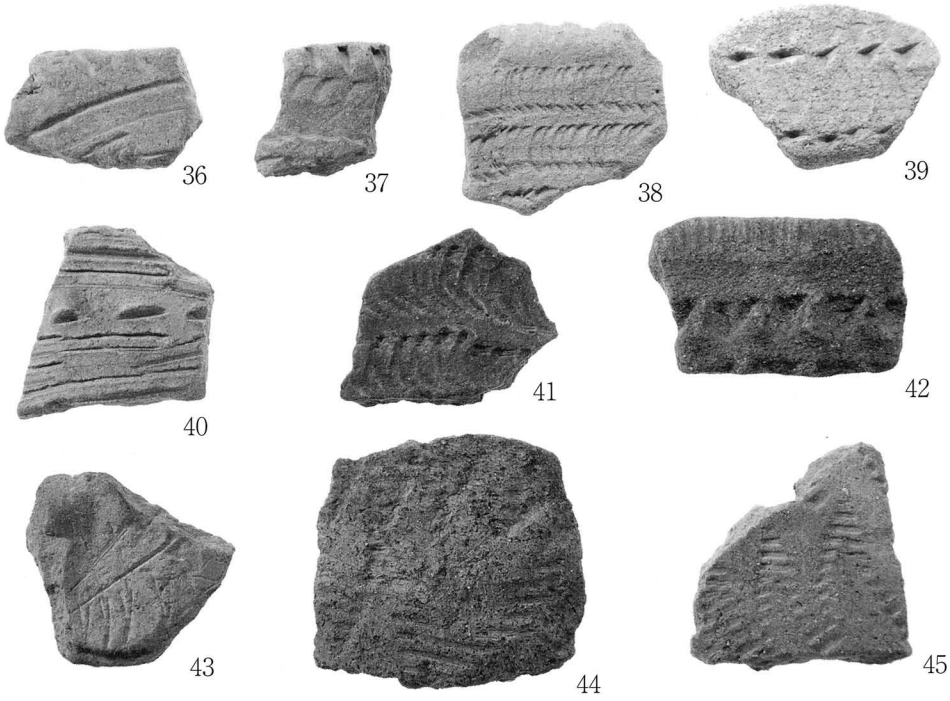
縄文土器



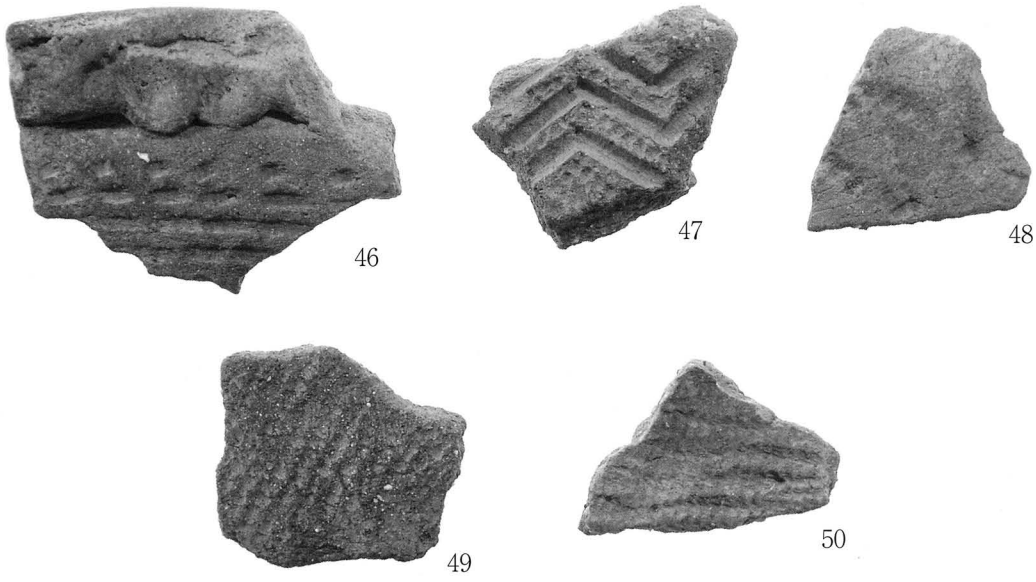
縄文土器



縄文土器



縄文土器



縄文土器

報告書抄録

ふりがな	てらがみいせき
書名	寺上遺跡
副書名	県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	松田政基、土生朗治、常深尚、南田法正、柴田洋孝
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所
所在地	〒379-2146　群馬県前橋市公田町1002番地1
発行機関	笠間市教育委員会
所在地	〒309-1792　茨城県笠間市中央三丁目2番1号
発行年月日	平成24年3月15日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
てらがみいせき 寺上遺跡	かさましおばら 笠間市小原 2331番地外	0832194	36° 22′ 04″	140° 19′ 23″	2010.11.24 ～ 2011.03.25	13,440㎡	県営畑地帯総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺上遺跡	集落	縄文時代		縄文土器	掘立柱建物跡を伴う奈良・平安時代の集落遺跡で、丘陵緩斜面上に立地する点が特異である。 平安時代の9世紀頃には、緩斜面の下の平地に掘立柱建物群が構成され、その中には仏堂とみられる建物がある。 集落の最終段階の10世紀中葉前後には、2基の祭祀土坑で、多数の土師器皿、灯明皿、ミニチュア甕・壺、獣歯骨を使用した祭祀が行われている。
		古墳時代	竪穴住居跡　5軒	土師器、須恵器、土製品、鉄製品	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡　82軒 掘立柱建物跡　19棟 土坑　13基 祭祀土坑　2基 溝　4条	土師器、須恵器、灰釉陶器、石製品、土製品、鉄製品、鉄滓	
		中世		土師質土器、陶器（古瀬戸）	

茨城県笠間市

寺上遺跡

－県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書－

平成24年3月10日 印刷
平成24年3月15日 発行

編　集　有限会社 毛野考古学研究所
〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1
電話 027-265-1804　FAX 027-265-5352

発　行　笠間市教育委員会
〒309-1792 茨城県笠間市中央三丁目2番1号
電話 0296-77-1101

印　刷　朝日印刷工業株式会社
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地
電話 027-251-1212